南紀德川史

第九冊

南紀德川史

第九冊

南紀徳川史第九冊總目錄

南紀徳川史卷之七十八

職制第九

職掌解説四

目次

南紀德川史卷之七十九

職制附錄一

目次

南紀德川史卷之八十

職制附錄二

目次

南紀徳川史巻之八十一

禄制第一

目次

南紀徳川史巻之八十二

禄制第二

目次

南紀徳川史卷之八十三

祿制第三

目次

南紀徳川史卷之八十四

祿制第四

目次

南紀德川史卷之八十五

祿制第五

目次

南紀徳川史巻之八十六

禄制第六

目次

南紀徳川史巻之八十七

祿制第七

目次

南紀徳川史巻之八十八

祿制第八

目次

南紀徳川史巻之七十八

臣 堀内信 編

職制第九

職掌解説四

勢州役

松坂御城代　一人　並高七百石　奥詰

與　力　二人　並高二十石　同心　二十人七石二人扶持　内組頭二人一石増

元和五年勢州十八万石御拝領之節より御代官として長野九左衛門大久保四郎右衛門大高源右衛門水野理右衛門等代る〳〵在勤是迄は何某役所と唱へ御城代とは不唱寛文十二年二月宮地久右衛門の時より御城代と稱し後戸田藤左衛門水野平之亟九鬼半右衛門在勤之節又々何某役所と唱へ貞享元年二月小笠原與左衛門赴任より以後は續て御城代と稱すといふ

松坂城内役所に在勤松坂城を守護し勢州御領地一切を總理す

一文久慶應の比形勢益不隠勢地之事亦従前之如く不成を以て御家老三浦長門守在勤諸政を釐革す

明治二年御國政大改革松坂民政局知事を置き御城代は被廢

勢州奉行　二人　並高四百石　布衣以上

同心二組　十五人つゝ七石二人扶持　内組頭一人つゝ一石増

元勢州役と稱す寛政五年十月改

元祿八年迄は松坂奉行と唱へ一人つゝ之處同年より兩人に被命爾來松坂にては兩役衆と唱へたりと也城内役所に在勤勢州の諸政務を司る則松坂之御勘定奉行也

一松坂町奉行松坂御船奉行をも兼勤す

松坂町奉行

松坂町奉行　並高三百石　布衣已下

與力二騎　二十石高　同心二組　一組十一人つゝ 鉄炮組　七石二人扶持

松坂市政を司る寶暦三年津村長右衞門在勤の比より勢州奉行より兼帶す

松坂御船奉行

松坂御船奉行　一人

與力二人　大船頭二人　手代　二人　水主七十人　五石二人扶持 一説に五十八人と云

國祖以來　大慧公御代迄は江戸御參府には松坂大口浦より三州吉田又は尾州熱田へ御渡海御歸國には右兩所より大口浦へ御航海あらせらる 吉田御渡海は　龍祖御代に止り以後は大口熱田間御渡海なり時としては陸路御旅行もありたる也 故に松坂御船奉行初役々を置れ松崎浦に別館官衙諸倉庫具備し御船頭水主皆之に住す　有德公御代には松崎浦にて捕鯨之業を開き水主に其練習を命せられし記あり寶暦三年よりは別に松坂御船奉行を置かれす勢州奉行兼務となる 大船頭水主等は矢張松崎に住す 延享二年已後は上街道美濃通り御通行にて大口御渡海の事絶へし爲なるへし爾後世々桑名熱田間の御渡海はありしも松坂へは入らせられす

因に記す熱田桑名御渡海及ひ佐屋御船行之時は尾州公より御馳走の御座船に御乘艦御同家御船手方金麾を揮て指揮し水主盤裝嚴肅勤務の例也しといふ

一松坂御船手之事同所大船頭の家筋たりし齊藤山本の兩家に古記錄粗遺存したるに維新後二人共流寓且年暦を經るに從ひ故紙と見做し近年破棄したる旨にて今詳ならす僅に廢殘の手簿により

調査する處左の如しといふ

文化元年以前之御船數

御召船　五　艘

小虎丸（八百石 總屋形造）　灘御召用即ち吉田御渡海用　地竹丸（淺瀬御召用 總屋形造）　雲龍丸（鯨船 瀬取御召船）　此外記載不存

一鯨舟小關船　合五十艘

一文化之初（年度不明）松崎御船庫に放火之者ありて船隻盡く燒失す吟味役方にて嚴重に探偵の結果勢州一志郡曾原村（松崎對岸）の油忠（通稱）なる者鴨狩の爲め火を失したりとの陳狀と雖も其實御水主に恨を抱き忿懣の余り仇なさんと放火したる旨にて若山へ傳送せられ磔刑に處せられたり右火災の時燒殘りたる建物は

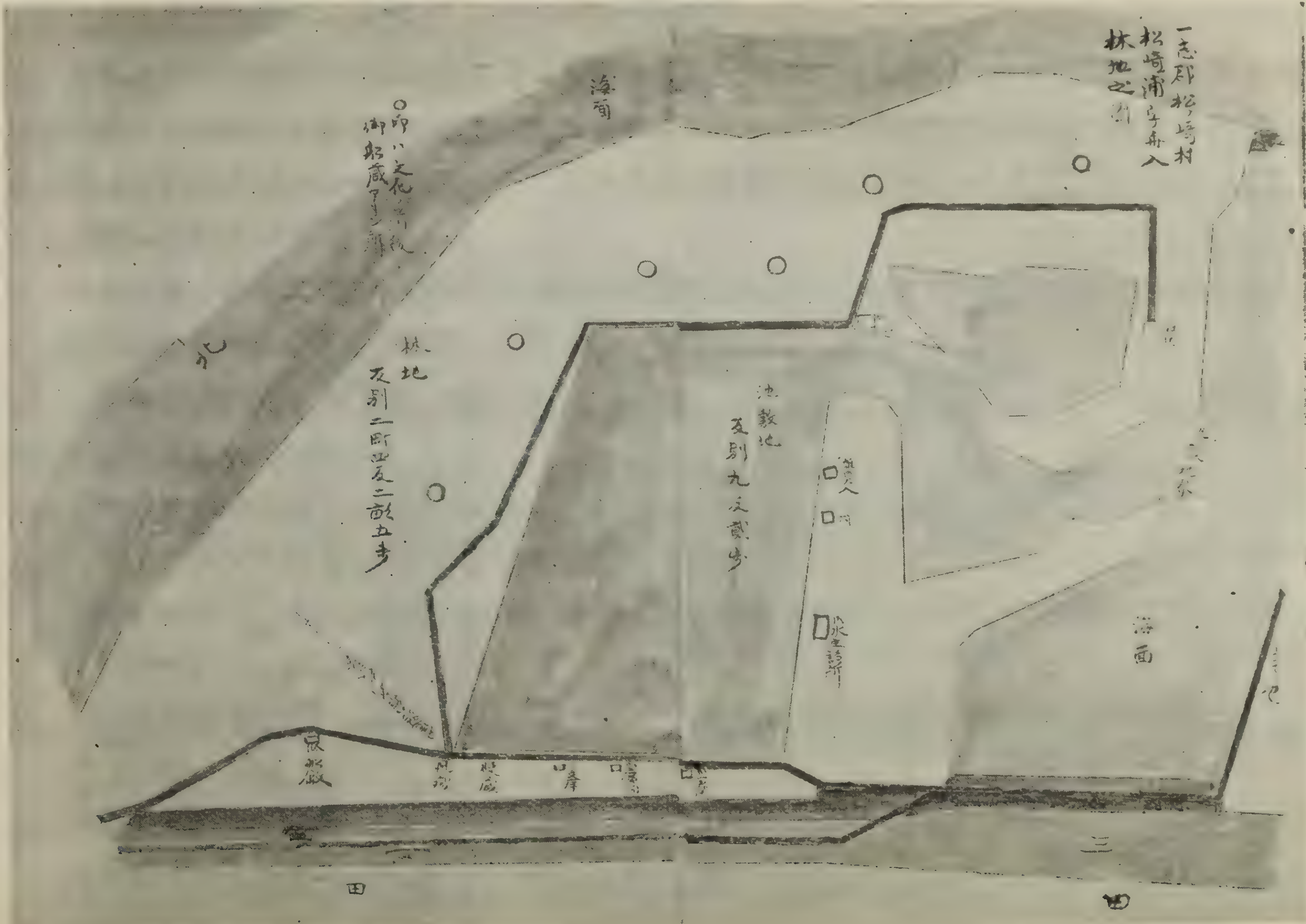
御玄關　御廣間　御文庫　碇藏　帆庫　御水主詰所　修船廠（十二間に廿四間の大建物なり）　雜具入藏二棟（建物位置下圖の如し）

一文化九年三月再ひ新調の御船　御召船一艘（號飛龍丸 百石屋形造）　小關七艘　鯨舟八艘

右御舟及ひ建物は維新大變革の際松坂民政局にて悉皆入札拂に付し舟は度會郡神社村の者の手に買とりたるよし

敷地は官有林地となりしが明治十二三年の比如岡道路敷を設置すと（此敷地は最近に至り松崎浦より出願村方へ拂下となりたりといふ）

松崎村は元來關ヶ原御陣の時三州へ密使を奉りたる爲に志州鳥羽の九鬼氏に捕はれ拷掠百端の苦楚を忍ひて其實を告けす遂に磔に處せられたり其功により後世に至る迄永代宅地租を免せられたる由緒の地なりといふ


一志郡松ヶ崎村
松崎浦字舟入
林地之図
海面
林地
反別二町四反二畝五歩
反別九反弐歩
海面
田

常詰御目付一人

若山御目付より年々交代在勤す御徒目付一人御小人目付同御押共在勤

田丸白子 五十人組之頭　一人つゝ　並高二百石　平士

同心二組　一組十人つゝ　六石二人扶持　内組頭一人つゝ一石増

元田丸白子五十人物頭と稱す文化元年改

田丸白子に在勤す職務不詳と雖警衞に外ならす

田丸白子 御目付　一人つゝ　並高二百石　平士

田丸白子に在勤す

一嘉永元申年八月十日得能喜多郎當役就任之時伺出に對し文化十四丑年田丸御目付天保三辰年白子御目付被仰付之時勤方伺出答之趣に准し左之通り安藤飛驒守申聞之

田丸御目付

横目之御役意に付御代官取扱候御用筋幷五十人組之頭之勤振其外田丸表の儀は勿論少々にても異變成儀又は他領にても如何の品有之候はゝ早々可相達候

一丹波守領地幷家中之風俗如何成品は可相達候

一風聞之儀虛實眞僞之差別見察難致儀も有之者に付若一存にて難決事は猶松坂詰御目付へも及相談了簡をも承可申事

但松坂御目付は勿論白子同役にても若如何之風聞等有之候はゝ御役意之本意を不取失早々可

相達候

一若自然心得違參　宮又は賣女屋へ罷越候向も有之候哉詰役人も人少之事に付不締成儀有之候ては他邦への聞えも如何に候間入念ためらい可申事

一勢州三領は公事出入他領掛り合等粗出來致し候事に付ては御役人向若御威光を以押付ヶ間敷取扱有之候ては御外聞にも障候間右等に付如何之風聞等有之候はゝ早々可相達候

松坂
田丸
白子
御代官　並高八十石つゝ

松坂　田丸　手代八人　八石二人扶持　内元〆一人一石増
白子　手代六人　同上　内同斷

職務都て紀州御代官之如しと雖も勢州奉行の差配に屬せり松坂は八万石地田丸白子は五万石つゝの地を支配す御代官所の箇所は左之如し

松坂　松坂町代官小路　田丸　田丸
白子　白子北新町字和田

一三領郡奉行ありし處寛政十一年五月總て郡奉行を御代官と改め郡奉行は欠役となる

一田丸白子五十人組之頭同斷御目付三領御代官共皆十人扶持（持馬）（一本ナシ）代金十兩つゝ給せらる勢地は他領入會にて山田津久居其他へ時々交渉等出費あるに依るなるへし

松坂御城番

若山大御番之内より若干人年々交代在番御城代に屬し御城を守る之を松坂加番といふ

一文久三亥年四月元田邊與力にて一同退去浪人となりたる二十人の者歸參被命四十石つゝ賜り小十

人小普請松坂御城番に拜す依て一同城之官宅へ移住爾來大御番加番を廢せらる

田丸五箇所番

田丸五箇所番　一人

當役は御役順帳になし五箇所浦は田丸領の内度會郡慥柄組の内田丸より山岳を隔たる海濱に僻在極めて邊陬の地なり若山の士過失あるも處刑迄に不及者貶黜せられ爰に移住在番を被命恰も配流の躰也といふ故に御役順に載せす

佐八材木奉行

佐八材木奉行　並高十三石　以下役

佐八(サウチ)村は田丸領度會郡山田町より西三里許宮川に沿ふ所に在り大杉山及ひ田丸領山々より仕出し之材木を此處にて管理す之が奉行也近世御仕入頭取兼勤す

勢州御鳥見

勢州御鳥見組頭一人　並高三十石　平士

同　御鳥見　並高八石　已下役

御鳥見役は世襲にして代替り減祿せず三領及ひ川曲郡に常住也

元和九年九月勢州一圓他領と雖も御鷹野可被成旨　將軍台德公より被　仰出同年より清水吉兵衞初若干名勢州鳥見に拜任爾來江戸御參府御往來毎御放鷹被遊　大慧公の御時迄同樣也且　龍祖之御時より御歸國の節は鶴を被爲捉　公儀へ御獻上あり此事恒例となりたとへ勢地へ入らせられさるも御在國年には必す鶴御獻上の定規となり維新前迄然りとす故を以三領之鳥見常に鶴之飼付をなす勢州一圓の侯伯は我領地と雖も鶴を捉る能はす況や人民をや依て鳥見は常に他領在々を巡視し若し違反者あれは之を逮捕其獵銃を沒收す又諸侯之家中大砲町打之如きも場所制限あつて塲外

に在ては容易に演習を許されす密獵之者もし鳥見の巡廻に遭遇すれは惚慌獵銃を擲去て走り逃る即ち銃を沒收し勢州奉行へ具申す奉行之を政府へ進達すれは更に辭令を發し銀錢を賞賜す之を落し鐵砲と唱へ常に絕へさりし也御鳥見及ひ御鷹場之事は邸園誌第二卷に詳也

本記鳥見之外に三領及川曲郡三重郡に綱差并鶴飼付役と稱する者數多あり地士帶刀人平農より出役鳥見に屬し服事せり

山家同心　三十人　一人扶持　諸役免除　組頭は二人扶持

勢州川俣に居住す當役の事總同心の部に詳記の如し

○勢州役人の大畧如此此外田丸領佐八御仕入元役所を初め山分海邊川俣山分松坂等所々に御仕入二步口の兩役所ありて役人在勤す兩役所及ひ役人の事は財政の部に詳記し爰に畧す

一地方普請米作檢見等には御勘定在方在勤又は順廻は常にして三浦長門守在勤の比よりは若山御勘定組頭も在勤專ら歲入の事を經理す元來松坂は富豪多く該三井長谷川小津長井等爲御替組と稱し松坂銀札を發行せしめ貨賄を流通し國費を補ふ又江戶邸の需用米は一つに勢州より供給せり總して農商國の組織にして當路の有司小吏若山より在勤の外常住の士類なく隨て學校武場の設けなし近世松坂學校ありたれとも微々たる者也安政已後時勢次第に騷擾に際し鳥見同心地士等の武を奬勵之處田丸同心橋內藏之助一志郡の鳥見酒井縫右衞門等鎗鎗を敎授し輕輩大に武に嚮ふ後皆銃隊に編成す明治維新江戶瓦解の時常府の士三兵傳習隊等大概松坂に移住一時士類大に增殖せしか間もなく三兵隊は若山へ轉し續て國政大改革民政局を置かる從來勢州役人及ひ其他之事は郡制の部に詳なり

御役順に不載分

御書物方頭取

御書物方勤　同認物勤

見上け御藏預

頭取は大御番頭より兼勤之事あれ共概ね奥掛り御用人に被命軍學家宇佐美三郎兵衞は代々專任す軍事總裁之職也從來軍事に關する件は特に秘密を主としたる者故職務の事窺ひ知る可らす書冊も亦傳らさる也諸役新任轉任之時は軍役供連及ひ役指物（背旗なり）の制を直ちに御書物方頭取へ質問すへき成規にて此時供連人數書幷役指物之圖を授付指揮す

一頭役已上は自ら指物免許により新たに頭役を拜すれは自分好み之圖を製し伺書を當役へ出す當役伺を經許否を指令する也

御家中の死失改名旅行等皆屆出しめ軍籍を整理す世治平にして御秘事武器之保管乃至御家中軍役供連指物の指揮等の外無事閑散の職たりしか嘉永癸丑外國船渡來江紀共警衞人數出張續て海防之議起り和洋練兵の事勃興事務日に多端に赴き遂に大和一揆出軍之事あり　龍祖已來實際軍事に當りしは是か初にて頓て長州征伐之大事あり其軍謀軍略皆當職之擔任する處たりし也

一元治元年七月長州征伐御總督として大坂御在城之處時勢變遷悉皆砲戰之世となりしを以て元和寛永の古法改革せさるへからす時之御書物方頭取小出平九郎津田楠左衞門に軍制改正を被命新たに御軍事奉行を置兩人拜任し御書物方頭取を廢せらる然れ共軍職之組織は依然其儘なれは僅に旗旄

指物を廢し軍役の人數雜卒を減するも尙甲冑刀鎗を用ゆる新古折衷之改正に過きす御軍事奉行の職は明治二年の大改革迄繼續せり

一江戸にては慶應三卯年三月銃隊編成諸役廢止の時更に陸軍奉行並を置き御書物方頭取を廢せらる全く成り替りし也

御書物方勤

御書物方勤　同認物勤

中奥頭役格又中奥平士より出役す頭取に屬し事務を司る

江戸にては慶應三卯年三月陸軍奉行並を被置し時同役屬官と成り陸軍方御用勤と改稱同年七月練兵場を青山殿構內へ新設觀光舘と稱し舘內へ陸軍方役所を移轉す仍て觀光舘御用勤となる

一御書物方認物は文書記帳之事に服す小普請又は無足之者より出役す江戸にては右陸軍奉行並を置かれし時同役に屬し陸軍方調役と改稱續て前同斷之故を以觀光舘認物勤となれり

見上け御藏預

御書物方勤之者兼勤す見上御藏は江戸赤坂邸丸山口內にあり御由緒又は御秘事の武器秘藏之寶庫也御書物方頭取主管同心一二人

御役者肝煎

御役者

御役者肝煎

御役者肝煎　兩三人

奧掛り御用人より被命時としては大御番頭よりも拜任す總能役を支配し御大禮御能臨時御能御斷

子等の事を一切司り御能衣御楽器を保管す

往昔　將軍家御成御老中御招待には必す御能を被爲行又御家督御相續御官位御昇進乃至重き御饗宴等の節には御書院御舞臺に於て御能興行の成規にて御家中上下末々子弟に至る迄拜觀を被免大御能には芝居と唱へ若山に於ては町人共迄拜觀を許され御書院白洲に群居都て幕府の式に傚はせられたり

一御噺子といふは本御能之如く式立す御慰事又は御好みを以臨時に御催の御能なり御舞臺又は奥向にて被仰付御舞臺之時は御家中拜觀前に同し

一每年正月三日には御書院に於て御謡初の式あり御噺子三番猿樂へ呉服被下等禮式の部に記する如し

御役者

猿樂能役者なり孰れも家業を世襲し前記の能樂を勤む熨斗目肩衣袴を着し一刀を帶す都て制外也

一役者之内太夫太皷大小鼓笛脇仕手狂言物着作り物師等各業を異にして家業を世襲す其子弟輩も少年より家業を以勤務多少の俸給あり文化度御役者之總人員は五十一人安政度に在ては總計六十二人なり

一元和御入國御供姓名帳に御役者十六人舞五人と注し駿河より御供之者不掛即ち森田庄兵衛笛松井市太夫狂言下村五左衛門等右御供内にて知行二百石又は七八十石を領せり殊に松井市太夫の如きは　神祖の台命を以て　龍祖御六歳の御時より御側に近侍せる家柄也いつれも祿世襲にして代々

相續近世太夫の家は若山にては高村三郎右衛門六十石江戸にては下村又右衛門五十石の兩人とす御役者の內頭取御能觸流と稱するありて諸事を統轄す

一葛野九郎兵衛大鼓八十石十人扶持　森田初太郎笛若山庄兵衛家本家か七十石十人扶持　家亦駿河より御供の處　台德公之時　公儀御雇ひ被命　嚴有公御代江戸住居被　仰付爾來　公儀御家兩御用を勤む　公儀より俸祿賜ると雖も御家よりも先祖之祿代々無相違賜り以維新に至る九郎兵衛先祖は大阪陣の時　龍祖の御供をなし尙　養珠大尼公の御由緒等あり方技傳に詳記す

一嘉永六丑年九月廿三日左の通執政より御役者肝煎へ達す

御役者之輩當時海防等の折柄に付家業の隙にも武藝稽古之儀內存爲相願候樣程能申聞の儀宜被取計事

當時御幼年御能事なく武備奬勵に汲々之際世々豐祿に飽き徒手遊食により此諭旨ありしと雖も固より長袖制外之徒其所詮を見す

奥御供方
常御供方
願御供勤

奥御供方

奥詰頭役格小十人頭格御徒頭格等より出役す總して出駕に係る御前邊幷奥向御供之事御行列御道筋御下乘御戸前御會釋等一切を掌る常に御駕の右方に扈從す故に地廻り江紀御往來他御旅行共御供せさる事

なし職務の詳細は典禮出駕の部に記述し爰に略す

常御供方

表頭役格（多くは御徒頭格）より出役を常御供頭役と稱し御書院番御小姓組より出役するを兩御番常御供といふ又大御番常御供（大御番格小普請より出役）御徒目付常御供御徒常御供あり（御徒は時々廢置ありたり）いつれも御行列取締り御道具立方御供打方諸侯御出會他向應對御途上出來事等總して表方に係る各自主任の事務を司り時宜に應し御行列前後に奔走斡旋す御徒目付の外は平素之當直等は免せられ御供一途に服す御供を離れさる事與御供に同し各務之細雜詳ならすと雖も梗概之に過きさる也尚典禮出駕之部參照すへし

願御供勤

諸士の內番士又は格役等にて御供勤希望又は總領等へ御供勤見習せ度者は本人より願書を提出し許可を得て御供勤に服す其種類左之如し

一地廻り御供　私儀地廻り御供相勤申度と願出る

一當番之節御供　私儀當番之節に御參詣幷遠御成地廻り御供相勤申度旨

私儀遠御成一の御行列之節に非番出御供仕度旨

一非番出御供　私儀非番出地廻り御供相勤申度旨
私儀是迄非番之節地廻り御供相勤罷在候處猶此上繁御供仕度旨

私（總領養子）同苗誰儀當年何歲に罷成申候地廻り番外御供相勤させ申度と願出る

一無足地廻り番外御供　右之者跡目繼きたる時は
私儀無足之節地廻り番外御供願相濟相勤罷在候處去る何年親跡目被　仰付候に付非番之節地廻り
番外御供相勤申度旨願出る

右無足番外御供勤之親勢州又は大坂等へ可引越御役になり右番外御供勤之者も引越追て又々御供いたし度儀願出に可及哉と其筋へ問合せ出右は願出候筈と答たる旨寛政六年三月記あり

無足とは總して諸士の子弟の總稱にて出仕せさる者を云ふ部屋住とも唱へり然れ共本記無足は總領の事也

御取次

御取次は江戸御本殿遠侍に當直し御玄關又は遠侍にて諸大名入來御旗本寺院諸家使者等の參上を受付接對の職也（勅使上使日光御門主尾水樣并御連枝方御入來にも無論關係所作あり）新御番頭格御徒頭格等の格役より出役す從來諸侯に於ける國主外樣御譜代あり大廊下大廣間溜之間帝鑑之間柳之間雁之間菊之間あり又從來四品の別十萬石已上已下あり是等御三家に對する禮節嚴然一定し或は特殊之家格を有するあり受け方に於ても區々等差あつて御玄關薄緣或は御式臺（一人出ると兩人出るとあり）にて受るあり或は御座敷へ引請するあり（大名によつて間席を異にす）或は薄緣にて刀を脱するあり御式臺にて脱し又は持上るあり對遇應接の曲節最も煩雜を極む御旗本に於けるも同樣にて御役人向高家雁之間芙蓉之間菊之間三千石已上已下の別あり大小諸侯之使者亦主人々々の家格に准し寺院は寺院の定規あり御取次は此區別差等を悉く暗記熟知し御徒番所より入來の觸込あれは其資格の成規に應して着々接遇す彼れ若し一擧手一投足を誤れは供頭に嚴談或は留守居に掛合其不遜を責め數月の紛擾不止事あり我若し先例舊慣を誤り重きに失すれは彼れは已後の例格になさんと付け入り輕きに失すれは彼毫も屈せす口上を受んとするも陳せす引請せんとするも進ます供頭は喇々例規を引証して違例を詰る等不慮之失躰を來す事なきに非す御取次之職唯熟練を要する也職務の覺書手簿各自所有せし由なれと今や其人亡し筆記傳はらす

一入來使者の名簿は小十人御帳前にて筆記し御取次に出す之を清帳と云翌朝明け番之御取次之を持

參奥の口伊賀番所前にて奥之番へ渡し同役より親覽に呈す

一御取次は新御番頭の廉にて御給仕役を勤む人少にて御玄關受付差支の時は遠侍詰合の御供番御小姓組にて補助をなす事常也又寄合等より助役被命事あり年頭其他御吉凶事等にて入來使者頻煩の時には寄合大御番格小普請より一時の助手を取り輕き事務に服せしむ

御庭奉行

御庭奉行

中奥格役より（中奥御番格 御膳奉行格等）出役す總て園中監視風致掃除草木花卉培栽等の事を司り御路次の者木登り方御庭口番人植木方等を差配監督御庭御巡行は勿論御庭締り御用に服す（御簾中樣櫻菊等御觀遊大奥向御庭御巡覽の時所々幕張をなし男子の徘徊出入を禁す之を御庭締りと云ふ）　江戸赤坂邸の庭園は廣大なる名園にて御鷹場も完備し　顯龍公御代には御放鷹頻煩珍禽佳鳥之鳥籠數百個設置春秋稻荷秋葉兩社の祭典には御家中一同の幼童入園を免され又御庭御拜見人（御出入御旗本或は若山より初て出府の面々等時々御庭拜見の事あり）旬季大奥より獻上の梅花菊花日の茉培養氷室の（一本用）(囲)ひ方に至る迄皆之を管理す江戸にては庭中に役所あり御庭方勤と稱する伊賀已下の者一兩人附屬す

御衣紋方

御衣紋方は御裝束の事に任するの職也御役順に置かす時々其人に依て命せらる御裝束とは即ち御束帶御衣冠御直衣御直垂御狩衣等にて皆幕府武家裝束の定制あつて大小の典禮儀式により差別あり而して服章製裁着法等堂上の流儀有職衣紋の古式其道の傳法を學習せされは知る能はす故に其術に達する者を擧て御衣紋方とし御裝束の事を掌らしめ　公儀御大禮初め内外御社參御參詣總して御裝束

御着服の事に奉仕す國初以來の事詳ならされ共寶永以降は左記の如し大概其業を子孫に傳へ世々同職に任したる也

鷹司殿勤務　榊原源八郎正勝 初大學

寶永元申年五月有職學を申立御家へ被召出金三十兩被下中の間番格被　仰付御衣紋有職筋之御用相勤

一同六丑年二月三日御切米六十石御膳奉行並被　仰付奥へ相勤候樣被　仰付

一同七寅年七月京都住居被　仰付於京都　禁裏を始　御所方堂上方吉凶承り合并有職筋之御用相勤江戸若山へも度々罷越御用相勤

寶暦四戌年十月病死八十一歳

源八郎養子　榊原靱負正泰 初彌源太

一延享三寅年正月廿七日源八郎聟養子被　仰付翌年七月廿八日　禁裏を始　御所方堂上方吉凶承り合并有職筋の御用等見習被　仰付

一寶暦五亥年三月五日養父源八郎跡目四十石獨禮小寄合格被　仰付
以後京都に住居有職御用相勤寛政二戌年十二月二日病死

正泰總領　榊原靱負正親

一寛政三亥年父靱負跡目十人扶持被下番外被　仰付家業精出可申獨禮小寄合之旨被　仰付
享和元酉年七月廿七日病死子爲次郎相續家譜傳はらす成行不詳

御徒　宇治田平左衛門忠郷

一享保十一午年五月晦日有職之儀心掛罷在候付小寄合被　仰付年々銀三枚被下置

爾後有職之儀出精を以追々昇進御切米廿石大御番格に至り延享元子年七月病死

忠郷總領　實二男　宇治田平左衛門忠如　始平三

一享保元酉年十一月衣紋稽古出精に付部屋住にて十人組並小寄合御切米拾五石三人扶持被　召出

一延享元子年九月父平左衛門跡目御切米廿石無相違被下獨禮被　仰付

一寛延二巳年十一月衣紋之儀出精に付御切米三十石に御加增被下置

一明和五子年六月御近習番被　仰付衣紋方御用をも相勤候に付年々銀十枚被下已後御藥込頭八十石に御足御加增四十石被　仰付

安永二巳六月病死

忠如總領　宇治田平左衛門忠兄　始平三

一寶暦十三未年十一月部屋住にて御裝束筋諸事見習候樣被　仰付平左衛門に差添毎々御用相勤

一安永二巳年八月父平左衛門跡目御切米六十石被　仰付寄合組に入る

一同三午年四月衣紋方御用父平左衛門通り相勤可申旨被　仰付

後御納戸頭格八十石高に進み文化九申年六月病死

右已下平三忠篤忠兄養子兵衛忠得猪吉郎等相續代々衣紋方御用被　仰付度々京都師家へ罷越御參府御供且御用之節に江戸へ罷越奉仕維新前平三に至れるなり　採要略記す

故佐野孫兵衞德岡養子　實宇治田平左衞門忠如三男
御納戶頭ノ上六十石高　佐野孫兵衞典恒

一文化十三子年三月御裝束御用之節罷出相勤可申旨被　仰付
右孫兵衞は宇治田平左衞門忠如の三男なれは衣紋の事父之傳授を受兼て習學之處平左衞門忠兄病死により此命ありしならん孫兵衞文政十三寅年十月病死

故佐野孫兵衞典恒養子　實孫兵衞德岡長男
大番　四十石　佐野孫兵衞

一天保八酉年三月廿一日宇治田兵衞病死に付當分衣紋方相弟子稽古頭取可致世話旨被　仰付
一同年四月八日當分衣紋方御用相勤可申旨被　仰付
同日將軍　宣下御用に付江戶へ立歸罷越五月中旬迄に江戶着九月比迄罷在候心得にて可罷越旨被　仰付四月廿九日若山發足京都高倉家へ立寄一位樣御用筋問合候付暫同地に逗留御用相濟五月廿一日江戶へ着同年九月　將軍　宣下御規式御登　城之節幷紅葉山御豫參之節御衣紋掛り布衣着御供相勤
一天保九戌年五月衣紋方御用之節奧へも可罷出旨被　仰付
嘉永四亥年九月十四日隱居
右之外御小納戶格御小姓岡田忠左衞門天明六午年二月御衣紋御用被　仰付
同七未年四月御衣紋高倉家へ入門可仕旨被　仰付たり此類尙あるへしと雖も詳ならす
一長澤六郎養子衞門友雄古學者は有職古實に達するを以　舜恭公の內旨を奉し度々京師へ往來衣紋有

職の事を調査內申之事あり然れ共公けに衣紋之職は命せられす

五友之間御廊下詰

麴町御殿勤番

五友之間とは若山城中表御座敷張付に五賢人を畫きたる間席なり平士老衰之者又は貶黜せらるゝ者格役にて五友之間御廊下詰を被命全く休職にて何等の勤務もなし多くは老廢職に堪へす隱居すれは減祿家計に窮する狀を恕し命せらるゝもの也諺に生きた老爺の捨處なと唱へたり

一麴町御殿勤番も五友之間御廊下詰と同義にて老朽之者無爲無能の輩或は品ある者等當職となる元來江戶麴町殿へ勤番之處燒失後御再建なきを以當分青山殿へ勤番すへき旨天保十二丑年六月布告あり御留守居殿なるを以て何等之勤務なく唯殿中火之元改に止り起居自由に任す習慣により任命辭令書には麴町御殿勤番とあれ共別紙にて青山御殿へ可勤と達せらるゝ也尤江戶常府のみとす

常府大御番格小普請等當分當役に出役之者あり當分遠侍御番に出役と同しく四人扶持を賜はる亦仁恕之義也

山方勤

山方勤とは猪鹿御狩獵の事に任す御獵場の御嚮導銃手之配置勢子狩出し狗入れ等巧者にて砲術鍛練之者被命概ね大御番諸小普請等より加役す內肝煎兩人程あり近世山田八九郎は有名なる山方にて砲術の妙比類なく猪鹿の頭尾前後足等指命の儘に狙擊して百發百中寸分を誤らす而かも腰だめ

也しと人皆驚嘆喧傳せり子孫數世職を襲く

稽古料被下

上下諸士の子弟弓馬鎗劔柔砲等之武術多年精修熟達之者は師範家の推薦により弓馬は年金十兩他は年金銀十枚を賜る之を稽古料被下と稱し二三男と雖も勤仕人に准するの資格を有す父祖の家督跡目を襲き戸主となれは給せられす稽古料の事古く天和三年に見ゆ　國祖以來之制也詳なるは學制武術の部に掲く

盗賊改方

頭取一人（役料十人扶持）　寄合等より加役差圖受勤なる者廿石前後獨禮小十人兩小普請等より出役附屬（出扶持三人扶持）し冬中府下を巡邏し火付け盗賊を監査警戒をなすの職なり尤江戸にはなし

右之外御役順帳に載らさる加役尠からす屬職及ひ類役の分は既に長官の條又は其部類へ解弁せり（砂糖方銅山方等は御勘定奉行の部口奥熊野御目付の部五ヶ所役は勢州役の條に掲けたる如し）　尚左の三役亦加役にして御役順帳になしいつれも名稱通りの任務たるは知り得へく敢て解説を要せす

山口御殿番　山口驛御殿番也

鷲家御殿番　和州御領知鷲家村御殿番也

長保寺見廻り役　大御番等より出役

雜例

任命式

格祿昇進轉職家督跡目名跡養子緣組賞賜知行目錄被下其他總て拜命事には前日に明何日五半時麻

上下着出殿可致旨之召喚狀を付す（御側向は御小姓頭より奥役は御用人其他は御目付より組配下は御目付より頭支配へ付す）之を召喚狀と稱し重き事とす（御用召と唱へ同僚親戚等へ吹聽に廻り謹愼あるの習慣なりし）召狀の事法制文格の部に記す

一任命に御直命と御年寄申渡との區別あり頭役已上は親命平士幷已下役は都て御年寄也御留守年には頭役と雖も御年寄申渡す總て之を被　仰渡と唱へり而して任命の順序且職格任命の種類に依て拜命席を異にす大畧左の如し

任命順序

御役替　（格祿昇進轉職等小普請入持格拜命も此内に込る）

判改

御藏預り

病氣御役御免

屋敷地拜領

分知　（病氣隱居願之向隱居被　仰付本祿の内幾分を賜るを分知と云世祿に改正後はなし）

跡目　祖父死亡之跡目又は隱居の家督共

無足御番　諸士の總領御番勤被　仰付事也

名跡　（相續人なくして病氣末期に及ひ嫁へ聟養子或は御定の者等名跡に願置死亡したる者の相續被命を名跡と云）

養子

緣組

皆勤被下

御褒美被下

知行當所務被下

右の順序にて頭役御役替は　御直命其他は御年寄申渡す

拜命席

御座之間　重役御役人向奥頭役　御側向頭役等　御直命之時

御成廊下　平士御側向奥役御年寄申渡

御小書院　表頭役御直命之分　年々御金被下頭役御足高御金其儘被下御小姓御小納戸幷奥詰被仰付候節

御用部屋　頭役奥詰にて御品附及平士より奥詰頭役の節頭役已上免不足被下諸御用掛り御用掛り拜領物等いつれも御年寄申渡す

柳之間　若山にては中之間也奥役之外平士一同已下役迄御年寄申渡

一都て取次支配御目付直觸之外平士組付は申渡席へ頭出座す然れ共品柄により出座有無の區別あり

一知行目錄被下頭役已上御用部屋奥役は御成廊下表平士は柳之間

右は一應之概略也此他輕重無量細雜の成規慣例あつて到底擧け盡すへからす又當分出役掛り役等輕き品にて政府より御用人又は頭支配へ辭令書を下け申渡の種類亦多し

御直命

親任式とは御年寄より御覺書といふを呈す一例を掲く

總して昇進轉役等に御足高其儘被下との辭令なければ上け切となる成規故に孰れも辭令書には別項に御足高其儘被下置と認む然れ共此分御直命なく御年寄御前にて申渡す仍て朱書「　」印之通りとす

御覺書用紙みの半切奥御右筆認む紙端折かけの表に左記の如く

〔御意　仰含并　御意之　御覺書〕

馬場源右衞門

極老迄久々出精相勤候付足高之内加增に遣二百石申付

「御足高被下之品私共申渡右相濟候上結搆被　仰付難有旨私共御取合仕」

三輪源十郎
寺內藤次郎

用人申付

「結搆被　仰付難有旨私共御取合仕」

「御　意」

入念候樣

「御意之趣奉畏候旨私共御取合仕」

堀內淸八郎

出精相勤付手筒頭格申付

「結搆被　仰付難有旨私共御取合仕」

村井久左衞門

御本丸御城附申付
「結構被　仰付難有旨私共御取合仕」
「御　意」
入念候樣
「御意之趣奉畏旨私共御取合仕」

田　中　三　藏

一昨年來格別骨折相勤品も有之付徒頭格申付足高之内加增に遣三十石申付
「御足高被下之品私共申渡相濟候上
結構被　仰付難有旨私共御取合仕」
一御年寄幷同樣の筋へ御足高被下の節は　御直命の事
一奥詰等は御意無之中奥詰も同斷

辭令書式

前記馬場源右衞門に就て例を示す

馬　場　源　右　衞　門

極老迄久々出精相勤候付御足高之内御加增被成下二百石被　仰付之

同　人

何百石之高に御足高被下置之
餘は之に准す

頭役已上は右之如く御足高の事別項と雖も平士なれは

何　之　誰

久々出精相勤候付御足高之內御加增被成下何十石被　仰付何十石之高に御足高被下置之
極老之文字は八十歲已上に限り久々は五十年已上之勤に因る近世御加增は容易に賜らす五十年勤
之者へは賜る前記田中三藏は五十年勤に非すして格式御加增御足高共被下之を俗に三拍子と稱し
他役には稀有の事とす三藏時に奧御右筆組頭にして特別盡力の廉ありし故なり
一現職より低席之職へ轉する時は左の通り但書を付す然れ共申渡には唱へす頭役平士同斷
何役被　仰付之 御足高被下時は前文例に准す

持格之事

一頭役已上は御用召之廉になくして加役又は御用掛り等被　仰付之辭令書には何々可相勤との御事
候と御事之二字を加ふ
一總て隱居之跡相續は家督と稱し父病死之跡相續は跡目と稱す文例左の如し
父誰病氣に付願之通隱居被　仰付爲家督御切米何十石其方へ被下置大御番被　仰付之
父誰爲跡目御切米何十石被下置小普請入被　仰付之

大御番格之事

父五十年已上勤之者なれは父誰久々相勤候付爲跡目御切米何十石無相違被下置云々とありて減
祿せさるなり
一無足之者辭令書には總して肩書を記し重役已上の總領は嫡子右已下平士御目見已上は總領と稱
す已下役は悴と認むる成規なり且已下役は都て役名を如左肩書す

誰　嫡子又は總領 養子
何之誰

何役
何之誰

已下役
何役
何之誰悴
何之誰

病氣に付宿御番　御免願

右願文例

私儀先比より疝癪氣罷在候處夜分別て相勝不申難儀仕候付當分宿御番　御免被成下日之中
計御番勤申度奉願候已上

月

何之誰

右尙勝れさる時は何々宿御番　御免被成下候樣仕度旨當何月奉願相濟御座候處今以爾々不仕難
儀仕候付今暫宿御番御免被成下日之內計御番相勤度と二度目願を出す其上尙勝れす又々日之內
計勤度時は前同文躰に詳記し第三回之願を出す　御免期間の日數豫定有し由なれ共今詳ならす

八十歲屆

諸士八十歲に及へは其年之春左の屆書を出す

何之誰

私儀當支八十歳に罷成申候依之御届申上候以上

何　月

右届出れは養老之典を以紅裏地を拜領す爾來殿中及ひ何れにても紅裏衣着用を被免且當八十歳に罷成及老衰難儀仕候間御番　御免被成下度旨勤書添願出れは勤務一切を免せらる九十歳に於けるも都而同斷

及八十歳其儘御番等相勤る向は及八十歳たる段可達出旨文政二卯年四月達あり

一隱　居

諸士老衰又は病氣にて職に堪へす退隱せんとする者は願書を呈する文例左の如し

何　之　誰

私儀段々結構被　仰付難有仕合奉存候何分にも相務申度奉存候へ共先達てより中風症罷在色々藥用養生仕候へ共兎角相勝不申迚も御奉公難相勤仕合に御座候間何卒御慈悲を以て當御役御免被成下總領同苗誰儀當年何十何歳に罷成候間私へ被下置候知行之内誰へ如何躰にも被仰付被成下候樣仕度奉願候右病氣之段日本之神僞無御座候已上

月　　勤書書添へ出す

右之通り願出れは總領へ家督被　仰付也

一御留守年には隱居願不相濟　御滯府打續たる時は願出不苦

一方々樣御附屬之者は　御留守中にても願出不苦

一隱居之者多くは雅名に改名剃髮法躰と成る尤届の上也又改名法躰とならさるも勝手なり

一法躰之者高野山參詣なすに御年寄御目付へ達届に不及旨寶暦六年に極る

一當主他所勤拜命移住之時隱居分知法躰之者若山表に居殘之儀願之上許可の旨文化七年に極る

一國祖御代之比は隱居被命時は本祿之内減祿家督人へ被下右減祿分を穩居料として隱居へ賜り又は願に依りたとへは隱居料五百石可賜を隱居之者へ二百石被下殘り三百石を二男三男に分ち賜り更に分家を命せられし類不尠國初の時諸士の增加を謀られし爲と見えたり後諸士次第に增殖且財政上限りあるを以其事遂に止み唯隱居本人にのみ賜る爾來世々此成規を遵守せられ之を分知分切米と稱す然るに嘉永七年五月世祿の制被　仰出家督減祿せさるを以て分知自廢す後慶應元丑年八月世祿を廢し嘉永七年已前に復舊せらる此時分知之制亦復舊と察すれ共長州征伐等兵馬騷擾國家多難之際安然退隱之者も尠かりしか其例聞知する處なし

勝手難澁に付御役御免願

享保寶暦之比迄は諸士家計に窮し軍役は勿論平素職掌の人馬養ひ難き時爾々に付御役御免被下勝手取直し度旨を出願す然る時は願之通被命知行御切米共祿扶持に減せらるゝ也而して數年之後勝手直し得たる時は其旨届出れは元役相當之職へ就任を被命元の如く復祿す士風質朴實直の風自から見るへし近世に至ては絕て此事なし

女中職籍

內寢之事從來秘密に屬し且御廣敷勤之外男子嚴禁の制なれは表方之窺ひ得へき限に非す老女若年寄御錠口等の任免及ひ老女へ布達の類は政府に記帳ありたれ共今傳はらす依て當時の老女に就き調査したるに女中席順及ひ俸給制遺存す（女中御切米御扶持渡り物帳は司農府の分も遺存す同斷也）尙舊時を熟知せる古老の輩に親しく質疑諮詢歎其梗概を了するに至る細雜の事固より知るへからす

一文化九申年八月廿日政府より

女中御役名等替り候儀大槪左の通りにて有之候付右等は以前之儀他向より問合等有之節當時之唱に認直可申遣餘は都て右に准し候事

御側	之を御中﨟
相之間	之をも御中﨟
御前詰	之を御錠口
御仕事	之を吳服之間
口使	之を使番

女中席順

御本家	上﨟	同	老女
西御殿	上﨟	同	老女
御本家	若年寄	同	中﨟
同	御錠口	同	同格

西御殿　中年寄　御本家　御前詰
西御殿　中臈頭　同　中臈
（同　御[一本ナシ]右筆）　同　御小姓
同　表使　同　御右筆
同　御次頭　同　御次
同　御呉服之間　同　格

右御目見以上

五節句には別間にて御目見仕る

御三之間　同格　御末頭
御使番頭　御中居　御使番
御火之番　御膳所番　茶所子供
御半下

右御目見以下

一上臈初之詰所を菊之間と云
一表使詰所を萩之間と云
一表使御右筆を兩役所と申候
一御清之間致候は

若年寄格　表使格　御次頭

御本家女中御切米御扶持方諸渡り物

御切米四拾石
御合力金廿両
五人扶持　御城使勤に付金三十両
月々　薪十貫四分　伊勢炭四俵
水油一升二合　糠四升
菜銀四十八匁

御切米金二十両
御合力金十両
四人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭二俵八分
水油　八合　糠二升四合
菜銀四十匁

御切米金二十両
御合力金十両
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭二俵八分
水油　八合　糠二升八合
菜銀四十匁

御切米二十石
御合力金十両
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭二俵八分
水油　八合　糠二升四合
菜銀三十六匁

大上　臈
老女　四　人
若年寄　三　人
外に御錠口勤　二　人
御中臈　五　人
御錠口　四　人

御錠口助

表使四人

御右筆頭

御次頭一人

御右筆五人

御次五人

御切米持高　申立有之候はゝ　金貳兩
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭一俵六分
水油八合　糠二升四合
菜銀二十四匁

御切米二十石
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭一俵六分
水油　八合　糠二升四合
菜銀三十匁

御切米金十八兩
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭一俵六分
水油　八合　糠二升四合
菜銀二十四匁

御切米十八石
三人扶持
渡り物御次頭と同斷

御切米金拾五兩
三人扶持
月々　薪四貫八分　伊勢炭一俵二分
水油　八合　糠二升四合
菜銀十六匁

呉服之間三人

御切米拾五石

三人扶持

渡り物御次之同斷

御次格

呉服之間格

御切米金十兩

二人扶持

月々 薪四貫五分 伊勢炭九分

水油四合五分 糠一升八合

菜銀十三匁五分

御三の間六人

御切米金十兩

二人扶持

月々 薪 四貫 伊勢炭一俵二分

水油五合六勺 糠一升六合

菜銀十二匁

御三の間格

御切米金七兩

二人扶持

月々 薪三貫六分 勢炭九分

水油四合五勺 糠一升八合

菜銀九匁

御末頭

御切米金十兩

二人扶持

月々 薪 四貫 伊勢炭一俵二分

水油 四合 糠一升六合

菜銀十二匁

御切米金九兩　看板代四拾五匁
二人扶持
月々　薪　四貫　伊勢炭一俵二分
水油　四合　糠一升六合
菜銀十匁

使番頭　一人

御切米金八兩
二人扶持
月々　薪三貫二分　伊勢炭八分
水油　四合　糠一升六合
菜銀八匁

御仲居　二人

御切米金八兩　看板代四拾五匁
一人扶持
月々　薪三貫二分　伊勢炭八分
水油　四合　糠一升六合
菜銀八匁

使番　四人

御切米金五兩
一人扶持
月々　薪　二貫　伊勢炭四分
水油二合四勺　糠一升六合
菜銀六匁

御半下十五人

御切米金三兩
一人扶持
月々　薪一貫八分　伊勢炭四分五厘

御半下格

水油二合七勺　糠一升八合
菜銀三匁六分

年々金三両
一人扶持
月々　薪　一貫　伊勢炭五分　十月朔日より三月晦日迄
菜銀七匁五分

御鼻紙代金二両
一人扶持
月々　薪　一貫　伊勢炭五分　十月朔日より三月晦日迄夏分は炭無之
菜銀三匁

御簾中様御附女中御切米御扶持方諸渡り物

御切米四十石
御合力金拾五両
五人扶持　御城使勤に付金二十両
月々　薪拾貫四分　伊勢炭四俵
水油一升二合　糠　四升
菜銀四十八匁

御切米三十石
御合力金十五両
四人扶持　御城使相勤候はゝ年々金二十両
御局御介添は右人數に籠り候事
月々　薪　十貫　伊勢炭三俵六分
水油一升四勺　糠　四升
菜銀四十四匁

御三之間子供

子供

大上﨟　一人

小上﨟　一人

老女

御切米金二十両
御合力金七両
三人扶持
月々　薪六貫四分　伊勢炭二俵八分
水油　八合　糠二升四合
菜銀三十六匁

御切米金二十両
御合力金五両
三人扶持
月々　薪　六貫　伊勢炭二俵四分
糠二升四合　水油　八合
菜銀三十匁

御切米金十五両
三人扶持
月々　薪　六貫　伊勢炭二俵四分
ぬか二升四合　水油七合二勺
菜銀三拾匁

御切米十八石
三人扶持
月々　薪　六貫　伊勢炭一俵六分
水油七合二勺　糠二升四合
菜銀二十四匁

御切米十五石
三人扶持
月々　薪五貫六分　伊勢炭一俵六分

中年寄　三人

御中臈頭

御中臈　七人

御小姓　三人

表使　二人

御右筆助共　三人

水油七合二勺　糠二升四合
菜銀二十匁

御次五人
御切米金十二兩
二人扶持
月々　薪四貫四分　伊勢炭一俵二分
水油七合二勺　糠二升四合
菜銀十四匁

呉服之間三人
御切米十二石
三人扶持
渡り物御次同斷

盲女
御切米十二石
三人扶持
月々　薪四貫　伊勢炭一俵二分
水油六合四勺　ぬか二升四合
菜銀十二匁

御三之間五人
御切米金九兩
二人扶持
月々　薪三貫六分　伊勢炭一俵二分
水油五合五勺　糠一升六合
菜銀十一匁二分

御三之間格
御切米金六兩
二人扶持
月々　薪二貫七分　伊勢炭九分

水油三合六勺
菜銀六匁七分五厘　糠一升八合

御末頭　一人
御切米金八兩
二人扶持
月々　薪三貫六分　伊勢炭一俵二分
水油　四合　糠一升六合
菜銀十一匁二分

御仲居　二人
御切米金七兩
二人扶持
月々　薪二貫八分　伊勢炭八分
水油三合六勺　糠一升六合
菜銀八匁

使番　三人
御切米金六兩　肴板代　四拾五匁
一人扶持
月々　薪二貫八分　伊勢炭八分
水油三合六勺　糠一升六合
菜銀八匁

御半下　十人
御切米金四兩
一人扶持
月々　薪　二貫　伊勢炭四分
水油二合四勺　糠一升六合
菜銀五匁六分

御半下格
御切米金二兩二分

一人扶持

月々　薪一貫八分　炭四分五り
水油二合八勺　ぬか一升八合
桒銀三匁六分

御本家同様

天保十三年寅十一月極る
御切米金五両
渡り物西御三之間格之通り

菊千代様御附

三人扶持

月々　薪五貫六分　伊勢炭二俵
水油　八合　糠二升四合
桒銀廿八匁

二人扶持

月々　薪　四貫　伊勢炭一俵二分
水油六合四勺　糠二升四合
桒銀十四匁四分

三人扶持

月々　薪　四貫　伊勢炭一俵二分
水油六合四勺　糠二升四合
桒銀十四匁四分

二人扶持

月々　薪三貫六分　伊勢炭一俵二分

御三之間子供
御末子供

西踊子
御三之間子供

御錠口
さか野

御次
よさ
もん

呉服之間
しも

御三之間
いま

水油五合六勺　　糠一升六合
銀十一匁二分
御切米金三兩　元は二兩二歩
一人扶持
月々　薪　二貫　　伊勢炭四分
水油二合四勺　　糠一升六合
菜銀五匁六分
二人扶持
月々　薪四貫四分　　伊勢炭一俵二分
水油七合二勺　　糠二升四合
菜銀十四匁四分
二人扶持
月々　薪三貫六分　　伊勢炭一俵二分
水油五合六勺　　糠一升六合
菜銀十一匁二分
二人扶持
月々　薪　四束　　伊勢炭一俵
水油五合　　味噌代百十六文
糠　三升　　菜銀九匁
御切米金五兩
二人扶持
月々　薪　三束　　伊勢炭一俵
味噌代百十六文　　糠　三升
菜銀七匁

さく
御半下
千彌
萬路
御簾中樣御次
秋姬樣御附
龜野
同　御三之間
鋹姬樣御附
伊賀
御次
御三之間

御切米金二兩二歩　「原書名稱欠」
一人扶持
月々　薪　二束　伊勢炭半俵
水油　三合　味噌代八十四文
糠　三升　菜銀三匁

御切米金十兩　御乳
三人扶持
月々　薪　三貫　伊勢炭一俵
水油　二升　味噌代百十六文
糠　三升　菜銀六匁

右之内持格有常之通り
御子様方御抱の分は毎月の渡り物尤無減之事

按に　女中俸給の事は文化の度　舜恭公御制定の叙族式に詳なれとも諸渡り物の事なし前記は女中方保存之記に據て抄出す菊千代様御附云々とあれは蓋し憲章公御時の記なるへし

女中人數定

老女	四人	若年寄	三人
		外に御錠口勤	二人
御中﨟	五人	御錠口	四人
御錠口助		表使	四人
御次頭	一人	御右筆頭	一人

御次　五人
呉服之間格
御三之間格　五人
使番頭　一人
御半下　十五人
御半下格

呉服之間　三人
御三之間　六人
御末頭　一人
御仲居　二人
火之番　五人
御末子供

御簾中様御附　文政七申閏八月十四日被　仰出

大上臈　一人
御介添　一人
御年寄　一人
御中臈頭　一人
御小姓　三人
御右筆助共　三人
呉服之間助共　三人
御末頭　一人
御仲居　二人
御末子供　三人

小上臈　一人
御局　一人
若年寄　三人
御中臈　七人
表使　二人
御次　五人
御三之間　五人
使番　三人
御半下　十人

〆總五十六人

女中勤方大略

一大上﨟　京都公卿之女姉妹を呼下す　幕府及御三家に限る傳説に京都より監察の意に出ると幕府の姫君大藩へ嫁せらるゝ時御守殿には此官附隨す其藩にては最厚遇崇敬を加ふる由本藩に在ては少しく優遇せらるゝのみ

老女の詰所に出勤其上席に列し御城使御代參或は御儀式の節の御配膳をなし總て御式立たる事に關す

一老女　內廷の機密に關し輔弼の任に當り女官全體を管理し御城使諸御代參を勤め威權ある重職也

一若年寄　老女に續きたる重職にして表方の御用人の如し御客應答を司り御衣服御道具を預り（新調の御衣服等は當役裁斷して吳服の間に渡して針縫を爲しむ）又御清之間を管理し進膳には御飯櫃之役を勤るよし

一御中﨟　御妾也世子を設る時は御內證の方又は御部屋樣に進む

一御錠口　大奧々境の御錠口に出張り御側向（御小納戸頭取奥の番也）へ應對（御用の御取次をなす也）　君上大奧入御之時は御納戸頭取より御刀を受取之を役す若年寄格に成れは同役の勤めをもなす萩之間詰と稱し女官之役人也

一表使　表方の御目付に准し女官の執法職にて何事にも立會をなし女中の非理不法を訊問糺彈をなす御普請所見分等にて表役大奧へ立入の時は必す立會日々進膳を改め毒味なし夜中は局々を打廻り火之元を改め總して威權ある役人也

一御次　字の如く御前邊御次廻りの雜務に服役す

一御右筆　表方の表御右筆日記方及ひ御書方を兼たる如きものにて都て文書を司り　公儀御勤品御家門御親族初めの御附届け吉凶御禮式等の奉文初め一切の文書を筆し諸般之先蹤例格を調査し且年中之日記を誌し帳簿を管理す御右筆頭は之か總裁也

一吳服之間　御衣服裁縫一切に從事す裁縫の終始には針數之改嚴重にして若し誤て一針を失ふ時は御暇或は押込等之罰を受く以上を御目見以上とし御禮式には拜謁なす事を得

一御三之間　御座敷向洒掃を初め總て御次等の下た働きをなし雜事立廻りの事に從ふ是より以下は御目見以下にして御目通りへ出るを得す

一使番　表方の御徒目付の如き者にて專ら老女表使の使役に服し老女の御城使御代參に隨行又男子に應對し表使と共に火之元を打廻り乃至時刻を觸れ廻る

一御仲居御半下（ハシタ）　御末の事にて御仲居は上に立ち共に庖厨進膳割烹の調理を司り御仲居頭は其頭となりて御風味を管す御半下は炊事水汲御風呂の水汲をもなし玄蕃荷ひ桶を肩にし勞力殆と男子に劣らさる也　御簾中樣御末は御他行の時は御三之間邊にて御乘輿ゆへ是より御玄關迄は御末舁上け御駕之者に渡す也而して揃ひ大模樣の看板を着し御行列に立つ右看板の模樣は　公儀尾水樣夫々定規ありて本藩の分は空色地に竪竹の大模樣なり

御簾中樣方

一大小上﨟　都て前に同し大小は老弱によるの稱なりといふ

一御介添御局　近世欠員により職掌詳ならす

一御中薦頭御中薦
一御小姓
兩役共に御小姓の事にて年輩を御中薦と稱し少女振り袖勤の分を御小姓と稱するよし併し御中
薦は上に立て進膳の時は御配膳を役し御小姓は御給仕御通ひをなす等の別あり
右之外役々の勤務都て御表方君上也女中に同し略す
女中局内にての行作
一の側部屋
上薦　召遣ひ女針妙一人 多門二人　合の間二人 小間遣ひ一人
平日膳部黒塗紋付三方蠅帳付
二の膳付　一汁　二菜
部屋住居　十疊敷　床の間附　片入側　納戸二階
針妙始裏部屋二階にも有之候
奥へ出候節二人にて送り迎ひ致し候
一の側部屋
老　女　召遣ひ女　針妙一人 多門一人　合の間一人 小間遣ひ一人
外は同し事
二の側部屋

若年寄より表使迄　　召遣ひ女　針妙一人　多門一人

平日膳部黒塗紋附三方　一汁一菜

部屋住居少々つゝ粗末奥へ出候節御側向の人送り迎ひ一人つゝ御座候表使送迎無之

御右筆も御錠口格戴候人は御錠口同様に候事

二の側部屋

御右筆　御次　呉服之間　召遣ひ女　部屋の者相合にて多門　一人一人

平日　膳部春慶塗三方蠅帳附　一菜計

部屋色々の人合部屋住居は若年寄初同し事　送迎なし

御三之間　召遣ひ　一人

平日膳部春慶塗八寸蠅帳附　一菜計

部屋多く二階に住居す古く勤候者の世話に相成勤め候

御末頭　御使番頭　召遣ひ　一人

膳部分り不申　御末頭より部屋三の間に住居す

御中居　御使番　御火之番　召遣ひ　二人に一人　三人に一人位

部屋三の側内に住居す

御膳所番　次番　所々の子供　召遣ひなし

多く御末頭初の世話係りに相成　二階に住居す

右亦老女の口述に據る一の側二の側とは即ち長局と稱する女中の部屋々々也御三の間等古く勤むる者の世話になるとは初めて御奉公に出る者は古老の女中各其新參を負擔し己か部屋の二階に住しめ勤向は勿論身の躾方服飾の事迄を指揮し里方の不如意なるには服費抔を も賄ひ與ふ之を部屋親と唱へて世話さるゝ者を部屋子と云ふ故に常に親の如くに給仕疾病等の如きには力を盡して看護すと云 前記針妙とは針仕事をなし經濟初め總括をなす 次の間とは次働き多門とは炊事水汲女なり

按に御家風に於て女中召抱は一生御奉公の誓詞を入れしむ「御目見已下の女中は此限に非す」故に十三四歳よりして四十年五十年も勤續の者多く若し病氣癈疾に罹り勤めかたき分は下宿養生御暇を賜はるも役々に應し御扶持を蒙る又御代替りには御先代の御中﨟「御妾」は勿論重く被召仕たる分は剃髪して何院々々と稱し其儘殿中にあり是等を御比丘尼と稱し「御妾の外下宿するも何れも俸給は賜る也」其數尠からす總して内廷は江戸を主とし「若山は僅に御留守の女中に止り御歸國には江戸より御供にて往來す」御簾中樣も被爲入か故に上下女中の數實に夥しく 顯龍公の御時其極に至る爾後頗る減少に至りしも維新前迄尙表方女中百二三十人 御簾中樣方に三十六人程あり加之おちよぼ御狗抔稱する子供役あり又老女若年寄の如きは又者と稱する自己の下婢四五人つゝを召使へりされは總上下の女員は四百人に餘り長局と唱ふる二階家一の側二の側とて一丁餘も建續きたる三四側の部屋々々に上﨟老女等の外は皆合部屋にて充滿し到底今より想像の及ふ處に非す且重職之輩は自から君邊を見習ひ鄭重を極め食膳は三方を用ひて配膳せしめ臥蓐に在て髮を梳らし自から帶を結はす自から襪を穿たす綾羅綿繡を着けて美麗華奢を旨とせり而して互の交際贈遺に終生屈托するのみ「信か叔母堀井と稱する者少より奉仕し御次表使を經若年寄となり四十年來勤務の處中風症に罹て下宿御暇を願ひて療養せしに尙金廿圓に三人扶持つゝを賜はりたり下宿の際日每各女中よりの音信贈品實に山をなし殆と其煩に堪へさりき存生中に遺物即ち片見分を贈らんとて貯蓄の衣帶夜具布團反物等を上下の總女中へ贈るに從底を盡して猶足らす下婢子供出入の按摩女の如きへは目錄又は小切手拭の如きをも購求贈與す互に此風習なれは勢ひ止を不得故に各自永年勤務中恩賜の衣帶及ひ他より受得たる片見分け物を豫て貯へ又俸給の剩余は悉く衣類となして万一の覺悟をなす事女中の常なりと云へり」

如此爲躰なれは每時節儉の發令に際し大奥御取締抔とて御廣敷御用人同御用達等掛り員を命せ

られ改革節減の畫策なきにしも非りしか結局女相手の事動もすれは思召に不叶御不都合等を口に籍き遂に謂ふへくして行ふへからさるに歸し貫徹には至らさりしといふ

然れとも歴世の御家法最嚴にして男女の別甚正しく猥褻婬行等ありしを古へより絶へて聞かす寵妾權を弄し老媵跋扈政機紊亂の事等毫もなく内廷常に肅然たり又音曲の如き御相手には琴乃至雅樂を彈奏せしも三味線を禁せられたり　御簾中樣御慰として女俳を召され所謂御狂言（演劇なり）なるもの施行の事ありしも女中里下りに劇場見物を許されす（當時御城女中諸家の女官等里下りには芝居見物を無二の保養となして盛に行はれたる也）天保の度鶴樹大夫人曾て御他行の御途次御供之御廣敷御用人計らひにて劇場（葺屋町か木挽町なるへし）の前にて御輿を高く差上させ舞臺の景況を御透見に供せしとて該御用人は直ちに嚴罰に處せられたりといふ御内人たり共男子は御附御用人御匙醫の外は誰一人　御簾中樣御姫樣方を拜する事能はす十年に一二回の御他行あるも御座敷内より御乘輿御駕窓には二三重の屛障あり御先き々々御下乘には行人群集を打拂ひ左右の女官日傘を以て二重三重に覆ふか故に決して窺ひ得さるのみならす御自身の御上にも御縱覽の御自由叶はせられす興なき御事とは察し奉られぬ贅言に似たれ共時の情況を示さん爲め略叙す

大奥改革女中御暇

一明治二巳年春御國政改革　君上御封祿二十分の一を以て御自奉に供せられ御家中も平均祿命せられたる際其四月七日大奥向改革被　仰出女官役々廢止大上﨟綾小路園橋は御客女と唱へ老女詰所勤になり御表女中は老女梅尾初十六人　御簾中樣御附にては御年寄長濱初十一人を殘し餘は老女

民野初め六十余人御暇被下夫々へ年金或は時切り之金員を賜り他所へ歸家の者へは外にも御金被下使番御膳所御仲居御半下一人も不殘御暇に相成　兩御殿共御膳所は庖人にて調進の事に至れり

但舊幕府御旗本の女子等にて　御宗家の大變により親里退轉歸家のなき分は若山御代官所を修補是へ割り當差置れたり

一明治二巳年七月十日元御宗家樣初め他より御附女中等にて當時比丘尼下宿之者へ年々御合力米被下有之筋御改革に付右被下金等向後都て上り候筈に候へ共格別之　思召を以當年分此節一時に被下以來被下無之趣夫々へ通達有之樣にと於東京家知事より同所御留守居へ申達す委細祿制之部に揭く

右人員は御宗家より御附純光院（元若年寄）初め七人清水家より御供輕明院初め三人左京大夫樣より御附槇井他所の筋行山（元使番）初め五人昨年御暇被下たる元若年寄槇野初め七人也

一明治四未年十一月十六日大上﨟梅の井歌町初め十五人御暇被下京都其他へ御差戻に相成是亦御金數多旅費等賜りたり是廢藩置縣被　仰出兩御殿共東京御移住に依て也　當公同年之記に詳記す

御役順幷御役々廢止

御役順幷御役々廢止　　慶應三卯年三月十五日被　仰出

兵制一變都て砲戰之世となりたるを以て武官一同銃隊に編成之主旨により被　仰出たる也於若山は去年十二月五日に發布せられたるも記載缺逸考へ難し依て於江戸之布達數件私記中に存する者を爰に拾蒐す江紀發令之時日如此差違あるは蓋し此時御在國且於江戸は他向引受勤務上自から殊別あるを以て御役廢止直ちに銃隊編成せさるへからさるの要ありて是等粗織を協議親裁經由に江紀往復時日を經過したる者ならんか委敷は知るへからす

追考　若山にての布達面も江戸同斷なり

慶應三卯年三月十五日　政府より布達

御家中之面々是迄御役順にて格式相立有之候得共　思召之品被爲　在向後御役順は不相用御禮席之順次を以格式相唱候事

右御對面所席と

御城代初
諸大夫嫡子迄

右大廣間席と

高家
少將様御傅迄

右大廣間席並と

御守殿御用人初
御小姓頭迄

右孔雀之間席と

町奉行初
御槍奉行迄
松坂町奉行初
御匙醫迄

右孔雀之間席並と　御留守居物頭初
布衣以上總領迄

右虎之間席と　寄合格小普請

右虎之間席末座と　御供番組頭初
御數寄屋頭迄

一　大御番幷同持格且大御番出にて虎之間席並之御役相勤候筋

一　江戸大御番格小普請幷同持格右にて虎之間席並以下之御役相勤候筋且頭役總領

右虎之間席並と　友ヶ島御番組頭初

御天守常番並
大御番格迄
右蘇鐵之間席と
（若山）大御番格小普請
右蘇鐵之間席末座と
御留主居番初
御同朋迄
右蘇鐵之間席並と
獨禮小普請末席
右蘇鐵之間席並末座と
御城代支配小普請初
御鳥見組頭迄
右中之間席と
小十八小請普末席
右中之間席末座と
平士總領
右中之間席並と

諸士並之筋
以下小普請
右已下役之上と
以下小普請末席
右以下役之上末座と
御納戸見習初
以下並小普請迄
右以下役と
右之通
同年三月十六日殿中柳之間に於て御家老演達
一思召之品被爲　在候に付向後御役々廢止被　仰出候委細之儀は追て被　仰出候事
一同日諸役々へ左之通御家老申渡之
「若山にては左之役々を加ふ順次御役順之通」
大寄合
「御城代」
大組
「大御番頭」
御供番頭
「御船奉行」
御書院番頭
「友ヶ島奉行」
御小姓組番頭

「御鷹匠頭　新御番頭
御手弓頭　小普請支配
御手筒頭　小十人頭
御留守居番頭　御先手物頭
御旗奉行　御納戸頭
御槍奉行　五十人組之頭
根來頭　御徒頭
御持筒頭　御使番
本町御門番之頭　江戸奥御供方之外
山家同心頭　頭役格以上
御天守番之頭　奥役
御本丸番之頭　江戸頭役格以上
寄合組頭　中奥詰」
御勘定吟味役

思召之品被爲在御役々廢止被　仰出之勤方之儀は追て可被　仰出との御事候
御足高御金銀被下有之筋は其儘被下候事
御預同心有之分は同心支配離候事

「若山にては左之役々を加ふ」

「御留守居物頭

砂丸番之頭

御　弓　役

友ヶ島御目付

友ヶ島御番組頭

御具足奉行

御膳奉行

御天守常番

御留守居番

大　御　番

友ヶ島御番」

寄合

中奥御小姓

御供番組頭

御書院番組頭

御小姓組與頭

新御番組頭

御召御具足奉行

御　供　番

中奥御番

小普請組頭

寄合格小普請

御小姓組

御書院番

御腰物奉行

新御番

大御番格小普請

御道具支配

小十人組頭
獨禮小普請
小十人
小十人小普請
以下小普請組頭

江戸奥御供方儒者并御警衞勤之外

平士奥詰
江戸
平士中奥詰
麹町御殿勤番

思召之品被爲在御役々廢止被　仰出之勤方之儀は追て可被　仰出候
御足高御金銀被下有之筋は其儘被下候事

以下小普請
奥火之番
表火之番
御駕頭
御徒組頭

御簾中樣

御廣敷　進上番
御　徒　押
御　　　徒
以下並小普請
御　用　人
御　用　人
御小姓頭取
御　膳　番

御都合之品有之候付御役々廢止被　仰出之勤方之儀は追て可被　仰出候
此度廢止に相成候御役々各にて肝煎可申との御事に候
御納戸御番之儀當分各肝煎候事
御召御具足奉行御腰物奉行之勤筋不差支樣取計可申事
御膳奉行之勤筋不差支樣取扱可申事

一同　日
一御小人頭詰合無之節は御小人御駕之者之儀向後御中間頭にて假支配致し可申事
一同日同斷
一此度廢止に相成候御役々之內寄合小普請之外は勤仕並と相心得可申事

右之向は夫金御扶持方共身分に應し相渡候事

一御役々廢止被　仰出候へ共跡御番人火消役等都合出來迄は總て以前之通御役々にて相勤候樣宜可取計事

一此度廢止に相成候御役々之內諸役助勤等致し有之向は其儘右助勤致し候筈に有之候事

一夫金御扶持方之儀是迄御役前之外祿に寄相渡候筋も候へ共以來は祿に寄差別無之席次を以て左之通相渡候筈候事

但御役前にて相渡候筋は是迄之通候事

御對面所席

元大組之通

大廣間席

元御供番頭之通

同　並

元新御番頭之通

孔雀之間席

元諸頭役格地廻り御供勤之通

同　並

元御納戸頭之通

同日御勘定奉行へ政府より達

一此度廢止に相成候御役々之内寄合小普請之外は勤仕並と相心得候樣被　仰出候付右之内孔雀之間席並以上は銘々席に應し夫金御扶持方相渡虎之間席以下は夫金御扶持方是迄二十石平し之通相渡筈候間此段役所へ可被相通之候

猶々向後勤仕並と被　仰出候面々は右同樣相渡候筈候且又夫金等無之御役より被　仰付候筋は勿論相渡不申筈候

本文之通候へ共當分は已前之通御役々の勤致し候筈付右之内は夫金御扶持方をも是迄之通相渡候筈候事

於江戸銃隊編成

於江戸銃隊編成之事

慶應三年三月十六日於江戸大寄合初諸番頭（大御番頭は江戸に無之）諸頭役平士已下役共武役御番方等廢止更に陸軍奉行並（本役は御家老之擔任なるか此際拜命なし）初銃隊頭撤兵頭を置かれ陸軍奉行並には小谷老之助服部五十二被命銃隊頭撤兵頭には是迄之番頭々役等より壯年之者被　仰付平士已下役は銃隊に被　仰付同心輕き者は撤兵隊に組入となれり而して陸軍奉行並初御役々孰れも召狀を以面々に拜任し別に布達之文書なし故に今巨細を知るへからす其職務章程御役料の如き布達書類の現存するものを左に記載し以て大略を示す

慶應三卯年三月十六日政府布達

一　　　陸軍奉行並

奥御役人にて御門々々制止有之候事

一召出伺事等之節罷出候事

但御用有之出殿不致節は罷出に不及事

一大隊司令相勤候事

一武藝之儀は都て取扱候事

一常々陸軍所へ罷出相勤候事

一出殿之節は是迄中奥之詰所へ罷出候事

一御勘定奉行御用人へ御用有之節は互に往來可致事

一是迄御書物方頭取御預り之御武器類御預被成

一　　　　銃　隊　頭

陸軍奉行並取次支配之事

一陸軍所へ罷出相勤諸事陸軍奉行並得差圖可申事

一一組身分に附候儀は頭にて取計又は直に進達可致候組之者進退且勤に付候品は陸軍奉行並へ可申談事

一一組當番之節は一度打廻り可申事

中隊司令之外

一　　　　銃　隊　頭

一御近火之節は三丁火消相勤

撒兵頭

陸軍奉行並取次支配之事

一陸軍所へ罷出相勤諸事陸軍奉行並得差圖可申事

一一組身分に附候儀は頭にて取計又は直に進達可致候組之者進退且勤に付品は陸軍奉行並へ可申談事

一表御門中雀御門御預け被成候間日々操廻し表御門へ晝夜當番相勤一組にて兩御門へ相詰候樣可取計事

一出火之節は火消御人數引纏罷越消防等相勤可申事

下ヶ紙

本文陸軍所之儀靑山御殿內へ出來之筈御事本文之通候へ共當分之內は平日は御用捨被遊候付一度打廻り可申事

本文一組之內表御門中雀御門是迄之番人より相成候分は宅守に致し出火非常之節は一組早速相揃せ可申事役人之儀も右に准し可申事

每隊之頭々初役人之面々常に陸軍所へ罷出諸事御用向取扱且兵書講究用兵之術專ら練熟可致候尤右之面々は一組敎授而巳に無之總て修行人取扱之儀相勤夫々等級に隨ひ敎授可致事

一銃隊之面々席順に不拘都て業之成熟身材之大小等を以四人つゝ組合にいたし隊伍組立之順次兼て

定置　殿中當番にも右之順に着座致し候樣可被申聞事
但御禮席之節は各持席之所へ罷出候等
一銃隊頭同差添等以來明き候節は跡役可被　仰付人柄役人向一同より入札致させ多分に入札有之向を銃隊頭同差添にて取調尙又入札之上各へ差出させ入札も多人柄相應之筋業合をも吟味之上名前封物にて可被差出事
嚮導以下御役にも右に准し入札にて相撰姓名を以被談出候上頭にて申渡候樣可被取計事
一大隊繰練之節御目付には軍監之位置に相立銃隊防方相勤候事
一調練始終相圖之儀御目付差圖により太鼓打可申事
一出場姓名札之儀每隊頭々より御目付へ差出調練濟尙又頭々へ受取候上退散可致候出數之儀は頭々にて取調半年毎に御目付へ差出同役にて尙取調候事
病氣等にて出行有之候はゝ其段頭々より御目付へ相屆同役にて承屆可申儀都て御番方同樣と相心得可申事
一撤兵之者出引之儀は頭々にて承屆可申尤右役人之儀は前條同樣之事
一操練場演習而已にては實地活動之業合難行屆候付二中隊程折々澁谷御屋敷等へ罷越地形により運動之節制先鋒前後衞哨兵等之配り方其外輜重土工之取扱迄相試修行可致事
一此度兵制御改革に付ては武役之面々平常を主と致し姓名帳初日々申送御達留扣等之儀隊々相束一帳にて相濟且總て手數毛頭無之樣取計方之儀頭々初へ篤と可申聞候付ては陸軍局之儀も諸事簡易

之仕法相立往々繁雜之流弊無之樣厚致勘辨尙下役へも申論取扱可被申事
一頭々初役人之面々御用之透に　公邊陸軍所開成所其他有名之筋へ罷越學術研究之儀可心掛事
業合等熟候筋は往々外國人傳習之儀可被　仰付儀も可有之事
一生兵初繰練之階級敎授之順序兵書講究振等都て洋律に準し規則精密に相立候樣衆議之上取調可被差出事
諸調練之日を初操練場年中定之儀も申見可被相極事
一遠町的塲取建之儀も申見可被相談事
一大隊司令は騎馬にて可相勤事
一出張候はゝ都て隊に組付候儘終始進退致し自儘に散亂不致樣尤頭々初役人の向も隊中相離れ申間敷儀勿論之事
往來之節は組付之儘途中運動勝手次第之事
右之通
同日御家老より達し
一此度大隊司令士初被　仰付候付以來敎授取立等之儀右御役々職掌にて取計候筈付是迄被　仰付有之候敎授總頭取を初肝煎等の名目は離候筈候事
慶應三卯年三月十七日政府布達
一陸軍奉行並初此度新規被　仰付候御役々諸渡り左之通可相渡事

陸軍奉行並

元大組之通
銃隊頭
撒兵頭

元御徒頭之通
銃隊頭
撒兵頭
差添役

元新御番組頭之通
銃隊
砲隊

元新御番之通

一陸軍奉行並初御役料左之通

陸軍奉行並

五百石以上　金三十両

右以下　金五十両

中隊司令之銃隊頭撒兵頭

五百石以上　金十五両

右以下　金廿五兩

小隊司令之銃隊頭

五百石以上　金十兩

右以下　金十五兩

銃隊頭

撒兵頭　差添役　金五兩

慶應三卯年三月廿八日　政府布達

一此度銃隊御編制に付ては御家中子弟之面々も一際出精修行致させ可申就ては十五歳以上之者共は隊々に組立操練致させ候筈候間向後右年齢に相成候はゝ其段父兄より陸軍方へ相屆可申事

於若山諸役廢止

若山にて諸役廢止　記類發見追記す

軍艦奉行新置

慶應二寅年十二月朔日新置

一　御軍艦奉行

並高四百石

五百石に付御役料　五百石以上御役料金三十兩

同年同月五日

一表御用部屋吟味役にて取扱候諸調もの向後御勝手方にて取扱候筈候間其段同役へ可被相達事

同日御軍事奉行へ御家老申聞

一元御城代同心御弓手同心御留守居同心本町御門同心御天守同心御本丸同心御留守居物頭同心砂丸同心各へ被成御預候間右同心にて左之御門々々へ人數割當御番爲相勤候樣宜被取計候事

右に付他所勤且銃隊へ組込候儀は御用捨之事

本文之通に候へ共小銃火前稽古之儀成丈出精可致樣可被相達事

大手御門	同中御門	岡口御門
同中御門	切手御門	御長屋御門
鶴谷御門	追廻御門	御勘定御門
吹上御門	同大御門	三木町橋御門
不明御門	砂丸御門	同中御門
御天守二の御門	松の丸御門	御本丸御門
御臺所前御門	本町御門	中の口番所

同　日

一　　　　　　　　　　御　用　人

御鷹方御鳥見方并御納戸御番等之儀當分各肝煎候事

同十二月五日

一御船奉行廢止に相成候に付御船手方勤之面々向後御軍艦奉行支配に相成候事

同日御軍事奉行へ
一友ヶ島同心之儀當分各致支配一統若山へ爲引越銃隊執行爲致可申事
同同同
同日
一　御小姓頭取
御召御具足奉行御腰物奉行之勤筋不差支樣取計可申事
御小納戸
御膳番
御膳奉行之勤筋不差支樣取扱可申事
同日
一根來之者幷山家同心之儀當分郡々御代官にて致支配銃隊執行爲致候等候間夫々へ心得させ之儀宜可取計事
同年十二月十五日
一大隊長初御役料左之通候事

大隊長	五百石以上金三十兩	五百石金五十兩
中隊長	五百石以上金十五兩	五百石金廿五兩
小隊長	五百石以上金十兩	五百石金十五兩

同　同　同

一此度御役々廢止に相成候に付ては是迄諸御役々之内助勤致候筋出扶持上り難澁之趣に付右之面々へは御扶持方代り年々金五兩定り之減付にて春暮兩度に被下候筈に候間夫々へ可被相達事

同　同月廿五日

一大隊長御門々々爲致制止平日袋杖爲持候事

同　同月十九日

一大隊中の面々肩書之儀向後左之通相認候筈に候事

何之誰隊
何之間席
何　之　誰

慶應三卯年正月二十五日

一兵卒身分左之通等級相立各給扶持取極候に付此段不洩樣可被相達候事

第一等兵卒　切米八石二人扶持　同二等兵卒　切米七石二人扶持
同三等兵卒　切米六石二人扶持　同四等兵卒　切米五石二人扶持
同五等兵卒　切米四石二人扶持　同六等兵卒　給銀三百目二人扶持
同七等兵卒　給銀參百目一人半扶持　同八等兵卒　給銀二百目一人半扶持
同九等兵卒　給銀百五十目一人半扶持

同三月八日

一京都御屋敷奉行　　大坂御屋敷奉行　　伏見御屋敷奉行
右向後御用人取次支配之事
同四月八日
一御勘定同見習と御目見已上以下之差別相立有之候へ共御役順廢止に相成候に付向後都て御勘定と
相唱可申事
同五月七日
一通官向後儒者助と相唱候事

維新後

職制大改革

明治二巳年二月十五日布令
藩治職制之儀府縣之御制度に基き別紙職表之通御改正之儀　朝廷へ被爲伺濟候付是迄之御役は總
て相止め向後右職表之通御定被遊候旨被　仰出候事
二月十五日
右は御國政大改革を津田又太郎へ御委任昨年十月廿八日天下府藩縣三治之制　朝命も有之付右御
趣意御躰認一新更始自今御自奉は御領知高廿分之一を以て被爲凌付ては御家中一同無役高を被定
文武在職の者へは役高を可賜の旨本日御意書を以被　仰出依て本文の如く令せられたる也無役高

及役高之制亘細は祿制の部に詳なり而して廣く人材登用の方針を取り從來因循姑息の流弊を一洗し門閥格祿に不拘士庶貴賤を論せす少しく才幹ある者は皆其選拔に當り津田又太郎始め數十名本日新たに職表の如く命せらる其人の如きは　當公の記に詳也此他數千上下の士は悉く無役となり農工商自由に營業市在住居亦望みに任せられ實に國初以來未曾有の改革とす之に關する布告發令枚擧に堪へす唯職制に關する分を年月の順序に從ひ逐次爰に掲く

職制

政事府

一國之總裁府にして諸政令此より出つ

議事監察二所を管す

執政　無定員

國君を佐け一國之政令を施し庶務を總括し邦家を治むるを掌る

諸長官各其才能に從ひ其職を授くるを掌る

諸長官の能否を察し考課を設け黜陟賞罰の事を掌る

諸長官の議する所の可否を聽斷するを掌る

參政　無定員

兼公議人

執政を佐け其職務を參謀するを掌る

執政に代り四方に使ひするを掌る
議事所に臨み國内衆庶の建議を聽を掌る
御對面所席並以上を統轄す
府中修繕の事を令するを掌る

史官　無定員

凡布告の書を作り日誌撰述の事を掌る

公用局　凡禮典及交際の事此より出

禮典外接二所を管す

知局事　一人

一局の重職にして時ありて執政より兼職す各知局事皆傚之
凡禮典樂章の事を掌る
凡祭祀の事を掌る
朝令を受け國君及政府へ達し諸局へ頒告するを掌る
諸士の班位を定め及命令布告の事を掌る
四方の事情に通し時勢の變を觀るを掌る
賓客接伴及聘問の事を掌る
儀仗鹵簿の事を掌る但遊覽の時は家知事掌る

判局事　無定員

兼公用人

知局事を佐け局中の庶務を分掌す

兩京及大坂伏見兩邸に交番し　朝命を受け四方の動靜を知り本局へ達するを掌る

國君の朝聘に扈從するを掌る

局中會計の事を掌る

外廷掃除及局中修繕の事を掌る

凡進獻贈答の物品を掌る

書　記　無定員

凡文書の事を掌る各局書記皆倣之

軍務局

凡軍旅の政令此より出つ陸軍海軍演武三所を管す

知局事　一人

陸海軍の制を立て隊長に規則を授くるを掌る

凡兵を出す政府の符節を受け隊長へ令するを掌る

海陸軍の操練を督し將士の勤惰を察し政府へ達し賞罰するを掌る

城郭陣砦營繕の事を掌る

輜重の運輸を總括し各隊に分賦するを掌る
國內及他邦地理城砦等を諳知するを掌る
軍令を刑法民政二局へ布告するを掌る城門及外廷の守衛を令するを掌る

判局事

知局事を佐け軍制練兵營繕輜重兵器等の職を分け各一職を督するを掌る
國內諸門關出入の政令を掌る
城門營繕の事を掌る
局中の會計を掌る

書記

會計局

凡國內金穀出納の事此より出つ
金府穀倉を管す

知局事　一人

各郡田租の收入を納むるを掌る
一年の出入の數を知り其會計を督するを掌る
軍資の金穀を蓄へ出兵に軍務知局事へ授るを掌る

楮弊を増減運用し用度を給するを掌る

判局事

知局事を佐け金穀出納の事凡局中の庶務を分掌す

書　記

刑法局

凡刑罰の律令此より出つ捕亡鞫獄二所を管す

捕亡手一小隊

知局事　一人

朝憲藩律を以て罪の輕重を定むるを掌る

士官の訟獄を聽斷するを掌る

地方官難決訟獄鞫問するを掌る

判局事

知局事を佐け訟獄を聽斷するを掌る

捕亡手を指揮するを掌る

囚徒之簿籍を掌る

行刑の事を掌る

國君の朝聘に扈從するを掌る

書記

民政局

一郡の政令此より出つ

一郡一箇所常備兵二小隊

郷學演武二所を管す

知局事　一人

政府の命を受け一郡の政教を布くを掌る

管内無役の諸士を統轄す

右は大廣間席已下也

管内の戸籍人口及ひ地圖を作るを掌る

管内の田租を收め歳暮に會計知局事へ輸するを掌る

管内の死刑及永禁錮以下輕罪は處決し其狀を政府へ達するを掌る

教刑を以て衆民を糺し爭訟を調和するを掌る

演武所を設け武事を講究し兵農一途の古に復し出軍の時政府の命を受け精兵を軍務知局事へ授くるを掌る

郷射郷飲酒の意を行ひ尊卑長幼の序を正すを掌る

郷學を立て士民の文明を開き職工所を置き農工の業を勸むるを掌る
孝子貞婦の賞典及養老慈幼の事を掌る
管内士民の才能ある者を擧け其屬吏に任し及ひ本藩へ貢するを掌る
水利を考へ開墾し土宜に從ひ產物を開き富庶の基を立つるを掌る
管内の訟獄を聽斷するを掌る
道路橋梁堤坊溝洫修築及社寺營繕を督するを掌る
管内の失火出水の備をなすを掌る
管内の官船官庫を管轄す
年の豐凶を察し田租を收入するを掌る
管内士民の勤惰を察し賞罰するを掌る
訴訟箱を設け四民の寃滯を申へ衆人の情狀を達し務て民苦を問ふを掌る

判局事
知局事を佐け凡局中の庶務を分掌す

書　記

學習館
和漢西洋の學制此より出す
國學漢學洋學秘書寮を管す

知局事　一人
國内人材教育の事を掌る
國學漢洋學秘書寮の四所を管轄し生徒學術優長の者を秘書寮に入しめ其才能を察し政府へ達するを掌る
諸教授の伎倆及勤惰を察し政府に達し黜陟賞罰するを掌る
生徒の考試を掌る
官籍を掌る
寄宿寮を管轄す
館中會計の事を管轄す
判館事
知館事を佐け國内人才教育凡局中の庶務を分掌す
書　記
家知事職
家知事　一人
近習衛士侍醫膳夫女官厩長凡内廷の政令を掌る
系譜及宗室親戚交際の事を掌る
國君に代り　宮廟參拜及祭祀の事を掌る

賓客接伴及聘問の事を掌る

內廷諸士の勤惰を察し政府へ達し黜陟するを掌る

國君日用所奉の品物を各其官に分するを掌る

家判事

家知事を佐け凡內廷の庶務を分掌す

書記

職表

政事府	議事所	監察所	公用局	禮典所	外接所	軍務局	陸軍所	海軍所	演武所	會計局	金府	穀倉
執政							一等陸軍將	一等海軍將				
參政 兼公儀人			知局事			知局事	二等陸軍將	二等海軍將		知局事		
							三等陸軍將	三等海軍將				
		監察	判局事 兼公用人			判局事	大隊長			判局事		
							副長 教頭		教授			
史官							小隊長 砲隊長					
		書記	書記			書記			助教	書記		
童徒			童徒			童徒				童徒		

刑法局	知局事	判局事		書記	童徒
捕亡所				捕亡手	
鞫獄所					
民政局	知局事	判局事		書記	童徒
鄕學					
演武所					
學習館	知局事	判館事		書記	童徒
國學所		教授	助教		
漢學所		教授	助教		
洋學所		教授	助教		
秘書寮					

家知事職	家知事	家判事	書記	童徒
		近習	錠口番	
		衛士		
		侍醫		
		女官		

一明治二巳年二月十五日執政より布達

諸役所左之通唱替に相成候事

御用部屋を　政事府

公　用　方を　　公用局
御軍事方を　　軍務局
評　定　所を　　會計局
元町奉行所を　　刑法局
傳法產物方を　　民政局
學　習　館　　是迄之通
御小姓方御廣敷を　　家知事所
御　目　付　方を　　監察所

一明治二巳年二月十五日左之通諸向へ可相達旨公用知局事へ執政申聞之
此度之被　仰出に付無役之向は所務相減難澁可致に付向後年頭八朔御禮申上候外は御使御名代を
初年中諸勤之儀は都て御用捨之事

一同年二月十八日執政より布達
今般職制御改正に付御役印之綬色合左之通相成候筈候事
薄紅　執政　　黃　　參政
白茶　諸局知局事　學習館知事

一同年二月廿八日執政より達
軍務知局事へ

陸軍職制並御役料別表且別帳之通御定可被遊旨被　仰出候事

二月廿八日

御役料別帳は祿制之部に掲く但同年十二月十五日に辨官へ當藩文職名の儀は先達て粗届出候へ共武職の分は假に相設候職に付猶取調中延引の處今般職表の通相定候旨之届書あり而して其職表今存せす左記職制を再ひ改正の事なるや詳ならす

陸軍職制

	陸軍			
	砲兵寮	騎兵寮	歩兵寮	工兵寮
第一級				
第二級				
第三級	寮長	寮長	寮長	寮長
第四級	副寮長	副寮長	副寮長	副寮長
第五級	隊長	隊長	隊長	隊長
第六級	第一等副隊長	第一等副隊長	第一等副隊長	第一等副隊長
第七級	第二等副隊長	第二等副隊長	第二等副隊長	第二等副隊長
第八級	上軍監 指揮長官	上軍監 指揮長官	上軍監 指揮長官	指揮長官
第九級	副指揮長官	副指揮長官	副指揮長官	副指揮長官
第十級	指揮官	指揮官	中軍監 指揮官	指揮官
第十一級	副指揮官	副指揮官 旗手	副指揮官 旗手	副指揮官
第十二級	下軍監 下長官	下軍監 下長官	下軍監 下長官 副旗手	下軍監 下長官
第十三級	副下長官 第一等雑務官 第一等馬醫	副下長官 吹角長 第一等雑務官 第一等馬醫	總嚮導 副下長官 吹角長 第一等雑務官	副下長官 第一等雑務官
第十四級	第二等雑務官 第二等馬醫 吹角伍長 砲兵伍長 吹角子 上等砲兵 下等砲兵	第二等雑務官 第二等馬醫 吹角伍長 騎兵伍長 吹角手 上等騎兵 下等騎兵	第二等雑務官 吹角伍長 歩兵伍長 吹角手 上等歩兵 下等歩兵	第二等雑務官 吹角伍長 工兵伍長 吹角手 上等工兵 下等工兵
第十五級	雑卒	雑卒	雑卒	雑卒

一明治二巳年三月廿日執政より
於中之間申渡候筋向後於五友之間御廊下申渡候筈候事

一同年四月七日
中之口奥之口元伊賀番所邊は衞士撒兵隊の者共御番致し候事

一同年六月晦日執政より達
都て願濟幷配下當分勤等申渡の節是迄書付相渡候即日申渡候へ共諸局都合振も有之趣に付以來翌日申渡候筈候事
但即日申渡候筋は其節々別段可申聞事

一同年十月三日公用局より
向後家督幷跡目且被　召出候者右被　仰出候即日年齡出生年月日短冊に相認公用局へ可差出事
無役の面々は公用局へ差出に不及名草民政局へ右短冊二枚差出可申事

一明治二巳年十月五日執政より達
無席にて無役高被下有之面々向後已下役並と相心得可申事

一同年十一月十六日職制改正被　仰出
本年六月版籍御奉還被　聞召和歌山縣知事御拜任津田又太郎は和歌山縣大參事拜命付ては執政初職制改正被　仰出迄都て勤向從前之通可心得旨七月廿二日布達ありし處本日に及ひ左之通改正の儀政事廳より布告す

職制改正
被　仰出

一政事府向後政事廳と可稱旨被　仰出候事
一今般諸參事被任候付ては執政參政知局事の職名被廢候事
一是迄の格式席順幷羽織紐制等都て被廢向後左之通可稱旨被　仰出候事
御對面所席已下虎之間席並迄
右士族と
蘇鐵之間席已下中之間席迄
右士族並と
以下役之上より兵卒無役迄
右扶持人と
此際三浦權五郎初執政諸知局事等大權參事少參事宣下あり當時の世譜に詳なり又扶持人も追て総て士族となりたり
一士族の面々座順の儀は祿高を以て上座と相定同祿の向は年齡の老少にて順序を相立候樣被　仰出候事
一海士那賀兩郡之儀は向後名草民政局へ合併參事へ申聞之
一明治二巳年十一月廿四日政事廳より達
口六郡へ出張の參事は一季に一度紀勢總郡は春秋に一度つゝ兼て期限を定め此表へ同時に相會し互に御用談合致し候樣可取計事

本文の通に付ては紀勢總郡へ出張之參事來年頭に此表へ集會之等候間此節より可申合置事

一明治二巳年十二月二日太政官より左之通被　仰出

府
縣

今般士族之面々別紙之通被　仰付其府縣管内に有之分は總て可爲貫屬旨被　仰出候間此段相達候事

十二月　　太政官

別紙は府藩縣一途の政令に歸し更に知藩事被任隨て家祿之制被爲定藩々に於ても維新之御政體に基き追々改正可致就ては中下大夫以下の稱被廢都て士族及卒と稱し祿制被相定爾後各其地方官に於て可爲貫屬祿制は二十一等に分ち士族は十八等に止むるの旨祿制割合等也委細は同年の世譜に載す

一明治二巳年十二月三日左之通於東京辨官へ伺之處上ヶ紙之通差圖有之

和歌山之儀は管内の一方に偏り官吏の往返不便利に有之且御城内にては自然從來鄭重之風習難相除候間便利の塲所へ出張所取建御用取扱候樣仕度此段奉伺候以上

上ヶ紙　無稅之地に候へは不苦事

右に付明治三年年七月より砂の丸内へ政事廳戍營公用局並に大參事役宅初第三大隊屯所等建設準備をなしたり

一明治二巳年十二月三日政事廳より達

士族初隱居家督又は跡目之節別段身柄不被　仰出筋は其儘親々の身柄と相心得可申事

一明治二巳年十二月十日政事廳より達

此度兵制御變革に付兵卒無役の者都て名草民政局支配被　仰出候事

明治三午年正月九日兵制改革兵賦編成の事あり巨細兵制の部に詳なり

一明治三午年正月六日太政官より被　仰出

府藩縣公廨自今總て何府何藩何縣廳と可稱事

但支配地下方より差出候諸願伺届等は某御役所と認不苦事

一明治三午年三月十七日

先比同官同姓之輩文通等之節官姓認振之儀書取を以　朝廷へ伺候處前に拜任之向は前之字相加へ同日拜任之向は東西南北の文字を加へ區別可相立旨御指圖之處職柄に寄り數員有之兎角區別明亮に難相立候付前に拜任之一員丈は官名相用後に拜任之向は幾員にても都て官名の下へ實名相用させ候樣可仕哉と辨官へ伺書差出候處右は改て一と通りの伺書に仕組差出候樣差圖に付則左之通仕組伺書差出候事

同官同姓之輩文通等之節區別難相定候間幾員にても彼是區別明亮に相成候樣仕度右は如何相認候て宜御座候哉此段奉伺候以上

右之通伺書差出候處額田官掌落手直に左之通附札を以答有之候尤實名認振之儀猶相伺候處官名之下へ相認候樣口達を以差圖相成候事

三月十七日

附札　實名可相認事

一明治三午年四月二日

大少參事進退之儀於東京左之通封物を以辨官へ差出す

當藩大小參事依都合轉任之儀奉願候處重立候職員容易に依都合進退致候段如何之次第に候哉都合明細相認差出候樣　御沙汰之趣奉畏候右は巨細別紙に相認奉言上候條藩情御洞察猶宜　御沙汰可被成下樣御執奏奉願候以上

山本少參事

右者昨年藩政改革之砌より別て出精相勤罷在候處今般東京藩邸在勤申付候就ては其職任輕微に御座候ては諸事勤向に於ても大に不都合之品不少候に付何卒出格之御沙汰を以權大參事轉任御座候樣仕度奉願候

加地權大參事

右は昨年藩政改革之節民政局知事申付置候者に御座候尤當藩各郡民政局知事職務之儀は從來參政之格合を以爲相勤罷在候處昨年十一月諸參事　宣下可被　仰付之御旨趣に付夫々人撰之上奏聞可仕段被　仰出候節各郡知事共之儀は都て少參事　宣下御座候樣相願候儀同人儀も同樣可奉願心得に御座候處其比公議人交代爲致候都合有之則同人公議人相勤候樣申付東京へ爲相詰候公儀人之儀は兼て　御沙汰之品も有之正權大參事にて可相勤の御旨に付同人儀權大參

事　宣下御座候樣奉願候儀に御座候然處昨冬集議院閉院被　仰出公儀人歸藩相成候に付同人儀舊職に爲復度就ては各郡民政局一等同樣之格合に不相成ては大に不體裁之儀にも御座候間改て少參事　宣下御座候樣仕度奉願候

一明治四未四月四日

藩士出仕被　仰付病氣等にて免職之者藩職に任用之品左之通於江戸公用人を以辨官傳達所へ伺書差出候處上ヶ紙之通差圖有之候事

當藩士族出仕被　仰付御座候內病氣等にて辭退申上依願免職被　仰付歸藩仕候て追て病氣快復等仕候へは時宜に寄藩職被　仰付度奉願候ても不苦候哉兼て伺置候樣和歌山藩より申越候付此段奉伺候已上

上ヶ紙　伺之通

一明治三午年五月十二日政事廳より達

拜任御書付へは都て御藩印居ゑ候等に付當時在職之面々右御印居り無之御書付は此節一旦差出可申事

一依御咎免官之向は本官拜命御書付返上可致事

一府藩縣名印鑑を製すへき旨慶應四辰年五月九日

朝廷より被　仰出に付伺之處紀伊藩印と可致旨同年七月十日差圖ありたる品同年の世譜にあり

一明治三午年二月十三日東京辨官傳達所に於て印影を被渡藩印は京都留守官に於て可被渡印影引合

受取候樣且藩印は判任弁藩士家督及且府藩縣重立候應接等總て重大之事件に而已相用驛路人馬繼立等には決て不相用其外小事には不相用樣との達あり同年之世譜に詳なり

一明治三午年二月晦日

一是迄無足之筋諸願は親々より相願候得共向後無足にても御役相勤候筋は子弟孫厄介たりとも都て當主同樣當人より相願可申事

同年六月廿二日

一參事初諸官人身分居宅等の儀は地方官支配之事

一地方官より呼出等の節參事以上は重立候家來差出右以下は當人罷出候事

一勤に付ては長官支配之事

明治三午年八月九日公用局より

一御用召の節向後名代は不相成若當人病氣に候はゝ其段申出差懸り御用にて名代差出させ候節は臨時に御沙汰可有之於諸局も拜任且重き御用召は同樣可取計事

一明治三午年七月十日政事廳より布達

諸官人身分地方官支配に相成候に付ては左の趣可相心得事

一諸願達地方官へ差出の儀一應前以其局々長官へ申達料簡可承事

一拜命又は諸願濟之節に其局々長官へ可申届事

一明治三午年七月廿七日名草民政局參事より布告

此度諸官人身分地方官支配に相成候付ては官人幷無役の向共諸願達之儀向後諸士屋敷住は肝煎市在住は市鄕長へ差出夫々より民政局へ取次之筈候事

但參事以上は重立候家來差出可申筈

一諸郡民政局へ引越の面々は參事以上は諸願達鄕郡參事より傳達之筈候事

一民政局にて願相濟候品は夫々地方之肝煎又は市鄕長町役人庄屋へも可申屆事

一諸屆之儀は是迄の通民政局へ直に相屆候事

但市在住居の向は其趣市鄕長等へも可申屆事

一任官且出役等を初都て相替り候品は其地方の肝煎又は市鄕長へ可申屆事

一諸願達之儀は是迄の通美濃紙半切に相認外に扣一通り半紙竪帳に相認可差出事

一諸布告の儀は是迄の通地方伍組にて相達候事

一右之件に付同年九月十二日名卿民政局參事より左之通政事廳へ伺濟之旨諸局へ申合す

但文格之儀は追て政事廳より差圖有之との旨也

諸官人居宅身分地方官支配被　仰出候品に付先比御達申上候箇條之内諸屆の儀は舊例により民政局へ直屆に致し御座候へ共右は其居所支配へ爲相屆夫より民政局へ爲達出不申ては地方統轄之順序相立兼申候併町役村役人共の儀は未躰裁相立兼候付當分之處屋敷地は諸士肝煎市在住は市鄕長へ爲相屆民政局直屆の儀は官人無役共向後爲相止可申と奉存候依て文格別紙草案相添御談申上候事

一明治三午年八月三日政事廳より達

此度政事廳内へ秘書寮を被置候事

一同年同月十九日同斷

士族初無役之面々勝手暮しの爲醫業幷農工商の業可爲勝手旨先達て被　仰出有之付ては都合により官人へ召抱られ勤仕致し候儀も向後可爲勝手事

但召抱又は暇出之節双方より地方官へ可屆出事

一同年九月十三日太政官より被　仰出

大中小藩とも

大　屬	從七位	權大屬　正八位
少　屬	從八位	權小屬　正九位
史生 廳掌	從九位	

右相當之事

但從來公用人役場之事務正權大屬にて可取扱事

庚午九月　　太政官

一　　府　縣

自今廳掌被置候事

但從九位相當之事

庚午九月　　太政官

一明治三午年閏十月十三日戍兵都督より達

官船所
水夫共

右被廢候事

元官船所を
輜重隊常備船所

右之通相唱輜重隊支配之事

一同年同月十七日名草民政局參事より左之通政事廳へ伺出之處朱書「　」之通指令

進　達　　名草參事

諸御用筋別て當日呼出し申渡之品等二時過之御沙汰に相成候ては自行日分の間に合兼多分夜に入候様相成取計向自然倉卒に成行御用辨不宜且夜に入候ては局費も不少候間向後差掛候御用之外は屹度朝第七時より晝二時限りに御沙汰有之候様致度諸局往復も同様申合候様致度此段御一定被下度存候事

庚午閏十月十七日

「書面得其意候事」

一同年同月廿日名草民政局參事より布告

郷市長役所向後本局に致合併候事

本文に付是迄之町役所は令廢止組々郷役所は出張役所と相心得可申事

一明治三年年二月十一日政事廳より達

左之株々是迄政事廳にて申渡候へ共以來支配々々にて申渡候筈候事

本文之通候へとも相當從八位以上之御役相勤居候面々は是迄之通候事

隱居家督　跡　目　屋敷拜領

養　子　二男總領等

一明治四未年五月五日戍營都督より諸局へ申合

戍營都督幷監軍及都督傳令使等は向後朝第六時出營第十二時迄營中庶務取扱同時より兵學寮講釋幷に操練實地演習的打督責等總て營外之事務専に致し候筈に付十二時後は諸掛合等難相成候間至急要件實に不得止品の外は翌日へ相延し候筈

一明治四未年六月藩廳より達

一向後士族並を士族と扶持人幷下級扶持人を卒と唱可申事

本文之通候へとも是迄之士族並は元士族並と下級扶持人は元下級扶持人之肩書致し諸書付姓名認振左之通可相心得候事

士　族　苗　字　名

元士族並士族　苗　字　名

卒	苗字名
元下級扶持卒	苗字名

一同年七月廿一日藩廳より布達

今般藩を被廢縣を被置候に付ては向後和歌山藩を和歌山縣と改稱候事

件之通に付是迄之藩廳は縣廳と相唱へ候事

家令所

明治二巳年六月版籍御奉還被　聞食和歌山藩知事御拜任隨て官制改正都て藩治と御家政と區別家知事初を廢し家令初を被置御家政向は家令所に於て取扱ひ藩治に混同すへからさる事となれり依て爾後御家政に係る分は此部に列叙す

一明治二巳年九月執政より達

此度家令家扶家從被　仰付候付家知事家判事は廢止相成候事

右は本年六月十七日版籍御奉還和歌山藩知事御拜任藩治に係る職員は太政官より大少參事に任命之塲合に至りし故なり

一朝廷よりは明治三午年九月十日に至り華族家令職員は家令一人家扶家從家丁宜に從ふと被定之旨被　仰出たり

一同　　日

家令所御役料

一家令初御役料左之通候事

三百俵　家令　二百五十俵　家扶
八十俵　家従　八十俵　近習長

一錠口番御役料向後十五俵相渡筈候事
一同月執政より家令へ達
第一大隊之儀家令支配は離れ軍務知局事支配相成候事
一同年十二月十七日尙又政事廳より家令へ心得として左之通り達す
第一大隊
知藩事様護衞是迄之通相心得可申事
一御城御玄關幷元中奥御番所へも御番相勤可申事
一明治二巳年十一月家令所へ届出
奥之口御番所哨兵相勤居候處今日より工兵御番爲致候旨小隊長申届候事
一同年同月廿八日政事廳より家令へ達す
家令所陸尺
右向後昇卒と相唱候事
昇卒
家令所　厩卒
右役料は米八俵つゝ相渡候筈候事

明治三午年三月廿九日

一侍醫席順御錠口内にては左之通申極候事

竹内玄齢　　山本泰庵　　郭百輔

桃井元俊　　平松元純　　嶋川玄丈

竹田玄隣

一明治三午年四月

家令所官員幷御役料向後左之通御改相成候事

家令	御役料	三百俵	同並	同	二百五十俵
家扶	同	百俵	同並		八十俵
家従	同	三十五俵	同並	同	貳十俵
書記	同	拾八俵 金十二両	従事	同	十五俵
一等卒	同	十二俵	二等卒	同	九俵
三等卒	同	六俵			

一明治三午年四月

時觸は子供相勤

家令衆　　大奥　　家従御番所　　納戸方

庖厨方　　會計方　　公務方　　御玄關

右之通朝六時より夜五時迄觸込候事
本文之外に御玄關は　朝六二寸五分 夕七二寸五分 觸込
一本文時觸從事二等卒之内にて觸候由尙又極直候事
一明治三午年五月十日
家令所書記川口儀八郎家事不締に付謹愼被　仰付候處近比布告之趣にては家令申込には及間敷と申見候得共爲念刑法局へ問合候處申込に不及旨申來候事
一同年五月十七日
殿中火之元廻り從事にて相勤候筈候事
但掛り役有之筋は相勤候に不及事
一同年五月左之通於東京辨官へ伺書差出す
但指令之有無筆記見えす
當藩知事家令家扶家從位階相當無御座候ては諸制度に差支候間大寶令に基き左之通相心得可申哉此段可奉伺旨和歌山表より申越候間宜御差圖被成下候樣仕度奉存候以上
午五月
家令　相當從七位　家扶　同　從八位
家從　同　從九位
一同年六月廿四日

家令所勤人輕重に不拘身分支配之儀政事廳へ伺之處地方官支配之旨答有之候事

一同年七月八日左之通達

舁卒厩卒一統家令所二等卒申付候事

一家令所徒向後家令所三等卒と相心得可申事

一同年九月四日

家扶並以上御用召は以來　御直に被　仰含候等伺相濟候事

但名代濟は是迄之通家令申渡候事

一同年八月

家令所第一等卒初卒類身分之儀は會計局にて差配致し候等候事

一同年同月

家令所内勤人は元來御人少にて御間を詰居候事に付病氣引等多御差支相成候ては奉恐入候事に付以來五十日引籠候はゝ掛り役有之向は右掛り役　御免相願七十日餘にも相成候はゝ御免等相願候等中極御役所内へ申含候事

一同年十月左之通戍兵都督より伺出に付　思召奉伺候處　思召不被爲在候付其段戍兵へ及答候事

戍兵都督

西丸御役宅御警衛之儀元第一大隊より相勤させ御座候處此度諸隊御編制に付都合之品御座候間是迄御警衛之分引揚け劔槍教授助教にて御警衛爲仕度奉存候依て一應相伺候事

御他行之節幷御門々哨兵之儀は是迄之通藩廳常備兵にて相勤させ申度奉存候事
一同年閏十月十七日
向後產穢忌中引等御免之品は其節々御用繁薄之御模樣にて取扱可然と申極候事
田中傳一郎去る十四日より產穢罷在今日にて日數半相立候處此節御用薄に付申　御免之不及取計已後本文之通申極候旨なり
一同年同月廿日左之通會計より申出候付御納戶庖厨へ心得相達す
一等卒より掛り役相勤候者へ之被下は從事より掛り役相勤候筋同樣當午十月分より局々淩き相成候事
一明治四未年六月十一日左之通申渡す
一等家丁　二等家丁　三等家丁
今般人員御減に付ては一統同勤之事
一今般三等家丁格別人員御減し相成候付以來御用多等にて差支候節は局々申合互に御都合之精々勠力取計可申事
但格段御用多等にて御都合難取計節は其品申出之上當分雇幷同雇共取計候儀は不苦事
同年同月十五日
一旅費定
就御用兩京大坂へ罷越候輩往來分幷滯在中渡金且御國內出立之輩旅費旅籠代雜用被下共向後左

旅費定渡金

之通相極候事

渡　金

百二十五兩　東京　家令　廿四兩二步　西京　同並

十七兩一步　大坂

滯留中一日一人金一步つヽ被下

七十四兩一步　東京　家扶　十六兩　西京　同並

十一兩二步　大坂

小書同斷

五十七兩　東京　家從　十一兩　西京

七兩三步　大坂

小書同斷

三十四兩　東京　同並　六兩二步　西京

四兩三步　大坂

小書同斷

二十三兩　東京　一等家丁

四兩一步　西京　二等家丁

三　兩　大坂　三等家丁

小書同斷

一三府之外は十里一宿の里數割を以て相渡候事

御國内出在之輩渡物定

一家令家扶之儀は十里内は旅費旅籠代雜用共被下共無之事

一家從已下三等卒に至る迄旅籠代銀左之通被下候事

十五匁	一食代
四十五匁	一宿代

一五里外へ日歸に罷越候はゝ支度一度被下之五里内は被下無之腰辨當可致用意事

但五十丁一里之事

一五里外へ出在致し候はゝ途中雜用銀左之通被下候事

但前同斷

七十五匁	家從同並	五十匁	一等家丁
三十匁	二等家丁	二十匁	三等家丁

但五里以上は里數割を以増銀被下候事

一十里外へ罷越候輩へは前書渡金之割を以渡金被下候事

一十里内へ御供にて罷在候節は御賄相成候に付雜用被下等無之外に罷越候者も同斷之事

一明治四未年七月四日

家令初等級家令所にては左之通御定相成候事

上等官	家令同並	従前之重役に准す
中等官	家扶同並	従前之頭役に准す
下等官	家従同並	従前之平士に准す
無級	一等家丁より三等家丁迄	従前之已下役に准す

但無級たり共御用之都合にて従前之通

御目通り之御場所へ罷出候儀は御用捨相成候事

一家扶初末々迄身分に付諸願書等差出候節前以伺出且相達之儀は従前之通にて其職長より御家令へ相達挨拶済出願等被致候様諸届之儀も事柄により前以同様可申出且申出候様

一明治四未年十月

一家令所にて士族御召仕之件

家扶中村與一郎士族廣人總領父此度隠居相願與一郎家督相續之處東京御供中に付名代を以て相濟付ては其儘家令所にて御召仕に候はゝ談達可取計旨縣廳より紹介に付伺之上其儘御召仕之儀該廳へ談達取扱相濟候事

右に付向後右體之向其儘御召仕に成候はゝ前以縣廳へ談達取計而して家督相續可申付との事

南紀德川史卷之七十九

御臺所頭職掌解説參照

臣　堀内信　編

職制附錄一

南龍院樣へ獻上御料理獻立

此書は勢州安藝郡御薗村宮崎以德家藏之舊記に據る

龍祖勢州御放鷹之時以德の祖先宮崎加兵衛重利（始加太郎と稱す後隱居慈久）方へ御立寄あり則ち御料理を獻進す加兵衛拜謁以來地士と可唱旨を被命後白子領山廻り役となり御切米八石二人扶持を賜ふ子孫襲祿勢州御鳥見也舊昔獻膳の風采一考に足るべきを以て爰に附記す

御獻立

一御七五三　一御銚子　一御松肴

御本膳

一御四牛　鯛　一御削物　一御汁　串蚫　豆腐　大根　長芋　大まめ　一御膾　鮎　蓼　木耳　栗　葉せうか　柚の葉

一御煮物　花鳥賊　水前寺　銀杏　一御熨斗捫　御食

御二膳

一御貝燒　一御和物　大角豆　一御杉燒　鯛　くわへ

一御汁　鱸　柚　一御車海老　一御疊物　さくら

御三膳

一御指竅　鯛　鰹　鱸　皆敷海松　煎酒　わさび　青酢

一御蒸鯛　葛　せうか　御汁　鴫　三葉　茄子　午房　一御色付　きす

御向詰　鯛　御冷汁　ゑごゝ　はり栗　柚葉

御引而

一御香の物　品々　一御筍羹　竹子　片鮑　煎海鼠　山の芋　せんまい　一御焼鮎　青酢

一御太羮　鮑　一御煎鳥　青鷺　松葉　一御鮨　鮎　蓼

一御梅麩

御吸物　ひれ　青山椒

御肴

一御水貝　小梅　一御粕漬　鱁　一御壺入　榮螺

一御蛸　せうか酢　一御うるか　花かつた

御茶菓子　寒の粉　砂糖　大豆の粉　色付いか

御菓子

一御瀑　一御枇杷　一御花興

一御羊羹　一御枝柿

焼物　たい　掛汁　せうか　海老　押割　御酒

ふくさ御吸物　嶋ます 吸口山椒　御肴　猪口　いか 柚　御酒
すまし御吸物　たまこ わ柚　御肴
重引　赤貝 蓮根　くしこ
御酒　ふくさ御吸物　鮓 吸口山椒　御肴　手塩皿　まな鰹
御酒　すまし御吸物　あわゆき 吸口　御肴
臺引　雉子　ふきのとう　花しほ
御酒　いり塩御吸物　かき 吸口　こせう　御肴
水物
御菓子　やうかん　まんちう　楊枝付　御茶
後段
蕎麥　花かつほ あまのり　ふくさ御吸物　豆腐　御酒　御肴　魚酢
千秋萬歲樂

紀伊中納言様御參向御獻立清書　貞享二丑五月廿二日

清溪公貞享二年五月御歸國之節同月廿日熱田より御渡海同日松阪御着城也亦宮崎加兵衛方へ被爲成しや同しく以德家に藏す

御長熨斗
御本膳

御膾　鯛　しそ　くり　　　御汁　大根　茄子
　　せうか　柚子　　　　　　　くずし

御香の物

御羹物　蚫　　　　　　　　御食
　　　木くらけ

御二膳　・

御杉焼　鯛　くわへ　　　　御疊物　さくら　　　御汁　鯛　青さんせう
　　　さんせう

「張紙」
御海老　久ホ、
　　　「張紙の下水和さあり」

御三膳

御差窮　鯛　　　　　　　　御汁　千葉　　　　　いり酒
　　　鰹　　　　　　　　　　　　　　　　　　　からし酢

「張紙」
御　鮨　「張紙の下御煎鳥さあり」

御向詰　小鯛

御引物

御筍羹　煎海鼠　串蚫　　　御焼鮎
　　　竹子　梅干

「張紙」
御蒲鉾　「張紙の下御鮨さあり」

御吸物　ひれ

御　肴

水貝　糟漬魬　蛸　壺入栄螺　うるか

御はさみ肴　品々

御茶菓子　寒粉 大豆粉　水くり さゝう

御菓子

御枇杷　御羊羹　御枝柿

御臺所規定

此記は御臺所頭山崎幾左衛門永年勤務中經歴處理の巨細を筆記したる覺書也局中の公文には非れとも現時の定制例格頗る考察に足るへし記法整頓を缺き煩雜視易からさるの感あるは隨て處し隨て記するの謂なるへし原書に索引の爲め見出しなるものを粘付す今之を左に目次す

目次

御乳支度
御膳具修補
にしめ物其外
御酒類
氷川祭禮道明寺
被進大目盡し
山王祭禮道明寺
粉な類証文
焼饅頭
御能之節
御膳御極
御肴類
生蠟燭
菓子直段
御本丸炎上に付獻上物
味噌目かた
切鱠直段

菊花
松花
御膳青物
御鉢あたゝめたんす
巻松風目かた
御獻上活鯛生鯛
茶るい
蒸籠
蠟燭
枝豆山椒
御内々より御獻上
御獻上御定式
貝盡し居臺
御獻立盥肴直段
御能に付赤飯等初
行水
御膳かつぶし

御銚子研直し
鯛居臺
ゆば類証文
厘引き達し
御菓子
銘酒入徳り箱
唐かね鍋
玄猪人數
砂糖
のしめ着用日
山もゝ御獻上
御膳米白わり
御進物肴寸法
御香物るい 御味そ元 證文
御獻上御樽等延引に付
大折
菓子

被進重詰め
猫足膳ひ
御肴るい
諸色證文
被進肴かご
粕漬桶
御箸るい
里芋
御酒被下
青物乾物
油證文
琉球人參上
青物直段
紙類
御膳さる
御乳持支度
日々肴

海苔直段　　門松　　被遣交肴　　御菓子寸法
箱寸法　　仕出し　　御膳硯蓋物　　砂糖曲物
御留菓子　　備へ餅　　障子証文　　すし

御臺所諸極上

　御定金極

未正月十一日御臺所へ御定金左之通極候事

江戸御在 一金三千百三十一両一歩定金

内

五百七十三両三歩二朱増

十三割
　二百四十両三歩　正月
　二百四十両三歩二朱つゝ　二月三月
　二百四十両三歩二朱つゝ　三月より十二月迄

十四割
　二百二十三両一歩一朱　正月
　二百二十三両二歩三朱つゝ　二月三月
　二百二十三両二歩三朱つゝ　三月より十二月迄　閏月とも

江戸御留守方 一金七百四十四両二歩二朱定金

内

三百六十八両二歩増

十一割
- 百五十八両一歩二朱　正月
- 百五十八両二歩二朱つゝ　二月三月
- 百五十八両二歩二朱つゝ　四月より十二月迄

十二割
- 百四十五両二歩　正月
- 百四十五両一歩二朱つゝ　二月三月
- 百四十五両一歩二朱つゝ　四月より十二月迄　閏月とも

右之通江戸表御定金之事寫し

松露目方

一一升五合	百六十五匁	一一升	百十匁
一五合	五十五匁	一七合	七十七匁
一九合	九十九匁	一八合	八十八匁
一六合	六十六匁	一四合	四十四匁
一三合	三十三匁	一二合	二十二匁

辨當

一辨當諸士分　外一割七分三厘 以上渡米二五　はす 半ぺん 椎茸 香物

一以下役地紙　外一割二歩 渡米二五　はす こんにやく 人じん 香物

黒辨當
一伊賀坊主同心　渡米二　燒味噌 漬返し

赤辨當
一御駕籠御小人　渡米二　鹽漬香物

渡り六尺向
一御中間　握り飯

天保十二年丑十二月十八日尾州樣へ被爲入候節十五日御登城之節も右同しらべすじ

一以下役　三十三人
内十八人減し
〆二十三人
内
御徒目付　二人　御駕籠頭　一人　御徒押　九人
御徒　七人　同常御供　四人

一伊賀以下末々二百三十六人
内十七人減し
〆二百十九人
減し人
御徒目付　二人　御徒押　二人　常御供御徒　二人
御徒　四人　伊賀　一人　奥坊主　一人
御小人目付　一人　御小道具之者二人　御小人　二人

御使之者　　三人　　御厩方　　九人
都合二十七人相減し
一御豫參御供廻り 卯六月十二日芝
是迄一石八斗八升七合五勺　此節全七斗五升に相立以來共
差引　一石一斗三升七合五勺　減し
一同松眞木
二百三十本又は二百十本之處　此度より百本つゝに相立以來共
差引　百三十本相減し
一西山御參詣又は　御登　城之節
諸士分五十五人之處　此度より三人二人に相立以來共
差引　三人相減し
一以下役初伊賀以下末々
二百九十九人之處　此度より百四拾人に相立以來共
右之通出張之節是に順し相減し辰四月飯方岩橋より書付出之
眞木證文　焚方
一米一斗に　夏五把七歩 冬八把 三月より九月迄　但大材一本は一把の事
一熱湯　一荷　夏四本 冬七本　一同手桶　一荷　夏二本半 冬三本半

一立湯　一荷　夏二本半 冬三本半　一同手桶　一荷　夏一本八分 冬二本半

一煉湯　一荷　夏八本半 冬十本　一蒸物　一斗に　夏十本 冬十三本

一味噌　一本に　夏二十五本 冬三十五本　但四斗樽之事

一小豆　一升に　一把六分　一風呂湯　八把

辨當一人前大樣積り

一銀六分九厘四毛三糸　諸士分

内

二分三厘　次上々白米二合五勺 此玄米二合九勺三才　四分五厘　上にしめ香物共　但香物四厘五毛位漬返し

一厘四毛三糸　眞木代　但次上々白は一割七分三厘出方は外一割二歩上白八歩次上々は御供廻り支度表御用部屋行事

一銀四歩五厘四毛三糸以下役

内

二分二厘　渡し米二合五勺 此玄米二合八勺　二分二厘　にしめ、香物共 漬返し

一厘四毛三糸　眞木代　但御達下り渡し米御供廻表御用部屋行事

一銀二分八厘四毛三糸　伊賀坊主同心 御小人目付

一分八厘　渡し米二合 此玄米二合二勺四才　九厘　燒味噌香物共 壚漬之事

一厘四毛三糸　眞木代

一銀一分九厘八毛八糸　御小人 御中間共

一一分八厘　渡し米二合 此玄米二合二勺四才　四毛五糸　香物塩漬

一厘四毛三糸　眞木代

右寅二月

和米は上白之事御臺所内御使之者日々焚渡し不時御勘定所廻し

當時米相場石に八拾目三分かへと見

眞木百把に付八匁九分三厘かへ

右にて割返し候事

辨當取かへ一ヶ年高

一三十一　七匁二分七厘　諸士分　代二百二十五匁三分七厘

一百五　四匁四分六厘　地紙　代四百六十八匁三分

一百七十二　二匁四分二厘　黒辨當　代四百十六匁二分四厘

一九百五十五　六分三厘　赤辨當　代六百一匁六分五厘

〆一貫七百十一匁五分六厘

取かへ覺

丑正月　同四月　同六月　同七月　同八月　同十月　同十二月　寅正月　同二月　同三月

右之通辨當損し取かへすし後日之覺

辨當證文

一諸士分　一つ　七匁二分七厘　　一地紙　一つ　四匁四分六厘

一黒辨當　一つ　二匁四分二厘　　一赤辨當　一つ　六分六厘

〆

辰二月分
一湯漬百石一斗三升四合

内

六拾九石二斗八升二合　　御買上ヶ筋

此眞木　百把八匁八分かへ

五千五百四拾二把五分六厘　代四百八拾七匁七分四厘

此壚漬　拾本一匁七分厘四かへ

八百六十六本二厘五毛　代百五拾目六分八厘

三拾石八斗五升二合　焚渡し筋

此眞木　百把八匁八分かへ

貳千四百六拾八把一分六厘　代二百拾七匁一分九厘

此壚漬　拾本一匁七分四厘かへ

三百八拾五本六分五厘　代六十七匁一分

小以

右之通小間使組頭より御勘定所掛へ出す

三月十三日

按に或る司農府勤務せし者の言に元來殿中勤之者朝六つ時より出務と夕七つ時過迄勤務幷夜四つ時過迄居殘り勤務之者へは御臺所より辨當を被下の成規なる處斯ては薪炊事の費用不尠寧正米にて被下たる方經費節減に可及と奥倉安常建議により天保五午年以來辨當渡しを廢し正米渡に取計たり然るに飯にては余分に食する事不能とも正米にては受方にては至極の便利を得爲に種々の口實に託し請求を主張大に濫出の弊を生し却て經費增加に至る依て復舊改革を行はんとせしも終に行はれさりしと語れり正米渡に成し以來も尙舊稱により湯漬とは唱へ來れる也と云

一右に付殿中諸局より湯漬請求書は悉く表御用部屋吟味役へ差出し同役の調査檢印の上御勘定奉行へ元斷りを廻し而して一ヶ月位に纒め積數之石高を御臺所より面々受取なり

次米

十月分

○一百貳拾八石四斗九合三勺四才

十一月分

○一百拾四石八斗一升五合貳勺一才

十二月分

○一百三十石五斗一升三合八勺九才

外に

△七石三斗六升六合六勺八才　　御買上ヶ筋

正月分

○一百貳石一斗三升九合九才

外に

△四拾一石八斗九升一合一才　　御買上ヶ筋

二月分

○一七拾六石六斗五升八合五勺一才

外に

△七拾四石七斗三升二合一勺六才　　御買上ヶ筋

○五口
〆五百五拾貳石五斗三升六合四才

〆俵千三百八拾一俵と一斗三升六合四才

△三口
〆貳百拾三石九斗八升九合八勺九才　卯十二月より辰二月まで

〆俵三百九俵と三斗八升九合八勺八才　　御買上ヶ筋

〆

十月分

卯九月廿一日より十月廿日迄
一七百五拾六匁　　此五百四十八人前　　御乳三人支度すし　シマ

十一月分

十月廿一日より十一月廿日迄
一七百三拾匁八厘　此五百廿二人前　同　シマ

十二月分

十一月廿一日より十二月廿八日迄
一七百五匁六分　此五百四人前　同　ワダ

正月分

十二月十九日より正月廿日迄
一七百八拾一匁二分　此五百五拾八人前　同　ワダ

〆

米

一ほかい并じき口詰め　三割物　三割べり

一湯漬成替筋　現二合は白一合六勺　諸士分　次上米

一湯漬現二合に成替り渡し米　白一合七勺　以下末々渡し米代かへ

一女中出方　白二合　渡し米　中白ノ平

一和米とは　現二合八勺　全二合

一玄米二合一勺二才　白二合

一湯漬一つに付　眞木夏分は一厘一糸　同　冬分は一厘四毛二糸

〆

○御道中筋

一御臺所御長持

四棹　五日御先　二棹　御當日　馬　拾六疋

〆

○御臺所內證文

種油場所

一御臺所頭　半夜一ヶ所　一御臺所人　有明一ヶ所
一御鉢方　有明一ヶ所　一御膳所　有明一ヶ所
一當番座　有明一ヶ所　一御膳立 一御廊下向 內 一ヶ所 は鯨油 有明六ヶ所

右之通毎夜二勺二才つゝさし增

鯨油場所

一御廊下　有明二ヶ所　一小間使組頭　有明一ヶ所
一小間使部屋　有明一ヶ所　一御臺所御中間　有明一ヶ所
一常渡御中間　有明一ヶ所　一不寢番所　有明一ヶ所

右之通り毎夜一勺八才つゝさし增

一半夜場所六ヶ所

內

進上方　一ヶ所　御酒方　一ヶ所　御買物方　一ヶ所
板前方　一ヶ所　帳書方　一ヶ所　御舂屋方　一ヶ所

右之通り

一小半夜場所五ヶ所

内

進上部屋　一ヶ所　　飯方　　一ヶ所　　椀方　　一ヶ所

帳番二階　一ヶ所　　味噌立方　一ヶ所

右之通り

總〆貳拾九ヶ所

長夜一升三合八勺六才　　短夜一升三合三勺四才

長の半夜分六合九勺三才　　小の半夜分六合六勺七才

長夜一升三合三勺八才　　一夜四勺四才六毛

短夜一升五勺　　一夜三勺五才

〆

○御分料

御鉢方

一炭五歩　　御鉢御一度分　　一眞木五把　　御鉢御一度分

右之通定式

御燒方

一炭二歩五厘　御一度分　　一炭三歩五厘　御一度半分

右之通定式

御買方

一眞木二把貳歩御露物分　　一同六把六歩　御本汁 御平皿物

一同四把四歩　御煎物類　　一炭二歩五厘　御一度分

一炭三歩五厘　御一度半分

右之通り定式

板前方

一炭二歩五厘　御一度分　　一同三歩五厘　御一度半分

右之通定式

〆

外七月九日
○一上使之節青物

拾八匁　居臺直段　　五拾七匁五分　青物直段

〆七拾五匁五分

〆

○一出火之節早拍子木打候節に御作事火消一二之御人數幷役所詰共是迄文化十一戌年之極りを以て渡し方取計來り有之事右は今度別紙之通り相極候間右一通差遣候間下地筋に不拘右之筋にて其節々

渡方可取計候以上

二月二日

御臺所頭中

よし內譯人分之丸印別紙之通り有之候

御作事火消一二御人數役所詰共當時別紙之通御座候間早拍子木打候節々支度等廻り候樣御臺所へ

御通し御座候樣仕度依之御達申上候

正　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　御作事方

○五十四人
五十五人　　元〆より小役人共　　　　但箱辨當

○八十九人
百五人　　御中間鳶之者　　　　　　但握り飯

右之通り　　○二口人數に成未二月

覺

三人　元〆　　八人　手代　　七人　見分役　　九人　下奉行　六人　同助

三人　杖突　　拾二人　小役人　　七人　棟梁

〆五拾五人分　　箱辨當

一人　上陸尺　　六人　陸尺　　四十七人　御中間　　三十人　鳶之者

十三人　大部屋四分一　　四人　　御中間　　四人　御供馬口附

〆百五人分握り飯

右之通り

文政十亥二月御通し

一出火之節御作事方火消人數左之通に相極候事

五十四人　役人箱辨當　八拾九人　御中間御抱駕之者共握り飯

右之通り

天保十四年卯十二月

○掃除御場所
表御小道具方　永斷

一御小書院西御椽幷御同所御中庭四方御椽

一御書院西御椽かわ幷御同所御正面御椽竹之間御椽南溜り御駕籠臺御椽

躑躅之間　御椽　櫻之間　御椽　菊之間　御椽　使者之間　御椽

左京大夫樣　御椽　鶴之間　御椽　鳫之間　御椽　御客座敷　御椽

一西御玄關向は上使幷御客之節々

一板御廊下向御目付衆前初中の口御勘定奉行衆前御納戸口より表御用部屋御腰物方前より新御番所前同所より御臺所口迄同所より小買物方前より御數寄屋前御廊下迄

○丑の二月より寅の三月迄　御在中氷御御入用高

一三百七拾七斤程一斤二十五匁五分かへ

九貫六百拾三匁五分に成る
一割引直段 八貫六百五拾貳匁一分五厘　一斤廿二匁九分五厘かへ
差引 九百六拾一匁三分五厘
右一ヶ年減し
「三寸三角長尺六寸五分百本に付目方四拾貫目也」
○一 松大材拾本詰ひ
一本之大さ三寸三角　此十本にて一把此目方四貫目也
百本に付拾匁也
「三寸三角一本一本五本わり（原書字不明）五本は小束一把之事百把に付目方四十貫目長前同斷」
一同中材五拾本結ひ一把　此目方三貫貳百目也
但一〆は四尺縄〆之事
大材一本五つ割にて並一把也
百把に付八匁八分也
「長尺四寸全四尺把〆へ小束十二把入にて一〆之事尤小束一把は數五本程づゝ入」
一〆眞木四尺縄〆にて拾二把は　壹〆之事
此目方三〆三百目也　百把に付拾一本八分五厘
一三ヶ薪五尺縄〆にて　一〆之事

此目方六〆六百目也　拾〆に付二十三匁五分也

「長尺五寸拾〆此目方六貫六百目小束一把は五本入全五尺縄〆へ拾把入一之事」

〆

○寅年御發駕之節御長持馬箱とも

一貳百六拾九匁四分九厘見合扣

此馬箱三十九　一つに付六匁九分一厘

内

五分染小なわ代引　五分四厘琉球直達

〆一匁四分つゝ減し

是は天保十五辰三月十九日御發駕之節上琉久之處位下け中通にて致

全一つに付五匁八分七厘つゝ

辰二月

一臺掛細引拾貳尋物

六匁八分　表小買物方直段之處へ　五匁九分五厘　御臺所へ納め玉川兵四郎

同

一同拾貳尋物　四匁九分　玉川納

一細引三十四筋拾貳尋物　六匁八分　表直段

〆貳百三十一匁貳分　五匁九分五厘　御臺所

〆貳百貳匁三分

差引　貳十八匁九分減し

一細引五筋拾尋物　此十二尋に直し全四筋に成る

貳十七匁貳分表直段　二十三匁八分御臺所

差引　三匁四分減し

〆參十二匁三分細引代斗減し

御拜領物入新き
一小御長持　一棹　此琉久四枚

八匁一分六厘　二匁四厘かへ　六匁八分　一匁七分かへ

差引　一匁三分六厘減し

一御長持　三棹　此琉久拾三枚

一馬箱　二十九　此琉久五十八枚

〆七十一枚

百四十四匁八分四厘　二匁四厘かへ

百二十七匁　一匁七分かへ

差引　二十四匁三分四厘減し

一馬箱　二十九　此染苧用ひ候に付苧代

差引　十四匁五分減し

一馬箱　十

此蔀直し之處〆直しに致候に付總蔀直し直段五十八匁七分之處二十目にて相濟し
差引　三拾八匁七分減し
總〆百十一匁全減高
右辰三月十九日　御發駕御道中筋御用
御長持　四棹
一棹　新き御道具入 御當日　一棹　進上方 御當日　二棹　五日御先 御鉢方
駕籠長持
二棹　進上方 御當日

〆

○薪るい御在中一ヶ月分拂高後之覺
一〆眞木　百把十一匁八分五厘
二十四把　御堂證文　千七百四十四把　御買方常式　千三百三十一把　御買方常式ふし
七百三十九把五分　御鉢方常式　四百二十四把　御鉢方ふじ　百四十四把　眞木方月中ふじ
六十一把五分　めし方ふじ　七十二把　御鷹野
〆四千五百四十五把　代五百三十八匁九分八厘
一松大材　百本　拾匁也
二千本　丑九月分 御風呂屋へ達し下り　千五百本　十一月分 同　七百五十本　十一月十八日濟御殿へ御成に付御供廻り

一五百三十五本　永斷同所常式
〆一万七千三百七拾一本　代一〆七百三十七匁五分　（一萬二千五百八十一本半）（焚方月中ふじ内一通）
一松中材　百把八匁八分かへ
（二千七百四十二把四分五厘）（御達し下り焚方月中ふじ）　五百三十把四分　永斷同所常式
〆三千二百七十二把八分五厘
一三ヶ眞木　拾〆に二拾三匁五分
百四十五〆　御廣敷すじ
代三百四十目七分五厘
一〆眞木　常渡御中間共へ御臺所人無足
代五十四匁三分七厘
〆二貫九百五十九匁一分六厘
外に　九百三十二匁八分女中菜銀
合三貫八百九拾一匁九分六厘
天保十三寅年五月より引
○一車力賃一ヶ年受負
三月九月兩度拂にて壹貫八百目之處一匁に付五厘引
以來一ヶ年受負定銀一貫七百拾匁に極る

御在方一ヶ月證文

○一茶並筋六貫百目也

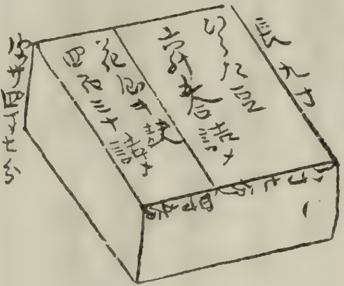
御留守方一ヶ月證文

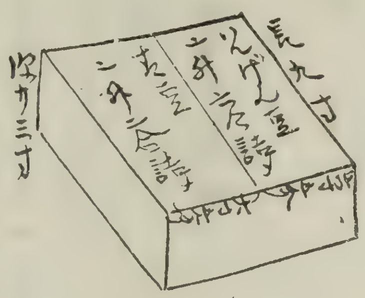
○一同並茶五貫二百五拾目也

差引 八百五十目つゝ　一ヶ月に御留守方減し

右御廣敷渡し

○　覺





龜印御膳所と印

右箱は辰三月十九日　御發駕之節御道中筋御用御廣敷廻是迄は御膳方取計之處當年は當御番座にて致之上詰方取斗候事

是迄よりは夫々御品半分余つゝ相減し候事以來取斗之事

〆

○亥猪御祝御用菊

丑「此株は百七十目四分之處二十八匁四分爲相減」

一五色大菊　五百六十八本　代百四拾貳匁此二分五厘つゝ」

一黄赤中菊尺廻り拾四把　代四拾目六分

一黄赤中菊尺廻り拾二把　代三拾四匁八分

一五色小菊三尺廻り一把　代三拾匁

〆二百三拾目四分

一五色菊百二十五本　代三拾一匁二分五厘

天保十亥「是より直段」

一五色大菊拾本　代二匁五分

〆

一黄赤中菊尺廻一把　代二匁五分

一小菊三尺廻一把に付　代拾匁五分

○水戸様へ被進筋

一交肴入大青目籠　一つ

長さ二尺五寸　巾一尺五寸　深さ三寸　足六本

代八匁二分五厘

〆

○一御獻上御提重詰め

卯三月　三百七拾目七分八厘　御膳方仕立

辰三月二日　二百三拾一匁九分一厘　墨屋萬吉

差引　百三拾八匁八分七厘減し

右御用達方へ相談し墨屋萬吉に相成以來同様之筈之積り岩尾方よりへ被聞候

○一御膳所附大眞羽板

檜　長七尺一寸　巾一尺八寸一分　厚六寸　總高八寸五分
　　代貳百五匁也
右天保六未年出來
一同大眞羽板
　檜角百五才八分　代八拾四匁六分四厘
　大工手間　代二拾五匁　木挽手間　代六匁五分一厘
　長七尺　巾一尺八寸　厚六寸　足高四寸　此二枚はき
　　代百拾六匁一分五厘

天保九戌年御作事方にて二月に出來之事
　○御漬物
一奈良漬瓜　一枚　二匁三分つゝ　一同茄子　一つ　三分五厘つゝ
一味噌漬茄子　一つ　三分八厘つゝ　一同干瓜　一枚　九分四厘つゝ
一同鉈豆　一本　一匁つゝ　一白丸瓜　一本　四分一厘つゝ
〆
　○御供廻り羹染物
天保十二丑
一椎茸　一升五合　此節一升一合つゝ「此一匁一分一厘」　一午房　四十五本　同三十三本「此三分三厘」
一氷こんにやく　四十五枚　同三十三枚「此四匁二分五厘」　一醬油　一升二合　同一升

一味噌
右之通り相極る
卯八月晦日朝より
○一一汁三菜　御乳二人前
但御乳持筋飯汁平共代り附外に燒物肴三本つゝ朝晝夕添
右重て相斷候迄朝晝夕日々相廻り候樣
卯九月八日朝より三人に成る
一一汁三菜　御乳一人前
但飯汁は前同斷有之候八月晦日二人前之內へ籠る燒物之外は代り附
右重て相斷候迄朝晝夕日々相廻り候樣
一御夜とき　八人前つゝ
右重て相斷候迄毎夜相廻り候樣
〆
○一黃花
七千九百五拾輪　丑年納り　代三百五拾七匁七分五厘
七千五百輪にて投渡し　卯年納り　代三百三拾七匁五分
差引　貳拾目貳分五厘卯年減し
右は卯年御帳付にて相廻り候筋御八百屋附人專八へ渡し切以來同樣に取斗之筈

○一御銚子磨き直し
一つに付四匁五分下地直段此度三匁九分にて申付る
一御長柄磨き直し
一組に付拾六匁下地直段此度拾三匁つゝにて申付る
右夫々磨き直し闕（一本闕）(屋)金兵衛へ朱丸直段にて申付出來之事

○一　乗蓮院様へ被進
八寸重
煮肴ニ煮染　一式　六十三匁　腰高饅頭一つ半百廿入　五　四十三匁七分四厘
鳴戸すし十箱一つ半かけ　三　八十六匁五分六厘　石竹巻廿丘本一つ半かけ　三　百五匁三分七厘
〆貳百九拾八匁六分七厘
右之通卯正月三日改め

○御膳具活掛等
一御平皿　一組　貳匁四分
一御高皿　一組　貳匁
一御本椀　一組　貳匁四分
一御中皿蓋　一枚　壹匁
一御汁椀　一組　貳匁
一御吸物椀　一組　貳匁
一御抜き椀　一組　貳匁
一御銚子蓋　一枚　壹匁
一御淺物椀　一組　貳匁

右（全）〔一本金〕活掛取直し直段

一御高皿蓋外一枚　貳匁四分　ぬり直し

〆

一銀御薬わん磨き直し　一つ　四匁　一同さう巻直し　一つ　八分

〆

丑九月廿六日御花見御用之節

○一松花　一面

宮島五葉松　代り竹七寸廻り位　八朝梅　大菊　三しき　熊笹

寸法　高さ三尺 巾五尺　臺八分板　長さ一尺三寸 巾九寸位

〆五拾一匁附上け四拾五匁にて申付る　三郎助

〆

○一鋼　三枚居臺　一枚　代二十一匁　一同　二枚居臺　一枚　代拾六匁五分

〆

一猫足膳損し繕ひ

足新き出來ぬり立取付一つに付一匁貳分　古足取付斗一つに付貳分三厘

〆

○にしめ物其外

花有
一生花臺　一面　代百廿六匁

一三盃漬　大一鉢　代三十三匁五分

大二つ割中一鉢之事　代廿三匁二分五厘

中二つ割小一鉢之事　代十一匁六分貳厘

一煎物肴　大一鉢

但百切積り代四十六匁五分　一切に付四匁六分五厘

一御次八重　八寸　一重　代三十一分五分　一御次七寸重　一重　代廿四匁三分

七寸入精進　拾九匁（一本無三分）　六寸入同　八匁附上け

八寸入同　二十一匁

但寸に付三匁四厘二毛

御硯蓋　中一面　代貳拾目貳分五厘

大さ寸法八寸五分四方　深さ八分五厘

一精進硯蓋　中一面　代十八匁四分五厘

大さ寸法八寸五分四方　深さ八分五厘

御酒被下筋未の九月四日附上け

一硯蓋　代三拾目三分

大さ長さ　一尺三寸　巾　一尺二寸　深さ　一寸五分

進立好　小串たい　椎茸　花ゑひ　紅くわゐ　ぶどう
代　三十目三分

一生子膾　大ざんふり　代貳拾目貳分五厘

一肴大根　大一鉢　代貳拾一匁六厘

但一人前肴一切四分六厘五毛　大根　四切一分六厘　代六分二厘五毛

一肴大根　中一鉢　代十二匁一分

但肴二十切大根七十切積み

一するめ大根　大一鉢　代十八匁

山王氷川之節
一大々堺重　黒ぬり内朱 一重　代百三十五匁

大さ長さ　一尺八寸　巾　一尺三寸　深さ　四寸五分

但煮肴にてもにしめにても代百三十五匁

一大々硯蓋　木地蘭　一面　代八十五匁五分

一同精進　一面　代六十七匁五分

境重也
一尺御重　四重物 壹組　代六百七匁五分

御登城之節

一朱塗貝盡硯蓋　一面　代八拾一匁

御上り仕立　長さ　尺五寸六分　巾　尺七分　深　一寸三分

一同次仕立　一面　代六十三匁

無花
一生花臺　一面　三枚居臺の事 代百八十九匁

〆

天保十年亥二月より未年迄

○一御膳御青物附上け留

御膳院玄大角豆

「イ」二月中 一百本に付　代貳拾四匁九分九厘　三月中 一同　代拾九匁九分五厘

四月中 一同　代七匁一分一厘　五月中 一同　代貳匁四分八厘

六月中 一同　代一匁二厘　七月中 一同　代六分二厘

八月中 一同　代五分六厘　九月中 一同　代六分三厘

〆

御膳木瓜

「ウ」二月中 一拾本に付　代十二匁九分五厘　三月中 一同　代九匁一分七厘

四月中 一同　代五匁二分一厘　五月中 一同　代一匁九厘

六月中 一同　代八分八厘　七月中 一同　代七分七厘

八月中 一同　代八分四厘
〆
御膳茄子
「ナ」初出斗り 一拾に付　代貳拾一匁三厘
四月中 一同　代九匁九分三厘
六月中 一同　代五分六厘
八月中 一同　代三分九厘
〆
御膳白瓜
「ウ」三月中 一一本に付　代八分七厘
五月中 一拾本に付　代五匁三分九厘
七月中 一同　代貳匁三分八厘
九月中 一同　代貳匁九分四厘
〆
御膳花丸瓜

九月中 一同　代八分四厘
二度目より三月中 一同　代拾五匁七分五厘
五月中 一同　代貳匁一分七厘
七月中 一同　代四分
九月中 一同　代八分四厘
四月中 一拾本に付　代七匁三分五厘
六月中 一同　代貳匁四分貳厘
八月中 一同　代貳匁九分四厘

「ウ」六月中
一拾本に付　代一匁五分八厘
〆

御膳御漬物白瓜

「な」六月中
一拾本に付　代五匁五分三厘
〆

御膳大茄子

「な」六月中
一拾に付　代一匁二厘
七月中
一同　代五分九厘
八月中
一同　代五分二厘
〆

御膳丸漬瓜

「ウ」六月中
一一つに付　代一分二厘
七月中
一同　代九厘
〆

御膳切松茸

「マ」初出より八月中
一百に付　代十八匁三分八厘
九月中
一同　代十四匁九分二厘
十月中
一同　代十五匁三分一厘
〆

御膳切初茸

初出より八月中 一拾に付　代三匁六分二厘　　九月中 一同　代三匁二厘

十月中 一同　代三匁二分八厘

〆

筝直段

九月より十一月中 一御膳竹の子壹本に付　代一匁五分　　十二月より正月中 一同　代一匁貳分

二月より三月中 一同　代八分　　四月中 一同　代五分七厘

五月中 一同　代四分七厘

〆

青物類證文

一松露一升に付　一升之目百十匁也　　三月より九月迄 八匁四分　　十月より二月迄 拾三匁三厘

一同　一合　　五分四厘

一しそ穂一把百本結ひ　　一匁三分八厘

一同の實一把は五把掛にて九分五厘五勺廻　　一分九厘

一根芋拾本に付　　三分六厘

一貝割菜一籠廿四把結ひ　　一分一厘

一鶴菜　一把に付　一分四厘

一松菜　一把に付　八分

一鶯菜一籠に付　一分四厘

一羽衣茄子拾に付　三匁一分

「な」
一刀豆の實拾に付　五厘

一刀豆拾本に付　一分一厘

一土菜一把に付　貳分六厘

○
一漬菜一把に付　日のなも同直段　年々御以帳跡方　三分四厘

な
一なず菜一籠に付　二分五厘

一水菜京菜　一株に付　一分二厘

一青梨子一つに付　一匁三分一厘

○
一漬菜　小二把掛りにて大一把之事此尺七寸廻り　三分四厘

一古河なし一つに付　七夕御備不同なし斗は證文二割半にて相納候筈　八分七厘

一中長芋拾本に付長さ二尺に壹寸廻り　一匁七分一厘

一菜漬一把に付　七厘

一大長芋　一本に付八寸廻り　御國廻り筋一匁八分四厘　一匁二分二厘

一長蕪拾に付　貳分七厘
一生海苔一合に付　一分四厘
一むかご一升に付　八分七厘
一枝梅一本に付　但葉付梅共　一分四厘
〆
○湯葉るい證文
一巻湯葉　大一本は一本牛掛　二匁　一あわゆき湯葉　八分四厘
小之筋
一あわゆき湯葉　一本に付　一匁　大さ差渡一寸七分さ厚さ六分一に付
一平ゆは　一分三厘
一絞湯葉　十に付五分ゆはも同斷　七分八厘　一糸巻湯葉　三匁四分八厘
御守殿筋
一重湯葉　一つに付　六分九厘
一角湯葉　嶋田湯葉　結ひ湯葉　茶巾湯葉　一つ付　八分四厘つゝ
一重湯葉一枚に付　七寸五分に七寸　五分三厘　一細湯葉　一把に付　五厘　長一尺にて五本結ひ
〆
○御肴るい
一いか　一盃に付
大・四分一厘　中　二分七厘　小　一分九厘
一いかあおり　一盃に付

大　二匁一分四厘　中　一匁六分八厘

一かつほ　一本に付

尺二寸	二匁三分七厘	尺三寸	二匁七分九厘	尺二寸五分	二匁六分二厘
尺三寸五分	三匁六厘	尺四寸	三匁二分	尺四寸五分	三匁六分一厘
尺五寸	四匁三厘	尺五寸五分	四匁二分一厘	尺六寸	四匁四分
尺六寸五分	四匁五分九厘	尺七寸	四匁八分四厘	尺七寸五分	五匁八厘
尺八寸	五匁三分四厘				

〆

初鰹一本　六拾目　御二度目　一本三拾目　御三度目より證文

〆

一鯛　一枚に付

三寸	二分三厘	三寸五分	二分七厘	四寸	四分二厘
四寸五分	五分九厘	五寸	七分七厘	五寸五分	九分三厘
六寸	一匁二分七厘	六寸五分	一匁八分九厘	七寸	二匁四分三厘
七寸五分	二匁七分	八寸	二匁八分一厘	八寸五分	三匁五分
九寸	四匁三厘	九寸五分	四匁三分五厘	尺	四匁六分八厘
尺五分	四匁九分八厘	尺一寸	五匁二分九厘	尺一寸五分	五匁九分二厘

尺二寸　六匁五分五厘　尺二寸五分　七匁三分六厘　尺三寸　八匁一分二厘
尺三寸五分　九匁五厘　尺四寸　九匁九分四厘　尺五寸五分　拾一匁一分
尺五寸　拾匁七分四厘　尺六寸　拾四匁六分三厘　尺六寸五分　拾五匁五分七厘
尺七寸　拾六匁五分五厘
〆

一きす　拾に付
三寸七分三寸五分　一匁二分六厘　四寸　一匁七分八厘　四寸五分　二匁五分二厘
五寸　三匁三分四厘
〆

一ひらめ　一枚に付
八寸　五分七厘　九寸　七分四厘　尺　一匁六厘　尺二寸　一匁九分七厘
尺三寸　二匁五分三厘　尺五寸　四匁六分八厘

一あじ　一つに付
四寸　一分五厘　四寸五分　二分一厘　五寸　二分四厘
五寸五分　三分五厘　六寸　四分八厘　六寸五分　六分六厘
七寸　六分八厘　八寸　七分二厘　九寸　七分四厘
〆

一同　　拾に付　　九分四厘

一あい　一つに付
七寸　七分三厘
四寸より四寸五分迄　二分七厘　五寸　二分　五寸五分　二分九厘　六寸　四分一厘

〆

一あい子持　一つに付
五寸　三分二厘　五寸五分　四分　六寸　四分八厘
六寸五分　八分二厘　七寸　一匁一分四厘　七寸五分　一匁七分三厘

〆

一同　小　拾に付　一匁二分三厘

〆

一車海老　拾に付　大　二匁四分五厘　中　一匁八分九厘　小　一匁八厘

〆

一むき芝ゑひ　壹升は數四百八十也
代　拾匁九分四厘　但拾に付　二分二厘八毛　干すも右直段

〆

一芝ゑび　一升に付　一匁二分三厘

一小海老　　一升に付　二匁四分一厘
一伊勢海老　拾に付　大　六匁五分五厘　中　五匁三分五厘　小　三匁二分八厘
一あわび　一盃に付
四寸　四分一厘　四寸五分　六分九厘　五寸　九分八厘
五寸五分　一匁二分七厘　六寸　一匁五分七厘　六寸五分　一匁八分八厘
七寸　二匁一分九厘
〆
一同　から　一つに付　一分
文政九戌十一月相極る
一鱸　一本に付　大和屋源八
小　三分一厘　二寸廻り　四分八厘　（二寸五分（一本ニナシ）　六分九厘）
三寸　九分　三寸五分　一匁九厘　四寸　一匁四分七厘
四寸五分　一匁四分八厘　五寸　二匁二分　六寸　二匁七分九厘
四の日毎御膳
一同　三拾五本　七匁　但三寸五分廻り皆目方六百目位
右之外に相納候筋
一同　目方百目に付　三匁一分六厘
一白魚　一升に付　六匁一分六厘　百すし　一匁四分七厘
一小つみ入　一升に付　四匁七分五厘

○一御酒類　一升に付

長壽酒	九匁一分六厘
忍冬酒	拾五匁七分一厘
松の露酒	拾貳匁一分七厘
初緣酒	六匁五分五厘
桑　酒	拾三匁四分八厘
千年酒	拾二匁九分
菊花延命酒	拾貳匁六分六厘
龜齡酒	六匁九分八厘
○御膳酒 松の露	四匁五分五厘
○御酒盬	一匁八分六厘
○上酒	一匁四分四厘
○瀧水酒	二匁四分二厘
○御樽一荷 同	八拾目也
○劔菱酒	二匁四分二厘
○不老泉酒	九匁四分一厘
延命酒	拾匁二分二厘
延年酒	拾七匁一分一厘
荒木延命酒	拾一匁五分二厘
葡萄酒	拾五匁七分一厘
龜代位酒	四匁三分六厘
密柑酒	拾四匁二分三厘
霙　酒	五匁八分五厘
紫蘇酒	拾三匁三分五厘
羽衣酒	五匁二分四厘
○味淋酒	三匁四厘
○極上々酒	一匁六分四厘
三年酒 古酒のこと	五匁二分八厘
○古伊丹酒 御献上筋	四匁二分
本直し酒	一匁三分三厘
老松酒	二匁四分二厘
養老酒	七匁九分九厘
長命酒	六匁一分九厘

仙人酒	五匁七分六厘
菊　酒	九匁八分九厘
金花酒	拾五匁二分三厘
千代酒	拾三匁九分三厘
生泡酒	廿七匁五分一厘
白玉酒	五匁七分六厘
万願寺酒	二匁五分八厘
博多酒	六匁二厘
桔梗酒	六匁一分九厘
御勝子酒	拾一匁三分六厘
麥芽酒	六匁二分七厘
紅梅酒	七匁一分四厘
三原酒	七匁七分四厘
梅本酒	八匁一分七厘
鶴の子酒	拾匁三分二厘
若緑酒	七匁三分四厘
玉椿酒	拾匁三分二厘
九年酒	拾三匁六分一厘
菊花酒	九匁八分九厘
梅　酒	八匁五分九厘
焼酎酒	拾六匁三分三厘
挑伊酒	六匁二厘
甘露酒	拾三匁九分三厘
九重酒	拾匁三分二厘
官銅酒	九匁四分六厘
○唐新酒	六匁二厘
○蓮肉酒	六匁八分八厘
杏仁酒	六匁八分八厘
柏　酒	七匁一分四厘
保命酒	八匁一分七厘
丹參酒	拾匁六厘
千年酒	拾貳匁九分
春日野酒	九匁一分八厘
三笠山酒	拾貳匁九分四厘

友鶴酒　拾匁三分二厘
住の江酒　拾三匁六分一厘
相生酒　拾三匁六分九厘
松尾酒　拾匁五分七厘
喜久川酒　七匁七分四厘
萩の井酒　八匁一分七厘
生　酒　三匁二分六厘
八仙酒　拾三匁九厘
龜の井酒　六匁二厘
初梅酒　四匁三分六厘
吉の川酒　八匁五分九厘
星の井酒　拾參匁九厘
玉の井酒　拾匁三分二厘
澤鶴酒　拾二匁五分
檍（本ノマヽ）井酒　六匁八分八厘
隅田川酒　四匁一分二厘
保命酒　拾匁三分二厘
末廣酒　四匁三分一厘
加茂川酒　四匁三分六厘

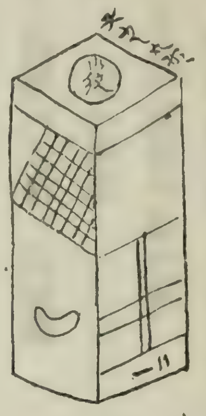
〆

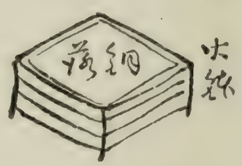
天保十五辰年三月十九日　御發駕に付御國廻り大奥斷

○一御鉢あたため御たんす　代　七拾五匁

本品總桐中棚組子火の當銅打枠入火鉢銅落し春慶ぬり

上紋付一組　指物屋　久七





あたゝめ長ゑん

右寸法は大奥より御本出正寸取る

○厘引御達し下り

一天保十三寅年諸物値段下之儀　公儀より被　仰出候御趣意に付御用開町人共へ直段之儀申諭御拂銀高之内厘引等仕相納度旨夫々より願書差出候に付御勘定奉行衆へ相達候上左之通厘引相極候事

寅五月

五厘引株

一御膳蕎麥粉同うどん同打手間其他諸色共　瓢草屋佐衛門

都て御用代之内一匁に付五厘引

一唐金鍋白み引同鑄直し其他諸色共　いせ屋嘉七

都て御用代之内　右同斷

一雁羽ほうき竹ほうき其他諸色共　岡仙類右衛門

都て御用代之内　右同斷

一ちらしすし玉子すしのりすし其外諸色共　池田屋半六
都て御用代之内　右同斷

一御鉢塗直し御平皿ぬり直し其外諸色共　最上屋善藏　今福彌兵衛
都て御用代之内　右同斷

一並茶椀切立に大(原書不明)鉢火入其外諸色共　西村屋榮藏
都て御用代之内　右同斷

一銀御茶椀磨直し其外諸色共　かさり屋新六
都て御用代之内　右同斷

一御重弁一つ木具其外諸色共　會津屋德兵衛
都て御用代之内　右同斷

一御上り箸雜はし迄其外諸色共　御箸屋小兵衛
都て御用代之内　右同斷

一龜甲笊次龜甲笊其外諸色共　大和屋作兵衛
都て御用代之内　右同斷

三厘引株

一かつふし芋類其外諸色共　村田屋小兵衛
都て御用代之内　一匁に付三厘引

一水荷棒水手桶棒其外諸色共　かたき屋七兵衛
都て御用代之内　右同斷
一白絹幷花色絹御紋付白麻其外諸色共　かしわ屋新助
都て御用代之内　右同斷
一大折中折杉折小折其外諸色共　木具屋三郎右衛門
都て御用代之内　右同斷
一小御長持桐油大中御長持桐油其外諸色共　越前屋利兵衛
都て御用代之内　右同斷
一並鐵行燈中鐵行燈燒直し其外諸色共　かじ屋喜兵衛
都て御用代之内　右同斷
一五本枝松其外諸色共　花屋三郎右衛門
都て御用代之内　右同斷
一大元結ひ白青水引其外諸色共　水引屋又四郎
都て御用代之内　右同斷
一干鯛壚魴壚鮎其外諸色共　大塚屋半藏
御獻上之外都て御用代之内　右同斷
一交肴入靑目籠密柑入靑目籠其外諸色共　籠屋市兵衛

御獻上之外都て御用代之内　右同斷

一中白味噌同赤味噌澤庵大根其外諸色共　四方宇兵衛

御次斗御用代之内　右同斷

一御重詰　墨屋万吉

御音信筋御重詰斗り御用代之内　右同斷

一上磨き粕漬桶中上り桶其外諸色共　桶師清兵衛

御獻上之外都て御用代之内　右同斷

一澤庵大根壜其外諸色共　岡崎屋六三郎

御次斗都て御用代之内　右同斷

一並箱提灯火袋取かへ其外諸色共　かつさ屋吉兵衛

御道中筋之外都て御用代之内　右同斷

一干鰯からすみ其外諸色共　芋屋忠右衛門

御次斗都て御用代之内　右同斷

一桐菓子箱葛箱干鯛箱其外諸色共　指物屋彌兵衛

御獻上之外都て御用代之内　右同斷

一御菓子類　菓子屋三人

右十五ヶ年以來附上ヶ別證文之筋斗都て御用代之内　右同斷

一青物るい　八百屋二人

御次御用之處斗都て御用代之内　右同斷

一御獻上銘酒るい之御用の外　秋(元)〔一本本屋〕　長左衛門　源右衛門

都て御用代之内　右同斷

一粕漬桶居臺交肴籠居臺其外諸色共　木具屋孫市

御獻上御品之外都て御用代之内　右同斷

○厘引不同

一ひしこいわしかさみ　尾張屋專太郎

此三品御用之節都て御用代之内　一匁に一分引

一靑目籠交肴一籠に付　右同人

代五十五匁六分八厘之處內五匁引全五十目六分八厘相極

一雪砂糖一斤に付　大(和)〔一本松〕屋惣兵衞

三匁八厘之處五厘引全三匁三厘に相極

一和砂糖一斤に付　右同人

二匁二分之處五厘引全二匁一分五厘に相極

一車力賃一ヶ年一貫八百目受負　松屋直吉

一匁に付五厘引以來一ヶ年受負定銀一貫七百拾匁に相極

一花橘茶山嶋茶其外諸色共　松坂屋傳兵衛
都て御用代之内　一匁に付八厘引

一印肉墨　芝山與兵衛
一並目方一匁に付銀貳分八厘内二厘引全二分六厘に相極
一上々方目方一匁に付銀四分五厘内二厘引全四分三厘に相極
一朱肉目方一匁に付銀一匁二分内一分引全一匁一分に相極

一厚海苔　十枚に付　久保屋儀左衛門
代五匁内二厘引全四匁八分に相極

一薄海苔　十枚に付
代三匁七分内一分引全三分六分に相極

一御次海苔
代一匁八分内五厘引全一匁七分五厘に相極

一並豆腐燒豆腐　三文字屋甚兵衛
此二品之内一つに付二厘引全燒一つ三厘三毛並豆腐三分

一築地御藏所より俵物御樽御臺物一駄に付　いせ屋與八
赤坂御殿迄二匁八分之處內一分五厘引全二匁六分五厘に極る
青山御殿迄三匁の處内一分五厘引全二匁八分五厘に極る

麴町御屋敷迄は二匁一分の處內一分五厘引全一匁九分五厘に極る

一數寄屋河岸御場所より炭四十五俵積一車に付　右同人

赤坂御殿迄九匁八厘之處內三分五厘引全九匁四分五厘に極る

山屋敷御門內迄八匁八厘之處內二分五厘引全八匁五分五厘に極る

麴町御屋敷迄八匁六分之處內四分三厘引全八匁一分七厘に極る

青山御殿迄拾一匁三分之處內五分引全拾匁八分に極る

田屋敷迄拾壹匁三分之處內五分引全拾匁八分に極る

一築地御藏所より炭四十五俵積み一車に付　右同人

御本殿迄拾一匁七分之處內四分五厘引全拾一匁二分五厘に極る

山屋敷御門內迄拾匁七分之處內三分五厘引全拾匁三分五厘に極る

麴町御屋敷迄拾匁五分之處內一分五厘引全拾匁三分五厘に極る

青山御殿並田屋敷迄拾三匁二分之處內六分引全拾二匁六分に極る

一〆眞木百把に付　米屋（一本新）助

代拾貳匁之處一分五厘引全拾一匁八分五厘に極る

一松大村百本に付　遠州屋源七

代拾一匁之處內一匁引全拾匁也

一松中村　百本に付　右同人

代八匁九分三厘之處內一分三厘引全八匁八分に極る

一三ヶ眞木　百把に付　右同人

代二十三匁七分之處內二分引全二十三匁五分に極る

〆

○諸色證文

一極上洗棕呂ほうき　一本に付　二匁五分七厘

一同　針かね卷　一本に付　一匁四分貳厘

一同　並　一本に付　一匁九厘

一才配　大　一本に付　一匁二分八厘

一才配　中　一本に付　一分三厘

一同　小　一本に付　一分一厘

一竹の皮　百枚に付　四匁七分五厘

一極上本間莚　一枚に付　四匁七分

一同　上　十枚に付　三匁二分五厘

一御提灯箱桐油　一荷（長二尺四寸　巾一尺四寸　高一尺二寸）　九匁八分五厘

一同　大之筋　一荷（長二尺五寸　巾一尺五寸五分　高一尺五寸）　拾匁八分五厘

一わた入紙屋わら	十に付	目方百目代
一上紺染苧	百目に付	三匁三分二厘
一並染小繩	百目に付	一匁七分六厘
一大染小繩	十匁に付	四分六厘
一同中之筋	十匁に付	五分六厘
一同細之筋	十匁に付	八分二厘
一上琉球	一枚に付	二(分)(匁か)四厘
一中琉球	一枚に付	一匁七分
一同　並	一枚に付	一匁二分六厘
一臺掛細引	拾六尋物	八匁二分六厘
一同	拾二尋物	六匁六分
一同	拾尋物	四匁七分
一蔀琉球込	但御道中筋	四匁一分九厘
一御長持蔀手間		三匁五厘
一同手傳手間		二匁六分二厘
一細引	八尋物	二匁五分六厘
一同小之筋		一匁三分一厘

〆

○氷川祭禮之節

一次道明寺　一匁二分七厘　五十八袋　七拾三匁六分六厘

一並砂糖　二拾四〆目　百九拾八匁　一貫目八匁二分二厘

〆

一御献上之節 巻松風目方　拾本に付　三拾五匁　是目方

一被進之節　拾本に付　右同目方

右之通り五月十八日請入

○御菓子

一翁かん　一つ半掛一本半 五箱(入)一箱に付　九匁五分五厘

一かさゝき　一箱半 八本入　一箱に付　九匁五分五厘

一京鹿の子 あさのす　四十七　一つに付　七匁九分二厘

一痲地万頭　一つ半掛 八十六　一つに付　五匁九分七厘

一錣かん　一箱半掛 五箱半　一箱に付　拾七匁一分一厘

一唐餅饅頭　八十六　三匁貳分五厘

自求肥小倉かん氷御仕立差渡し二寸高さ一寸目方一つに付拾五匁

一高尾饅頭　十に付　拾四匁一分七厘五毛
一有平入五色大巻せんべい　十本に付　拾一匁九分七厘
仕立唐柄（本ノマヽ）しうる也吉野くすに仕寄からし焼こんふ氷御五色かん四本かゝり
一あつま屋　二つ目方　三十八匁つゝ　七匁八分
一三年の子　四つ目方　三十二匁つゝ　七匁四分七厘
一間垣菊　六つ目方　二十目つゝ　八匁三厘
一初ざくら白　四十二　拾七匁四分三厘
一中菓子　紅櫻てい　百目に付八匁筋　四匁八分
右御次帳付閏九月二日廻り
此二人前分四十八匁五分二厘之處全四拾目に投渡し一人前二十目つゝ
菊屋代常吉
一鳥の子餅　一つ目方 同　六百三拾二匁 六百二匁
〆一貫二百三拾四匁此二つ割にて全六百拾七匁一つに付一升五合積
右證文一色にて此目方六百目全證文
一福壽大饅頭　一つに付　十五掛け　二匁九分
右之通り鳴村相極る
一大翁　五十五　一つに付　●三匁三分七厘五毛

一末廣　四十五　一つに付　●三匁三分七厘五毛

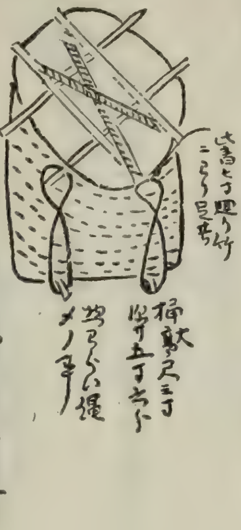
一おほろう万頭　並十うに付　二匁九分四厘九毛

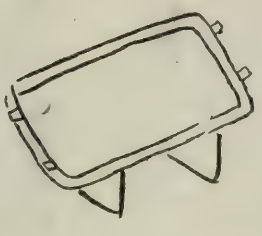
　小麦粉酒にてねり小豆あん氷御みつ仕立

一殘月餅　並十に付　四匁四分

一次道明寺　一升に付　一匁二分七厘

一烏帽子　一つに付　●三匁三分七厘五毛





　長さ尺七寸四分　巾尺三寸五分　高さ七寸二分

右は丑の年九月三日松平淡路守殿へ被進筋

文化十二亥三月極有之筋

○一大貝盡し　七色積　一折　三拾五匁五分

　右上己に付御姫樣方へ被進筋

○御獻上即刻揚け値段　二十一時より十八時迄

一○活鯛二枚居　百三拾七匁九分六厘

一△同（地物すし）　　九拾八匁五分五厘
一○同居臺　一つ　八匁四分
一△同三枚居臺　一つ　拾二匁三厘
右之通
一紀伊殿より獻上生鯛値段左之通り候
總獻上之節
一鯛　一折　三枚居　料三百八拾四匁三分四厘
不時獻上之節
一鯛　一折　三枚居　料二百五拾目
定式獻上之節
一鯛　一折　三枚居　料百九拾二匁
右之通此度　公邊より御問合に付左之通り御用部屋答書いたし候旨田中理兵衞方より被聞候段辻方より申合候
○一銘酒入德利箱下地寸法
高さ　一尺八分　長さ　九寸八分　巾　四寸九分
一此度相納り候箱寸法書
高さ　一尺三寸　長さ　一尺五分　巾　五寸貳分

是は
天保十二丑年十二月上使女中之節徳利町中吟味致候得共無之に付徳利少々大振に付箱大きく相成る
○一被進粕漬桶詰め　一つに付　一貫八百貳拾五匁詰め
一御獻上粕漬桶詰め　一つに付　四貫百五拾目詰め

○山王祭禮之節

一次道明寺　一匁二分七厘　三十九袋　四拾九匁五分三厘
一並砂糖　七匁八分かへ　二拾二貫也　百七拾一匁六分
右子年

○茶類

一○玉の井「ハリ」　〆十二斤　二貫四百目　八匁かへ　七匁三分六厘
一山吹　〆五斤半　一貫百目　七匁三分六厘かへ
一○一森　〆廿六斤半　五貫三百目　六匁　かへ
一○白梅　〆六斤　一貫二百目　四匁五分　かへ
一阿部茶　〆十九斤　三貫八百目　二匁五分「二匁三分」　かへ
一○玉椿　〆五斤　一貫目　三匁五分　かべ
一富士見茶　〆一斤半　三百目　一匁五分「一匁三分八厘」　かへ
一山本山　〆九斤半　一貫九百目　六匁「五匁五分二厘」　かへ

右は御次帳にて相廻る一ヶ年分年に寄り増減も少しは有之候得共先大樣廻し高

〇朱丸印は御勘定所廻り

一〇初櫻　〆三拾六斤　七貫貳百目　二匁七分二厘かへ

右は表御小道具方斷御達し下りすし

一〇(花)橘（一本百）　〆拾三斤七分五厘　貳貫七百五拾目　十三匁　かへ

右御清之間渡し御次帳付廻り

一〇山富貴

右之通

〇

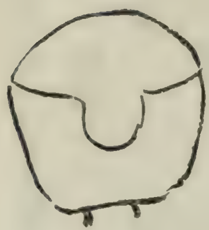
一唐かね鍋　百目に付　三匁六分

一同古下　同　一匁六分六厘

〆　關岡金兵衛

一ほご釜　目方一貫六百目也　あみ同　三百六拾目也

代五十二分也





釜中之あみ數五十本つゝ

十文字之事

右天保十二丑九月出來

○御箸るい

手間

一柳御箸　拾膳　七匁五分「七匁一分二厘」

一御上り箸　百膳一袋　九　匁「八匁五分五厘」
四匁五分「四匁二分七厘」

一御向箸　同同　九　匁「八匁五分五厘」
四匁五分「四匁二分七厘」

一御膳丸箸 細丸も同斷　同同　四匁六分「四匁三分七厘」
二匁三分「二匁三分二厘」

一上丸箸　百膳　二匁八分「二匁六分」

一白御揚枝　百本十膳一袋　一匁五分「一匁四分二厘」
三　分「二分八厘」

一杉御揚枝　百本右同　一匁五分「一匁四分二厘」
三　分「二分(七)厘」（一本八）

一長御箸　拾膳　一匁五分「一匁四分二厘」

一尺御箸　拾膳百膳　一匁五分「一匁四分二厘」

一白箸 赤のも同斷　百膳五十膳入　壹袋　一匁二分八厘「一匁二分一厘」
六分四厘「六分」

一雑箸　百膳右同　三分六厘「三分四厘」
一分八厘「一分七厘」

一御辨當箸 御雛箸も同　百膳右同　三匁七分「三匁五分一厘」
一匁八分五厘「一匁七分五厘」

一黒文樹御揚枝　百本十膳袋　二匁五分「二匁三分七厘」
五　分「四分七厘」

天保四巳四月附上け
一御附箸　百膳五十袋　二匁七分「二匁五分六厘」
一匁三分五厘「一匁二分八厘」

右同
一鴨口御揚枝　拾膳入　一匁五分「一匁四分二厘」

亥四月附上け
一利久形青竹御箸會席共言　拾　膳　三　匁「二匁八分五厘」
一杉同御箸　同　三　匁「二匁八分五厘」
亥三月附上け
一御好御辨當箸　五拾膳入　三匁七分五厘「三匁五分六厘」
當箸

右之通

粉なるい證文

一紅いし粉　一升に　十七匁四分　十四匁七分五厘
一道明寺粉　一升に　一匁五分六厘　一匁二分七厘九毛
一寒晒粳(ウル)粉　一升に　一匁九分九厘　一匁六分九厘　一匁四分一厘七毛
一同　糯粉　一升に　二匁一分七厘　一匁八分四厘　一匁七分七厘九毛
一上粉　一升に　六分八厘
一漉粉　一升に　一匁八分六厘
一丸雪　一升に　九分六厘
一甘酒　一升に　一匁一分三厘
一黄納(キナ)粉　一升に　一匁三分九厘　一匁三分八厘

次

一唐土粉　一升に　二匁二分

御好
一唐晒漉粉　一升に　二匁七分九厘
二匁三分七厘

一青粉　一升に　三匁二分五厘

一麥粉かし　一升に　二匁三分

一觀心寺　一升に　二匁三分

一白玉粉　一升に　六匁八分

一御好道明寺　御膳一斤に　三匁二分七厘三毛

一胡麻鹽　一升　一匁

一氷卸し　一斤に　二十二匁九分五厘

右之通り

○蒸籠

一蒸籠　五組　五拾目

右被下御用御廣敷廻り　卯九月十九日

〆

○一玄猪人數左之通り通し出し

是迄五百十八人之處　表　七百五拾人
是迄四百人之處　奥　四百貳拾五人

右御人數丑十月

○一里芋　一升に付

五月中新初　五匁六分八厘　六月中　一匁三分八厘　七月朔日より十五日迄　九分二厘　七月十六日より晦日迄　七分三厘

八月朔日より十五日迄　六分　同十六日より通し　四分二厘

〆

御膳
○一いてう芋　一つ　三分七厘

一はつ芋　一株　一匁九分三厘

一大蓮根　一本　長さ三尺一寸 廻り四寸五分　一匁二分六厘

〆

○一被遣焼饅頭　一箱一半掛にて　二百四十入

〆

御在年一ヶ年
○らうそく　二拾目掛　一万四千百七十八丁

同
一同　三拾目掛　三千五百丁

同
一和砂糖　千六百十六斤半

同
一雪砂糖　八百九斤

右夫々御在中一ヶ年大様御入用高

○御酒被下

一御酒吸物肴二種　　　年寄衆　御附人

但一人前　代二匁二分二厘內　一匁七分吸物肴二種　五分二厘諸白二合代　一合は二分二厘積り

一御酒肴三色　　大御番頭より御目見以上

但一人前　代七分四厘二毛內　五分五厘肴切身昆布　れんこん　一匁九厘二毛御酒三合代

御酒肴一種　　御目見以下末々迄

但一人前　代四分三厘二毛內　二分四厘肴一種　一匁九分二毛　御酒盥一合代

一御年寄衆　六人　御附人　九人

右諸白被下

一御目見以上　四百九十六人　御目見以下　百三十七人

伊賀以下末々　千四百九十一人　女中上通り　六十二人

女中下通り　九十三人　外に　女中用意　上三人 下九人

右夫々へ御酒盥被下

一吸物小串肴二切　女中上通り

但一人前　一匁三厘二毛　吸物　三分六厘　肴　四分八厘　酒　一匁九厘二毛

一肴小串二切　女中中通り

但一人前　六分七厘二毛　肴　四分八厘　酒　一分九厘二毛

總人數　二千二百九拾九人

諸白三升　御酒壗貳石貳斗九升九合

右之通

御能之節

〇御役者

一朝分上通　一汁三菜平燒物香物　拾八人

一同中通　一汁二菜平香物　百二十人

右總別火

一晝分上通り　一汁五菜平鱠燒物猪口香物御酒肴二種　二十五人

一同中通り　一汁四菜　百六十人　用意十人

一夕分上通り　一汁三菜御酒　二十五人

一同中通り　一汁二菜　百三十人

一朝晝夕下人　但濃汁香物　四百人

忍冬酒一德利つゝ以上六百五十五人　此十八人へ被下以下百二十人

右之通り

一左京大夫樣

一汁五菜御酒吸物肴二種御菓子御茶　夕一汁三菜

右御部屋にて
晝夕右同斷　　　阿部飛騨守殿へ
右御小書証御二之間末にて　　　大名衆　三　人
晝　二汁五菜御酒吸物肴二種　　夕　一汁四菜
右鶴之間にて　　　小大名衆　三人
晝　一汁五菜御酒吸物肴二種　　夕　一汁四菜
右鶴之間二之間にて　　　御旗本衆二十人余
晝　一汁四菜御酒吸物肴二種　　夕　一汁三菜
右番頭部屋　　　尾水様御家老二三人
晝夕共右同斷晝は御菓子付
右鶴之間下□(本ノマヽ欠字)板之間にて　　　御同朋頭　二三人
一汁四菜晝夕品に寄一度は御旗本之通り一度は菓子付外に御酒吸物二通硯ぶたさしみ煑肴

晝 一汁三菜御酒吸物御同朋頭と同様　　夕一汁二菜

右御同朋詰所又は雁之間にて

右御本殿へ御移徙御禮に付御祝儀として御能被　仰出御當日之夫々へ御料理人數書左之通り後日之

覺

一櫻流し　一箱に付　　一和歌浦　一箱に付

一紅玉千鳥　拾に付　　一石竹巻　一本に付

一紅簾　　一吹寄かん

一宇すら焼　　菊屋　　一梅の雪　　松屋

一あしろき　一箱に付　　一宮城野　一箱に付

一餡入けんび　十に付　　一京かのこ　一本に付

〆　　〆

一小櫻かん　一箱に付

一すゝ饅頭　拾に付

一難波松

一かん紅梅　　鯉屋

一宮城野かん　一箱に付

一花形卷　　一本に付

〆

右之通

一天保十四年卯八月二十八日四つ比

御姫様御誕生被爲遊候

〆

○一枝豆　　一把に付　　三厘　　大一把は三把掛り一分一厘

月見筋は一把に付五分五厘

一朝倉山椒　　一升目方四拾目に付　　一匁四分三厘

一合は一匁四厘二毛　　拾匁は三分五厘七毛

〆

○　　のしめ着

一大晦日夕御祝之節　　のしめ　　一同夜九つ時御板初御祝　　のしめ

一元日より七日迄　　同　　一十一日　　同

一十四日十五日　　同

一二十日　　御具足　御覽被遊候に付數の御のし上り切に候はゝ平服見合之事

一二十八日　　のしめ　　一三月三日　　のしめ

一四月朔日　のしめ
一五月五日　紋付
一八月朔日　白衣
一十二月廿八日　のしめ
一御發駕之節御着日初御登城とも總別　のしめ
一六月嘉定
一九月朔日より袷袴に成る
一じよや年こし　夕のしめ

一四月十七日　のしめ
一七月七日　白衣
一九月九日　服紗紋付
一九月十七日　のしめ
一十月玄猪　夕のしめ
一十二月御煤拂　服紗紋付

九月十八日
一一位様御誕生日に付染帷子半袴

右之通り

○青物かんぶつ共

一水善寺のり　一枚に付　六匁二厘
一はす芋　一株に付　一匁九分三厘
一茱　一把　四厘六毛
一御捨はき　一つ　五分
一玉子　百　十二匁六分
一自然芋　一本　二匁七分　長三尺七寸　廻四寸五分

一壽仙のり　一袋に付　三匁六分
一生〆治　一株に付五六本付　秋　二分三厘　冬　二分二厘
一目うと　十　二分七厘
一くり　十　四分四厘
一河竹　一本　五分
一ふき　一把　一匁五分

一紅三島のり　一枚　五分四厘
御膳
一かふらほね　一枚　五分四毛
一木のめ　一籠　六分三厘
一御みそ　一升　二匁二分五厘
一東芋　大一つ　一分五厘
「イ」
一芋頭　拾　二匁二分五厘
一はす芋　一株　一匁九分三厘
一中蓮根　一本　二分（長二尺五寸　廻り四寸）
一葉人ぢん　一把　三厘七毛
一生蕨　一籠　六分九厘
二月分　一把　一分一厘
一漬蕨　一把　一分一厘
一御膳のし　四十八本結にて一把　五匁四分四毛（十本壹匁五厘）
一並のし　一把　一匁六分
一五枚綴のし　拾枚　十三匁六分八厘
一差のし　一把　二匁八分

一はす　一本　一匁二分六厘
一同大之筋　一枚　四分一厘
一久年母　一つ　二分一厘
一玉子　十　一匁二分六厘
一唐墨　拾挺　二十七匁九分九厘
一葉附芋頭　一株　夏　二分五厘　秋　二分三厘
「ハ」
一大蓮根　一本　一匁二分六厘（一本長三尺四寸　廻り四寸五分）
一はすの葉　拾枚　一匁三分八厘
「ヲ」
一わさび　拾本　五分七厘
二月中但五把寄（一本此共）五十本　五分五厘
三月　一把九厘　四月　一把六厘
一生若布　一把　一分一厘（但二尺一寸　廻り五寸）
一中のし　一把　三匁三分九厘五毛（十本七分七厘）
一大のし　拾（一本枚本）　六匁二分
一御膳浅草のり　十枚　三匁六分

一次浅草のり　拾枚　一匁七分五厘　　一厚海苔（年々御國廻りすし）　十枚　四匁八分

「ユ」
一花柚　一把　一厘　一枝七八輪　　一本　一厘　花落柚十　三厘

一葉附柚　拾　三分七厘　はなし共同斷　　夏　拾　三分四厘

枝　一本　三分三厘

「カ」
一御膳大枝柿　百　十五匁二分三厘　　但霜降柿筋とも

一片栗　一合　三匁二分三厘　　一片栗面　一把　一匁五分六厘御國廻り筋

一細干瓢　大一把　一分四厘　大一束　一匁四分七厘　　一大河（一本芋 茸）　一本　五分

一御膳枝柿　百　四匁七分八厘　　一同　中　百　三匁九分一厘

一御膳霜附柿　百　四匁七分八厘　　一串柿　一把　並上　四匁二分三厘　五分八厘

一御膳方遣　御膳鰹節　拾本　六匁一分　目方百八十目　　一御廣敷廻り　御膳鰹節　拾本　七匁二分七厘　目方二百十匁

屋きかし筋附上け
一大節　拾本　拾三匁九厘　　一樽抜き柿　拾　一匁四分二厘

右之通り

文化十四丑九月極

「キ」
一御膳料理菊　百輪　一匁三分　　一次同上　一把　一尺廻り　二匁

一御膳料理菊　百輪　よれ菊の筋　二匁　　一同次同上　尺廻り一把　同上　五分

右之通り

「ホ」
一ほうれん草　一把　一厘
　右之通り
「ム」
一青小梅　一本　六分　漬小梅一升五分八厘　一桶は一匁二分
一豊後梅干　拾　九分九厘
一同梅干　拾　四厘
「フ」
一御膳金柑麩　拾　四分八厘　但一升は数千也
一すたれ麩相頁麩　竹麩　一挺つゝにて一匁一厘つゝ
「タ」
一中岩茸　一升　四分　目方十四匁
一漬榎茸　一本　七分八厘
一醤油　一升　二匁
一漬〆治　一合　九分二厘
　右之通り
「コ」
一糀　一升　八分
「込」
一御酢　一升　一匁六分五厘

一房風　一把　十二月中一分二厘　春秋九厘　冬七厘
一豊後梅　拾　一匁七厘
一中央梅　一升　二分五厘
一豊後梅　一桶四百箇入　一匁二分
丁子ふの事
一利休麩　拾　五分一厘　前記留に有之事　卯九月極る
一次ふどう　一籠　三匁二分六厘
　但二十五房入一房に二拾五粒付一房にて一分三厘
一漬松茸　一本　三分二厘
一漬初茸　拾　五分九厘
一次右同　一升　一匁
一子籠　一本　拾七匁
一冬〻(爪)〔瓜カ〕　一つ　夏秋二分七厘　冬九分九厘

一ちよろぎ　一升　四分　一りん子　拾　二分三厘（中上り拾一分六厘）
一漬小梅　一升　五分八厘（一桶は一匁二分）　一土筆　一株　三分（但六寸廻り）
一葉附金柑　拾　九厘（粒は拾二厘八毛　青は拾一分一厘）　一けし　一升　三分九厘（目方二百八十目）
一しそ枝漬　一把　二分六厘　一櫻の實　一合　八分七厘（但みつかき共言）
一御膳鮎串　百本　九分二厘　一細串　百本　四分六厘
一田串　百本　五分二厘　一次田串　百本　一分二厘
一大割串　百本　一分三厘八毛　一さか串　百本　五分二厘
一割串　百本　九分二厘（松葉同串にも用）　一團子串　百本　一匁二分六厘
一青串　拾本　二分八厘
右之通り
「タ」一大岩茸　拾　六匁四分七厘　「ク」一中栗　一升　六分九厘
一土筆　一株　三分（六寸廻り）　一樽ぬき柿　拾　一匁四分二厘
一大豆　一升　六分八厘　一きん子　拾　三匁九分三厘
一平そうめん　一把　一匁二分二厘　一伊豫そうめん　一箱　三拾七匁七分二厘（但六百把入百目一分九厘）
一同そうめん　百目に付　春　五分五厘　夏　五分二厘　秋　四分五厘　冬　三分七厘
一次そうめん　一把　一分二厘（大一匁二分）

一加賀そうめん　一壺　四匁九分九厘
一御獻上川越そうめん　百目に付　二匁七分六厘
一同下り上そうめん　十把　一匁一厘

一三輪そうめん　百目に付　九分一厘
一御膳氷そは　一袋　三分三厘
一海そうめん　百目に付　五分七厘此目方八十目也一升五分九厘

右之通り

○御膳御極

御朝御肴

一鯛尺二寸　一枚
御汁之節　御煮物之節　小くし　蒸たい　火取り　切干

一御燒物代り尺　三枚
御切燒　山吹燒　御煎物背切たい

一御鱠尺二寸　一枚
御すし　御吸物八寸三枚　かきたい三枚　小川たい　白金流し尺二寸二枚　かまほこ
土器燒尺四寸一枚

一小鯛六寸　六つ
但ひらきむしの節は七つ　御燒物　御煎もの

一さゝめき四寸　八つ
御澄し　御煎もの　汐みろい　但巻さゝめき四寸　十四　魚田　御すし取合　御吸物八つ

一鯵七寸　六つ
御燒物　御煎物　作り身尺二本　細引五寸十五　魚田十八　すなし十八　御すし見合
煮物　火取り

一鱚五寸　十五
御汁之節　合きす廿四　重きす七つ　御肴の節は拾　御澄し十五　結ひきす　御煎物拾五
煮物六寸十四　御燒物　生干

一甘鯛九寸　二本
御汁　御澄し　御二の汁　火取り尺二寸二本　玉子掛　小くしは　御燒物七寸六つ
御煎物生干　但しひらき生干之節は七つ

一王餘魚八寸　六枚　御燒物　御いり物　葛たゝき八寸三枚　御二の汁　御澄し　御身九寸三枚
蒲やきの節八寸八枚
一魴鮄七寸　六つ　御燒物　御いり物　生干ひらき之節七つ　御汁尺二本　御煮物　御身
一いな七寸　六つ　御燒物　御いり物　生干　但ひらき之節七つ　魚田五寸十四　火取り　細引作り　丸すし
一ぼら尺四寸　一本　御鱠　御濱燒三寸二本　御切燒
一藻うを七寸　六つ　御燒物　御いり物　御汁尺二本　御煮物　火取り
一鮃尺四寸　一枚　御鱠　蒸し鮃　御煮物　御すし尺一枚　御煮物尺三寸　二枚切鮃
一鮎　初見合　三寸　七十　四寸　四十　五寸　三十　六寸　十八
御燒物六寸　十八　子持七寸　十二　子斗上け候節は三十　丸すし五寸　十二
一相浪七寸　六つ　御燒物　御煮物　蒲燒　但ひらき之節七つ　御汁尺三寸一本　御煮物
一さより　御汁八寸十二本　御澄し十四　御煮物　合さより二十四　御吸物十二　重さより四本　御鱠十本　但細引之節
一鱸尺四寸　一本　御汁　御煮物　御鱠　御二の汁九寸一本　背切四寸二本　御切燒尺三寸　御肴見合
一蜆　一升　一床節　六拾う
一鮑六寸　三盃　御煮物三盃　扮あわひ　御汁　磯邊燒六寸七盃　生貝燒六盃　打あわひ五盃　御肴二盃
あらみそ煮六盃　當座のしもみ五盃
一赤貝大　十二　御煮物　御鱠　赤貝燒十八　御肴七つ
一車海老大　十五　御汁十五　御煮物　花海老　鬼から燒　煎車海老　色附燒　重海老大六つ　海老蒲はこ廿五

一小海老　七十
一子持鯉尺六寸
一しま鯵七寸　六つ　但御焼物之節七つ
一たこ尺二寸　一盃
一たいらき大　十四　御品に寄見合　御汁　御煮物　御鱠　御皿　御肴　御すし
一くしこ　七本
一小かも　三羽
一うつら　九羽
一いか中　十四盃　むし　から草　御煮物御汁右同　御鱠　牛へん中十四　白金流六つ　但しかまほこ
一いなだ四寸　一本　御汁　御鱠　酢いり
すり身御肴
一さわら尺六寸　一本
一はむ六寸　一本　但干はむ　崩し　骨切五寸三本　大平之節六寸二本
一鮒七寸　六つ　御焼浸し　昆布巻四寸十八
一伊勢海老大　十四　御汁　御煮物御皿附
一かふら骨　二枚
一うなき　小十五本
一眞な鰹七寸　六つ　御鱠の節　尺一寸二枚
御切焼尺二寸

一かつほ尺四寸　一本
一赤ゑい尺二寸　一盃
一白魚あみ入二百五十位より
一蠣數七十　一升
一かつうこ　十二
一眞鴨　一羽
一蛤　一升
一わらさ尺四寸　一本
一見る喰大　十八
一さゝへ大　十五　煮焼之節　御肴六つ
一赤にし大　九つ
一すまめ大　二枚
一糸より七寸　六つ　御焼物御いり物六つ
一鱒　御鱠尺四寸一枚　御切焼尺三寸二枚

一丹後ふり　一本

右之通り

御朝御青物

一枝豆　○七把△六把
一貝割菜　四つ
一大角豆　二合
一御豆腐　一丁
一青昆布　二枚
一白瓜同上　○七本△五本ロ四本
一堀川午房　○四本△三本
一大椎茸　十二
一里芋　一升
一錦麩　十八
一ふし豆　百
一大根初見合　○五本△四本
一小丸麩　五十

踊豆腐二丁　そは切　巾着三丁　茶椀　寄豆腐一曲
昆布巻豆腐七枚　かんひやう二把

一さやさゝけ　○七わ△六わ
一せんまい但し漬は二わ　○七合△五合
一巻湯葉　大二本小三本
一新午房　三十本
一三つ葉　五株
一粒椎茸　三合
一比門谷人參初見合　○七本△六本ロ五本
一丸麩　○十四△十二
一平田豆　三合
一夏大根　七本
一簾麩　二枚

一冬爪（瓜カ）但少き比見合　一つ
一小豆但し小豆は釜鉾四合　三合
一苞麩　大○五本△二本
一いてう芋　三つ御汁之節
一院玄初見合　○三百△二百八十ロ二百七十
一岩付午房　七本六本
一うと　○二十五本△二十本
一こまこますの節五合　二合
一朝鮮くわい　大十五
一小かふ　二十五
一細干瓢但巾着之節二把　五把
一縮緬麩　十八
一相良麩　二枚

一金柑数　○三百△二百七十ロ二百五十　一飛ら数　十二　一田楽数　五十

一鱙数　○九十△八十ロ七十五　一茄子初見合　○二十△十八　一大茄子　十二

一中茄子　十五　一小茄子　二十　一木耳　○十二△九つ

一干大根御汁之節拾本　一石茸かんしん梅之節二十五　三十二十　一細湯葉　七十本

一養老梅　十八　一大梅干梅ひしほの節四十五　二十五　○一玉子　二十

一月見玉子包玉子　十五十五　一玉子　十五

○一苞玉子　二十「○二ロ一所」　しんちよ入十五　直玉子廿八　ふわ〳〵玉子八つ　崩し入五つ

すり込　厚焼玉子十五　白玉子焼十八くつし入　すりみ崩し入十一　きんし玉子十二

山吹燵十五御肴に寄見合　流し玉子十五　土器焼三十かわらけ六枚

一箏初見合　○十五本△十本　一ちさ　五把　一くこ　五把

一葉生姜初見合　十五本　一たでたで酢之節五把二把　一しそ初見合　五把

一長芋　一本　一茗荷の子初見合　二十　一茗荷竹初見合　二十五本

一根芋　○二十五本△二十本　一ねりま大根卸し大根御品に寄見合　七本三本　一生わかめ　四把

一榎茸　○二十五株△二十株　一長かふ　七本　一莱　五把

一蕗初見合　五把　一百合根　四つ　一自然芋　○四本△三本

一河芋　九本
一大くり御品に寄見合　二十
一勝栗御煮出之節　二合
一松茸初見合　○二百五十目　△二百四十目　□二百三十目
一久年甫いちごもさき之節　七つ
一銀なん御品に寄見合　三合
一しん菊　七把
一河首鳥　二つ
一つくはね　三合
一氷豆腐　十二
一けしけし酢之節五合　○二合　△一合
一生姜御鱠　一合
一しその穂　○七株　△六株　□五株
一はす芋初見合　○七株　△五株　□四株
一八つ頭芋　○七つ　△五つ

一八重成もやし　二十把
一同中御鱠大三つ　七合
一東茸牛へんし上入　一つ
一漬松茸　六十五
一みつかん　十五
一わさび　二本
一たんぼう　五把
一わらひ大　○七把　△五把
一つくし　○二十五株　△二十二株
一法蓮草　七把
一ぶどう　拾房
一金柑　六つ
一むかこ　七合
一三島のり御吸口　二枚
一山升の(實)一本芽初見合　二合

一浅草海苔醤油出之節　二把
一黒くわゐ　二十五
一初茸　○九十　△七十　□六十五
一漬初茸　七十
一黄菊花　三百輪　二百八十輪　二百五十輪
一葉人參　七把
一さいかち　五把
一平湯葉御品に寄見合　五枚
一こんにやく　○五丁　△四丁
一〆治　○二十五株　△二十二株
一松露　七合
一銀のり　二袋
一生海苔ひしほの節七合　三合
一青山升　五勺
一飛葉びわの事　拾房

一五分湯葉 ○七十本 △五十本 □四十五本　一蕪　七つ　一三つ葉　七株
一嫁菜　五籠　一くるみ　四合　一半へん数　十二
一くわゐ　二十　一葉子昆布 照り煮の節は三枚 二枚　一栗蒲鉾　七十
一松菜　廿五把　一岡見る ○一升 △九合　一長さゝけ ○七把 △六把 □五把
一水仙寺海苔 ○二枚 △一枚半　一壽仙海苔　四袋　一玉子半へん　二十五
一しその み　大　六把　一櫻の花　三合
○印は先規より之御極　△印は天保九戌年御減　□印は同十亥年御減
右之通り
御二度目御肴
一鯛尺三寸　一枚　御煮物ゐい　玉子掛小串　蒸したい　火取りたい尺二寸二枚　切千　御切燒　背切尺一寸三枚
土器燒鯛尺二寸二枚　御鱠尺三寸一枚　御二の汁七寸三つ　御吸物尺三寸一枚　かき鯛九寸三枚
一小鯛六寸　七つ　御燒物　御いり物
一さゝめき四寸　十二　御澄し　御煮物　汐ゐい　魚田四寸十八　火取り　御すし　同三十
一鯵　七寸　七つ　御燒物　御いり物　作り身尺一寸二本　御鱠細引五寸共　魚田五寸廿七　酢押　御すし五寸三十
火取りゐい　御煮物五寸十八
一鱚　五寸　廿三　御汁の節　合きす三十六　御すし十八　汐　御煮物重きす五寸十　御煮物六寸十八　御燒物　生干
一甘鯛九寸　三本　御澄し　御二の汁　火取り　小串　御汁　御燒物七寸七つ　御煮物　生干

一かれい八寸　七枚　御燒物　御煮物　蒲燒之節八寸十二枚　くず叩尺三枚　御二の汁尺三枚　御澄し尺三枚
御煮物尺三枚

一ほう保七寸　七つ　御燒物　いり物　生干八つ

一いな　七寸　七つ　御燒物　御煮物　生干八つ　魚田五寸十八　丸すし二十

一ほら尺一寸　一本　御鱠之節　御濱燒尺二寸三本　御切燒尺二寸三本

一藻うを七寸　七つ　御燒物　御煮物　御汁九寸三本　御煮物　火取り

一鮃尺五寸　一枚　御鱠　御煮物　蒸し鮃　御すし尺三寸一枚　御煮物尺一寸三枚　切ひらめ

一鮎　鮎子之節四百五十　初見合　御燒物五寸三十五　子之節七寸十四　子斗り上り候節四十
丸すし五寸三十

一相浪七寸　七つ　御燒物　御煮物　蒲燒七寸九つ　御汁九寸三本　御煮物　火取り

一さより八寸　十八　御汁　御澄し　御煮物　合さより三十六　御吸物九本　重さより八本　御鱠細引十二本

一鱸尺五寸　一本　御鱠　御煮物　御汁尺四寸一本　御二の汁尺四寸一本　御肴　御吸物　御切燒尺一寸三本

一蜆　一升　一床節　九十

一鮑六寸　八盃　御煮物　扮鮑　御汁

一打鮑六寸　九盃　生貝燒　磯邊燒　あら味噌煮十二盃　御肴六寸五盃　御品に寄見合

一赤貝　十八　御煮物　御鱠　御肴大十二　赤貝燒廿

一車海老　二十三　御煮物　鬼から燒　いり車海老　色附燒　御汁大廿三　重海老十二　海老かまぼこ三十五

一小海老　百十
一子持鯉　二本
一嶋あし七寸　七つ
一たこ尺三寸　一盃
一たいらき大　十八　御汁　御煮物　御鱠大十二　御取合にて見合　御肴十二　御すし　御取合にて見合
一くしこ　九本
一小鴨　三羽
一うつら　十八羽
から染　御煮物　御汁　御鱠　白金流し入六つ
一いなだ尺五寸　一本　御鱠　酢入　すりみ尺四寸一本　御肴
一わらさ尺五寸　一本
一はむ　六寸　一本　五寸　一本　骨切同五本
一鮒七寸　七つ　御焼浸し　昆布巻四寸廿七
一伊勢海老　十八　御汁　御煮物　御皿附
一蕪ほね紅白之節　三枚
一白金流いか中　拾盃
一いか大半へん　二十

一鰹尺六寸　一本
一赤ゑい尺三寸　一盃
一白魚初見合　一升一合
一かき　百十
一かつらこ但きん子之事　十五
一眞鴨　一羽
一いか中　十八　蒸しいか
一蛤　一升
一さわら尺七寸　壹本
一見る喰大　二十
一さゝゑ大　二十　壷焼之節五つ　御肴五つ
一赤にし大　十八
一するめ松立御肴之節　二枚
一たい尺三寸　三枚
一うなき小　三十六本

右之通り

御二度目御青物

一さゝげ初見合　○十把　△九把　□八把
一貝割菜　六籠
一小豆　五合
一苞麩大　三本
一花とうふ　十一
一青昆布御品に寄見合　五枚
一自然芋　○六本　△五本
一水菜　○十株　△七株
一椎茸大　十八
一里芋　○一升五合　□一升三合
一小かふ　○三十五　△三十
一葉付大根　十本
一縮緬麩　二十五

一枝豆初見合　○十把　△九把
一順才　○一升　△八合
一大角豆　五合
一茶椀豆腐　十一
一いてう芋　○七つ　△五つ
一院玄さゝげ初見合　○四百五十　△四百二十　□四百
一白瓜初見合　○十本　△八本　□七本
一木瓜初見合　○十本　△八本　□七本
一御豆腐御品に寄見合　二丁
一比門谷人しん　○十一本　△十本
一ふじ豆初見合　○百三十　△百
一糸巻湯葉　二十三
一丸麩大　十八

一冬瓜同　一つ
一せんまい　○一升　△八合　□七合
一巻湯葉大　二本
一丸寄豆腐　十一
一葉付芋頭大　○十　△八
一芹　拾把
一新午房初見合　三十本
一こま　三合
一寄豆腐　二曲
一朝鮮くわゐ　二十五
一平于瓢御だし二把　三把
一重湯葉　二十三
一綿麩　二十五

一相良麩　三十
一あわ麩大　十八
一小茄子　○四十　△三十五
一石茸　○五十　△四十五　□四十
一細干瓢小　三十把
一直口玉子　三十八
一土器焼玉子　但土器九つ　四十五
一しんちよ　三十
一たで　三把
一茗荷竹初見合　三十五
一茗荷子初見合　三十五
一蓮初見合　二本
一ねりま大根　卸し煮十本御品に寄見斗　四本
一榎茸　○三十五株　△三十株

一梅干麩　○百十　△百　□九十五
一平麩好梅干之節　十八
一干大根　○十五本　△十二本　□十本
一木耳大　○十五　△十二　□十
一養老梅　二十七
一ふの焼玉子　三十
一崩し入玉子　六つ
一竹の子初見合　○十七本　△十五本
一しそ　五把
一くこ　十把
一在島午房　○六本　△五本
一天王寺蕪大　九つ
一和歌布　五把
一長かふ　八本

一簾麩　三枚
一茄子初見合　○三十　△二十五　□二十
一嫁菜　六籠
一細湯葉　○九十本　□六十五本
一梅干　梅ひしほ之節九十御品に寄見合　七十
一原麩の焼玉子　四十
一ふわ〳〵崩し　十五
一ちさ御品に寄見合　十把
一長芋　二本
一葉生か初見合　二十本
一石付午房　○十一本　△十本
一根芋　○三十五本　△三十本　□二十七本
一莱　七把
一ふき大初見合　○十一把　△七把

一百合根 ○七つ △六つ
一茄子大しん上やき 十八
一淺草海苔 三枚
一玉子しん上之節 三十
一ぎんなん 五合
一粕漬みかん 二十
一三つかん 三十
一枝空豆 ○十把 △九把
一しんきく 十把
一くるみ 七合
一平湯葉 五枚
一白玉燒玉子 三十
一こんにやく ○七丁 △五丁
一青昆布こんぶまき豆腐之節 八枚
一蠣麩 ○百十 △百 □九十五

一かしめ 五把
一八重成もやし 三十五把
一勝栗御品に寄見合 五合
一束芋しん上之節 一つ
一松茸 ○三百七十目 △三百五十目 □三百四十目
一久年甫大市こもさき 十五
一菊花 ○四百五十輪 △四百三十輪 □四百輪
一わさび 三本
一たんぼう 六把
一河首烏 十
一茶せん湯葉 十六枚
一枝豆初見合 ○十一把 △九把
一氷こんにやく 十八
一金かん麩 ○四百五十 △四百二十
一小丸湯葉 九十

一河たけ ○十五本 △十三本
一栗大くりかまほこ百 三十
一黒くわゐ 三十五
一初茸 ○百十 △百 □九十五
一漬松茸 ○十八本 □十五本
一菊の葉 七十枚
一青梨子御品に寄見合 七つ
一葉人參 十把
一さいかち 六把
一わらび大初見合 ○十一把 △九把
一津久羽根 二合
一土筆 ○三十五株 △三十株
一小丸麩 九十
一俵麩 ○百十 △百 □九十五
一見留 十五房

一法蓮草　○十把　△七把
一すいき　十八本
一花焼麩　三十五
一粒椎茸　五合
一うと　○三十五本　△三十本
一菓子昆布　てり煮の節四枚　三枚
一うとん粉　御朝御二度目　三升　四升
一長さゝけ大　○十一把　△九把　□八把
一御砂糖るい　御朝御二度目　○百二十匁　△百匁　○八十目　□七十目
一櫻の花　五合

一中くり　一升
一むかご　一升
一五郎湯葉　○九十本　△七十本
一飛わ　十五房
一きせい豆腐　○六十　△四十
一生わかめ　五籠
一岡みる　○一升五合　△一升四合　□一升三合
一壽仙のり　○六袋　□五袋
一平ふし　○十八本　□十六本

一松露　○一升五合　△一升一合
一生椎茸　二十五
一すりみ崩入玉子　二十
一〆治　○三十五株　△三十株
一くわゐ　二十五
一玉子そうめん　御朝御二度目　七十　九十
一水善寺海苔　二枚
一火取節　○二十四本　□二十二本
一しそのみ大　七把

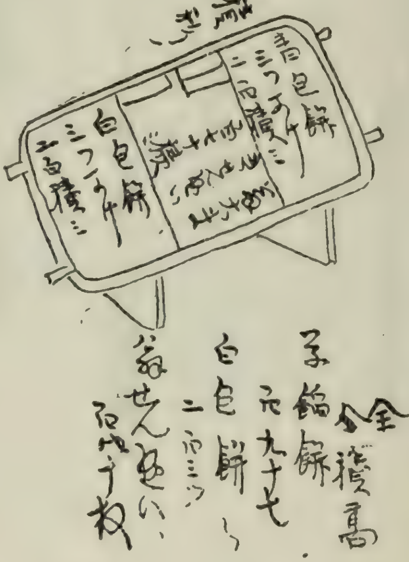
○印は總体先規之御極　△印は同天保九戌年より御減　□印は同十亥年より御減

右天保十二丑年五月十四日寫之

天保十五年辰四月十九日に御内々より御献上御廣敷廻り

上磨き居臺一枚

寸法　長さ　貳尺
　　　巾　　尺六寸五分



公儀

一位様へ

右之通り餅は菊屋納せんへいは見買之事

本文是迄御膳仕立に付此度も御膳仕立に致し候得共本文之内翁せんへい是は町うりの事故右之趣を以て岩尾九助方御廣敷御用達中へ談候處以來は次仕立にて宜敷伊藤爲十郎初一統被申通候事以來不間違進上方へも通し候事

藤田才次郎

文之助

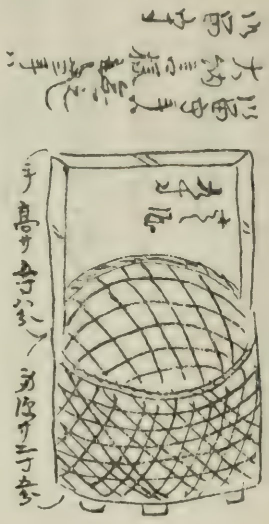
岡次右衛門

右卯十四年御音信帳に有之事

一御簾中様へ被進御品は是迄御膳方仕立且又墨屋にて仕立させ候事も有之候處御簾中様御膳は墨屋仕立被召上候事故以來は墨屋仕立致候儀岩尾九助方御廣敷御用達中へ被談候處以來は墨屋仕立にて宜旨伊藤爲十郎初一統被申通候事然る處是迄は墨屋にて出來候節直段等色々班々致次直段等拂

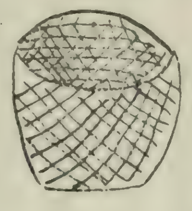
遣し候事も有之候處右次直段拂遣候儀甚不當成事故岩尾九助方御用達中へ承り合御廣敷御膳直段
左之通りにて拂遣候筈相極候事
　本文之通り候得共猶其節に承り合吳候樣被申候事
　右辰四月廿一日
　御簾中樣へ被進
　　御膳御にしめ
　七寸御重一重入ほたん海老松茸長芋鯛小串かんひやう代四十五匁也
　　しほう御紋ちらし御重
同御重二重　かつら餅五十　山吹饅頭八十　玉らみ三箱　但並掛
一同八寸御重　御羹染物　代五十貳匁
　是は序に承り置覺
右之通り
天保十五年辰四月廿一日に承り合御廣敷直段
　辰五月廿八日に献上
一麴町御屋敷御庭にて成候山もゝ
公方樣
一位樣　江　二籠
御獻上　御用高千百三十程殘二百八九十程右之內少々臺所內かゝりへ

大樣千五百位程下る御用部屋へ戻す



一籠に數四百程づゝ入

右籠へ山もゝ詰め最葉付にて二籠



御備四籠

此御廣敷より下る一籠に數二十づゝ入

銀御鉢に數二百五十程入る

御簾中樣へも御上に成る

右表御用部屋行事

南紀徳川史卷之八十

臣　堀内信編

御臺所諸極下

○油證文

一水油　○御膳立御廊下五ヶ所　一斗三升八合六勺
御膳所御臺所頭詰所　御臺所人詰所　當番座　御鉢方
「一斗三升三合九勺八才」「　」内一本朱書以下同
此有明十ヶ所　但一箇月一升三合八勺六才つゝ
「同小の月一升三合三勺九才余」
一同五升一合　右拾箇所さし増
「同四升九合三勺」
此差増一箇月五合一勺つゝ
「小の月四合九勺三才」
△合一斗八升九合六勺
「一斗八升三合二勺八才小の月渡り」
右有明證文立に御座候得共焚不足に相成候に付差増共相渡り候様

△外に四合毎月神明棚燈明入用
但正月に限り二升七合相渡候筈
△八合同御庭御堂右同
「一斗九升五合二勺八才小の月渡り」
○總合貳斗一合六勺
右之通り
一斗二升四合七勺四才
「一斗二升五勺八才二合」
一鯨
小間使組頭詰所　同所御中間部屋　同御中間部屋　常渡り御中間部屋　御臺所添御廊下　御廣
敷添御廊下　御膳立口御廊下　不寝番并小買物方
此有明九箇所　但一箇所に一ヶ月一升三合八勺六才
「小の月一升三合三勺九才八毛」
一同四升八合六勺　右九箇所月中差増一夜に一勺八才つゝ
「小の月四升六合九勺八才」
合一斗七升三合三勺四才
「小の月一斗六升七合五勺六才二毛」
右有明證文立に候得共焚不足に相成候に付差増共相渡候樣

外に五合不寝番所月廻り入用
三石合一斗七升八合三勺四才
「小の月一斗七升二合五勺六才二毛」
右之通り
一鯨　　三升四合六勺五才
御春屋方　進上方　板前方○寸尺方　張番所
「小の月は三升三合四勺九才五毛」
此半夜分五ヶ所　但一箇所に一箇月六合九勺三才つゝ
「小の月六合六勺九才九毛」
「朱丸四箇所にて都合八ヶ所御留守方は不用之事」
一同　　三升四合六勺五才　　右五ヶ所月中差増
「小の月三升三合四勺九才五毛」
但一箇所一箇月六合九勺三才つゝ
「小の月六合七勺九才九毛」
△合六升九合三勺
「小の月六升六合九勺九才」
右半夜分證文立に候得共焚不足に相成候に付差増とも相渡候様

右之通り

一同　　一升七合三勺二才

進上部屋　味噌立方　椀洗方　張番二階　食方

「小の月一升六合七勺四才二毛五糸」

此小半夜分五箇所　但一箇所に一箇月三合四勺六才四毛

「小の月二合八勺八才六毛七糸」

一同　　一升七合三勺二才　　右五箇所月中差増

「小の月一升七合三勺二才」

但一箇所に一箇月三合四勺六才四毛

「小の月二合八勺八才六毛七糸」

△合三升四合六勺四才

「小の月三升三合四勺八才五毛」

右小半夜分證文立に候得共㮤不足に相成候に付差増相渡候様

○總合二斗八升二合二勺八才

「小の月二斗七升三合三勺七毛」

右之通り

三月より八月迄短夜

一大の月　一升五勺　一小の月　一升一勺五才
九月より二月迄長夜
一大の月　一升三合八勺六才　一小の月　一升三合三勺八才
右之通り半夜小半夜割合を以て可拂之
天保十四年卯十月改め　御勘定所

水油鯨油證文幷差増帳

○御肴るい

一鰡尺三寸　一本　三匁一分一厘　一左寄八寸　一本　二分七厘
一こち尺二寸　一本　二匁五厘　一赤ゑい尺一寸　一盃　二匁三分七厘
一平目尺六寸　一枚　四匁八分五厘　一赤貝　拾　三匁二分
一赤貝中　拾　二匁四分二厘　一同小　拾　二匁五分
一たいらき大　一枚　七分（一本二七）厘　一鱸尺六寸　一本　四匁九分六厘
増すし一御焼物鯛　一枚　二匁二分六厘八毛
一相波　一つに付
四寸 二分一厘　四寸五分 二分四厘　五寸 二分六厘　五寸五分 四分九厘　六寸 七分三厘
六寸五分 一匁三分五厘　七寸 一匁一分四厘　七寸五分 一匁三分五厘　八寸 一匁五分六厘　八寸五分 一匁七分九厘

九寸 二匁　九寸五分 二匁二分一厘　一尺 二匁四分六厘　尺五分 二匁六分三厘　尺一寸 二匁七分九厘
尺一寸五分 二匁九分五厘　尺二寸 三匁三厘　尺二寸五分 三匁一分五厘　尺三寸 三匁二分九厘

小相波　拾　八分二厘

一甘鯛　一本に付
五寸 三分二厘　五寸四分 四分五厘　六寸 五分七厘　六寸五分 七分　七寸 八分二厘
七寸五分 一匁一分四厘　八寸 一匁四分七厘　八寸五分 一匁八分四厘　九寸 二匁二分一厘　九寸五分 二匁二分九厘
尺 二匁三分七厘　尺五分 二匁四分八厘　尺一寸 二匁六分三厘　尺一寸五分 二匁九分一厘　尺二寸 三匁二分
尺二寸五分 三匁六分一厘　尺三寸 四匁三厘　尺三寸五分 四匁二分六厘　尺四寸 四匁五分一厘

一赤にし　拾　大一匁六分三厘　中一匁二分六厘　小七分八厘

一赤貝　拾　大三匁二分　中二匁四分六厘　小二匁五厘

一赤ゑい　一枚に付
八寸 一匁五分六厘　九寸 一匁九分七厘　尺 二匁九厘　尺一寸 二匁三分七厘
尺二寸 二匁七分九厘　尺三寸 三匁四分五厘　尺四寸 三匁六分四厘

一さわら　一本に付
尺より尺二寸迄 九分八厘　尺三寸より四寸迄 二匁六分二厘　尺五寸 四匁八分七厘　尺六寸 五匁七分九厘　尺七寸 六匁五分
尺八寸 六匁八分　尺九寸 七匁三分七厘　二尺 八匁一分二厘　二尺一寸 八匁九分七厘　二尺二寸 十匁二分六厘

二尺三寸 十一匁五厘　二尺四寸 十一匁九分　二尺五寸 十三匁八分九厘

一さより　一本に付
五寸 一分四厘　六寸 一分六厘　六寸五分 一分七厘三毛　七寸 二分三厘　七寸五分 二分六厘
八寸 二分七厘　九寸 四分四厘　尺 四分九厘

一鮭子持共　一尺に付　但初鮭七拾五匁也
巳八月十三日二百目御用に出る卯年二百目有之候に付卯年之通り極る
一尺に付三拾五匁也
三度目より證文
尺四寸 八匁一分九厘　尺五寸 九匁五分二厘　尺六寸 十匁七分八厘　尺七寸 十一匁四分二厘　尺八寸 十二匁七厘
尺九寸 十二匁五分一厘　二尺 十二匁九分四厘　二尺一寸 十三匁三分八厘　二尺二寸 十三匁八分　二尺三寸 十四匁六分六厘
二尺四寸 十五匁四分三厘　二尺五寸 十六匁三分八厘

一鮭腹子　一腹に付　三匁七厘

一川ぎす　一つに付　七寸 六分六厘

一めばる　一つに付　四寸 一分二厘　五寸 二分四厘　六寸 四分一厘　七寸 五分七厘

同小之筋　拾　一匁二分三厘

一見類喰　拾盃に付　大二匁四分一厘　中二匁七厘　小一匁三分八厘

一茂魚　一つに付

五寸　二分四厘　五寸五分　三分五厘　六寸　四分九厘　六寸五分　六分二厘　七寸　七分六厘
七寸五分　九分九厘　八寸　一匁二分三厘　八寸五分　一匁六分八厘　九寸　二匁一分五厘　尺　二匁四分二厘
尺五分　三匁一分八厘　尺一寸　三匁六分四厘　尺一寸五分　四匁四厘　尺二寸　四匁三分八厘　尺二寸五分　四匁八分九厘
尺三寸　五匁四分二厘　尺三寸五分　五匁八分　尺四寸　五匁九分一厘

同　小　拾　一匁六分四厘

一牛へん　一つに付　四分七厘　一竹輪崩　一本に付　三分八厘

一大板かまほこ　一枚に付　一匁五分一厘 日の出は五分増　一きす牛へん一つに付　一匁

御好卯七月十一日
一海老大かまほこ一枚に付　十三匁　一大かまほこ 仕立方一枚にきす五寸にて三十五仕立　此九匁五分

　一枚大さ　長六寸三分　巾二寸三分　厚一寸三分

御膳仕立　代五匁五分也　是は辰五月極る

○御献上御定式

一活鯛尺五寸　三枚居　百四十七匁八分二厘　二枚居　九十八匁五分五厘

一同即刻御献上　尺五寸三枚居　二百六匁九分五厘　同二枚居　百三十七匁九分六厘

　但即刻二十一時より十八時迄の限り

一御献上定式即刻之間夕之値段一折に付　三枚居　百七拾二匁五分　二枚居　百十五匁

一暑中寒中に付御献上筋　三枚居一折　百七十二匁五分

一正月七日四月十八日生鯛尺五寸一折　三枚居　百九十二匁一分七厘　二枚居　百二十八匁一分一厘

但目の内より鱗留り迄定

一少將官以上右同　三枚居　二百五十一匁三分　二枚居　百六十七匁五分三厘

一十萬石以上四品以上幷諸大名總御獻上　尺五寸三枚居　三百八十四匁三分四厘　同二枚居　二百五十六匁二分二厘

右之通り

一御膳米白にて一石と見右五にて割れは　玄米貳石と成るを

一割二分を掛て出る所二番篩となる

右二番篩へ外一割七歩三厘を掛て玄米に成引

一本右(元)玄米へ五歩五厘を掛て　小米出る其小米へ外八歩を掛て玄米となる引

玄米

小以

外に鼠喰俵欠

元玄米高へ　一歩二厘五毛を掛て鼠喰出る

右之通

一餅白米一石は四五にて割れは　玄米に出る

右玄米かけ方は御膳米之通り

右之通り　一臼に付突ちん一匁九分　　飯料一臼に付一升つゝ

○琉球人參上之節

一御書院にて　正使へ

　二　糸花五本差改敷檜葉金銀箔置銀たひ大緣高木地三方杉やうじ

　　御菓子

認め　源　氏　糖　二　　同海どう　五　　みかん　五　　村時雨　七

　一　朧大饅頭　三

一御二之間にて　副使へ

　　糸花三本差改敷檜葉金銀箔置檜大緣高木地高足打杉やうじ

　　御菓子

　　右同斷

一御椽頰　　家老一人　　通詞一人　　用人二人

　　同並木檜大緣高木地高足打杉やうじ

　　御菓子

　　右同斷

　　但大隅守家來へは平足打に戴之

右は紅葉の間にて仕立

一鶴之間　中官　六人
同檜大縁高木地高足打杉やうじ
御菓子
右同斷
一同　留守居　一人
但同斷
右櫻之間二之間にて仕立
一御玄關前腰掛にて　下官　三十二人
白木杉盛大饅頭三つゞゝ杉やうじ
右之通り
天保十三年寅十一月廿九日參上之節
〇一生蠟燭　一貫目に付　代貳拾貳匁貳分貳厘
三拾目掛　一挺　正味貳拾五匁　代五分五厘五毛　一分四厘七毛安し
二拾目掛　一挺　正味拾壹匁　代貳分四厘四毛　八厘安し
右之通り
〇一貝盡し居臺粉塗
長さ　二尺四寸八歩　巾　一尺三寸五分　高さ　代拾七匁也

○一御進物肴寸法

一小鯛　　一枚に付

五寸 八分五厘　五寸五分 一匁一分四厘　六寸 一匁六分一厘　六寸五分 二匁一分八厘　七寸 二匁七分五厘

七寸五分 三匁一分三厘　八寸 三匁五分一厘

一茂魚　　一つに付

五寸 二分七厘　五寸五分 三分六厘　六寸 四分一厘　六寸五分 六分三厘　七寸 八分一厘

一石かれい　　一つに付

六寸 三分六厘　六寸五分 四分九厘　七寸 一匁八厘　七寸五分 一匁一分七厘　八寸 一匁三分五厘

八寸五分 一匁四分四厘

一石持　　一つに付

六寸 四分五厘　六寸五分 四分九厘　七寸 一匁八厘

一相波　　一つに付

五寸 四分一厘　五寸五分 四分五厘　六寸 五分四厘　六寸五分 五分九厘　七寸 六分三厘

七寸五分 九分　八寸 一匁一分七厘

一きす　　一つに付

四寸 八厘　四寸五分 一分七厘　五寸 二分六厘　六寸 三分四厘　六寸五分 四分三厘

一あし　六寸 二分七厘　一つに付　六寸五分 四分五厘　七寸 六分三厘　七寸五分 六分七厘　八寸 七分二厘

一ほうぼう　六寸 三分六厘　一つに付　六寸五分 五分四厘　七寸 六分三厘　七寸五分 七分二厘　八寸 八分一厘

一さより　七寸 二分五厘　一本に付　七寸五分 三分一厘　八寸 三分六厘

一糸より　六寸 七分二厘　一つに付　六寸五分 九分九厘　七寸 一匁八厘　七寸五分 一匁一分七厘　八寸 一匁四分四厘

一せいご　五寸 二分四厘　一つに付　六寸 二分七厘　六寸五分 三分七厘　七寸 四分五厘

一甘たひ　六寸 四分五厘　一枚に付　六寸五分 七分貳厘　七寸 九分　七寸五分 九分九厘　八寸 一匁八厘

一大貝盡し　七色種一折　代三拾五匁五分

右上巳に付

御姫様方へ被進之
御進物値段

一鯛尺四寸　二枚居　二拾七匁五分七厘　　一同尺四寸　三枚居　四拾目九分
一同尺三寸　二枚居　二拾壹匁三分四厘　　一同尺三寸　三枚居　二拾二匁一厘
一同尺二寸　二枚居　拾四匁二分三厘　　一同尺二寸　三枚居　二拾一匁三分四厘
一同尺一寸　一枚に付　六匁二分二厘　　一同尺一寸五分　一枚に付　六匁六分五厘
右之通り

青物

一さつま芋　一〆目に　付二匁五分　　一大小豆　一升　一匁二分六厘より一升一匁三分八厘
一小豆　一升　九分二厘　　一沼小豆　一升　七分三厘
一ちよろき　一升　三分五厘　　一天王寺蕪　拾　一匁一分
一二股大根　一本　一分四厘　　一大たいこん　一本　四分六厘
一黒豆　一升　五分五厘此三百八十目　　一青豆　一升　五分七厘こんごん豆を言
一平田豆　一升　一匁二分六厘がんくひを言　　一枝豆　拾本　七分八厘
一藤豆　拾　一分一厘　　文化七申十月　一嬉しの　拾　六分三厘一合數四十六七入
一七つ成茄　一本　二匁三分　　御佛前之節二割半引　一御膳こがなし一つ　八分七厘
一同青なし　一つ　一匁三分一厘　　一菜漬　一把　七厘

一御膳花菜　一合　一分三厘但な頭之事
一撰大根　一本　二分三厘但淺漬筋
一漬せんまい　一把　二分三厘但五寸廻り
一竹林麥　一升　三匁六分八厘
御膳帳付すし
一大青梅　一升　一匁四分
一漬菜　小二把掛　三分四厘大一把金さしにて一尺七寸廻り
元ノマヽ
一平土器　一つ　三分四厘
一大岩茸　拾　六匁四分七厘
一岩附午房　一本　二分二厘
一御次院玄さゝげ　百本に付　五分五月より九月迄

天保十四年

一御膳菊之花　百輪に付　三匁八分四厘
右卯十一月御勘定所にて極る　八百屋両人 花屋三郎右衛門
○一二寸御備菱付　一飾　三分九厘
一淀のせ　百目　七匁三分九厘五毛
一小引物　跡方二つ　三分三厘

一唐豆　一升　五分
一青さゝけ　一把　四分一厘
一割麥　一升　八分七厘
一大栗　拾　四分四厘
一りん子　拾　二分三厘中上り一分六厘
一菜漬　一把　七厘
一自然芋　一本　二分五厘
一いちじく　拾　一匁三分八厘
一系昆若　一把　三分八厘
一同長さゝげ　大一把に付 百本結　九分二厘之處此度八分に相改め　小一把五十本結　四分
一東菊　百目　九匁四分二厘六毛
一やうかん　一切　四分二厘
一早わらび　二つ　三分三厘

一受砂糖　拾　八匁三分一厘八毛一割引にて

御好
一新松露　百目に付　拾八匁六分

一玉千鳥　拾　三匁五分一厘九毛紅一匁三分九厘増

一あん入けんひ一本　五匁八分六厘八毛

一石竹巻　一本　二匁九分七厘九毛

一梅乃雪　拾三匁九分七厘　三匁五分七厘三毛

一京鹿子　一つ七匁九分二厘　七匁一分二厘八毛

○一御獻上鹽鯛尺五寸　拾枚　百拾五匁

一同鯣一連に付二枚結　拾連　三拾一匁

一同串海鼠　拾間　七拾三匁

一同鹽鮎　拾　三匁五分

一雛干鯛　拾枚　一匁五分

一中上り鹽鯛　拾枚　拾七匁

一同魴　拾枚　七匁七分六厘

一同鯣　拾連　四匁五分

一同干鱧　拾本　六分

辰五月廿四日極る
一櫻之實　百目に付　拾五匁四分一厘新土筆も同値段之事

一割引にて
一櫻流し　一箱　三匁五分一厘九毛

一網代木　中一箱　七匁一分五厘五毛

一和歌乃浦　一箱　六匁二分六厘四毛

一吹寄糕　拾三匁五分　三匁一分五厘

一宮城野　一箱十二匁七分六厘　十一匁四分八厘四毛

一同干鯛　拾枚　三拾三匁五分

一同串貝　拾串　拾匁五分

一同干鱧　拾本　五匁五分

一同刺鯖　拾刺　貳拾貳匁五分

一同するめ　拾連一連に付三枚結　貳匁

一同鹽鮎　拾　一匁五分

一同干たひ　拾枚　七匁七分六厘

一同鰹節　拾本　四匁五分

一同串貝　拾串　一匁貳分

一鹽串海鼠　拾間　三拾貳匁　　一同加賀串海鼠一間　拾枚　七匁
一同細洒小鮎　一升　三匁　　一干鱈　拾枚　七匁
一同刺鯖　拾刺　拾五匁　　一同燕骨　拾枚　五匁
一御膳串鼠　拾間　五拾目　　一刺鯖　拾刺　貳拾一匁
一口鹽鱈　拾本　三拾六匁　　一御獻上のし　拾本　四匁

○御青物るい御味噌元證文附

御膳
一經山寺味噌　一升　七匁五分　　一同ひしほ　一升　五匁
一同粕漬竹の子一本　九分八厘　　一同みつかん　一つ　二分六厘
一同岩見漬味噌漬茄子　一つ　二分八厘　　一粕漬松茸　拾本　大六匁四分四厘 中五匁一分
一同久年母　一つ　六分　　一同守口大根　一本　七分五厘
一味噌漬大根　一本　一匁五分当時一匁三分五厘　　一千枚漬しそ　一把但十枚　二分九厘
一奈良漬瓜　一枚　大二匁三分 中一匁六分　　一澤庵漬大根　一本　二分五厘
一御膳淺漬大根　一本　三分二厘　　一辛漬大根　一本　三分

右之通

○紙類

一極上半紙　一〆に付　二拾六匁四分一厘　一帖五分三厘

一上半紙	一〆に付	二拾二匁三分二厘	一帖四分五厘 十枚一分一厘
一中半紙	一〆に付	二拾一匁二分七厘	一帖四分二厘五毛 十枚一分一厘
一並半紙	一〆に付	拾九匁一分一厘	十枚九厘 一帖三分八厘二毛 一折一分九厘一毛
一鼠半切	一本に付	小一分五厘 長一分八厘三毛五糸	
一山半切	百枚に付	五分三厘八毛	拾枚五厘四毛
一白山半切	同	六分二厘五毛	拾枚六厘二毛
一下り半紙	同	七分三厘四毛	拾枚七厘
一み上書院美濃紙	一帖	一匁四分一厘四毛	拾枚二分九厘五毛
一上美濃紙	同	一匁二分五厘八毛	拾枚二分六厘二毛
一中美濃紙	同	一匁五厘六毛	拾枚二分二厘
一並美濃紙	同	九分二厘二毛	拾枚一分九厘
一あ上大直紙	同	一匁九分二厘	拾枚四分
一大直紙	同	一匁五分八厘四毛	拾枚三分三厘
一ほ圖無奉書	同	拾八匁七分七厘	拾枚三匁九分
一上大奉書	同	六匁七分七厘	拾枚一匁四厘
一中奉書	同	四匁八分四毛九糸	拾枚一匁一厘
一小奉書	同	四匁三厘三毛	拾枚八分四厘

一長門奉書	同	二匁六分八厘	十枚五分六厘
一上三好奉書	一帖	二匁四分九厘七毛	十枚五分二厘
一紅入奉書	十枚	三匁也	
一極上岩城紙		二匁三分一厘	十枚二分三厘 一帖は二拾枚此四分六厘
一上岩城	百枚	一匁九分九厘	十枚二分
一岩城紙	同	一匁六分三厘三毛	十枚一分六厘
一大畑紙	一帖に付	九分六厘	十枚二分
一端きらす	同	九分九厘	十枚二分六毛
一極上西之内	同	二匁七分八厘五毛	十枚六分九厘三毛
一上西之内	同	一匁六分八厘	十枚四分一厘四毛
一並西之内	同	一匁三分二厘五毛	十枚二分七厘六毛
一極上仙過	同	三匁四分五厘六毛	十枚七分二厘
一上仙過	同	二匁六分一厘六毛	十枚五分四厘五毛
一中仙過	同	一匁五分一厘	十枚三分一厘
一塵	一束に付	一匁八分二厘四毛	一帖一分八厘二毛
一本半紙	百枚	一匁一分二厘八毛	十枚一分一厘
一半紙白表紙	一枚	二分三厘二毛	

一紺土佐紙　一帖二十四枚　拾六匁八分　拾枚七分
一上青土佐紙　一帖　九分九厘三毛　拾枚四分九厘五毛
一青土佐紙　同　八分八厘三毛　拾枚三分六厘八毛
一極上金泊　一枚　四分八厘一毛　一同銀泊　同　三分八厘三毛
一西之内厚表紙　同　一匁四分四厘　一粘入半切　百枚　一匁三分五厘
一湊紙るい　同　六匁二分四厘　一尺長紙　十枚　三匁三分五厘
一細川紙　同　三分　一土佐半紙　同　一分四厘四毛
一藏半紙　一束　三匁八分八厘　一大半紙　百枚　一匁四分
一上細川紙　十枚　三分四厘　一上三好紙　一帖　二匁三分五厘　十枚四分九厘
一一對物筆　一對　八分七厘　一二對物筆　一對　四分四厘
一三對物筆　同　二分九厘　一五對物筆　同　一分七厘
一達磨形墨　一挺　六分三厘　一梅形墨　同　三分二厘
一並墨　同　一分七厘　一大杉原紙　一帖　二匁三分八厘
一越前大奉書　同　六匁七分七厘

右之通り

○天保十五年辰五月十日暁七つ時前より　御本丸御焼失大様御焼失御屋くら二箇所落候由右炎上に付左之通御上け

行器寸法

一唐草御紋付（十日に御上け）　二荷　深さ尺五分　差渡尺二寸五分
此入米白にて二斗一升三合
但片しへ縁一ぱいに斗り候事
一ちらし御紋付（十日に御上け）　二荷　深さ一尺に　差渡尺一寸五分
此片し入米一斗九升八合
但し片しへ縁一ぱいに斗り候事
一唐草御紋付　二荷　深さ九寸五分　差渡尺二寸八分
此片し白米一斗八升也
但右同斷に斗り候事
一大御紋付　一荷　深さ九寸　差渡一尺一寸五分
此片し白米一斗八升也
但右同斷に斗り候事
一大御紋付　一荷　深さ八寸二分　差渡尺八分
此片し白米一斗三升也
但右同斷に斗り候事
本文白米二石九斗八升四合　三わり物

右片しへ一斗八升つゝ入此數十六へ詰三割もの是迄白米二斗平し御勘定立來り有之候處夫々相改め全正一斗八升七合程つゝ之積りに相成候處此度片しに一斗八升つゝに相極候事二斗一升六合減し

喰籠　四荷

十日
一二荷　片し九升詰　此三斗六升　一一荷　片し七升詰　此一斗四升

一一荷　片し五升詰　此一斗　本文白米六斗也三割物

御添重

十日御上け
一松にほうあふ　五重一組　尺一寸五分に尺總高さ尺五寸

代三百三拾三匁六分五厘　墨屋

一切金御紋付　五重一組　尺に九寸總高さ尺四寸

代二百七拾八匁四厘　墨屋

一らんもやう　五重一組　七寸に六寸七分　總高さ尺二寸五分

代八十目五分　墨屋

一ちらしらん　五重一組　尺に九寸五分　總高さ尺九寸五分

代二百拾三匁八分八厘　墨屋

一ちらしさ屋形　五重一組　尺に八寸五分　總高さ尺五寸五分

代二百拾三匁八分八厘　墨屋

一ちらし櫻　　五重一組　　尺に九寸五分　總高さ尺七寸
　代二百拾三匁八分八厘　　　　墨　屋
一梅竹もやう　五重一組　九寸に八寸三分　總高さ尺三寸五分
　代百四拾四匁四厘　　　　墨　屋
大納言様より御二重代り
一らんもやう　五重一組　九寸に八寸五分　總高さ尺六寸五分
　代百四拾四匁四厘　　　　墨　屋
右之通夫々墨屋万吉不殘下遣候事
　　御　重
十一日
公方様へ
一梨子地椿根笹蒔繪　五重一組　尺二寸に尺六歩總高さ尺七寸
　一、切ひらめ　二、ひらめ小串、長芋、いんげん、はす、茶せんなす　三、御菓子二つかけ、紅金せん
　二百五十　四、御菓子あられかん二つがけ十六箱　五御菓子朧万十二つかけ百六十
一二は二寸九分、三四は三寸三分五は四寸
　代二百二十九匁八歩九厘　　　　墨　屋
十一日
一位様へ

一梨子地間垣菊高蒔繪五重一組　尺一寸一歩九寸六分　總高さ尺五寸
一、切ひらめ　二、ひらめ小串、長芋、いんけん、はす、茶せんなす　三、御菓子二つかけ、あやひし
十二箱　四、御菓子かさゝき右同十九本　五、御菓子、山吹万十右同百三十九
一は二寸三分、二は二寸五分、三は三寸、四は三寸、五は四寸
代二百十匁七分三厘　墨屋

十一日
公方様
一位様へ
一銀御鉢積肴
二鉢
たひ尺二寸　二枚　あし五寸　八十八　石持六寸　八十八　あわひ六寸　十
小車海老　四十
代

十一日
桃印様より被遣筋
一唐草御重七寸　二重　七寸に六寸五分　深さ二寸つゝ
一なら漬　五舟　二養染
代拾八匁九分一厘　墨屋
右之通り

十一日
御二所様より　精姫様へ被遣筋此御次帳付

一八つ橋かきつばた蒔繪五重一組　八寸二分に七寸七分　總高さ尺三寸

一、あい波にあし　二、かんひよ、ぼら小串、玉子、はす、長芋　三、御菓子櫻重一つ半十六本

四、御菓子鳴戸かん七箱同　五、山吹万十百十二

代七拾三匁一分七厘　墨屋

右之通り

十三日御献上
公方様へ
大納言様より

「御杉重之處御塗重に成る」

十三日　七寶御印付
一總梨子地垣に菊蒔繪五重一組　尺一寸に九寸六分

一は二寸三分　二は二寸五分　三は三寸　四は三寸　五は三寸六分　總高さ尺四寸七分

代

一位様へ
大納言様より
桃御印付
一幸ひ菱に折鶴蒔繪五重一組　尺に九寸

一は二寸四分　二は二寸七分　三は三寸二分　四は三寸六分　五は　總高尺六寸五分

代

公方様へ
一位様より
みの龜御印付
一村梨子地總網櫻花もやう五重一組　尺に九寸二分

一は二寸　二三四は二寸六分つゝ五は三寸　總高さ尺三寸七分

代

公方様へ
一位様より
七寶御印付
一總梨子地若松根笹蒔繪五重一組　九寸に八寸五分

一は二寸三分　二は二寸五分　三四は二寸九分つゝ五は三寸五分　總高さ尺四寸二歩

代

公方様へ
御簾中様より
七寶御印付
一村梨子地橋折枝蒔繪五重一組　九寸に八寸五分

一は二寸五分　二は二寸八分　三四は三寸一分つゝ　五は三寸五分　總高さ尺五寸五分

代

一位様へ
御簾中様より
七寶御印付
一總梨子地間垣に藤の花蒔繪五重一組　八寸五分に八寸

一は二寸一分　二三は二寸三分つゝ　四は二寸六分　五は三寸　總高さ尺二寸八分

代

一公方様
位様へ
一生鯛　一折つゝ

〆二折

代

右之通り

十一日兵部大輔殿へ被遣之
一銀鉢積肴一鉢
たひ尺二寸一　あし五寸三十四　石持六寸五十五　あわひ六寸五　小車海老　廿一
代
右之通り
御獻上御重
廿七日
公方様へ
一總梨子地間垣に藤の花御重
寸法
一、切ひらめ、さゝめき　二、紅山かまほこ、鱸小串、長さゝけ、長芋　茶せんなす　三、朝日まき並　四、あかし並　五、山吹万十一牢
一位様へ
代
一黑地御紋に山吹
一、切ひらめ、あいなに　二、紅山かまほこ、きす、長芋、かんひよ、まつ竹　三、梅花もち並　四、あしろき並　五、おぼろまん十一牢
代
右廿七日御獻上　二組
被遣御重
いちよづろ御印
一地黑唐草しやくやくもやう　八寸に七寸五分

一、あじ斗り　二、かまほこ、小串うを、長芋、いんげん、しい竹　三、ちらしすし　四、初音巻並
瀬ようかん並　五、こし高万十一牢
一は二寸　二は二寸二分　三は二寸五分　四は二寸五分　五は三寸五分　總高一尺二寸五分
一地黒櫻に蝶ちらし（いちよづろ御印）　八寸に七寸七分
一、切ひらめ、あし　二、岩石玉子、院けん、長芋、唐奚なす　三、ちらしすし　四、ようかん並
びじん草並　五、こし高万十一牢
一二三四は二寸七分　五は二寸九分　總高尺四寸三分

代

一地黒切竹三本立（いちよづろ御印）　八寸三分に七寸六分
一、切ひらめ、あじ　二、岩石玉子、かまほこ、いんげん、長芋、唐奚なす　三、ちらしすし
四、わり紅梅並、ようかん並　五、こし高万十一牢
一は二寸一分、二は二寸五分、三は二寸八分、四は二寸九分、五は三寸三分　總一尺三寸八分

代

右廿七日被遣三組ちらしすし入之品左之通り
〆
車ゑび、きす、あじ、玉子焼、きくらけ、紅はす、花くわゐ、青いんげん、すたれふ

被遣御廣敷廻り

辰五月十五日
一八寸五重一組

一、さゝめき、切ひらめ　二、花ゑひ、長芋、かんひよ、茶せんなす、青羹院玄

代六十三匁也

三翁かん　十箱半入　六匁三分七厘つゝ　六拾三匁八分八厘

美人草　二拾一本入　四匁五分五厘つゝ　九拾五匁五分五厘

山吹万十　百四十八半入　二匁八分四厘つゝ　四拾二匁一分七厘

「○印は附上け七拾二匁四分五厘右に直す」

〆貳百六拾七匁六分也

右兵部大輔殿へ被遣

○天保十二丑年九月　御能に付左之通り

一赤飯九百拾一人前　此米貳石七斗三升三合

代四百三拾一匁八分一厘

一赤飯一斗表御用部屋用意

代拾五匁八分

右年寄衆御初御目見以上御目見以下御徒格迄被下

一羹染　角半へん三切　苞豆腐四切つゝ　椎茸五つ

拾五人　年寄衆初御附人

代十匁五分

一同　丸半へん二切　にんしん四切つゝ　糸こんにやく見斗

七百一人　大御番頭より平士迄

代三百七拾一匁五分三厘

一同　刻鯣見斗、里芋三つ、氷こんにやく三つ

百六拾五人　御目見以下御徒格迄
三拾人　役所内

代五拾八匁五分

右赤飯附入用

晝 一二汁五菜 吸物肴二種 平代り付

代貳拾一匁八分四厘

夕 一一汁四菜

代七匁九分八厘

晝 一一汁五菜　吸物肴二種

代三匁四分九厘

夕 一一汁四菜

代二匁九分一厘

大名衆

松平三河守殿

松平淡路守殿

有馬玄蕃頭殿

右三人衆へ

阿部能登守殿

阿部能登守殿

一晝　一汁五菜　貳拾五人　　御旗本衆
　代百拾二匁五分
一夕　一汁四菜　　右同人へ
　代七拾二匁
一晝　汁四菜　吸物肴二種　　尾水樣御家老
　竹腰山城守
　中山備前守
　代十三匁五分　　中西甚五兵衞
一夕　一汁三菜　　右同人へ
　代七匁七分四厘
一晝　一汁四菜　二人　　御同朋頭
　代九匁
一夕　一汁三菜　　右同人へ
　代五匁七分六厘
一同　吸物二通り　　右同人へ
　代一匁二分四厘
一晝　一汁三菜　拾五人　　御城坊主衆
　代拾三匁九分二厘

一吸物二通り　右同斷
代八匁八分
夕
一汁二菜　右同斷
代十一匁六分八厘
一硯ふた二面　二人 十六人　御同朋頭 坊主衆
代
一差身二鉢　右同斷
代
一煮肴二鉢　右同斷
代
右は御振舞場にて入用
晝
一一汁三菜　拾二人　三河守殿
代拾匁四分四厘　淡路守殿
人
夕
一一汁二菜　右同斷
代八匁七分六厘
右振舞場にて入用

一濃汁香物　十八前　御同朋頭家來
代五匁
右飯方前にて出す
一濃汁香物　五百五拾人　御役者家來へ
代百九拾貳匁九分
右客座敷入用
朝○
一一汁三菜　上通十八人　御役者
代十五匁六分六厘
朝○
一一汁二菜　中通百四拾人　右同斷
代百二匁二分
晝○
一一汁五菜　上通貳拾五人　代三拾九匁五分　肴二種
晝○
一一汁四菜　中通百七拾人　内十人御用部屋用意　代百七拾八匁五分　肴一種
夕○
一一汁三菜　上通貳拾五人　代貳拾六匁貳分五厘　肴一種
夕○
一一汁二菜　中通百六拾人　代百四拾七匁二分　肴一種
「○六日」
右は御樂屋にて御役者へ入用筋

一吸物　九人前　代三匁五分一厘
一煮肴　同　代三匁六分九厘
一差身　同　代三匁六分九厘
右は御臺所御膳御用達町人九人分差上物いたし候に付御膳番取扱にて御酒被下入用
一枌八百八十一枚　代百九拾三匁八分二厘
外に　貳拾目は夜分差掛申付候に付諸入用も相掛り候雜用
一忍冬酒　一斗九升　代三百七匁八分
一備前徳利　拾九本　代拾七匁一分
一粘入紙　拾九枚　代七分六厘
一紅白水引　拾九把　代五分五厘
右御役者十九人へ被下入用
一赤飯附胡摩鹽　六升　代六匁
右拜見之面々へ赤飯被下に付入用
一炭　七俵五分　代拾九匁九分五厘
右は御樂屋出張御振舞場遣ひ
一炭　六俵　代拾五匁九分六厘
右は御振舞場にて入用
一同　二俵七分　代七匁一分八厘
右は客座敷にて入用
一白箸　九袋　代五匁七分六厘

右は御樂屋にて入用
一同　七袋　代四匁四分八厘
右は御振舞場にて入用
一酒　一斗　代拾四匁九分　一鰑　五枚　代七匁六厘
一干物　五拾五枚　代二匁四分二厘　一ぼら尺二寸　一本　代二匁二分
一蒸肴　拾三人前　代五匁三分三厘
右は御能御用筋骨折相勤候に付御臺所一統へ被下入用
一瀧水　一石二斗　代三百目也
右は御役者へ被下入用
一炭　一俵八歩五厘　代四匁九分二厘
右當番座前日より御用多不時入用
一同　一俵五歩　代三匁九分九厘
右御能に付御振舞場にて御酒方入用
一錦糖　三百三拾八匁　此七つ代七匁六分三厘　一紫七寶糖　貳拾一　代拾一匁八分六厘
一鶉草　百四拾目　代七匁四分六厘　一やうかん　六切　代二匁五分二厘
右は大名衆へ膳付入用
一錦糖　五百四拾目　此廿七代拾七匁三分三厘　一紅龍田　四百五匁　代九匁二分三厘

一落雁　五百四拾目　此八十一　代五匁二分六厘

右は御同朋頭兩人幷御役者廿五人へ膳付入用

一松の雪　廿五　代六匁二分二厘　　一梅の雪　廿五　代八匁一分二厘

一やうかん　拾切　代四匁二分

右御同朋頭兩人別段に被下出す

一瀧水　三斗五升　代八拾七匁五分

右は御同朋頭幷坊主衆へ被下入用

一酒鹽　八升八合　代拾六匁八分九厘

右は大名衆へ被下入用

一極上酒　二斗二升　代三拾七匁四分

右は御籏本衆へ膳付入用

一蠟燭　四百挺　代百四拾四匁

右は御臺所内諸役所遣幷下馬先御道具持運ひ入用

一縁高　貳拾　代六拾四匁　　一四つ椀　三拾　代七拾匁五分

一鱠皿　五拾　代七拾七匁五分　　一平　六拾　代七拾八匁

一燒物皿　五拾　代貳百四拾七匁五分　　一中皿　六拾　代八拾五匁八分

一猪口　五拾　代八拾五匁　　一小皿　五拾　代四拾六匁

一猫足　三十膳　代八拾一匁　一大七輪　四つ鍔共　代四拾八匁四分五厘
一枌居膳棚　四本　代百二拾八匁彌兵衛　一木鍋臺　三本　代拾匁五分同人
一五合杓　三本　代貳匁一分孫一
右は御能に付不足之分買入
一杉楊枝　千膳　代貳拾九匁四分全九百八拾膳　一白楊枝　三十膳　代九分
右は年寄衆初御目見以上幷御目見以下御徒格迄赤飯入用
一黄紙　一帖半　代一匁二分　一青紙　一帖半　代一匁二分
一赤紙　一帖半　代一匁二分　一上半紙　四帖半　代二匁二分
右は御樂屋幷客座敷にて支度札入用
一中半紙　四折　代八分四厘　一半切　四本　代七分三厘
一中半紙　二折　代四分二厘
右御調に付入用
一三年酒　一升　代五匁四分四厘
右は神酒翁に付入用
一半紙　一帖　代四分二厘　一半切　三本　代五分四厘
右は御振舞場遣入用
一大七輪鍔　四つ　代拾一匁二分

右は御能に付不足之分入用
「〆四貫貳百九拾六匁七分七厘」
辰五月に相極る
○一御獻上御樽御延引に付日合も相立見苦敷相成御用立不申故白削り直し鐵物打直し輪かへ繩取かへ
手入仕立候に付
秋本長左衛門納
一荷　代八拾匁也　内五分通り相濟　此代四拾匁に相極る
同
一御獻上御杉重二組申付候處御延引に相成木拵取組候迄出來候に付右御品御預り置追て御用之節御用に相立若御間に合不申候はゝ可申出候筈依て右に　半金御下け　此は十七匁三分に相極る
木具屋孫市
○一御膳さる　一つに付　代貳匁七分五厘　一角金水能張かへ　一つ　代四匁八分
一壚ふるい　一つ　代八分
〆
大和屋作兵衛
一白味噌　一升　目方五百目也　一赤同　一升　同　一尾州同　一升　同
〆
○辰五月廿八日より御留守方行水
一御臺所頭　御賄人へ　荷内 片し　一御臺所人　手桶 片し

一小間使　九人へ　荷内一荷半

一御臺所御中間　九人へ　同　一荷半

一常渡り御中間　廿五人へ　同　三荷片し

右は小間使組頭より御賄人へ相斷前々より日々相渡り來る

○大折 三尺五寸四方
深さ一尺二寸
厚さ　六分

足高さ　二尺
厚さ　二寸三分
貫巾　三寸五分
厚さ　二寸五分

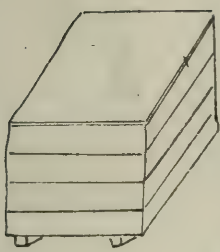
藏(ザウ)ばな出七寸五分
惣高さ三尺二寸



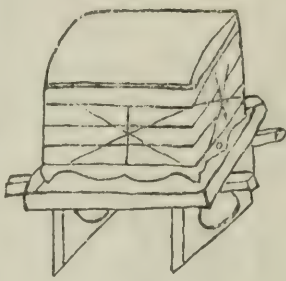
折代九百五十八匁
御菓子一〆七百七十目
水引長二丈一尺此七把七拾八匁
のし十本四匁
丈け長紙二枚九分五厘
紅白水引三尺物一把三厘
大奉書三枚　四分二厘

〆貳貫八百拾一匁四分也　外に増金

檜御重寸法
長さ　一尺九寸三分
巾　一尺二寸八分
高さ　三寸一分づゝ



杉御重　長さ一尺七寸　巾一尺一寸五分　一は二寸二分　四は三寸五分　二三は二寸五分つゝ



右御獻上御杉重臺へ居候圖寸法は前に有之事此外箱掛候圖に付重之筋は不用に付未けし

一御獻上御檜重詰菊屋長門より持込色品高數左之通り

牛部　七百目 此數百三十　白初むかし　五百目　宇治山糖　一貫目

紫四番かう　八百目 此數百十　小櫻糖　一〆百目　東にしき　三寸五分 十二箱　一枚半かけ

御所梅　一本半かけ 十三本　一尺　沖の石　三寸五分 十二箱　一枚半かけ　黄茶巾　一つかけ 百三十

山吹万十　一つかけ 二百三十

右之通り持込候事　安政二年卯七月しらへ

○一御乳持支度一汁三菜　朝夕　一匁四分三厘

全一人前に一匁四分にて打事

一同無汁三菜　晝分　一人前に付一匁四分之處内四分八厘汁代引

全九分二厘にて打事

一同一汁三菜　朝斗　但打方同断に付打事

右之通り

○　切鱠直段

一海苔　十二切取一本　六分八厘亀

一鯵　同　一分

一鮑　同　一分二厘

右之内にて五厘引之事

一鬮板　一枚　二分九厘一毛木具屋

並木上磨一小角銘々角一つ　四分三厘吹ちらし共

一原字不明色ちらしすし　一〆目　十匁同

一ゆは巻　一本九寸八分　一本　六分八厘同

○一御膳鰹節　拾本　六匁一分目方百八十目

焼カノ筋一同　拾本　拾三匁九厘

一三重霞　拾　五匁八厘三毛

一淀の瀬　百目　七匁三分九厘五毛

一源氏糖　同　四匁一分五厘

一玉子　八切取　同　八厘

一車海老　同　一分五厘

一きす　同　一分二厘

一白木御三方　胴取かへ　三匁三分二厘

一魚入ちらしすし　一〆目　十二匁出亀

一簾ふ　一本長七寸六分　一本　六分八厘同

御廣敷廻し一同　拾本　七匁二分七厘目方二百十匁

○そわ一五寸御備餅　一飾　一匁七分二厘

一東きく　百目　九匁四分二厘六毛

一若竹　同　四匁四分三毛

一饅頭腰高共　拾　二匁四分三厘

一白美作餅　十　六分六厘

一金米糖　百目　三匁九分六厘九毛

一紅きくは　同　二匁九分一厘

一赤強飯　一升　一匁五分八厘

一同附團子　十　八分八厘

〆

一初音巻　右へは二掛次の値段に成る 一本二匁六分五毛　二匁二分九厘

一花七寶　一本五匁一厘　四匁二分五厘八毛

一梅花餅　拾　三匁九分七厘・三匁三分七厘四毛・三匁二分五厘五毛。

一同　五寸　六本　五匁一分九厘

一せいこ　五寸　六本　二匁一厘

一同　六寸　三本　一匁五分三厘

一同　六寸五分三本　一匁七分四厘

一あし　四寸　九つ　一匁九分二厘

一同　五寸　三本　一匁二分九厘

一同　五寸五分三本　一匁六分二厘

一同　六寸五分三本　二匁五分五厘

一紅同　同　八分八厘

一黄鶉草　百目　五匁五分二厘

一白團子 月見に付被下筋　拾　貳分七厘

一あんころ　拾　一匁五厘

一はつき巻　一本二匁六分九厘　二匁二分八厘六毛

一初日糖　百目拾三匁二分九厘五毛　拾一匁三分

一小鯛色付　三本　七匁五分六厘

一かれゐ　三本　四匁九分五厘

一同　五寸五分三本　一匁三分八厘

一同　五寸四分六本　二匁一分九厘

一同　七寸　三本　一匁九分八厘

一同　四寸五分六本　一匁八分三厘

一同　五寸　六本　二匁一厘

一同　六寸　三本　二匁一厘

一同　七寸　三本　二匁六分一厘

一合きす　四寸五分九つ此十八枚五匁一分　一同　四寸五分六つ　三匁五分九厘
一同　五寸　拾二　二匁二分五厘　一きす　五寸五分六本　三匁一分
一茂魚　四寸　六本　一匁七分二厘　一同　五寸　六本　二匁一厘
一同　六寸　三本　二匁四厘　一石持　四寸五分六本　一匁五分三厘
一茂魚　五寸五分三本　壹匁六分二厘　一鱸　五寸　六本　二匁一厘
一同　五寸五分三本　一匁三分八厘　一鮃目　二つ付　三切　二匁七分九厘
一めはる　三寸　六つ　壹匁一分一厘　一魴鮄　六寸　三本　二匁三分一厘
○一御膳淺草海苔　拾枚　三匁六分　三匁七分の處一分引
一次淺草海苔　拾枚　一匁七分五厘一匁八分の處五厘引
一年々御國廻り筋厚のり　拾枚　四匁八分　五匁之處二分引
右之通り

○　門松

一合七拾八門　代一〆三百二拾六匁　但一門拾七匁つゝ
內
長三間半　三門　但拾三車　同三間　二門　但九車
同二間　三十六門　但七車　同一間半　三十七門　但五車

右例年之通り十一月十五日御金御下け書付小間使組頭より差出候事

一青目籠詰交肴　一籠　五拾五匁六分八厘之處　五十匁六分八厘此節全く
右之通り土井大炊頭殿へ未た所勞に付被遣之　辰七月廿七日
○御菓子改定法
一箱物一　一箱　長六寸　巾三寸　厚一寸也　さうじ厚一寸二歩
一竿物　一本　長七寸　大さ五寸也　當時差渡一寸二歩
一薄箱物　一箱　長六寸五分　巾四寸五分　厚四分
一定家餅　一棟山桝　一高麗餅　一加賀けんひ
一万代甘　一白石餅　一石竹餅
右七品は薄箱物仕立
一山吹之瀬　一菊之下水
右二品は箱物定法　但長六寸　巾三寸五分　厚二寸五分
文化六巳年四月御菓子中通り仕立之儀被　仰出同十月三日中通り間之物仕立之直段御證文相廻る
一御膳　代拾匁　一中通り　代八匁五分　一間夕物　代八匁二分
引物一つ二つ數物拾以下之筋　代八匁五分
右之通り
前大納言樣へ
○一最中の月箱　上桐板目但板外箱付

内法　長一尺一寸五分　巾八寸五分　深さ二寸二分
九匁七分引方　　九匁四分四厘

尾州様御發駕之節
一御菓子箱　　杉赤みにて目引
長一尺三寸五分　巾九寸　深さ二寸九分　總高さ四寸五分　足半月操り形四匁九分五厘引方
代四匁八分
一同居臺　　右に應し
二匁四分六厘　　代二匁三分九厘

日光御門主様へ被進筋
一御菓子箱　　桐板目にて
長一尺三寸五分　巾九寸　高さ四寸五分　くり足一本にて粉ぬり
拾匁一分七厘　　代九匁八分六厘

右同
一葛箱　　椴にて　　一斗四升入
長一尺五寸五分　巾九寸五分　深さ五寸一分
昆布箱にも用る差上筋干鯛も同様
七匁六分五厘　　代七匁四分二厘

右同
一椎茸箱　　　　　　　　　　　　　一斗五升入
　寸法前同斷
　七匁六分五厘　　　　代七匁四分二厘
中上り
一鰹節箱被遣筋　百本入　　　　　　二匁七分
　代二匁六分二厘
文化十三子五月より直段引にて本行之通改め三厘引
一生花臺　　重詰　鉢肴るい　　一割引
天保十三寅五月廿五日極る
一御音信御重詰　　三割引
○一汁三菜
　肴一種　　　　　　　　　　　　　　　　肴附不申筋
　一人より三人迄　二匁八分一厘　　　　　二匁六分二厘
　四人より六人迄　一匁六分　　　　　　　一匁四分
　七人より十人迄　一匁二分一厘　　　　　一匁二分
　十一人より以上　一匁六分　　　　　　　八分七厘
一精進一汁三菜

肴一種　　前同肴者なし
一人より三人迄　二匁六分二厘　　二匁五分二厘
四人より六人迄　一匁四分　　一匁三分一厘
七人より十人迄　一匁二厘　　九分二厘
十一人以上　八分七厘　　七分七厘

一一汁二菜
一人より三人迄　二匁二分三厘　　四人より六人迄　一匁二分一厘
七人より十人迄　八分七厘　　十一人以上　七分三厘

一精進一汁二菜
一人より三人迄　一匁八分四厘　　四人より六人迄　一匁二厘
七人より十人迄　七分七厘　　十一人以上　六分三厘

一味噌吸物
一人より三人迄　四分三厘　　四人より六人迄　四分一厘
七人より十人迄　三分九厘　　十一人以上　三分六厘

一さゝめき　一人前　五分五厘
一精進味噌吸物　一人前　二分九厘
一料理付すまし吸物　一人前　一分九厘

一料理付肴一種　一人前　一分九厘
一精進料理付吸物　一人前　一分四厘
一同肴一種　一人前　九厘

御酒肴斗出分

一肴一種
　一人より三人迄　三分八厘　　四人より六人迄　三分六厘
　七人より十人迄　三分三厘　　十一人以上　一分九厘

一濃醤　香物附
　一人より三人迄　五分五厘　　四人より六人迄　五分三厘
　七人より十人迄　五分　　十一人以上　三分五厘

一一汁四菜
　吸物肴二種　　吸物肴付不申筋
　一人より三人迄　三匁一分　　二匁六分二厘
　四人より六人迄　一匁八分九厘　　一匁六分
　七人より十人迄　一匁六分　　一匁二分六厘
　十一人以上　一匁五分　　一匁一分二厘

一精進同　　吸物肴付不申筋

一人より三人迄	二匁九分一厘	二匁五分七厘
四人より六人	一匁六分五厘	一匁三分一厘
七人より十人迄	一匁三分一厘	九分七厘
十一人以上	一匁一分六厘	八分二厘

一一汁五菜

	吸物肴二種	吸物肴付不申筋
一人より三人迄	三匁四分九厘	一匁一分
四人より六人迄	二匁二分三厘	一匁六分五厘
七人より十人迄	二匁八厘	一匁五分
十一人以上	一匁九分四厘	一匁三分五厘

一精進一汁五菜

	吸物肴二種	吸物肴付不申筋
一人より三人迄	三匁二分九厘	二匁九分五厘
四人より六人迄	一匁八分九厘	一匁五分五厘
七人より十人迄	一匁六分	一匁二分六厘
十一人以上	壹匁五分	一匁一分六厘

一二汁四菜

	吸物肴二種	吸物肴付不申筋
一人より三人迄	四匁七厘	一匁四分九厘
四人より六人迄	三匁五分四厘	二匁九分五厘
七人より十人迄	二匁六分六厘	二匁八厘
十一人以上	二匁三分六厘	一匁七分九厘

一二汁五菜

	吸物肴二種	吸物肴付不申筋
一人より三人迄	四匁二分六厘	三匁六分八厘
四人より六人迄	三匁六分三厘	三匁五厘
七人より十人迄	三匁三分四厘	二匁七分六厘
十一人以上	二匁六分六厘	二匁八厘

一精進二汁五菜

	吸物肴二種	吸物肴付不申筋
一人より三人迄	四匁七厘	三匁七分三厘
四人より六人迄	二匁八厘	一匁七分四厘
七人より十人迄	一匁七分九厘	一匁四分五厘
十一人以上	一匁六分	一匁二分六厘

一二汁七菜
　吸物肴二種
　一人より三人迄　五匁三分三厘　四人より六人迄　四匁五分一厘
　七人より十人迄　四匁二厘　十一人以上　二匁九分五厘
一精進二汁七菜
　吸物肴二種
　一人より三人迄　四匁四分六厘　四人より六人迄　二匁七分六厘
　七人より十人迄　二匁三分七厘　十一人以上　二匁二分七厘
一三汁十一菜　向詰幷吸物肴口取二種共　拾八匁三分一厘
一三汁十菜　向詰幷吸物肴口取二種共　拾七匁二分三厘
一三汁九菜　切焼物吸物肴口取二種共　拾六匁二分六厘
一三汁八菜　切焼物吸物肴口取二種共　拾五匁二分九厘
一こひ茶 うす茶　押合　一人前　三分五厘
大極上生
一せんじ伊豫素麪　大一鉢
　差渡一尺五寸五分より一尺七寸迄 深さ三寸より三寸五分迄　目方一〆五百目　貳拾五匁
右同
一同　中鉢

右同
一同　差渡一尺三寸五分より一尺四寸迄
深さ二寸五分　目方九百目　拾五匁

小一鉢　差渡一尺一寸五分より一尺二寸五分迄
深さ二寸位　目方五百目　八匁五分

一煎豆腐　大鉢
差渡一尺六寸深さ三寸嵩さ八寸　精進煮染六拾目に二割引直段にて　四拾八匁

一同中　差渡一尺四寸深さ二寸五分
嵩さ七寸　一鉢　精進煮染四拾目に二割引直段にて　三拾二匁

一同小　差渡一尺二寸深さ二寸
嵩さ六寸　一鉢　精進煮染三拾目に二割引直段にて　二拾四匁

右之分料中一鉢にて
豆腐三十五丁　はす八本　きくらけ二升　古生か一升　味淋二升　醬油一升
右にて出來

一生り節　一本長九寸五分　一匁六分五厘

一月見玉子　一つ　四匁五分

一下汁かやく　そはそうめん共　一升に付　六匁八分　此二升御用之節は五匁八分

一右同　三升之節一升に付　五匁つゝ

一右同　四升之節壹升に付　四匁四分

一右同　五升之節一升に付　三匁八分

一右同　六升以上は壹升に付　三匁三分

右十三口天保十五年辰に附上け直段極る

御豫參之節　公儀御徒目附へ

一一汁三菜　精進一人前　二匁六分九厘

一吉野辨當　一つ　一匁　煮染魚入飯とも

一小豆釜ほこ　一枚　五匁一分　八重成李目釜ほこ同直

一煮鯣　百切　八匁五分

一午房中　一鉢　六匁五分

一煮豆腐　尺一重　二拾一匁　此精進煮染二割引

一車海老煮付賃　拾　八分

一肴鹽ふり燒賃　同　八分

一花海老　拾　三匁二分五厘　牡丹海老煮燒賃八分

一きせい豆腐　一枚　三匁六分　長七寸六分 巾三寸八分

一昆巻豆腐　一つ　二分

一年々御廣敷廻り煮染　一人前　一匁

一蕎麥うんとん 青麵とも　一人前　一分六厘　汁かやく証文

一汁の實八寸　一重　七匁五分　苞豆腐椎茸

一硯蓋物　一人前　一匁　中一面を二十人分に割出 精進は九分八厘

一巻玉子　一本　三匁

一婦の焼玉子　一枚　四匁五分

一煮染豆腐ひしき　八寸一重　七匁二分七厘　此御庭秋葉廻り

一押抜飯但むすびの事　八寸一重　三匁五分　火取ちん三分 黄なこ五分

一同　七寸一重　三匁　火取ちん二分 黄なこ三分五厘　但寸割一寸に付 四分八厘八毛

一煮染切溜廻り

大切溜は八寸重二重半分　二番切溜は八寸重二重分　三番切溜は八寸重一重半分

一汁　一升　二匁

一同大壹なべ　百人前　此一斗也

一上通煮染香物　三分九厘　内二厘香物代 魚類入六厘増

一中通同　二分九厘

一生花臺花有り之筋　一面　百二十六匁

一三盃漬　大一鉢　三十三匁五分

大二つ割は中一鉢二十三匁二分五厘　中二つ割は小一鉢十一匁五分二厘

一煮物肴　大一鉢　四十六匁五分　但百切入

一御次重　八寸一重　三拾一匁五分

一同精進　同　二拾一匁
一御次重　七寸一重　二拾四匁三分
一同精進　七寸一重　拾九匁三分
一右同　六寸一重　八匁
一御硯蓋　中一面　二拾匁二分五厘　内のり八寸五分四方 深さ八寸五分
一同精進　同　拾八匁四分五厘
御酒被下筋末九月付上け　長一尺三寸　巾一尺二寸　深さ一寸五分
一硯蓋
小串たい　椎茸　ふさう　花ゑひ　紅くわゐ
一御吸物肴　二種　御年寄衆へ　三拾目三分
壹匁七分　七分吸物　五分小串　五分作肴
右御膳仕立積り吸物肴はさゝめきのるい小串は細長く二切付肴は中皿にて出す小串も同斷にて出す
一辨當被下　御年寄衆へ　煮染五色に豆梅干 一匁五分一人前
右所々被爲成に付出張之節跡方
一濃醬香の物　六分八厘　一汁香の物　三分五厘
一地紙煮染香の物　三分八厘　一肴一鉢　六分七厘
一立湯一荷　四分八厘　一給仕人一人　三匁三分九厘

右方々樣上野御參詣被遊候節女中支度筋

長八月十五日御用
○一御膳御硯蓋物　　御膳方次仕立之處　　萬吉へ

寸法　長尺八寸　巾尺九分　深さ八分五厘

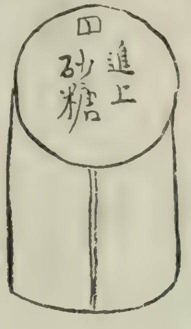
色立　重きす　花車海老　白煮長芋　甘煮河茸　青煮　院玄

代百六十五匁之附上け之處

御簾中樣御用御硯蓋　長尺五寸五分　巾尺三分　代八拾貳匁五分

右直段一面半分にて金百二拾三匁七分五厘に極る

○



御獻上砂糖

御備は獻上と認め

○

當時御留菓子

紅雁糕　京牡丹　深見糕　霜　柱　吉野糕　花乃香　新達雁隱

初日糕　深見獅子　鳳了糕　里土産　千代の松　駒　疋　千羽鶴

氷乃柱　千年鶴　澤邊貝　八重氷　今朝の菊　兩面禿菊　名所糕

きりん糕　大翁草　御所桃　岩牡丹　古跡糕　寒紅梅　春庭糕

五節句　光林龜

右　菊屋　松屋　納

君か代　水鳥糕　大八景　秋乃錦　壽の字糕　千代の鶴　阿蘭院煎餅

梶　枕　源氏煎餅　吉野糖

右　鯉屋納

御膳白

○一五寸御備　一重　一升取目方四百目也　一匁七分二厘

一同赤白　一重　一匁八分二厘

一同菱附　一重　目方五百目也　二匁二分五厘

一同六寸御備　一重　一升五合取目方六百目也　二匁四分五厘

一同赤白　同　二匁六分一厘

一同菱附　同　目方七百五拾目也　三匁二分二厘

一七寸御備　同　三升取目方一〆貳百目也　四匁九分

一同赤白　同　五匁二分二厘

一同菱附　同　目方壹〆五百目也　六匁四分四厘

一同八寸御備　同　五升五合取目方二貫二百目也八匁九分八厘

一同赤白　同　九匁五分七厘

一同菱附　同　目方二貫七百五拾目也　拾一匁八分一厘

右之通り五寸御備にて

一匁七分二厘餅手間共　一分赤代　但四匁六分四厘上の方重四分三厘蒸百目代

〆

「朱書」之直段は弘化三年九月十五日に極る手形しらべ之節皆川よりの寫取りに據る

皆川徳兵衛

御障子其外證文

長九月廿日寫取

一大障子紙　一引四分六厘　拾小間　「五分二厘」

一大半紙　一引「二分四厘」　拾小間　「二分八厘」

一美乃紙上々　一引「二分九厘」　拾小間　「三分五厘」

一同紙上　一引二分九厘　拾小間　「三分」

一同紙中　一引「二分五厘」　拾小間　「二分五厘」

一連子上西之内張り立油引　一坪「四匁五分」

右御作事方證文

長門　元赤坂町　すし龜次郎

○すし

一海苔　長さ七寸拾二切取　六分八厘　一本

一玉子　長さ五寸五分八切取　六分　一本

一鯛　拾　一匁五分　一白魚　拾　一匁一分

一鯵　拾　九分　一車海老　拾　一匁四分

一芝海老　拾　九分　一鱚　拾　九分
一鮑　拾　一匁一分　一さより　拾　一匁一分
一赤貝　拾　一匁一分
一魚入ちらし五もくかやく共一貫目に付　拾二匁也

精進すし

一簾麩　長さ七寸六分　六分八厘　一本　一湯葉巻　長さ九寸八分　六分八厘　一本
一椎茸　拾　壹匁也　一蓮　拾　六分八厘
一ちらし五もくかやく共　壹貫目に付拾匁也

右は是迄行事御次帳付廻り切すし先年より跡方直段と申取斗來り然る處此節右極り直段相納候得共帳面には無之附上けも無之此元直段にて取斗來り候事に付此度長門すし龜次郎と申者に附上け爲差出申請之上下地直段へ五厘引掛候直段に引付畏り候に付御勘定所罷出相極候事

嘉永元申五月三日に相極候事　岩尾九助　土橋元助

○御船數　御船奉行職掌解説參照

此記は元御船手方の者所藏する處にて新造年紀は元御船肝煎渡邊甚右衛門の舊記艪數帆端數碇等の事は元御水主近藤次郎右衛門の記に據る

御關船初御船數

寶暦十一巳年新造

一文彩丸　　五拾六挺立　　拾六端

碇八頭　　三拾九貫四百目　三拾壹貫二百目　三拾六貫四百目　貳拾四貫目　　三拾四貫目　三拾貫目　三拾七貫九百目　貳拾壹貫目

⧄　印

寛延元辰年新造

一象王丸　　四拾八挺立　　拾四端

碇八頭　　三拾貫九百目　三拾一貫目　二拾三貫八百目　拾九貫目　　三拾五貫五百目　二拾八貫目　二十三貫七百目　貳拾貫目

△　印

出來年月難相分

一大鷹丸　　四拾八挺立　　拾四端

碇八頭　　三拾六貫目　三拾二貫目　二拾六貫目　二拾一貫目　　三拾一貫目　二拾六貫目　二拾三貫目　二拾貫目

卍　印

享保十七子年出來

一龍頭丸　　四拾八挺立　　拾四端

碇八頭　　三拾四貫目　二拾四貫貳百目　二拾四貫目　二拾五貫目　　二拾九貫百目　二拾四貫三百目　二拾二貫目　拾九貫七百目

×　印

享保二酉年出來

一逐浪丸　七拾貳挺立　拾四端

碇八頭　三拾九貫二百目　三拾四貫目
　　　　二拾二貫目　二拾二貫目

弃印　二拾三貫五百目　三拾三貫目
　　　三拾四貫目　三拾三貫目

正德四午年出來

一彩鷁丸　七拾貳挺立　拾七端

碇八頭　三拾一貫三百目　二拾九貫三百目
　　　　二拾三貫九百目　三拾八貫七百目

丁印　三拾一貫三百目　二拾九貫六百目
　　　二拾八貫八百目　二拾貫目

延享二丑年出來

一唐津丸　六拾貳挺立　拾四端

碇八頭　三拾貫目　三拾二貫貳百目
　　　　二拾三貫目　二拾三貫目

山印　二拾一貫五百目　拾九貫目
　　　拾七貫目　拾八貫五百目

寬延二巳年出來

一隼丸　五拾六挺立　拾三端

碇七頭　三拾二貫三百目　拾八貫目
　　　　二拾五貫目　二拾貫目

工印　二拾二貫目　拾九貫目
　　　拾九貫目

寶曆五未年出來

一快濟丸　五拾二挺立　拾壹端

碇七頭　二拾七貫目　拾八貫目　拾七貫五百目　拾九貫目　二拾四貫目　拾六貫目　二拾貫目

☒　印

寛延三午年新造

一大鵬丸　五拾挺立　拾壹端

碇七頭　二拾八貫目　拾四貫六百目　二拾貫目　拾六貫五百目　拾五貫六百目　拾九貫目　拾六貫目

从　印

元禄十四巳年出來

一翔隼丸　四拾貳挺立　九端

碇五頭　二拾六貫　拾五貫目　拾四貫目　拾七貫目　拾四貫目

∧　印

元禄十五午年出來

一飛鵴（ヒアン）丸　四拾貳挺立　九端

碇五頭　拾七貫五百目　拾五貫目　二拾四貫二百目　拾六貫五百目　拾七貫五百目

乚　印

元禄十四巳年出來

一飛鷁（ヒケキ）丸　四拾貳挺立　九端

碇五頭　拾八貫目　拾六貫目　二拾五貫三百目　拾七貫目　拾四貫五百目

十　印

享保六丑年出來

一　利渉丸　四拾貳挺立　九端

碇五頭　拾九貫目　拾五貫五百目　拾六貫五百目　拾五貫目

介　印　拾三貫五百目

元祿十四巳年出來

一　飛隼丸　四拾二挺立　九端

碇五頭　二拾四貫目　拾八貫目　拾五貫目　拾五貫目

全　印　拾八貫目

正德元卯年出來

一　仙槎丸　四拾貳挺立　九端

五頭碇　二拾四貫目　拾五貫二百目　拾六貫目　拾四貫目

天　印　拾三貫五百目

元祿十五午年出來

一　快風丸　四拾二挺立　九端

碇五頭　拾八貫目　拾五貫目　拾七貫目　二拾四貫五百目

卂　印　拾九貫目

寳永三戌年出來

一　雲陽丸　四拾貳挺立　九端

碇五頭　二拾貫目　拾五貫七百目　拾五貫五百目　拾五貫目

□印　二拾三貫八百目

享保四亥年新造

一飛雲丸　四拾貳挺立　九端、

碇五頭　拾七貫目　拾六貫七百目　拾八貫目　拾三貫七百目

△印　二拾二貫七百目

享保二酉年上棚臺恒廻り用ひ出來

一御召萬歲丸　二拾八挺立　九端

碇三頭　中印　拾四貫目　拾六貫五百目　拾二貫目

寛保二戌年出來

一御召小早　貳拾四挺立　九端

碇四頭　中印　拾四貫目　八貫目　八貫二百目　九貫八百目

寶暦二申年出來

一御召代小早　貳拾四挺立　七端

碇三頭　△印　九貫二百目　七貫五百目　八貫目

寶暦五亥年出來

一塗御召鯨船

碇貳頭　御召船四艘之內へ持合

元文元辰年出來　一塗御召代鯨船　小書前同斷

延享四卯年出來　一御召白木鯨船　小書前同斷

寶曆十二午年出來　一御召白木鯨船　小書前同斷

年不知　一御召代白木鯨船　小書前同斷

寛延二巳年新造

一壹番小關　貳拾四挺立　八端

碇五頭 ス印　拾六貫目 拾一貫目 拾二貫目　拾一貫目 拾四貫目

寛延二巳年新造

一貳番小關　貳拾貳挺立　八端

碇五頭 ◇印　拾一貫七百目 拾一貫二百目 拾五貫目　拾四貫目 拾八貫目

元文四未年出來

一三番小關　拾挺立　十一端

碇五頭 〇印　二拾貫目 二拾三貫目 拾五貫目　拾四貫目 拾六貫目

寛延三午年新造

一四番小關　拾八挺立　六端

碇三頭 △△印　拾貫目　六貫五百目　八貫三百目

寶暦三酉年出來

一　五番小關　拾八挺立　六端

碇三頭 日印　八貫百目　六貫五百目　十貫七百目

享保十六亥年是は二番小關造り替

一　六番小關　貳拾貳挺立　九端

碇五頭 穴印　拾五貫目　拾五貫目　拾三貫目　拾二貫目　拾三貫目

享保七寅年大鷹丸古板に新板足し出來

一　七番小關　貳拾貳挺立　九端

碇五頭 井印　拾六貫二百目　拾三貫五百目　拾二貫目　拾七貫目　拾一貫目

享保九辰年唐津丸古板へ新板を足し出來

一　八番小關　貳拾貳挺立　九端

碇五頭 ロ印　拾八貫九百目　拾四貫三百目　拾四貫目　拾七貫百目　二拾二貫五百目

享保十四酉年出來

一　九番小關　二拾二挺立　九端

碇五頭
XX印
拾六貫四百目
拾三貫五百目
拾貫目
九貫五百目
八貫九百目

享保十三申年新造

一壹番川御座　九端
碇五頭
串印
拾七貫目
拾六貫六百目
拾六貫五百目
拾五貫五百目
拾五貫六百目

享保六丑年出來

一貳番川御座　九端
碇四頭
ロ印
拾五貫二百目
拾三貫百目
拾五目目
拾三貫目

享保二十卯年出來

一三番川御座
碇四頭
今印
拾八貫目
拾七貫五百目
拾五貫目
拾五貫五百目

享保三戌年出來

一四番川御座
碇三頭
王印
拾四貫八百目
拾貳貫七百目
拾壹貫目

享保三戌年出來

一五番川御座
碇三頭
コ印
拾貫目
九貫目
八貫目

正德二巳年出來

一六番川御座　碇貳頭　モ印　八貫四百目　拾一貫目

寛延三午年出來

一御凉川御座　此御船先年伺濟之上ほくし船に相成候事

享保四亥年出來

一壹番段平　碇五頭　个印　拾八挺立　拾九目　拾三貫目　拾三貫目　拾端　拾八貫目　拾六貫目

御出來年號難相分

一貳番段平　碇四頭　仌印　拾八挺立　拾八貫目　拾五貫目　拾端　拾七貫目　拾四貫五百目

一御關船和歌御祭禮之節御飾り

赤四半　長刀六本

白しなへ　鐵炮五挺　紺しなへ　取揖吹貫

赤しなへ　弓拾貳張　白しなへ　表揖ばれん　御印

紺しなへ　赤しなへ　白しなへ　紺四半

右九本つゝ

「右新造年紀悉く元祿享保寛延寶暦間に係ると雖も　龍祖御代新造の分も必有ならん既に逐浪丸は

加藤氏征韓の用艦と云へは該新造と記したるは全く新造のみに非すして修繕落成をも併稱したるなるへし」

○聖護院宮へ御呈進の御船明細書

御召　萬歲丸　總朱塗　長八間五尺 幅二間三尺　高　二間一尺三寸

艪廿八挺　帆八反中黑　碇三頭　桅帆柱桁

一水押初高欄屋形外艫廻り共所々金物伏

一屋形內總金張附墨繪前之方床下小襖福壽草同障子腰若松右の方障子腰菊左の方同梅　後の方松に龜山芝　左右敷下山に根笹藪柑子芝　筆者御繪師岩井宗雪　筆者　同　嶋　柳吉

一組天井極彩色窠紋

一御上段二疊御次三疊大紋緣敷物猩々緋　一屋形外廻り舳小間共敷物猩々緋

御飾道具

一矢籠　一熊毛鎗　一筋　一鐵炮　三挺　一長刀　一振覆天鵝絨

一長柄傘　一具太鼓　遠眼鏡磁石入組

屋形外後方

一いらか太皷　鷄岩蔦根笹彫物極彩色　一懸　六葉御紋　彫物師　嘉丈

一額　筆者國造紀八穗主　細工大工棟梁嘉兵衛　彫　神野九兵衛

一船仕立　御船大工棟梁　津口專左衛門 成尾善左衛門　砂山忠左衛門 松本彌八郎

一屋形仕立　大工棟梁 嘉兵衛　大工 勘七
一張付師　表具師　佐兵衛　一疊　疊屋　藤兵衛
一總金物　井筒屋吉兵衛　一總塗方　塗師總代　元吉　惣七　増右衛門　佐兵衛
一總絹布納　糸屋八右衛門　川俣屋新助　綿屋　文四郎　直川屋毛兵衛　太田屋理兵衛
一繪圖極彩色全形　筆者御繪師須藤久甫　今遺存す

尙明細書

御召萬歳丸間數御屋形向其外共御模樣書

一御船朱塗　長八間五尺　高さ二間一尺三寸　幅二間三尺
一水押きだろ色上下御金物包御左右へ葵御紋一宛帶金水切御金物包さがり欄黑色附
一波切向板ろ色葵御紋一つ角金物波切板ろ色外谷金内金箔朱竪筋御左右にくさびろ色水に牡丹花御彫物金箔四五朱所々へ鈋甲御金物波拂板外水に牡丹花御彫物金箔內春慶所々御金物伏せ
上下貫木ろ色木口へ黑色附銅伏せ貫木がらみ紺染緒
一御屋根　背眞掛合箱棟ろ色御左右へ葵御紋五宛右御前後へ板金鬼板ろ色御前後共葵御紋一宛御左右板金舳艫共破風ろ色葵御紋二宛所々板金伏せけぎよふろ色六葉葵御紋一宛緣金箔覆輪舳いらか松竹梅艫いらか太皷鷄蔦根笹岩御彫物極彩色垂木朱右木口御金物包御屋形ろ色桁御前後六葉葵御紋三宛同御左右五宛總桁所々板金伏せ御鴨居所々板金伏せ御幕折釘御鴨居上都て菊紅白黃御彫物極彩色御敷居所々板金伏せ

一御組天井ろ色鋱金角金物唐草毛彫なゝ子地墨指十文字へ葵御紋一宛御屋形内總金張附御天井花紋極彩色爐之方より御左右舞良內御張附松に龜根笹山芝御正面御障子腰若松御左右梅菊御床板金梨子地同下御小襖福壽草　ろ色御引手鋱金牡丹花毛彫御左右御敷居下山根笹藪柑子芝　總御墨繪

一御上段二疊御次三疊大紋緣

但御上段御次御敷切ろ色無目敷居

一御正面花戸金箔緣ろ色竪子木地御障子　腰重棧ろ色谷金御左右御障子右同樣

但三方共三枚宛

一御雨戸溜塗　棧花塗　都合八枚御〆り輪掛金せん留

一御屋形御次御左右外側舞良　重棧ろ色谷金

一同爐之方地板御鏡戸共ろ色內外御引手鋱金牡丹花毛彫

但御鏡戸御鴨居上錠前

一御屋形幕紫縮緬白揚り葵御紋御正面御左右共二宛乳紫白二宛肩繩紅まがへ

但しぼり紐紅まがへ房附

一御用所御囲幕表花色秩父裏紺毛綿乳花色秩父肩繩紺染緒

一御屋形御次御敷切幕總緋純子乳緋肩繩赤練繰打

一御屋形御椽側都て緋毛氈下薄緣

一御けさん銅黑色附

一高欄ろ色鉾木鼻　御金物包葵御紋一宛右下力金十文字へ篗形御金物柄六葉葵御紋一宛内御左右十
文字角柄へ二宛右間にすかし御金物板金高欄臺御左右柄下へ都て蟹牡丹花一宛御金物
一總足隠板ろ色水に牡丹花御彫物金箔裏板春慶
一御船印綸子碁盤指山科茜染縊葵御紋一つ乳白御印竹重藤卷
一御吹貫紋紗綾碁盤指山科茜染縊葵御紋一つ乳白角取紙三好奉書操上け紐紺染緒御吹貫竹重藤卷
一櫓貳拾八挺たがい早緒夫々紺染緒
一帆八反毛綿袷碁盤指中黒
一艫御敷切幕緋花色純子田町交乳緋花色二宛肩繩赤練繰打
一御船幕飛紗綾山科茜染縊葵御紋御左右へ三宛艫一つ乳紅白二宛肩繩赤緒
但しぼり紐紫練繰打
一御囲幕毛綿紺白田町交乳白肩繩紺染緒
一艫御日覆龍門絹紅白田町交裏淺黄秩父乳紅白二宛肩繩黒練繰打
一御幕串帆柱車立あま船張梶々柄其外共都て掛合塗
但押紐紺練繰打
但御幕串は眞掛合塗御桐油受兼る
一總板子其外内廻り春慶
一艫御左右垣竪ろ色地板朱金箔雁木形

一同角立ろ色木口御金物包間に板金�甲御金物
一臺船張櫓床鼻共御金物包
一舳登り御左右へ水筝一番宛生け打波共御金物
一上棚御左右へ緣色龜七宛生け打御金物
一艫とり御左右へ獅子牡丹花岩根笹生け打御金物御敷切銅黑色附緣眞鍮覆輪
一外艫上は塲ちり銅黑色附角金物眞鍮
一入頭下船張鼻共銅黑色附
一艫垣竪ろ色葵御紋二つ鯱二つ生け打御金物影之板御左右共ろ色水に牡丹花御彫物金箔差板朱花戸朱緣ろ色覆輪右下差板朱金箔雁木形緣ろ色戸立眞向獅子牡丹花生け打御金物角立木口御金物包間に板金ちり廻り御金物包垣廻り所々板金すかし御金物床卷鐵釣鐵共黑色附艫棚朱緣戸立入頭銅黑色附
一御額鏡板ろ色御船銘彫入金箔緣青漆覆輪蕨手共金箔御角金物葵紋二宛唐草毛彫なゝ子地墨指裏花塗角板金伏せ年月筆者彫入朱
一御挑灯葵御紋付大小都合九張
一御桐油都合五枚
　但押細紺染緒二組
一御紋弁所々御金物眞鍮高欄臺より上御金物牡丹唐草毛彫なゝ子地墨指右下御金物毛彫等無之筈

「右兩書は天保十三寅年四月　聖護院宮より萬歳丸の繪圖御所望により御船奉行より繪圖面に添提出の旨記載あり蓋し此時　同宮御入峯若山御參向の際御用船に供せられしを以て該圖御所望ありしならん」

川御座圖解

御召一番川御座

瀛洲丸　樓船也　圖面二つ　本圖一 下地一

右下地木地之處加航朱梁蠟色艫柱總板子屋倉向黑掛合塗總して模樣彩色に御改修方巨細張紙を以伺たる圖面一枚と本彩色にしたる圖一枚あり模樣から圖に詳なり而して御船間數且年月を不記但額の裏に寛政十年戊午初秋井田忠順書とあれは同年の改修に係るものか

四番川御座

龍門丸　荒圖一枚　御屋形略す　長八門五尺　櫓十挺

御長形長二間四尺五寸　疊十一疊　上御屋形 六疊 下 同 五疊

袖出し屋倉薄緣貳枚

御船下地木地之處　圖之通黃桐油塗　水押伏金下地銅緣靑差出之處圖面之通黑色付　竿走下地金物無之處　圖之通赤坂金黑色付　洞より加航左右下地模樣無之處　圖之通龍一番子連銅緣靑差　垣臺共下地木地垣上は場銅鈨甲之處　圖之通眞掛合塗眞鍮金物　艫屋倉垣廻り下地木地金物無之處　眞掛合塗垣上は場眞鍮鈨甲金物入頭下地銅緣靑差之處　圖之通黑色付

下地銅緣青差入頭斗にて有之候處　艫ちり圖之通銅金物包黑色付

御召二番川御座

蓬萊丸　荒圖一枚　御屋形略す　長十一間二尺九寸　艪十二挺

御屋形長三間三尺九寸　疊十二疊　袖出し屋倉薄緣二枚

御船下地黑桐油塗之處　圖之通眞掛合塗　水押伏金下地銅緣青差之處　同斷眞鍮金物　竿走下地金物無之處　同斷眞鍮板金　洞より加航左右下地模樣無之處　同斷緣毛龜七宛眞鍮金物　下地銅緣青差入頭斗にて有之處　艫ちり圖之通眞鍮金物包

「右三圖は御文庫にありて川御座の體裁を略示の爲圖中記する所を拔抄す蓋し改修付圖なるへし」

御船歌　御船奉行職掌解說參照

御船歌目錄

廿二　しき　　　　廿三　あつま下り　　　　廿四　御めし初
廿五　あら玉　　　廿六　(一本季)(年)とく　　廿七　輪のうち
廿八　歌人　　　　廿九　さぞの春　　　　　三十　浅くさ
卅一　松ざか　　　卅二　茶の湯　　　　　　卅三　こうてい
卅四　つばきくとき　卅五　西の國　　　　　卅六　高滿

▲是ハエイ　　上是ハあけ也　　○是ハくぎり

一　都あたり

都あたりは里々やふしみ深草鳥羽八幡▲竹田の里○いなのお笹は志げりあい○▲ゆけ行袖の數々やぎおんばやしの村鳥○うかれ心ともろともに○▲清水八坂打過て○▲加茂川こゆる志ら浪の八瀬や大原のいやしきをのれ○沈や宏やかうれをゑふとも○▲にをふてくるれたきものよイャ上四條五條を打過て▲いつしか○君ゟ逢坂はせきの岩かどふみなら山田いづるしきゟ葉○駒ょまかせて行程ゟ大津打出は濱よりも山田矢橋の舟ょ乗コノ上堅田船頭は妻ょはいやよの月に○廿日は沖にすむゑ○しほづかいほをつまょれいやよ○すそがぬきそよいそ波ょかゝる小歌に程もなく▲石やま○寺をぬし拜み○▲詠をあかぬ志賀の松ま門は

二　都の名處

ゑんれ面白や○▲都の名所尋るに▲名所おゝき宇治は里○▲川瀬は橋を打ゆたり▲戀しき○人を愛て又○▲扇は芝と打詠▲小嶋○崎で見渡せば○▲あたりは花も色づきて▲名に立○花や香るらん○▲

昔を殘す事なれば▲ゑゑんのそうすれ▲みのり○庭をめぐりきてイヤ上宇治のさうして○イヨ布さらすナア　我は樣ゆへ名をさらす○イヨ名をさらすナアン○▲たゑをも爰にまきのしま雨れそれまを待ぬらん▲ほのか出る朝日山○▲戀しき人を今ぞみむらう堂○▲ふしおがみたる名所かな嬉し

三　石引

やんれ旅人お聞あれ今度お江戸れ御普請に諸國人數の集りて○伊豆の網代に着にける○▲きせんの人れ數しれす▲山々谷々大石を爰ゟ手柄の事なれば▲我おと○らじと引よある○▲中にも取わけきやり中は面白やエイサヨイヨコノ上聲をかけ〳〵四つ綱はゑい〳〵や川さゑあエイさかゆるのよゑもしよ。▲扨其○後に夫よりもあたみ﨑に打あがり弓手妻手をも見てあれば○爰に泉水見ゑあるは○▲さつきれ流扨六○月れゑん天よも常のごとくよゑへもせず▲扨こそ○ほきせぬ水とは申なり南は海上まん〳〵と○▲なぎさに小船あまたみゑしは ゑやう樂我ゑやうれ風ふけば▲みきはによれやとつないだは夏のあしたて面白や▲又きてみれば伊豆の御山にさし懸り▲權現樣ゟこなた斗と伏拜み○▲あまたれがうを打過て海なりるイヤ○いやでかゝろう何よと心のゑふかアと聞よつけても面白や▲いそく○程があらはこそ▲尋る君に小田原のしゆくを打過行程に▲大磯宿にもやとをとる▲馬生れ乞たし鳥を限よ打渡り▲藤澤○しゆくよいりぬれば といや〳〵のゑやうもじがかとに立出○ござれあかれと袖を引▲面白やイヤ上れんぼれにつのれイヨきゑやう〳〵にそうば乞れほのれ▲心もそらにあこがれていそけ〳〵ば程をなく猶も思ひは品川しゆくをそや爰に嬉し

四　鹿しま

我ら田舎れ順禮でござる○音に聞ゑし鈴鹿山ゑ坂の下なる八乙女れ神樂笛こそ面白やエイヤヨエイヤ

此引上誠やらナア伊勢○れ二見に○ソリヤ二ろくおふ○孫がはいたさイヤ上臈舳にゐナア伊勢と引春日よ○ソリヤ中は鈴鹿の大社○▲吹てのぼすぞ宮津がさ神にいのり抜かけまくも▲土やま○しゆくを打過て▲草はまへのしゆくれ名よ○▲我身れ上もくもりなく▲鏡○山にあふみちれ○▲矢橋の浦に着にあり嬉し

五　虫くどき

ゑんをいよしへも今も光りれ身に余る▲ひぎよく○かざる玉虫れ○▲夕暮ごとに松虫れ▲いつかう○ろきとちきらねば蜘れ裏ない古も▲蟻蝶ごとれかいもなく君の姿は蚓の身▲なれゆく○事れ我中をエイヤヨエイヤコノ上あら腹立れげちく〳〵や▲○いつの間にかこきり〳〵すたゑすなくねに袖ぬをて我身れ○虫のかひなきも○▲ふりすてがたき鈴虫の▲さびてならぬく川こ虫○▲まくさにそゑてかなしさは夏れ日暮夜もすがら▲心を○川くし玉川さにコノ上ケ螢火はあかして夜をやまつものを▲○何とて光りそゑぬ玉虫○▲我名抜そゑてまいらするこが孫虫さへかなこねばそたおり○虫れかひもなく毛虫あら虫蜂百足▲さしつく○斗思ひしは○▲只蟷螂が斧を持▲龍しやに向斗なりかゝる思ひをふりすてゝ▲中々○今は石川やせみれ小川よ身をなけば▲うかみせまい我か思ひ玉虫

六　祈りくどき

ゑんれ武士が○▲いのり抜掛る弓八幡ひかば心の吳羽鳥あやをはぶみもねに立て▲おるに○きとのあけ暮をチ、あはれ誰か夕顔の露れ思ひは身のあたり▲生々世々れ思ひ草△引手○あがる石龜を御

身はすそ川にときそめて▲恨はくづの夕間暮めぐり紀の羅生門誰を松風村雨○月にあさごを日にそひて暮る思ひは女郎花▲唯ひとゝせ抜松の山▲姿を見れはしらひげとチ、なりつ○年は老松よあされを露の玉このつらかけてめくるは車○いつも心は角田川エイヤヨエヤコノ上なるかみが雲のたえまに落されてエイ上内裏の川よ夕立ぞする面白や▲○雲のたえまの夕かげをふたりしづかに詠むれば語る枕はかんたん○うへはおしをの山おろしふけば花ちる櫻川浪の舟橋打渡○永き檜垣を暮けれむ鐘もさえきる三井寺の庭のむせふもやふさ○あたりさびしの野々宮の○森にひゞくはふじ太鼓天の羽衣かさね○雲井あがるはひばり山やまは音羽の峯はゝき▲登さ是も高砂のまつは

七　雨ふり

さんさ雨ふりて○▲くもらぬそらの目出たさよ京も田舎も○月見花見の遊山してうたひ酒もり舞遊びかゝる目出度住吉のイヤ上ふけよ松風あかれよナアすだれ今の小歌の主見たやみめか

八　櫻くとき

さんさ鶯の聲に引れてみさば見し○▲花なりけりや初櫻來る春に咲出る○花の錦の糸櫻ひがん櫻にふげん象○▲御法の花とも云はるしイヤ上 大山木に薄櫻▲いろよ○花の枝よえだかさね櫻に八重櫻花は嵐のふくとも○としてちらすなりた櫻▲花なき時の盛がまも葉まて見事な櫻このな○小夜姫の小櫻も○▲花守なるこのうむ櫻ちる抜くやむか咲このねて いつもさかりは薄櫻○花の數さく山櫻老をなくさむ花見の酒えん○▲うたえば心も若木の櫻イヤ上 よし野の山を雪と見ればアラテンヤアコレノ花ふゞれしやれ○▲とさんに

九　くつかん

やんせ屈原はかふりをあらへる時を有沓をあらへる折もあり○▲きやうかん大夫はいもはらふ小野の小町は双紙をあらゑる許由は耳をあらひ玉ふ○又かうせんはふたゝび世をとり會稽の恥をすゝき給ふ○我は中々いつまでをイヤ上をゝくまいヨヽ引佐らされナア引ねまきなれし○其夜のヤアレかをおしむナア○ヤハ／＼はさて／＼ナア引▲時とき夢になりともきておよれ夢にはゝ名はよもたゝじそもじ

十　田うへ

ゑんせさゝなみのうほや皷のかわ柳▲水に○もまれ稲こそ出ける岸かけの○▲花さくら木やふじや打△たいこぞちやかわうつ木雨のはやしに五月雨の○▲田面見れば田歌のおんと○▲ひやうしをとりていさめけるコノ上うゑ／＼そをとめ笠かうてきゑやうよ笠かうてたもるならばなほも田をはウヨウヨ上ケいかにそをとめ四方の山々に花のさいたを見ゆるか○けに誠みゆれぞ万の花もさいたり▲ほよほ○さいていろづいてアヽヨイ世の中は嬉し

十一　龍田川

我は田舎の者なるか○▲都の君もつれなくて▲浮名なかす龍田川からくれないの　もみぢ葉に袖の雪をもくらべごし▲ふりわけ○がみの数々に思ひみたれて我がごとく▲雲井にをゑて飛螢昔の歌にもイヤ上音もせて思ひにもゆるほたるこそ▲○なく虫よりもあはれとはエイヤヨエイ○▲おもしろ○おんなさけの深き言の葉をゑらて過行君様の▲むくい○程のかなしきは千百度かきやりし▲其水○

くされかひもなくコノ上ふりのよひ様にヤレ情のないはさへ行月に▲○かゝる村雲イヤそをゑやない
ものつれもなくコノ上君まこそ頼みあれ青柳よりも▲○ 松の雪おれエイヤヨイ いつか〳〵と思ひねのゆめに

十二 戀くとき

あら面白の浮世このな○こくもうすくも紫の思ひ染ぬは去ねても▲かなはぬ○ 浮世なま中に○▲身は麻ころも薄くしてそまりかねたる墨ぞめ○ひとへ斗におもへとも▲鮑れ貝の片思ひ▲よしなき○ひとり村雨をゑぼるばかりにふり行ど▲ むすび○ とむる方もなく 我と心を引かゑて▲一首歌にかく斗イヤ上ゑらなみのよするなきさに世をこめてエイ上あまの子なれば○宿を定めんと○▲一首の歌をゑいし給へば跡よりも○▲扨又戀のせめくれば心よはくも立歸り○ 深山がくれの薄紅葉○▲秋かいらふれ鹿のねも▲妻こいかね○聲をからしてねをはなすイヤ上いつも出ぬ鹿かヤレコノ今よひ出てなくれサアつま戀かねてヤアサマ友をよぶエ虎狼野干れたぐひまて○▲あたりれ友をかたらいしあたらわが身は柘榴の花よ花は千ゑく身はひとつ ひとり床ねの仮枕▲まくらに○このゝるさゝれがみ○▲誰取あける人をなし▲ 然るにぐ僧○ 詠し給いし言の葉を きくにつけてもおもしろやいとゝたに○▲おもきがうへの小夜ごろも○▲我が妻ならぬ○はまなかさねそよとは思ゑとも○ 身のうへまなればさらに思ひきられぬ▲かなわぬ○戀に身をやつすそをじ

十三 松 島

音にきこゑし松しまは○▲ きゝしにまさる名所かな さらばおふねを漕出し○ 南おもて我なかむれ

ば○▲七浦八崎八つか嶋とは是とかや中に取ゟ名都に名をゑし京か嶋二子嶋とは是か○いくさ納た鎧嶋かぶと嶋をも打詠め▲月見か崎よりながむれば浪にうつらふ月のかげ殊にたゑせぬ磯濱の嶋の小松を打ながめ○そこで旅人一首れ歌をつら𛂞けるコノ上月日積おの𛀚とくもる墟がまれ○▲立夕けむり浦につきせしエイヤヨイ▲おをしろ○ふくら嶋とは是とかや扨も見事な竹のよゟいやふし〳〵○こめて夜はながし秋の夜まてかふくら竹ひとよなれて中々ものおもふ竹れうら葉ュ浮露の色々

十四　和歌八景

紀州和歌れ浦殊にすくれし名所なり▲あ𛀚に○拜み奉る○▲御山の松ュふくらし山市れ晴嵐もかくやらんと思ゟれて○毛見の入江れ洲崎の眞砂○▲雪かと見ゑて江○天の暮雪にことならすエイヤヨエイヤコノ上あらおしろやと見る程ュいとゝ心もすみゟたる▲片男○浪の釣舟れ沖より家路に歸る其風情○▲遠浦の歸帆かと打ながめ雲の一村殘れるは夜の雨れなこりかや扨養○珠寺の鐘の聲を○▲遠寺の晩鐘かと打聞あしへの洲崎にイヤ上𛁈ばさをたるゝ沙鷗平沙れ落雁に是をなそらへさて洞庭の秋乃月ュは○紀三井山のたてまつり誰を漁村の夕照に○▲釣するそのとおもふべし

十五　一字の題

ゑんれいュしへ歌人の○▲定家の卿のよみ給ふ▲一字乃たいュ○春は先かすそにうぐいす○▲梅柳ゟらびにさくら桃ュ梨○▲雉子やひばりかゟづなく○▲菫やまぶき𛁈ゝじふじイヤ上夏にもなれば葵草サアまだ時鳥に五月雨やェイ○▲水鷄の鳥に卯の花と○▲ほたるや蟬○扇もちすにい𛁈みなりイ

ヤ上秋は狄萩露すゝきサア蘭雁鹿虫霧の月ェイ○▲鶉や鴫に菊と蔦○▲紅葉や冬は時雨霜○▲また薄氷あられみぞれに雪と鴨○▲鷹とふす床に椎とかゝれたりこれは

十六　松くどき

扨も目出たや鶴は千年龜は万年○松は千とせの代々をへて○▲葉いろはおなし深みどりかゝる目出たき松は異國大國我が朝に松をめでたふいはゝるゝ▲先正月には門松○あなたこなたといは井ゐるエイヤヨエヤコノ上君が代は久しかるべきためしにはエイ上兼てぞ植し○住吉のまつ面白や▲○松の名おゝけれど猶も其名は○高砂の松のみどりは君が○榮さかふるめでたさよ攝津ありまのさかいの松とよ○和田の笠松高野山ではさんかうの松とよ數代よ○▲ふで捨松とは是とかや幾代へぬらん布引の松▲一首○歌にかく斗イヤ上この程の思ひおりける布引をエイ上立木て見れば浦の長さよ▲志賀唐崎の一つ松今にたえせぬ名所かな音に聞えし越前の○▲壇越松とは是とかや加賀の國には安宅の松とよ○はるゞたつね爰に駿河の三保の松原清見寺音に北野の老松よ○▲すぐなる御代に住吉の松は常盤の○色ぞかし千代の年ふる春ごとに○▲猶色まさる姫小松まつは

十七　愛宕山

おたき山なる木々の梢にコノ榮○▲紅葉もしらぬ四時乃▲山邊に○かすむ鶯の○▲はつね抜こそ○谷に賤の男木をこりて▲炭燒煙立時は▲誠に○春のけしきかなイヤ上櫻さく○▲此山鳥のしだり尾の○▲永々敷を○ちかぬ花かなと○▲よみおかれしも○今ぞ我が身にしら玉の○▲河原をてらす岩躑躅▲花もみぢよりふもとなる○▲松こそ目出たかりけりとまつは

十八　日　月

日月はゑ二六時中の車かな 天地めくらせ給ふ○▲いゝかぎりなき花の春イヤ引上ならら玉乃日かみがきぬる御召初エイ上浦浪までも長閑なりけり○▲猶日出たきは御嘉例の○▲一本手年徳いざふなうらいよ▲代々飾る御鏡に○▲うゝらふ笑れふくみぞと▲はつ春○色乃熨斗目にて○▲とりあげ給ふ数の子を▲よろこぶ所すみやかに○目出度かやをかち栗▲柿なん○俵はみのさふ君ゑ長柄の御ちやうしに▲延命○酒かな奉る▲鶴白鳥の御肴▲高砂○難波白ひげの老もときはれ松林▲ゑらべはゞみ川うちを御船よ乗乃小歌にはイヤ上 いつはりなきはナア○イヨ鶯のナアむゝふをあげて春をゑらするナアン○▲げにかみたつ四方のそら君も栄る若山の▲千代ふる松の若みどりむんじ

十九　淡　嶋

ゐんをお聞あれ深くちぎりし我中を立ざか○をこそものうけをチヽ我を○誰かきつら船○▲こかれてのるそものうけれなまり我身のさびしさに○西をはるかよなのむをばきみに淡路れ嶋見へていゝの何時浮ひとり▲松江○濱と打詠め加太乃浦にも着しかば▲うしかに○いりて身をきよめ三十三度の禮拝しイヤ上願ざくば○きみにひと度なざ嶋れエイ上大明神と○ふし拝み▲おもしろ○▲今宵は爰よかり枕ふてもふられぬこよひかなゐんをざかい衆○人とちぎらばやうすくちぎりて末とげよ

廿　初　春

紅葉ばをみよ薄いが散かこひぞまづちるになれよ

はつ春乃ゑ能ひをざしれきせながも▲小ざくらおとしさなりにける▲さてまた○夏は卯の花乃▲か

きねの水にならい皮秋になりては其いろは○いつも軍に勝いろは○▲もみぢにまがふ錦かゝ冬は雪げはそらはれて▲かぶと○星乃菊は座も▲ゑなやこのにこそおごしげのおもふかたきを打とりて▲我名○高きなけ巻は○▲釵は箱におさめおく弓の矢袋を出さずして○富貴○御代と成にあり嬉し

廿一　四季

春の山道かすむよハさんさア、せめ○てねをだせ鶯よさんさはチ、エイヨエ上夏は山道ものすごやさんさア、せめ○てねをだせ時鳥さんさはチ、エイヨエ上秋乃山道紅葉してさんさア、せめ○てねをだせ鹿の聲さんさのエイヨエ上冬の山道白たゑてさんさア、せめ○てねをだせおしかもよさんさとチ、エイヨエ

廿二　四季

春ハ吉野の花ちりてサア○雲も霞て見へあかぬ上夏はかきほの卯の花てサア津之ほはたで（一本ナシ）見へあかぬ上秋ハ龍田はもみぢ葉てサア萩やすゝき見へあかぬ上冬はこし路に雪ふりてサア○霰みぞれで見へあかぬ

廿三　あつまくだり

今度もろこしは○▲ゆうせん王○あつま下りの道すから袖よとまりしもたく〵を▲見よりよめる言の葉にさくらさや▲たづとあほとは月いづみ○たづれいづみをつれいたりやイヤ上日本言葉に直して見れば▲きのふまで野邊におりよしもたく〵を▲けふきて○見れば浦のなろさよとよめばおもしろや嬉し

廿四　御召初

ゑんま目出たいな○▲何より以目出たいは▲先正月御いゑ弁○松竹よ鶴龜千才も万才も▲扨其○外れかぎりなし▲代々御代がゆづり葉にゑめかさる御鏡よ▲くもらてむかふ面かげをエイヤヨエイヤコノ上いつもときはれ若みどり▲○榮さかふる國々や嶋もひとつにゆたか成民の竈もよにあひて▲戸さゝぬ○御代ぞめてたいな嬉し

廿五　なら玉

ゑんまあら玉れ年乃はじめに御船浮▲よろづ○たからら積納○扨又四方が詠れば▲ゐうらい○さんのいさご山○▲こがねの花をさくら木の▲すはま○あそぶるりれ龜○▲千代よ八千代に千代と▲御れり○聲を上ければ松よとまりしひな鶴も▲ゆたか○すめる御代かなと御代は

廿六　年　徳

ゑんまとし徳を早く御ざれと松かざる千代萬歳のきやうれ春のとかなりける四方れそら▲霞とゝもにイヤ上立出みればサア千とせを▲ちぎりし姫小松○ふるすより立鶯れ○▲軒端の梅に羽をやすめ▲さへつる聲はおもしろやイヤ上初春れあしたことにはきたれとも▲あはでぞ歸る元乃住家にと讀ける歌れ心かな替れとも○▲夏きてそらに時鳥秋はもみぢの色そへて冬はあられがむら〳〵とサア雪のふるゑよさくコノ花の又くる春にほかやぎて嬉し

廿七　輪乃うち

我は田舍のをのなるこの戀しゆかしの京橋を○▲なごりおしげに立出てあたご參と心ざし▲よに立のぼる○竹田海ごう通るとて我を都には川なれむ誰に東寺をふし拜み○西に見ゆるれさいゐうじ

嵯峨はおしやかをふし拜ミ▲たつときあたこお山嵐がふくとても身にはあたらじ清瀧乃水はきよめは物なれば▲御山に參り深きせいを申つゝイヤ上嵐ふく其目はサキツヨ梅の花▲○少し匂ひ○ちるもおしげにと○▲おしませ給ふ梅はよはひの年ふりて○▲くらまときけばびしやもんの▲とうじやにあたふる御ふく○かもと糺を打過て東山○▲しん黒谷をふし拜ミ下向申せば誓願寺▲軒端○梅のいはれをも聞につけてもいにしへの和泉式部を思ひだす京は一條今出川二條堀川三條室町四條四めんのあなたなる六條七條是がこしやうれたゝ中に○▲東ふくてられかねの聲耳にそびへてしゆしやうなる○伏見五社の大明神宇治に神明ミへ大明神西の岡てはむかふの明神八幡山崎を君は

廿八　歌人

扨も其後我朝は▲三國一の國なれば▲佛果をひらけ末しん○じやうとさき給ふ○▲なれ共日本○万木にすぐれて十八○公も淺からず筆でかく共つきはせじ嵯峨や吉野の山櫻○ふしみ小枝の花までも木々の梢に時をえて▲時節にをひかうばしく▲歌物語和九遊ひ連歌はいかい和歌の道▲たのしミつきぬ國なれば○▲歌道乃かたにおもむきて▲こん本深く尋るに▲其しやくそんより其以前○▲かうしといへる師○作り置をし言の葉を三十一字につらねつゝ○▲上五文字○五知の如來をたもちつゝ夫よりもはじめ○天智天皇柹本は人丸に○▲ほの〴〵と▲あかし○浦の朝きりに○▲嶋かくれ行舟おしぞ○音にきこえし赤人の田子の浦に打出○見れば白たへのふしの高根に雪はふりつゝ○げふや奥山にもみじふみあけなく鹿の▲聲きく時○秋ぞかなしきときせんほうしがすみしよはイヤ上我庵は都のたつみ鹿ぞ住▲世をうち山と○人はいふなり西行法師に行平○小野乃小町に業平のつ

らね給ひし詠歌にはイヤ上ちはやふる神代もきかず龍田川○からくれないに水くゝる○▲かやう○詠し給へはいつれ歌人に出あいしいづみ式部に小式部に▲紫式部に伊勢大夫定家かりうは是か○花の本なりし思ひ〳〵によみ給ふさすが名家いとくにて▲あしはら國と名付つゝ○▲大平らく○國もおさまる時津風枝をならさぬ御代なれやコノまつは

廿九　早年れ春

やんをさぞの春花の都にときめける○▲のとかなりけり霞の衣袖をつらねて花見のくんじゆ○▲さゝめき渡る遊山には歌や連歌や酒宴に小歌イヤ上爰て之ければ浮名のナア立にござれ山上のヤレ野で之げろヤハ、ハア扨々ナア▲あまり之げれば暮るもずず家路をするゝ遊山かな

卅　あさ草

ゐんを所より名よしおふたる江戸橋に之ばしたゝずみながむ○かざり置たる舟屋形あなたこなたここきよせて▲往來○人拔なかむれば小歌三味線笛つゞみ▲ひやうし○とりてこきいたす我も心が浮るれば少き舟に棹をさすエイヤヨエヤコノ上向い通るはま川人じやないかサテ笠がよくよたすげ笠ゐそれと問ぬがいかゞせんさきはいづくぞくほれ橋▲おふく人をみほまたや爰にあたけ乃見へけるは扨を見事な御舟かな○▲御舟藏を見て通り本庄口をも打過て▲目出度○御代よ大橋を心之づかに打ながめ▲ゆんで○方をながむれば天下御藏と打見へてむねをならへて數之らす○されはいづくぞ駒方よ○▲心を月を隅田川エイヤエイヤコノ上見渡せば西にあさじが原とりや▲○爰やかしこの茶やのゐん○▲諸國人があつまりて▲うたふ○まふほらんきよくを物に能々たとふれむ扨猩々○のみ

ふれあし○▲船こきよせてさゝへぎるハ▲さかづき○浪ょうかみてさのみにくすみひやうたん乃○▲中より駒がいつるみか山さよたうきに浮たる扨を船あそびやう〳〵

卅一　松　坂

御代は万年松坂を○▲長久目出たふ立出て(爰)〔一本麥〕をさらしと打詠め○▲知るもしらぬも大石れ○▲かい見て通る宮のまへ月に七日の市場このな▲ふもと○ちかれはせ乃しゆくイヤ上音に聞高見峠をのぼりつゝエイ上権現様をふし拝ミ○▲あらすさまじや爰に又○▲鬼木が茶やは是とかやもはや坂をも杉谷れ▲ほしかしゆくを打過て人の心は三つ茶屋の吉野○花も盛りうと○▲見てこそ通るうみいちの馬と土田のしゆくを過○▲五條末代幾千代とはや橋本の川御座ょ御召なされて今ハそやイヤ上紀の川をすくょ御船て田井の瀬をエイ上櫓をも休のふゑいこの歌

卅二　茶乃湯

扨を浮世のもて遊び○▲品々おゝく有る中に殊にたきりて見へょある▲茶の湯○すきと申するはかほど色めく御茶なれば▲とひ○遠國ょいたるまですきと此道しらざれば田夫野人と申なり○▲げに夫かれど名高御茶の昔を尋るに○▲そろあしよりも我朝に▲渡り○宇治とかの尾乃○▲茶宴のていはしや金千兩万兩の○▲まつぼの中につめいれし中ょ名高御茶の名は▲極上○そつに後むかし○▲きぬたの御茶にい乃むかし聲はきかねとかりこのねのイヤ上秋風乃そよむころにもなりしかば▲○あなたこなた○るんをお茶の間に○▲さゝめきまハる風情このな▲らうじ○いりの次第には○▲夜もあけかたのしのゝ目に▲客を○とつれてほと〳〵と○▲らうじの口ょをしかゝりてい主待ゑて禮をす

る○▲客はしばらくらうじのていを愛やかしみに氣をつけて○▲額ながむればさひ〳〵て▲當風と
扨も打見へて○清凉亭とかゝきたりイヤ上スンスン數寄屋にいりて定家の色紙しやサアヱなんれはん
きやうや利山利このん乃かけ物はぎとうふちんの墨跡しんにかんじてそめらるゝ▲さてまたしだい
になをりつゝ▲くわいせたかるき物すき見へにける膳もすくれば茶うけ出○きやくはてうづに立
れける▲さて小座○敷をそうじして茶の具色々かざりつゝからの片付たいかいや○なからう中つぎ
に瀬戸の丸つぼふんてんひだちおび▲茶碗折だめに茶せん茶巾に茶びしやくに▲ちくわ水さし水
おぼし唐の花いけきいせう〳〵手附ふくなにいろりには▲ぬりたるふろに三つ五と〳〵イヤ上釜は
さは〳〵おふけれどサアおごだあられに藤釜や▲ゑび尾ふくてん乃釜をあり物に能々たとふれば
しやうわうれいにしへも▲是にはいかてまさるなし　しんの御茶をもたてすまし▲客のおまへと
さし置てあなたあなたと吸茶して▲扨又次に打出て鎖乃間を打詠きやくは座敷をたゝきける嬉し

卅三　こうてい

なんきめてたい子天の岩戸の明くれに月をとみろも名によしおふ○かげをうつして三つまたのなみ
もしづかに船さして▲乗行すへは駒方や誰をまつちの山つゝき見れば（山〔一本心〕）もすみ田川▲流にうか
む一葉の舟のむかしはもろこしの▲くわてきさいゝしつわものは▲文武二道乃たつしやなり▲あ
るとき庭に立出て池のおもてを見渡せばイヤ上せい〳〵とふく秋風に柳のひと葉ちりうかむ▲○浪
にたゝやう其上にいづくともなくさゝかにの蜘のうへより落來り▲いとはかなくも打乗て▲みき
わによりし有様を▲げにもと思ひそめしより船をたくみてつくりだす▲帝に是を奉し▲扨みそ船

のせんの字は君ょすゝむと（一本ナシ書）とかや▲かうてい是に召せつゝ○▲四海を安くこぎ渡し▲御代をおさめ給ふ事○▲一萬八千才とかやかゝるためしを覺へ今ょたへせぬ舟遊び八百万代はかぎりなし嬉し

卅四　椿くどき

あら面白や春ごとに梅や櫻の花見こそ代々にかはらぬならいなれ▲此ごろ人のもて遊ふ○▲椿の花に手をおりて▲かざうる色の様々ょイヤ上其名をもあまたなりあけの▲○月のひかりのあけぼのやねるょ目ざますひのきんげ▲たがおもかげとしらはすの○▲糸よりかけてうす絹を▲あら川○水にそめ色のさうさしぼりょ紅しぼり▲是を○花と夕風に▲ふきあげしぼり八重しぼり▲あらいしらあと雪に▲さながら露の白玉や▲匂ひ○見へずらん しぼり花のょしきの龍田川水の秋見るもみぢすり▲猶てりまさる三日月のかげに色めくやうきひやかとるなかめはあすか川エイヤヨエイヤコノ上雨はふらねど三笠山▲○▲逢坂山に音羽山おとに聞しをしるゐょて▲椿○数はおゝけきごよしもあしだもしらなみにかけごつきせぬもしを草▲くめご○つきぬ泉川とけによりてはさかづき流す○扇ながしや舞の袖▲又くる春も花ざかり▲見てもあかぬ君が代は久しかるゐきためしには▲兼てぞ○植し吹上れ松は

卅五　西乃國

西の國ょて名所きうせき尋るに音ょきゝあるし鹿兒嶋の景を申さば東おもてに花か何やら櫻島御せんすいには竹か嶋▲さて寺々を詠む○ちごと若衆がしよくに手をかけ梅をはんしてかうきゝたま

へバちやうたちは誠せんがに鞠遊ばすと見えてあり夕部になればてら〱のイヤ上かね乃ひゞき花檀の花も今朝ふく嵐に散をもせいておなしくおしめ春れけしきで面白や▲南に内海沖よちいさき海士小船▲そのか見ゆるきやうさんのきやう○上よたいしてふくえやうしにはん夜の鐘をかくの舟よてかよふらん月打出る鳥もなき夜はその〱とあけくれば▲渚に小舟あまた見へしは上樂我城の風ふけば▲みぎはよよれやと物の上手か五色の糸にてさてつないだは夏れけしきでおもしろや西をはるかに詠むせば▲早けんとうじ四方梢を色ほいて植しき苗サァいつのまにかはそらりとほに出○秋のけしきでおもしろや北をそるかに詠むれば▲かうせき川の流入江の洲乃崎れ濱乃眞砂も雪かと見へて冬のけしきで面白や嬉し

卅六　高　滿

まだもごさるよかつらきの▲高間の山乃みねの雪よそに詠め思ひそめし君樣よゆめかうつゝかうほゝとも▲ゆめともせかであいそしは我身なからもおもほへず▲只此ごろれ思草▲はすへ乃露の色々に▲きやうげんきゝよは面白や龍田川邊に舟とめて▲いやおんそなかちじさふればはや日がくりよツヨノ鳥がなき候ヨノ鳥がなかうとまゝよのよそれ殿々とねたときれ嬉しさは扨鳥もかねもいとせぬエイヤヨエイ上あかぬまくられえのゝ目にさらばいとまのゐんせふみ

大かそり

そゝ目出たのまつのえゝよそん〱そせか付えたもイヤさかはえる葉もえげる

小かそり

ほに志賀れ唐崎なるひとつるや二つの松乃からお弦たかすしりもしりいおんたか松つるきりつるたかつるひゝたらね〳〵ちやつき〳〵て此る下をこそいなおなおに此女郎や順禮か又乃ェィよねんねゝねあし足をやすめてつれをまつ

大かすり

ほに岡山女郎所たおはきてみて有は御めもとてお弦〳〵〳〵ともこ弦はか志やるか女ら見めかェノよれば又のェィよねんほおゑ付おゑもィャことはも志なかよせ

小かすり

ほゝせさの出船を濱へはしり出てさしばやとまねいか宿のかあ(一本のれ)〳〵〳〵〳〵さま志やいなほよねいお𛀙れコノいとまか又乃ェィよねんねゝほふそそてにい包はあものねんねゝ取間ものねん

ほやなまんあうはやはんはゝなる

大かすり

ほゝ志よな志やうの子の小坊子か且那の前よて淺きやうよむとてけさもはんはなついてゑよまなんだとな大坊子はコノあすから且那かいやたとな書ふみかコノいとまか又乃ェィよほんねんねふみ手おはィャ取まものほんほやはゝうえんえゝなまあゝはやはんはゑゝさらやんはらやいよゑいよへ〳〵なまあんはなう

小かすり

ほゝあのや谷よなおれる谷そこよな二間々中に三間えり四角はコノはしられ又乃ゑいよねんほゝ

わかとほかとのゝゑもおくのわんほゝなはおそきゐはよけほよなら面白れ淺草ちやゝかうちには
さゞ川さられつまいれゐエノ御酒えゆんたりまうたり福徳ゑんすり弁才天れなかよもおさります
よれ女らミめがコノよけれハ又乃ゑはようほんくほおゑ聲ゑゝもほゝイヤおとはを左ながよお

鯨　うた

岩井めてたの若松樣子若松樣子さ枝を榮るはもえゆげる沖でつはたはとれ樣若山くみよさ若山く
ミよさおやも取た子もそゑてつくとお似ふゑ三濱の鯨三濱のくじらさ君けはたしに立程に
竹に成たやお山の竹よお山乃竹よ御船はんえよれえるし竹
まゑな似くろよ綱くる掛て綱くを掛さおせはまゝのにひまもなく

「右御船歌は舊時御舟行又は和歌御神事御船舞等れ時御水主共皷を打貝を吹き和唱したるもの也
幕府御船手に於けるも同事とす明治廿八年　當公御臨縣の際舊水主共舊時の裝をなし御船歌雛
子を電覽に供し後此一卷被提出す」

南紀徳川史卷之八十一

臣　堀　内　信　編

祿制第一

緒　言

俸祿は總して御勘定奉行往古は奉行と稱すの掌る處にして、其制規百端此編のみに止らすと雖も、帳簿既に散逸今捜索の便なし、唯僅に筆記發見の分のみを掲く、

一並高と稱し每職定規の役高あり、御役順帳に列記しあるを以て、職制之部に讓り爰に畧す、女官俸祿亦同し、

一祿制の起因及ひ制度等往古の事知るへからす、唯駿河より御入國の前後即ち元和御切米帳同終身錄あるを以て之を卷首に掲け、明治維新祿制大改革を卷尾とす、

一烈祖御代には、福島浪人初四方の俊傑武功の士は、汲々徵募又子弟二三男たりとも新知を賜る者擧て數へからす、是れ建國振武の英旨と雖とも苟も士道を辱め法に違ふ者は斷然改易放逐し、幼者家を襲げば大祿も俸米に削減、嗣子なきは家斷絶所謂新陳更替經濟の平均自から得しものゝ如し、御二世以後亦專ら此法に準據、享保以后尙然らさるなしと雖とも次第昇平に馴れ風紀自然寬恕に傾き、改易御暇は刑番外近世刑小普請と云ふに變し、嗣子なきも急養子名跡を允許し、十七歲以下も成人に見做され、高祿の者は世々大夫番頭に下らす、二三百石の家は代々必す頭役となり、小祿の者は假令

才幹有爲の士と雖も終身平士に呻吟、偶々權職高祿に進む者は寵臣乃至樞要より出るに止り、純乎たる門閥世襲を尊に至る、依て子弟二三男にして家を起す者あることとなし、蓋し天下之大勢皆然らさるなし、維新更始明治の平均祿制は時機相熟するものと雖とも、忽諸府藩縣一致の制に歸し、彼の士族なる者は土崩瓦解轉覆相續き、名門右族の裔も、武功俊傑の蹟も今日能く其祀を存するは殆と曉星に異ならさるの觀あり、是國初以降祿制に關する沿革の大段略とす、

一觀自在公晩年には徵僻濫頻、市井の賤夫一朝士席に列擧せらるゝ實に枚擧に堪へす黜渉殆と常なき如し　公薨逝の際悉く免放即ち御片付帳と稱する者政府に存せりと雖も今傳らす詳にしかたし

一安藤大夫に賜りし三万八千八百石の內七千二百石は田邊與力三十六人之祿、千六百石は附屬同心六十八人之給扶持たり抑田邊與力は元と横須賀黨にして安藤帶刀に附屬せしを　神祖より　龍祖へ被爲附、紀州へ陪從、田邊は樞要の地也とて該黨の內小身者鬮取を以て三十六人田邊へ移住代々二百石づゝ賜りし處、子孫斷絶又は入替り等多少更迭あつて近世廿二人に減せしか、安政二卯六月安藤家より突然十七箇條の訓令を下し、更に同家へ臣節を取らしめんとするに一同承服せす、紛擾惹起の末遂に安家より放逐を命し廿人の者（二人故有て預らす）田邊を離散四方に流偶す、後八年を過き文久三亥年四月歸參の命あつて御切米四拾石づゝの小十人小普請となり、松坂御城番を拜す事は職制の部横須賀大御番の條及ひ　照德公安政三年二月十二日の記に詳記す、亦祿制に因あれとも爰に掲けさる所以を示す、

水野大夫に賜りし三萬五千石余の內六千二百石は與力十二人の祿米、千俵百人扶持は同心五

十人の給なり、何れも　神祖より附屬　龍祖續て賜ふ所とす、然る處嘉永六丑年十二月右與力地上り高千六百石を水野土佐守へ被下切に成りたり、是亦同年の記に掲載爰に略す、

一御加恩知は幕府より賜ふ所にて、我祿制に關せせされとも、其名稱往々編史に顯るゝを以て由緒の概略を參考に備ふ、

一西條公御附設樂木造外四名、近藤一郎右衞門初二十八人、明治二巳年八月九日御返還、又同年十二月十日同御家臣紀州住の者河北門左衞門初四十四人、西條移住を拒み、依歎願當藩籍に加へ各俸祿下賜せらる、是祿制に關する處ありと雖も維新革命に際會と時勢變遷の態通觀との便により同年の世記に詳記爰に略す

一紀勢御領內諸社寺へ下付の金米少からす、元和御切米終身錄に記する所あれとも以后沿革等巨細知り難し、維新後明治三年十二月太政官布告を以て諸國社寺領一般上け地等被　仰出悉皆上納す、亦祿制に係るものと雖も社寺制の部に記載し爰に掲けす、

一紀勢地士町人爲御替組御立用方他向町人等へ給與の俸米亦甚た多し、帳簿の存せさるを以て其人員總額共に知るへからす、本記御家中總祿高の部に、御領分外御出入町人共へ被下、合千四百四十五人扶持と記載あるは即此の一分也、

明治廿七年四月

堀　內　信　識

い

一高　五百石　板倉長兵衛
一同　三百石　犬塚甚左衛門
一同　二百石　飯(野)[一本嶋]彌兵衛
一同　四百拾五石　石貝右衛門八
一同　二百石　今井金三郎
一同　五百石　伊木半七
一同　二百五十石　石野忠左衛門
一御切米　四拾石　飯嶋七左衛門
一高　三百石　稻葉宇右衛門
一同　二百石　伊藤市丞
一同四拾石　一色久丞
一　拾五石　今枝左内
一高　四百石内二百五十石御加増　井上釆女
一同　二百石　伊藤三太郎
一高　六百石内百石御加増　伊奈掃部

一同　五百石　井上仁左衛門
一同　二百石　石野市藏
一同　伊村善九郎
一同　二百石　稻生加兵衛
一同　四百石　飯嶋助十郎
一同　三百石　稻生九郎右衛門
一同　二百石　井上加兵衛
一高　五百石　飯塚内匠
一同　二百石　井出彌十郎
一同　四百石　石山角右衛門
一同　五　石　石谷助右衛門
一高　五百石　岩瀬内膳
一同　一瀬與八郎
一御切米二拾石　飯島庄八
一同　五百石　市川甚左衛門

一同　石黒藤兵衛
一同　岩本仁左衛門
一同　拾五石　飯山二郎右衛門
一高　二百石　飯嶋彌右衛門
一同　五拾石　井口兵藏
一同　五拾石　同　文助
一同　二拾石　同　三太郎
一同　七石　同　新七
一御切米拾石五斗　石田猪兵衛
一高　拾五石　同　傳兵衛

は

一高　六百五拾石　長谷川五郎左衛門
一同　三百石　橋本源兵衛
一高　二百石　長谷川市兵衛
一同　三百石　早川清兵衛
一同　百五拾石　同　權四郎
一同　二百石　服部万左衛門

一同　二百石　石原源右衛門
一御切米三拾五石　岩佐市右衛門
一同　拾四石　石本甚兵衛
一同　三百石　池端彌作
一同　五拾石　井關又介
一同　廿一石　飯田惣左衛門
一同　三拾五石　同　甚三郎
一同　拾七石五斗　石原吉藏
一高　二百五拾石　市川門左衛門
一同　拾五石　今村虎藏
一同　三百石　早川甚左衛門
一同　二百石　同　六郎左衛門
一同　五百石　波多半平
一同　二百五拾石　橋本加右衛門
一同　三百石　林二郎左衛門
一同　林　勘兵衛

一同　百廿石　早川次郎兵衛
一同　三千石　林　平丞
一同　千五百石　早河左馬
一同　四百石　原田權之助
一同　貳百石　長谷川庄次郎
一同　馬場十藏
一高　四百石　馬場二郎左衛門
一同　二百石　端　次右衛門
一　三拾石　林　助右衛門
一同　拾五石　原　二郎右衛門
一同　三百石　長谷川清右衛門
一　拾五石　花井彌吉
一　拾五石　葉田作藏

に

一高　三百石　西尾彌右衛門
一同　四百石　熱　掃部
一同　二百石　西山兵四郎

一高　二百石　橋本與右衛門
一同　千五百石　早川十兵衛
一同　五百石　花房內藏丞
一同　三百石　林　少九郎
一同　同　勘八
一御切米三拾石　長谷川金次郎
一同　九百石內二百石御加增　原田市十郎
一　二拾石　林　作兵衛
一御切米三拾石　早川清左衛門
一高　百八拾石　橋本彥兵衛
一　五拾石　林　七藏
一高　三百石　花井八郎右衛門
一同　丹羽彌四郎
一同　三百石　西尾長松
一同　八百石　丹羽三彌

一同　六百廿石　同　江左衛門
一高　六百石　丹羽金十郎
一同　三百石　西村清左衛門
一高　三百石　丹羽久左衛門

ほ

一高　六百石　本間小一郎
一同　八百石　堀田右馬丞
一同　三百石　堀部佐左衛門
一同　千石　北條内記
一御切米三拾石　本田八助
一同　二百石　堀　勘兵衛
一　拾五石　堀部奥大夫
一　廿三石　星野新太郎

と

一高　六百石　富永左兵衛
一　四百石　東　三五郎
一同　二百石　同　傳左衛門

一　拾七石五斗　仁科久太夫
一同　二百五拾石　同　五郎右衛門
一同　三拾石　同　左太郎
一同　二百石　同　彌惣
一同　二百五拾石　細井長太夫
一同　四百石　堀　次大夫
一同　二百石　本間左衛門七
一同　三百石　堀田四郎三郎
一高　三百五拾石　同　八藏
一御切米四拾石　保坂金兵衛
一　拾四石　本田長五郎
一　廿三石　本田七藏
一同　三百石　同　三大夫
一(一本高同)　戸田太郎右衛門
一同　四百石　東使彈正

一同　五百石　豊嶋半丞
一御切米五拾石　東　勘五郎
一同　五拾石　戸田九郎次郎
一高　七百石　遠山主膳
一同　千七百三拾石　戸田金左衛門
一同　三百石　戸塚半彌
一御切米百石　富田藤兵衛
一同　二百石　戸田八兵衛
一同　四拾石　鳥羽主膳
一高　千石　富岡大膳
一同　三百五拾石　鳥居金五郎
一同　千石　同　藤左衛門
一同　二百石　戸村清右衛門
一　廿三石　戸田半三郎

ぬ

一　拾五石　布目權平

を

一高　三百石　小笠原八彌
一同　二百石　大高源右衛門
一同　三百石　小笠原彦右衛門
一同　奥田主膳
一同　五百石　小川監物
一同　落合勘左衛門
一同　二百五拾石　尾崎彦十郎
一同　二百五拾石　小笠原與次郎
一同　二百石　小栗與次右衛門
一同　岡田六兵衛
一同　二百石　大森半七
一同　三百石　小笠原與三右衛門
一同　大草角助
一同　二百石　大屋小平八

一同　岡　喜兵衛
一同　八百石　小野木伊豆
一同　五百石　岡田甚太夫
一同　三百石　押田市左衛門
一同　二百石　小笠原杢助
一高　三百五拾石　小野木喜三郎
一高　小幡外記
一同　六百石　落合左平次
一同　二百石　大河内善兵衛
一同　二百石　大鳥井六大夫
一同　六百卅石　岡部太郎兵衛
一同　落合長三郎
一同　二百五十石　小栗又右衛門
一御切米　五拾石　岡部惣五郎
一同　大久保五郎兵衛
一同　岡部小左衛門
一同　五百石　小笠原十郎右衛門

一同　千石　大久保八郎五郎
一同　七百石　小笠原七兵衛
一同　五百石　大久保四郎左衛門
一同　二百石　大森久六
一御切米四拾石　岡部藤一郎
一同　三百石　大河内杢左衛門
一同　二百石　大須賀九郎右衛門
一同　五百石　長田七郎右衛門
一同　三百石　大石彦左衛門
一同　九百石　尾崎平左衛門
一同　四百石　小笠原金平
一同　三百五拾石　大石長吉
一同　二百石　同　新助
一高　千石　小笠原次右衛門
一同　四百石　小栗彌左衛門
一同　千石　大藪新右衛門
一同　二百石　尾崎所左衛門

一同　恩尾彌五右衛門
一同　二百五拾石　奥山左門
一御切米　廿五石　大塚久左衛門
一　拾五石　小川彌右衛門
一高　千石　小笠原庄大夫
一高　百五拾石　大屋七兵衛
一同　五拾石　尾關喜太郎
一　五拾石　尾關小平次
一高　千八百卅石　小笠原與左衛門
一同　三百五拾石　同　三郎右衛門
一同　同　彌太郎
一同　二百石　岡本久彌
一同　三拾石　大岡二郎大夫
一高　二千石　小笠原主馬
一同　五百五拾石　小笠原主殿
一同　三百石　小笠原左京
一御切米三拾石　大村傳八

一同　小田切彌三
一　三拾石　大村七兵衛
一同　小川七右衛門
一　拾四石　大野左大夫
一　卅五石　奥村左介
一御切米八拾石　長田權十郎
一　五拾石　岡田六左衛門
一　五百石　大崎玄蕃
一同　千石　同　久兵衛
一同　二百石　同　甚十郎
一同　同　半三郎
一御切米　三拾石　小笠原角右衛門
一　拾五石　奥村仁左衛門
一同　千五百石　大村彌兵衛
一同　三百石　大須賀兵左衛門
一同　二百石　同　與次郎
一　三拾石　小笠原作右衛門

一　二拾石　同　吉十郎
一　廿三石　大原平三郎

わ

一高　三百石　渡邊八兵衛
一同　二百石　同　七左衛門
一同　三百石　渡瀬太左衛門
一同　四百五拾石　藁科九郎右衛門
一同　二百石　若尾右衛門四郎
一高　三千石　渡邊一角

か

一高　四百五拾石　糟屋新三郎
一同　三百石　笠原助左衛門
一同　糟屋次郎兵衛
一同　二百五拾石　加藤吉兵衛
一同　千八百石　蔭山土佐
一同　二百五十石　垣屋一郎兵衛
一同　桂田次大夫

一高　千石　同　長左衛門
一同　二百五拾石　同　彥右衛門
一同　若林兵彌
一同　四百石　渡邊道喜
一同　四百五拾石　渡邊六郎左衛門
一御切米　五拾石　渡邊七郎兵衛
一同　二百石　若尾彌九郎
一同　三百石　加田彌三左衛門
一同　二百石　樫原五郎左衛門
一同　六百石　河村内匠
一同　二百石　加納久太郎
一同　七百石　糟屋助兵衛
一同　三百石　鴨居善兵衛
一同　二百石　神谷與十郎

一同　蔭山右馬助
一同　片桐二郎左衛門
一高千石　河北長左衛門
一同　二百石　加納平右衛門
一同　二百石　河北主水
一同　河窪才十郎
一同　三拾石　葛西勘四郎
一高　六百石　神谷九左衛門
一同　二百石　河島意休
一同　二百石　鏑木與兵衛
一同　貳拾八石　糟屋彌吉
一同　片桐藤兵衛
一高　二百石　葛西三郎右衛門
一　拾二石　河野理左衛門
一　四拾石　片桐市大夫
一御切米　廿一石　河合加兵衛
一　三拾石　加藤新平

一同　加藤六左衛門
一同　百石　甲田新左衛門
一同　四百石　加納大隅
一同　三百石　内百石御加増　加納數馬
一同　加藤兵三郎
一御切米　四拾石　加茂井善六
一同　二拾石　同　權次郎
一同　千石　河合刑部
一同　二百石　覓四郎左衛門
一御切米　拾石五斗　神谷善右衛門
一　五拾石　但三人組にて被下たる元和御切米終身限に有　三橋庄右衛門　野村三郎兵衛　河村五兵衛
一高　五百石　片桐權右衛門
一御切米　四拾石　柏木彥右衛門
一御切米　拾壹石五斗　鎌田次左衛門
一同　加藤孫平
一高　二百石　川上兵大夫
一高　二百三拾石　愛澤彌右衛門

一同　二百石　海福武兵衛

一　廿三石　川名孫三郎

よ

一御切米　三拾五石　吉井半右衛門

一　五拾石　吉田彌九郎

一同　廿五石　吉田九郎左衛門

一御切米　七石　同　二郎八

た

一高　二百石　爲井六大夫

一同　三百石　高田八郎左衛門

一同　四百石　高橋宇右衛門

一同　二百五拾石　伊達七郎右衛門

一同　四百石　高井助兵衛

一高　四百拾六石　竹本茂兵衛

一同五百五拾石内二百五十石御加増　高井伊折

一同　三百五拾石　同　五兵衛

一同　同　竹本傳吉

一　三拾石　愛澤二郎兵衛

一　廿三石　加藤傳二郎

一高　三百石　横井治大夫

一御切米　五拾石　横井清三郎

一　拾四石　横山半兵衛

一同　四百石　宅間與三左衛門

一同　千石　武田與右衛門

一同　三百石　玉井與兵衛

一同　八百石　田宮常圓

一同　四拾石　竹田兵吉

一同　六百石内三百五十石御加増　伊達角彌

一同　二百石　竹本傳藏

一同　二百石　高月半右衛門

一御切米　三拾石　高下五郎兵衛

一　拾五石　高橋又左衛門
一御切米　三拾五石　高橋與四郎
一　卅五石　高木少藏
一　拾石五斗　竹村藤四郎
一高　二百石　同　忠兵衛

そ

一御切米　五拾石　十河左之助
一同　八百石内五百石御加增　薗田猪兵衛

つ

一高　五百石　妻木外記
一同八百石内三百石御加增　都筑久太夫
一同　四十石　都筑安右衛門
一拾石五斗　同　次郎介

ね

一高　二百石　根岸二郎兵衛

な

一高　四百石　中嶋傳右衛門
一同　二百石　長谷庄介

一高　貳百五拾石　田邊庄介
一同　拾石五斗　高橋少吉
一御切米　拾四石　高橋五兵衛
一　廿三石　高岡長二郎
一　廿三石　辰田喜太郎
一高　千百石　曾根孫大夫
一同　五百石　曾根兵左衛門
一同　三百三拾石　柘長五郎
一　拾五石　露木平左衛門
一御切米四拾七石六斗　土屋九兵衛
一高　二百石　柘八左衛門
一同　三百石　内藤三郎右衛門
一同　千石　南部志摩

一同　六百石　内藤甚五左衛門
一同　二百石　永井惣九郎
一同　五百石　中村新左衛門
一同　二百石　鍋田源左衛門
一同　千石　成瀬豊前
一同　二百五拾石　名所彌次右衛門
一同二百石　夏目三十郎
一同　二百石　長坂五郎八
一高　五百石内三百石御加増　中井山三郎
一御切米　八拾石　長田道慶
一御切米　廿五石　中村市右衛門
一御切米　卅五石　中條市左衛門
一御切米　五拾石　長谷平九郎
一拾七石五斗　中野久助
一　廿三石　中根半九郎
一　廿三石　同　門三郎
一　卅石　同　平大夫

一同　六百石　中村源左衛門
一同　二百石　中村四郎左衛門
一同　二百石　中野新兵衛
一同　五百石　内藤權之助
一同　六百石　中嶋勘兵衛
一同　三百石　南間主斗
一同　二百石　内藤兵四郎
一御切米　八拾石　内藤藏人
一同　三百五拾石　長坂小右衛門
一　四拾石　鍋田仁兵衛
一　拾二石五斗　中村十右衛門
一高　五百石　長野九左衛門
一　卅三石六斗　中田甚藏
一高　三百石　中根日野
一　廿三石　長坂九郎三郎
一高　二百三拾石　波切金左衛門

む

一高　三百石　村嶋清兵衛
一同　二百石　向笠將監
一同　五百石　武藤平左衛門
一高　千石　村松郷右衛門
一御切米　拾石五斗　村岡市右衛門
一　卅五石　村松長右衛門
一　三百石　村上彦右衛門
一同　二百石　村井久左衛門
一高　二百石　村越半右衛門
一高　九百石　武藤萬休

う

一高　三百石　海野刑部
一同　二百石　海野平三郎
一同　二百六拾石　上野三郎右衛門
一同　三百石　海野兵左衛門

の

一同　二百石　室水之助
一同　七百石　村瀬作右衛門
一御切米　五拾石　村田權平
一同　六拾石　村山八右衛門
一高　二百石　村岡左兵衛
一　五拾石　村田九郎右衛門
一高　三百五拾石　村松郷八
一　廿三石　同　忠藏
一　廿三石　同　門彌

一同　二百石　同　五郎三郎
一同　五百石　上田五左衛門
一同　二百石　同　半彌

一　八拾石　能勢權之助
一同　七百石　野尻木工
一同　五百石　野々山七左衞門
一御切米　卅五石　野間藤九郎
一同　四拾石　同　與十郎
一　三拾石　野々山吉右衞門

く

一高　二百石　桑嶋六兵衞
一同　三百石　朽木清右衞門
一同　五千八百石　久野丹波
一同　七百石　久野極之助
一高　五百石　畔柳清十郎
一同　三百五拾石　久米武兵衞
一御切米　卅五石　久米大學

や

一高　五百石　山路勘右衞門
一同　三百石　山田勘兵衞

一高　二百石　野澤竹之助
一同　五百石　野中六右衞門　三橋庄右衞門
一　五十石　野村三兵衞　河村五兵衞
一同　四拾石　野田喜左衞門
一高　二百石　野間與五右衞門
一同　三百石　桑原權左衞門
一同　二百石　久野武右衞門
一同　七百石　畔柳壽學
一同　四百石　桑島出羽（分）本のまゝ
一同　五百石　畔田半右衞門
一同　二百石　畔田善七
一同　八百石　山本十大夫
一同　二百石　山本長五郎

一同　三百石　山井專丞
一同　三百五拾石　山下庄大夫
一同　千石　山本圖書
一同　二百石　山口友之助
一御切米　五拾石　山田金五郎
一同　五百石　山岡七左衛門
一同　三百石　箭野權右衛門
一同　五拾石　同　傳十郎
一御切米　七石　山崎長九郎
一　廿三石　同　勘四郎

ま

一高　千石　松平久七
一同　三百石　松井三右衛門
一同　三百石　牧野次郎兵衛
一同　四百石　松下掃部
一同　二百石　松原茂兵衛
一同　三百石　松山彦大夫

一同　二百石　山本半左衛門
一同　二百石　矢部縫殿
一同　千石　山名庄藏
一同　二百石　山下主米
一高　四百石内百石御加増　山下茂兵衛
一同　四百石　山田八右衛門
一同　三百石　安井五左衛門
一　拾石五斗　安井半右衛門
一高　二百石　八木勘左衛門
一同　千石　同　久彌
一同　七百石　松平八郎右衛門
一同　二百石　松下太郎助
一同　三百石　牧　平兵衛
一同　千石　松平三郎兵衛
一同　二百五拾石　牧村源兵衛

一同　二千石　牧　齊佐
一同　二百五拾石　牧　小六
一同　三百石　松平内記
一高　七百石　松下勘兵衛
一同　三百石　間宮四郎左衛門
一同　拾四石　松村圓齊
一同　百五拾石　間宮助四郎
一同　拾四石　松原善大夫
一　三百石　眞鍋五郎左衛門
一御切米三拾石　牧　源太郎
一高　二百五拾石　牧　三郎兵衛
一高　三百石　牧　勘左衛門

ふ

一高　二百石　富士左兵衛
一同　百五拾石　深澤助藏
一同　三百石内百石御加増　深尾源七
一御切米　五拾二石五斗　福嶋市之丞

一同　三百石　松野惣太郎
一同　千石　松平長七
一御切米　五拾石　万年小三郎
一高　二百石　眞木八左衛門
一同　廿五石　松永庄藏
一高　三百石　松下助左衛門
一御切米五拾石　眞野三右衛門
一同　三百石　松下壹岐
一高　二百石　前嶋金大夫
一　三拾石　前嶋覺左衛門
一　三拾石　松下三九郎
一　卅五石　牧　九郎太郎
一高　二(一本十千)石　不破源六
一同　五百石内二百五十石御加増　布施左五右衛門
一同　千石　福岡太郎八
一高　百五拾石　古川淸右衛門

一御切米　拾七石五斗　古屋角右衛門
一　三拾石　古川金兵衛

こ

一高　五百石　郡　安右衛門
一同　三百石　小浦金五郎
一同　二百石　權田小右衛門
一同　二百石　小林十右衛門
一御切米　四拾石　小泉長兵衛
一高　五百石　後藤彌次兵衛
一同　三百石　同　角兵衛
一同　三百石　幸田三郎兵衛
一同　三百石　小崎九郎兵衛
一同　三千二百卅石　近藤登助
一同　千石　同　左門
一　四拾石　小岸午之助
一高　二百石　小浦喜平次
一御切米　五拾石　小林長助
一高　三百五拾石　同　長左衛門
一同　二百石　小谷作内
一　拾石五斗　小岸久右衛門
一　拾石　小澤惣兵衛
一高　五百石但二百石御加増　小倉惣兵衛
一同　二百石　小倉清十郎
一同　二百石　小浦次右衛門
一同　三百石　小嶋次郎右衛門

え

一高　千四百八拾石　江馬與右衛門
一御切米卅五石　遠藤兵右衛門
一　拾五石　江馬彌九郎

て

一高　百石　寺島六郎右衛門

あ

一高　二百五拾石　淺沼源右衛門
一同　五百石　朝倉六兵衛
一同　二百石　朝比奈又左衛門
一同　三百石　新居市兵衛
一同　二百石　荒川甚之助
一同　二百五拾石　渥美十郎左衛門
一同　三百石　淺井九左衛門
一同　三千石　朝比奈惣左衛門
一同　四百石　同　德十郎
一同　二百石　有賀喜右衛門
一同　五百石　天方四郎三郎
一同　四百石内百五十石御加增　同　長吉
一高　二百五拾石　淺井源大夫
一同　二百石　粟生藤十郎
一六百石　天野兵庫

一同　二百石　寺西甚助
一同　六百石　朝倉勘解由
一同　二百石　有馬豐前
一同　千石　天野將監
一同　二百六拾石　渥美才三郎
一同　五百石　荒木十右衛門
一同　二百石　靑見藤右衛門
一同　二百石　芦澤鄉左衛門
一同　千石　天野孫左衛門
一同　三百石　粟生吉兵衛
一同　千石　荒川甚太郎
一同　四百石内百石御加增　天野權丞
一同　四百石内二百石御加增　朝倉新十郎
一同　二百石　淺長八十郎
一同　七百五拾石　渥美太郎兵衛
一同　三百五拾石　淺岡助大夫

一同　千石内百五十石御加増　安藤忠兵衛
一同　千八百石　渥美源五郎
一同　二百五拾石　芦澤平兵衛
一　三拾石　安藤左大夫
一　三拾石　相賀佐兵衛
一　廿三石　淺羽角丞
一高　三百石　渥美左源太
一　三拾石　淺山彌五左衛門

さ

一高　三百石　佐野角右衛門
一同　三百石　佐野新藏
一同　二百石　同　半左衛門
一同　三百石　佐々七兵衛
一同　二百五拾石　三枝源四郎
一高　三百石　坂口佐兵衛
一同　二百石　坂部久左衛門
一同　二百石　榊原忠次郎

一同八百五十石内三百五十石御加増　芦川權大夫
一同　八百石内五百石御加増　芦川甚五兵衛
一同　四拾石　明石喜内
一　六拾石　赤田又兵衛
一御切米　拾三石五斗　青木小右衛門
一御切米　廿三石　淺井長十郎
一同　二百五拾石　同　源十郎
一高　百五拾石　淺山次兵衛
一同　二百石　坂田左源太
一同　二百石　同　源三郎
一同　二百石　同　助十郎
一同　二百五拾石　佐野庄藏
一御切米　四拾石　佐野數馬
一同　三百石　佐藤傳次
一同　五百石　三田五郎兵衛
一同　二百石　篠本庄右衛門

一同　二百石　佐野三次郎
一同　四拾石　佐藤長右衛門
一　拾五石　佐束川源二郎

き

一高　三百石　木村藤兵衛
一同　五百石内二百石御加増　木下主馬
一　廿五石　木村文左衛門
一　拾石五斗　同　新八
一高　二百五拾石　木村又右衛門

ゆ

一高　二百石　由比十左衛門
一同　三百石　由比與五右衛門
一高　二百石　由比七左衛門

み

一高　二百五拾石　宮崎仁左衛門
一同　四百石　同　勘右衛門
一同　二百石　三堀新藏

一御切米　六拾石　篠本與九衛門
一同　八拾石　酒井三伯
一　廿三石　西江新十郎
一同　二百石　同　八郎大夫
一同　三百石　菊地半左衛門
一　拾石五斗　岸十藏
一御切米三拾石但十六石御加増　同　又十郎
一同　二百石　同　長兵衛
一同　四百石　弓氣多新平
一同　二百五拾石　由比庄右衛門
一同　五百石　水野藤介
一同　二百五拾石　同　五郎作
一同　四百石　水野左門

一同　三百五拾石　三上又右衛門
一同　二百石　同　太兵衛
一同　五千石　同　長門
一同　二千石　三刀屋監物
一同　千五百石　三上玄蕃
一　拾壹石五斗　三浦八郎左衛門
一同　五百石　三宅與兵衛
一同　二百石　三宅七之助
一　五拾石　三橋庄右衛門　野村三郎兵衛　河村五兵衛
一　拾五石　御宿太郎右衛門
一御切米　五拾石　水野長兵衛
一　百五拾石　水野次郎右衛門
一高　三百石　三井孫十郎
一御切米　廿三石　三倉孫三郎
し
一高　五百石　白幡與四右衛門
一同　五百石内二百石御加増　嶋崎五兵衛

一同　三百石　三浦權七
一同　二百石　同　權六
一同　四千拾石　水野左近
一同　七百石　水野甚三郎
一同　二拾石　三宅喜三郎
一高　八百石　水野喜兵衛
一同　千石　三浦勘助
一同　二千石　水野三郎九
一高　百五拾石　三宅近平次
一　廿五石　三雲九左衛門
一同　二拾石　水上善三郎
一　五拾石　水野小右衛門
一同　百八拾石　箕浦茂左衛門
一　拾五石　三井大學
一同　二百石　下村三大夫
一同　八百石　志賀又左衛門

一同　二百石　四宮太郎左衛門
一同　三百石　設樂四郎兵衛
一同　二百石　白井孫三郎
一　百三石　清水三十郎
一同　二百石　澁谷文十郎
一同　二百石　下村右門
一同　七百石　同　文右衛門
一　拾五石　柴山嶋之助
一御切米拾三石　下田十左衛門
一同　二百五拾石　神　八郎兵衛

ひ

一高　四百二拾石　平井六藏
一同　二百石　彦坂宮內
一同　二千二百石　彦坂九兵衛
一同　三百石　廣瀨又兵衛
一同　二百石　肥田半介
一　四拾七石六斗　平尾久右衛門

一同　千五百石　澁谷伯耆
一同　四百石　茂野善兵衛
一　百四拾五石　篠瀨左大夫
一高　三百五拾石内百石御加增　鹽屋左馬助
一同　二百石　茂野善十郎
一同　五百石内二百石御加增　澁谷賴母
一御切米　拾五石　庄　半兵衛
一　六拾石　下里茂右衛門
一高　二百五拾石　芝田四郎兵衛
一同　二百石　彦坂九右衛門
一同　四百石　平井次郎大夫
一同　千石　彦坂五郎左衛門
一同　二百石　彦坂五郎作
一同　四百石　彦坂加兵衛
一　四拾石　平尾仁兵衛

も

一七石　同　市平　　一御切米七石　同　半九郎

一高二百石　望月十右衛門　　一同三百石　森勘解由

一同三百石　望月權兵衛　　一同二百石　同太左衛門

一同四百拾石　同瀧左衛門　　一同三百石　森伊右衛門

一同二百五拾石　森川九郎左衛門　　一御切米二拾石　望月源四郎

一高二百石　毛利太郎右衛門　　一　三拾石　門奈助大夫

せ

一高三百石　關口靱負　　一「御切米百廿石」　「關根兵右衛門」

一高三百石　關根兵左衛門

右不分明之品有之司農へ承合候處「朱書」之通申遣る

万延元申十月

一「御切米五百石」高五百石　關根織部

右不分明之品有之司農へ承合候處「朱書」之通申遣る

万延元申十月

一高千石 内三百石御加増　關金平

す

一高　五拾石　鈴木孫三郎　一同　二百石　末高忠右衛門
一同百五拾石　同　半平　一同　五百石　菅野内膳
一同　四百石　鈴木忠左衛門　一同　三百石　同　六兵衛
一同　百五拾石　同　權左衛門　一同　二百石　菅沼加右衛門
一同　四百石　鈴木兵部　一同　二百石　同　勘兵衛
一御切米五拾石　諏訪部猪之助　一同　百石　菅沼宮内
一同　二百八拾石　杉浦彌五右衛門　一同　八百石内二百二十石御加増　菅沼半兵衛
一同　三百廿石　鈴木五郎大夫　一同　二百五拾石　諏訪部猪左衛門
一高　二百石　鈴木四郎兵衛　一御切米　二拾石　同　忠兵衛
一　拾石五斗　同　喜兵衛　一　四拾石　同　左次右衛門
一　廿三石　同　市丞　一高　二百五拾石　同　左内
一同　二百石　同　太郎左衛門　一同　百五拾石　同　九郎左衛門
一同　廿三石　同　井兵衛　一同　廿三石　同　權太郎

張り書
〆七百拾九人
本帳名字無之分

一高　三百石　普門院　一同　二百石　慶安

一同　二百五拾石　卜　齊
一同　二百五拾石　菊阿彌
一　卅五石　薩　摩
一御切米　四拾五石　玄　齊
一御切米　拾七石五斗　清　雲
一同　卅五石　小源太
張書〆拾四人

附込

一　拾五石　花活さぶ
一同　八拾石　同　二郎八
一御切米　七拾石　森田長藏
一　五拾石　大橋二郎兵衛
一　五拾石　武村三右衛門
一　卅五石　松井市兵衛
一　拾七石五斗　同　猪右衛門
一高　三百石　本阿彌三郎
一高　百五拾石　村　惣　吉

一同　二百石　宗　円
一御切米　五拾石　頓阿彌
一　六拾石　道　伯
一　拾七石五斗　榮　味
一同　四石　宗　佐
一同　六拾石　道　圓
一御切米　八拾石　桑松右衛門九郎
一　八拾石　葛野九郎兵衛
一　七拾石　成合淡路
一御切米　五拾石　葛野茂右衛門
一　五拾石　清水長右衛門
一　卅五石　幸安左大夫
一御切米　拾石五斗　同　六　藏
一同　三百石　村　與　吉
一　六拾石　しろかれや庄五郎

一　六拾石　さぎ　又兵衛

一　御切米廿五石　ぬし　庄次郎

一　六拾石　かはや　清右衛門

一　四拾石　同　彌吉

一　四拾石　さけいかぢ　助五郎

一　五拾石　同　七右衛門

一　拾八石　鉄砲金物や　左兵衛

〆三拾一人

一　御切米　卅五石　坊主衆　五人

御かち衆

一　二百廿四石　蔭山土佐組　二十人 内二人は五十俵づゝ

一　二百拾石　澁谷伯耆組　二十人

一　二百拾石　本帳に肩書なし　二十人

御鐵炮衆

一　御切米　六百卅石　安藤帶刀同心　六拾人

一　三百拾五石　三浦長門同心　三拾人

一　五百廿五石　渡邊一學同心　五拾人

一　六拾石　かぢ　文珠四郎

一　廿五石　しらさや　五左衛門

一　五拾石　同　彥六

一　廿五石　さぎ　庄左衛門

一　御切米五拾石　鉄砲かぢ　源三郎

一　御切米八拾石　鉄砲臺屋　喜兵衛

一　同　百四拾石　御鐵炮衆　廿人

一　二百廿四石　山本圖書組　二十人 内二人は五十俵づゝ

一　御切米　二百拾石　松平久七組　二十人

一　百五石　朝比奈惣左衛門組　拾人

一　同　五百廿五石　水野出雲同心　五拾人

一　千五拾石　水野三郎九同心　百人

一　御切米　五百廿五石　大藏新右衛門同心　五拾人

一　三百拾五石　戸田金左衛門同心三拾人
一　三百拾五石　菅野半兵衛同心　三拾人
一御切米　三百拾五石芦川權大夫同心　三拾人
一　三百拾五石　戸田藤左衛門同心三拾人
一御切米　三百拾五石渥美源五郎同心　三拾人
一　二百拾石　福岡太郎八同心　二拾人
一御切米　二百拾石　丹羽郷右衛門同心二拾人
一御切米　二百拾石　丹羽三彌同心　二拾人

御弓衆

一　三百拾五石　都築久大夫同心　三拾人
一　三百拾五石　芦川甚五兵衛同心三拾人
一　二百拾石　小笠原十郎右衛門同心二拾人

御餌差衆

一御切米拾五石　喜太郎
一　拾五石　喜兵衛
一　拾五石　左平次
一　拾五石　平右衛門

一御切米　三百拾五石河合刑部同心　三拾人
一御切米　三百拾五石原田市十郎同心　三拾人
一　五百廿五石　關金平同心　五拾人
一　三百拾五石　本帳肩書なし　三拾人
一　二百拾石　村松郷右衛門同心二拾人
一　二百拾石　曾根孫太夫同心　二拾人
一　二百拾石　松下勘兵衛同心　二拾人
一　三百拾五石　園田猪兵衛同心　三拾人
一御切米　二百拾石　鈴木五郎大夫同心二拾人
一御切米　二百拾石野々山七左衛門同心二拾人
一　拾五石　清藏
一御切米　拾五石　角右衛門
一　拾五石　甚九郎
一御切米　拾五石　助十郎

一　拾五石　吉藏
一　拾五石　與右衛門
　　三六
一　御切米　拾五石　少九郎
一　御切米　十五石　平大夫
一　御切米　十五石　吉十郎
一　七石　次大夫
一　拾貳石　御ゑかい長坂茂吉

一　拾五石　市兵衛
一　拾五石　與市
一　拾五石　彌藏
一　拾五石　左五右衛門
一　拾五石　十藏
一　拾五石　よこすか五兵衛
一　六石　彌之助
一　百五石　田中御鳥見十八人

御中間衆

一　御切米　二百卅四石五斗　葛西三郎右衛門預り　御下男三拾九人此分久野に四人居申候
一　御切米　百四拾石　高井助兵衛預り　二拾人
一　百四拾石　大河内善兵衛預り　二十人
一　御切米　七百六拾四石三斗　御中間百十九人、御駕籠衆七人、御そうり取三人、一人鈴木兵吉表はくらく
一　五百七拾三石三斗　津澤助藏組　御中間九十四人　御馬下三人、一人　彌三
一　御切米　四百六石　勘右衛門組　御小人四拾三人
一　三百七拾八石七斗　岩本仁左衛門戸村清右衛門預り御中間九十四人
　　内三十人は未の五月朔日より出候由一人に付二石九斗一升六合六勺つゝ六十四人は四石五斗五升つゝ

一御切米　四拾二石　岩本仁左衛門戸村清兵衛預り　かへぬり六人　一人に付七石つゝ

一　百五拾石　御掃地者三拾人　内十一人は鏑木與兵衛十一人は花作さぶ預り

一御切米　廿二石七斗五升　鏑木與兵衛預り　手傳五人

一　九拾一石　助大夫組　御駕籠拾二人

一御切米　五百六拾石　竹本傳吉預り　加子八拾人

一　三石　道円宗象預り　露路彌兵衛

一御切米　九百廿三石　御前様御女房衆　四十九人　かち侍六人御小人五人、下男六人

坊主衆

一拾七石外に加増三石　常喜　一拾石　三清　一拾二石　休盛

一同　春慶　一同　玄賀　一拾一石　休安

一同　一玄　一拾石　宗心　一同　珍齊

一同　印齊　一同　良圓　一同　長雪

一同　宗慶　一同　休古　一同　閑齊

一同　月泉　一同　良賀　一同　休意

一同　一運　一同　喜齊　一同　玄知

一同　春齊　一同　長意　一同　長玄

一同　正順　一六拾石　お中殿　一卅五石　おちの人

一三拾石　おさし　一拾石　おます　一八石　梅かえ
一御切米　三石　おはした　一高　五百石　かん長老　一三石五斗　市右衛門
一百四拾石　御中間五拾人小倉惣兵衛同心

張書

〆千七百五人

同

總〆二千四百六拾九人

外

水公　安公

右者元和五未年御切米帳之寫駿河越之由にて御勘定所本奉行中より差越候に付いろは寄に致し寫置
候

享保六丑閏七月

「本記祿高欠漏の分は原本に記載なき也以下皆朱書

一右總人員を區別すれば左の如し

諸士以上兩家を除	七百拾九人	儒醫等苗字無之分	拾四人
御役者諸職人	參拾一人	坊主御鐵炮衆	二拾五人
御徒衆	百拾人	御鐵炮衆	七百四拾人
御弓衆	百五拾人	御餌差衆	二拾三人

御鳥見　拾　人　御中間御小人等　六百二拾二人

坊主衆　二拾六人　女中衆　八人

御中間　五拾人

總計二千五百二拾八人

原書前記締高千七百五人又總〆二千四百六十九人と何れも五十九人づゝを減す如何なる締方にて此差を生するや分り難し」

南紀德川史卷之八十二

臣　堀　内　信　編

祿制第二

元和御切米帳終身錄上

内凡例

元和八戌御切米帳姓名終身調帳 伊呂波分け

雜調帳 元和八戌年より寬文七未年まで

輕き者職人の類 御扶持方帳より名前知候筋

苗字無之儒醫 御救に被下候筋と相見候分

地士六十人者

此終身錄は、凡例に詳記の如く、　龍祖元和五年八月御入國以來寬文七未年五月御退隱迄、新規被　召出たる御家中の終身錄を、御勘定所にて元和御切米帳等の古帳に據り調製、御勘定奉行より政府に提出せし也、政府は之に因て駿河越或は舊家の家筋を調査し、乃至代替り跡目調等之節の證憑となしたる也、元和以降の古記錄は、政府及ひ諸局共多く傳らす、後世　烈祖奉仕之人名錄高等粗窺ひ得るは此類簿冊の存するのみ

一原簿子五月とのみありて年號を掲けす、依て何年の調査を知るに由なし、卷末に有馬御入湯御供之

姓名を、御用部屋御帳より書拔とあり、御用部屋とは即ち表御用部屋にして、御用部屋を表御用部屋との改稱は、文政十二丑年より天保五午年迄なれは、該子年とは文政十一年又は已前の子年なるべし、併し極めて古き事とは察せられず、有馬御入湯御供之姓名は割て御本譜に記入す

明治廿五年九月　　　　堀　内　信　誌

凡　例

御入國以來元和五未八月十三日より寛文七未五月廿一日迄之內被　召出、被　召抱候面々、初代終身之祿、幷次男三男家も同斷調方之事

右は去年も御達申上候通、右年限中被　仰渡帳無御座候に付被　召出、被　召抱月日境、幷に次男三男等之差別も難相分御座候、且又御切米帳は元和八戌年よりは相揃御座候得共、右以前二箇年程は帳面無之候に付、元和八戌年御切米帳を元に相立右帳面に有之候御人數不殘終身相調認出し申候、尤右之內には駿河より御供仕込候筋も多分可有御座候に付、是等は勿論相省き、其餘之筋計り、相調候筈に御座候得共、右之差別も難相分候に付、先前件之通戌年之御人數不殘相調候上、猶元和四午御切米帳へ引當姓名同樣之筋は夫々肩書へ○朱にて午と申印附置申候得は、右印之附不申筋は御入國後被　召出筋に自然相當候道理と奉存候、其餘引合不申筋は別帳に姓名相記し爲御見合相達置申候

一△附紙
本文之通月日之境難相知候に付元和八戌より寛文七未年迄年切に相調申候

○附紙
本文之通朱印付候儀には御座候得共元和四午年より同八戌年迄之内名改候筋幷代替りにて名前替り候筋等は右朱印洩れ候儀
も可有之と奉存候得共此段調様無御座候事」

一元和九亥年より寛文七未年迄之筋は、前年之帳面と見合新たに姓名出候筋を被　召出と見て、年々調出し申候

一右被　召出筋にても追て親之跡目被下候筋は、家督に相成候に付被　召出より家督を相調申候、且又下地より無足にて親之跡目被下候筋は、終身調不申候、右跡目悴二人三人へも分け被下候筋有之候得は、祿高之方を總領と見て相省き、其餘は二男三男と相見へ分家に相成候に付被　召出同樣調出申候、其外兄へは親之跡目被下、兄取來之御切米を弟に被下候筋抔も兄は親跡目迄調弟は終身迄相調申候

一都て終身之儀は、死失迄を限調出候儀は勿論に御座候得共、無祿之隱居に被　仰付候得は渡り物無之帳面へ姓名出不申難相分候に付、右躰之筋は隱居被　仰付候迄を相記申候、且病死後跡目誰へいか程被下候との儀も過去帳に記有之候處を以相認申候、然共過去帳に留落等有之筋は　跡目不知跡目不分抔と記置申候

一都て死失幷御暇御改易等にて、知行御切米上り候筋を記候帳面を過去帳と題號仕、寛永十四丑年より以來帳面有之候得共、右以前に帳面無之付死去其外等にて　知行御切米上り候品は難相分御座候然共稀には御切米帳抔へ書記し候筋も有之に付　是等は夫々死失之品相認、其餘は死失不知死失不相分抔と認申候、然る處右丑年以來帳面有之候ても留欠等に相成其品難相分候得は　可成丈外帳へ

も押移り吟味仕候て其上にも難相分筋は右同樣死失不知と相認申候

一與力同心并伊賀以下之筋其外前々より役切に御切米帳にも米高何百何拾石人數何十人と束相渡し有之、內譯祿高姓名記し無之難相分候に付右躰之筋は調樣も無之相省き申候、尤右人數內より御役替にて初て姓名祿高相分り候得共其年より新規に出し姓名肩書にも株切米よりと記申候、猶又祿高姓名分り候筋にても御役替にて右株切米內へ入候得は何之年より株切米に成り成行不知と認め御座候

但株切米之筋は御扶持方帳にも御切米帳同樣何十人と束相認め有之難相分候得共此儀も稀には御扶持帳に姓名記し候役儀も相見候に付左樣之筋と御扶持方帳より相調姓名斗記申候尤是等は雜之部へ出し置申候

一元和九亥年より年々被　召出筋いつの年被　召出と可相記處を何之新規と題を相記御座候、右は被　召出否之儀は、被　仰渡帳無之に付難相分候得は、知行御切米御扶持方共初て相渡し候儀を、前々より何之新規と認來候儀に付別帳へも何の新規と記申候

一雜帳へは、苗字無之筋并三浦小傳次殿附人、其外六十人は須田組坊主、御相撲取寺社方諸職人、其外家相續之仁無之後家等へ、御救躰に御切米被下候筋相認出し申候

一別表人別品書之內に、何の年何と名改候趣に見候、又は何の年に何百石に相成候趣に相見候抔と、浮候文面に認候筋も御座候、右は帳面に其品爾と記し無之候得共、譬へは御切米帳より知行帳へ移り候節、名前替有之不分明に候得共外には左樣之姓名も無之全名改と相見候類、又は前年之帳に何の何右衞門と有之、翌年より同姓何兵衞と替り有之筋名改候品は記無之候得共、祿高并前後同役之

面々も其儘順にて外に類名無之筋且又知行帳欠け之内に御加増等にて大祿に成候類にて何れも其品記し無之候得共相當之品を以相記候筋にて御座候

一元祿年中迄之御切米帳には、多分御役名記し無之、知行帳には一円記無之旁々付別帳へは御役名記し不申、祿高姓名を專一に相調申候

一御合力御足米帳之儀は元來別帳にて　御座候故哉古き筋は亂冊虫喰且帳欠け等にて、御用立不申候に付御足米被下否之儀は記不申候

一左京様方御附屬へ御表より被下候　御切米筋之儀も、御同所様方御切米帳寛文十戌年より別帳に相成、前段同様にて用立不申、相分り不申候

一知行帳は寛永十四丑年より以來帳面有之候得共、右丑以前知行所之姓名難相分御座候に付、丑年帳面を元に相立て、御切米筋同様終身相調申候、尤右之内には元和八戌年より右丑年迄之内に御切米より知行に相成候筋も籠り申候左様之筋は夫々御切米帳にて姓名仕出し候場へ拔取其餘を認め出候に付自然元和八戌年以前より之知行取に相成候道理に御座候、是より元和六申年知行總割帳へ引當姓名同様其筋は夫々肩書へ朱書（本書「　」）にて申と印附置申候不引合筋は別帳に姓名認相違申候、右朱印之筋は駿河より御供仕込候筋計にても有之間敷奉存候得共申年より知行取居候筋故爲御見合印附置申候、且又前段元和八戌年より寛永十四丑年迄之内御切米より知行に成候筋は、知行高いか程との品は難相分儀に御座候得共、右年限中之知行割帳亂冊になから有之候に付　右割帳を以可成たけ相調申候

一傳法御扶持方帳は、寛永十三子年より以來一兩年欠け候得共、其餘連續仕候に付祿扶持取調出し相記申候御切米之上へ常扶持被下候筋は相省き申候、八丁堀御扶持方帳幷江戸御金藏帳、元方御金藏帳等古き筋無之に付、右箇所にて相渡り候祿扶持取金銀給は難相分御座候

一別帳之內には、勤年曆永き筋も相見申候、右は決して代替り共一代へ調込候儀と相見候に付年數永き筋は、格別念入再三相調候得共代替之儀難相知御座候、總て右比之帳面は一躰留欠け多相見へ且親之跡目被下候筋も親子同名にて記有之筋多有之候、左樣之筋は跡目被下直に親之名に相改有之候も品書へ記置申候

右は御書付を以相調候處、右之趣にて別帳假名分に仕差上申候、尤品書之內には文面粗畧之處も可有御座樣に奉存候此段分けて申上候　以上

子五月　　御勘定所

右調書面目錄

一元和八戌御切米帳に出有之候姓名終身調帳　壹冊

一寛永十四丑知行帳之內右同斷調帳　壹冊

一元和九亥年より寛文七未年迄被　召出被　召抱筋終身調帳　七冊

一元和八戌年より寛文七未年迄雜之部書込帳　壹冊

外に元和四午切米帳同六申知行割帳に出有之候姓名を調帳へ引合候殘り姓名書出し小帳二冊

以上

元和四年御切米帳に出有之候姓名調帳へ引合殘り姓名帳

鈴木兵吉	岡村左兵衛	今枝左内	大塚久右衛門
小川七左衛門	高橋又左衛門	飯山二郎右衛門	露木平左衛門
松村圓齊	川野里左衛門	鎌田次右衛門	土屋九兵衛
高橋少吉	安井半右衛門	岸又十郎	石田孫兵衛
ゑさし 吉藏 與右衛門	竹村藤四郎	高橋五兵衛	伊藤市丞
三宅喜三郎	三浦八郎左衛門	石谷助右衛門	大河内善兵衛
前林新八	渡刈與兵衛	寺西甚助	石原源右衛門
みかん市右衛門	永田三右衛門	成合淡路	大橋清七
白銀屋 庄五郎	さき庄左衛門	堀勘兵衛	菊地半左衛門
眞木八左衛門	川島意休	間宮四郎左衛門	伊久美六郎右衛門
栗生吉兵衛	池端彌作	竹本傳吉	飯嶋彌右衛門
岩佐市右衛門	遠藤兵右衛門	御相撲取 與一郎	鍋田仁兵衛
小舞 右衛門九郎	同 次郎八	清水三十郎	野澤竹之助
一ノ瀬與八郎	茂野善十郎	小栗新八	畔柳清十郎
長坂五郎八	小栗又右衛門	小岸牛助	能勢權之助
川北主殿	朝岡八十郎	菅野内膳	堀田四郎三郎

下村右門
松平長七
大多和六兵衛
鳥羽主膳
山路勘右衛門
佐野覺右衛門
櫪原五郎右衛門
末高半平
海野刑部
岡田六兵衛
牧　小六
林六郎左衛門
向笠將監
爲井六兵衛
小川監物
小笠原七兵衛
岡田作左衛門

竹本傳藏
西尾長松
栗原さり滿
諏訪部猪助
板倉長兵衛
小笠原□（欠字カ）次郎
小栗與次右衛門
松井三右衛門
富永兵太郎
水野五郎作
奥山主膳
田代六兵衛
大石彦左衛門
望月十右衛門
新居市兵衛
大久保八郎五郎
高田八郎左衛門

三宅七之助
天野權丞
川窪才十郎
井出彌十郎
甲田新右衛門
淺沼源右衛門
糟(谷)（一本屋）次郎兵衛
波多半平
橋本嘉右衛門
松下半六
中村十右衛門
三枝源四郎
服部万右衛門
松下掃部
渥美万三郎
戸田太郎右衛門
稲生九右衛門

西山兵四郎
加藤兵三郎
村田權平
坂部左源太
加田彌三右衛門
室　水之助
木村藤兵衛
弓削田新平
山田勘兵衛
大森半助
水野左門
荒川甚之助
水野忠五郎
大屋小平次
上田五左衛門
堀　次太夫
渡瀨太左衛門

西尾彌右衞門
菅沼加右衞門
林　勘兵衞
平井三郎兵衞
小崎九郎兵衞
神屋與十郎
戸田山三郎
玉江與兵衞
三刀屋監物
南部志摩
竹田與右衞門
渡邊道喜
本阿彌三郎
天野千千代
畔田二千
頓阿彌

石山角左衞門
山本半左衞門
佐藤傳次郎
幸田三郎兵衞
名取彌次右衞門
富士佐兵衞
鈴木又左衞門
加藤六左衞門
早川左馬
花房内藏丞
小野木伊豆
富岡大膳
森　伊右衞門
井出彌十郎
八文字屋與斗

三淵左京
坂部久左衞門
村瀬作右衞門
望月權兵衞
鈴木勘兵衞
榊原忠次郎
三上權左衞門
根岸七郎左衞門
牧　齊
廣瀬又兵衞
中村源左衞門
山岡七左衞門
竹田兵吉
大草久次郎
源兵衞

久野武左衞門
小林十右衞門
武藤平左衞門
關根兵左衞門
三浦權六
大須賀九郎右衞門
小野木喜三郎
三上玄蕃
成瀬豐前
東使彈正
長田七郎右衞門
篠瀬左太夫
林　庄九郎
平井長十郎
かわち仁兵衞

松平久七
笠原助左衛門
渡邊八兵衛
佐野半左衛門
由比與五右衛門
大森久七
彥坂宮內
本間右衛門七
片桐小八郎
中根日野
小笠原甚十郎
小笠原主殿
鈴木太郎左衛門
武藤萬休
丹羽彌三
鳥居金五郎
佐野源三郎

本間小一郎
長谷庄助
宅間與三左衛門
三堀新藏
大草角助
高田八郎兵衛
菅沼吉右衛門
戸田傳左衛門
奥山左門
花井彌吉
柘植八左衛門
木村長兵衛
箕浦茂左衛門
曾根兵左衛門
鈴木九郎右衛門
小林長右衛門
諏訪部伊右衛門

內藤三郎左衛門
末高忠右衛門
加納久太郎
東三五郎
田宮太郎左衛門
鴨居善兵衛
藁科九郎右衛門
畔田半右衛門
坂田左平太
岡本久彌
小笠原半三郎
小笠原左京
高岡忠兵衛
小笠原長左衛門
古川清右衛門
岡部小左衛門
丹羽三彌

小笠原八彌
松平八郎左衛門
大森半七
鍋田源太左衛門
岡喜兵衛
渥美十郎左衛門
小幡外記
小浦金五郎
丹羽金十郎
前嶋金太夫
三井孫十郎
牧三郎兵衛
村越半右衛門
金澤彌右衛門
澁谷又右衛門
長谷川市兵衛
丹羽鄉左衛門

鈴木五郎大夫　伊達角彌　高井伊折　井上釆女
鹽谷左馬助　柘植長五郎　伊奈掃部　尾崎彦三郎
佐野庄藏　栗生藤十郎　高月半右衛門　上野半彌
彦坂九兵衛　永井十郎右衛門　水野左近　三浦官齊
近藤左門　天野孫左衛門　畔田壽學　水野甚三郎
久野極之助　竹元茂兵衛　高井助兵衛　有賀喜右衛門
村　與吉　伊藤市兵衛　白井孫三郎　天野德十郎
加納平右衛門　村　惣吉　深津助藏　田邊庄助
青見藤右衛門　小浦治左衛門　長谷川藤兵衛　橫井次太夫
龍華院　菊阿彌　朽木清右衛門

元和八戌御切米帳姓名終身調（一本帳書）

い

一 六拾石　元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行に成候趣にて、同十四丑知行帳に高三百石貳斗四升六合相渡り有之同十八巳四月病死、跡目同苗猪之助に高貳百石被下　伊藤外記

一 八拾石　元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行三百石に成る、同十二亥年病死、跡目子に貳百石被下直に親之名に改趣に相見候　伊藤長左衛門

一 貳百八拾石　元和九亥年知行七百石に成る、寛永十六卯七月病死、跡目同苗彌一右衛門へ高五百石被下　彌一右衛門御切米は上る　石（主米事）崎將監

一 貳百石　元和九亥年知行五百石四斗壹合に成る、同十五巳五月病死、跡目同苗喜右衛門へ無相違被下　池田讚岐

一 百五拾石　元和九亥年苗字林と改候に付奥へ出す　板倉万助

元和九亥年御切米上る死失不知　生田喜右衛門

一　八拾石　元和九亥年知行に成るさ記有之、同年喧嘩に付立退さ記有之　井上兵助

一　八拾石　寛永十八巳年御切米上る、死失不知　飯塚右近

一午　五拾石　寛永八未年御切米上る、死失不知　井上五郎助

一午　貳拾石　寛永三寅年貳拾五石に成る、同年左五兵衛さ改、同十五寅年親彌兵衛跡目高貳百石被下直に彌兵衛さ改候趣に相見へ候　飯嶋庄八

一午　四拾五石　寛永五辰年知行貳百石に成る、同十五寅年源太左衛門さ改候趣に相見候、同年七月病死跡目御切米八拾石子に被下名前不知　板垣小源太

一　六拾石　寛永四卯年御切米上る、死失不知　石原十助

一　八拾石　寛永四卯年知行貳百石に成る、同九申年病死さ相見跡目不知　伊藤三郎左衛門

一午　八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、慶安元子二月病死跡目無相違、同苗彌三郎に被下彌三郎御切米上る　岩本仁左衛門

一　六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、正保三亥年知行貳百石に成る、明暦三酉九月病死、跡目同苗權六に御切米六拾石被下　今村新之丞

一　六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同十七辰年知行貳百石に成る、慶安四卯十月病死、跡目不知　市川傳兵衛

一　拾七石　寛永十八巳正月御改易　岩間與五右衛門

一　三拾石　寛永七午年六拾石に成る、同十四丑年病死跡目無相違、同苗權之丞に被下　石場市左衛門

一午　拾四石　慶安元子年御切米上る、病死にても可有之哉、同年石本五郎作新規に被召出有之、甚兵衛にても可有之哉　石本甚兵衛

一午　八拾石　正保二酉年御切米上る　死失不知　今井金三郎

一　八拾石　寛永十一酉年知行に相成候趣にて、同十四年知行帳に高貳百石渡る、寛文元丑六月隱居被仰付知行無相違、同苗彌十郎に被下、同年七月彌左衛門病死　飯嶋彌左衛門

一午　五拾石　寛文五巳四月病死、跡目無相違、同苗茂右衛門に被下、茂右衛門御切米上る　井口兵藏

午一　六拾石　寛永廿未年文左衛門と改、明暦二申年計り御切米八石渡る、同三酉年六拾石渡る、寛文六午七月病死、跡目無相違同苗文助に被下、文助御切米は二男助三郎に被下　井關又助

午一　貳拾壹石　寛永十九午二月病死　跡目無相違同苗甚三郎に被下　飯田惣左衛門

午一　貳拾石　慶安元子年苗字井田と改、同卯年三拾石に成る、寛文八申年忠右衛門と改、貞享四卯正月病死　跡目同苗善八へ貳拾石被下、善八御切米は上る　飯田三太郎

午一　三拾五石　寛永十九午年惣左衛門跡御切米貳拾壹石被下、都合五拾六石に成る、正保三戌年七拾六石に成る、同四亥年知行貳百石に成る、明暦三酉年三百石に成る、寛文七未四月病死跡目無相違同苗竹之助に被下　飯田甚三郎

午一　八石　元和九亥年拾石に成る、寛永六巳年新七郎御切米尾崎虎之助に被下と有之、新七郎成行不知　飯田新七郎

午一　貳拾三石　寛永十五寅年傳左衛門と改、同廿未年傳右衛門と改、正保二酉年傳左衛門と改　明暦元未年四拾石に成る、万治元戌年病死、跡目無相違同苗武右衛門に被下　石原吉藏

一　拾五石五斗　寛永三寅年より御切米上る　死失不知　石田伊兵衛

一　五拾石　元和九亥年御切米之内三拾石同苗六助に被下、貳拾石は九助に被下、文助は隠居と相見候　井關文助

ろ

午一　拾五石　寛永三寅年久次郎と改、正保元申年株切米に成る、成行不知　露木平右衛門

は

一　六百石　元和九亥年知行千五百石に成る、寛永七午年病死と相見、跡目不知　林彌兵衛

一　百五拾石　元和九亥年苗字林と改、同年知行三百五拾石に成る、寛永二丑年五百石に成る、同十四丑年源右衛門と改、同十七辰年八百石に成る、明暦三酉三月病死　跡目不知　林板倉事万助

午一　八拾石　寛永十四丑年親五郎右衛門跡目知行六百五拾石無相違被下　長谷川勘八

午一　八拾石　寛永二丑年知行貳百石に成る　同年藤太夫と改候趣に相見候　同十酉年病死と相見　同年より御切米八拾石藤太夫に被下　名前不知　長谷川庄次郎

午一　八拾石　寛永元子年御切米上る死失不知　馬場十藏

午 一六拾石　寛永九申年御切米上る死失不知　長谷川金次郎

午 一貳拾石　寛永十一戌年四十石に成る、同十三子年病死と相見へ同年より貳拾石子へ被下之趣にて直に親之名に改と有之　林　作兵衛

一拾五石　延寶元丑九月病死跡目同苗磯右衛門に無相違被下　波多作藏

一貳拾石　寛永五辰年御切米上る死失不知　長谷川清兵衛

一三拾石　元和九亥年御切米上る死失不知　林　七郎右衛門

午 一三拾石　正保元申年株切米に成る成行不知　林　助右衛門

一拾四石　寛永十酉年御切米上る死失不知　濱田次右衛門

午 一拾五石　右同斷　原　次郎右衛門

午 一五拾石　寛永四卯年右同斷　長谷川平九郎

午 一五拾石　寛永十三酉年病死と相見跡目無相違忰へ被下直に親之名に改候趣に相見候　林　七藏

に

一百貳拾石　元和九亥年知行五百石に成る、寛永十四丑年病死、跡目不知　西尾孫左衛門

一六拾石　元和九亥年病死　跡目不知　西村左太郎

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、正保三戌年知行貳百石に成る、延寶二寅正月病死　跡目同苗伊兵衛に百五拾石被下　西村八兵衛

午 一拾七石五斗　寛永十酉年病死と相見へ跡目忰へ拾石被下直に親之名に改候趣に相見候　仁科久太夫

一貳拾石　元和九亥年五拾石に成る、正保元申年御暇被下　西村九助

ほ

午一拾五石　寛永七午年五郎左衛門と改、正保元申年松齋と改、延寶二寅年貳拾石に成る、同八申八月病死　跡目無相違同苗奥太夫に被下、三人扶持は實子仙助に被下奥太夫御切米上る　堀部奥太夫

午一四拾石　寛永四卯年御切米上る　死失不知　保坂金兵衛

一六拾石　寛永元子年御改易　星野新太郎

一六拾石　寛永九申年御切米上る　死失不知　本田七藏

午一貳拾四石　寛永十二亥年三拾四石に成る、同十五寅年長右衛門と改、同十七辰年六拾石に成る　万治二亥八月病死　跡目無相違同苗太左衛門に被下、太左衛門御切米上る　本田長五郎

午一七拾石　元和九亥年知行貳百石に成る　寛永二丑年走る　本田八助

と

一八拾石　寛永元子年知行貳百石に成る、同十四丑年病死と相見へ跡目悴へ御切米八拾石被下直に親之名に改候趣に相見へ申候　戸田九郎次郎

午一八拾石　寛永十二亥年三郎左衛門と改、同十七辰年助左衛門と改、正保元申年病死　跡目不知　東勘五郎

午一八拾石　寛永十四丑年御切米上る　死失不知　戸田八兵衛

一八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る　寛永二丑年病死と相見へ跡目不知　戸村清右衛門

一六拾石　寛永十五寅年助右衛門と改、正保三戌年知行百五拾石に成る、明暦元未六月病死　跡目同苗段之進へ拾五人扶持被下　戸田五郎八

一八拾石　寛永元子年知行貳百石に相成候趣に相見へ、慶安三寅年十月病死、跡目同苗右衛門作に無相違被下　戸塚五左衛門

一百石　寛永七午年知行三百石に成る　正保三戌年病死と相見知行無相違同苗文太夫に被下候趣に相見候　富田藤兵衛

ち

一三拾五石　寛永十三子年五拾五石に成る、慶安三寅年病死と相見御切米之内三拾石同苗七兵衛に被下七兵衛取來之御切米三拾石とも都合六拾石に成る、貳拾五石は同苗久左衛門に被下　中條市左衛門

り

一三拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　李　一　陽
正保四亥年五拾石に成る、慶安二丑年八拾石に成る、寛文七未年梅溪さ改、同年百石に成る、同十二子年知行三百石に成る、天和二戌年十月病死　跡目同苗一陽に無相違被下一陽御切米上る

下ケ紙
本文一陽品初代之様に相見へ候得共系譜書出しの處にては二代目之様にも相見へ右は初代二代共御切米三拾石被下有之本文は二代之品を一所に認出し候事さ見通し先其所にて系譜相直し候事

を

一貳千石（原書此二字ある如し虫喰にて不知然也）千貳百石ニ成御加増分　　　　　　　　　　大　崎　玄　蕃
元和九亥年知行八千百三拾五石に成る、寛永五辰年御合力貳百石被下、同十四丑年迄之内病死にても可有之哉　右丑年知行帳に知行之内五千百三拾五石同苗八郎左衛門へ相渡三千石同苗與兵衛へ相渡り有之與兵衛正保二酉五月病死

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　山　修　理
元和九亥年百三拾石に成る　寛永元子年知行四百石に成る　同七年病死さ相見へ跡目不知
但寛永元子年八拾石大山修理子次郎右衛門さ被召出有之事

一百五拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　屋　吉右衛門
元和九亥年知行五百石に成る　寛文十一亥年隱居被　仰付知行無相違同苗七十郎に被下七十郎御切米上る

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　岡　六　太　夫
元和九亥年知行三百石に成る、正保四亥年御合力八拾六石被下、慶安元子八月病死　跡目知行三百石同苗山三郎に被下、八拾六石は同苗喜内に被下、喜内御切米四拾石同苗兵彌に被下山三郎御切米は上る

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　西　金　次　郎
寛永元子年病死　跡目不知

一五拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岡　部　惣　五　郎
寛永十酉年御切米上る　死失不知

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岡　村　喜左衛門
元和九亥年知行貳百石に成る　寛文八申二月隱居被　仰付知行無相違同苗市太夫に被下市太夫御切米上る

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　村　傳　八
明暦三酉年彌一右衛門さ改候趣に相見候万治元戌年親彌兵衛跡目知行千五百石被下自分御切米上る

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大　岡　次郎太夫
寛永元年知行貳百石に成候趣に相見候同十五寅年十月病死跡目不知

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小笠原角右衛門
正保四亥年親三郎右衛門跡目知行五百石被下自分御切米は上る

一八拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小　笠　原　内　記
寛永三寅暮御切米より上る死失不知

一六拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　奥　村　仁左衛門
寛永五辰年八拾石に成る正保三戌年知行貳百石に成る延寶六午年六月病死跡目不知

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る同九申年御切米上る死失不知　小原平三郎

一貳拾石　元和九亥年八拾石に成る、寛永四卯年知行貳百石に成る、正保二酉年彌右衛門と改候趣に相見候寛文二寅年迄之内に隠居被　仰付知行無相違總領に被下置彌右衛門は淨盛と改候趣にて同九月病死右總領は直に親之名彌右衛門と改有之　小笠原彌次右衛門

一貳拾石　元和九亥年八拾石に成る、寛永四卯年知行貳百石に成る、明暦二申九月病死跡目同苗角太夫に百五拾石被下、角太夫御切米は上る　小笠原七郎左衛門

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同七午年藤右衛門と改、正保二酉年御切米上る、死失不明　岡本理兵衛

午一拾五石　寛永二丑年太郎右衛門と改、同八未年暮御切米上る、死失不知　御宿太郎兵衛

午一三拾石　慶安元子年御切米上る、死失不知　大村七兵衛

一貳拾五石　元和九亥年小河と認替有之同年四拾石に成る、寛永元子年病死にても可有之哉、同年暮御切米上る、右跡目と相見同二丑年貳拾石小河七右衛門と出有之　小川七右衛門

午一拾五石　寛永三寅年彌右衛門と改、同四卯年彌左衛門と改、同十三子年御切米上る、死失不知　小川彌左衛門

一貳拾五石　寛永十三子年病死にても可有之哉、同年より跡目と相見、御切米拾石大塚久左衛門と出有之　大塚久左衛門

午一拾四石　寛永十酉年御切米上る、死失不知　大野左太夫

一三拾五石　寛永九申年御切米上る、死失不知　奥村左助

一五拾石　寛永元子年八拾石に成る、同四卯年知行貳百石に成る、正保三戌年より知行不渡死失不知　大橋次郎兵衛

午一八拾石　正保三戌年知行貳百石に成る、寛文十戌正月病死、跡目同苗左平太に百五拾石被下　長田權十郎

午一五拾石　寛永五辰年暮御切米上る、死失不知　尾關喜太郎

午一五拾石　延寶四辰七月病死、跡目同苗喜助に三拾石被下　岡田六左衛門

午一五拾石　慶安三寅年近平と改万治三子年御改易　尾關小平太　小關共認有

一拾石　元和九亥年拾三石に成る、寛永八未年病死、跡目不分　岡田助兵衛

一拾石　元和九亥年拾三石に成る、正保三戌年病死跡目拾貳石被下候趣に候得共名前不知　尾崎市太夫

一午貳拾石　寛永六巳年八拾石に成る、正保四亥年知行貳百石に成る、元祿八亥年十月病死跡目御切米八拾石同苗彦八に被下　大鳥居六太夫

一拾五石　元祿九子年貳拾石に成る、同十六未三月御切米無相違同苗淺右衛門に被下、淺右衛門御切米拾石を喜右衛門に被下、享保二酉十月病死　奥田喜右衛門

わ

一午五拾石　寛永八未年御切米上る、死失不知　渡邊七郎兵衛

か

一八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、同年御改易、寛永三寅年歸參被　仰付御切米八拾石被下、同五辰年知行貳百石に成る、正保二酉年茂右衛門と改、明暦二申年親次右衛門跡目知行四百石被下自分知行は上る　河村外記

一午三拾石　寛永六巳年病死と相見、同七午年御切米無相違同人弟丹彌へ被下　葛西權次郎

一午四拾石　寛永二丑年六拾石に成る、同三寅年八拾石に成る、同四卯年知行貳百石に成る、同十二亥年親善兵衛跡目知行三百石無相違被下候趣に相見へ自分知行は上る　鴨居善六

一午三拾石　元和九亥暮より御切米上る、死失不知　葛西勘四郎

一七拾石　寛永七午年知行五百石に成る、寛永十八巳年親助兵衛跡目知行七百石被下、自分知行は上る　糟谷左近

一午拾石五斗　寛永八未年拾五石に成る、同十七辰年三拾石に成る、万治三子年六月病死跡目無相違同苗武右衛門に被下、武右衛門御切米は上る　神谷善右衛門

一午貳拾八石　寛永二丑年四拾石に成る、同四卯年六拾石に成る、同九申年病死と相見へ跡目不知　糟谷彌吉

一午拾五石　寛永六巳年病死と相見、同年より御切米子に被下候と有名前不知　片岡藤兵衛

一六拾石　寛永十五寅年七郎右衛門と改、正保三戌年知行百五拾石に成る、寛文元丑五月病死跡目無相違同苗惣八に被下　河奈孫三郎

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同十五寅年武右衛門と改、正保三戌年知行貳百石に成る、同四亥年三月病死跡目同苗彥八郎に拾五人扶持被下　加藤新平

一六拾石　寛永六巳年八拾石に成る、同七午年知行に相成候趣にて、同十四丑年知行帳に高貳百三拾石渡る、寛文六午年十月病死跡目無相違養子平兵衛に被下平兵衛御切米は上る　金澤次郎兵衛

一六拾石　正保三戌年知行百五拾石に成る、寛文三卯年病死跡目無相違同苗六郎太夫に被下　加藤傳次郎

一拾三石　寛永元子年病死跡目不知　苅屋彌右衛門

午 一四拾石　寛永十三子年御切米上る、死失不知　柏木彥右衛門

一貳拾石　寛永十一戌年御切米上る、死失不知　川北四郎右衛門

午 一拾貳石五斗　寛永元子年御切米上る、死失不知　河野理右衛門

午 一八拾石　明暦三酉正月病死跡目無相違同苗庄九郎に被下　葛野九郎兵衛

午 一五拾石　元和九亥年七拾石に成る寛永七午年八拾石に成る、同十九午二月病死跡目不知　葛野茂右衛門

一貳拾石　元和九亥年御切米上る、死失不知　河村茂助

一四拾石　寛永十三子年御切米上る、死失不知　片桐市太夫

午 一五拾石　元和九亥年仁左衛門と改、寛永元子年孫平と改、同十七辰年病死、跡目同苗仁左衛門に三拾石被下　加藤孫市

午 一貳拾壹石　寛永十五寅年權太郎と改、同十九午年御切米上る、死失不知　河合（喜）兵衛　一本嘉

一拾石　承應元辰十月病死、跡目無相違同苗吉之丞に被下　神前中務

一拾石　寛永十五寅年次郎左衛門と改、慶安四卯年病死にても可有之哉、承應元辰年跡目と相見次郎四郎と名前出追て次郎左衛門と改有之候　金谷次郎四郎

一三拾石　寛永二丑年五拾石に成る、同九申年八拾石に成る、同十八巳七月病死跡目無相違同苗傳九郎へ被下候趣に相見候　金谷多兵衛

一三拾石　寛永二丑年五月五拾石に成、同六巳年病死跡目不分　河面六左衛門

一午八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、延寶三卯年七月病死跡目同苗彦七に御切米八拾石被下　鑓木與兵衛

一午三拾石　河村五兵衛
元和八戌年御切米五拾石　三橋庄右衛門
右三人組合にて被下同九亥年御加増被下候上一人御切米三拾石づゝに分る　河村五兵衛
寛永十八巳十一月病死跡目總領へ貳拾石被下直に親之名に相改候趣に相見候　野村三郎兵衛

よ

一貳百八拾石　元和九亥年知行七百石に成る、寛永十四丑年病死跡目同苗勘兵衛に三百石被下　吉岡伊織
伊折とも認有之

一三拾五石　寛永五辰年苗字吉江と改、同七午年八拾石に成る、正保元申年惣右衛門と改、同年百石に成る、同三戌年知行貳百五拾石に成る、承應二巳閏六月病死跡目無相違同苗半助に被下半助御切米上る　吉井半右衛門

一午五拾石　寛永二十未年病死跡目養子に無相違被下直に親之名に改有　吉田彌九郎

一午五拾石　寛永五辰暮御切米より上る、死失不知　横井清三郎

一午貳拾五石　寛永四卯年九郎右衛門と改、同十七辰年四拾五石に成る、承應元辰十一月病死跡目無相違同苗善兵衛に被下　吉田九郎左衛門

一午拾四石　寛永元子年病死跡目同苗次郎八に被下次郎八御切米上る　横山半兵衛

一午八石　元和九亥年拾石に成る、寛永元子年親半兵衛御切米拾四石無相違被下、二郎八御切米上る　横山二郎八

た

一五百貳拾石　元和九亥年知行千三百石壹升八合に成る、寛永十五寅十月病死、跡目總領三右衛門に八百石次男七郎兵衛に三百石三男重左衛門に貳百石被下　田中玄蕃

一八拾石　元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行三百五拾石に成る、同十五寅正月病死跡目同苗七右衛門に貳百五拾石被下、七右衛門御切米上る　玉上玄蕃

一百貳拾石　寛永四卯年知行三百石に成る、同十三子年病死と相見跡目不分　瀧本三太夫

一八拾石　寛永八未暮より御切米上る　寛永十四丑知行帳に貳百五拾石田宮掃部と出有之は右齊名改にても可有之哉、掃部は正保二酉年親常僴跡目高八百石被下有之　田宮齊

一六拾石　寛永三寅年瀬左衛門と改、同辰年八拾石に成る、正保三戌年知行貳百石に成る、慶安三寅五月病死跡目、同苗長右衛門二拾五人扶持被下　高岡長次郎

一六拾石　寛永二丑年病死と相見、同年御切米弟喜太郎へ被下　辰田喜太郎

一三拾石　寛永五辰年病死跡目不分　多羅尾太郎兵衛

一拾三石　寛永二十未年八月病死跡目不分　多羅尾五兵衛

一三拾石　寛永八未年御暇被下　竹村半左衛門

午一五拾石　元和九亥年七拾石に成る、同年泉阿彌と改、寛永六巳年遷阿彌と改、同十五寅年より名前不見、還俗之樣子にも無之死失不知　武村三右衛門

午一三拾五石　承應元辰年惣兵衛と改、明暦元未年病死跡目不分　高橋與四郎

午一三拾五石　寛永十五寅年御切米不渡、庄藏跡へ飯田甚之助入替り有之候　高木庄藏

一拾五石五斗　承應元辰年苗字青野と改、寛文十二子年迄御切米渡る死失不知　竹村庄太夫

一拾石　寛永三寅年三拾石に成る、同十九午年六月病死跡目無相違總領へ被下、直に親之名に改候趣に相見候　田所平左衛門

一八拾石　寛永四卯年知行貳百石に成る、慶安四卯八月病死跡目同苗源十郎に無相違被下　伊達半左衛門

そ

午一五拾石　寛永十一戌年八拾石に成る、同十三子年知行貳百石に成候趣に相見、同十五寅九月病死跡目總領へ御切米八拾石被下右總領名前不分　十川左之助

一六拾石　元和九亥年百石に成る、寛永七午年知行貳百五拾石に成る、延寶八申十二月病死跡目同苗孫九郎に貳百石被下孫九郎御切米上る　寒川與助

一四拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永七午年知行百五拾石に成る、明暦三酉十二月病死跡目無相違同苗淸藏に被下、淸藏御切米四拾石も地方に御直し被下、都合貳百五拾石被下　寒川兵助

一四拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永七午年知行百五拾石に成る、同十六卯七月病死跡目同苗三太郎に御切米六拾石被下　寒川八助

一八拾石　寛永元子年知行二百石に成る、同十七辰年十二月病死跡目不分　十河松庵

つ

一八拾石　寛永三寅年御切米上る、死失不知　都築藤八

一八拾石　寛永四卯年御切米上る、死失不知　土橋宮内

午一四拾石　寛永七午年六拾石に成る、同十五寅年八拾石に成る、承應元辰三月病死跡目同苗與一右衛門に四拾石被下　都筑安右衛門

一六拾石　正保三戌年知行百五拾石に成る、明暦元未五月病死跡目養子一郎右衛門に無相違被下、一郎右衛門御切米上る　土屋市左衛門

午一貳拾石五斗　寛永五辰年御切米上る、二郎助跡切米津田左平次被　召出有之に付入替りと相見候　土屋二郎助

ね

一三拾石　寛永十七辰年九月病死、跡目無相違被下、直に花上院と改有之候　根來花上院

な

一八拾石　元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行三百五拾石に成る、同十酉年病死にて跡目貳百石同苗次郎右衛門へ被下候趣に相見候　中野次右衛門

一百貳拾石　元和九亥年知行三百石に成る、同年喧嘩にて立退候に付知行上る、寛永三寅年被　召歸知行三百石四合被下、同十七辰年四百石四合に成る、明暦二申年六百石に成る、寛文十一亥十月隠居被　仰付知行無相違同苗庄右衛門に被下　成田庄次郎

一六拾石　寛永二丑暮御切米より上る、病死にても可有之哉、翌寅年成瀬牛之助被　召出五郎助子にても可有之哉　成瀬五郎助

一八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、正保二酉年數右衛門と改、万治三子八月病死跡目同苗瀬兵衛に百五拾石被下　中川權右衛門

一六拾石　寛永六巳年悴茂吉御切米八拾石を九郎三郎に被下、同十五寅年佐左衛門と改、正保二酉年六月病死跡目不分　長坂九郎三郎

一六拾石　寛永元子年文三郎と改、同五辰年八拾石に成る、同十一戌年知行貳百石に成、明暦二申七月病死跡目無相違同苗門八郎に被下　長坂門三郎

一六拾石　寛永八未年暮御切米より上る
但中根内藏中根勘平知行御切米未年上り有之に付ては三人共御暇出にても可有之哉　中村半九郎

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同十五寅年彌五兵衞さ改、同十八巳四月病死跡目無相違總領へ被下直に親之名に改候趣に相見候　長坂半兵衞

午一拾貳石五斗　元和九亥年御切米上る、死失不知　中山十右衞門

午一三拾三石六斗　寛永十三子年兵太郎さ改、同二十未年暮御切米より上る、死失不知　中田甚藏

午一貳拾三石五斗　寛永四卯年御切米上る、死失不知　中野久助

一拾貳石　寛永元子年御切米上る、死失不知　長坂茂吉

一三拾石　正保三戌年病死跡目不知　中村道可

午一四石　元和九亥年六石に成る、正保四亥年暮御切米より上る、死失不知　中村宗佐

午一拾五石　元和九亥年貳拾五石に成る、正保元申年組手形に成る、成行不知　中村市右衞門

是より以前ひのかたに有り

申一五拾石　寛永三寅年永田道慶さ改、同十酉年知行三百石に成る、正保三戌年格庵さ改、万治三子八月病死跡目無相違悴道慶に被下、道慶御切米貳拾五石は格庵子長五郎に被下　廣嶋事永田道慶

む

一千六百八拾石　元和九亥年知行四千貳百貳拾石に成る、寛永十五寅八月病死、跡目總領へ無相違被下
内四百八拾石御加增　直に親の名に改候趣に相見候　村上彦右衞門

一四拾石　寛永十二亥年病死さ相見、同年より悴次郎左衞門に御切米無相違被下　村田次郎右衞門

一六拾石　寛永四卯年八拾石に成る、同七午年病死跡目不分　村井忠藏

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同十三子年太左衞門さ改、正保三戌年知行貳百石に成る、慶安元子十二月病死跡目不分　村井左兵衞

午 一拾石五斗　寛永七午年市左衛門と改、同八未年市右衛門と改、同十酉年御切米上る死失不知　村岡市右衛門

一五拾石　寛永三寅年六拾石に成る、同卯四年八拾石に成る、同六巳年知行貳百石に成る、同十四丑年病死跡目無相違總領へ被下直に親之名に改候趣に相見候　村山八右衛門

一八石貳斗　寛永十酉年御切米上る、死失不知　梅村久右衛門

午 一五拾石　明暦元未年三月病死、跡目無相違同苗忠七に被下、忠七御切米拾石は次男文九郎に被下　村田九郎右衛門

午 一拾五石　寛永十五寅年九左衛門と改、寛文二寅年左部と改、同十二子年八月御改易　花作り　梅原三部

一貳石　寛永九申年御切米上る、死失不知　花作り　梅原三部おや

う

一八拾石　寛永七午年太郎助と改候趣に相見候、同年知行貳百石に成る、同十四丑年迄之内五左衛門と改候趣相見候、寛文七未年忠左衛門と改、同十一亥六月御改易　上田太郎吉

一百石　寛永元子年走る　内海内膳

の

午 一三拾石　右三人組合にて被下同九亥年御加増被下候上一人御切米三拾石つゝに分る　野村三郎兵衛
元和八戌年御切米五拾石
三橋庄右衛門
河村五兵衛
野村三郎兵衛
寛永四卯年御切米上る、死失不知

一五拾石　寛永三寅年牛太夫と改、同十四丑年松齋と改、同二十未年十月病死跡目不分　野尻平内

一八拾石　寛永十二亥年御切米上る、死失不知　野々山吉右衛門

一八石　寛永十一戌年病死跡目不分　野田十右衛門

一六拾石　寛永八未年御切米上る、死失不知　布目門之助（文之助共認有）

一四拾石　寛永十四丑年奥村久兵衞と姓名改、同年拾石御加増なとも被下候得共不相渡、同十五寅年御切米上る、死失不知　野田喜右衞門

一四拾石　寛永十四丑年與十郎と改、同年拾石御加増なとも被下候得共不相渡、同十五寅年御切米上る死失不知　野田與八郎

一三拾石　元和九亥年三拾五石に成る、寛文六午年病死、跡目養子藤七郎に無相違被下　野間藤九郎

く

一百六拾石（午）　寛永十六卯年新平と改、同二十未年次太夫と改、正保四亥年知行四百石に成る、延寶六午年五月隱居被　仰付知行三百石同苗傳右衞門に被下、百石は次太夫に被下、天和三亥年入山と改同年十一月病死　桑嶋出羽

一四百石　元和九亥年知行千石に成る、寛永十八巳十月病死、跡目無相違同苗佐渡に被下　九鬼四郎兵衞

一五拾石（午）　寛永二丑年八拾石に成る、寛永四卯年知行貳百石に成る、同十酉年病死と相見跡目不知　久米大學

一三拾石　寛永四卯年五拾石に成る、同六巳年熊之助と認有、正保四亥年七拾石に成る、五右衞門と改、元祿三午年知行貳百石に成る、寶永三酉十二月病死跡目無相違同苗龜之丞に被下　草野熊助

や

一八拾石　元和九亥年知行に成ると記有之候得共知行渡り方不相見死失不知　山田金五郎

一八拾石　寛永二丑年百六拾石に成、同六巳年御切米上る、死失不知　藪左兵衞

一百貳拾石　寛永四卯年病死と相見同年より御切米子に被下候と有子之名前不分　矢野權右衞門

一六拾石　寛永元子年勘右衞門と改、同二丑年勘四郎と改、同五辰年八拾石に成る、同十一戌年病死にても可有之哉跡切米丹羽七兵衞に被下と有　八木勘四郎

一貳拾石　元和九亥年八拾石に成る、寛永四卯年御切米上る、死失不知　山中三郎右衞門

一三拾石　寛永十四丑年御切米上る、右病死にて同苗次郎五郎へ無相違被下候趣に相見候、次郎五郎御切米は上る　山本九郎右衞門

午一 五拾石　寛永二丑年御切米上る、死失不知　安井傳十郎

午一 拾貳石　寛永六巳年貳拾石に成る、同二十未七月病死、跡目無相違同苗傳十郎に被下　山崎長九郎

一 六拾石　元和九亥年百石に成る、寛永七午年知行貳百五拾石に成る、正保三戌年より知行上る、品不知、但正保二酉年御切米貳拾五石山路彌太郎被　召出有之、慶安元子年六拾石に成、同二丑五月病死、右御切米六拾石翌寅年より親與右衛門へ被下有之、明暦二申閏二月與右衛門病死　山地與右衛門（山路共認有）

ま

午一 五拾石　正保三戌七月病死、跡目無相違同苗勘十郎へ被下、勘十郎御切米上る　眞野三右衛門（間野共認有）

一 七石　寛永六巳年拾石五斗に成る、正保三戌年親三右衛門跡目御切米五拾石無相違被下、自分御米切は上る　眞野勘十郎

一 八拾石　元和九亥年御切米百三拾石に成る、寛永元子年知行三百石に成る、同十七辰年彦右衛門と改、同十八巳四月病死跡目總領へ貳百石被下、直に親之名に改候趣に相見候　松田彦右衛門

一 千貳百石　元和九亥年知行四千石に成る、正保二酉年隱居被　仰付、知行千五百石同苗內藏之助に被下千石は內之者淺井五郎兵衛、片山又兵衛、片山太郎兵衛、岸和田源太夫右四人へ被下、御合力米貳百石は五郎右衛門へ被下、承應二巳年眞入と改、明暦二申十月病死、但承應元辰十一月悴內藏之助事庄右衛門御改易有之付眞入爲跡目御合力貳百石三浦傳右衛門に被下、眞鍋五郎右衛門と改、傳右衛門取來之御切米四拾石上る　眞鍋五郎右衛門

一 六拾石　寛永十三子年御切米上る、死失不知　万年小三郎

一 百貳拾石　正保元申年親勘右衛門跡目知行三百石無相違被下、源太郎御切米百貳拾石之內、六拾石弟牛五郎に被下　牧源太郎

一 八拾石　寛永十五寅年淸兵衛と改、正保二酉年御切米上る、死失不知　松下三九郎

一 六拾石　寛永三寅年知行貳百石に成る趣に相見へ、同十五寅年久円と改候趣に相見候、同年十一月病死、跡目不分　前嶋角右衛門

一 六拾石　寛永四卯年御切米上る、死失不知　牧九郎太郎

午一 貳拾五石　寛永二丑年病死にても可有之哉、跡切米只野五郎兵衛、長澤庄兵衛へ拾貳石五斗つゝ被下　松永庄藏

午一三拾石　松井市兵衛
元和九亥年五拾石に成る、寛永十一戌年八拾石に成る、万治三子年知行貳百石に成る、寛文六午年隱居被　仰付知行無相違悴市左衛門に被下、市左衛門御切米三拾石は市兵衛に被下、同十一亥年了眞と改延寶六午年十二月病死

一三（一本百拾）石　松下壹岐
寛永三寅年姓名佐野石見と改候に付さのかなへ出す

一三拾五石　松村長右衛門
寛永十九午年暮御切米より上る、死失不知

午一拾四石　松原善太夫
元和九亥年病死跡目不分

一八拾石　眞（一本野鍋）庄三郎
元和九亥年知行貳百石に成る、寛永十四丑年迄之内勘左衛門と改候趣に相見候、承應元辰九月病死跡目無相違同苗半右衛門に被下

ふ

一四拾五石　藤田半三郎
元和九亥年知行貳百石に成る、寛永三寅年病死と相見へ跡目不知

一八拾石　不破權六
寛永九申年御切米上る、死失不知

午一貳百石　不破源六
元和九亥年知行に成候趣に候得共渡り方不見死失不知

一六拾石　福島市之丞
寛永三寅暮御切米より上る、死失不知

一貳拾石　藤田與八郎
寛永十一戌年御切米上る、死失不知

一貳拾石　藤田助左衛門
寛永九申年株切米に成る、成行不知

一貳拾三石　古屋角右衛門
明暦元未年四拾石に成る、寛文三卯十月病死、跡目無相違同苗作十郎に被下、作十郎御切米拾五石は次男角左衛門へ被下、角左衛門御切米上る

こ

一八拾石　小鶴五郎左衛門
元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行三百五拾石に成る、同十六卯九月病死跡目同苗六藏に貳百五拾石被下

午一五拾石　小林長助
寛永十酉年暮御切米より上る、死失不知

一午 三拾石　寛永二丑年六拾石に成る、同十二亥年五郎左衛門と改、同十七辰年八拾石に成る、正保元申年五郎兵衛と改、同三寅年知行貳百石に成る、慶安三寅八月病死跡目同苗一郎左衛門に百五拾石被下一郎左衛門御切米上る　高下（香下共認有）五郎兵衛

一午 拾石五斗　慶安元子年御切米上る、死失不知　小峯久右衛門

一 貳拾石　元和九亥年八拾石に成る、寛永二丑年病死跡目無相違總領に被下、直に親之名に改候趣に相見候　權田惣右衛門

一午 拾石　寛永十一戌年御切米上る、死失不知　小澤惣兵衛

一午 三拾五石　正保元申八月病死跡目無相違同苗次兵衛に被下　幸安左太夫

一午 拾七石五斗　寛永十三子年病死、跡目無相違同苗七右衛門に被下、七右衛門御切米は上る　幸安猪右衛門

一午 拾石五斗　寛永十一戌年貳拾石五斗に成、正保二酉年市右衛門と改、延寶六午四月病死跡目無相違悴星野清六に被下　幸安六藏

一午 八拾石　寛永四卯年知行貳百石に成る、同年淸兵衛と改、正保二酉三月病死跡目嶋崎五兵衛三男金四郎に無相違被下金四郎御切米貳拾石は弟嶋崎傳十郎に被下　小倉淸十郎

一 六拾石　寛永十六卯年親安右衛門跡目知行三百石被下、自分御切米は上る　郡左内

え

一午 拾五石　寛永六巳年貳拾石に成る、同十七辰年に三拾石に成る、寛文十二子五月御改易　江馬彌九郎

あ

一 八拾石　元和九亥年百三拾石に成る、寛永元子年知行四百石に成る、同十三子年病死跡目不分　赤羽周防

一 六拾石　寛永三寅年御切米上る、死失不知　天野平六

一 五拾石　正保三戌七月病死、跡目同苗傳兵衛へ三拾石被下　穴（生）（一本太）甚内

一午 四拾石　寛永十酉年五拾石に成る、同十三子年六拾石に成る、同十七辰年八拾石に成る、正保三戌年知行貳百石に成る、明暦元未年隱居被　仰付知行無相違同苗角之右衛門に被下、角之右衛門御切米貳拾五石は喜内に被下、同年宗閑と改、万治元戌年八月病死　明石喜内

午一　三拾石　寛永二丑年六拾石に成る、同十七辰年八拾石に成る、正保三戌年知行貳百石に成る、慶安三寅十月病死、跡目同苗太郎兵衛に百五拾石被下、太郎兵衛御切米上る　安藤左太夫

一　六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同九申年御切米上る、死失不知　渥美傳九郎

一　六拾石　寛永元子年彌五右衛門と改、同丑年御切米上る、死失不分　淺山彌五左衛門

一　六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、正保元申年御切米上る、死失不知　淺羽角之丞

一　六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、正保三戌年知行貳百石に成る、承應元辰八月病死、跡目不分　淺井熊之助

一　拾七石　寛永三寅年御切米上る、病死にても可有之哉、同年淺羽兵太夫拾石に被　召出有之　淺羽門右衛門

午一　六拾石　万治三子年八拾石に成る、寛文六午十一月病死、跡目無相違同苗與一右衛門に被下　赤田又兵衛

午一　三拾石　寛文十酉年御切米上る、死失不知　相賀作兵衛

一　貳拾石　寛永九申年御切米上る、死失不知　相谷三藏

午一　貳拾五石　寛永十酉年御切米上る、死失不知　青木小右衛門

一　六拾石　寛永三寅年御切米上る、死失不知　粟生藤九郎

たのかな部

一　拾五石五斗　承應二巳年より青野に成る、寛文三卯年より渡りなし死失不知　竹村事　青野庄太夫

さ

一　百石　元和九亥知行五百石に成る、正保四亥年千石に成る、明暦三酉七月病死、跡目同苗九郎右衛門に五百石被下、九郎右衛門御切米上る　里見勘四郎

一　百貳拾石　寛永元子年知行三百石に成る、同八未年病死と相見へ知行上る、跡目不分　澤木市郎右衛門

一　八拾石　元和九亥年傳吉と改、寛永元子年源吉と改、同四卯年知行貳百石に成る、正保二酉年知行上る、死失不知　佐竹源吉

一元和八戌年より寛永元年迄祿高不知　寛永二丑年御切米貳拾石被下、同三寅年四拾石に成る、同七午年五拾石に成る、同八未年六拾石に成る、同十四丑年病死、跡目不分　佐野金兵衛

一六拾石　寛永元子年知行貳百石に成る、正保元申三月病死、跡目不分　才藤權之丞

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同十一戌年御切米上る、死失不知跡切米淺井治郎右衛門へ被下新十郎明きへ入有　西郷新十郎

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同十六卯年傳右衛門と改、正保三戌年知行貳百石に成る、寛文十二子十月病死跡目同苗造酒右衛門に百五拾石被下　佐津川源十郎

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同九申年より御切米上る死失不知　佐々安右衛門

一拾三石　寛永九申年御切米上る、死失不知　佐久間四郎右衛門

一午六拾石　寛永十酉年病死にても可有之哉、跡切米御臺所衆子供五人へ被下と有之　篠原與右衛門

一午四拾石　寛永十四丑年御切米上る、死失不知　佐藤長左衛門

一八石貳斗　元和九亥年拾石に成る、寛永九申年拾五石に成る、同十五寅年貳拾石と成る、同十八巳年御切米上る、死失不知　佐藤庄兵衛

一八拾石　元和九亥年御切米上る、成行難相分候得共親跡目被下五百石に成る、名も玄竹と改候趣に相見候　酒井三伯

一三百石　寛永三寅年佐野石見と姓名改、同十酉年知行千石に成る、同十七辰六月病死跡目同苗九郎三郎に三百五拾石志賀主膳に三百五拾石佐野源太郎に三百石被下　松下壹岐守 佐野石見

き

一午貳拾五石　寛永十酉年病死跡目無相違同苗源三郎に被下、源三郎御切米上る　木村文左衛門

一拾石　寛永十酉年親文左衛門跡目御切米貳拾五石無相違被下自分御切米は上る　木村源三郎

一午拾石五斗　寛永十六卯年山村六兵衛と入替候趣に相見候　岸十藏

一午拾石五斗　寛永十六卯年石原彌太夫と入替候趣に相見候　岸新八

一六拾石　寛永二十未年病死にても可有之哉、同年より御切米無相違悴宗也に被下、宗也御切米上る　祇園道伯

み

一八拾石　寛永元子年知行貳百石に成る、同十四丑年三百石に成る、万治三子年五百石に成る、寛文五巳三月病死跡目同苗半ナ夫に知行三百石被下　水野左次右衛門

一七百石　元和九亥年知行貳千石に成る、寛永十四丑年迄之内病死にても可有之哉、丑年知行帳に名前不見　水野二郎右衛門

一寛永元迄無祿　寛永二丑年御切米貳拾石に成る、同三寅年三拾石に成る、同七午年四拾石に成る、同八未年五拾石に成る、慶安元子年八拾石に成る、万治三子年知行貳百石に成、寛文十戌十月病死跡目無相違同苗小一郎に被下小一郎御切米は上る　三浦甚兵衛

一午四拾石　寛永九申年暮御切米より上る死失不知　宮崎金七郎

一六拾石　元和九亥年知行百五拾石に成、寛永十酉年病死と相見候、同十三子年悴久太郎に五人扶持被下有之　三嶋十右衛門

一八拾石　寛永七午年孫助と改、正保三戌年知行貳百石に成、寛文二寅年十月病死跡目無相違同苗孫右衛門に被下　三井大學

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同七午年善左衛門と改、同十四丑年御切米上る、死失不知　三倉源三郎

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同十一戌年病死と相見同年より無相違子に被下直に定右衛門と改　三倉佐太右衛門

一午六拾石　寛永元子年病死跡目不分　三宅近平次

一午拾五石　元和九亥年貳拾五石に成る、正保元申年株切米に成る、成行不知　三雲九左衛門

一午五拾石　寛永十三子年暮より御切米より上る、死失不知　水野長兵衛

一午貳拾石　明暦二申十月病死、跡目無相違同苗藤右衛門に被下　水上善三郎

一午三拾石　三橋庄右衛門

元和八戌年御切米五拾石　三橋庄右衛門　河村五兵衛　野村三郎兵衛

右三人組合にて被下同九亥年御加増被下候上壹人御切米三拾石つゝ分る

寛文十九午年御切米上る死失不知

し

一午百石　元和九亥年走る　澁谷門十郎

一三拾石　寛永四卯年御切米上る、死失不知　鹿垣内藏允

一午拾五石　寛永十酉年半右衛門と改、明暦二申十一月病死、跡目無相違同苗清兵衛に被下　庄野半兵衛　庄半右衛門共認有

一午四拾石　元和九亥年八拾石に成る、寛永十四丑年知行貳百石に成る、承應元辰十二月病死跡目無相違同苗奎太夫に被下、作左衛門と改　芝田作左衛門　柴田共認有

一午拾五石　寛永五辰年病死跡目不分　柴山嶋之助

一午六拾石　慶安三寅年病死跡目無相違悴へ被下直に親之名に改有之候　下里茂右衛門

一午拾三石　寛永元子年十右衛門と改、同六巳年十左衛門と改、同十酉年御切米上る死失不知　下田十左衛門

一午五拾石　寛永元子年病死跡目悴へ三拾五石被下直に親之名に改有之候　清水長右衛門

ひ

一八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、寛永五辰年病死と相見跡目不分　彦坂百助

一午八拾石　元和九亥年知行貳百石に成る、寛永十八巳正月病死、跡目同苗勘太郎に御切米八拾石被下　肥田半助

一午四拾七石五斗　寛永十六卯年久右衛門と改、正保元申年病死、跡目貳拾石悴へ被下悴名前不分　平尾久左衛門

一午四拾石　正保元申四月病死、跡目貳拾石悴へ被下悴名前不分　平尾仁兵衛

一午七石　寛永七午年病死、跡目不分　平尾半九郎

一午八石　元和九亥年拾三石に成る、寛永十八巳十一月病死跡目悴へ無相違被下、直に親之名に改有之候　平尾市平

一五拾石　寛永三寅年苗字永田と改　廣島道慶
是より末ハのかなへ出す
も

一八拾石　寛永元子年知行貳百石に成る、正保三戌六月病死、跡目同苗小兵衛に御切米八拾石被下　森孫左衛門

午一貳拾石　寛永十七辰年四拾石に成る、同二十未年親次左衛門跡目知行八百石被下、自分御切米上る　望月源四郎

午一百貳拾石　元和九亥年暮御切米より上る、死失不知　森勘解由

午一七拾石　寛永六巳年庄兵衛と改、万治三子年悴長藏と入替り、御切米無相違長藏に被下候趣相見候　森田長藏

一八拾石　寛永元子年知行貳百石に成る、同三寅年病死跡目不分　門奈助太夫
せ

一百貳拾石　元和九亥年知行三百石三斗二升三合に成る、寛永三寅年病死と相見總領へ貳百石被下、直に親之名に改候趣に相見候　關平兵衛

一五拾石　寛永九申年病死と相見候同年御切米妻子に被下有之跡目不分　千賀市左衛門
す

一八拾石　寛永五辰年知行貳百石に成る、同十四丑年迄之内三百石に相成候趣に相見候、同十八巳年孫右衛門と改候趣に相見候、同年十月病死跡目不分　鈴木小十郎

午一貳拾石　寛永十一戌年五拾石に成る、同十七辰年八拾石に成る、正保元申三月病死跡目御切米六拾石同苗儀右衛門に被下　鈴木忠太夫

一六拾石　寛永十五寅年惣左衛門と改、正保三戌年知行百五拾石に成る、万治二亥年清右衛門と改、寛文三卯十月隠居被　仰付無相違同苗清太夫に被下、清太夫御切米上る　鈴木猪兵衛

一六拾石　寛永五辰年八拾石に成る、同六巳年知行貳百石に成る、延寶四辰十月病死跡目無相違同苗八郎太夫に被下　鈴木權太郎

一六拾石　寛永八未年暮御切米より上る、死失不知　鈴木市之丞

一貳拾石　元和九亥年六拾石に成る、寛永四卯年八拾石に成る、同六巳年知行貳百石に成る、正保四亥六月病死、跡目無相違總領に被下、直に親之名に改候趣に相見候　杉浦佐太夫
一拾石五斗　寛永十酉年御切米上る、死失不知　鈴木喜兵衞
一三拾石　寛永十三子年切米上る、死失不知　菅谷勘右衞門
一四拾石　正保元申年株切米に成る、成行不知　鈴木左次右衞門
一三拾石　元和九亥年迄御切米渡り翌子年より御切米上る、死失不知　鈴木次太夫

元和八戌年より寛文七未年迄

雑調帳

三浦小傳次殿附人御相撲　六十人者幷須田組諸職人

熊野衆　甲賀衆　寺社　坊主類　其外苗字無之筋

原書此の通りと雖も順次等錯誤あり暫く旧を存し改めす

元和八戌より

一拾四石　寛永十一戌年久八三石御加増被下候、同十二亥年より株切米組手形に成る、名前不出成行不知　久八彌兵衞
一六石　元和九亥より御切米上り成行不知　たんしり長松
一四拾石　元和九亥より御切米上る成行不知　小謡小左衞門
一拾五石五斗　寛永二丑年御切米上る成行不知　市兵衞

元和九亥新規

一拾三石　寛永元子より株切米組手形に成名前不出成行不知　船大工善兵衞

寛永二丑新規

一拾石　寛永二丑より享保二十卯迄百拾壹箇年續有之候右之内には病死又は入替り等も可有之候得共他所勤に候得は證文等も相廻り不申候哉病死入代り等も相知不申候　大坂御船頭　吉右衛門

寛永三寅新規

一四石充　正保元申年御暇被下之　鵜飼　次郎作　作十郎

寛永四卯新規

一四拾石　寛永五辰より大嶋と改同九申より御切米上り成行不知　鉄炮打　無心

一貳拾石　正保元申年病死爲跡目無相違悴龜藏へ被下候龜藏御切米拾石は上ろ　狂言　とろ兵衛

一拾五石　承應元年極月御改易　長兵衛

一拾五石　寛永五辰より磯部次郎左衛門と姓名出有之御切米仕組消有之同年より成行不知　やわら

寛永六巳新規

一三拾石　正保元申年御暇被下候　庭作　掃部

寛永七午新規

一拾石充　寛永八未より拾石六斗つゝに成同十酉より株切米組手形に相成名前不出　彦市　傳藏　甚太郎　角内　五右衛門

寛永八未新規

一拾石六斗　寛永十酉より株切米組手形に相成名前不出　九右衛門

一七石充　寛永九申より株切米組手形に相成名前不出　三右衛門　吉右衛門

一拾石五斗充　寛永十戌より株切米組手形に相成名前不出　惣太夫　清兵衛　五郎右衛門　作左衛門　仁左衛門　与三兵衛　半左衛門

一拾石　万治元戌より株切米組手形に相成名前不出　升取　市右衛門

寛永十一戌新規

一五石弐斗五升　慶安二丑より御切米上る成行不知　御下男　甚右衛門

一八石六斗五升　明暦元未より石川次右衛門と入替る　又右衛門

一拾石五斗　正保二申より株切米組手形に相成名前不出　爪切　庄太夫

一五石　寛永十二亥より株切米組手形に相成名前不出　助市

寛永十二亥新規

一三石　寛永十三酉より御切米上る成行不知　上の鳥見　小平次

寛永十三子新規

一弐拾石　寛永十五寅より勘兵衛と名前出　正保二酉より御切米上る成行不知　御馬責

一拾石　正保元申五月親斗路兵衛御切米弐拾石被下候自分御切米は上る　亀藏

寛永十四丑新規

一五石弐斗五升　明暦元未より御切米は上る成行不知　彌三

寛永十五寅新規

一七石　寛永十九午より御切米上る成行不知　源助

寛永十七辰新規

一八石　寛永二十未より御切米は上る成行不知　朝比奈市太夫親　兵（左）衛門〔一本右〕

一五石　勘九郎

一貳石　寛永十八巳年より株切米組手形に成名前不出　六右衛門

寛永十九年年新規

一七石　寛永二十未より株切米組手形に相成名前不出成行不知　麥右衛門

一拾九石　万治三子極月病死、寛文元丑年無相違悴杢太夫へ被下候、杢太夫御切米は上る　多之助

一七石　正保二酉年御暇被下　御のほりさし　惣三郎

寛永二十未新規

一拾三石　正保三戌より株切米組手形に成名前不出成行不知　彌三郎

一拾石五斗　正保三戌より株切米組手形に成名前不出成行不知　彦左衛門

一五石貳斗五升　寛文四辰年清藏御切米五石貳斗五升弐人扶持と粉川才次郎御合力金五両貳人扶持之米に直し右四人扶持を三人扶持に致し寛文五巳年より拾三石三人扶持悴才次郎へ被下候　作り物師　清藏

正保二酉新規

一六石　正保四亥より御米切上る成行不知　與太夫子

一拾石五斗　元祿十一寅年病死、跡目御切米八石悴彌五郎に被下候　掃除小頭　藤右衛門

一七石　万治元戌年より御切米上る成行不知　長右衛門

一六石三斗　万治三子年より御切米上る成行不知　市右衛門

一拾五石七斗五升　万治三子より御切米上る成行不知　市左衛門

一拾八石　慶安元子年より貳拾四石に成る、同三寅年より拾貳石二人に成る、承應元巳年より六石一人に成る、明暦二申年より立益と名前出る、寛文十二亥年より御切米上る、成行不知　六兵衛　甚右衛門　分流弟子二人

一三石五斗　正保三戌年より株切米組手形に成る、名前不出、成行不知　新右衛門　甚兵衛

一拾一石五斗　正保三戌年より株切米組手形に成名前不出成行不知　段右衛門　（本行原本ナシ）

一拾一石五斗　正保三戌年より株切米組手形に成名前不出成行不知　甚之丞

慶安元子新規

一拾石五斗　寛文八申年より同十戌年迄株切米組手形にて名前不出、同十一亥より名前出、天和二戌年九太夫に成、壹石減九石五斗に、同三亥四月悴太右衛門、東仁左衛門組之明へ御入被下候、九太夫御切米は上る　八太夫

一小判三兩貳分　明暦二申年より上る成行不知　市右衛門

一九石　慶安元子年拾石に成る承應元辰年より株切米組手形に成る、名前不出、成行不知　助市

一五石　承應元辰年より八石に成る、明暦元未年朝有久右衛門と入替り候趣に相見申候　久右衛門

慶安三寅新規

一六石　延寶三丑年庄之右衛門に成、萬治二亥六月喧嘩にて立退く　牛之助

一七石　萬治三子二月病死跡目不知　傳右衛門

承應元辰新規

一拾五石　延寶七未年より御切米上る成行不知　長兵衛

一五石　延寶六午年御切米上る成行不知　太兵衛

一五石　承應二巳年株切米組手形に成名前不出成行不知　助右衛門

承應三午新規

一小判貳兩貳分　延寶七未年より御切米上ろ成行不知　左平次

一小判貳兩壹分　延寶七未年御切米金上ろ成行不知　次郎左衛門

一小判貳兩　寛文五巳年極月病死跡不知　三八

一銀六百四拾目　明暦元未年株切米手形に成名前不出成行不知　作右衛門　清左衛門　多兵衛　九左衛門

明暦元未新規

一拾石　中村忠右衛門

一三石　田代三右衛門

一八石　惣左衛門

一七石充　又兵衛　右兵衛

右五人明暦二申より株切米組手形に成姓名并名前不出成行不知

一小判貳兩　明暦三酉年　万治元戌兩年御切米帳に仕組御判相濟有之候處消し有之候成行不知　市右衛門

萬治元戌新規

一銀百目　寛文九酉より上ろ成行不知　彌右衛門

一銀八拾目　寛文九酉より上ろ成行不知　八兵衛

萬治二亥新規

一七石　寛文元丑年御切米上ろ成行不知　庄右衛門

一八石　元和二戌年壹石御減七石に成、同三亥年病死無相違悴赤堀自徳へ被下候自徳御切米は同苗壽齊に被下候　七郎兵衛

一七石　寛文元丑年御切米上ろ成行不知　與四右衛門

一七石五斗　市太夫

一七石五斗　與助

一七石　與右衛門

一六石　吉兵衛

一六石　角兵衛

右五人御中間ゟ相見申候、寛文元丑年より株切米組手形に成ろ、成行不知

寛文元丑新規

一拾四石　寛文元丑年壹石つゝ御加増拾六石に成り、寛文二寅より株切米組手形に成　株切米より　久助
名前不出成行不知　仁兵衛

寛文二寅新規

一拾石五斗　寛文四辰十月病死、同五巳正月より妻子へ三人扶持被下候　庄兵衛

寛文四辰新規

左京様衆
一七石　寛文十戌年より御人數別帳に相成候處右帳面致亂册相分不申候　安左衛門

寛文五巳新規

一貳拾壹石　延寶元丑より孫兵衛事與右衛門と改、天和二戌年より御切米御減し、拾六石貳斗五升に成る　孫兵衛　理右衛門　新右衛門

右　譯

六石　貞享元子年御切米上る成行不知　與右衛門

六石　貞享二丑年より御切米上り成行不知　新右衛門

四石貳斗五升　元祿元辰年より御切米上り成行不知　理右衛門

一五石　又藏　作右衛門

右　譯

壹石八斗五升　寛文十一亥年三石壹斗五升に成る　作右衛門

三石壹斗五升　又藏

右兩人延寶三卯年より株切米組手形に成名前不出成行不知

寛文六卯新規

一七石　元祿七戌年病死跡不知　六右衛門

一七石　元祿八亥年病死跡不知　仁兵衛

寛文七未新規

一拾三石充　寛文八申年より株切米組手形に成る、名前不出、成行不知　左吉　久五郎　十太郎

一拾壹石五斗　寛文八申年より株切米組手形に成る、名前不出、成行不知　市郎兵衛

寛永十四丑新規

株切米にて名前不知筋
御扶持方帳より名前知候筋

一拾八石　松坂御城番六人

右　譯

一貳人扶持　正保三戌年庄兵衛と改、同四亥年忰と入替候哉、同年より庄藏と名前出慶安元子年より庄兵衛と改、明暦元未年迄御扶持方渡る　水野庄藏

一貳人扶持　承應二巳年忰と入替候哉同年より水田茂助と名前出る、明暦元未年迄御扶持方渡る　水田與次右衛門

一貳人扶持　承應二巳年姓名改候哉代番にても可有之哉、同年より小林德右衛門と姓名出る、明暦元未迄御扶持方渡る　龜井太左衛門

一貳人扶持　明暦三酉迄御扶持方渡る　貝發喜太夫

一貳人扶持　明暦三酉迄御扶持方渡る　牧　孫右衛門

一貳人扶持　明暦三酉迄御扶持方渡る　多賀佐助

右万治元戌年より松坂御城番六人小笠原次右衛門預松坂同心之内總人數貳十人へ四拾人扶持束渡る
株切米組手形成る姓名不出成行不知

一貳拾四石　白子御殿番三人

右　譯

一貳人扶持充　堀口庄兵衛　坂市右衛門　米川太郎兵衛

右三人寛永十四丑年被　召出之場夫々かなへ出有之候

一貳人扶持　万治三子年米川太郎兵衛跡白子御殿番に成る寛文三卯年寺村十右衛門と入替　秋山與太夫

一貳人扶持　寛文三卯年秋山與太夫代に入同八申年藤市與九郎と入替る　寺村十右衛門

一貳人扶持　上の田中御鳥見より坂市右衛門跡白子御殿番に成る承應二巳より御扶持方上る成行不知　今村久兵衛

一貳人扶持　万治元戌年白子御殿番に成る貞享元子より御扶持方上る成行不知　矢口増右衛門

寛永十五寅新規

一四拾五石　寛永十八巳より三拾石にて貳人に成る正保三戌より四拾五石にて三人に成る　甲賀衆三人

右　譯

一四人扶持　寛永十六卯年二月より御扶持方取出し有之候万治三子より忠右衛門に成る寛文七未迄御扶持方渡る　服部忠左衛門

一三人扶持　寛永十六卯二月より御扶持方取出し有之候寛文七未迄御扶持方渡る　數見角右衛門

一三人扶持　寛永十七辰十二月甲賀衆壹人病死と有右吉兵衛事と見る　山本吉兵衛

一三人扶持　正保三戌三月より御扶持方取出し有之候寛文七未迄御扶持方渡る　安富權右衛門

右寛文七未年御藥込三組にて十八人同子供役十四人甲賀衆三人都合五組に分れ有之候處同八申年御藥込三拾四人にて三組に相成候に付甲賀衆も右御藥込へ組込候哉申年は甲賀衆御切米渡り方株切米組手形に相成候趣にて姓名不出成行不知

一六石　太地崎常燈番一人

一貳人扶持　寛永十五寅年より御扶持方取出し有之候慶安四卯より渡りなし成行不知　定圓

一九鬼崎常燈番二人

一貳人扶持　寛永十五寅より御扶持方取出し有之候慶安四卯年より渡りなし成行不知　與助　新兵衛

一拾四石　熊野山廻り三人

右三人と有之候得共御扶持方帳に四人有之候此内一人は御扶持方計被下候と相見候

右譯

一貳人扶持充　寛永十五寅より御扶持方取出し有之候同十八巳より御扶持方渡りなし成行不知　西村吉左衛門　小山清兵衛　倉屋馬左衛門

一貳人扶持　寛永十五寅より御扶持方取出し有之候、万治二酉より大杉山廻りと有之、寛文二寅年牛左衛門名改か、又は入替にても可有之哉、貞享元子より御扶持方渡りなく成行不知　久津喜左衛門

苗字無之儒醫之分

元和八戌より

一五拾石　正保元申より御切米上り拾人扶持被下候慶安元子より御扶持不渡成行不知　勘了

一四拾五石　寛永六巳年病死と見え跡目無相違常見被下玄齊と改候趣に相見申候　玄齊

一三拾石　寛永元子五拾石に成同六巳六拾石に成る承應元辰三月病死跡目無相違慶純に被下置候　慶林

寛永五辰新規

一貳拾石　正保元申暮より御切米上る死失不知　宗伯

一四拾石　寛永十四丑年五拾石に成る寛文五巳年隱居被　仰付御切米無相違宗海へ被下候
宗味には五人扶持被下候延寶二寅二月病死　宗味

一五拾石　寛永十二亥年御切米上る死失不知　素庵

寛永八未新規

一四拾石　寛永九申年より八拾石に成る同十八巳年御暇被下　道迪

寛永九申新規

一八拾石　寛永十酉より上る成行不知　仲庵

一貳拾石　寛永十一戌年五拾石に成る同十二亥年清阿彌と改同二十未暮御切米上る成行不知　清庵

寛永十酉新規

一八拾石　寛文十一亥年病死跡目無相違悴宗策へ被下候　長庵

一百石　寛永十一戌より一鷗と改承應三午年病死跡無相違悴順庵へ被下候　一應

一五拾石　慶安四卯十月病死跡不知　道意

寛永十二子新規

一五拾石　寛永十四丑八拾石に成る同十八巳三月御改易　榮庵

寛永二十未新規

一貳拾石　承應二巳六月病死跡不知　治官

慶安二丑新規

一八拾石　万治三子八月御暇被下　立卓

慶安三寅新規

一貳拾石　承應三午年上る成行不知　舍心

明暦三酉新規

一貳拾石　寛文八申二月病死跡目不知　良意

御救に被下候筋と相見候分

寛文元子新規

一四拾石　寛永二丑より上る死失不知　小栗彌次右衛門後家

一百石　寛永元子年後家へ被下候處有之以來渡りなく死失不知　山岡七左衛門　後家
一百石　寛永三寅より上る死失不知　山路勘右衛門　後家
一百石　寛永二丑より上る死失不知　板倉長兵衛　後家

寛永四卯新規

一貳拾石　寛永十一戌年名前消し有之候以來渡りなく死失不知　村松鄉右衛門　老母
一貳拾石　慶安四卯より上る死失不知　小笠原久右衛　老母

正保二酉新規

一拾石　延寶八申霜月病死　小笠原庄大夫　母

地士六十人者之分

元和八戌より

一五拾石　寛永十六卯年十一月病死　井（一本上）口善太夫
一五拾石　寛永十四丑年御切米上る死失不知　稲井左兵衛
一五拾石　寛永十九午年病死　西田孫左衛門
一五拾石　寛永八未年病死　戸原彌太夫
一五拾石　寛永十九午年御切米上る死失不知　奥洞震庵
一五拾石　寛永廿未年病死と相見申候　太田理右衛門
一五拾石　寛永十九午年病死　尾崎次左衛門

一五拾石　寛永十八巳年九郎兵衛と改同十九午年病死　亀井六左衛門
一五拾石　寛永十一戌年外へ御役替に付是より末かな帳に有り　津田九太夫
一五拾石　寛永十五寅三月病死　柑本九太夫
一五拾石　寛永十三子年御切米上ろ死失不知　出嶋庄兵衛
一五拾石　寛永十四丑年御切米上ろ死失不知　有本刑部
一五拾石　寛永元子年木村孫右衛門と改同廿未年病死　湯川六丞

寛永十一戌新規

一五拾石　寛永十六卯年十月病死　平野四郎兵衛

元和八戌より

一五拾石　池永五郎右衛門　一五拾石　伊藤十三郎
一五拾石　花光小十郎　一五拾石　林茂助
一五拾石　橋爪七兵衛　一五拾石　原味右衛門
一五拾石　長谷川半右衛門　一五拾石　西與助
一五拾石　寛永三寅年藤大夫と改　西村藤左衛門　一五拾石　熱川仁兵衛
一五拾石　堀江平次　一五拾石　別所嘉右衛門
一五拾石　太田二郎左衛門　一五拾石　大川孫丞
一五拾石　笠畠七郎右衛門　一五拾石　亀井角兵衛

一五拾石　吉田喜右衛門
一五拾石　田口平太夫
一五拾石　巽　茂兵衛
一五拾石　寛永二丑年龍神之苗字改同六巳年平十郎之改　瀧神二郎右衛門
一五拾石　田林茂右衛門
一五拾石　曾和新助
一五拾石　鳴神源三太夫
一五拾石　則澗理兵衛
一五拾石　安田權太夫
一五拾石　江川藤七
一五拾石　崎山八右衛門
一五拾石　木村二郎右衛門
一五拾石　宮本清右衛門
一五拾石　宮崎六右衛門
一五拾石　宮本九右衛門
一五拾石　森　茂兵衛

一五拾石　吉村左兵衛
一五拾石　多喜嘉太夫
一五拾石　玉置太郎兵衛
一五拾石　玉置與右衛門
一五拾石　田村清右衛門
一五拾石　津田甚右衛門
一五拾石　打越五郎右衛門
一五拾石　野上九助
一五拾石　前山九郎兵衛
一五拾石　江原左助
一五拾石　寛永九申年九郎右衛門之改　崎山九郎左衛門
一五拾石　湯川助之進
一五拾石　宮井太郎左衛門
一五拾石　御前伊兵衛
一五拾石　猪谷三郎右衛門

一五拾石　津田半左衛門　一五拾石　喜多長左衛門

寛永十三子新規

一五拾石　中村喜内太夫

右池永五郎右衛門より以下五十人正保二酉年御暇被下候趣にて一等御切米上り有之候

須田組分

寛永元子新規

一三拾石　塙坂茂兵衛　一三拾石　塙坂仁左衛門

一三拾石　西山喜八郎　一三拾石　生地傳兵衛
寛永五辰年苗字西村と改

一三拾石　竹田仁右衛門　一三拾石　上田傳十郎
寛永二丑年仁左衛門と改同五辰年仁右衛門と改

一三拾石　野口角右衛門　一三拾石　野口七兵衛
寛永三寅年苗字野田と改

一三拾石　松岡右京　一三拾石　鍋田久兵衛

一三拾石　鍋田三助　一三拾石　鍋田作左衛門

寛永二丑新規

一三拾石　津田市兵衛　一三拾石　平井九兵衛

一三拾石　嶋仁太夫
寛永十五寅年孫之丞と改

右須田組正保二酉年御暇被下候趣にて一等御切米上り有之候

南紀徳川史巻之八十三

臣 堀内信 編

祿制第三

元和御切米帳総身錄下

雜調帳

御相撲取之分

元和八戌より

一 拾石　　四郎五郎
元和九亥年品不相分候得共八石に成る、寛永二丑年拾石五斗に成る、同三寅暮より御切米上る、死失不知

一 拾石　　牛車
寛永二丑年小車と改、同年拾石五斗に成る、同四卯年牛車と改、同七午年株切米組手形に成、成行不知

一 拾石　　十藏
元和九亥年拾石五斗に成る、寛永七午年株切米組手形に成る、成行不知

一 拾石　　片男波
元和九亥年拾四石に成る、寛永七午年株切米組手形に成る、成行不知

一 拾石充

喜右衛門　佐太郎
兵作　榎木
作助　次郎兵衛
五左衛門　そろり
七藏　忠次郎
玉かつら

右十一人元和九亥年より名前不見御暇被下候哉又は翌年より名乗に改替候哉共品難相分候

元和九亥新規

一拾四石　寛永元子三拾石に成る、同七午年より株切米組手形に成る、成行不知　小化

一拾石五斗　寛永三寅年拾七石五斗に成る、同七午年より株切米組手形に成る、成行不知　かなつち

一拾石五斗　寛永七午年より株切米組手形に成る、成行不知　田村

一拾四石　寛永七午年より右同断成行不知　九左衛門

一拾石五斗　寛永三寅年拾七石五斗に成る、同七午年より株切米組手形に成る、成行不知　小櫻

一拾石五斗　寛永四卯暮より御切米上る、死失不知　しゝ

一拾四石　寛永三寅弐拾壹石に成る、同七午年より株切米組手形に成る、成行不知　鷲之助

一拾石五斗　寛永五辰より御切米上る、同六巳より十三郎弟こもり被召抱有之付弟と入替候趣に相見候　十三郎

一拾五石　寛永四卯より御切米上る、死失不知　行司　作太夫

一拾石五斗　寛永三寅より御切米上る、死失不知　七夕

一拾石五斗　寛永二丑年御暇被下　玉虫

一七　石　寛永二丑年御切米上る、死失不知　しゆざん

寛永元子新規

一拾石五斗　寛永七午年より株切米組手形に成る、成行不知　から竹

寛永二丑新規

一拾貳石貳斗五升　寛永七午年より株切米組手形に成る、成行不知　壚風

寛永三寅新規

一拾石五斗三人扶持　寛文三卯二月病死　新助

一拾石五斗　寛永七午年より株切米組手形に成る、成行不知　だら〳〵

寛永四卯新規

一三拾石五人扶持　寛永七午年株切米組手形に成る、成行不知　十七

寛永五辰新規

一拾石五斗　寛永七午年より株切米組手形に成る、成行不知　十三郎弟　こもり

寛永十二亥新規

一五拾石拾人扶持　寛永十九午年御切米上る、死失不知　庬之助

一貳拾石拾人扶持　寛永十八巳三拾石に成る、正保二酉年相撲取御免之相見同年より諸役人の内にて御切米渡之、同三戌年入江十兵衛と姓名改、是よりまかな帳に出す　犀之助

寛永十七辰新規

一四拾石　正保二酉より御切米上り死失不知　株切米より　傳左衛門

一貳拾五石　寛永十八巳二月御暇被下　右同　鎌倉

一貳拾石　寛永二十未年御切米上る、死失不知　右同　彌三郎

一拾石五斗　正保二酉より御切米上る、死失不知　右同　乙満

一拾石五斗　寛永十九午暮御切米る、死失不知　右同　八兵衛

一五　石　寛永二十未年安左衞門と改、正保二酉より御切米上り、死失不知　右同　作　藏

一四石五斗壹人扶持　正保二酉年御切米上る、死失不知　右同　山梨子

一七　石　寛永十八巳二月御暇被下　右同　仁　助

一七　石　寛永十八巳正月病死　右同　三十郎

一金三拾兩　正保元申より上る、死失不知　荒　岩

一金貳拾兩　正保元申より上る、死失不知　玉　簾

一金貳拾兩　正保元申より上る、死失不知　はりかね

一大判壹枚　正保二酉より上る、死失不知　甚之助

寛永十九午新規

一貳拾石　寛永二十未年御切米上る、死失不知　榎　本

一貳拾石　正保元申暮より御切米上る、死失不知　小　芝

一金貳拾兩　正保元申より上る、死失不知　篠之助

正保二酉新規

一拾石五斗貳人扶持　慶安四卯年三人扶持に成る、延寶六午年極月御鉄炮方下役人に成る、苗字平井と改、天和二戌五月御切米差上御扶持方三人扶持其儘被下候、右御切米傳内へ被下候傳内御切米八石は上る、貳人扶持は其儘傳内へ被下、元祿二巳年より十五郎御扶持方不渡候、死失不知　十五郎

寛永十二子新規

一三人扶持つゝ　寛永十五寅より御扶持方上る、死失不知

しうきく　こたまき

かなとこ　こさめ

一六人扶持　寛永十八巳より御扶持方上る、死失不知

一三人扶持　正保二酉より御扶持方上る、死失不知

一三人扶持　寛文十五寅より品相分不申候得共壹人扶持つゝに成る、同十八巳上る、死失不知、但御徒より出勤と相見る

一三人扶持　寛永十五寅より品相分不申候得共壹人扶持に成る、正保二より上る、死失不知

一増一人扶持づゝ　寛永十三子より正保二酉迄同三戌より上る、死失不知

一増壹人扶持づゝ
寛永十三子より正保元申迄同二酉より上る

一増三人扶持　寛永十三子より正保元申迄同二酉より上る

一増壹人扶持つゝ
寛永十三子より正保元申迄同二酉より上る

一増三人扶持　寛永十三子より同十四丑迄同十五寅より上る

一増貳人扶持　寛永十三子より同十七辰迄同十八巳より上る

一増五人扶持　寛永十三子より同十九午迄同二十未より上る

一増壹人扶持　寛永二十未より正保二酉迄同三戌より上る

七郎兵衛　長兵衛
玉帚
露の尾　浮世
はま風　風の留
しほかま
沖の波
山梨子　旅ふね
きぬた　水戸
すみれ　岩谷
大池　濱すゝめ
王川
いかつち　おふね
さにし
十五左衛門
仁兵衛
象之助
團右衛門

右山梨子より以下拾六人は御徒より出勤

寛永二十未新規

一四人扶持　正保二酉迄御扶持方渡る同三戌より上る、死失不知　蔦之助

一増三人扶持つゝ　八太夫　権之亟

十三郎

一増貳人扶持つゝ　勘兵衛　久兵衛

一増壹人扶持つゝ　佐助　粉川

右八太夫より七人御徒より出勤正保二酉年斗御扶持方渡る

承應二巳新規

一五人扶持　寛文八申三月病死忰一二三太夫へ跡式無相違被下候　一二三太夫

諸職人

諸職人之分

元和八戌より

一六拾石　寛永三寅年八拾石に成る、同四卯年九郎三郎と改、同十四丑年病死　文珠四郎

一貳拾五石　寛永二十未年四郎右衛門と改、正保元申五月病死　ぬし　庄次郎

一貳拾五石　寛永三寅年拾石御加増正保二酉年御切米上る、同年より十人扶持被下候
寛文三卯年より上る、御暇被下候趣に相見申候　さやし　五左衛門

一六拾石　正保二酉年御暇被下候趣にて御切米上る、同年より清吉へ貳拾人扶持被下候
清右衛門忰と相見　かわや　清右衛門

一五拾石　正保二酉年御切米上る、拾貳人扶持被下候、承應三午年忰甚七と入替り候趣
に相見候　かわや　彦六

一四拾石　正保二酉年御切米上ろ、拾五人扶持被下候、貞享元子十人扶持に成ろ、元祿九子年病死　かわや　彌吉

一四拾石　寛永十一戌年御切米上ろ、死失不知　さけいし　助五郎

一五拾石　寛永十八巳三月御改易　鉄炮かち　源三郎

一五拾石　寛永十八巳十二月病死無相違跡立ㇳ有　鉄炮かち　七右衛門

一拾八石　正保二酉年より御切米上ろ、七人扶持被下候同三戌年より御扶持方渡りなし死失不知　たい屋　喜兵衛

一拾八石　寛永十八酉年三拾石に成ろ、正保二酉年御暇被下候趣にて御切米上ろ、正保四亥年被　召歸御切米三拾石被下候、承應三午年文六ㇳ改、天和二戌年御切米の内拾貳石減し拾八石被下候、貞享元子七月病死　かな物屋　佐兵衛

一六拾石　寛永九申年悴ㇳ入替候趣にて御切米貳拾石被下候　さき　又兵衛

一六　石　元和九亥年御切米上ろ死失不知　こんや　與十郎

寛永元子新規

一五　石　寛永十一戌年嘉右衛門ㇳ名前出ろ、正保元申年御切米上ろ死失不知　いろりぬり

寛永二丑新規

一三拾石　寛永三寅年より土橋ㇳ苗字改同八未年御切米上ろ、死失不知　判屋　次郎右衛門

寛永四卯新規

一貳拾五石　寛永六巳年三拾石に成ろ、正保元申年御暇被下候　角細工　六兵衛

寛永七午新規

一拾八石　正保元申年御暇被下候　彫眼屋　常右衛門

寛永十酉新規

一五拾石　寛永十八巳年御切米上ろ、死失不知　御畳屋　伊兵衛

一貳拾五石　正保元申年御暇被下候明暦二酉年貳拾石被召出候由延寶五巳極月病死　奈良鍛冶　安左衛門

一貳拾石　正保元申年御暇被下候　さけいかち　長兵衛

一拾　石　正保元申年御暇被下候　矢師　庄左衛門

一五拾石　寛永十一戌極月病死　種か嶋かち　四郎兵衛

寛永十一戌新規

一四拾石　寛永十四丑年八拾石に成ろ、正保元申年御暇被下候　さき　治右衛門

一貳拾五石　正保元申年御暇被下候　銀屋　作兵衛

寛永十三子新規

一四拾石　正保元申年御暇被下候　安廣

寛永十七辰新規

一貳拾石　天和二戌二月御切米之内三石御減し拾七石被下候元祿七亥七月追放　畳屋　平次

寛永十八巳新規

一拾五石　承應三午極月御改易　木挽　長兵衛

慶安元子新規

一貳拾石　萬治二亥八月御暇被下候　からくり　庄右衛門

一拾三石　寛文四辰年より御切米上る、死失不知　大工　太郎兵衛

承應元辰新規

一拾五石　天和二戌二月御切米之内七石御減し八石被下候寶永五子正月病死　大工　孫三郎

明暦二申新規

一拾五石　延寶二戌年御暇被下候　檜物師　助藏

一拾五石　享保四亥六月病死　御細工人　一郎兵衛

餌差之分

元和八戌より

一拾五石　元祿九子年作助と入替候趣に相見へ候　喜兵衛

一拾五石　元祿十六未年御切米上る死失不知　喜太郎

一拾五石　元祿九子年御切米上る死失不知　角右衛門

一拾五石　元祿六酉年御切米上る死失不知　助十郎

一拾五石　延寶四辰年御切米上る死失不知　平右衛門

一拾五石　元祿六酉年御切米上る死失不知　甚九郎

一拾五石　寛永六巳年甚内と改、慶安元子年御切米上る、死失不知　甚助

一拾五石　元祿六酉年御切米上る、死失不知　權兵衛

一拾五石　元祿六酉年御切米上る、死失不知　市兵衛

一拾五石　寛文九酉年宗兵衛と改、延寶六午年曾之助、市左衛門兩人と入替り七石五斗つゝ被下候　平太夫

一拾五石　貞享三寅年小頭に成る、苗字富田と名乗、元祿十一寅年悴小十郎と入替り、御切米無相違被下之　十藏

一拾五石　元祿五申正月御暇被下　庄九郎

一拾五石　寛永十一戌年小頭に成る、苗字藤村と名乗る、同十七辰年貳拾五石に成る、萬治三子年御改易　左平次

一拾五石　元祿九子年御切米上る、死失不知跡切米へ四郎左衛門入　三　六　彌藏

一拾　石　元祿九子年御切米上る、死失不知　五兵衛

一六　石　元祿九子年御切米上る、死失不知　彌之助

一拾　石　元祿九子年御切米上る、死失不知　茂兵衛

一拾　石　元祿九子年御切米上る、死失不知　長助

一拾　石　正保三亥年御切米上る、死失不知　喜藏

一拾五石　寛文元丑年平藏と改、元祿九子年清藏と入替候趣に相見候　清藏

一拾五石　與市

一拾五石　佐五右衛門

一七　石　次太夫

右三人は元和九亥年より享保二十未年迄凡百十四年の間年々御切米無欠相渡有之候

御餌差の儀は株切米體之者に付入替り等斷拔けも有之哉と相見申候

寺社山伏之分

元和八戌より

一貳拾石　寛永十二亥より上る、死失不知　　覧首座

北村正修二男

賢首座

大徳寺雪舟和尚弟子

「信按に河村仁左衛門家譜に

右之如く記載仁左衛門は河村六左衛門正義之家にて有徳公之時被　召出さ雖も祖先は江州猪飼伊賀守三男河村三郎太郎正吉にて其四代は北村四左衛門正修と云本家は幕府に召され又代々の子弟大徳寺の弟子たり是等の由緒に付本記の如くなりしか覧は賢の誤なるべし」

一百石　寛永元子より上る、死失不知　　日光院

一八石　元和九亥より左馬と名前出る、寛永元子より上る、死失不知　　和歌　神主

一六石　寛永元子より上る、死失不知　　和歌　禰宜貳人

一三石　寛永元子より上る、死失不知　　同　神子

一三拾石　寛永十七辰九月病死、跡目無相違根來嘉兵衛へ被下候　　花上院

元和九亥新規

一四石　寛永元子より上る、死失不知　　三池坊

一拾石　承應元辰八月病死　　遍照光院

一三石　寛永元子より上る、死失不知　　天神ノ神主

寛永元子新規

一拾石　以來不相替當時迄相渡る　　梶取寺

一拾　石　寛永五辰より感應寺さ認以後不相替當時迄相渡る　漢王寺

一三拾石　寛永二丑より四拾石に成る、同五辰より吹上寺さ認候樣、同十酉より貳拾石圭瑞へ被下候同十二亥より貳拾石圭瑞分上る、死失不知、以來不相替四拾石吹上寺へ當時迄相渡る　圭瑞和尚

一貳拾石　寛永二丑より四拾石に成る、同十酉より八拾石に成る、正保元申より禪林寺さ認候以來不相替當時迄相渡る　爽山和尚

一貳　石　寛永二丑より上る、死失不知　くわつ道

一拾四石　寛永二丑より上る、成行不知　所化衆十四人

寛永三寅新規

一貳拾五石　慶安四卯十一月病死、跡目不知　忠桂

寛永十酉新規

一四拾石　寛永十四丑より上る　大忍寺

寛永十二亥新規

一四拾石　寛永十七辰七拾石に成る、明曆元未年百石に成る、以來不相替當時迄相渡る　大智寺

寛永十三子新規

一貳拾石　承應二巳十一月病死無相違後住天得庵へ被下候　德藏主

寛永十四丑新規

一四　石　以來不相替當時迄相渡る　伊太祈曾祭禮料

一五　石　以來不相替當時迄相渡る　粉川祭禮料

寛永十八巳新規

一拾　俵　正保元申より上る、死失不知　千日坊

正保四亥新規

一三人扶持　正德五未より肩書に岩出村と認以來不相替當時迄相渡る　圓滿院

慶安二丑新規

一八拾石　明暦二申より雲蓋院と認候樣御証文廻る、寛文七未六月双嚴院と認江戸にて相渡候樣延寶元丑より御切米百石に成る、元祿十一寅暮より眞如院と認候樣以來當時迄無相違相渡る　双嚴院

慶安四卯新規

一壹人扶持　明暦二申より貳人扶持に成る、寶永四亥より唯成院に成る、同六丑年より正量院に成る、享保十巳より海善院に成る、以來より無相違當時迄相渡る　妹背山　小僧

承應元辰新規

一三人扶持　寛文三卯より圓相と改、延寶元丑より肩書那智山と改、元祿十一寅より圓宗と改、同十三辰より圓相と改、同十四巳より龍壽院と改　ひゑの山　圓知

承應二巳新規

一貳拾五石　以來無相違當時迄相渡る　淨心寺

一七人扶持　明暦二申より根來の苗字附延寶三卯より上る、同五巳年より五人扶持被下候代替と相見へ申候　多門院

御靈屋掃除
一貳人扶持　天和二戌より上る　和合院預　出家一人

承應三午新規

一小判拾兩　寶永四亥より四拾石に成る、以來當時迄無相違相渡る　護光院

一小判五兩　天和二戌年病死右跡貳兩貳歩泰雲へ被下候　乘圓坊

一小判五兩 六人扶持　寶永六午極月病死後住仙壽院一代三人扶持被下候　千駄木　仙壽院

一小判三兩　延寶八申四月御暇被下候　しゅしん

寛文六午新規

一三石六斗　以來より當時迄無相違相渡る　若宮八幡宮祭禮料

一四　石　天和元酉より御佛供料貳拾石の內より相渡候筈に付上る　和合院判出家壹人

熊野衆之分

慶安三寅新規

一貳拾人扶持　内拾人扶持は先年より熊野にて被下候、万治二亥正月病死、同三子より悴万千代へ七人扶持被下候　堀内主膳

一拾人扶持　明暦二申より兄弟同苗新左衛門彌十郎へ無相違被下候　小山左次兵衛

一拾人扶持　承應二巳より中新之丞と認有之候、寛文四辰四月病死無相違悴岡右衛門へ被下候　中井新之丞

一貳人扶持　寛文九酉文右衛門と入替候趣相見へ申候、延寶六午より兵部と成る　鳥居兵部

一貳人扶持　慶安三寅より寛延三年迄百ヶ年續欠無之相渡り有之候、右の內入替り等も可有之候得共難相分御座候　二階堂宮内

一貳人扶持　明暦二申より上る、死失不知　永井三郎兵衛

一貳人扶持　明暦二申より上る、死失不知　濱田長左衛門

三浦小傳次内衆

寛永四卯新規

一六拾石　山田平兵衛　一四拾石　鈴本靫負

一金拾兩　木原內藏介　一同八兩　長谷川瀬兵衛

一同五兩　細野七兵衛

一同三兩　三枝龜藏

一同三兩　落合左門

一同貳拾四兩　若黨八人

一同五兩　うは

一同四兩　半下三人

右寛永十二亥年一等御切米上ろ成行不知

一同四兩　原伊兵衛

一同三兩　森喜内

一同三兩　春彌

一同貳拾兩　中間拾人

一同三兩　いちやこ

坊主之分

元和八戌より

一拾五石　賢賀
寛永二丑年玄賀と改同十八巳より上ろ、成行不知

一拾五石　休盛
寛永十八巳より上ろ、病死と見ゆ正保元申年より拾五石にて休盛出ろ、右跡歟

一拾五石　春慶
正保元申年上ろ、成行不知

一拾四石五斗　休安
承應元辰年より株切米に成ろ、名前不出、成行不知

一拾三石五斗　一玄
寛永十八巳年及閑と有り、正保元申より一玄と改、右にては本文の一玄と休閑と入替追て親の名に改候趣に相見へ候、承應元辰株切米に成ろ、名前不出、成行不知

一拾貳石　宗心
寛永十八巳年宗知と改、正保元申年より上ろ、成行不知

一拾貳石　三清
寛永十八巳年より上ろ、成行不知

一拾石　珠齋
寛永元子より珍齋と改、同十八巳より上ろ、成行不知

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　印齋

一　拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　重味

一　拾石　寛永二十未年拾五石に成る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗慶

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　久意

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　休古

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　覚佐

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　三鐵

一　拾石　寛永六巳年貳拾石に成る、同十一戌年暮より上る、成行不知　正二

一　拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出成行不知　喜齋

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　春齋

一　拾石　寛永元子より同十七辰迄釣雪と認有之、同十八巳より長雪と改、慶安二丑年道悦と改、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　長雪

一　拾石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　閑齋

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　長意

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　長玄

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　正順

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　玄智

一　拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　自仙

一拾石　寛永五辰且喜ニ改、同十八巳年より上る、成行不知　良嘉

常喜跡
一貳拾石　寛永八午より拾石里齋拾石大仁休味被下候　大仁　里齋　休味

右譯

常陸様衆
一拾石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　里齋

一拾石　寛永十八巳より上る、成行不知、同年より拾石休味に被下候承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　大仁　休味

一拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　宗齋

一拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　淨與

一拾七石五斗　寛永六巳年病死跡目無相違子に被下候親名榮味に成る　榮味

一拾七石五斗　寛永十二亥年病死相見候、同年より成叶へ無相違被下候趣に相見へ候　清雲

寛永二丑新規

一八石　寛永十八巳年拾石に成る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　叙雲

一八石　寛永十八巳年より上る、成行不知　専了

一八石　寛永十八巳年より上る、成行不知　嘉傳

一八石　寛永十八巳年拾石に成る、承應元辰年より株切米に成る、成行不知　宗休

一八石　寛永十六卯年玄佐ニ改、同十八巳年品相替り不申候得共御切米七石五斗に成る、同二十未年十石五斗に成る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　泉宗

寛永七午新規

一拾石　寛永九申より貳拾石に成る、慶安三寅年より上る、成行不知　古齋

寛永八未新規

一拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　宗傳

一拾石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　宗味

一八石　寛永十八巳年より上る、成行不知　良齋

一拾五石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　長春

寛永九申新規

一七石　寛永十七辰年八石に成る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　玄齋

一貳拾石　寛永十四丑年病死跡不知　了意

寛永十酉新規

一七石　寛永十八巳年より上る、成行不知　宗意

一拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　良音

一拾石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　三休

一拾石　寛永十八巳年上る、成行不知　眞齋

一六石　寛永十八巳年拾石に成る、龍甫共認有る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　一本立（玄）甫

一六石　寛永十八巳年より上る、成行不知　良春

寛永十一戌新規

常陸様衆
一八石　寛永十七辰年拾石に成る、榮清と文字改承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　榮情

右同
一八石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　休味

一八石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　宗白

寛永十二亥新規

一拾石　寛永十八巳年より上る、成行不知　久宅

寛永十三子新規

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　意齋

一八石　明暦二申年より上る、成行不知　宗雲

一三石五斗　寛永十九午より上る、病死と見ゆ跡無相違石丸權太郎に成る　雲宗

寛永十六卯新規

一拾石　承應三午年より上る、成行不知　烏玄

寛永十七辰新規

一九石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　休加

一八石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　休齋

寛永十八巳新規

一拾五石　正保元申年上る、成行不知　道珍

一拾石　正保元申年上る、成行不知　元鎮

一拾石　承應元辰より株切米に成る、名前不出、成行不知　常慶

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　休佐

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　長圓

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　春清

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　道仙

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　喜庵

一拾石　正保元申年より上る、成行不知　道西

一拾石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　宗全

一拾石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　是閑

一拾石　正保元申より正齊と認承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　松齋

一拾石　承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　祐仁

一拾二石　正保元申年より上る、成行不知　宗智

一拾石　正保元申より貞喜と認有承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　了喜

一八石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　春嘉

一八石　正保元申より拾石に成る、承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　丹齋

一八石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗元

一八石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　了嘉

一八石　正保元申より上る、成行不知　元春

一七石五斗　寛永二十未年拾石五斗に成る、承應元辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　元佐

一七石五斗　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　元嘉

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗印

一六石　正保元申年より上る、成行不知　意山

一六石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　元智

一貳拾石　正保元申年より上る、成行不知　休賀　三清　源清

正保元申新規

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗句

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　元鐵

一拾石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　春齋

一八石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　山雪

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗傳

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　清山

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　良元

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　深清

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　泉順

一六石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　喜鐵

正保二酉新規

一小判五兩　承應元辰年より上る、成行不知　入阿彌

慶安元子新規

一九石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗羽

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　養傳

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　元智

一七石　承應元辰年より株切米に成る、名前不出、成行不知　良元

一八石　慶安二丑年より株切米に成る、名前不出、成行不知　宗元

一八石　慶安二丑年より株切米に成る、名前不出、成行不知　是三

慶安二丑新規

一金五兩（左京樣衆）　寛文十戌年より御人數別帳相成候處右帳面亂册致し候に付成行不知　長圓

承應元辰新規

一拾石　万治三子年上る、成行不知　良圓

承應二巳新規

一拾貳石　明暦二申年上る、成行不知　喜三

一八石　明暦二申年より上る、成行不知　圓智

一八石　天和（附ケ紙に天和より延寶は以前なり）二戌年壹石御減し七石に成る、延寶元丑年病死跡無相違被下候玄古に成る　玄古

一八　石　寛永七寅暮より上る、成行不知　良遍

承應三午年新規

一八　石　寛文十一亥年長傳と改、天和二戌年一石御減し七石に成る、同三亥より上る、成行不知　長雲

萬治二亥新規

一六　石　寛文五巳年拾貮石に成る、同十二子年より上る、成行不知　分流弟子　立益

一小判五兩　寛文六午年八石に成る、天和二戌年壹石御減し七石に成る、貞享四卯年より上る成行不知　良佐

一小判四兩　寛文六午年八石に成る、天和二戌年壹石御減し七石に成る、貞享四卯年より上る成行不知　玄長

万治三子年新規

左京様衆
一七　石　寛文十戌年より御人數別帳に相成候處右帳面亂冊致候に付成行不知　文益

左京様衆
一拾貮石　寛文十戌年より御人數別帳に相成候處右帳面亂冊致候に付成行不知　圓齋

寛文二寅新規

一七　石　寛文八申二拾石に成る、元祿四未七月病死跡目御切米拾二石三人扶持春慶へ被下候　春徳

一五　石　寛文四辰より株切米に成る、名前不出、同六午年八石にて名前出る、同九酉年友甫に成る左京様衆に成る、同十戌年御人數別帳に相成候に付亂冊致成行不知　喜齋

一拾　石　寛文八申年より株切米に成る、名前不出、成行不知　休清

一拾　石　寛文八申年より株切米に成る、名前不出、成行不知　友古

一八　石　寛文四辰年株切米に成る、名前不出、成行不知　意伯

寛文五巳新規

一八　石　寛文九酉年より上る、成行不知　良慶

一拾　石　寛文九酉年より上る、成行不知　立恰

寛文六午新規

一八　石　天和二戌年壹石御減し七石に成る、貞享四卯より上る、成行不知　慶賀

一八　石　寛文九酉年より上る、成行不知　閑齋

寛文七未新規

一八　石　天和二戌年壹石御減し七石に成る、元祿元辰より上る、成行不知　意齋

一八　石　寛文八申年より株切米に成る、名前不出、成行不知　閑齋

一八　石　寛文八申年より株切米に成る、名前不出、成行不知　了甫

御加増分
一貳　石　是は元渡株切米にて不分寛文八申年より株切米へ増

寛永十四丑年
一知行帳姓名之内終身調一帳

元和八戌年より寛永十四丑年迄の内御切米より知行に相成候筋も寛永十四の知行帳へ姓名出有之候得共左樣の筋は夫々被召出の場へ抜取終身相調候に付右抜取候殘りの姓名計り左へ出申候尤此部に出候筋は全く元和八戌年以前よりの知行取にて御座候事

○寛永十四丑年知行帳之内

●い

申 一高六百五拾石　寛永十七辰年千石に成る、明暦元未年千三百石に成る、寛文四辰八月病死跡目無相違同苗甚五左衛門へ被下　市川甚右衛門

申 一高五百石　寛永二十未年又兵衛と改万治三子年八百石に成る、寛文四辰年千石に成る、延寶三卯八月病死爲跡目又兵衛孫三太夫悴傳十郎に五百石被下　伊藤三太郎

午 一高五百石　正保元申四月病死跡目無相違同苗十太夫に被下　飯塚内匠

午 一高五百石　寛永十六卯三月病死跡目無相違同苗喜太郎へ被下候趣に相見候　石黒藤兵衛

申 一高五百石　寛永十四丑年病死跡目助七郎へ二百五拾石被下　伊木半七

午 一高五百石　慶安二丑十月病死跡目三百石同苗善左衛門に被下御切米二拾五石同苗五郎右衛門に被下　井上仁右衛門

午 一高五百石　寛永十四丑年病死跡目同苗四郎五郎へ二百五拾石被下四郎五郎取來の御切米は上る　岩瀬内膳

申 一高四百石　明暦元未年五郎右衛門と改、万治三子年六百石に成る、延寶三卯五月隱居被　仰付知行無相違同苗助太夫に被下、助太夫取來の御切米八拾石は五郎右衛門に被下、同年正休と改、延寶四辰四月病死　飯島助十郎

午 一高三百石　明暦元未年加右衛門と改、同三酉五月病死跡目同苗彌五右衛門に二百石被下、彌五右衛門御切米は上る　稲葉宇右衛門

午 一高三百石　慶安二丑十二月病死、跡目無相違同苗長左衛門に被下長左衛門御切米は上る　犬塚甚左衛門

申 一高三百石　寛永二十未年病死跡目同苗才三郎に二百石被下　稲生九太夫

申 一高三百石　元祿十一寅八月病死當物成同苗小助に被下跡目不知　池端彌左近

申 一高三百石　寛永十九午年彌平兵衛と改、承應元辰十一月病死、跡目無相違同苗市藏に被下　石野市藏

午 一高三百五石貳斗貳升　明暦元未十一月病死跡目無相違同苗意齋に被下　板坂卜齋

申 一高貳百五拾石　寛永二十未十月病死跡目無相違同苗右馬介に被下右馬介取來の知行は上る　石野忠左衛門

申 一高貳百五拾石　寛文四辰八月病死跡目無相違悴に被下候旨記し有之候右悴彌五助と相見候尤も直に親の名に相改　市川［一本門］(郷)左衛門

一高貳百五拾石　承應三午十月病死、跡目無相違同苗忠三郎に被下、眉に寛永十二亥年同苗忠三郎跡目無相違被下候趣に相見候とあり　池田市右衛門

午一高貳百石　寛文四辰七月病死跡目無相違武太夫に被下　井上加兵衛

午一高貳百石　承應三午年三百石に成る、延寶元丑八月隱居被　仰付知行無相違同苗理右衛門に被下　稲生嘉兵衛

一高貳百石　正保二酉年より知行不相渡死失不知　井出一郎左衛門

一高貳百石　延寶元丑年より苗字伊東と認有同七未七月病死跡目同苗源五右衛門に百五拾石被下　伊藤久平

申一高貳百石　寛永十九午六月病死跡目同苗市右衛門に五人扶持被下　井村善九郎

申一高貳百石　寛永十五寅六月病死跡目無相違同苗左五兵衛に被下候趣に相見候　飯島彌兵衛

一高貳百石　正保元申年より知行不相渡死失不知　岩坪理右衛門

一高百五拾石　正保三戌年理右衛門と改、万治二亥八月病死、跡目同苗万吉に拾五人扶持被下　飯嶋七左衛門

●は

午一高千五百石　正保三戌年隱居被　仰付、同苗助右衛門へ知行無相違被下候趣に相見候、同四亥三月十兵衛助右衛門兩人共知行は上り有之品難相分候　早川十兵衛

午一高千石　林平之丞三千石の内千石寛永十酉年より所左衛門に被下候旨知行割帳に記有之候　寛永十六卯年病死跡目總領へ四百石被下直に親の名に改候哉所左衛門と出有之候　林所左衛門

申一高九百石　明暦元未年千石に成る、寛文七未年二千石に成る、同十一亥八月病死跡目名跡長坂小右衛門に千石被下、姓名原田市十郎と改、小右衛門取來の知行五百石は弟長坂五郎藏に被下名小右衛門と改五郎藏取來の御切米は上る　原田市十郎

午一高六百五拾石　寛永十四丑年病死跡目無相違同苗勘八に被下　長谷川五郎右衛門

一高五百石　寛永元子新規に花房式部と出有之候同人にても可有之哉其品難相分候　寛文八申年彌次右衛門と改、延寶二寅六月病死跡目總領彌次右衛門に三百石被下、御藏米八拾石二男角之助に被下角之助取來の御切米は上る　花房庄兵衛

一[申]高四百石三升七合　寛永二十未年權之助と改、明暦元未二月病死跡目養子吉左衛門に三百石被下　原田八左衛門

一[午]高四百石　万治三子十月御暇被下　早川次兵衛

一[午]高四百壹石壹斗三升六合　寛文二寅五月御改易　端　次右衛門

一[申]高三百石　承應二巳二月病死跡目不分　長谷川清右衛門

一高三百石　寛永二十未十月病死跡目不分　花井庄右衛門

一[午]高三百石　寛文九酉十月隱居被　仰付知行無相違同苗孫十郎に被下　孫十郎御切米二拾五石源兵衛に被下寛文十戌年源入と改延寶五巳二月病死　橋本源兵衛

一[午]高三百石　寛永二十未五月病死跡目不分　早川清兵衛

一[午]高三百石　延寶四辰正月隱居被　仰付知行無相違同苗澤右衛門に被下　早川甚左衛門

一[申]高貳百石　寛永十四丑年病死跡目無相違同苗彦六に被下候趣に相見候　橋本彦兵衛

一高貳百石　正保四亥年三百石に成る、万治二亥年病死、跡目無相違同苗彌平次に被下　原田猪右衛門

一[申]高貳百石　寛永十八巳五月病死跡目無相違同苗角左衛門に被下　橋本六左衛門

一[午]高貳百石　寛永五巳十一月隱居被　仰付無相違同苗次郎太夫に被下次郎太夫御切米四拾石は與右衛門に被下同七未正月病死　橋本與右衛門

一[申]高百五拾石　寛永十七辰年病死と相見候翌年より知行不相渡御切米六拾石相渡り有之跡目と相見へ申候　橋本權太郎

●に

一高六百貳拾石六升　寛永廿未六月病死跡目同苗二郎八に貳百石被下　丹羽縫殿左衛門

一高六百石三斗貳升　正保三戌年高六百石渡り姓名丹羽金十郎と有之候へは正保二酉年十郎左衛門病死にて跡目金十郎へ六百石被下候樣相見申候　丹羽十郎左衛門

午 一　高四百石　正保二酉年一郎太夫と名前替り有之元祿七戌年本水と改同十丑正月病死跡目同苗彌次右衛門へ無相違被下彌次右衛門取來の知行三百石は上る　贄　掃部

申 一　高四百石　慶安元年五百石に成る、承應二巳四月病死、跡目同苗五郎助に無相違被下　丹羽五郎右衛門

申 一　高三百石　延寶五巳十月病死跡目二百石同苗六之右衛門に被下　丹羽久左衛門

午 一　高三百石　延寶七未八月隱居被　仰付知行無相違同苗傳太夫に被下傳太夫取來之御切米五拾石彌四郎に被下同八申年別源と改元祿元辰十一月病死　丹羽彌四郎

一　高三百石　正保三戌年又七と改、万治三酉年五百石に成る、延寶六午十一月病死跡目同苗藤九郎に三百石被下又七悴六之右衛門には御切米八拾石被下　西尾又七郎

申 一　高三百石　寛永十八巳六月病死跡目二百石同苗清九郎に被下百石弟權左衛門に被下　西村清左衛門

一　高三百石七合　慶安元子年四百石に成る、万治元戌閏極月隱居被　仰付知行の内三百石又六に被下、百石は平太夫に被下平太夫御切米四拾石も平太夫御合力に被下又六御切米は上る　西尾善太夫

一　高貳百石　承應三午年三百石に成る、万治三子年隱居被　仰付知行無相違同苗藤右衛門に被下、藤右衛門御切米は上る　西山十左衛門

●ほ

午 一　高千石壹合　正保四亥五月病死跡目無相違悴へ被下直に親之名に改有之候　北條内記

午 一　高八百石三合　明暦元未年孫之丞と改、延寶元丑正月病死跡目總領孫助へ六百石被下、二百石藤十郎に被下兩人共御切米は上る　堀田右馬之丞

一　高六百石　慶安三寅年八百石に成る、明暦元未年五月病死、跡目無相違同苗孫助へ被下孫助御切米は上る　本間五太夫

申 一　高四百石　寛永十四丑年病死跡目無相違悴に被下直に親の名に改有之候　本田八藏

午 一　高三百石　慶安四卯十二月病死跡目不分　堀部佐左衛門

一　高三百石　明暦元未十二月病死跡目不分　本阿彌光伯

午 一　高貳百五拾石　万治二亥十二月病死跡目同苗角左衛門に無相違被下角左衛門御切米は上る　細井長太夫

一高貳百石　明暦元未年七右衛門を改万治三子年正月病死跡目同苗五郎八に拾人扶持被下　本間右衛門七

●と

申 一高三千貳百石　正保二酉年知行無相違總領十郎左衛門に被下十郎左衛門取來の知行千三百石は金左衛門に被下、承應三午五月病死　戸田金左衛門

一高千三百石　正保二酉年親金左衛門知行三千二百石無相違被下、十郎左衛門知行千三百石は金左衛門に被下、寛文七未七月隱居被　仰付知行無相違同苗一郎右衛門に被下　戸田十郎左衛門

申 一高千石壹斗四合　寛永十七辰十月病死跡目無相違同苗平内に被下　戸田藤左衛門

午 一高七百石　寛永十九午年七左衛門を改、万治三子十一月知行七百石の內三百石養子九郎右衛門に被下九郎右衛門御切米は上る、殘り四百石は七左衛門に被下、寛文七未年宗卜を改同八申八月病死爲名跡近藤瀬兵衛次男七之丞に御切米四拾石被下　遠山主膳

一高七百石壹合　明暦元未年五左衛門を改天和元申十二月御改易　鳥井七之助

申 一高六百石　明暦元未年十太夫を改、寛文六午十一月病死跡目同苗平十郎に五百石被下、平十郎御切米は上る　富永左兵衛

申 一高六百石　寛永十五寅九月病死跡目二百五拾石總領九郎次郎に被下二百石次男半十郎に被下　戸塚半彌

一高五百石　寛文三卯四月病死跡目同苗市十郎に無相違被下　東仁右衛門

申 一高五百石　寛文十一亥年七百石に成る、延寶六午年病死を相見、同年知行同苗三郎左衛門に被下を記有之翌年より三郎左衛門へ無相違知行渡り有之候　豐島半之丞

一高貳百石　正保四亥二月病死跡目同苗新三郎に百五拾石被下新三郎御切米は上る　東使彌四郎

一高貳百石　寛文十二子八月病死跡目同苗六之助に拾五人扶持被下　東使孫七郎

一高百五拾石　寛永二十未年六兵衛を改貞享四卯五月病死跡目同苗半右衛門へ御切米六拾石被下　戸田太郎八

一高百石　寛永十九午年病死跡目養子小左衛門に御切米四拾石被下　泊民部

●を

申 一高貳千石　寛永二十未より長左衛門と改、正保四亥八月病死、跡目無相違子へ被下直に親之名に改候趣に相見申候　小笠原主馬

申 一高千八百三拾石　明暦二申六月病死跡目無相違采女へ被下　小笠原與左衛門

午 一高千五百石　寛永十九午年病死と相見へ同二十未年より跡目善九郎へ千石渡り有之候　大久保五郎兵衛

申 一高千五百石　明暦三酉十二月病死跡目無相違彌一右衛門に被下彌一右衛門御切米は上る　大村彌兵衛

午 一高千三百石八合　慶安三寅年惣太夫と改承應三午十月病死跡目無相違同苗四郎右衛門に被下　大久保四郎右衛門

一高千百石　寛永十八巳十二月病死跡目権十郎へ無相違被下権十郎御切米は上る　大森與三左衛門

申 一高千石壹斗九升八合　万治三子六月病死跡目無相違彌之助に被下彌之助御切米は上る　小笠原久兵衛

申 一高千石貳合　正保三戌より新右衛門と改、寛文元丑六月病死、跡目三十人扶持悴に被下直に八助と改候趣に相見へ申候　大藪八助

一高千壹石三升五合　寛文十戌七月病死跡目無相違杢之助に被下　小笠原兵右衛門

申 一高千石　寛永十五寅十月病死跡目無相違被下直に親之名に相成候趣に相見へ候　小笠原庄太夫

申 一高千石四斗貳升九合　寛永十五寅十二月病死跡目無相違被下親之名に改候趣に相見候　小笠原次右衛門

申 一高千壹石六斗九升五合　寛永十七辰六月病死跡目無相違被下直に親之名に改候趣相見候　尾寄平左衛門

申 一高八百石壹合　万治三子六月病死跡目無相違同苗九十郎に被下　落合左平次

申 一高七百石　寛文十一亥十月病死跡目五百石同苗角之助へ被下角之助御切米は上る　小笠原十郎右衛門

申 一高六百三拾石六斗九升二合　天和三亥十一月太郎兵衛儀隠居被仰付知行無相違悴惣五郎に被下　岡部太郎兵衛

午 一高六百石　慶安元子より七百石に成る承應元辰十一月御改易　大河内杢左衛門

申　一　高五百石　慶安元子十一月病死跡目同苗金五郎へ無相違被下　小笠原作右衛門

申　一　高五百石　正保四亥五月病死跡目同苗角右衛門へ無相違被下角右衛門御切米は上ろ　小笠原三郎右衛門

申　一　高五百石　寛永十六卯年病死跡目三百石被下直に親之名に改候趣に相見候　岡田甚太夫

申　一　高五百石三斗二升八合　慶安四卯年知行五百石無相違悴新助へ被下、新助知行二百石は彌左衛門へ被下、隠居被　仰付玉意と改承應三午十二月死死玉意知行二百石の内百石次男源太夫へ被下百石三男八郎太夫へ被下　小栗彌左衛門

一　高五百石　慶安三寅正月病死跡目同苗八太夫へ被下　小川五郎太夫

一　高五百石　正保元申年病死跡目不分　大井源之丞

申　一　高四百石六斗七升七合　正保二酉六月病死跡目二百石總領金次郎へ被下百五拾石二男半兵衛へ被下御切米二拾五石三男九十郎に被下半兵衛御切米三拾石は上ろ　小笠原金平

申　一　高四百石　寛永十六卯年病死跡目不分知行辰より上ろと有之　尾寄所左衛門

午　一　高四百石　寛文三卯年より所左衛門に成ろ天和元酉九月病死跡目三百五拾石同苗惣右衛門へ被下　尾寄平作

申　一　高四百石五（一本升）（斗）　寛永十七辰年より彌三と改、正保四亥五月病死跡目二百石同苗三右衛門に被下三右衛門御切米は上ろ　小田切清兵衛

午　一　高四百石　寛永廿未年より茂左衛門と改万治三子六月病死跡目無相違同苗長三郎に被下長三郎御切米は上ろ　落合長三郎

申　一　高三百五拾石　正保二酉年より隠居と相見道榮と改名忍尾惣十郎の御切米四拾石道榮へ被下道榮知行三百五拾石無相違忍尾惣十郎へ被下道榮寛永五巳六月病死　忍尾彌五右衛門

一　高三百五拾石　承應二巳五月御改易　小野木安左衛門

一　高三百五拾石　寛永二十未年より十右衛門と改正保二酉年より渡りなし成行不知　大石長吉

午　一　高三百石　寛永十八巳九月病死跡目不分　押田市左衛門

一　高三百石　正保四亥十二月病死跡目無相違被下直に親之名に改候趣に相見へ候　大草久右衛門

午一高三百石　寛永十六卯五月病死跡目無相違同苗與一左衛門に被下直に親之名に改候趣に相見候　落合勘左衛門

申一高三百石　承應三午五月病死跡目無相違同苗傳之丞に被下　大須賀五六左衛門

一高三百石二合　正保二酉正月病死跡目二百石養子に被下さ有直に親の名に相改候趣に相見申候　小笠原彦左衛門

一高三百石　正保二酉年彌三左衛門さ改万治元戌十月病死跡目無相違忰清九郎に被下　小幡源十郎

午一高三百石　承應元辰三月病死跡目無相違總領與三右衛門へ被下親之名に直に改候趣に相見候
親與三右衛門病死の節は安齋さ名改候趣相見候　小笠原與三右衛門

一高三百石　寛永二十未年より十郎兵衛さ改慶安三寅年千石に成る、寛文五巳三月知行上る、御扶
持方米三百俵被下同年より百二拾石へ丶御切米帳へ出る、寛文七未年より御切米百
二拾石無相違同苗友右衛門へ被下十郎兵衛儀は心静に養生可仕旨過去帳に有之候　落合左門

申一高貳百五拾石　寛文九酉十一月願之通隱居被　仰付知行無相違總領伊右衛門へ被下　小笠原彌太郎

一高貳百五拾石　寛永十七辰年五百石に成る、慶安二丑より六百石に成る、明暦二申年八百石に成る
寛文七未二月病死跡目五百石忰又右衛門に被下又右衛門御切米は上る　小栗主税

申一高貳百石　寛永二十未年傳次郎さ改正保四亥年茂助さ改延寶六午十月病死跡目百五拾石同苗
八助に被下　小笠原杢

一高貳百石　寛永十八巳六月喧嘩に付知行上る　小笠原甚六

午一高貳百石　正保二酉年より山本さ苗字替に付終身の處やの假名へ出す　小浦喜平次

一高貳百石　承應元辰三月病死跡目無相違忰牛九郎に被下　岡村嘉兵衛

一高貳百石　慶安三寅七月病死跡目無相違牛三郎に被下　小笠原與兵衛

申一高貳百石　寛永十七辰年三百石に成る、正保三戌年五百石に成る、慶安三寅より七百石に成る
寛文七未七月隱居被　仰付同年より知行無相違忰孫太郎へ被下　大高源右衛門

午一高貳百石　正保三酉年次部右衛門さ改、元祿十一寅年知行貳百石の內百五拾石忰庄兵衛へ被
下殘る五拾石次部右衛門に被下同年万休さ改元祿十三辰四月病死　岡見庄兵衛

一高貳百石　慶安四卯年親彌左衛門知行五百石無相違新助へ被下　小栗新助

一高貳百石　正保三戌四月病死跡目無相違小平次に被下　大屋次左衛門

一高貳百石　万治二亥六月病死跡目不分　小笠原九郎右衛門

一高貳百石　寛文十一亥年三百石に成る、貞享元子年五百石に成る、同二丑年五月病死、跡目由比半左衛門次男六右衛門へ地方二百石被下三百石は上る　岡田次郎左衛門

申 一高百五拾石　万治二亥十一月病死跡目無相違悴勘三郎に被下　大屋七兵衛

一高百五拾石　寛文十一亥七月病氣に付願之通知行差上御扶持方拾人扶持被下候延寶四辰迄御扶持相渡り同五より渡りなし、死失不知　大塚次太夫

申 一高三百石　承應元辰年病死跡目同苗金次郎に無相違被下候趣に相見候　小島次郎右衛門

一高百　石　寛永十五寅年親九郎兵衛跡目知行貳百石無相違被下長三郎取來の知行百石は上る　小崎長三郎

一高貳百石　正保二酉年市左衛門と名替有之元祿二巳七月願に依て知行差上貳拾人扶持被下同十三辰九月病死跡目不分　小崎長三郎

●わ

申 一高六千石　内三千石寛永十一戌年御加増　正保二酉年若狹守と改、承應年中亂册に付不相分、明暦元未年八千石に成る、寛文八申八月病死、跡目無相違一學に被下同人知行は上る　渡邊一學

申 一高八百石　延寶三卯五月隱居被　仰付知行八百石無相違同苗伊右衛門に被下、伊右衛門御切米六拾石六郎左衛門へ被下同年道玄と改、天和元酉七月道玄病死　渡邊六郎左衛門

午 一高三百石　慶安元子年四百石に成る、元祿四未年五百石に成る、同八亥年彦太夫と改、同十一寅年八百石に成る、正德元卯年隱居被　仰付知行八百石之内六百石同苗久之丞へ被下殘る貳百石彦太夫に被下月舟と名改、正德二辰六月病死　渡邊彦右衛門

午 一高貳百石　寛文十二子年小七と改、元祿元辰五月病死、跡目曾右衛門へ御切米八拾石被下曾右衛門御切米は上る　渡邊七左衛門

申 一高五百石壹合　寛文四辰年無相違同苗彌四郎に被下彌四郎御切米貳拾五石右衛門四郎に被下友無と改延寶三卯閏四月病死　若尾右衛門四郎

申 一高貳百石　正保元申八月病死跡目貳拾人扶持子に被下有之候得共名前不知　若林兵彌

●か

午 一高貳千三百石　寛永二十未年藤左衛門と改正保二酉七月病死跡目無相違宇右衛門に被下　薩山土佐

申 一高貳千石　寛永十九午年五郎左衛門と改、寛文七未七月隱居被　仰付同年より知行無相違平次右衛門に被下、平次右衛門御切米貳百石五郎左衛門に被下、同年快遊と改貞享元子十月病死　加納數馬

申 一高貳千石六合　寛永十六卯十二月病死跡目無相違同苗勘左衛門に被下　川合形部

申 一高千石　寛永二十未正月病死、此比主水と名改候趣に相見候跡目三百石弟門左衛門に被下、貳百石弟一郎兵衛へ被下殘る五百石は上る　川北長左衛門

午 一高七百石　寛永十八巳三月病死跡目左近に無相違被下左近知行は上る御切米八拾石左近子に被下候得共名前不分　糟谷助兵衛

申 一高七百石　正保元申九月病死、跡目兄弟に被下候と記有同二酉年は其儘七百石渡る、同三戌年より四百石同苗四郎左衛門貳百石同苗平十郎百石同苗右近に被下　覚四郎左衛門

一高六百石壹升六合　慶安二丑年次右衛門と改、明暦元未八月病死跡目同苗茂右衛門に四百石被下貳百石彥左衛門に被下兩人知行御切米は上る　川村内匠

午 一高六百石　慶安三寅四月病死跡目無相違被下直に親之名に改候趣に相見へ候　神谷九左衛門

午 一高五百五拾石　正保三戌年隱居被　仰付知行無相違同苗十郎兵衛に被下十郎兵衛御切米五拾石は一郎兵衛に被下道格と改候趣に相見候同年暮御切米より上る病死と相見へ候　垣屋一郎兵衛

申 一高五百石　寛永十五寅十一月病死跡目無相違彌兵衛に被下彌兵衛御切米は上る　加藤大隅

一高三百石　延寶二寅九月病死同年物成同苗太郎九郎へ被下同三卯年より跡目拾五人扶持被下　片桐權右衛門

申 一高三百石　寛永十七辰八月病死跡目不分　葛西三郎右衛門

午 一高三百石壹斗　寛永十五寅五月病死跡目貳百石同苗左近に被下左近御切米は上る　薩山右馬助

午 一高貳百五拾石　慶安元子六月病死跡目御切米八拾石總領久兵衛へ被下　加藤吉兵衛

午 一高貳百石壹合　正保二酉年德左衛門と改万治三子十一月御改易　桂田次太夫

一（申）高貳百石　慶安三寅正月病死跡目無相違同苗又左衛門に被下　河上兵太夫

一　高貳百石　慶安四卯年迄知行相渡り有之候處承應年中知行帳亂册致し難相分候得共明暦元未年より川北又吉と申名前へ知行二百石相渡り有之候右は三郎太夫二代と相見へ候へは承應年中三郎太夫病死等にて跡目無相違被下候趣に相見候　河北三郎太夫

一（申）高貳百拾石　元祿元辰十月病氣にて十年余御番勤不申候に付御定之通知行差上可申候御扶持拾人扶持被下同二巳正月病死跡目同苗傳次郎へ七人扶持被下　片桐次郎左衛門

一　高貳百石　寛永二十未年十郎兵衛と改慶安四卯八月御改易　加納主殿

一　高貳百石壹合　寛文五巳年病死跡目無相違養子藤五郎に被下　神谷與次右衛門

一　高貳百石　寛永二十未年文五左衛門と改明暦元未三月病死跡目不分　樫原五郎左衛門

一　高貳百石　寛永十八巳年より渡りなし成行不知　加納兵右衛門

一　高百　石　延寶五巳年二百石に成る、天和三亥閏五月病死、跡目同苗丹七へ知行百五拾石被下　河合助九郎

一（申）高貳百石　慶安元子十一月病死跡目子猪右衛門に被下　海福武兵衛

●よ

一　高貳百五拾石　寛永十八巳年三百五拾石に成る、万治三子年五百石に成る、寛文十戌三月病死跡目同苗佐太平に無相違被下佐太平御切米は上る　吉見喜左衛門

●た

一　高貳千壹石三斗九升六合　承應元辰年二千五百石に成る、寛文四辰正月隱居被　仰付知行無相違同苗角十郎に被下、角十郎御切米八拾石源左衛門に被下同年了念と改延寶六午五月病死　伊達源左衛門

一　高千八石六斗四升六合　承應元辰三月病死跡目無相違總領角太夫に被下　竹本丹後

一（午）高八百壹石四斗　正保二酉年病死跡目同苗掃部へ八百石被下掃部知行二百五拾石は上る　田宮常圓

一　高五百石　寛永二十未年茂兵衛と改万治二亥年隱居被　仰付知行無相違同苗次郎左衛門に被下次郎左衛門御切米は上る同年六月病死　竹本次郎左衛門

申
一高四百五拾石　万治元戌年兵太夫と改寛文二寅年五兵衞と改延寶四辰八月病死跡目不分　竹本五兵衞

一高四百石　寛永十七辰二月病死跡目不分　高橋宇右衞門

一高四百石　寛永十四丑年病死跡目同苗八兵衞に二百石被下　宅間監物

一高四百石　正保二酉年五左衞門と改天和元酉十二月隱居被　仰付知行無相違同苗善七に被下　高井善七

申
一高三百石　寛文十一亥年常庵と名改候趣に相見候同年知行無相違同苗慶安に被下常庵は隱居と相見へ申候　竹田慶安

一高三百石　寛永二十未年八郎兵衞と改、寛文十一亥九月病死、跡目同苗彦八郎に二百石被下德兵衞に百石被下兩人共御切米は上る　高田喜八郎

申
一高三百石　正保二酉九月病死跡目同苗彌三右衞門へ二百石被下彌三右衞門御切米は上る　玉野井與兵衞

一高三百石　寛文元丑五月病死跡目長左衞門へ無相違被下長左衞門御切米は上る　田代庄九郎

一高貳百石　寛永十八巳五月病死跡目同苗市左衞門に無相違被下市左衞門御切米は上る　高岡彌五右衞門

午
一高貳百五拾石壹合　正保元申正月病死跡目同苗甚七に二拾人扶持被下　伊達七郎右衞門

一高貳百石　承應元辰十月病死跡目不分　爲井六之丞

●そ

申
一高千五百石　承應二巳八月病死跡目同苗兵十郎に五百石小十郎に二百石六兵衞に二拾人扶持被下　薗田猪兵衞

申
一高千百石　寛永十七辰九月病死跡目無相違忰へ被下直に親之名に改候趣に相見へ候　曾根孫太夫

一高百五拾石　寛永二十未正月病死跡目同苗三太郎へ御切米六拾石被下　曾根久右衞門

●つ

一高千三拾石　慶安二丑十二月御暇被下　柘植三十郎

申 一高八百石七合 寛永十五寅八月病死跡目同苗藤十郎へ五百石被下 都筑久太夫

午 一高五百石 寛永十五寅年嘉左衛門さ改、寛文十一亥九月隱居被 仰付知行無相違同苗助九郎に被下助九郎御切米は上る 妻木外記

一高三百石壹斗 慶安二丑年六百石に成る、明暦三酉十二月知行上る、品不分 都筑瀬兵衛

●ね

午 一高三百石 明暦三酉正月病死跡目不分 根來普門院

申 一高三百石 寛永二十未八月病死跡目御切米六拾石子に被下さ有之候名前不分 根岸次郎兵衛

●な

一高七百石 寛永十九午年滿左衛門さ改、寛文五巳正月病死、跡目總領次郎太夫に五百石二男半左衛門に二百石被下 内藤藏人

申 一高六百五拾石 寛永二十未年御改易、正保三戌年被 召歸哉同年より六百五拾石渡り、万治元戌年猪左衛門さ改、同五巳年新兵衛さ改、同八申年八百石に成る、延寶元丑十月病死、跡目同苗幡左衛門に六百五拾石被下幡左衛門御切米上る 中野新兵衛

午 一高六百石 寛永十七辰七月病死跡目同苗喜藏へ四百石八左衛門へ貳百石被下 内藤甚五左衛門

申 一高五百石 正保二酉年太郎兵衛さ改、慶安二丑年七百石に成る、同年十二月病死跡目五百石同苗山三郎に被下 中井山三郎

申 一高五百石四斗 寛文元丑閏八月病死跡目同苗五郎八に無相違被下 長坂小右衛門

申 一高五百石 寛永十七辰十一月御暇被下 中村新左衛門

申 一高五百石 慶安元子年知行上り三拾人扶持被下、明暦元未年言入さ改、寛文十二子年より御扶持方不渡死失不知 内藤權之助

申 一高五百石六合 寛永十六卯六月病死跡目無相違悴へ被下直に親の名に改候趣に相見へ候 長野九左衛門

午 一高四百石 寛永十七辰年六百石に成る、延寶五巳年八百石に成る、同八申二月隱居被 仰付知行六百石同苗勘之丞に被下二百石は勘兵衛へ被下天和三亥年勘休さ改元祿元辰十一月病死 中嶋勘兵衛

一高三百石　寛文十戌年志賀右衛門と改候趣に相見へ候同年病死跡目同苗半八に相違無被下半八御切米は上る　内藤五左衛門

一高三百石　寛永二十未年藤吉と改、寛文元丑八月病死跡目不分　中村讃岐

一高三百石　寛文元丑十月病死跡目不分　中村儀左衛門

一高貳百五拾石　正保四亥七月病死跡目同苗六之助に二百石被下　名取彌次左衛門

一高貳百五拾石　万治三子年三百石に成る、寛文二寅二月斬罪　中村惣兵衛

申
一高貳百三拾石　寛永十四丑年安兵衛と改候趣に相見へ候同年病死跡目不分　波切金左衛門

午
一高貳百石　寛永十五寅六月病死跡目子に御切米八拾石被下子之名難相分候　中嶋傳右衛門

午
一高貳百石七斗八升五合　万治元戌年三百石に成、延寶元丑五月隱居被　仰付知行二百石同苗太左衛門に被下百石は兵四郎に被下太左衛門御切米は上る同年八月病死　内藤兵四郎

申
一高貳百石　正保二酉年平次右衛門と改慶安四卯八月御改易　中野次郎右衛門

一高貳百石　寛永十九午年儀兵衛と改、天和二戌二月知行の内百五拾石同苗李之助に被下、儀兵衛には拾人扶持被下李之助御切米は上る、同年快雲と改、元祿四未年迄御扶持方渡り以來不相渡死失不知　長坂儀右衛門

午
一高貳百石　寛永十六卯年三百石に成る、慶安三寅七月病死、跡目同苗理兵衛に二百石被下取來之御切米四拾石共に被下　中村四郎左衛門

午
一高貳百石　寛永十八巳年猪左衛門と改、寛文四辰十二月病氣に付隱居被　仰付知行無相違總領市衛門に被下　夏目三十郎

一高百三拾六石九斗六升　寛永十八巳年二百石に成る、同十九午八月病死跡目無相違同苗新平に被下　中村織部

●む

申
一高千石　正保元申十二月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　村松郷右衛門

一高九百石　寛文元丑十二月病死跡目不分　武藤小十郎

一 高五百石 村上才藏
寛永十六卯年より知行不渡死失不知

申 一 高三百五拾石 村松郷八
正保四亥年五百石に成る、明暦二申閏四月病死跡目同苗八太夫に三百五拾石被下

午 一 高三百石 村島清兵衛
正保二酉九月病死跡目同苗右衛門八に二百石被下右衛門八御切米は上る

申 一 高貳百石 村井久右衛門
寛永十八巳六月病死 跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見へ候

一 高貳百石 向笠作之右衛門
寛永十四丑年病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見へ候

●う

申 一 高千百五拾石 海野兵左衛門
寛永十九午五月病死、跡目同苗孫四郎に無相違被下

申 一 高四百石 海野五郎三郎
寛永十八巳年縫殿右衛門と改、正保元申三月病死、跡目總領へ二百五拾石被下直に親之名に改候趣に相見へ百五拾石次男五郎三郎に被下

申 一 高四百石 上野三郎右衛門
万治二亥三月隠居被 仰付知行無相違同苗四左衛門に被下四左衛門御切米は上る同年常見と改、寛文四辰閏五月病死

一 高三百石 海野小兵衛
正保二酉年より知行不渡死失不知

申 一 高三百石 海野平三郎
寛永十七辰年治部左衛門と改、慶安四卯八月病死、跡目養子兵九郎に無相違被下

一 高四百石 浦上與三右衛門
寛文十二子八月病死跡目同苗源兵衛に三百石被下源兵衛御切米は上る

一 高貳百石 上野新五左衛門
慶安三寅正月病死跡目同苗源之丞に無相違被下

●の

午 一 高七百三拾七石三斗四升四合 野尻杢之助
万治二亥正月病死跡目同苗平内に五百石被下次男庄太夫に御切米二拾五石被下三男勘十郎に御切米二十石被下

一 高六百石 野間久左衛門
寛永二十未年病死跡目同苗宇右衛門に三百石被下宇右衛門御切米は上る

午 一 高五百石 野中六右衛門
元祿三午年病死跡目同苗次郎右衛門に三百石被下

一高五百石　寛文十戌年隱居被　仰付知行無相違同苗孫惣に被下　野々山七左衛門

一（申）高貳百石　元祿元辰二月隱居被　仰付知行の內百五拾石同苗與五右衛門に被下五拾石は與五左衛門に被下同年六月病死　野間與五左衛門

●く

一高四百五拾石　万治元戌年長右衛門と改、寛文元丑十一月病死、跡目同苗武兵衛に無相違被下　久米武兵衛

一高四百石壹合　正保二酉年甚左衛門と改、承應元辰八月病死跡目同苗伊太郎に三拾人扶持被下　畔柳庄三郎

一（午）高四百石　延寶八申十一月病死跡目同苗大助へ無相違被下　桑原權左衛門

一高三百石　寛永十九午六月病死跡目貳百石同苗三右衛門に被下百石は太左衛門に被下三右衛門御切米は上る　久野平太夫

一高三百石壹合　寛永十六卯年六百石壹合に成、万治元戌年隱居と相見跡目同苗一郎右衛門に三百石淸右衛門へ貳百石平左衛門へ百石被下　久世三右衛門

一高貳百五拾石　慶安四卯八月病死跡目無相違源五兵衛に被下同人取來の知行の內五拾石御加增被下都合三百石被下　久野武右衛門

一（午）高貳百石　寛文二寅年喜七と改、元祿元辰正月知行の內百五拾石同苗左右之助に被下五拾石は喜七に被下同二巳年離念と改、享保元申十一月病死　桑島六兵衛

●や

一（申）高二千石　万治元戌年知行無相違同苗十郎右衛門へ被下十郎右衛門知行六百石圖書に被下同二亥四月病死　山本圖書

一（午）高千　石　寛永十八巳年八左衛門と改、　寛文七未七月隱居被　仰付知行無相違同苗庄右衛門に被下　山名庄藏

一（午）高八百石　正保四亥六月病死跡目同苗九右衛門に五百石次男彥右衛門に三百石被下　山本十太夫

一（申）高七百石　正保三戌年病死と相見へ跡目同苗彥左衛門に五百石被下長右衛門に貳百石被下候趣に相見へ候　山田八右衛門

一（申）高六百石　天和三亥四月同苗岩之助に拾五人扶持被下　山下茂兵衛

一高四百石　正保二酉年角兵衛と名替有之、万治二亥年庄左衛門と改、元祿十二卯九月隠居被仰付知行貳百五拾石同苗勘右衛門に被下百五拾石庄左衛門に被下勘右衛門御切米は上る、同十六未年快休と改、同年七月病死　山本庄左衛門

一高四百石　正保元申六月病死跡目總領へ三百石被下直に親之名に改候趣に相見へ申候　山田金太夫

一（午）高三百五拾石　寛永二十未年庄太夫と改延寶元丑五月病死跡目不分　山下主米

一（申）高三百五拾石　寛永十七辰九月御改易　八木勘左衛門

一（午）高三百石　寛文八申三月隠居被　仰付知行無相違同苗四郎左衛門に被下四郎左衛門御切米七拾石は小野木長十郎に被下長十郎御切米は上る　山林專之丞

一（申）高貳百石　慶安元子九月病死跡目同苗六左衛門に御切米八拾石次男次郎太夫に貳拾石被下　山本半右衛門

一（申）高貳百石　承應二巳年三百石に成る、明暦元未年六右衛門と改、同三酉二月病死跡目同苗吉左衛門に無相違被下　山本長五郎

一高貳百石　慶安二丑十一月病死跡目同苗半之助に拾人扶持被下　山中與五右衛門

一（申）高三百石　慶安四卯六月病死跡目同苗一郎左衛門に貳百石次男長十郎に百石被下　安井五左衛門

一高三拾壹石五斗四升壹合　貞享三寅八月病死跡目同苗谷之助に無相違被下　山崎權太夫
是より已前ゟの仮名に有小浦事

一高貳百石　正保二酉年山本と苗字改、慶安四卯年三百石に成る、明暦元未年藤四郎と改、寛文二寅五月隠居被　仰付知行無相違同苗喜平次に被下喜平次御切米貳拾五石は藤四郎に被下同年遊仙と改、同四辰十一月病死　山本喜平次

一高貳百石　正保二酉三月病死跡目不分　山口友之助

●ま

一（申）高千五百石　寛文十一亥十月病死跡目同苗善吉に百人扶持被下　松平三郎兵衛

一（午）高千　石　寛永十五寅年惣兵衛と改、正保二酉正月病死、跡目總領へ五百石被下直に親之名に改候趣に相見へ候　松平久彌

一（申）高七百石　寛文五巳六月御改易　松下勘兵衛

一　高七百石　承應三午年千石に成る、同年五郎右衛門と改、寛文十一亥年千五百石に成る、延寶四辰七月病死跡目同苗郷右衛門へ無相違被下　正木左兵衛

一（午）高五百石　万治三子十月隱居被　仰付知行無相違同苗左近右衛門に被下、左近右衛門御切米は上る　牧野次郎兵衛

一　高四百壹石三升九合　寛永二十未年金右衛門と改、寛文七未七月隱居被　仰付知行無相違同苗金兵衛に被下金兵衛御切米三拾石は金右衛門に被下同九酉七月病死　松平與八郎

一（午）高三百石　寛永二十未年五郎兵衛と改、慶安元子七月御改易、明暦二申年歸參被　仰付高三百石被下、寛文三卯年三郎太夫と改、同七未十月隱居被　仰付知行無相違同苗武兵衛に被下武兵衛御切米は上る　松　平　内　記

一（午）高三百石　寛永十五寅十一月病死跡目同苗熊之助に五人扶持被下　牧　平兵衛

一　高三百石　寛永二十未年五月病死跡目總領源太郎に無相違被下源太郎取來の御切米の内八拾石次男平五郎へ被下　牧　勘右衛門

一　高三百石　延寶七未十二月隱居被　仰付知行無相違同苗與五太夫に被下與五太夫御切米貳拾五石は上る　松下彦十郎

一（午）高三百石　寛永十七辰三月病死跡目不分　松山彦太夫

一（申）高三百石　寛永十七辰九月病死跡目無相違同苗藤内に被下　松野助左衛門

一（申）高三百石　寛文四辰八月病死跡目同苗大學に無相違被下大學知行は上る　松野惣太郎

一　高貳百五拾石　正保三戌年苗字牧野と改、慶安四卯年三百五拾石に成る、寛文十一亥年依賴法體知行無相違同苗森右衛門に被下　牧　彌三右衛門

一（午）高貳百五拾貳石七斗八升五合　寛永十五寅六月病死跡目同苗孫太夫に貳百石被下　牧村源兵衛

一（午）高貳百石　正保二酉年より知行不渡死失不知　松原茂兵衛

一　高貳百石　慶安三寅八月病死跡目同苗半六に百五拾石被下　松下太郎助

一（申）高百五拾石　寛永二十未年助左衛門と改、万治二亥十一月病死、跡目同苗牛十郎に無相違被下牛十郎御切米は上る　間宮助四郎

一高三百石　寛永十八巳四月病死跡目同苗彦左衛門に貳百石被下　松田彦右衛門

●ふ

一（申）高千　石　万治元戌十二月隠居被　仰付知行無相違野村角右衛門に被下福岡太郎八と改角右衛門知行は上る　福岡太郎八

一（申）高千　石　慶安元子年千五百石に成る、万治三酉千八百石に成る、寛文七未七月隠居被　仰付知行無相違同苗善五郎に被下善五郎御切米八拾石は佐五右衛門に被下同八申年三祝と改元祿三午正月病死　布施佐五右衛門

本文佐五右衛門〇元和六申年より寛永九申年迄知行五百石寛永十酉年五百石御加増と相見へ千石に成る右追て御勘定所承合記置

一（申）高三百石　万治三子十月病死跡目不分　深尾源七

一高百五拾石　寛文七未年貳百五拾石に成る、延寶三卯七月隠居被　仰付知行無相違同苗彌三右衛門に被下　古川十藏

一高百五拾石　慶安四卯十月病死跡目不分　深津權兵衛

●こ

一高千石三合　寛文十一亥六月隠居被　仰付知行千石無相違同苗利兵衛に被下利兵衛御切米は上る　近藤平右衛門

一（午）高千石六斗九升八合　承應二巳正月病死跡目同苗甚太郎に五百石被下甚太郎知行は上る　後藤彌次兵衛

一（午）高五百石　寛永十六卯十二月死病跡目同苗左内に三百石被下左内御切米は上る　郡安右衛門

一（午）高五百石　寛永十六卯十一月病死跡目總領へ無相違被下直に親の名に改候趣に相見候　小倉惣兵衛

一（申）高三百石　寛永元子年四百石に成、同七午七月隠居被　仰付知行三百五拾石同苗和助に被下五拾石は角兵衛に被下同年自空と改同年八月病死　後藤角兵衛

一高三百石　寛文三卯六月病死跡目同苗七十郎に貳百石被下　近藤瀬兵衛

一高貳百石　寛文元丑正月御改易　小山惣太夫

申 一高貳百石　慶安二丑八月病死跡目同苗吉郎右衛門に御切米八拾石被下　小林善左衛門

申 一高貳百石　延寶三卯四月病死跡目同苗只八に御切米八拾石被下　幸田金右衛門

一高貳百石　正保三戌年三百石に成、明曆三酉十月病死、跡目同苗八兵衛へ無相違被下八兵衛御切米は上る　小泉長兵衛

午 一高貳百石　寛永十七辰六月病死跡目同苗七郎左衛門に御切米八拾石被下　權田小右衛門

午 一高貳百石　寛永十五寅年久左衛門と改、同年七月病死跡目同苗庄左衛門へ百石被下候趣相見候　小谷作内

一高貳百石　寛永十七辰年三百石に成る、寛文三卯三月御暇被下　兒玉長兵衛

●え

申 一高千五百石壹合　寛文元丑十一月病死跡目同苗右衛門八に千石權之右衛門に五百石被下權之右衛門取來の知行三百石長次郎に被下　江馬與右衛門

一拾八石四斗　正保元申年病死跡目無相違悴へ被下直に親之名に改候趣に相見候　衣奈佐兵衛

●て

申 一高百七石四斗　寛永十六卯年貳百石に成、同二十未八月病死、跡目無相違同苗新兵衛に被下　寺嶋六郎右衛門

申 一高貳百石　天和三亥八月知行被　召上水野土佐守へ被成御預成行不知　寺島甚助

●あ

申 一高三千石　万治元戌五月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　朝比奈惣左衛門

申 一高千八百石　寛永二十未年自樂と改候趣に相見へ候同年五月病死跡目無相違同苗源五郎に被下　渥美源五郎

申 一高千八百五拾石 寛永十四丑年病死跡目同苗權太郎に御切米百石被下 芦川權太夫

申 一高千五百五拾石 万治三子年千六百五十七石七斗三升に成ろ、元祿七戌年分知被 仰付知行千石同苗太郎右衛門に被下六百五拾七石七斗三升忠兵衛に被下同十二卯八月病死 安藤忠兵衛

申 一高千五百石壹升貳合 寛永十八巳二月病死跡目同苗六郎右衛門に無相違被下六郎右衛門知行三百石は弟に被下直に太郎兵衛さ改候趣に相見候 渥美太郎兵衛

申 一高千五百石 寛文十一亥五月隱居被 仰付知行無相違同苗甚五左衛門に被下 芦川甚五兵衛

申 一高千 石 寛永十五寅年孫三さ改、万治二亥年孫惣さ改、延寶八酉七月病死跡目同苗孫十郎に無相違被下新右衛門總領さ相見へ新右衛門寛永十四病死 天野將監

申 一高千 石 寛永十五寅年辰之助さ改正保元申十月病死跡目不分 天野長吉

申 一高七百石 承應元辰九月病死跡目無相違同苗三之丞に被下 朝倉勘解由

申 一高七百石 延寶五巳六月隱居被 仰付知行五百石同苗縫殿右衛門に被下貳百石は甚太郎に被下同七未十二月病死 荒川甚太郎

午 一高六百石 寛永二十未四月病死跡目養子六左衛門に貳百石被下 天野兵庫

午 一高五百五拾石 寛永十六卯四月病死跡目不分 淺井源太夫

午 一高五百石 寛文二寅年傳八さ名前替有之、同四辰年四郎三郎さ改、元祿二巳五月隱居被 仰付知行の內三百石總領杢之助へ被下二百石次男傳次郎に被下 天方四郎三郎

申 一高四百五拾石 寛永十五寅十一月病死跡目同苗內藏助へ無相違被下內藏助御切米上る 朝岡助太夫

申 一高四百石 寛永十六卯六月病死同十八巳年御切米八拾石朝倉新十郎さ出有之右之跡目さ相見候 朝倉新十郎

申 一高四百石 正保二酉十一月病死跡目總領又十郎に貳百五拾石次男宇太夫に百五拾石被下 芦澤郷左衛門

一高四百石 正保二酉十一月病死跡目同苗勘太夫に貳百五拾石八郎左衛門に百五拾石被下 天野孫七郎

申一高三百石壹升四合　寛永二十未年甚五右衛門と改、正保三戌年知行上り貳拾人扶持に成る、慶安二丑年知行三百石に成る、寛文五巳年四百石に成、延寶八申年六百石に成る、同年霜月病死跡目無相違同苗甚五郎に被下　渥美左源太

申一高三百石　承應元辰六月病死跡目貳百石同苗仁左衛門に被下　淺井九左衛門

午一高三百石　寛永十五寅年病死跡目同苗孫右衛門に無相違被下孫右衛門御切米は上る　荒木十右衛門

一高三百石　寛永十八巳年親太郎兵衛跡目千五百石無相違被下六郎右衛門知行三百石は弟へ被下直に太郎兵衛と改候趣に相見候　渥美六郎右衛門

一高三百石　正保三戌年源太夫と改承應二巳七月病死跡目不分　荒川勘十郎

申一高貳百五拾石　寛永二十未年源太左衛門と改、寛文七未年五百石に成、同年八月病死跡目同苗源内に貳百五拾石被下　渥美源十郎

一高貳百五拾石　寛文八申十一月病死跡目同苗惣右衛門に無相違被下惣右衛門御切米は上る　阿曾沼喜左衛門

午一高貳百石　寛永十六卯六月病死跡目無相違總領に被下直に親之名に改候趣に相見候　靑見藤右衛門

午一高貳百石　正保二酉年より知行不渡成行不知　天野德十郎

午一高貳百石　寛文二寅八月病死跡目總領に拾人扶持被下直に親之名に改候趣に相見候　朝比奈又左衛門

申一高貳百石　寛文七未七月隱居被　仰付知行無相違同苗彥八郎に被下彥八郎御切米八拾石豐前に被下同年常閑と改同十二子十二月病死　有馬豐前

一高貳百石　慶安四卯年利右衛門と改、貞享三寅十二月病死、同苗五郎兵衛に貳百石無相違被下幷利右衛門取來の御足米共御加增にて都合三百石跡目として被下、五郎兵衛御切米は上る　粟生角右衛門

申一高四百石四斗七升　正保三戌年六百石に成る、寛文二寅五月隱居被　仰付平兵衛孫左源太に知行無相違被下、左源太御切米三拾石は平兵衛に被下同年自證と改同十一亥九月病死、但平兵衛總領七左衛門万治三子十月病死跡目御切米三拾石悴左源太に被下之有候事　芦澤平兵衛

申一高七百石　万治二亥正月隱居被　仰付知行無相違同苗藤太夫に被下同人取來之御切米は上る　朝倉六兵衛

●さ

一高六百石　延寶五巳十二月病死跡目同苗勘三郎に三百石被下　佐久間勘右衛門

一[申]高六百石　寛永二十未十一月病死跡目不分　笹本庄右衛門

一[申]高五百石七合　正保元申八月病死跡目三百石德井長吉に被下拾人扶持實子に被下長吉御切米は上る實子名前不分　佐野新藏

一高五百石　正保元申十二月病死跡目同苗九十郎に貳百石被下八十郎に御切米八拾石被下九十郎御切米は上る　佐野一郎左衛門

一高五百石　寛永十五寅より知行不渡成行不知　佐野孫左衛門

一高五百石　正保元申六月立退　坂部權右衛門

一[申]高三百五拾石　寛永十五寅傳兵衛と改慶安三寅三月病死跡目無相違同苗傳之丞に被下　佐野三次

一[午]高三百石　正保二酉十一月病死跡目同苗三十郎に貳百五拾石被下　佐々七兵衛

一[午]高三百石　慶安二丑年四百石に成る、万治元戌八月病死、跡目無相違同苗源助に被下　坂口作兵衛

一[申]高貳百石壹斗四升六合　寛永十五寅九月走る　佐野助十郎

一[申]高貳百石　元祿七戌年三百石に成る、同十六未二月病死、跡目同苗金五兵衛へ知行貳百石被下　佐藤太郎兵衛

一高百五拾石　寛永十四丑年病死跡目同苗孫三郎に御切米六拾石被下候趣に相見候　佐野孫兵衛

一[申]高五百石貳合　明暦三酉年八百石に成る、延寶六午九月病死跡目同苗七之右衛門に五百石被下　三田五郎兵衛

●き

一[申]高八百石　寛永二十未年次左衛門と改、正保二酉八月病死、跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　木下主馬

一[申]高貳百五拾石　寛文七未八月病死跡目同苗又兵衛に拾五人扶持被下　木村又右衛門

一高貳百五拾石　正保四亥四月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　木村彦左衛門

午
一高貳百石壹合　正保三戌八月病死跡目無相違同苗八郎次郎に被下八郎次郎御切米は上る　木村八郎太夫

●ゆ

申
一高四百石四合　万治三子十月隠居被　仰付知行無相違同苗一郎太夫に被下一郎太夫御切米貳拾五石は與五左衛門に被下同年道心と改、寛文十戌正月病死　油井與五左衛門

午
一高貳百五拾石　承應三午九月病死跡目同苗十次郎に拾五人扶持被下　油井庄左衛門

午
一高貳百石　寛永十七辰八月病死跡目無相違同苗牛三郎に被下牛三郎御切米四拾石は弟庄次郎に被下　油井十左衛門

申
一高貳百石　正保元申六月病死跡目不分　油井七左衛門

●み

申
一高貳千石　正保三戌年六千石に成る、承應三午六月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　水野平右衛門

申
一高千　石　寛永二十未より甚太夫に成、慶安二丑七月病死、跡目同苗主米へ無相違被下主米御切米四拾石を次男九郎左衛門に被下　三上兵三郎

午
一高千　石　寛文六午二月病死跡目無相違同苗勘三郎に被下　三浦勘助

午
一高千　石　寛永十五寅六月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名改候趣に相見候　水野喜兵衛

一高六百石九合　寛永十七辰七月病死跡目同苗平之丞に四百石被下傳七郎に貳百石被下　水野左膳

申
一高五百石　寛文十戌正月病死跡目無相違同苗七之助に被下　三浦權七

一高五百石　慶安三寅十一月病死跡目同苗平三郎に無相違被下平三郎知行は上る　水野小右衛門

一高五百石貳升　寛永二十未六月病死跡目不分　三浦庄兵衛

午
一高五百拾三石六斗九升　寛永十五寅年藤右衛門と改候趣に相見候同年七月病死跡目同苗藤助へ三百石被下藤助御切米は上る　水野藤助

午 一高四百石七斗三升六合　正保三戌年より知行不渡成行不知　水野勘右衛門

一高三百五拾石　寛永十六卯四月病死跡目總領へ三百石被下直に親之名に改候趣に相見候　三上又右衛門

一高三百石　延寳元丑十月御改易　三井孫左衛門

一高三百石八升九合　慶安三寅年知行上り貳拾人扶持被下万治二亥七月病死跡目不分　水野庄兵衛

一高三百石　万治三子年五百石に成る、寛文五巳三月病死、跡目同苗半太夫へ三百石被下　水巻佐次右衛門

一高貳百五拾壹石七斗　寛永十八巳九月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　宮地三郎太夫

午 一高貳百五拾石　慶安三寅四月病死跡目無相違同苗善左衛門に被下　宮崎仁左衛門

一高貳百石　正保元申年與兵衛と改同三戌八月走る　三宅市兵衛

一高貳百石　明暦元未年仁左衛門と改、延寳三卯五月病死、跡目無相違同苗彌左衛門に被下彌左衛門御切米上る　三宅友之助

申 一高貳百石　正保二酉九月病死跡目同苗助三郎に無相違被下助三郎御切米上る　三浦太兵衛

申 一高貳百壹石　慶安四卯六月病死跡目無相違同苗作左衛門に被下御切米貳拾石一郎左衛門に被下　三宅善兵衛

一高貳百石　承應年中作右衛門と改候趣相見候寛文五巳年文兵衛と改、同八申年作右衛門と改候趣相見候同年九月病死跡目無相違同苗文五兵衛に被下　三堀久右衛門

申 一高四百石　寛永十九午正月病死跡目同苗權之丞に無相違被下權之丞御切米は上る　南間主計

●し

午 一高貳千石　正保二酉九月病死跡目無相違同苗平八に被下　澁谷伯耆

申 一高千　石　寛永二十未年八右衛門と改、万治三子年隱居被　仰付知行無相違同苗頼母に被下、頼母御切米八拾石八右衛門に被下同年眞休と改、寛文六午八月病死　澁谷頼母

一午 高八百石四斗五升七合　正保元申正月病死跡目不分　志賀又左衛門

一申 高六百石　明暦元未年善兵衛と改、寛文元丑十月病死、跡目不分　茂野善右衛門

一午 高五百石　明暦三酉三月病死跡目不分　白幡由右衛門

一申 高五百石　正保二酉三月病死跡目同苗一郎左衛門に無相違被下　嶋崎五兵衛

一 高四百五拾石　寛永十六卯年三七と改候趣に相見候同年知行の内貳百五拾石同苗彌右衛門に被下貳百石三七に被下候趣に相見候同年十月病死　下條彌右衛門

一申 高四百石　寛永十七辰十月病死跡目不分　柴田四郎兵衛

一 高三百石　正保三戌年親伯耆跡目知行貳千石無相違被下平八知行は上る　澁谷平八

一午 高三百石　正保三戌四月病死跡目無相違同苗杢右衛門に被下杢右衛門御切米は上る　設樂四郎兵衛

一午 高三百石壹斗四升九合　慶安四卯七月病死跡目無相違同苗儀右衛門に被下儀右衛門知行は上る　下村三太夫

一申 高貳百五拾石　寛文七未正月病死跡目同苗半太夫に百五拾石被下　神野八郎兵衛

一午 高貳百石　正保三戌年八兵衛と改候趣に相見候万治二亥八月病死跡目同苗太郎左衛門に百五拾石被下　白井孫三郎

一 高貳百石　承應元辰年十二月病死跡目無相違同苗杢太夫に被下　柴田作左衛門

一 高貳百石　正保元申年儀右衛門と改承應元辰年親三太夫跡目知行三百石被下儀右衛門知行は上る　下村儀左衛門

●ひ

一午 高千石　慶安二丑五月病死跡目同苗五郎作へ無相違被下五郎作知行は上る　彦坂五郎左衛門

一 高五百石　延寶三卯六月隱居被　仰付知行無相違同苗文三郎に被下　彦坂惣右衛門

一申 高四百石壹合　寛文五巳十一月隱居被　仰付知行無相違同苗勘之丞に被下　平井六藏

申一　高四百石　慶安二丑七月病死跡目同苗助右衞門に三百石被下助右衞門御切米は同苗權左衞門に被下　平井次郎太夫

一　高貳百石　慶安子年病死跡目不分　彦坂六兵衞

午一　高貳百石　慶安二丑年親五郎左衞門跡目知行千石無相違被下五郎作知行は上る　彦坂五郎作

一　高貳百石　寛永十七辰十二月御改易　彦坂九右衞門

一　高百五拾石　寛文九酉年貳百五拾石に成る、天和二戌二月隱居被　仰付知行百五拾石同苗彌十郎に被下甚十郎には拾五人扶持被下同年夢入と改、貞享四卯四月病死　久田甚十郎

●も

申一　高八百石　寛永二十未二月病死跡目同苗源四郎に無相違被下　望月次左衞門

申一　高四百石　天和二戌五月病死跡目同苗千五郎に拾五人扶持被下　毛利太郎右衞門

午一　高三百石　寛永十五寅年病死跡目不分　望月太左衞門

午一　高貳百五拾石　慶安二丑年三百石に成る、寛文二寅正月病死、跡目同苗市郎左衞門へ無相違被下　森川九郎左衞門

●せ

午一　高五百石　正保三戌年又左衞門と改、寛文七未年八百石に成る、同十一亥十月隱居被　仰付知行無相違同苗惣次郎に被下惣次郎御切米上る　關根織部

申一　高二百石　寛永十九午年彌六左衞門と改、慶安三寅隱居被　仰付知行無相違同苗門三郎に被下門三郎御切米四拾石を彌六左衞門に被下候趣に相見候同年心得と改寛文二寅九月病死　關口靭負

一　高三百石　寛永二十未年七右衞門と改、貞享二丑八月隱居被　仰付知行の內貳百五拾石同苗織右衞門に被下殘る五拾石は七右衞門に被下同三寅年意足と改元祿二巳正月病死　關根惣次郎

申一　高三百石　寛永十六卯年金平と改、正保三戌七月病死跡目不分　關　金助

一　高百　石　正保元申年主膳と改、同二酉年彌五太夫と改、同四亥年貳百石に成る、慶安元子十月病死跡目不分　關　兵次郎

午 一高百五拾石　正保四亥四月病死跡目同苗道味に無相違被下道味御切米は上ろ　千賀道圓

午 一高貳百石　寛永十六卯七月病死跡目不分同十九午年千宗佐被召出有之候　苗字千と相見候　宗圓

●す

申 一高貳千石壹合　寛永十九午九月病死跡目同苗新九郎へ無相違被下　菅沼半兵衛

寛永十七辰年より御役料と相見へ現米四拾石つゝ年々相渡り正保四亥年上り有之候同二十未年九兵衛と改寛文五巳年千五百石に成ろ、延寶五巳四月隱居被　仰付知行無相違同苗喜右衛門に被下喜右衛門取來之御切米百貳拾石は九兵衛に被下同年五月病死

一高千百石　菅内宮内

申 一高六百五石貳升七合　寛永十五寅九月病死跡目不分　鈴木孫三郎

申 一高五百五拾石　慶安元子年隱居被　仰付知行無相違同苗半九郎に被下、半九郎御切米四拾石は四郎兵衛被下候趣相見候、承應元辰年百六拾石御加增都合御切米貳百石に成ろ、同二巳年病死と相見御切米貳百石無相違同苗源兵衛に被下候趣相見候　鈴木四郎兵衛

一高四百石　寛永十七辰五月病死跡目同苗左源太に貳百五拾石兵九郎に百五拾石被下　諏訪部甚左衛門

一高四百石　寛永十七辰九月御改易　鱸兵部

午 一高四百石　正保四亥二月病死跡目同苗藤太夫に三百石被下　鈴木忠左衛門

申 一高三百八拾石　貞享二丑九月隱居被　仰付知行三百石同苗瀬左衛門に被下八拾石彌五左衛門に被下同年道歸と改元祿二巳十月病死　杉浦彌五左衛門

午 一高三百石　元祿二巳七月病死跡目同苗彌次兵衛に貳百石被下　鈴木六兵衛

申 一高貳百五拾石　寛永十八巳九月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　鈴木左内

一高二百石　寛文元丑九月病死跡目同苗平九郎に百五拾石被下　鈴木小左衛門

一高百五拾石三斗貳升五合　延寶四辰二月隱居被　仰付知行無相違同苗源大左衛門に被下　末(一本高馬)一郎右衛門

午一高百五拾石　寛永十八巳三月病死跡目同苗六左衛門に無相違被下　鈴木權左衛門

申一高百五拾石　寛永十八巳五月病死跡目總領へ無相違被下直に親之名に改候趣に相見候　角岡仁左衛門

一高二百石　正保二酉年より知行不渡死失不知　杉原次郎太夫

一高百五拾石　万治三子年九郎左衛門と改延寶元丑十一月病死跡目七之助に御切米四拾石被下　鈴木九郎左衛門

南紀德川史卷之八十四

臣 堀内 信 編

祿制第四

祿制凡例

信案に御家中祿制は國初已來歷世或は變更ありしならん、然とも今之を詳にすることを得す、近世及び嘉永七寅年五月世祿發令迄は全く左の如きの成規たり、爾後慶應元年八月に至り世祿を被廢旧に復す

本高

本知本祿とも稱し、面々の持祿にして容易に增減することなく、罪過なき已上は任免黜涉にも容易に變動せす、其身一代賜るもの也、

右の如しと雖も隱居家督病死跡目の時は、成規之割合ありていつれも多少減祿するの法とす、

一若年にて病死又は嗣子なく病死遺跡相續或は不行跡乃至罪科等ある時は、本祿の半額乃至以下減祿又は全額沒收して扶持方米を賜るもあるなり、

一服職五十年已上の者隱居病死の時は、其勤功を以て家督無相違其儘繼續者へ賜るの制也、

御加增

五十年已上支障なく服職乃至特別勤勞ある者、又は特旨を以て本祿を增加し賜るものとす、

並高

御家老已下一般成規の役高を並高と稱す、職制の部御役順に記するもの是也、

一諸役就任の時其役高に不足の時は一時に賜り、又は數年間に漸次に賜るもありて、いつれも其在職中に止るの祿なり、或は轉職後其儘繼續賜るもあり、然る分は御足高其儘被下候事との辭令あるの制也、

御足し高

役高の並高及ひ並高に非さるも本祿の上へ足し賜るものを總して御足高と稱す、其身其職に止るもの故、轉職等の時其儘被下との辭令なき分は上る、又寛政四年十二月に左の極りあり、

御役高に御足高被下有之右同祿の御役儀に被　仰付候節御足其儘との儀無之共其儘被下候也

按に足高の制、御家に於ては享保以前既に其例多しと雖も、幕府にては　有德公御繼統後享保六年調査し給ひ、官職により其場所不相應の小祿なる者には特に在職中不足を供給し、其職を去れは又舊祿に復す、名つけて足高の制といふ、故に人材の進路を防くるの憂なくして俊秀の士一時輩出せりとあれは、蓋し御家の制に倣ひ給ひしなるへし、

知行

給地百石以上は知行目錄を賜り、免に依て其收納を直支配するを知行と稱す、知行百石は御切米四十石の割にして、稀には百石以下の知行もある也、

御切米

給地を直支配せす現米高を傳甫御藏拂立直段を以て御藏より受領するを御切米と云ふ、

禄扶持

扶持米若干人分を本禄に賜る也、醫師儒者畫師役者、或は新規被召出の筋、又は幼少にて相續乃至貶黜小普請入の者に多し

一勝手不如意負債嵩み難取續主意にて暫く禄扶持を願ふあり、是等は本禄内より扶持方を引き其余を借財へ割濟、追て家事整理の上御役被　仰付原禄に復する也、

江戸常府勢州上方詰又は役々により定規の扶持方を賜る分は禄扶持に非す、役料の類也、

分知分切米隱居料

父兄の禄を分割二三男弟等に賜り、新に家を起すを分知分切米といふ、又隱居に賜るをも同稱せしが後向後隱居料と唱へべしとの命あり、二三男等に分知別家を命せられしは　御初代の比多く、其後も有りしと雖も後世に至ては其例少し、

隱居料は隱居を命せらるゝ時取り來本禄の內若干を減し家督の者へ賜り、其殘高を分知隱居料に賜る、假令は本禄千石なれは八百石相續者へ賜はり、殘り二百石を隱居者へ賜る如し、嘉永七年世禄被　仰出までは皆此制なり、

又隱居の節總領被召出、既に有禄者たる時父の本高は無相違被命、總領取來りの禄を父の隱居料に賜るもあり、或は同斷之節父の本禄を減し家督被命、其減禄分を二三男等へ分知別家に被召出、總領取り來の禄を父へ隱居料として賜るもあり、然れ共近世は二三男にて別家に被召出は、藝術拔群等の他は其例を覺知せす、例規區々枚擧すへからす、唯大畧を示すのみ、

稽古料

射藝にて本堂總一をなす者は直に知行三百石、半堂總一は御切米六拾石に被召出と雖も、余は先つ稽古料を賜り文武を奬勵す、（稽古料を賜ひ彌出精拔群の者は新知被召出もあり）而して弓馬は金拾兩、學問初他之武術は銀拾枚を賜ふ、尤子弟厄介をも論せさる也、

諸士知行　司農府根元覺帳に以下元簿記入なきは皆根元覺帳也

一御藏入之村々は古給地高之通に御年貢納申候諸士へ被下候地行所は七十一年（蓋し正保三年なるへし）已前五百石以上の知行所は免四つ三分に當り候積り五百石以下へは免四つ五分に當り候積りに、其村之前々之免を割返し今高を極置右之節より今に至り五百石已上へは免四つ三分に當り候村を渡五百石已下へは免四つ五分に當り候村を渡申候

但在々之内御藏入納米不殘致候村々は御藏所と申御家中へ渡候知行村々は給所と申候給所にても給へ（本のまゝ人の誤か）知行上り御藏へ納申候は欠け御藏と申候諸士知行金高極り右之通に候得共免之上り下り其年々違有之候付知行納米に損益有之候是は年々の立毛善惡次第にて候

一諸士知行五百石より已下の面々へは伊都那賀名草海士有田日高此六郡之內にて渡申候五百石已上之諸士へは右六郡と勢州三領の內と割合被下候尤も知行高に應し段々割方之定御座候

但御切米取に渡方も大概相極有之候四十石已下は口四郡四拾石より六拾石迄は有田郡八拾石より日高郡百石は田邊上け地夫より上は勢州にて渡申候弁知行四百石より上の御足米も勢州にて渡申候

一諸士知行所百姓は地頭付に候得共、諸色之仕置は郡奉行申付候
一安藤帶刀水野對馬守知行之内田邊新宮城付之分は田畑山林竹木總て在中仕置之儀も全右兩人より支配の筈に先年より被　仰付候
對馬守帶刀備後守遠江守知行所に出來候新田は右四人より檢地致年貢も夫々へ納申候
一右兩人知行之内名草有田日高此三郡之内にても被下候是は山林竹木百姓は支配仕候得共諸色御定の觸免相極之儀池川普請之儀は郡奉行申付候
一三浦遠江守久野備後守知行は帶刀對馬守知行所之内右三郡知行之通大樣支配仕候田邊新宮之通にては無御座候
一右之外御年寄共知行所之分は御家中諸士知行同前に御座候
一牟婁郡之内口熊野奥熊野は不殘御藏入にて田邊新宮之外は諸士知行には渡不申候

○今高免極

一正保二酉年迄は元高にて給人へ知行相渡る　但元高は下免之事
一同三戌年より今高四つ三分割と成る　今高は今村小兵衞工夫也
右元高を今高に直し候は、元高十ヶ年平し免を以元高之取米を見定め
譬は右平し免六つ取成候得は、元高百石取米六拾石也右を四つ三分にて割候得は今高百三拾九石五斗三升五合となる
但四つ五分割にすれば今高百三拾三石三斗三升三合と成る

一承應二巳年より

大名免五百石以上右之通り四つ三分

小名免五百石以下四つ五分割と成

是は五百石以下は給所村數も無數郡により損亡有之年は少祿にて融通も難出來難儀成事に付

御用捨を以四つ五分割に成候事

右之通割延しに相成候事候得共下免之所は元高より今高減候村方も有之候付割延しとの名目は

不當に候事

元高百石免四つ取之時

取四拾石

右を四つ三分にて割　今高九拾三石二升三合

四つ五分に割　今高八拾八石八斗八升九合

○知行割　御勘定御勝手方心得覺雜記

一二百九拾石迄　口　郡

但口郡と申は伊都那賀名草海士右四郡の內割出す

一三百石　有田郡

一三百五拾石より四百九拾石迄　日高郡

一五百石より九百石迄　田丸領

一千石より千九百石迄　松坂領
一二千石以上　白子領
千石より以上の紀州渡りは千石に付三百石之積り也。

御家中知行割付　某氏在方舊記

安藤飛騨守

御高三萬八千八百六拾三石九斗
內
二千二百二拾四石六斗一升　名草郡之內
千七拾六石七斗三升　有田郡之內
二千五百拾八石四斗五升　日高郡之內
三萬六百六拾二石五斗六升　田邊領
千四百八拾一石五斗三升　同心六十人給米扶持方共

水野土佐守

御高三万五千百五拾六石九斗八升
內
二千六百二拾石八斗八升　名草郡之內
千四百四十五石三斗三升　有田郡之內

二千九拾七石一斗三升　日高郡之内

二万七千五百九拾一石二斗一升　新宮領

千四百二石六斗三升　同心五十人給米 扶持方共

御高一万六千四百七拾五石一斗二升九合　三浦長門守

内

九百六拾四石六斗七升　伊都郡之内

千百四拾一石六斗五升　那賀郡之内

千百二石五斗七升九合　名草郡之内

六百九拾一石五斗三升　海士郡之内

千百八拾五石一斗八升　有田郡之内

六千二百三拾六石八斗三升　松坂領之内

三千七百五拾石六升　白子領之内

千四百二石六斗三升　同心五十人給米 扶持方共

御高一万千四百七拾七石一斗六升　久野丹波守

内

伊都郡之内　五百五拾一石九斗七升
那賀郡之内　千四百三拾石三斗八升
名草郡之内　四百八拾七石九斗
海士郡之内　七百九拾五石三斗九升
有田郡之内　七百五拾三石一斗五升
田丸領之内　五千二百拾三石三升
松坂領之内　八百四拾二石七斗一升
同心五十人給米扶持方共　千四百二石六斗三升

右同心何れも七石つゝ組頭一組に三人つゝ有、右組頭三人つゝは八石つゝ也、
右同心の給扶持共免三つ八歩割にて本高に直し候はゝ千四百二石六斗三升つゝに相成候事也、

一承應二巳年迄は　五百石以上は免四つ三歩　五百石以下は免四つ五歩
一承應二巳年後は　五百石以上は免三つ八歩　五百石以下は免四つ
右者尤江戸免也
五百石以上は免三つ五歩　五百石以下は免三つ七歩
右者若山免也
一百石より二百九拾石迄は伊都郡那賀郡名草郡海士郡と口四郡の内にて相渡る也尤口四郡と云ふは
右四郡也

一三百石取者　百五十石は　口四郡之内
　百五十石は　有田之内

一四百石取者　二百石は　口四郡之内
　二百石は　日高之内

一五百石取者　二百石は　口四郡之内
　三百石は　松坂田丸之内

一八百石取迄者　二百五十石は　口四郡之内
　殘りは　松坂田丸領之内

一千石取迄者　三百石は　口四郡之内
　殘りは　松坂田丸之内

一千百石より四百石迄者　三百五十石より九十石迄　口四郡
　殘り皆　松坂領斗にて相渡す

一千五百石取よりの者　三百五十石は　口四郡之内
　百五十石は　有田之内
　殘りは　白子領斗にて相渡す

一二千石取迄者　四百五十石は　口四郡之内
　百五十石は　有田之内
　九百石ば　松坂領之内
　殘りは　白子領之内

此余は右に準し候事

一千石より内之衆勢州割は皆松坂田丸領之内割千石より千四百九拾石迄皆松坂領斗割也又千五百石より千七百石迄は白子領斗割也又千七百石より上の衆は松坂と白子と割也總して千石已上は勢州總知行高之内四歩一白子領割、其余は皆松坂領を割也

一千石より已上之紀州は千石に付三百石つゝ之割なり千五百石よりは有田割なり
但紀州知行百石に付二十五石つゝ割にて有田割なり
其余は皆口四郡の割なり

右以上は右に準し候事

○跡目割替之法

一二百九拾石迄		口郡
一三百石	内百五十石 百五十石	有田口郡
一三百五拾石	内二百石 百五十石	日高口郡
一四百石	内二百石つゝ	日高口郡
一四百五拾石	内二百石 二百五十石	日高口郡
一五百石	内二百石 三百石	田丸口郡
一六百石	内二百石 四百石	田丸口郡
一七百石	内二百五十石 四百五十石	田丸口郡
一八百石	内二百五十石 五百五十石	田丸口郡
一九百石	内三百石 六百石	田丸口郡
一千　石	内三百石 七百石	松坂口郡
一千百石	内三百三十石 七百七十石	松坂口郡
一千二百石	内三百六十石 八百四十石	松坂口郡
一千三百石	内三百九十石 九百十石	松坂口郡
一千四百石	内四百二十石 九百八十石	松坂口郡

一千五百石　内　三百三十七石五斗　百十二石五斗　千五十石　口郡　有田　松坂

一千六百石　内　三百五十六石　百十九石　千百二十五石　口郡　有田　松坂

一千七百石　内　三百七十五石　百二十五石　千二百石　口郡　有田　松坂

但千五百石より口郡渡り高之内四ヶ一有田郡相渡候事

一二千石　内　四百五十石　百五十石　九百石　五百石　口郡　有田　松坂　白子

右知行高之内四ヶ一白子領相渡候事

一二千二百石　内　四百九十五石　百六十五石　九百九十石　五百五十石　口郡　有田　松坂　白子

一二千五百石　内　五百五十石　二百石　千百五十石　六百石　口郡　有田　松坂　白子

一三千石　内　六百七十五石　二百二十五石　千三百五十石　七百五十石　口郡　有田　松坂　白子

安政三辰年江戸御勘定より若山御勘定所へ承り合答　同上

一知行五百石以上は紀勢にて相渡り、右已上に御加増被　仰付候ても下地の紀州地其儘居置全く五

百石都合の高丈け勢州にて相渡申候、たとへは紀州知三百石之向五百石に被　仰付候得は右二百石分勢州田丸にて相渡候尤紀勢兩知に割替し候歩合之儀も左之通に候得共右歩合之儀は前々より少々宛の返りは有之候事

〇知行免合差別

一五百石以上　江戸免三つ八分　居役免三つ五分

一五百石以下　江戸免四つ　居役免三つ七分

一五百石以上已下無差別隱居免　三つ七分

但下地三つ免にて相濟候筋致病死居候分免三つ

一同御役被召放之筋　免三つ

一同病氣にて廿四月勤無之分　免三つ

一同幼少　免二つ

一同寄合御醫師小普請御醫師　免二つ五分

一御役者松井市太夫村並免渡り

右之通御座候已上

天和二戌年極

御勘定所

一江戸役相勤候者　高五百石以上　三つ八分　高五百石以下　四つ

御切米取は前々之通

一居役之者
高五百石以上　三つ五分
高五百石以下　三つ七分

御切米取右に應同斷

御扶持方

一長病は十年曾テ不相勤者

一病人は二年不相勤者但廿四ヶ月　三つ

一分　知　三つ七分
三つ五分

右御切米取右に應同斷

下け紙
本文分知免合之儀三つ七分三つ五分に相極御座候得共天和年中已來分知免三つ五分にて相渡之筋は左之通三人ならては見當り不申右の外は總て三つ七分にて相渡り有之極直り候儀急に見當り不申候

寶永二酉より三つ五歩　大崎三入　廣田休助
正德三巳より三つ五分　坂部松葉齋

右付紙之趣文化十酉十一月御廣敷番免合調之儀に付本文分知取免合へ下け紙有之付記置候事

一隱居幷御扶持方計被下候者御金切米之者は前々通

一總與力幷地侍之內御切米取は三つ七分之積り

但新宮與力は高に應し三つ五分三つ七分

一京大坂伏見勢州熊野役人御普請奉行郡奉行御代官銅山炭山役人は江戶役同前

寶永六十丑月極

一幼少之者知行

諸士跡目之儀只今迄は十六歳未滿之者御扶持方に被　仰付候得共自今は幼少之者にても知行御切米相應に跡目可被　仰付との思召に付知行免之儀左之通

十六歳未滿跡目被　仰付候者免二つ五分

但只今は十六歳已上之跡目被　仰付之節前髮有之內は免三つにて候得共自今は十六歳已上跡目被　仰付候とも前髮有之者は二つ五分前髮取候已後之儀は御役儀定りの免たるへし十六歳未滿之者前髮取候とも是又免二つ五分

但十六歳に及候はゝ御役儀御定り之免之筈

寶永六丑十月

下け紙　寶永七寅二月申來る

此所に御切米之儀無之候付根來吉之助親花三院跡目御切米被下候吉之助幼少に候故免合之儀伺候江戶へ被　仰趣候處二つ五分に相極候樣に自今も御切米知行に準し候樣

正德四午年極

一不勝手に付奉願御役儀御免番外にて被差置候もの二十四ヶ月は不及差引其儘可爲居役免事

但勝手致直し次第右之趣可相達儀に候間其上にて江戶勤被　仰付候はゝ尤其年より江戶免に直し申筈

御役儀之高下に不限御咎にて御役儀被　召放御番外之者免事

一只今迄は當分居役免にて二十四ヶ月過候へは免三つに成候由候得共自今左之通之筈

御役儀被　召放候年より直に三つに成申筈

下け紙　松平喜十郎正徳五未無役に成享保五子に小寄合に被　仰付候無役之節廿四箇月過三つに成候付勤返しも有之筋にて候哉不分明に候故伺申候處元之究如此有之候間此上は各御料簡候樣にと宮地久右衛門殿へ御目付衆被相渡候由之書付左之通

病氣にて三つに成候者若御役替被　仰付候へばたとへ居役にても三つ之儀御用捨之筈

御供番頭已上番外之者免之事

享保元申年卯月廿日

一右番外にて被差置候者只今迄は其節より居役免にて廿四ヶ月過候得は免三つに成候由候得共自今左の通之筈

一病氣にて奉願御役儀御免番外にて被差置候者江戸其外勤も可仕程に氣色致し直し△候はゝ其段可相達儀に候右達も有之御聞届之上は勤不被　仰付候内廿四ヶ月に及ひ候ても其儘居役免にて差置可申候江戸勤□被　仰付候は尤其年より江戸免に直し可申事

但廿四ヶ月に及未病氣致不直者只今之通免三つ之筈

△印へ下紙

氣色致直し候段被相達候儀は役所へ相知し不申候間御通し有之樣致度候

右六月十三日御目付齋藤源藏被申聞候は支配方より通し有之筈支配無之面々は御用達より通し有之筈

□印へ下け紙

居役免三つに成候已後江戸勤も可仕程に氣色致し直し相達御聞届之上は是又尤其年より居役免に直り可申事

右享保元申卯月廿日御用役中被申聞午年極り候外に候間付け紙に致置可申由桑島喜左衛門方より申來候付如此

卯月二十日

一近年江戸役若山役共夫々知行高應し上け米左之通此上け米御藏へ納候

五百石以上　江戸役　免三つ八分
　　　　　　若山役　同三つ五分

五百石以下　江戸役　免四つ
　　　　　　若山役　同三つ七分

一御切米被下之面々も居役之分は上け米有之但諸手代足輕躰の者には上米無之候

右極元簿に年號を記さす依て近年とはいつ頃なるや知りかたし

一新規御役幷御役名替候筋其節に相伺江戸免に相極候筋左之通御座候

寛政五丑年より　寺社吟味役
寛政六寅年より　御小納戸　中奥御番
同六寅年より　御目付方認物勤
文化三寅年より　御用御取次
文化六巳年より　盗賊改方頭取
同八未年より　大殿樣御用御取次方認物勤

一五友之間御廊下詰面々當酉年相伺候上一等居役免に極申候

一檢校勾當前々より免合班々にて極無之候付寛政十午年相伺候上江戸免に極申候

一江戸免に仕組候樣御書付相廻り候筋左之通

寛政九巳年より　御廣敷御用達
寛政十一未年より　御廣敷書役
文化二丑年より　御勘定組頭
文化九申年より　大殿樣方御廣敷御用達同書役

右之通段々相極御座候以上

十一月　御勘定所

一御代官助役之儀本役明跡へ被　仰付候筋本役同樣私共証文を以免合浮置等相直り候儀に御座候尤

當時御代官一人役之儀に付口郡御代官介等被　仰付本役有之節は免合御用捨代り御銀被下取計候儀に御座候得共見習之内年數勤功等有之兼て介役被　仰付候筋本役同様御用捨被下候様御代官一統別紙之通内存達申出候尤熊野郡付見習并本役差支等有之差掛介勤相違候筋并口郡介役之儀は是迄之通居置兩熊野之儀は見習にても同所へ相詰候筋は罷歸り候迄免合御用捨御藏米を以て被下候跡方に御座候に付御料簡無御座候はゝ兩熊野に限り介役被　仰付候筋已後私共証文を以本役同様免合直し候様可仕哉御談申上候事

御上札　是迄之通に居置候様

右之通及進達候處御上け札之通被　仰聞候事

文化四卯十二月　証文帳にあり

一御勘定吟味役之儀は出在役に候得共三百石並高に付外々同様江戸免江戸歩濟置引取候事當時並高不足同様勤に付向後三百石高へ不滿同様勤之筋は江戸免にて居役歩浮置尙浮置歩增勢州上方詰同様歩合引取候筈尤當卯年分より歩合直し候筈に候條右之段相達候様

同十二亥十一月　被　仰渡帳より

一御勘定吟味役同様勤低祿之向も免合之儀向後江戸免之事

當時相勤罷在候面々は是迄之通候事

右年寄衆被　仰渡之

「右御勘定吟味役低祿之向在歩に引直之趣進達取組候處外々へ差障可申との事にて不用相成候

品いさゐ天保五辰十二月御役料之[虫喰]に記在之事」

天保五午二月御勘定所へ問合答之趣

一寄合小普請之向十月已後御役付之筋免合之儀に付御追給之趣致一覽候右は別紙之通元極候付十月已後之御役替は都て前役之免にて相渡し右之節新に被下置候御足米も矢張前役之免にて相渡し候儀に御座候以上

午二月　　　　　　　　　　　　御勘定所

一正月より九月迄は何月役替候とも當役に付て上け米たるへき事

一十月より已後之役替之衆其年は先役に付上け米たるへき事

附年内に江戸詰に罷下候とも右同斷但其節可有沙汰事

一御加增幷御合力米被下候衆も右同斷之事

右當戌年上け米計之儀に付て相定者也

天和二年戌霜月　　　　　　　　加平次右衞門

御勘定所　　　　　　　　　　　三長門

右數記は御勘定所根元覺帳に載する所にして、御家中祿高免合に係る沿革等を概略雜記したるものと雖も、是を以て十分完備とも斷しかたきに似たり、又左に揭くる御家中免合浮置調帳は、明和四年御勘定奉行にて調查政府へ提出、維新前迄同府に現存せしものなり、依て彼是參照せは粗至き

を得へきか、

浮置と云は、御家中祿高取り米之内を歩合割を以引去る也、諸渡り物帳凡例に記入之處によれは、江紀往來旅費渡り金の爲　大惠院様御代より被　仰出たるものか、又國用欠乏乃至御家中負債消却の便法により、時として此浮置の歩合を增し上け米を徵集せらるゝことあり、之を浮置歩增上け米と云ふ、即ち下に記載する文化三寅年九月之發令之類なり

〇御家中免合浮置

表紙に

御家中免合浮置調帳　明和四改於江戸

同裏に

一知行取米之外に指口糠藁代米之所務も御座候へ共右之內にては庄屋給又は掛り物等之拂方も有之儀に付右指口糠藁代は出し不申取米にて之浮置米差引所務を相立申候

一御年寄知行高には少し之內外も有之儀に御座候得共右之譯は此表にて難相分御座候付少しの內外には拘不申三萬石壹万五千石と出し差引相立申候

常　府

知行參萬石

水　野　土　佐　守

江戸免三つ八分

一取米壹萬千四百石

内千二十六石　　浮置十分の一
　　　　　　　　但十分一米之内一歩御用捨

殘て壹萬三百七十四石　　所務

下け紙　土佐守儀御用相違重き儀には判形仕折々御用筋相伺御加増目錄之儀遠江守と兩人判形可仕との被　仰出に付當
年より免三つ八分に直りと先例に相見申候

御用勤無之内

免三つ五分

一取米一萬五百石

内九百四十五石　　浮置十分の一
　　　　　　　　　但十分一米之内一歩御用捨

殘て九千五百五十五石　　所務

知行參萬石

江戸免三つ八分　　安藤吉之助

一取米一萬千四百石

内二千五十二石　　浮置五分一
　　　　　　　　　但五分一米之内一歩御用捨

下け紙　安藤帶刀浮置米歩增有之候得共當時代も替り候得は歩合の儀役所より伺出可申と奉存候本文へは先つ當時一等
歩合の極を以て相立申候帶刀節免合幷浮置納左之通御座候

一取米一萬千四百石　　江戸免三つ八分

内　　浮置五分の一

二千五百八石　　但五分一米の內去る子年三歩通一等御用捨去る申年四歩通相增四分五厘四毛余の割合納

殘て　八千八百九十二石　　所務

當時御用勤無之内
免三つ五分
一取米一萬五百石　浮置五分一　但五分一米之内一歩御用捨
内千八百九十石　所務
殘て八千六百十石
右は土佐守吉之助兩家之儀は新宮田邊領分今高免にて被下候年々免合は手前極に仕候右免と給所免と打込三つ八分三つ五分に餘り不申候得は上け米不仕候付大方年々上米は無御座候
但山林竹木小物成共領分附は所務仕候二分口は上之御所務に相成申候
知行一萬五千石
江戶免三つ八分
一取米五千七百石　浮置五分一　但五分一米之内一歩御用捨
内千二十六石　所務
殘て四千六百七十四石
知行八千五百石
江戶免三つ八分
一取米三千二百三十石　浮置五分一　但右同斷
内五百八十一石四斗

殘て二千六百四十八石六斗

所務

知行六千石

江戸免三つ八分

一取米二千二百八十石

公儀より御加恩地は此帳之外也

内四百拾石四斗

浮置五分一
但右同斷

殘て千八百六十九石六斗

所務

知行五千石

江戸免三つ八分

一取米千九百石

内三百四十二石

浮置五分一
但右同斷

殘て千五百五十八石

所務

知行四千石

江戸免三つ八分

一取米千五百二十石

内二百七十三石六斗

浮置五分一
但右同斷

殘て千二百四十六石四斗

所務

知行三千五百石

江戸免三つ八分

一取米千三百三十石

内二百三十九石四斗　浮置五分一 但右同斷

殘て千九拾石六斗　所務

當時鈴木四郎兵衞御用勤御免に付左の通に御座候

免三つ五分

一取米千二百二拾五石

内二百六拾九石五斗　浮置五分一 但五分一米之内去る子年三歩通一等御用捨去る申年より四分相増當時四分五厘四毛余之割合納

殘て九百五拾五石五斗　所務

知行三千石

江戸免三つ八分

一取米千百四拾石

内二百五石二斗　浮置五分の一 但五分一米之内一歩御用捨

殘て九百三拾四石八斗　所務

居役免三つ五分

居役免にて五分一浮置差出候役柄奥之箇條に記し候通りに御座候

一取米千五拾石

内九拾四石五斗　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨

殘て九百五拾五石五斗　所務

知行二千石

江戸免三つ八分

一取米七百六拾石

内百三拾六石八斗　浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨

殘て六百二拾三石二斗　所務

知行千五百石

江戸免三つ八分

一取米五百七拾石

内百二石六斗　浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨

殘て四百六拾七石四斗

一取米右同斷　常府

内四拾五石六斗　浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨

殘て五百二拾四石四斗　所務

居役免三つ五分

一取米五百廿五石　　若山勝手
　内四拾七石二斗五升　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨　所務
殘て四百七拾七石七斗五升
　　江戸免三つ八分　　知行千三百石

一取米四百九拾四石
　内八拾八石九斗二升　　浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
殘て四百五石八升　　所務

一取米右同斷　　常府
　内三拾九石五斗二升　　浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨
殘て四百五拾四石四斗八升　　所務
　　居役免三つ五分

一取米四百五拾五石　　若山勝手
　内四十石九斗五升　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て四百拾四石五升　　所務
　　　　知行千二百石
　　江戸免三つ八分

一取米四百五拾六石
内八拾二石八升
殘て三百七拾三石九斗二升

浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
所務

一取米右同斷
常府
内三拾六石四斗八升
殘て四百拾九石五斗二升

浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨
所務

居役免三つ五分

一取米四百二拾石
若山勝手
内三拾七石八斗
殘て三百八拾二石二斗

浮置十分一
但十分一之内一歩御用捨
所務

知行千石

江戸免三つ八分

一取米三百八拾石
内六拾八石四斗
殘て三百十一石六斗

浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
所務

一取米右同斷
常府
内三拾石四斗

浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨

殘て三百四拾九石六斗　　所　務

居役免三つ五分

一取米三百五拾石　　若山勝手

內三拾一石五斗　　浮置十分一 但十分一米之內一歩御用捨

殘て三百拾八石五斗　　所　務

知行八百石

江戸免三つ八分

一取米三百四石

內五拾四石七斗二升　　浮置五分一 但五分一米之內一歩御用捨

殘て二百四拾九石二斗八升　　所　務

一取米右同斷　　常　府

內二拾四石三斗二升　　浮置十分一 但十分一米之內二歩御用捨

殘て二百七拾九石六斗八升　　所　務

居役免三つ五分

一取米二百八拾石　　若山勝手

內二拾五石二斗　　浮置十分一 但十分一米之內一歩御用捨

殘て二百五拾四石八斗　　所　務

知行六百石

江戸免三つ八分

一取米二百二拾八石

内四拾一石四升　浮置五分一 但五分一米之内一歩御用捨

殘て百八拾六石九斗六升　所務

一取米右同斷　常府

内拾八石二斗四升　浮置十分一 但十分一米之内二歩御用捨

殘て二百九石七斗六升　所務

居役免三つ五分

一取米二百拾石　若山勝手

内拾八石九斗　浮置十分一 但十分一之内一歩御用捨

殘て百九拾一石一斗　所務

知行五百石

江戸免三つ八分

一取米百九拾石

内三十四石二斗　浮置五分一 但五分一米之内一歩御用捨

殘て百五拾五石八斗　所務

一取米右同断　　常府
内拾五石二斗　　浮置十分一　但十分一米之内二歩御用捨
殘て百七拾四石八斗　　所務
知行五百石
江戸免三つ八分

一取米百九拾石
内三拾四石二斗　　浮置五分一　但五分一米之内一歩御用捨
殘て百五拾五石八斗　　所務

一取米右同断　　常府
内十五石二斗　　浮置十分一　但十分一米之内二歩御用捨
殘て百七拾四石八斗　　所務
居役免三つ五分

一取米百七拾五石　　若山勝手
内拾五石七斗五升　　浮置十分一　但十分一米之内一歩御用捨
殘て百五十九石二斗五升　　所務
知行四百石
江戸役免四つ

一取米百六拾石
浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
内二拾八石八斗
殘て百三拾一石二斗
所務

一取米右同斷
常府
内拾二石八斗
浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨
殘て百四拾七石二斗
所務

居役免三つ七分

一取米百四拾八石
若山勝手
内拾三石三斗二升
浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て百三拾四石六斗八升
所務

知行三百石

江戸免四つ
御切米百二拾石

一取米百二拾石
浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
内二拾一石六斗
殘て九拾八石四斗
所務

一取米右同斷
常府
内九石六斗
浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨

殘て百十石四斗　　所　務

居役免三つ七分

一取米百拾一石　　若　山　勝　手

内九石九斗九升　　浮置十分一　但十分一米之内一歩御用捨

殘て百一石一升　　所　務

江戸役免四つ　　知行二百五拾石

御切米百石

一取米百石

内十八石　　浮置五分一　但五分一米之内一歩御用捨

殘八拾二石　　所　務

一取米右同斷　　常　府

内八石　　浮置十分一　但十分一米之内二歩御用捨

殘て九拾石　　所　務

居役免三つ七分

一取米九拾二石五斗　　若　山　勝　手

内八石三斗二升五合　　浮置十分一　但十分一米之内一歩御用捨

殘て八拾四石一斗七升五合　　所　務

知行二百石
御切米八拾石
江戸役免四つ

一取米八拾石
内拾四石四斗
殘て六拾五石六斗
浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
所務

常府

一取米右同斷
内六石四斗
殘て七拾三石六斗
浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨
所務

若山勝手
居役免三つ七分

一取米七拾四石
内六石六斗六升
殘て六拾七石三斗四升
浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
所務

御切米七拾石
江戸役免四つ

一米七拾石
内拾二石六斗
殘て五拾四石四斗
浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨
所務

一米右同斷　常　府
内五石六斗　浮置十分一　但十分一米之内二歩御用捨
殘て六十四石四斗　所　務
居役免三つ七分
若　山　勝　手
一米六十四石七斗五升
内五石八斗二升八合　浮置十分一　但十分一米之内一歩御用捨
殘て五十八石九斗二升五合　所　務
知行百五十石
江戸役免四つ　御切米六十石
一取米六十石
内十石八斗　浮置五分一　但五分一米之内一歩御用捨
殘て四十九石二斗　所　務
一取米右同斷　常　府
内四石八斗　浮置十分一　但十分一米之内二歩御用捨
殘て五十五石二斗　所　務
居役免三つ七分
一取米五十五石五斗　若　山　勝　手

内四石九斗九升五合　　浮置十分一 但十分一米之内一歩御用捨　所務
殘て五十石五斗五合　　御切米五十石
江戸役免四つ

一米五十石
内九石　　浮置五分一 但五分一米之内一歩御用捨　所務
殘て四十一石

一米右同斷　　常府
内四石　　浮置十分一 但十分一米之内二歩御用捨　所務
殘て四十六石
居役免三つ七分

一米四十六石二斗五升　　若山勝手
内四石一斗六升三合　　浮置十分一 但十分一米之内一歩御用捨　所務
殘て四十二石八升七合
知行百石
江戸役免四つ

一取米四十石　　御切米四十石

内七石二斗　浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨

殘て三十二石八斗　所　務

一取米右同斷　常　府

内三石二斗　浮置十分一
但十分一分之内二歩御用捨

殘て三十六石八斗　所　務

居役免三つ七分

一取米三十七石　若山勝手

内三石三斗三升　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨

殘て三十三石六斗七升　所　務

下け紙　四十石　寄合
大御番
小普請

取米三十七石

内五石九斗二升　五分一之内
二歩御用捨

殘て三十一石八升
右之内にて御役銀相納候事

江戸役免四つ　御切米三十石

一米三十石

内五石四斗　浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨

殘て二十四石六斗　所務

一米右同斷　常府

内二石四斗

殘て二十七石六斗　所務

浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨

居役免三つ七分

一米二十七石七斗五升　若山勝手

内二石四斗九升八合

殘て二十五石二斗五升二合　所務

浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨

下紙　三十石

取米二十七石七斗五升
内四石四斗四升

殘て二十三石三斗一升

大御番
小普請

五分一之内
二歩御用捨

江戸役免四つ

御切米二十五石

一米二十五石

内四石五斗

殘て二十石五斗　所務

浮置五分一
但五分一米之内一歩御用捨

一米右同斷　常御扶持方無之筋

内四石　　浮置五分一
但五分一米之内御切米二十五石取限
常扶持無之候へは二歩御用捨
殘て二十一石　　所務
一米右同斷　　常府
内二石　　置十分一
十分一米之内二歩御用捨
殘て二十三石　　所務
居役免三つ七分
一米二十三石一斗二升五合　　若山勝手
内二石八升一合　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て二十一石四升四合　　所務
下紙　二十五石　　大御番
小普請
取米二十三石一斗二升五合
内三石七斗
殘て十九石四斗二升五合
五分一米之内二歩御用捨
知行五十石
江戸役免四つ　　御切米二十石
一取米二十石
内一石八斗　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て十八石二斗　　所務

一取米右同斷　常府
内一石六升六合　浮置十分一
但十分一米之内二歩御用捨
殘て十八石九斗三升四合　所務
居役免三つ七分

一取米十八石五斗　若山勝手
内一石一斗一升　浮置十五分一
但十五分一米之内一歩御用捨
殘て十七石三斗九升　所務
下紙　二十石　大御番
小普請
取米十八石五斗
内一石六斗六升五合
殘て十六石八斗三升五合　十分一之内一歩御用捨
江戸役免四つ　御切米十五石

一米十五石
内一石三斗五升　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て十三石六斗五升　所務

一米右同斷　常府
内八斗　浮置十五分一
但十五分一米之内二歩御用捨

殘て十四石二斗　　所務
居役免三つ七分
一米十三石八斗七升五合　　若山勝手
内八斗三升三合　　浮置十五分一
但十五分一米之内一歩御用捨
殘て十三石四升二合　　所務
下紙 十五石　　小普請
取米十三石八斗七升五合
内一石二斗四升九合
殘て十二石六斗二升六合
十分一之内一歩御用捨
御切米十三石

江戸役免四つ
一米十三石
内一石一斗七升　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨
殘て十一石八斗三升　　所務
一米右同斷　　常府
内六斗九升四合　　浮置十五分一
但十五分一米之内二歩御用捨
殘て十二石三斗六合　　所務
居役免三つ七分
一米十二石二升五合　　若山勝手

内七斗二升二合
殘て十一石三斗三合
下紙 十三石
取米十二石二升五合
内一石八升二合
殘て十石九斗四升三合

江戸免四つ

一米十二石
内一石八升
殘て十石九斗二升

一米右同斷
内六斗四升
殘て十一石三斗六升

居役免三つ七分

一米十一石一斗
内六斗六升六合
殘て十石四斗三升四合
下紙 十二石

浮置十五分一
但十五分一米之内一歩御用捨

小普請

十分一之内一歩御用捨

御切米十二石

浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨

所務

常府

浮置十五分一
但十五分一米之内二歩御用捨

所務

若山勝手

浮置十五分一
但十五分一米之内一歩御用捨

所務

小普請

取米十一石一斗
内九斗九升九合
殘て十石一斗一合
十分一之内一歩御用捨

一米十石　　　江戸役免四つ　　　御切米十石

内九斗　　　浮置十分一
但十分一米之内一歩御用捨

殘て九石壹斗　　　所務

一米右同斷　　　常府

内五斗三升四合　　　浮置十五分一
但浮置十五分一米之内二歩御用捨

殘て九石四斗六升六合　　　所務

居役免三つ七分

一米九石二斗五升　　　若山勝手

内五斗五升五合　　　浮置十五分一
但十五分一米之内一歩御用捨

殘て八石六斗九升五合　　　所務

下紙　十石
取米九石二斗五升
内八斗三升三合
殘て八石四斗一升七合
十分一之内一歩御用捨

右は江戸役居役又は常府にて勤有之筋之免合并浮置歩合大様積りにて御座候

江戸免にて居役部浮置差出し候筋

一上方勢州詰役人

一若山にても在方勤之分

居役免にて江戸部浮置差出候筋

一知行三百石に不詰寄合組　但常府共

「明和六丑四月廿四日寄合組自今江戸勤番に不及江戸勝手之面々も御番等相勤候に不及筈被　仰出候に付三百石以上にても居役免に江戸歩のうけ置に成候事」

一大御番組幷常府にて大番格番外共

一小寄合　但常府共

「但廿五石以上　五分一之内二歩御用捨
廿四石以下　十分一之内一歩御用捨

大番小寄合とも」

右之外に

一長病にて廿四ヶ月勤無之筋又は刑番外類は免三つにて御座候浮置歩合は其役に應し相納申候

一十六歳未滿幷前髮有之諸勤無之分免二つ五分にて御座候浮置歩合は其役々に應し相納申候

一隱居分知分切米は居役免所務仕候浮置は去る寅年より御用捨にて相納不申候

「但五百石以上以下共無差別三つ七分」

此帳は明和四亥年江戸御勘定所にて改之

一都て祿扶持浮置米歩合之儀は五歩一にして御座候哉拾歩一にて御座候哉又は跡目扶持刑扶持其外御扶持方之多少に寄歩合違ひ候儀に候哉承度御座候否左に御申越可被下候以上

申七月廿二日

中村才右衛門
吉田文之右衛門

星合角之右衛門様
山田門左衛門様

返事之趣

一五人扶持	十五分一	小普請類	一五人扶持	十分一	御役者類
一七人扶持	十五分一	小普請學校館御繪師勤類	一七人扶持	十分一	御役者類
一七人扶持	二十分一	勾當幷左都	一七人扶持	十五分一	御役者京住
一十人扶持	十分一	御役者	一十人扶持	十五分一	御醫師
一十人扶持	十五分一	小普請類	一十人扶持	十五分一	松坂住
一十五人扶持	十分一	小普請類	一十五人扶持	十分一	御醫師
一二十人扶持	十分一	小普請御醫師學校館勤類	一三十人扶持	十分一	御醫師

一左之一節事由不了と雖も記の存するにより暫く附記して他日の考査を待つ

御切米二十五石已上浮置

江戸歩　一歩八厘　居役歩　九厘　寄合小普請は　一歩六厘

但江戸役にて二十五石に限り無扶持は一歩六厘有扶持は一歩八厘

右以下之筋浮置

江戸歩　九厘　居役歩　六厘　寄合小普請は　九厘

○免不足

免不足之品に付覺記　根元覺帳以下同御用人御勘定奉行被下金の條迄
信案に、知行取者年の凶荒等にて收納高御定めの免に不足の時は、其不足分補給せらるゝを免不足被下と云、御役替同樣
召狀付け御年寄申渡也、

一三百石已上免不足有之其年より翌春迄江戸に相詰候向幷翌春御供詰に被相越候筋免不足可被下旨
其砌被　仰出候事

一江戸詰に付免不足被下筋享保之頃は其年相渡有之其已來は翌年被　仰出相渡候事

一勢州詰御目付中免不足被下江戸詰振合を以て御足被下候事

一三百石以下は一等御足被下旨文化三寅年被　仰出候事

一免不足過分有之年柄左之通明和七寅年　免三つより内に相成候得共何等被下無之或は拜借等も無之
事

一天明二寅年同六酉年餘程不足候得共右同斷

一寛政三亥年右同斷

一文政四巳年松坂旱傷にて大不足有之候得共御足被下無之平井助左衞門千四百石取にて現米百五十
三石余不足有之難澁依願別段金五十兩八朱利附五年賦拜借相濟候事

一文政六未年旱損にて免不足餘程有之候得共御足等被下無之事

一天明六午年美濃守殿免不足有之候處前年巳春より午五月迄江戸に御詰被成又午冬御使に江戸へ御
越被成候に付免不足被下御調有之御答に免不足有之年春夏之內御歸又御立歸御供等被相越候衆へ

御足被下候例相見不申候事
一寛永二戌年免不足美濃守殿去年免不足當年江戸御供詰に罷越候に付御定之免に御足可被下旨江戸表にて被　仰出候事
右免不足被下之儀はいつれ政府にて御定も有之趣にて可被下筋は御書付出候事に付御勘定所には極無之付諸向より問合有之候とも渡方無之儀難相答候事
右井印手帳より出す本文調は天保三辰年旱損免不足有之調之節右書付出候事御勘定所に同年免不足一件帳出來之筈に候事
覺
免不足有之向他所へ相詰候へは免不足被下候儀去辰年分免不足なれば辰十月より翌巳年九月迄を一と納として右辰納を以相勤候譯を以て辰納中他所へ相詰候向へは辰納免不足被下候法之由たとへは辰九月迄他所詰之向にても辰年中には候得共前年寅納を以相勤候事に付辰納不足被下無之尤巳十月より相詰候向も同様被下無之趣井口方被物語候事尤右辰納中何月より相詰候筋へは被下候との境御勘定所へ問合候處
正月より五月迄之内他所詰に罷越候へは去年分免不足米被下候六月後罷越候筋へは被下無之若當年免不足有之候はゝ被下候事之由
右問合之趣天保三辰年書狀留にあり
一巳六月巳後翌午五月迄他所勤之筋は巳納免不足有之候へは被下候筈總て村好抔も六月限月之事是

は村田爲助へ面談問合之事

信案に、御家中新知御加增、又は親跡目にて知行割替、或は親知行被下候節は、御役替之如く召狀を以て呼出し、御年寄申渡し御勘定奉行目錄を渡す事古來より之例也、根元覺に記載する知行目錄之書式左之如し、

知行目錄

該帳に御加增之筋は兩家之目錄にて御黑印重て申請云々、跡目等にて知行割替或は親知行被下候筋は、御勘定奉行目錄にて重て御知行割直き御書出被下候時云々と認來候へ共、御入國以來御黑印御書出之儀無之、只舊例により認來るのみにて名實相違に付、御加增之筋は右爲御加增被下候可有所務候云々とし、御勘定奉行判の方は右の村付從當年可有所務之と認め、而して兩目錄共兩家又は他御年寄之名判に相成候可然哉との儀御勘定奉行より伺出之件あり、然れとも御指令之否記載なし、又いつ比之事に哉年號月日も不記れば、如何之成行を知るに由なし、唯參考に記載す、

御加增之筋 目錄

紀伊國何郡 何村之内

一何百石

右爲御加增被下候　御黑印重て申請可進之候已上

年號月日

兩家書判

誰殿

新規米割替之筋　目録

一何百石　　　　　紀伊國何郡　何村之内

右之村付從當何年可有所務候重て御知行割直御書出被下候時此目録取替可申候已上

年號月　　　　　御勘定奉行連名

誰殿　　　　　　　　　　　　印判

御役銀　根元覺帳

一知行百石　二百目　日用
一知行二百石　四百三十目　日用出入
一同　三百石　六百三十目　日用出入　二人一人
一同　四百石　八百六十目　同　二人二人
一同　五百石　壹貫六十目　同　三人二人
一同　六百石　壹貫九十目　同　三人三人

右之割合にて御役銀取立る

日用　二百目
出入　二百三十目

大御番組頭二百石分御役銀御用捨

寄合組頭　半役之事

百石に付百目
二百石に付二百十五匁

右納日限　三月四日　十二月廿一日

御切米春納は　五月十五日　同　暮は　十二月廿一日

御切米取御役銀七十八石知行百五十石之御役銀入用八十石につみ候迄は百五十石分にて有之事

但百五十石は三百目之答

右一通

一大御番組頭御普請役銀上納振祿之多少に寄り差引之品有之趣に候間右等之譯いさゐに致承知度事

右之通文政三辰四月政府より御問合に付左之通御答に相成候事

元極り

一高二百石之役引可申候

附り二百石以下之面々は高百石に付銀二百目つゝ足銀被下候事

一高百五十石取

此銀三百目　役引

外に五十石分此銀百目　足銀被下

一高百七十五石取

此銀三百五十目　役引

外に二十五石分此銀五十目　足銀被下

一高二百石取

此銀四百目　役引

一高二百五十石取

内二百石分　此銀四百目　役引

五十石分　此銀百目　相納る

一高三百石取

内二百石分　此銀四百目　役引
百石分　此銀二百目　相納る

右之通

一大御番組頭之儀並高二百石分は御役引にて二百石に不足之筋は百石に付銀二百目つゝ御足銀被下候筈元極にて御座候處天明七未年半知之節二百石に不足分は伺濟之上銀二百十五匁御足銀被下寛政五丑年文化二寅年浮置歩增被　仰出候節も相伺半知之節之振合を以御足銀被下候處同十四丑年歩增御免被　仰出候然處高永五右衛門御切米六十石被下高百五十石にて去る亥年六月大御番組頭格同様勤被　仰付候亥子兩年分は歩增中に付別段之通相渡御座候去々丑去寅割合右同斷百七匁五分宛御足銀相渡有之差引兩年分十五匁渡過に御座候丑年丸役に相成候付元極之通御足銀相渡可申筈之處調行屆不申候付當暮御足銀之内にて差引申度との御普請方元〆共伺候事

書面渡過は當暮御足銀之内にて引取被相渡候様尤此度は何等に不及以後入念候様可被相達事

一御役銀相納候御役にて致轉役御役銀御用捨に相成候儀轉役被　仰付候日より御用捨之筈御役銀御用捨之御役より致轉役御役銀相納之儀は被　仰付候日より日割を以相納候筈

但御役勤日は三月四日より霜月晦日迄之御定に付此日數を以て割方取計候儀に御座候

本文日數之内定り休日は四月十六日より同十八日迄六月土用十日盆十日都合廿三日引殘日を以割方仕候儀に御座候事

御普請役本役勤之分

大組　寄合組頭　寄合　大御番組頭　大御番　小普請組頭　小普請

同半役勤之分

御城代　御留守居番頭　根來頭　御先手物頭　山家同心頭
本町御門番之頭　御本丸番之頭　御天主守番之頭　御留守居物頭

按に御役銀とは右大組初の九役は新たに父祖の跡を繼承未た就職せす閑散に在るを以て城郭等修築の課役として普請人夫を出すの制なり、祿高割の全數を負擔する故に本役といふ、又御城代初は國內留守を主とし、江戸詰乃至他所往來の事なきと守備上とにより半額之人夫を出すへき法とす、仍て半役といふ、然るを便利法を以て現人夫を出さす祿高之內より其賃銀を代納せしむ、即ち課役銀なる故に御役と稱し、又は御普請役とも唱ふる也、御先手物頭は江戸御供あり、而して居役と同しく半役を課するは其故詳ならす、

○御役料

按に並高之外に役々により米金銀を下付する之を御役料と稱す、其在職中に止るものなり、

一 三千石以上御料無之 三千石以下二千石迄二百俵 二千石以下三百俵　文化十三子年極直　並高千五百石　御傅

一 五百石以上五十石 五百石以下八十石　寶永五子年極　並高四百石　御勘定奉行

一 千石より六百石迄金二十兩 五百石以下金三十兩　寬政五丑年極　並高四百石　寺社奉行

一 五百石以上金三十兩 五百石以下五十石 都合御役料被下　文化九戌年極直り　並高四百石　御船奉行

一 四百石以上金二十兩 四百石以下金三十兩　文政九戌年極　並高三百石　奥頭取

一 六百石以上銀十五枚 五百石以下銀二十枚　寬政六寅年極　同　三百石　小普請支配

一　五百石以上七十石　五百石以下百石　文化元子年極直り　同　三百石　御城附

一　五百石以下金十五両　五箇年目三十両　五百石以上五年目より十五両　寶暦九未年極直り　並高三百石　御目付

一　銀七枚　寶永五子年極　同　三百石　御勘定吟味役

下け紙　御勘定吟味役御役料四百石迄相渡右以上不相渡筈に相極候方可然哉之事

一　銀五枚　寛政六寅年極　並高四十石　小普請組頭

下け紙　小普請組頭御役料祿之高下に不抱相渡可然哉之事

一　金八両三十石以上　不相渡江戸詰之節之は　金十両　寶暦四戌年極直り　並高五十石　奥御右筆

下け紙　奥御右筆並高先年は二十石に付御役料渡方本文之通相極有之事と奉存候當時並高五十石に極直り候付御役料外々之釣合に引直候は丶向後並高五十石已下御役料定之通八両相渡右已上六十石迄四両程尤六十石已上不相渡筈相極候は丶至當に可有御座哉乍併御内々被下等も有之候は丶矢張是迄之通居置候方可然哉宜御評議之事

一　金六両三十石以上　不相渡江戸詰之節は　金八両　寶暦四戌年極　並高二十石　表御右筆日記方

一　銀七枚　松坂は銀十枚　寛政十午年極　御代官

下け紙　御代官御役料祿之高下に不拘相渡可然哉之事

一　銀二枚四十石以上　御普請役半役御免　寶暦七丑年極　御代官見習

一　二十石以上金二両　二十石以下金三両　四十石以上不相渡　江戸詰之節は銀五枚　寶暦四戌年極直り　並高三十石　御勘定組頭

御勘定組頭並高三十石に付三十石已下金三兩右已上金二兩四十石以上不相渡筈御改正候はゝ至當に可相成事

一 書役給米五石　江戸詰之年は七石　三十五石以上不相渡　寶曆四戌年極　並高二十五石　御臺所頭

一 金二兩　寶曆四戌年極　並高二十石　御小人頭

御小人頭御役料金二兩三十石迄相渡右已上不相渡方可然哉

一 書役給五石　三十石以上不渡　寶永六戌年極　貳步口奉行

一 金五兩三十石迄は　被下四十石以上不渡　寶曆六丑年極　御馬預

一 銀五枚　以下小普請組頭

已下小普請組頭御役料祿之高下に不拘相渡候方可然哉之事

一 金二兩　文化八未年極　並高十八石　御小姓目付組頭

御小姓目付組頭御役料二十八石迄相渡右以上不相渡方可然哉之事

一 金二兩　文化四卯年極　並高十五石　御徒目付組頭

御徒目付組頭御役料二十五石迄相渡右已上不相渡方可然哉之事

一 二十石以上金二兩　二十石取被下金三兩　江戸詰之節は銀五枚　四十石以上不渡　寶曆四戌年極直り　並高十五石　御勘定御勝手方
同　十二石　同　見習

御勘定幷同見習共二十石已下御役料金三兩相渡右已上廿五石迄金二兩

右廿五石以上は不渡尤江戸詰之節は是迄之通右之通相極候はゝ外々釣合宜く至當に可有御座哉之事

一若黨給米五石四十石以上不渡　寶暦四戌年極直り　並高三十石　支配勘定組頭　但無扶持

一銀五枚　文化六巳年極り　寺社吟味役

寺社吟味役御役料二十五石迄相渡右以上は不相渡方可然哉之事

一書役給米五石三十石以上不渡　寶暦四戌年極　並高二十石　傳法御藏奉行

一十五石以下金二兩　文化十三寅年極　並高十五石　御小姓目付

御小姓目付御役料外々釣合に引當候得は廿石迄相渡右以上不相渡方可有御座候得共御徒目付之釣合引當候得は下地之通居置候方可有御座候哉之事

一十三石迄金二兩十四石取金一兩十五石取より不渡　文化五午年極直り　並高十二石　御徒目付

一金二兩　寶暦四戌年極　御犬牽頭

御犬牽頭御役料二十石迄相渡右以上不相渡方可然哉之事

一金二兩三十石已上不渡　寶暦四戌年極　御中間頭

兼役之向被下金銀之儀に付御勘定奉行より伺

一都て御役料之儀は浮置引取不申被　仰付候節月割にて相渡り月は二月霜月兩度に相渡被下金銀の儀は夫々知行御切米に准し浮置引取被　仰付候節御目見已上年中分相渡已下は四月廿五日過に被

仰付候得は半年分相渡り月は四霜月兩度に相渡候儀元極に御座候然る處兼役被　仰付年々金銀被下候筋は御役料に准し浮置引取不申取出之節月割にて相渡候筋有之又は御役料に准し浮置は引取不申取出之節被下金銀に准御目見以上年中分相渡候以下は四月廿五日過半年分相渡候筋も有之渡月之儀は御役料に准二霜に相渡來有之江戸若山共相混班々に相成御座候右は兼勤に付被下候御金は急度御役料にも難准被下金銀へ准候方相當に可有御座に付此節相改兼勤に付被下候御金は被下金銀に准浮置は引取取出候節御目見以上年中分相渡已下は四月廿五日過半年分相渡り月も四霜に相渡候樣仕度候勿論是迄班々之筋は其儘相渡候向後被　仰付候筋取出之節より被下金銀に准右之通相渡させ候樣仕度御談申上候　原本年號月日を欠く又指令の事不記

文政三辰三月御年寄より御勘定奉行へ

一御役料相渡候御役明き有之外御役より兼帶被　仰付候得は向後本役極之通御役料相渡可申事

但明き無之過に兼帶被　仰付候はゝ其節々可被相伺事

御用人御勘定奉行被下金之事

一御用人被　仰付幷病死之筋江戸被下金銀月之極

五月被　仰付候筋一ヶ年分被下六月に被　仰付候得は盆不被下暮分計被下十二月へ入被　仰付候ても暮分は被下候筈

一正月中病死之筋へは其年之被下無之二月より七月迄之間に病死之筋は盆分計被下暮分被下無之八月以後病死之筋は暮分被下候筈

右書付文化元年子十月五日年寄御渡被成候事

一御勘定奉行兼帶被　仰付被下金相渡候例文化十四八月鈴木殿被　仰付候節政府より御書付出有之事

文政八酉年相極

一御勘定奉行衆ゟ紀往來之節御内々被下三十二兩表判帳立之事

御足米被下割御切米取扱振且伺書

一江戸詰之面々足米被下之儀十七ヶ月詰之筋へは十二割之月割を十七ヶ月分相渡十四ヶ月分は古來より定之通一ヶ年分相渡十二箇月之上二ヶ月分詰越之筋へは月割不相渡十五月詰候へは一ヶ年分之上三ヶ月分相渡候筈との事

寶暦六子三月

御足米被下割合

〇江戸常府御切米手形

一江戸常府御切米取之内拂立渡御勘定所より銘々に相渡り候通之御手形一枚つゝ相認御判も相濟右手形江戸へは不遣御勘定所に預置跡書と唱人別石高姓名半紙帳に認江戸へ遣し江戸にて人別直手形取右跡書帳へ引合相渡し置追て右跡書帳と直手形御勘定所へ戻候上御勘定所に預有之候人別御手形添元方御金藏と傳法御藏へ相渡し御勘定相立候事に御座候右之通當人へ不相渡御手形五百枚余も相認候事に御座候右は已前より仕來に御座候得共件之通數多相認候處總〆高にて相認候得は御手形二枚にて相濟候儀に付御減相立候旨別紙之通御勘定所より伺出先達て御黑印も〆高にて相

江戸常府御切米手形

御切米御合力手形

濟候積に御座候へは伺之通相濟候樣御談候處御料簡無之事覺に別紙は御黒印一件之場有之丸印也可見合

御切米御合力手形

一御切米御合力交替手形之儀往古と引競候得は追々夥敷紙數も相增御勘定向も往古は知行村並免にて被下候處當時は免過上け米幷浮置或は新規割濟抔と申樣に知行御切米共數々手掛り其外已前無之諸押筋等も多端に相成御勘定合繁雜之上右御切米手形認にも大勢打掛り手張候に付ては在中其外肝要之業へ掛り候人配致不足自ら手後にも相成候儀に付何卒右御切米渡方成丈け簡易に取計支配勘定之手も透御人數も相減申度且は已前より仕來には御座候得共輕き者へ御切米迄每暮年寄衆御連印申請候儀前段知行目錄之釣合には大造にも相見候付先達より彼是申見　公邊之御振合をも內々承合せ候處いつれも淺草御藏渡にて銘々より手形差入尤頭役は都て月分表判にて請取其外頭支配有之分は布衣以上にても頭支配之裏判に自分表判手形を以て受取候趣に付　公邊之御振合を以て夫々手形差入させ相渡候得は大に事少に相成支配勘定も相減可申候得とも從來之致來にて諸向にて御本紙とも唱大切に相心得居候儀に付　公邊之御振合も難相成尤後世間違出來候ても如何に付向後は御切米手形御判申請候儀相止夏かし手形同樣私共印形に仕候はゝ簡易に相成候儀に御座候右は其儘置候ても差支は無御座候得共右之通幕御切米も私共印形に取斗候得は知行御切米之輕重も相立御勘定所取扱も一と筋に相成自ら手數も相減候に付配下勤人共御人數減方之助にも可相成奉存候に付前段之通御談申上試候事

覺に本文の外に知行目錄認振之儀改正一本に進達相成候付本文不喰合候儀は知行之部可見合事

右一冊尤綴印も致す
背張 夏かし手形雛形
辰の夏かし
米合二十石者
右平野又吉直手形取可被相渡候已上
辰卯　月

下條八十郎
田中良左衛門
宇野善右衛門

是迄之御切米手形雛形
辰之御切米
米合四十石者
右平野又吉直手形取可被相渡候已上
辰霜　月

山　作右衛門
山　庄右衛門
加　大隅
村　伊豫
安　帶刀

已上御勘定奉行より政府への伺書也

一伊賀已下傳法御藏かし米元祿十丑より株附にて貸渡候事

上け米被　仰出候ても不浮置　　寛政五丑年談達にあり

慶應二寅年十一月三日

一御家中御切米之儀是迄年寄衆御連印夏貸は御勘定奉行中連印等添狀相渡候事に候得共此度半知被

仰出候に付ては右年限中天明度之振を以て四月霜月二十五日於御勘定所裏判之切手相渡候筈に

候間右切手姓名之處へは自判不致左之通銘々調印之直手形相添御代官所へ差出候はゝ在中村々へ

書替候筈尤町人共へ直に相拂候向は右切手直手形を以て是迄通相替儀無之事

本文切手御代官所へ相廻候限月之儀は是迄之通り候事

受取申米之事

米合何石也

右者當何之御切米分御勘定所裏判之切手を以て受取申候以上

何霜月何

姓名印

御代官所

一夏貸直手形も右に准候事

一右直手形夏暮共頭支配表判且裏判之筋頭支配調印之筈候事

本文翌年十月廿九日に至て左之如く改正あり
御切米夏貸共切手之儀向後御勘定所表判之筈に相成候に付左雛形之通相認可申事
請取申米之事
米合何石也
右は當何の御切米分御勘定所切手を以て受取申候以上
何霜月　　姓名印
何御代官所

慶應三卯年二月六日御勘定奉行より布達
一御家中勝手難澁之向是迄知行御切米町人共へ差入勝手爲賄候得共右にては多分之雜費等も相掛り且は高利にも有之暮し方難相立自然非常御用等之節差支候趣に付向後賄方役所にて主法立を以て暮方且非常除置之手宛出來候樣於同所御世話振之儀被　仰出候に付知行二百石切米八十石以下之面々於同所御賄受申度向者左案文之通頭支配へ書付差出委細右役所承合主法相守り可申事
　　姓名
私儀兼々勝手難澁に付所務不殘差入賄方御役所にて御賄受申度奉願候此段御同所へ元相廻り候樣仕度奉存候以上
月　日
慶應三卯年三月六日

一御切米手形夏暮共御代官所へ差出候節に村々書替仕組相渡來候得共此度御趣意之品に付向後左之通書替に引替相渡候筈候事
夏貸手形は五月朔日より六月晦日迄暮御切米手形は十二月朔日より翌三月晦日迄之內御代官所へ差出候はゝ書替に引替相渡候筈但是迄書替村役等申出候筋も有之哉之趣に候得共向後右樣之儀は不相成候事
本文之通候得共當卯夏貸之儀五月十日より六月晦日迄之內書替相渡し可申事
一書替之儀雛形には海士名草御代官所之內より加印取斗候筈に付右加印無之書替は米不相渡候事

海士名草御代官印

何ノ夏御切米　何村

○米何石○也

右可相渡者也

海士名草御代官印

御代官名前○

月　日　庄屋へ

慶應三卯年四月御勘定奉行より達

一御家中知行貳百石御切米八拾石以下之向賄方役所主法立を以て於同所御賄貸之儀被　仰出有之候得共矢張丁人共より高歩之賄を受候向不少就ては自然借財相嵩み可申右は御家中難澁之向御世話振厚御趣意を以被　仰出候儀に付向後右之面々所務差入丁人共より勝手爲賄度との儀斷出候得共賄方役所にて押之儀取計不致候に付暮方難相立難澁之向は先達て被　仰出候通願出可申候尤右主法は所務一歩通は除置利倍致遣不時入用宛に致させ候積には候得共操合差支之向は右除置候分暮方二字不明願出候得は下け遣可申事

○病死跡へ知行御切米渡し方

寛永十七年被　仰出

定

一子供之御夏貸不出以前に親相果候は不可出事

一御夏貸出候以後親相果候は子供之御夏借取返申間敷事

一暮之御切米以前に親相果候は子供御切米不可出事

一御切米取候て後親相果候は子供の御切米取返申間敷事

一相果候其年之物成被下候事不定に候へ共御役等之儀は先可申付候物成を不被下候はゝ役等之入用は御返し可被下事

一跡目つき候子供無之手前娘か後家か或は親類斗り有之仁正月より六月迄の内に相果候は地方被

召上重て相應に御合力可被下候七月より極月迄之内に相果候はゝ先役等可申付候但其年之物成不被下候はゝ御合力幷役等之入用は可被下候事

一養子仕御披露も無之内に親相果申候はゝ其年之物成は跡目無之と同意之事

右之通來巳より相定者也

寛永十七年辰霜月廿三日　三浦長門守
水野淡路守

「右一節は　龍祖御定法書及ひ監察府記錄に憑る類を以て爰に編す、子供とは跡目相續の總領等をいふなり、當時の通言ならんか、」

知行取之向病死跡へ其年所務被下振に付被　仰出之事

一是迄知行之面々七月へ入致病死候へは當所務被下候段其節々別段被　仰出候得共向後分けて右被仰出は無之都て是迄之通被下筈に候事

天保元寅年六月十七日

右同年被　仰渡帳に有之

跡目被　仰付御切米減候筋渡方左之通

一四月廿五日後病死跡目御切米減候筋は親へ相渡候夏貸を差繼暮御切米相渡し申候

一四月廿五日已前病死之筋跡目翌年被　仰出候ても前年夏貸分より被　仰付候通相渡申候

一四月廿五日後病死跡目翌年被　仰付候筋御切米減候へは前年之夏貸を差繼暮御切米相渡申候

一十一月廿五日後病死之筋年内跡目被　仰付候ても翌年より相渡し申候
一都て跡目と被　仰付候得は以下役被　仰付候ても右之通御目見以上之渡方に差別無御座候
右之通に御座候已上
御勘定所

馬扶持　根元覺帳

一知行三百石いつれ之御役義にても馬牽入候段斷有之候得は馬扶持相渡候筈知行百石之上御足米八十石被下候筋にても馬扶持相渡候筈總て御切米取之面々は縱令馬扶持候役にても馬扶持相渡り不申筈三百石被下候ても御役馬持候面々は縱は山家同心頭御天守預り御本丸預り御留守居物頭大番與頭御普請奉行田丸白子五十人者頭同所御目付三領御代官抔へ御切米取にても馬扶持相渡候筈
一御供番御使役は馬扶持願候得は相渡候筈
一京都役大坂役右同斷
一三領郡奉行爲馬扶持金拾兩つゝ年々御代官所より相渡追て郡中割に相立候筈
一御家中馬稽古致し候輩へ馬扶持被下來候得共寛延三年年より相止
一三百石已下之輩馬持候面々馬扶持之儀二升扶持にて候處元祿年中より三升扶持に相成候得共寶暦四戌年より一同二升扶持に相成當時馬扶持相渡候節は何れも二升扶持にて御座候
右一通
一三百石以下之面々馬持候得は馬扶持相渡候處元祿七戌年上け米被　仰付候節より右之面々馬持兼候へは馬放し可申候入用之節は御用之品に寄り御借馬被　仰付儀も有之旨被　仰出其節より山家

同心頭御天守番之頭御本丸番之頭御留守居物頭御普請奉行御供番大御番組頭へは其儘相渡上け米被　仰出候付馬扶持一升増に相成有之處天明七未年半知被　仰出候砌より右馬扶持相止候事

右三百石已下馬扶持相渡候儀元祿七以前より相見候得共初發之儀は分り兼申候

「下け札」　本文馬扶持一升増三升扶持之處寶暦四戌年より相減し二升に相成候事

一知行三百石取之面々へも元祿七戌年上け米被　仰付候節より都て馬扶持相渡候事

右上け米は元祿二巳年迄御徒頭格迄は二十歩一夫より已下三十歩一上け米被　仰付有之候處同年千石已下之者は上け米御免被　仰出候處同七戌年又々千石已下一等之通上け米被　仰出候事

一御家中諸士馬致稽古候輩へ馬扶持被下來候處寛延三午年より相止候事右は三百石已下御切米三十石二十五石にても御役に不拘相渡有之尤無足之筋へは渡方相見不申事

右寛延三午年知行御切米之内一等浮置致し候樣被　仰出前段二十歩一三十歩一は御免被　仰出浮置米に成り替り候趣に相見候事

一御先手物頭御目付御使番右三役は半知被　仰出候得共其儘馬扶持相渡尤御切米取へも無差別相渡候樣被　仰出候事

一江戸詰御供番知行三百高之筋右同樣相渡御切米取へは不相渡候事

寛政享和之度上け米之節御切米取有之候得共不相渡候處文化三子年御切米之面々歩増中馬扶持代り銀五枚相渡候樣被　仰聞候事

一勢州田丸白子五十人組之頭御目付御代官へも前々より相渡候事

本文御代官は已前郡奉行御代官之當役有之節に御代官へ相渡候事其節郡奉行馬扶持は郡中より相賄ひ當時郡奉行欠役御代官相兼候付右之引續にて馬扶持郡中より相賄候事

一寛政六寅年御用人火事場請計三百石高之筋へ相渡候處同十二申年より火事場請無差別相渡候事
都て手馬牽入且放候節に御勘定奉行へ斷相廻候極之事右は馬扶持手形傳法御藏にて引合に相成候事前々は手馬牽入有無之儀内々御勘定同心相廻らせ調候事

右之通

一御供番葛山六郎右衞門御切米取に付馬扶持不相渡之處步增年限中馬扶持代銀五枚被下候等文化三子年別紙寫之通被　仰聞御座候處步增御免に付被下銀相止難澁之趣再應願出候旨別紙之通江戸表より申越候馬扶持之儀知行三百石取へは相渡御切米取へは不相渡と之品相調させ候處其節之趣意當時にては難相分候得共知行取之儀は免過上米も致し凶年には御定之免に不足相立候得共御切米取之儀は豐凶に不拘其役々の免にて御切米相渡候事に付御切米取へは不相渡儀にても可有御座哉御目付御勘定吟味役御合力金銀之儀も御切米取へは不相渡候處近年極直御切米取へも相渡猶又當時は三百石以下へ免不足御足被下候事に付御供番御切米へも馬扶持相渡候方至當と相見候付是迄之通馬扶持代銀五枚一步減を以て被下候方にも可有御座哉御料簡相伺候事

馬扶持一ヶ年分

大豆七石二斗程

代三百六十目程　　但石五十目立

内へ　銀五枚

此一歩減
百九十三匁五分

浮置歩増年限中江戸詰御供番御切米取之面々へ馬扶持爲代年々銀五枚つゝ被下候筈に候尤半年之日數手馬放有之向へは右之内半分通相渡候間此段役所へ可被相通候已上

文化三子十二月九日　　熊倉次郎右衛門

梅澤十助殿

右進達之積奉行衆へ差出候處右は此方よりケ様に被相伺如何可仕哉と御政府へ相達候方可然との御料簡に付江戸よりの御追書之儘にて御進達相成候處左之通御背張にて御側御用人衆被成御渡候事　覺に御追啓御狀留にあり

「御背張」馬扶持相渡候御役々へは御切米取にても無差別相渡候樣可被取計事

江戸御金藏金銀渡し日

江戸御金藏金銀渡し日　　堀內私記

信案に御家中へ金銀御扶持方等渡し方に付ては、御勘定所御金藏、傳法御藏所、江戸築地及芝御藏所等之取扱諸規則不少と雖も、一切其書類を存せす、僅に此一項あるを以て參考に記載す、

御金藏極

一渡　金　　毎月十三日
七月に限り十日

一御役料幷兼勤等に付
被下金銀　　二月
十一月　二十日

一御切米秋渡り毎年十一月六日　　夏六月二十二日
暮十二月十八日

一御切米に准候
御合力金　　四月
十一月　晦日

一夫　金　　文化十三子年六月極　　六月 十二月 十三日 若當日差支あれは定日三日之内請取に可罷出事

一江戸詰被下　　六月 十二月 十三日

一御小姓組御合力金其外 衣類代羽織代渡月不同之分　　毎月二十日

御仕入炭極

千石　百五十俵　　九百石より 七百石迄　百俵

六百石より 四百石迄　七十俵　　三百五十石より 御切米三百石迄都合　六十俵

二百五十石より 御切米八十石迄　四十俵　　百五十石より 御切米五十石迄　三十俵

百石より 四十石迄　廿五俵

右之通尤壹度に右極程は不相濟年々二三度程つゝ喰切願候筈

信按に在中御救之爲め山方究民等へ元金を貸與し、炭を燒かせ（浦方は浦方のかせき方法あり）其事務を取扱ふ役所を御仕入方と云、世に有名なる熊野炭是也、此炭御家中願に依り其祿高に應し貸與せられ、知行御切米之内を以返納を遂くる成規なり、右は貸與依願之制限あり、

御貸人極　同上

一御切米二十九石迄　若黨　鎗持　挾箱持

一同四十石 知行百石迄 五十石　若黨　鎗持

一御切米六十石より八十石 知行百五十石より二百石迄　若黨

茶屋渡御仕着取扱振改正

信案に江戸詰之者他藩へ御名代御使勤候時は、相當之供廻り可召連成規に付、低祿之者へは御中間を貸與せらるゝ也、是を御貸人と稱す、御名代御使之節々御勘定所へ申達（是を元斷と云ふ）すれは、當日時刻に應し若黨には人廻し、御中間其他は平御中間を廻し來る也、

茶屋渡御仕着取扱振御改正之事　根元覺帳

一茶屋渡御仕着請取候役々左之通

御徒目付	御小姓目付	御徒押	御徒組頭	御徒
伊賀	御手筒同心	御小姓同心	御小姓方坊主	御小人目付
御小人押	御數寄屋坊主	御長刀之者	御駕	御駕之者
御小人	御厩者	御役者	樂人	相撲之者

右役々被　仰付之節幷御仕着請取之限月に至候はゝ相渡候樣との元斷夫々頭支配より評定所へ相廻し置茶屋へ請取に參り左雛形之袖印書付受取評定所へ差出候得は

（押切）袖印　何月渡　覺　茶屋印

一ちりめん羽織　壹

一｜

右者御徒誰

右を評定所にて元斷へ引合相調元斷へ添手紙にて茶屋へ相通し候得は茶屋より代銀取出し仮手形差出す右手形評定所にて引合候上評定所預奥印相濟口座へ差出す手形改判相濟せ茶屋代へ渡す元方御金藏より御金取出し左之進物手形を以て相渡

> 覺
>
> 縮緬羽織　壹
>
> 右者御徒何の誰方おいて受取候羽合羽折損候付仕立出來受取相渡申候
>
> 宛　御徒頭印

進物手形は追て夫々取集め評定所へ茶屋代より差出猶又評定所より元帳へ引合候上遂印形口座へ差出手形判相濟御勘定拂札に相成候事

茶屋仮手形は追て一紙極手形改判濟せ候節元方御金藏引合印を以て取扱候事

江戸表之儀も右同様之趣

文政二卯年迄右之通之扱振に候處同三辰年より改正若山にては口座江戸表にては當番方扱に相成候事

茶屋判賃定

一小判百兩に付	壹　匁	一貳朱金百兩に付	五　匁
一壹歩銀百兩に付	三　匁	一銀百目に付	十四文
一壹歩金百兩に付	百十四文	一二歩金百兩に付	二　匁
一五兩判百兩に付	三　匁	一錢一貫文に付	十四文

一一朱銀百兩に付　十　匁

按るに茶屋は茶屋宗味家にて都て正金銀を取扱ふ爲、替方にて今の銀行の如きものとす、茶屋常是包といへは、公儀御献上を初め包の儘改めなく一般に通用す、依て御音信初御家中被下金銀皆茶屋封にて判を印す、本文判賃は其包封の手數料のことを云也、

御馬中次料

御馬求候節中次料　根元覺帳

一馬代　十　兩迄	中次料　金壹歩	一同　二十兩迄	同　金二歩
一同　三十兩迄	同　金三歩	一同　四十兩迄	同　金一兩
一同　五十兩迄	同　金一兩三歩	一同　六十兩迄	同　銀二枚
一同　七十兩迄	同　金二兩	一同　八十兩より百兩迄	同　銀三枚

但中次料一人にて御馬數多肝煎候はゝ總馬代金高を以て右之通被下候事

中次とは馬賣買の周旋をなす即ち馬喰のこと也、御馬御買入の時は御馬預より、此中次へ申聞見せ馬を出させ試驗の上御買入をなす、右手數料を中次料と云ふ、

御謡初之御役者肩衣代

御謡初之御役者へ出候肩衣代左之通　同上

兩　家	金三百疋	万石以上	同二百疋
御老中方菊之間詰衆	同百　疋	大寄合已上	銀三　兩
御供番頭以上	同二　兩	布衣已上	同一　兩
頭役已上	同三　匁		

正月三日夜御謡初御式の節は、公儀の御式に被準肩衣を脱し、御役者へ付與するを代銀にて遣すの例とす、本文は其割合を云ふ、蓋し若山にての事なり

南紀徳川史巻之八十五

祿制第五

臣　堀内信　編

緒言

按に諸渡り物とは、御家中若山より江戸へ在勤之時、知行御切米の外に道中渡り金（旅費なり）夫金路銀御扶持方及江戸詰御扶持方類燒渡り御金等、各自祿高之多寡役柄により旅費初江戸在府中宛行はるゝ金米の等差割合の成規をいふ、此原簿は御勘定所に保管す、其謄本を同局より執政へ提出、維新迄同府に存在せしものによつて記載せり、

一諸渡り物は頗る錯雜の細則あつて一切御勘定所諸渡り物方と稱する屬吏の擔任する處にて、數拾年勤め馴れたる者と雖も識別に困しむ處故に、此簿一巻以て盡せりとはいひかたし、文中朱にて附紙下ヶ紙張り紙括り入と記したる分は、原則に明文又は適例なきものを御勘定奉行より伺出、政府より指令又は政府より御勘定奉行へ諮詢の答を附箋乃至原書の儘を括り込補綴したるもの也、今共に傍書編入す、

一渡り金の起因は御勘定所根元覺帳記する所左の如し、之に依れは京金御貸方を廢し、浮置米と稱して御家中知行御切米取米之内より歩合を以取除け米の法を設け、此内より旅費支給の事となりしを知るへし、次巻に揭くる浮置米調書に明和四亥改とあれば、渡り金の創設は寶暦後明和四年迄の間にありしならん、

御家中渡金は　有徳院樣御代には無御座其節は江戶詰之面々願之上京金と申御貸方御座候て御貸下元利五年賦返納にて年々取立候元利を又貸廻し候儀に付御收納より御金は出不申右年々取立之金高元利にて壹萬七八千兩程有之たる儀に御座候由

本文御かし方金高年々元利重さみ　大惠院樣御代寶曆之比は御かし方元金高五拾万兩餘に相成申候繁々江戶詰仕候者は段々借用高多相成子々孫々迄も上納皆濟無之儀に成行難相勤浮置米被　仰出渡り金と申儀被　仰出候事に御座候右被下切に相成五十万兩餘之內へ年々三万兩余も上納有之たる儀に御座候浮置米之納り高は米二萬三千石程にて米一石を金一兩かへに見候ても渡り金一萬兩と宛殘り一万三千兩ならては御藏へ殘り不申候前段御かし方有之節之納りと差引仕七千兩程御藏納り減し申候米下直に候得は猶更夫程御藏納り減し申候事

一原簿の表紙に左之附箋あり、參考に附記す、

一都て祿低にて同樣勤之面々
　渡り金本役同樣　夫金御扶持方持祿平し

文化二丑正月張紙に本文同樣勤之內渡り物差別之品同年十一月十一日同帳橫這に委く記之

一御家中江戶詰等渡り金等極別帳出來在之候事

文化十三子年右張紙とは政府帳簿之名稱也

記中初年詰とは若山より初て江戶へ一ヶ年在勤の事を云、直詰とは引續其儘詰越し在勤する也

立歸りとは一時の公務にて出府直ちに引返し歸國の時を云、若山にては一般扶持米夫金は渡らす、江戸詰の時は下付の成規也、江戸常府は此成規に准し、寄合小普請之外諸役共夫金扶持米を給與せらるゝ也、

御家中諸渡物

御家中諸渡り物帳

壹萬五千石平初年詰渡金

安藤帶刀殿

水野對馬守殿

一金四千百八拾兩

内千六百七十兩 若山御發足之節渡

三百十兩つゝ 御到着翌月より隔月六度

六百五十兩 江戸御發足之節渡

外に 金九拾兩御供増渡り金

江戸詰立歸渡金

元極七百九十六兩

同直詰渡金

一金千三百五十兩

同立歸往來渡金

六度渡

一金九百兩

若山御發足之節渡

外に 御供増

右同斷

壹万石平初年詰渡金

三浦長門守殿

一金貳千八百兩
内千百貳拾兩　若山御發足之節渡
貳百拾兩つゝ　御到着翌月より隔月六度渡
四百二十兩　江戸御發足之節渡
外に　金六十兩御供增渡金

同夫金

一金貳百六十八兩
内百三十四兩つゝ　江戸御發足之節渡
江戸にて渡

同直詰渡り金

元極七百九十六兩
一金九百兩　但六度渡

同夫金

一金貳百六十一兩貳分
内百三十兩三歩つゝ　六月十二月兩度渡
外に　六兩二歩　路銀分引

附紙

都て夫金之内往來路金分御年寄は十三兩大御番頭以上は六兩二歩其外は五兩つゝ籠り御座候故直詰年は往來不仕候付右路銀分引申筈に御座候得共御用捨にて左之通引申候

若山勝手路銀引

六兩二歩	御年寄	三兩一歩	大御番頭以上
二兩二歩	大御番頭已下三百石平迄	二兩	二百八十石平
一兩三歩	六十石平	一兩二歩	五十石平
一兩一歩	四十石平	一兩	三十石廿五石平
三歩	二十石平	二歩	十五石平

江戸勝手路銀引

不殘引

但し路銀引不初已前より取來之筋は半分引又は不引筋も御座候

同立歸往來渡金

一金六百兩　若山御發足之節渡

外に　御供增

同路銀　右同斷

一銀二十枚　若山御發足之節渡

七千石平初年詰渡金　久野近江守殿

一金千九百七十三兩

內七百八十九兩　若山御發足之節渡

百四十八兩つゝ　江戸詰之内六度

二百九十六兩　　江戸御發足之節渡
外に　金五十七兩御供増
萬石高被　仰付候得共渡り金差別無之様御内存之趣御談其通相成御勘定奉行へも申聞置候事
寛政八辰二月
同　夫金
一金百九十三兩
内九十六兩二歩つゝ　　若山御發足之節渡
江戸にて渡
同直詰渡金
元極四百五十四兩
一金六百三十四兩　　但六度渡
同　夫金
一金百八十六兩二歩
内九十三兩一歩つゝ　　六月十二月兩度に渡
外に　六兩二歩　　路銀分引
同立歸往來渡金
一金四百八十五兩　　若山御發足之節渡
外に　御供増　　右同斷

同路銀

一銀貳拾枚　若山御發足之節渡
　五千石平初年詰渡金
　　水野美濃守殿

一金千四百貳十兩
　内五百六十八兩　若山御發足之節渡
　　百八兩つゝ　江戸詰之内六度
　二百四兩　江戸御發足之節渡
　　外に　四十五兩御供增
　同夫金

一金百四十三兩
　内七十一兩二歩つゝ　若山御發足之節渡／江戸にて渡
　同直詰渡金
元極二百七十一兩

一金四百六十兩　但六度渡
　同夫金

一金百三十六兩二歩
　内六十八兩一歩　六月十二月兩度に渡

外に　六兩二歩　　路銀分引
同立歸往來渡金
一金三百五十兩　若山御發足之節渡
外に　御供增　　右同斷
同　路　銀
一銀二十枚　若山御發足之節渡
四千石平初年詰渡金
加納大隅守殿
一金千百四十四兩
内四百五十七兩　若山御發足之節渡
八十七兩つゝ　江戸詰之内六度に渡
百六十五兩　江戸御發足之節渡
外に　金三十八兩御供增渡金
同　夫　金
一金百十八兩
内五十九兩つゝ　若山御發足之節渡　江戸にて渡
同直詰渡金
元極二百十八兩

一金三百六十五兩
同　夫　金
但六度に渡

一金百十一兩二歩
五十五兩三歩つゝ
六月十二月兩度に渡
外に　六兩二歩
路銀分引
同立歸往來渡金

一金二百八十兩
外に　御供増
若山御發足之節渡
同　路　銀
右同斷

一銀二十枚
三千五百石平初年詰渡金
若山御發足之節渡

一金千六百兩
御　年　寄
内四百貳兩
若山御發足之節渡
七十五兩つゝ
江戸詰之内六度に渡
百五十四兩
江戸御發足之節渡
外に　金三十五兩御供増渡金
同　夫　金

一金百五兩貳歩　若山御發足之節渡
　内五十二兩三歩
　五十二兩三歩　江戸にて渡
　同直詰渡金
元極百九十二兩
一金三百二十兩　但六度に渡
　同夫金
一金九十九兩
　内四十九兩二歩つゝ　六月十二月兩度に渡
　外に金六兩二歩　路銀分引
　同立歸往來渡金
一金貳百四十五兩　若山御發足之節渡
　外に御供增　右同斷
　同路銀
一銀二十枚　若山御發足之節渡

下ケ紙又ハ張紙
御年寄格之御側御用人以來江戸往來之節渡り金三千五百平相渡候筈及取計相濟其段御勘定奉行へ元相通候事
寛政十一未年二月十五日
右渡り金以前之通三千石平に相成其段御勘定奉行へ申通候品張紙帳に記

享和元酉七月十日

〇三千石平し

一金八百六十八兩　江戸一ヶ年詰渡金

一金九十三兩　同夫金

一五十二人扶持　江戸御詰御扶持方

一金貳百十兩　江戸へ御立歸御往來渡金

一銀二十枚　同路銀

〇三千石平

江戸常府
一金八十兩　一ヶ年分夫金

〇千五百石平し渡り金

一金百五兩　江戸立歸往來分

是は千三百石平し立歸往來渡金九十一兩を千三百石に割千五百石分

一金五百二十二兩　江戸一ヶ年詰渡金
往來分共

是は千三百石平し一ヶ年詰渡り金四百五十三兩を千三百石に割千五百石分

一金百八十三兩　江戸直詰
一ヶ年渡り金

は千三百石平し直詰渡り金百五十九兩を千三百石に割千五百石分

文化二丑正月極

下ヶ紙

一金五百二十二兩　詰往來分

内百四十一兩

三百八十一兩　　江戸詰十二月分
但一ケ月　　三十一兩三歩
一日　　一兩三匁四分九厘

○御年寄三千石二千石共渡金

三千五百石平し所々御使等は三千石平し夫金御扶持も三千石平し江戸立歸も三千石平し之旨
立歸にても御逗留日數七十日餘に相成候得は御歸片道分三千五百石平し相渡候極之旨
文化八未年十月留役より奉行へ聞合之上右之通答有之候事

千三百石平初年詰渡金

一金四百五十三兩　　大寄合
　内金百八十壹兩　　江戸發足之節渡
　三十二兩つゝ　　到着翌月より隔月六度
　八十兩　　江戸發足之節渡
　外に　金三十兩御供增渡り金
同　夫金
一金四十四兩
　内二十二兩　　若山發足之節渡
　二十二兩　　江戸にて渡
同直詰渡金
元極八十九兩

一金百五十九兩　但六度渡
同　夫金
一金四十兩三步　六月十二月兩度に渡
內二十兩一步二朱つゝ
外に　三兩一步　路銀分引
同立歸往來渡金
一金九十一兩　若山發足之節渡
外に、御供增　右同斷
同　路　銀
一銀十枚　若山發足之節渡
千貳百石平初年詰渡金
一金四百三十七兩
御　傳
內百七十五兩　若山發足之節渡
三十一兩つゝ　到着翌月より隔月六度
七十六兩　江戶發足之節渡
外に　金三十兩御供增渡金
同　夫金

一金四十一兩二歩
内二十兩三歩　若山發足之節渡
二十兩三歩　江戸にて渡
同直詰渡金
元極八十五兩
一金百五十九兩　但六度渡
同夫金
一金三十八兩一歩
内十九兩二朱つゝ　六月十二月兩度に渡
外に　三兩一歩　路銀分引
同立歸往來渡金
一金八十四兩　若山發足之節渡
外に　御供増　右同斷
同路銀
一銀十枚　若山發足之節渡
千石平初年詰渡金
一金三百九十八兩
大番頭
同格

内百五十九兩　　若山發足之節渡
二十九兩つゝ　　到着翌月より隔月六度
六十五兩　　江戸發足之節渡
外に 金二十兩御供増渡金
一金三十六兩二歩
同 夫 金　　但千石より内の大番頭格夫金は持祿平
内十八兩一歩　　若山發足之節渡
十八兩一歩　　江戸にて渡
元極七十九兩
同直詰渡金
一金百三十二兩　　但六度渡
同 夫 金
一金三十三兩一歩
内十六兩二歩二朱つゝ　　六月十二月兩度に渡
外に 三兩一歩　　路銀分引
同立歸往來渡金
一金七十兩　　若山發足之節渡

外に 御供増　右同斷

一銀十枚

同 路 銀　若山發足之節渡

八百石平初年詰渡金

一金三百三十一兩　御 用 役

但大寄合格は千三百石平
大番頭格は千石平

内百三十二兩　若山發足之節渡

二十四兩つゝ　到着翌月より隔月六度

五十五兩　江戸發足之節渡

外に 金十九兩御供增渡金

同 夫 金

一金三十兩　但夫金は持祿平

内十五兩　若山發足之節渡

十五兩　江戸にて渡

同直詰渡金

元極六十五兩

一金百十兩　但六度に渡

同夫金

一金二十七兩二歩

內十三兩三歩つゝ　六月十二月兩度に渡

外に　二兩二歩　路銀分引

同立歸往來渡金

一金六十兩　若山發足之節渡

外に　御供増　右同斷

同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡

六百石平初年詰渡金

一金二百六十四兩　奉行

但六百石以上は六百石平六百石以下は持祿平
大番頭格は祿高に不拘千石平

內百五兩　若山發足之節渡

十九兩つゝ　到着翌月より隔月六度

四十五兩　江戸發足之節渡

外に　金十七兩御供増渡金　但大番頭格之外無差別

同夫金

一金二十五兩　　但六百石以下持祿平
　内十二兩二歩　　若山發足之節渡
　　十二兩二歩　　江戸にて渡
　　同直詰渡金
元極三十四兩
一金九十兩　　但六度に渡　但大番頭格之外無差別
　　同夫金
一金二十二兩二歩　　但六百以下は持祿平
　内十一兩一歩つゝ　　六月十二月兩度に渡
　外に　二兩二歩　　路銀分引
　　同立歸往來渡金
一金五十兩　　若山發足之節渡
　外に　御供増　　右同斷
　　同路銀
一銀七枚　　若山發足之節渡
　　五百石平初年詰渡金
一金百九十八兩　　大　組

静澄院様
桂香院様　御附
御前様

内七十九兩　但五百石以上五百石以下持祿平
十四兩つゝ　若山發足之節渡
三十五兩　到着翌月より隔月六度
外に　金十一兩御供增　江戸發足之節渡
同　夫金
一金二十二兩二歩
内十一兩一歩　若山發足之節渡
十一兩一歩　江戸にて渡
同直詰渡金
元極三十九兩
一金七十五兩　但六度に渡
同　夫金
一金二十兩
内十兩つゝ　六月十二月兩度渡
外に　二兩二歩　路銀分引
同立歸往來渡金

一金四十五兩　若山發足之節渡
外に　御供增
　　路銀　右同斷

一銀七枚　若山發足之節渡
四百石初年詰渡金

御用御取次御供外にても增渡金有之
御供番頭格共
御使役頭格共
御用達
御持弓頭
御持筒頭
御中乘
御目付

一金百七十一兩
內六十八兩　若山發足之節渡
十二兩つゝ　到着翌月より隔月六度
三十一兩　江戶發足之節渡
外に　御供增渡金左之通
十五兩つゝ　御供番頭格共
御用達

御使役頭 格共
御持弓頭
十三兩つゝ　御持筒頭
御中乗
御目付
同 夫金
一金二十兩　但御用達御中乗御目付は三百石平し十七兩二歩つゝ
内十兩　若山發足之節渡
十兩　江戸にて渡
同直詰渡金
元極三十四兩
一金七十兩　但六度渡　御供番頭御用達は七十五兩つゝ
同 夫金
一金十七兩二歩　但御用達御中乗御目付は十五兩つゝ
内八兩三分つゝ　六月十二月兩度に渡
外に 二兩二歩　路銀分引
同立歸往來渡金
一金四十兩　若山發足之節渡

外に 御供増
同路銀
右同斷

一銀七枚
三百石平 初年詰渡金
若山發足之節渡

中之間頭
御小姓頭
大小姓頭
表御小姓頭
御鷹匠頭
詰番頭
御薬込頭
御手弓頭
御手筒頭
十人組頭
物頭
五十人者頭
御徒頭
御使番
添奉行
寄合

御供番與頭

御附
明脱院様
永隆院様
清信院様

物頭

御徒頭　但二百八十石取之者頭御徒頭は二百石八十石平

御目付　但三百石以上

十人組頭格
御子様方

御附
御姫様方

諸頭役格　但三百石以上

一金百三十一兩

内五十二兩　若山發足之節渡

九兩つゝ　到着翌月より隔月六度

二十五兩　江戸發足之節渡

外に　金十兩充御供増渡金　但中之間番頭御小姓頭は十二兩つゝ

同　夫金

一金十七兩二歩

内八兩三歩　若山發足之節渡

八兩三歩　江戸にて渡

同直詰渡金

元極二十六兩

一金五十三兩　　但六度に渡

中之間番頭御小姓頭は七十兩大小姓頭より十人組頭迄五十五兩つゝ

同　夫　金

一金十五兩　　六月十二月兩度に渡

内七兩二歩

外に　二兩二歩　　路銀分引

同立歸往來渡金

一金三十兩　　若山發足之節渡

外に　御供増　　右同斷

同　路　銀

一銀七枚　　若山發足之節渡

左の一例見合して附記す

御勘定所へ問合答に

御小納戸頭取　二百石高

一金四十兩　若山一ヶ年詰

内十六兩　發足之節

三兩つゝ到着翌月より隔月六度

六兩　歸分

外に御供増七兩つゝ片道分

張紙

御小納戸頭取

三百石已上之面々三百石平し

夫金

一金十二兩二歩

外に五兩　　路銀分引

諸頭取格

御小姓

三百石以上にても馬持不申面々は

夫金

一金十兩三歩

馬持候得は三百石平し

一金十二兩二歩

外に五兩路銀分引

寛政十一未八月

張紙

諸渡物二百石平三百石以上は三百石平相渡候事

寛政十一未九月　少將樣方御用人

張紙

寛政十一未八月十日御勘定奉行へ通

一岡田忠左衛門（五百石　金二十兩　御小姓頭取　御小姓頭格）儀御小納戸頭取なとも兼相勤三百石以上に付夫金御扶持方三百石平し相渡候筈

別紙にて

御小姓渡り物被下物

文化五辰閏六月奥掛り聞合候處別紙さし出候事

三百石以上之御小姓若山にて被　仰付自分道中にて江戸へ参り候節被下幷受取物左之通

一金十五兩　支度金
一金十八兩　初て江戸へ参り候付被下之
一金三十五兩　同斷渡金
一金十二兩　夫金
一百匁余り　繼馬代

右之筋初て御供返りにて参り候得は前段十五兩之支度金貳十兩に相成候事

右之筋初てには無之若山御發駕前被下幷受取物左之通

一金十五兩　支度金　但御當日御供は二十兩
一金二十兩　御當日御供に罷越に付被下之
一金十二兩　夫金
一百匁余り　繼馬代

右之筋江戸にて被　仰付其年にても翌年にても若山へ御供返にて参り候節左之通

一金十八兩　初て若山へ参り候付被下
一金十五兩　支度金　但御當日御供は貳十兩
一金三十五兩　初て参り候に付渡り金
一夫金日數割合
一百匁余り　繼馬代
一金十五兩　例之通被下

右之筋初てにも無之江戸御發駕前被下幷受物左之通

一金十五兩　例之通被下
一金十五兩　支度金
一夫金月數割合

一百匁余り　　繼馬代

一三百石以下御小姓若山にて被召出自分道中にて參り候節被下受取物左之通

一金十五兩　　道中支度金

一金十八兩　　初めて江戸へ參候付被下

一金三十五兩　　初めて渡り金

一金六兩　　御合力金半年分

一二百六十二匁　　御仕着代半年分

一金拾二兩　　夫金一ヶ年分

一百匁余り　　繼馬代

右之筋初てにも無之受取物左之通

一金二十兩　　御當日御供に付被下

一金二十兩　　御供に罷越候に付被下

一金十二兩　　夫金一ヶ年分

一百匁余　　繼馬代

一金六兩　　御合力半年分

一二百六十二匁　　御仕着代半年分

一御小姓中一ヶ年被下受取物

一金二十兩

右は三百石以下にて御小姓に被　仰付候節被下

但三百石以上并御小納戸より被　仰付候筋へは被下無之

一金二十五兩　　御納戸金被下

一金十二兩　　御合力被下

但三百石以上は無之

一銀五百二十七匁　　御仕着代被下

但右同斷

一金拾兩　　皆勤被下

但當時一兩減　　九兩被下

一金拾兩　　御櫛番相勤候筋へ被下

但當時右同斷

一立歸り御小姓中へ被下左之通

一金三十五兩　　發足之節被下

一金二十兩　　歸り之節被下

一百五十八匁余　　繼馬代　木曾往來分

右同初ての筋

一金三十五兩　　發足之節被下

一金十八兩　　　支度金被下
右之通に御座候以上
六　月

御小姓渡り物

御小姓中年中被下金幷渡り物
一金二十五兩
　内十兩　　　七月被下
　拾五兩　　　暮被下
一夫金拾二兩
　内六兩　　　六月渡
　六兩　　　十一月渡
　　但右夫金は若山にては無之
一御合力金十二兩
　内六兩　　　二月渡
　六兩　　　十一月渡
一銀五百二十七匁
　内二百六十二匁　　　二月渡り
　二百六十五匁　　　十一月渡
一三百石以上へは御合力金御仕着代は不被下筈
一無足にて相勤候筋へは
　一金二十五兩　　　浮置上げ金有之
　　内十兩　　　春渡
　　十五兩　　　暮渡
一年中無懈怠相勤候得は
　金十兩被下
一御櫛番相勤候筋へは
　金十兩被下
一御小姓被　仰付又は被　召出候節
　一金二十兩
右は爲支度金被下之
一御歸國之節御供通御小姓中へ被下筋
一金十五兩つゝ
右は例之通被下之
一金二十兩つゝ
右は御當日御供に參り候付爲支度金被下之

但し二日御先に罷越候御小姓中右支度金拾五兩被下之且頭取罷越候筋へは都合二十兩之積に被下之

一金十三兩つゝ
右は初て若山へ參り候付被下之
一金十兩つゝ
右は御相續初て御國へ被爲入候付被下之
一御參府之節御小姓中へ被下筋
一金二十兩つゝ
右は御當日御供に參り候付爲支度金被下之
一金二十兩つゝ
右は當春御供にて江戸へ罷越候付被下之
一御小姓被　仰付江戸へ參候節
一金二十兩つゝ
右は御小姓被　仰付に付支度金被下之
一金十八兩つゝ
右は初て江戸へ參り候付前々之通被下之
一金十五兩つゝ
右は道中爲支度金前々之通被下之
右被下物之外に御小姓にて初て江戸往來之節計渡り金三十五兩有之候

右之通り

御部屋方

二百石 八十石 平初年詰渡金

御藥込頭
御小納戸頭
御城附
西丸御機嫌伺
奥御右筆組頭
御供番
御弓役

一金六十七兩
張紙にて御供番格並以上
知行御切米御足高にても三百石高者

御使役

静澄院様
桂香院様
御前様
御附

但御使役並八十石以上

内二十六両　若山發足之節渡

四両つゝ　到着翌月より隔月六度

十七両　江戸發足之節渡

外に　金五両御供増渡金

但頭役は七両

同　夫金

一金十一両二歩　但御薬込頭御城附西御丸御機嫌伺御附差添物頭御徒頭二百石取は十五両御小納戸頭は六十石平九両二歩御供番御弓役は百二十石平十三両三歩

内五両三歩　若山發足之節渡

五両三歩　江戸にて渡

同直詰渡金

元極十三両

一金二十六両　但六度に渡

但御薬込頭は五十三両三百石以上

同　夫金

一金九両二歩　但御薬込頭御城附西丸御機嫌伺御付差添物頭御徒頭二百石取は十三両御小納戸は六十石平七両三歩御供番御弓役は百二十石平十一両一歩

内四兩三歩つゝ　六月十二月兩度渡
外に 二兩　路銀分引
同立歸往來渡金

一金二十兩　若山發足之節渡
外に 御供増　右同斷
同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡
右之內御使役貳百石取迄は金十五兩江戸詰被下相渡り申候 但半年分つゝ七ヶ月目に渡
六十石平初年詰渡金

一金四十兩
御供番格並以上 御切米百石高より二百九十石高迄

諸頭役格 但三百石不詰六十石以上
御子樣方　十人組頭格 右同斷
明脫院樣 永隆院樣 清信院樣　御目付
御弓役並
御作事奉行
賢姫樣 悦姫樣　御馬支配
御附差添 但御使役並六十石以上

内十六兩　　若山發足之節渡
三兩つゝ　　到着翌月より隔月六度
六兩　　江戸發足之節渡
外に　金五兩御供增渡金
但頭役は七兩　御作事奉行三兩
同　夫金
一金九兩二歩　　但御作事奉行は九兩
內四兩三歩　　若山發足之節渡
四兩三歩　　江戸にて渡
同直詰渡金
元極七兩
一金貳十六兩　　但六度に渡
但御弓役並御作事奉行御馬支配御附差添は二十兩　御作事奉行元極は六兩
同　夫金
一金七兩三歩　　但御作事奉行は七兩二歩
內三兩三歩二朱つゝ　　六月十二月兩度に渡
外に　一兩三歩　　路銀分引
同立歸往來渡金

一金十五兩　若山發足之節渡

外に 御供增　右同斷

同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡

右六十石平之內

一金十兩被下金　御作事奉行

但御切米五十石取にて江戸詰之節渡六十石取へは不渡二月霜月兩度渡

一銀十枚　御馬支配

但江戸詰之內二十九石取迄は金十兩二月霜月兩度に渡る

一銀二枚　同

右同斷御厩之者一人分給扶持代り被下二月霜月兩度に渡る

五十石平初年詰渡金

中之間番與頭

儒者

但五十石以上

御茶道頭

御使役幷諸役人

但五十石以上

一金三十四兩　奧御右筆留役

御小納戸頭之上
御徒頭格共
但右兩役共三百石不詰五十石以上
御目附
御留守居役

内十三兩　若山發足之節渡
二兩つゝ三度　三兩つゝ三度
六兩　江戸發足之節渡
外に 金三兩御供增渡金　但頭役格は四兩儒者御茶道頭は一兩
張り紙に　五十石高
江戸詰被下金五兩中之間番與頭
但六十石已上へは不渡
寛政三亥十二月極

同夫金
一金九兩
内四兩二歩　若山發足之節渡
四兩二歩　江戸にて渡
同直詰渡金
元極六兩
一金拾二兩　但六度渡

同夫金

一金七兩二歩　　六月十二月兩度に渡

内三兩三歩つゝ

外に　一兩二歩　　路銀分引

同立歸往來渡金

一金十四兩　　若山發足之節渡

外に　御供增

同路銀　　右同斷

一銀七枚　　若山發足之節渡

四十石平初年詰渡金

御膳番

御腰物奉行

詰番

御右筆

御目附

御廣敷番

但右兩役三十石取は三十石平之筈

一金二十七兩

靜澄院樣
桂香院樣
御前樣

内十兩　　若山發足之節渡

二兩　　到着翌月より隔月六度

五兩　　江戸發足之節渡

外に　金三兩御供増渡金
但御膳番は四兩

同　夫金

一金九兩　　若山發足之節渡

内四兩二歩

四兩二歩　　江戸にて渡

同直請渡金

元極五兩

一金九兩　　但六度渡

但御膳番は十二兩

同　夫金

一金七兩二歩

内三兩三歩二朱つゝ　　六月十二月兩度に渡

外に　一兩一歩　　路銀分引

同立歸往來渡金

一金十二兩　　若山發足之節渡

外に 御供増　右同斷
同路銀
一銀七枚　若山發足之節渡
三十石平初年詰渡金
一金貳拾壹兩
内八兩　若山發足之節渡
壹兩つゝ　三度　二兩つゝ　三度
四兩　江戸發足之節渡
外に 金三兩御供増渡金
同夫金

大納戸
御子様方
御供役
詰番格
但三十石以上
御勝手役元〆
留書役
但御切米百石高より二百九十石迄は六十石平知行
御切米足米にても三百石高被下候輩は八十石平
御鷹匠與頭
儒者
但五十石不詰三十石以上
御同朋

一金九兩　　若山發足之節渡
　內四兩二步
　四兩二步　　江戸にて渡
　　同直詰渡金
元極四兩
一金九兩　　但六度渡
但大納戸儒者御同朋は七兩御鷹匠與頭は詰金四兩相渡夫金不相渡候付九兩三歩
　　同夫金
一金八兩　　御鷹匠與頭は夫金不相渡詰金四兩渡
　內四兩つゝ　　六月十二月兩度に渡
　外に一兩　　路銀分引
　　右三十石平之內
　　　　御子樣方　御供役
一金六兩被下金
但三月十月兩度に渡四十石以上へは不渡
一銀五枚役料　　御勝手元〆
但若山にては金二兩二十石取は三兩四十石以上不渡
　　同立歸往來渡金
一金八兩　　若山發足之節渡

一銀七枚　右同斷
外に御供增
同路銀
若山發足之節渡

二十五石平初年詰渡金

大小姓
同格
御膳番格
御召御具足奉行
奥之番
御近習番
御膳奉行
中之間番
御賄頭
御金奉行
御繪師

一金十七兩
内七兩　若山發足之節渡
壹兩つゝ　到着翌月より隔月六度
四兩　江戸發足之節渡
外に金三兩御供增金

同夫金

一金九兩

内四兩二歩　若山發足之節渡

四兩二歩　江戸にて渡

同直詰渡金

元極三兩

一金九兩　但六度に渡

但御賄頭御金奉行御繪師は七兩

同夫金

一金八兩

内四兩つゝ　六月十二月兩度に渡

外に一兩　路銀分引

右二十五石平之内

一金七兩被下金　大小姓

但三月十月兩度に渡三十石取以上六兩四十石取以上不渡

一金七兩衣類代　同

但二月霜月兩度に渡二百石取以上へは不渡

御膳番格
御召御具足奉行
御近習番

一金十五兩被下金
但三月十月兩度に渡三十石取は十兩三十五石取は六兩四十石以上不渡

奥之番

一金十四兩被下金
但三月十月兩度に渡知行二百九十石迄渡御切米二十五石取は十五兩

御膳奉行
御中之間番

一金七兩被下金
但三月十月兩度に渡三十石取以上は六兩四十石以上は不渡
同立歸往來渡金

一金八兩　若山發足之節渡
外に 御供增　右同斷
同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡
貳拾石平初年詰渡金

御部屋方 御膳奉行

留役
留書見習留役助同見習共二十石以上は諸渡物二十石平之筈

一金十五兩

江戸
青山
澁谷
御上屋敷
明脫院樣
永隆院樣
清信院樣
賢姫樣
悦姫樣
御子樣方

下肝煎
十人組與頭
御屋敷目付
進物御番
十人組
御右筆見習
御中間頭
御馬役
御勝手役
八丁堀御藏奉行
惣御庭番
御殿預
御屋敷預
奥役人
御玄關番
御廣敷番
御賄頭
御目付
御廣敷番
御賄頭
御近習番
中小姓與頭
御抱守
中之間番
大目付方認物勤
十人組並小寄合
同諸役人

内六兩　若山發足之節渡
一兩つゝ　到着翌月より隔月六度
三兩　江戸發足之節渡
外に　金三兩御供増渡金
同　夫金

一金九兩
内四兩二歩　若山發足之節渡
四兩二歩　江戸にて渡
但留役下肝煎十人組與頭御屋敷目付進上物御番十人組御右筆見習御中間頭十人組并小寄合御子樣方中小姓組頭中之間番は被下金相渡候に付夫金七兩渡四十石取以上へは被下金不相渡候に付夫金本行之通渡
同直詰渡金

元極二兩
一金七兩　但六度渡
但御部屋方御膳奉行留役下肝煎は九兩
同　夫金

一金八兩一歩
内四兩二朱つゝ　六月十二月兩度に渡
外に　三歩　路銀分引

但　留役下肝煎十人組與頭御屋敷目付進物御番十人組御右筆見習御中間頭十人組並小寄合御子樣方中小姓與頭中之間番は被下金相渡候に付夫金六兩一歩渡四十石以上へは被下金不相渡夫金本行通之渡

張紙に　中村市郎右衛門（御切米十五石御足米五石）與御右筆留役同樣被　仰付候に付渡金五十石平夫金御扶持方持祿平江戸詰被下金六兩役料十兩相渡可申哉之跡方申談御勘定奉行申談候に付其通相渡候樣及挨拶候事

寛政十二申二月

右二十石平之內

一金七兩被下金

御部屋方　御膳奉行
御子樣方　御近習番

但三月十月兩度に渡
三十石以上六兩四十石以上不渡

一金六兩被下金

留役
下肝煎
十人組與頭
御屋敷目付
進物御番
十人組
同並小寄合
御右筆見習
御中間頭
御子樣方　中小姓與頭
中之間番

但三月十月兩度に渡四十石已上は不渡

但三月十月兩度に渡四十石以上は不渡

括り入にて

十人組並小寄合渡物究
戌九月會所開合候書付

十人組並小寄合にて江戸詰之節渡り物左之通極りにて御座候

十人組並小寄合
金十五兩　二十石以上
金九兩　夫金路金
金十兩　十五石取
金七兩　増渡り金

右小寄合江戸詰被　仰付藝掛りにて相詰候得は渡物左之通

十人組並小寄合藝掛り
金十五兩　二十石以上
金九兩　夫金路金
金六兩　被下金

右同斷
金十兩　十五石取
金九兩　夫金路金
金六兩　被下金

右小寄合江戸詰被　仰付十人組之通相勤候得は渡物左之通

金十五兩　二十石にても十五石にても渡り金
金七兩　夫金路金
金六兩　被下金

右之通に御座候尤十人組並小寄合江戸詰藝掛り並十人組之通相勤候との元通し之上相渡候筈

九　月

一金十兩御役料　留　役
但二月十一月兩度に渡り三十石以上不渡
若山にては八兩

一金八兩御役料　　下肝煎
但二月十一月兩度に渡三十石取以上不渡
　若山にては六兩

一金八兩御合力　　十人組與頭
但二月十一月兩度に渡三十石取以上不渡
　若山にては六兩

一金五兩　　御屋敷目付
但二月十一月兩度に渡是は人足二人分給扶持代り
　江戸詰年被下

一金五兩御役料　　進物御番
但二月十一月兩度に渡江戸詰年被下

一銀百目羽織代
夏羽織三十目　　御子樣方
冬羽織七十目
但七ヶ月目充にて渡　　同
十人組與頭
十人組
中小姓與頭
中之間番

一銀五枚御役料　　御勝手役
但二月十一月兩度に渡若山にて二十石取へは金三兩二十石以上三十九石迄二兩四十石以上不渡

同立歸往來渡金

一金五兩　　若山發足之節渡
外に　御供增　　右同斷
同　路銀

一銀七枚　　若山發足之節渡

十五石平初年詰渡金

十八人組幷諸役人
御部屋方
御帳附
御中間頭
御子樣方
御近習番
御中間頭
下調役
御金方

一金十七兩
張紙にて　御目見已上
寺社吟味役
享和二戌十月附込に

内七兩　　若山發足之節渡

一兩づゝ四度　　壹兩二歩一度

四兩二歩　　江戸發足之節渡

外に　金二兩御供增渡金　　但夫金取は三兩渡る

右之内夫金渡り候筋は本行渡金拾兩之筈

同直詰渡金

元極五兩

一金十二兩　　但六度渡

右之内夫金は七兩小夫金取は八兩

右十五石平之内

一金九兩夫金　　十人組並諸役人之内御切米二十石取にて十五石平之筋
　　御中間頭
　但直詰之年は本行之内路銀分金二歩引初年詰は江戸若山にて半分つゝ渡直詰は六月十二月兩度に渡

一金七兩夫金
　　御帳附
　　常御供
　但直詰之年は本行之内路銀分金二歩引初年詰は江戸若山にて半分つゝ渡直詰は六月十二月兩度に渡
　　御近習番　十五石取

一金四兩夫金
　御子樣方　御中間頭
　　　　　　中小姓並諸役人
　御部屋方　御中間頭
　　　　　　御帳附

一金六兩被下金
　御子樣方　常御供
　　　　　　御近習番
　但御近習番は七兩

張紙にて
　頭役格常御供三百石以下六十石以上渡り金八十石平御扶持方十人扶持御合力金十五兩相渡候筈
　文化十二亥二月張紙

括り入にて
　常御供渡り物之事
　寛政二戌六月

一江戸詰被下金六兩
一羽織代百目
右之通相渡候事
下け紙　本文常御供之儀十人組並以上へ兩樣共無差別相渡候極り御座候付此度被　仰付候田中儀兵衛
仲津右衛門へも員數同樣相渡候筈

御子樣方
御中間頭
中小姓並諸役人

一金三兩被下金

一銀百目羽織代　常御供

一金拾兩藥種代　馬醫
但江戸一人にて相詰候得は本行之通相渡二人相詰候得は五兩つゝ渡

同立歸往來渡金

一金八兩　若山發足之節渡

外に　御供增　右同斷

十三石平初年詰渡金

奥役人

御書物方物書
右二十石不詰十人組並は十三石平

一金拾六兩
御子樣方
中小姓
同並

內六兩　若山發足之節渡

壹兩つゝ四度　一兩二歩一度
四兩二歩　江戶發足之節渡
但中小姓同並は夫金相渡候附本行渡金九兩
外に　金二兩御供增金
但中小姓同並は三兩
同直詰渡金
元極五兩
一金十二兩　但六度渡
但中小姓同並は夫金相渡候付本行渡金八兩
右十三石平之內
一金四兩夫金　中小姓同並
但初年詰は若山にて不殘渡直詰は六月十二月兩度に渡
一金三兩被下金　中小姓同並
但三月十月兩度に渡
一銀八十六匁羽織代　中小姓
但七ヶ月目つゝに半分つゝ渡し十五石取へは七十匁渡
同立歸往來渡金

一金八兩　若山發足之節渡
外に御供增　右同斷
十石平初年詰渡金

御鷹匠

一金十三兩三歩
但五十歳以下は十二兩一歩
内五兩二歩　若山發足之節渡
一兩つゝ四度　三歩一度
三兩二歩　江戸發足之節渡
外に金二兩御供增渡金
同直詰渡金
元極五兩
一金八兩　但六度渡
一金四兩詰金
但初年詰は江戸若山にて半分つゝ渡
直詰は六月十二月兩度に渡
同立歸往來渡金
一金八兩　若山發足之節渡
但五十歳已下七兩
外に御供增　右同斷

張紙に（以下之分　寺社吟味役　享和二戌十月附込

御匙醫師

一金九十兩

三百石平初年詰渡金

內三十六兩　若山發足之節渡

五兩つゝ五度　六兩一度

二十三兩　江戸發足之節渡

同　夫金

一金十七兩二歩

內八兩三歩　若山發足之節渡

八兩三歩　江戸にて渡

同直詰渡金

元極二十六兩

一金五十三兩　但六度に渡

同　夫金

一金十五兩

內七兩二歩つゝ　六月十二月兩度に渡

外に　二兩二歩　路銀分引

同立歸往來渡金

一金三十兩　若山發足之節渡

同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡

御匙　御醫師

張紙に

右御供增渡金十兩つゝ相渡候筈
寛政二戌年九月十二日

渡り物差引

靜澄院樣
桂香院樣御付　御醫師

右五十石以上は五十石平五十石以下は持祿に平し候筈

一金九兩　一ヶ年夫金
内五兩金引　但常府之筋は
一金五人扶持　御扶持方

二百石平
御匙醫格

括り入にて

一金十五兩　一ヶ年夫金
内五兩路金引常府之筋は
一六人扶持　御扶持方

右二百石以下之御匙醫格御醫師渡金之儀は其儘二百石積りに相渡夫金御扶持方は持祿に隨ひ相渡候筈

聖聽院樣御付　松村養亭

同

九兩夫金
一金四兩　一ヶ年夫金
外に五兩は路金分引
一御扶持方五人扶持

右は常府に付渡金は不相渡夫金は路金を引本行之通り相渡尤右渡り物御匙格不被仰付以前之渡物五十石平し

右同人

十七兩二歩
一金十二兩二歩　　一ヶ年夫金
外に五兩は路金分引
一御扶持方　十一人扶持
右は寛政十一年未八月御匙醫格御加増三百石被　仰付候付三百石平夫金御扶持方相渡

同江戸勝手若山詰

一金八拾兩　御匙御醫師
内三十二兩　江戸發足之節渡
四兩つヽ二度　五兩つヽ四度
貳十兩　若山發足之節渡
但夫金御扶持方は相渡不申候

同立歸往來渡金

一金三十兩　江戸發足之節渡

同路銀

一銀七枚　江戸發足之節渡

二百石平初年詰渡金

一金四十兩　御匙並醫師
但二百石より内は渡金は二百石平夫金御扶持方は持祿平
内十六兩　若山發足之節渡

二兩つゝ四度　三兩つゝ二度
拾兩　江戸發足之節渡
外に　金三十兩御供往來分增渡金
但片道は十五兩御供外にて往來は二十兩增
同　夫金
一金十五兩
内七兩二歩　若山發足之節渡
七兩二歩　江戸にて渡
同直詰渡金
一金十三兩　但四度に渡
同　夫金
一金十三兩
内六兩二歩つゝ　六月 十二月 兩度に渡
外に　貳兩　路銀分引
同立歸往來渡金
一金十三兩　若山發足之節渡
外に　御供增　右同斷

同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡

同江戸勝手若山詰渡金

一金三十兩

御匙並御醫師

内十二兩

一兩つゝ三度　二兩つゝ三度

九兩　若山發足之節渡

外に　金三十兩御供往來增渡金

但片道は十五兩御供外にて往來は二十兩增

同立歸往來渡金

一金十三兩　江戸發足之節渡

外に　御供增　右同斷

同路銀

一銀七枚　江戸發足之節渡

四十石平初年詰渡金

一金三十五兩

總御醫師

内十四兩　若山發足之節渡

二兩つゝ四度　三兩つゝ二度
七兩　江戸發足之節渡
外に　金三十兩御供往來增渡金
但片道は十五兩御供外にて往來は二十兩
同　夫金
一金九兩
內四兩二歩　若山發足之節渡
四兩二歩　江戸にて渡
同直詰渡金
元極七兩
一金九兩
同　夫金　但六度に渡
一金七兩三歩
內三兩三歩二朱つゝ　六月十二月兩度に渡
外に　一兩一歩　路銀分引
同立歸往來渡金
一金十兩　若山發足之節渡
外に　御供增　右同斷

同路銀

一銀七枚　若山發足之節渡

同江戸勝手若山詰渡金

總御醫師

一金二十五兩

内十兩　江戸發足之節渡

一兩つゝ三度　二兩つゝ三度若山渡り

六兩　若山發足之節渡

外に　金二十兩御供往來增渡金

但片道分は十五兩御供外にて往來は二十兩

下ケ紙に

江戸勝手表御醫師當時御番は無之候得共諸勤有之候に付三つ七歩免合を以相渡候樣但幼少にて家督之向は追て諸勤致候段支配方より斷を以渡方取計候樣

平山立元表御醫師被　仰付候處免合伺書出候に付附紙にて本行之趣及答

享和三亥七月九日

一若山直詰は江戸直詰之通

同立歸往來渡金

一金拾兩　江戸發足之節渡

外に　御供增　右同斷

同路銀

一銀七枚　江戸發足之節渡

六十石取御能方
輕 小 寄 合

初年詰渡金

一金四十三兩
内十七兩　若山發足之節渡
三兩つゝ　到着翌月より隔月六度渡
八兩　江戸發足之節渡
同 夫 金

一金九兩
内四兩二歩　若山發足之節渡
四兩二歩　江戸にて渡
直詰渡金

一金十五兩　但六度に渡
同 夫 金

一金七兩一歩
内三兩二歩二朱つゝ　六月十二月兩度に渡
外に 一兩三歩　路銀分引
初年詰渡金

貳拾石取御能方
輕 小 寄 合

一金二十一兩

内八両　　　　　　　　　　　　若山發足之節渡
一両つゝ三度　二両つゝ三度江戸渡り
四両　　　　　　　　　　　　江戸發足之節渡
同夫金
一金九両
内四両二歩　　　　　　　　　若山發足之節渡
四両二歩　　　　　　　　　　江戸にて渡
直詰渡金
一金十両　　　　　　　　　　但六度に渡
同夫金
一金八両
内四両つゝ　　　　　　　　　六月十二月両度に渡
外に一両　　　　　　　　　　路銀分引
初年詰渡金
弐百石取
御切米五十石取
一金三十九両　　　　　　　　御役者
内十五両　　　　　　　　　　若山發足之節渡

三兩つゝ　到着翌月より隔月六度に渡
六兩　江戸發足之節渡
直詰渡金

一金十二兩　但六度に渡
但後見物着作り物師は十一兩つゝ兼候後見は本行之通渡
初年詰渡金

四十石取　御役者

一金三十兩
內十二兩　若山發足之節渡
二兩つゝ　到着翌月より隔月六度に渡
六兩　江戸發足之節渡
直詰渡金

一金十兩　但六度に渡
但後見物着作り物師は九兩つゝ兼候後見は本行之通り渡
初年詰渡金

三十石取　御役者

一金二十四兩
內九兩　若山發足之節渡

一両つゝ二度　二両つゝ四度に渡
五両　江戸發足之節渡
直詰渡金
一金八両　但六度に渡
但後見物着作り物師は七両つゝ兼候後見は本行之通
初年詰渡金
一金二十六両　太夫之忰
内十両　若山發足之節渡
二両つゝ　到着翌月より隔月に渡
四両　江戸發足之節渡
直詰渡金
一金八両　但六度に渡
初年詰渡金
二十五石取並十五人扶持取
一金二十両　御役者
内八両　若山發足之節渡
壹両つゝ四度　貳両つゝ貳度渡
四両　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金八兩　　但六度に渡

但後見物着作り物師は七兩つゝ兼候後見は本行之通り

初年詰渡金

貳十石取 御役者

一金十七兩

内七兩　　若山發足之節渡

一兩つゝ五度　二兩一度渡

三兩　　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金八兩　　但六度に渡

但後見物着作り物師は七兩つゝ兼候後見は本行之通

初年詰渡金

十三石取 御役者

一金八兩二歩

内三兩二歩　　若山發足之節渡

貳歩つゝ二度　壹兩つゝ二度渡

二兩　　江戸發足之節渡

直詰渡金
一金六兩　　　　　　　　　　　　　但六度に渡
但後見物着作り物師は五兩つゝ兼候後見は本行之通渡
初年詰渡金
一金十二兩　　　　　　　　　　　　十五石取幷銀廿枚取　御　役　者
内四兩　　　　　　若山發足之節渡
壹兩つゝ　　　　　到着翌月より六度に渡
貳兩　　　　　　　江戸發足之節渡
直詰渡金
一金六兩　　　　　　　　　　　　　但六度に渡
但後見物着作り物師五兩つゝ兼候後見は本行之通渡
初年詰渡金
一金八兩　　　　　　　　　　　　　無足　御　役　者
但御仕着幷銀拾枚被下候一分勤之筋
内三兩　　　　　　若山發足之節渡
二步つゝ二度　壹兩つゝ二度渡

二兩　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金五兩　但五度に渡

初年詰渡金

一金十兩　無足大夫之悴

內四兩　若山發足之節渡

四兩　江戸詰之內四度渡

二兩　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金六兩　但六度に渡

初年詰渡金

一金七兩　無足脇之悴

內三兩　若山發足之節渡

一兩三步　江戸詰之內四度に渡

二兩一步　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金四兩二歩　　但三度に渡

初年詰渡金

一金五兩　　太夫幷脇之忰之外無足

内二兩　　若山發足之節渡

二兩　　江戸詰之内四度に渡

一兩　　江戸發足之節渡

直詰渡金

一金三兩一歩　　但三度に渡

右御役者は夫金は相渡不申候往來繼馬壹疋分つゝ賃銀相渡申候大樣往來にて銀貳百十五匁程つゝ相渡申候

一無足御役者太夫之忰は往來路銀五枚つゝ其外は銀三枚つゝ相渡申候

一無足御役者親召連罷越候得は渡金相渡不申候

一金二歩つゝ　　宿代銀

但毎月渡太夫は一兩つゝ無足御役者親同居仕候得は一歩つゝ相渡申候

以上御家中諸渡物帳

一安永八亥年六月廿五日左之布達あり

折返し江戸へ罷越候面々御金被下候得共御切米廿石取以上は相止候筈

但廿石以下之輩へは半減程の積りにて被下候筈
一順外に江戸へ罷越候面々被下之儀右同斷
但同斷
一立歸江戸へ罷越候面々御金被下候筋一等半減之積りを以て被下候筈
一江戸直詰之面々御金被下之儀一等相止候筈
一江戸御供之面々御供增渡り金相止候筈
一江戸に相詰候面々閏月分渡り金相止候筈
右之通暫之内相成候事
一安永十丑年三月十三日尙又左之通布達す
御勝手御不如意に付去々年御省略被　仰出江戸御供之面々御供增渡り金も一等暫之内相止候事候得共諸士勝手不如意之上八木下直等にて別て致難澁候處御供に罷越候に付ては猶更難儀之趣に付此節御勝手御差支之儀には候得共御供增渡金之儀は何分繰合相渡候樣取計可仕旨奉行共申出候付其段達　御聽候處伴之通候はゝ御供增は前々之通相渡候樣可仕との御事に候はゝ御供增は前々之通渡り金有之筈
按に渡り金受取方は、都て手形を以て御金藏より受取ものなり、其一例を左に示す、
半紙半枚に
受取申金銀之事

合金九兩二歩二朱
銀一匁二分也
右は此度就御用勢州松坂表より京都へ立歸罷越候に付往來爲渡金銀受申候以上

明治元年辰十一月

堀内四郎吉 印
右虎之間席奥御右筆助知行百石取也

元方御金藏

一御用に付紀州へ立歸罷越候者留守中御扶持方渡方極左之如し
若山へ立歸御用に罷越若山にて御用有之江戸出立日より日數百日内歸着に候はゝ江戸詰之通無差別相渡百日過百五十日内歸着に候はゝ百日分丈け江戸詰之通り相渡し百五十日過候得は江戸出立日より引揚歸着翌日より相渡候事
但留守中之渡り分は歸着之上相渡候事
右安政五午二月廿九日御勘定組頭より

一慶應三卯年五月
一就御用他所へ罷越候向近年諸物高直にて入費多く難澁之趣相聞候付往來且諸逗留共渡金極替御増被下等候就ては是迄用意金等拜借願出候向も有之候得共向後右渡り金を以て如何躰にも相凌拜借等不願出樣可致事

一慶應三卯年六月於江戸御勘定奉行より
一此度御改革に付夫金御扶持方は祿に不拘席並御役前之所にて相渡し候筈に相成候に付同樣勤等左之通相渡候筈

孔雀之間席同並
御簾中様御用人同様勤

右三百石以上以下六十石以下夫金御扶持方元八十石平し之通相渡

孔雀之間席並
御小姓頭取同様勤

右是迄五十石以上は（十）〔一本七〕人扶持に候處已來五十石以下にても（十）〔一本七〕人扶持相渡し夫金是迄之通相替儀無之

右是迄五十石以上は（七）〔一本十〕人扶持相渡候得共以來は五十石以上にても五人扶持相渡す

孔雀之間席並御小姓

右以來被　仰付候者は三百石以上以下六十石以下共夫金御扶持方元八十石平し之通り相渡

孔雀之間席並
御取次

右三百石以上以下六十石以下共夫金御扶持方元八十石平之通相渡

御家中江戸詰御扶持方

御年寄

一三百人扶持　三万石
一二百三十二人扶持　一万五千石

一百五十七人扶持　一万石
一百三十四人扶持　八千石
一百十二人扶持　七千石
一九十七人扶持　六千石
一八十二人扶持　五千石
一六十七人扶持　四千石
一五十九人扶持　三千五百石
一五十二人扶持　三千石
一三十七人扶持　二千石

附紙に
千五百石平
一二十九人扶持　江戸詰御扶持方
是は千三百石平二十六人扶持
文化二丑正月極

一二十六人扶持　千三百石平　大寄合
二十五人扶持　千二百石平　御傅
二十二人扶持　千石平　大番頭
持祿平　同格　但千石以上は千石平
持祿平　御用役

一十六人扶持　六百石平
但六百石以上は六百石平六百石以下は持祿平大番頭格は六百石以上にても持祿平

一十四人扶持　五百石平
但五百石以下は持祿平

一十三人扶持　四百石平
但御持弓頭御持筒頭是は六役に付一人扶持增

奉　行

大　組
御　付

静澄院樣
桂香院樣
御前樣

御供番頭
同　格
御使役頭
御持弓頭
御持筒頭

中之間番頭
御小姓頭
大小姓頭
表御小姓頭
御鷹匠頭
詰　番　頭
御藥込頭
御手弓頭
御手筒頭
十人組頭

一十一人扶持

三百石平

但二百石八十石取之物頭御徒頭は持祿平

明脫院樣
永隆院樣
清信院樣

御子樣方

右三百石平之內御徒頭御目附御使番御供番與頭は六役に付一人扶持增

張紙に

三百石以上之面々三百石平し御扶持方
一十一人扶持

御小納戸頭取

諸頭役格
御小姓

御用達
物頭
五十人物頭
御徒頭
御目附
御使番
添奉行
寄合
御供番與頭
御附
物頭
御徒頭
御目附
十八組頭格
御附
諸頭役格

御部屋方

御薬込頭

御城附

西御丸御機嫌伺

三百石以上にても馬持不申面々は御扶持方
一七人扶持
馬持候へは三百石平し
一十一人扶持
寛政十一未八月

御供番

御弓役

一七人扶持　二百石八十石平

御使役

静澄院様
桂香院様
御前様

御附差添

但御使役並八十石以上

右二百石八十石平之内御供番御使役は六役に付左之通渡

御切米百二十石平

御供番

十二人扶持

御使役

十人扶持

諸頭役格並

御小納戸頭

一五人扶持　六十石平

御弓役並

御馬支配

十八人組頭格　但三百石不詰六十石以上

御子様方
明脱院様
永隆院様
清信院様
賢姫様
悦姫様

御目付

御附差添　但御使役並六十石以上

中之間番與頭

御作事奉行

儒者　但五十石以上

御茶道頭

御使役並　但五十石以上

一五人扶持　五十石平

但両役共三百石不詰五十石以上

御子様方

御小納戸頭之上

御徒頭格共

御目付

御留守居

一四人扶持　四十石平より十石平迄

但右之内渡方違ひ候分左之通

四十石平

五人扶持　御膳番

清澄院様
桂香院様
御前様

同　御目付

御廣敷番　但四十石以上

二十石平

八人扶持　御屋敷目付

一十一人扶持　三百石平　御匙御醫師

一六人扶持　但二百石以下は持祿平　御匙御醫師

一四人扶持　總御醫師

類焼之節渡金

類焼之節渡金

但し自火には不相渡御長屋幷借宅は半減相渡候筈

一知行三万石　六百兩

一同　一万五千石　三百兩

一同　八千五百石　二百五十兩

一同　六千石　二百兩

一同　五千石 四千石　百五十兩

一同　三千五百石より二千石迄　百兩

一同　千三百石平　六十五兩

一同　千二百石平　六十兩

一同　千石平　五十兩

一同　五百石平　二十五兩

一同　四百石平　二十兩

一同　三百石平　十五兩

一同　二百石 御切米八十石平　十兩

一御切米六十石平　七十石平共　七兩

一同　五十石平　六兩

一同　四十石平　五兩

一同　三十石平　四兩

一同　二十五石平　三兩

一同　二十石平　二兩二歩

一同　十五石平　二兩　少將樣方御小姓共

但半減相渡候節は一兩一歩

一御切米十二三石七人扶持　十石八石取共五人扶持　一兩二歩

但半減相渡候節は金一兩一歩相渡候筈

御藥込以下之分

何石取にても　金一兩つゝ

但半減之無差別相渡候筈

右之通類燒之面々有之節江戸役居役無差別渡金有之筈

但居宅不殘類焼之分計本文之通本家別條なく長屋類焼之筋は件之半減之筈其他少々之類焼には渡金無之筈

「御家中類焼之時は類焼届を出し、而して類焼渡り金元斷書を提出、割合之通受取るの例なり、」

以上御家中諸渡り物帳

類焼拜借金之割

「類焼渡り金之外に難澁之向は拜借願出例規なり、元御勘定所勤之者覺書に記載置之分發見により爰に附記す、」

一千　石	四十兩
一七百石より五百石迄	二十五兩
一四百石より三百石迄	二十兩
一二百五十石より御切米七十石迄	十五兩
一六十石より四十石迄	十兩
一三十石より二十石迄	七兩
一十五石より十二石迄	五兩
一十石より八石迄	三兩

御藥込以下二兩

右返納　七年賦

勢州幷上方引越渡金

天保六未年三月御勘定へ問合答之書面發見により類を以爰に補入す、

一金二十九兩　當人へ渡金
一銀五十七匁つゝ　親妻子養介共
　但女子は五歳已上共四歳より以下之男子女子有之候得は姥ゝ一時に本行之通相渡候筈姥無之候得は別に渡りもの無之
一銀二十九匁つゝ　五歳以上男子
一同三十四匁　下　女

勢州御代官

一金十八兩　當人へ渡金
一銀十九匁　親妻子養介共
　但書前同斷
一銀十匁つゝ　五歳以上男子
一銀十匁　下　女

大坂御屋敷奉行

一金二兩　當人へ渡金　外に傳馬一疋
一銀三十五匁つゝ　親妻子養介共
　但十五歳以上男女共

勢州御代官所
元〆手代

一銀十六匁つゝ　男女子五歳より十四歳迄　平手代
一銀廿九匁　下女

一金四兩　當人渡り金
一銀廿一匁つゝ　親妻子養介共　大（御）〔一本政〕所樣
但男女子十五歳已上共
御徒目付
一銀十匁つゝ　男女子五歳より十四歳迄
一銀廿匁　下女

一金三兩　當人へ渡金
一銀廿一匁つゝ　親妻子養介共　同
但十五歳以上男女子共
伊賀
一銀十匁つゝ　男女子五歳より十四歳迄　御錠口番
一銀廿匁　下女

南紀德川史卷之八十六

臣　堀内信　編

祿制第六

俸祿半知 天明度

一諸士一般の俸祿を半減せらるゝを半知と云、往古の事分明ならす、　香嚴公の世天明七年丁未九月初て半知の令あり、此時天下凶作頻年（天明二寅年より打續凶作なり）打續き歳入甚敷減額、加之種姫君御入輿に付御守殿御造營等莫大の經費を要し

大眞公初奉り十有八九の庶公子は被爲在、尋常通規の以て支へ得へきに非す、既に　御自奉の如きは有らん限に御節減、恐れ多くも責めを御一身に被爲任、ケ樣に勝手成下候事は我等不德故の儀との御直書を被遊たる程の次第なれば、救護の策半知に出ざるべからず、故に此令ありし也、詳なるは世記に記する如し

天明七年丁未九月十九日被　仰出

一去る寅年凶作以後年々不熟付御收納取劣不時御物入も差添去年又々凶作夥敷御高相減百姓共困窮の上當麥作不熟旁村夥敷弱人御救願出不得止事不時に過分の御出方有之必至に及御差支候故御家中諸渡物御扶持方等も相後れ江戸若山町人共御拂去辰年以來相滯上にも段々御儉約被遊候上の儀に付此上御取續之手段無之趣奉行共申上外に被遊方も無之故御家中知行御切米之内是迄

の浮置米御用捨被遊當年より六箇年之間一同半知被　仰付夫に付　上々様にも万端嚴敷御儉約
只今之御出方半減程にて相濟候様にと被　仰出候事
半知上け米之割合左之通
一知行百五十石御切米六十石已上一同半知之筈
一右以下小祿の面々は歩合御用捨有之筈
一江戸常府詰一ヶ年詰勢州上方詰共歩合御用捨
一知行御切米に准し被下候金銀一同半減之筈
一女中一同歩合輕く差上米有之筈
一御藥込以下之者共右同斷
一御家中上米之外諸上納幷若山御貸方澁谷借用寺社方無據借用祠堂金賄町人借諸町人差入借
共都て年限之間浮置之筈
一江戸御貸方之儀は知行御切米差入借用の筋は若山御貸方同様浮置諸渡物差入借用之筋は是
迄之通り
又御直書を以左之通被　仰出
箇様に勝手成り下り候事我等不德故之儀と後悔不少候へ共今に至て致方無之不及是非本行に申
聞候通に候間此上は是非當家の立行候様にと我等も猶又如何体にも嚴敷艱難可致候間何れも一
統申合艱難を凌万端致省略當家も立行夫々身分も取續候様致し相勤可申候

一半知歩上け之割合左の如し

江戸免居役免

一知行百五十石御切米六十石以上　五分上け

但分知分切米之筋は上け米之内に浮置米程御用捨の筈

常府勢州上方詰　四分上け

江戸常詰一箇年詰　三分上け　一本ナし

三つ免貳五免共　三分上け

同

一御切米五十石　四分五厘上け

内

江戸免 常府勢州上方詰　三分五厘上け

居役免 常府　三分上け

常詰一箇年詰　三分上け

三つ免貳五免　二分五厘上け

同

一知行百石御切米四十石　四分上け

内

常府常詰一箇年詰　三分上け
勢州上方詰
三つ免貳五免　貳分五厘上け
江戸免有扶持
一御切米三十五石　四分五厘上け
内
江戸免
無扶持　三分五厘
居役免
有扶持　四分上け
同
無扶持　三分上け
常府常詰一箇年詰　三分上け
勢州上方詰
下け紙　知行五十石御切米三十九石より以下は三つ免貳五免共取米に應し其分合に上け候筈
江戸免居役免共有扶持
一同三十石　四分
内
江戸免
無扶持　三分

居役免
同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分五厘
常府常詰一箇年詰　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分五厘
勢州上方詰
居役免
常詰　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分
江戸免有扶持
一同貳十五石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三分五厘
內
江戸免
無扶持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分五厘
居役免
有扶持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三分
同
無扶持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分
常府常詰一箇年詰
勢州上方詰　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分
一同貳拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三分五厘
內
江戸免
無扶持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貳分
居役免
有扶持　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三分

同
無扶持　一分五厘
江戸免居役免
常　府　一分
常詰一箇年詰　一分五厘
勢州上方詰

同
一拾五石拾三石拾二石　三分
内
無扶持　一分五厘
常　府　一分
常詰一箇年詰　一分五厘
勢州上方詰

同
一同十石より七石迄　二分五厘
内
無扶持　一分五厘
常　府　一分

常詰一箇年詰　一分五厘
勢州上方詰
一御藥込以下四石迄　一分四厘
但金銀給二百目迄
一總女中　一分
中將樣御小姓無足代　二分五厘
但常府一箇年詰　二分
祿扶持
一三十人扶持　四分五厘
但常府上方詰　三分(五厘)(一本ナシ)
一二十人扶持　(一本ニ)(三)分五厘
但同斷　(一本ニ)(三)分
一十五人同　貳分五厘
但同斷　貳分
一十人扶持より五人扶持迄　一分五厘
但同斷　一分

本記半知年限は六箇年也、然るに　香嚴公は其期限に先立寛政元酉年十月御逝去、　舜恭公御相

續後尙半知年限中なりしか、寛政四子年十月九日に、年限の通り來丑年より半知御免以前之通り浮置歩增被　仰出とあれば、豫定の通六箇年にて半知を免せられたり、委細は　舜恭公之世紀にあり

浮置歩增上け米

浮置歩增とは御家中規定之浮置米の歩合を增し上け米徵集せられしをいふ　舜恭公には夙に御國政改革の英旨ある折柄、文化二丑年冬堀江平藏財政救濟等之策を獻白す言大に御嘉納、翌年二月同人を御用御取次に御拔擢御國政改革を御委任遂に此發令あるに至る（平藏は不幸にして同年八月比病死す）文中又々浮置歩增被　仰出或は先達て歩增被　仰出とあり、又文化三年五月十一日下條伊兵衞譴責之文言にも、去る酉年分上被　仰付之節云々とあれば、蓋し享和元酉年分上け之事ありて再ひ此發令ありしならん、酉年歩上け之主法は如何ありしや舊記存せす知るによしなし、

文化三寅年九月廿八日被　仰出　堀内家記

一御家中一統之難澁をも救且銀主へも信を不失樣に御勝手向之規矩相立候存付も有之候はゝ其趣を相認封物にて差出候樣當四月相通候付以來追々上書仕候輩も有之事に候一躰御勝手向幷御家中勝手向共此節之趣にては往々彌難澁相嵩御經濟も難被爲行御家中は別て難立行候付御勝手向幷御家中勝手向共往々は取直し候樣之御主法品々被遂御穿鑿候事に候處通例之御主法にては規矩可相立道無之付追々御評議之上當年より御勝手幷御家中勝手至充實候迄之間亦々浮置歩增被　仰出御家中借財濟方之儀は別帳之通取計候筈候先達て上米被　仰出候節に不勝手之輩借財浮置に相成候を

僥倖に存候向多分有之御年限中取締らす追々別段に借財相初當時之姿に及ひ何れ右躰にては往々
取直し候期も無之儀に付件の悪幣を急度相改此度之御主法被　仰出候就ては借財有無に寄歩合差
別も有之候條夫々篤奉畏　御趣意を如何様にも暮方相立往々勝手向取直し候儀厚心掛可申との
思召候間何れも此旨急度相心得右に付ては儉約之儀も被　仰出候間此段も篤く相心得可申候且又
右被　仰出候御主法にて暮方難相立御役等差支候向も有之候はゝ勝手取直候迄の内願の品に寄格
減にても可被　仰出との御事候
但支配有之面々は夫々可被申聞候
九月廿八日
割濟幷除米定書
一知行百五十石御切米六十石以上浮置歩合三歩五厘
右之内
八厘五毛歩増上け米　八厘五毛 古借是迄之通割濟
一古借無之筋は八厘五毛割濟丈御用捨之筈
一新借有之筋は三分五厘の外八厘五毛賄方役所より押置新借割濟之筈
一新借無之筋は勿論右に不及筈
一右以下小祿之面々夫々歩合右に准し御用捨有之筈
一江戸常府常詰一箇年詰勢州上方詰共歩合御用捨之事

一江戸御貸方渡物差入候筋は差別無之筈
一女中浮置三厘五毛之筈
一御借扶持之外諸上納幷御貸方澁谷借用寺社方借用祠堂金御貸方五十年賦諸丁人知行御切米差入
借幷相對借共割濟之筈
一借財有之割濟に相成候面々御借扶持當暮返濟分割濟へ入候筈
一伊賀以下浮置是迄之通
借財有之割濟に相成候面々浮置歩增割濟米引殘所務米之内
五箇一　除米
非常手當として賄方役所へ預置候筈
殘
暮宛米を以丁人共より賄受居候筈
附紙に　賄人出來候迄賄方役所にて取扱候筈
丁人共へ暮宛無利足にて相渡し賄せ候へ共雜用として賄料遣候筈
一新古割濟無之筋は除米に不及自分差配除米御主法之通手前にて相備候筈
一新古割濟有之筋は五箇一除米致し自分差配不相成筈
一新古割濟候上は除米の半分通年々除米致し自分差配勝手次第之筈
但除米所務一箇年分詰候上は除米に不及筈

一古割濟有之新割濟無之筋は除米の半分通除米致し自分差配之筈
一割濟有無に不拘向後知行御切米御扶持方共外被下物差入立用不相成筈
一新古割濟無之御貸方幷諸上納物筋
一箇年割濟にて濟切候程の筋は初年納切無借に准し除米に不及自分差配之筈二箇年にも及候筋は割濟之通り
一新古割濟有之候へ共濟殘る纔つゝ有之筋
右同斷
一新古割濟無之御貸方五十年賦幷諸上納之内年賦計有之筋 年賦極之通相納無借に準し除米に不及自分差配の筈
一御家中人數相調目錄相立遣候に不及此度の暮宛半知之節の趣に相心得銘々目錄相立金米の好書
差出し候筈
一馬持之儀も半知之節に准し可申事
一御役銀出候筋所務之内御役銀を省殘米之五箇一除置候筈
一御役銀歩上け之節御用捨半分通御用捨有之筈
一御目付御使番三百石之面々馬持候儀に付歩増八厘五毛之内三厘五毛御用捨五厘通増
浮置歩増貳分三厘之筈
但新古割濟有之筋は五厘之歩上け御用捨極之浮置米計相納候筈
新古割濟之一方相濟候節より貳厘五毛相増
浮置歩増貳分五厘之筈

新古割濟相濟候上は五厘通相增
浮置步增貳分三厘之筈
一御先手物頭三百石之面々馬持候儀に付步增八厘五毛之内一厘七毛御用捨六厘八毛增
浮置步增貳分四厘八毛之筈
但新古割濟有之筋は六厘八毛增御用捨極之浮置米計相納候筈
新古割濟之方一方相濟候節より三厘四毛相增
浮置步增貳分一厘四毛之筈
新古割濟候上は六厘八毛相增
浮置步增貳分四厘八毛之筈

無借之面々

御家中借財御調させ被遊候處其方共義は諸借用無之先達て半知分增等被　仰出候節も町人借り等無之趣に候就夫是迄迚も浮置步增等被　仰出候儀は打續非常御出方等有之無餘儀被　仰出候事には候へ共他借等も無之事に付ては別て難儀可及候處分增をも差上取續相勤候段甚奇特成儀に　思召此段御褒被　仰出候間猶此上心掛勝手充實に至候樣精々可相勵候就夫此度之御主法は借財有之向は暮宛之外五箇一賄方役所にて除米被　仰付候筈候得共其方共儀は是迄宜取締候事に付除米之義は不被　仰出候に付ては借財有之向とは物成等多有之儀に付暮方等相緩不申樣心掛都て今般之御趣意通相心得手前々々にて除米をも相貯彌無由斷節儉を用ひ可被相勤旨被　仰出候
但伊賀以上以下役無借之筋へは夫々頭支配より可被申聞事

一御家中之儀先達て分增被　仰出古借之分弁捐年賦等に相成候後又々借財相嵩必至と差詰候向も次第に多有之趣達　御聽御心痛被遊借財之模樣相調候樣と之御趣意にて今般取調候處不輕借用高に被　聞召候右多借之向は半知歩增等被　仰出候節に借財も相片付無借同樣之姿に相成候付ては右半知歩增等被　仰出候已前迄知行等不殘差入渴々に相凌候程之向は別て心得も可有之處以來猶又多分之借財を受此上如何取量取續可申哉且非常之勤向も有之事に候へは此段彼是に煩　尊慮候御事候依而此度は浮置歩合之外全く所務高之內五箇一當分賄方役所へ除米被　仰付右之殘米を以暮方相立させ候樣との御主方に候間右殘米を當所務と相心得如何躰にも暮方相立猶其內にも餘米出來候程之釣合に相心得艱難致して取續可申候尤此度被　仰出候　御趣意は昨年堀江平藏申上候品も有之時風之惡幣御改正之　思召にて其段　公邊へも御內々被　仰達候處御尤成　御趣意に相立候御事に付追々御家中儉約等も被　仰出格段取締被　仰出候に付ては非常之手段無之候て疲幣を矯候儀不相成候條其段厚可奉畏候いつとなく奢侈に馴來り勝手取亂し候處此度之　御趣意に相叶候儀は夫々非常之了簡無之候ては勝手取直之時節にも至り申間敷候間此旨深相考向後借財不致割合之高を以相凌候樣相心得可申候小祿にて厄介等多是迄迚も無據不勝手に相成候輩前段之御主法相守候儀は深く　御恕察被遊候付分て御評議も被爲在候へ共何れ一統之惡幣を矯候御主法に付ては右等之御差別も難被遊甚　御苦勞被　思召候間右等之輩も猶々厚勘弁仕何分　御趣意之相立候樣心掛可申候

件之通に付ては此上借財不相成筈に付非常入用其上拜借をも可願出程之無據趣意相立候品有之

向は夫々除米之内御下り有之筈

一此度被　仰出之品に付江戸常府之面々是迄若山にて相渡り候知行御切米之内歩增幷諸押引殘暮宛賄方引受に相成候筋は追々若山にて金成此表御金藏へ相廻り候上同所にて相渡り候筈に付月々金方好書御勝手方へ差出候樣

但御切米之分は好書差出候節直手形持參之事

一江戸常府にて御切米拂立渡り之內歩增幷諸押引殘暮宛賄方引受に相成候面々は是迄之通此表御金藏にて拂立直段を以金成を預置月々同所へ相渡候筈に付好書御勝手方へ差出候樣

一都て祿扶持之儀は此度被　仰出之品も有之候へ共元來月々渡り之儀に付歩增幷諸押之外暮宛は是迄之通月々御藏より正米渡り之筈

但向後御主法通に急度相守差入等を以立用堅仕間敷候事

一此表御金藏渡御切米金銀之內歩增幷諸押引殘暮宛賄方引受に相成候筋は御金藏へ預り置月々同所より相渡候筈に付好書御勝手へ差出候樣

一江戸常詰一箇年詰共知行御切米之內歩增幷諸押引殘暮宛賄方引受に相成候面々は若山渡り之筈に付月々金米好書へ若山にて誰代判を以受取申度との儀認加若山へ相廻し可申事

但若山にて代判判鑑頭支配より賄方へ相廻し候筈

此度被　仰出候品々に付御家中之面々知行取は當寅十月より來卯九月迄知行手取高石五十目積りを以暮宛月割被申出候樣御切米取之面々は當十一月より來十一月迄當暮御切米幷夏借手取高石五

十日積りを以暮宛を申出候樣右に付御勝手へ判鑑差出候等尤借財無之面々は江戸若山にて借財無之候付當暮知行幷御切米共自分差配に仕度且是迄賄せ候町人へ受取せ申度或拂立直段を以御金藏にて受取度との品相認候て印形居差出候等猶委細之儀は御勝手方被承合候樣

判鑑之儀は頭役以上御用部屋へ差出頭支配有之面々は誰々判鑑都合何枚差出候との儀夫々より添手紙を以御勘定奉行へ相通し候等

御目見以下之跡目御立

御目見以下之跡目輕く被　仰付

嘉永七寅年二月被　仰出

是迄　御目見以下之向病氣に付御切米等差上且病死之筋跡目は不被　仰付一旦家名及斷絕追て忰を被　召出候處右被　召出候迄之内家内及渇命候向多歎敷事に付此度格別之御仁惠を以以下役之跡目三人扶持被下御勘定奉行支配小普請被　仰付且又御勘定奉行支配小普請にて致病死候はゝ跡目三人扶持被下御勘定奉行支配小普請可被　仰付候事

按するに御目見以下跡目斷絕は往古より之制度にして、蓋し國用權衡之法に基きたる主旨なるべしと雖も、昇平日久しく偷安の情狀より自然寬弛に流れ、以下役たる者存生中より其子弟を胥吏筆生乃至賤役に就かしめ俸給を得て死後を計畫し又病死すれは幾計もなく種々の名義に托し速に召出されん事を勉め、結局其實　御目見以上に異なるなき姿に成來り徒法に屬する傾なきに非す、亦時勢不可止の場合なるを以此令ありし如し、是れ永世遵奉之古法初めて一變に至り輕視すべからさる者也

本高世祿

嘉永七寅年五月廿日於江戸御家老席達　若山にては五月廿四日

一近來異國船渡來に付御家中之面々家督跡目之節減祿被　仰付候御定めに候へ共向後當時之本高を世祿可被成下候間武備相整候樣可心掛候尤舊家之筋追々減祿に相成候處被　思召格別之御仁惠を以右之通被　仰付間一等御趣意之趣難有奉恭承彌忠勤を相勵み可申との御事に候

件之通候へ共平日不行跡又は文武之心掛等も無之兼て柔弱にて御用立兼候筋幷御醫師等家業未熟之者は屹度御處置も可有之候條能々心掛候樣可致事

一以下役跡御立之儀は此程被　仰出候通候事

按に從來之原則別に明記のものなしと雖も、五家之國老乃至執政職等の他は上下共父子代替りの節々削祿大御番御切米廿五石迄に減し、右以下は無制限削減せらる、是進賢任能の法に基き任免黜陟增祿削俸皆其當を得、自つから量入爲出の權衡を保たしむるものか　知行大祿之家と雖も度々代替り又は急養子名跡乃至過失により遂に廿五石大御番に下るあり、而して七代の間は廿五石を繼續す、（江戸常府は大御番格小普請廿石に止る）然れ共一方には五十年勤或は格別功勞ある者は本祿無相違賜り、又は二三男にて新たに被召出一家を起し輕輩の株者より諸士に進み、增祿之者等常に尠からす、　然るに昇平無事人情因循不斷に流れ厚賞輕罰馴れ易く、隨て寵士内臣權官惡職又は種々の庇蔭に因て往々不倫之增祿昇給を賜り、或は輕輩胥吏手代同心等より新進增俸之者頻に絕へす、頗る俸祿濫出に傾き官の爲に人を置かす人の爲に官を置くの風を馴致し來り、明法又死物に屬す、寧本祿を世襲以て其濫出を抑制し增減の權衡を得さしめさるへからす、於是二百四十余年間世々遵奉せられし　祖宗の遺法を斷然改革本記の發令ありしならん、蓋し時世の止むへ

からさる者也

一世祿發布の當時永世御法及ひ御内則と稱する二法を制定せられたり、永世御法とは上下の藩士子孫繼承即ち家督相續跡目名跡に係る法則にして、永世遵奉すへきものをいふ、御内則とは各職の昇級任免增俸加祿の程度を豫定せる法規にして所謂停年格なり、政事府の密則なるを以て御内則と唱ふ、此兩法則を爰に連載するを順序とすれ共、記述頗る巨多殆と二卷に余れは、祿制沿革の關聯を中沮し却て事實通觀の不便を來すへし、故に特に分て次卷第七第八に讓り爰に略す、

一本記發令の文意異國船渡來に依て御家中家督跡目減祿の法を制定せられたる如く見解せられ往々非難の說ありたり、是全く文案者の文章錯置による者也

世祿廢止

慶應元丑年八月二日御家老席達

一去る寅年　思召を以御家中一統世祿被　仰出候處當今之時勢に付武功幷平生勤功文武之心掛拔群之筋へは御加增可被　仰付之處御收納高極も有之儀に付世祿之上へ追々御加增被　仰付の儀は難相成事に付一旦被　仰出候品猶又間もなく御改正は御不快被　思召候へ共一等御引立被遊度　思召を以無余儀向後右寅年以前之御處置に復古被　仰出候間右御趣意難有奉恭承忠勤を相勵可申との御事に候

以下役跡式御立の儀は先達て被　仰出候通御据置被遊候付此段難有相畏御奉公相勤可申事

右御供番頭已上奥中奥表頭役同平士一等へ於席々申渡之

同日御家老より御勘定奉行へ達

一諸手代等株付に相極有之候へ共右は去る寅年以前に復古株を離し入代り之節は都て御扶持方計之御中間頭支配無役に召抱候樣可被致事

按に世祿發令之時には永世法を制定万古不易之精神たりしに、僅々十二年にして廢止せらるゝ所以は、既に內則之制ありと雖も動もすれは寛に流れ情に失し、增祿之程度は世祿已前に異ならす世祿却て贅物視せさるを得す、且時勢困厄に隨ひ人才登用は焦眉の急、苟も才能有志の者乃至文武藝術之徒は推薦奬勵せさるへからすして、玉石混同唯停年格によるの制は時世の許さゝる所となれり、故に復舊に至りしなり、

再ひ半知 慶應度

按に嘉永癸丑亞米利加船初て渡來以降海防及ひ武備充實の費途莫大を極め、引續き天下次第に騷擾、文久三亥年より京攝之間に永々御滯留大和一揆華城守衞等之大費休む時なく、國力既に〱空乏なるに加へて、征長之事起り廣島御出陣、石州口出兵之國費は、實に國初已來未曾有なる固より論なし、主任の司計は千艱万難を忍ひ所謂御立用融通之借入れ金に依て漸く彌縫、爲めに內外の債務は百數十万兩に達し、最早旦夕を支へ難き場合に至りたれは遂に此發令ありし、而して征長休兵の命は此發令に先つ一日即ち慶應二年九月四日也、財政の大創を醫する原より面扶持乃至平均祿等の大英斷に非れは何をか稗補する處あらん、然れ共時未た行はれす勢ひ止むを得さるものか、天明の半知よりして年歷八十年なり、

慶應二寅年九月五日於席上御家老演達

御供番頭以上
諸　頭　役
平　　士

一半知被　仰出

一

御勝手兼々御不如意の上去る丑年異國船渡來以來海防之御入費莫大之御出方に有之處尙又亥年より京攝　御滯在引續藝州
御出陣之御費用等未曾有之御儀に候へ共實に國家之御一大事にて
公邊御盛衰にも相響候儀に付是迄色々御繰合を以御間をつめ候處此上御取續之見當も付兼御繰合之手段も無之趣御勘定奉行共申上外に被遊方も無之候故御家中知行御切米之內是迄之浮置米御用捨被遊天明度之御振合を以て五箇年の間一同半知被　仰付候
御家中の儀も兼て不勝手之上前顯之時勢費幣も不少候處件之通被　仰付候ては彌難儀可有之と甚御不快被　思召候へ共尙此上內外武備之御用途は御省略難被遊無據右之通被　仰出候事に候就ては
上にも御軍備之外萬端嚴敷御儉約可被遊候間何れも地場暮し方之儀如何躰にも取合艱難を忍ひ相勤可申との御事に候

一知行百五十石御切米六十石以上半知之事

一右已下小祿之面々は夫々歩合を以御用捨有之事
一江戸常府常詰一箇年詰勢州上方詰共歩合御用捨有之事
一御出陣御供相勤候面々は當年分御用捨之事
　但出張日數百日に不滿面々は御用捨無之事
一知行御切米に准し被下候金銀一同本祿歩合に准し候事
一女中一同歩合輕く差上米有之事
一伊賀以下之者共右同斷
一江紀諸役所幷町人等にて知行御切米等所務差入借用筋且新古割濟共右年限中浮置之事
　但都て相對借之儀は是迄之通無差別取引可致事
一江戸御貸方にて知行御切米等所務差入借用之分は右年限中浮置之筈に候へ共諸渡物差入借用之分は是迄之通候事
一御役料御合力三百石以上之向は都て元高貳分減之事
　右已下之向幷御目付は御用捨にて是迄之通候事
一御貸扶持は貸渡候事
一夏貸以後の被　仰出に付御切米取は未年夏貸迄祿扶持之內は未八月迄歩增之事
　右發令後僅に三年戊辰の變起り、翌明治二巳年國政大改革諸士祿高平均の制發布せられ、本記半知は自然消滅に皈したるなり、

安藤水野兩家祿高

兩家祿高之內與力地等に關する事由祿制に編せさるを得す、左に揭くる御伺書にて其畢竟詳なるを得べし、而して先是嘉永六丑年十二月十日、新宮與力地上り高千六百石を水野土佐守へ被下切、又安政二卯年六月田邊與力を安藤家の陪臣となさんとして服さす、大に紛擾を起し遂に同與力地を飛驒守に被下切の事あり、共に安政三辰年二月世記及職制の部に詳なり參照を要す、

明治元辰十一月十三日

一御一新に付兩家共諸侯の列を被命御附家老を離れたるにより領地高區別調査の左之通辨事局へ御伺書を提出す

安藤飛驒守水野大炊頭當春藩屛之列被　仰出有之猶又弊藩國政一切關係無之樣被　仰出候付舊領取調候處元領知高幷弊藩へ附屬以來加增之次第別紙系譜中抄出仕候通にて飛驒守儀弊藩へ附屬之節二萬石之領知に御座候處元和五未年弊藩にて壹万石加增且與力同心附屬仕候付右與力祿高幷同心給扶持共一万八千八百石に元高合三万八千八百石所領之姿に相成御座候處過月以來同家より右三萬八千八百石を全領知致度段弊藩へ申出候次第も御座候へ共難任其意儀も御座候處前件旣藩屛之列被　仰出御座候付ては弊藩にて決斷難仕候間右飛驒守領知高之儀者如何相定候樣可仕哉奉伺候宜　御沙汰之程奉願候依之系譜抄出奉差上候誠惶謹言

十一月十三日　紀伊中納言茂承

辨事御中

水野大炊頭儀は別紙系譜抄出仕候通素と領知高三万五千石に御座候て弊藩より助力等無御座候尤弊藩へ附屬に相成候節より五十五万五千石領知高之内にて切渡しに相成御座候

別紙 安藤飛驒守系譜之内書拔

一元和三巳年十月遠州掛川城主被 仰付御加增被成下都合二万石領知仕候

一同五未年 南龍院殿紀州へ入國に付紀州牟婁郡田邊城被下置其節 南龍院殿より壹万石加增給り其余與力足輕給分共都合三万八千八百石領知仕候

安藤飛驒守領知高畢竟

安藤飛驒守領知高之儀者元和三巳年遠州掛川之城主に相成候節二万石に有之候處同五未年弊藩附屬に相成候節左之通

二万石 舊幕府より受領之分 但弊藩へ附屬に相成候節より五十五万五千石領知之內にて切渡しに相成御座候

壹万石 弊藩より加增之分

七千二百石 弊藩より附屬之與力三十六人の扶持

千六百石 弊藩より附屬之同心六十人の給扶持

都合三万八千八百石

水野大炊頭系譜之內書拔

一慶長十二年未十二月

權現樣御前おゐて御緣も有之に付 賴將卿爲後見被爲附候旨御懇之上意を以被 仰付候尤御

附之儀御辭退申上候得共右之通御懇之　思召を以被　仰付於常州壹万石
權現樣御朱印を以被下置候右御朱印于今所持仕候
一賴將卿へ常州水戶被爲進候へ共御幼少に付暫く入國無御座候處對馬守儀　賴將卿後見被　仰付候付　賴將卿爲名代水戶へ被遣候節對馬守人少にも有之に付是迄支配大御番組之內召連度旨達上聞候處勝手次第召連候樣との御事に付左之名前之者共召連度旨猶又達上聞候處則右十二人之者對馬守重仲へ知行高六千二百五十石
權現樣御朱印を以被下置且又鐵炮之者五十人壹人に貳拾俵貳人扶持宛
權現樣御朱印を以被下置右御朱印于今持仕候
召連候十二人之者名前高左之通

高貳千石　水野三四郎　　同六百石　平岩助右衞門
同五百五十石　岩手九右衞門　　同三百石　夏目彌次郎
同九百五十石　酒井金三郎　　同四百石　鈴木七右衞門
同三百石　由比甚太郎　　同貳百石　水野甚三郎
同三百石　宮川金八　　同貳百石　久目吉十郎
同貳百石　夏目彌十郎　　同貳百五十石　太田新八

右之內當時相續罷在候者は平岩助右衞門岩手九右衞門夏目彌次郎由比甚太郎宮川金八右五人之家計御座候其外は出雲守重仲淡路守重良代迄に若死又は退身等にて斷絕仕候當時與力共之

内右五人之外は右之明跡へ申付候儀に御座候尤與力者新宮差置鐵炮之者五十人者若山表へ差置申候

一慶長十四年酉十二月廿二日遠州濱松之城主被　仰付壹万五千石余御加増被下置候尤右御朱印重て可被下旨にて先本多上野介成瀨隼人正安藤帶刀村越茂助彥坂九兵衞連印を以拜領被　仰付都合貳万五千石餘拜領仕候

一元和三年巳十月廿四日
台德院樣御黑判を以遠州駿州之內にて爲御加增壹萬石餘被下置都合三万五千石餘拜領之

下ヶ紙
與力十二人之知行高六千二百石と鐵炮之者五十人之給扶持者本文三万五千石之內に籠り御座候事

一同五年未七月十九日
台德院樣御代紀州新宮之城主被　仰付同高三万五千石拜領仕候

別紙
別紙安藤飛驒守水野大炊頭系譜抄出文中不都合之廉不少奉恐入候へ共舊證を表し候儀に付本紙文體之儘奉差上候此段御許容被成下候樣仕度奉願候以上

十一月十三日　　紀伊中納言

辨事御中

右伺書差出候處未た何等無之內安藤家より次留之通談越候付一印之通同家へ及答二印之通

天朝へ伺差出候事

明治二巳七月

一先達て田邊領村高取調書差出候節御預同心六十人給扶持千六百石者高内之儀に付御談之上中納言樣より御藏米渡しと譯書仕候儀に御座候右者今般田邊藩知事被　仰付版籍奉還上言之通被爲聞食候付而者右御預同心六十人給扶持共其御許樣へ奉返上候趣又牟婁郡瀨戶村之儀舊來領分之譯柄を以追々御談達申上候品も御座候へ共是又同樣版籍奉還之儀に付御許樣より御支配被下候はゝ弊藩中は差省き二箇條共知行高減耗之處は新田高を以相補候筈に今般

天朝へ可及御達と奉存候此段更に奉伺候以上

安藤飛驒守公用人

松　下　鎗　之　助

西　川　文　輔

壹印

一今般版籍御奉還藩知事御奉　命に付御預同心六十人幷給扶持共當藩へ御返に相成猶牟婁郡瀨戶村をも當藩にて可致支配旨於東京御談之趣正三位殿へ申達候處右者申見させ之品

も有之候へ共先御談之通當藩へ受取置候樣可及御答旨被申聞候付此段御達申候以上

十　月

明治二巳年七月進達

貳印

一安藤從五位水野從五位儀去春藩屛之列被　仰出候品に付舊領取調候處右安藤者素と二万石之處壹万石加增遣し尙又與力同心をも附屬爲仕候付都合三万八千八百石所領之姿に相成御座候處藩屛之列被　仰付候付ては右三万八千八百石を全領知仕度段申出候へ共難任其意儀も御座候付右領地高之儀如何相定可申哉と去冬　御沙汰之程奉願置候後何等御處置振被　仰出無御座候處此度同家田邊藩知事奉　命仕候付右同心給米者差戾し候旨申越候付先任其意當藩へ預り置申候右は先般奉伺候次第も御座候付此段一應御達申上候前件加增且與力地等之儀者尙又　御沙汰之奉願候誠惶謹言

巳十月　　　　和歌山藩知事

辨官御中

本文差出置候處十一月七日左之通口達有之候事

口達覺

一同心給米差戾し候儀双方熟談之上に候得者致復祿不苦候

一加增高之儀者元來其藩知行高より分與之行形を以今般知藩事被　仰付候儀者列藩一統之

事にて今更加増高復歸者難被　仰付候得共是亦熟談之上双方願出候上者可遂　御詮議旨
南官堂を以口達有之候事

御加恩知

御加恩知とは幕府より之給地にして　祖先格別之御由緒又は拔群の軍功により　神祖より恩賜子孫代々世襲の祿なり

御家に於て其身過失又は幼少にて假令本祿減削せらるゝ時も此御加恩知は毫も減する事なし、御加恩知取と稱する者六人あり、拜領の畢竟左の如し、

天正十九卯年七月拜領上總國にて

一千七百卅五石二斗九升五合　横田之鄕
一百九十七石七斗九升五合　山中之鄕
一百六十六石九斗一升　根岸之鄕
合貳千百石

曾根孫太夫
福岡太郎八
丹羽金十郎
渥美源五郎
久世三四郎
坂部三十郎
丹羽彌三
七人一紙

右何も三百石つゝ拜領配當可仕旨御代官大久保十兵衛原田佐左衛門より之一紙御証文曾根孫太夫方に所持す、是れ天正十八年庚寅年相州小田原陣之節武功有之に依て也、而して此七人之内久世三四郎坂部三十郎丹羽彌三は御旗本にて相續曾根孫太夫福岡太郎八丹羽金十郎渥美源五郎の

四人は

神祖より　龍祖へ被爲附子孫　御家に奉仕御加恩知も代々無相違相續然るに元祿十一寅年三月廿日關東知行御用地に上候付替地被下候旨被　仰出、駿河國駿東郡內にて三百石つゝ被下の旨、江戶坂部三十郎より書出之寫三通渥美源五郎正方（四代目なり）へ差越、以來渥美福岡丹羽金十郎之三人は駿河へ所替、曾根は其儘上總にて被下たり、

一慶長七壬子年九月晦日拜領

江州坂田郡之內にて千石　水野左近正重（太郎作家也）

神祖より御黑印にて

左近三河以來之武功は傳記に詳なり

一元和元乙卯年七月廿一日　神祖御朱印

一山城國葛野郡下津林村百石
一同　愛宕郡幡枝村百石
一同　田中村百石

都合三百石　竹田慶安法印定賢

慶安は竹田山城守昌慶八代の孫竹田定宣法印之弟也、昌慶明朝に渡り大醫院金翁道士を師とし其女を妻とし醫術の傳を得、洪武二年明の太祖皇帝之后妃の難產を針治し其賞として安國公の爵を受け

後圓融帝の永和四年歸朝傳來之牛黃圓を

帝及ひ足利將軍義滿公へ進獻、是より專ら醫術を業とし足利幕府より備後國鞆一圓を采地に賜る、兄定宣法印は慶長五庚子年

神祖へ被　召出知行千石被下、定賢も駿府へ罷越慶長年中駿河に於て知行三百石被下、京都伏見大坂等へ供奉、大坂城中御隱密御用筋　台命を蒙り大坂兩度の御陣に御供仕、元和乙卯年七月爲　御加恩知行三百石被下、元和五巳未年　龍祖へ御附屬被命紀州へ御供仕る

是その大略にして委くは各自の本傳にあり、去れは御加恩知は全く幕府より賜ふ處の采地にして、代々其家に直支配也、（代替之節は御加恩地をも相續可致旨被　仰付たり、而して上總等紀州より遠隔地は御勘定所にて取次取計たり）又御加恩地取りの誰々なるを速了に便なる歌あり

近江水山城竹田上總曾根駿河は丹羽と渥美福岡

然るに明治維新諸御朱印地等一般廢止せられ上地となりしが、面々等より諸願之上遂に廩米下賜之榮を蒙る、其始末左之如し

一慶應四辰年閏四月竹田景安領地之儀公用人を以左之通辨事御役所へ御願立

紀伊中納言醫師竹田景安先祖より於山城國知行三百石被下置候處昨年同國　天領と被　仰出御座候へ共先祖由緒も有之儀に付於舊地如以前拜領之儀別紙之通景安願出候儀に御座候何卒景安願の通宜御取扱被成下候樣奉願上候以上

別紙は竹田景安より先祖以來之由緒（前記に有之主意也）を記載、領地如舊拜賜之歎願書也略す、

其後　御沙汰無之を以翌明治二巳年正月廿八日公用人を以東園宰相中將殿へ左之書付御差出させ

之處上け紙之通答有之

德川中納言醫師竹田景安先祖より於山城國知行三百石被下置候處同國　天領被　仰出御座候へ共先祖由緒も有之儀に付於舊地如已前拜領仕度段昨辰年閏四月景安歎願書差出候付右一通相添奉願置候以來景安儀御當地に滯在右　御沙汰奉待居候儀に御座候然處諸價沸騰之折柄長々滯京入費相嵩難澁之趣にて尙又再願私共手元迄差出候儀に御座候追々舊幕附屬之向も本領安堵被仰付候儀に付右景安領地之儀も何卒願之通　御沙汰之程尙又奉願候以上

上け紙

於東京御取調中に付追て何分の　御沙汰可被　仰出候事

一明治元辰九月十四日御加恩知御黑朱印左之通弁官へ返納す

先般被　仰出候舊幕府より受封之判物等取調候處　紀伊中納言家來水野太郎作初左之者共へ舊幕府より黑印朱印等給御座候由にて夫々へ差越候付目錄之通差出候間宜御取扱被成下候樣奉願候已上

九月十四日　　紀伊中納言內　津田兵彌　外一人

覺

一黑印一通　　水野太郎作

曾根衞門

一朱印代り一通　　福岡太郎八

丹羽金十郎
渥美源五郎
醫師　竹田景安

朱印姓名之内久世三四郎坂部三十郎丹羽彌三右三人は舊幕臣にて御座候

一朱印一通

右之通

但刺田彥社神主岡本左馬助勢州白子觀音寺御朱印も同時に還納ありたり舊幕府受封之判物可差出旨は本年閏四月十九日に被　仰出たるなり

一曾根衞門領知之儀明治元辰年十二月於江戸村井久左衞門を以左之通辨事御役所へ提出之處上け紙之通差圖有之其段衞門へ翌巳年正月廿二日達す

中納言家來曾根衞門上總國望陀郡横田村領知三百石此度御一新に付ては改て其儘領知に被下置候樣仕度其段於京都歎願仕候へ共右領知之儀に付先般知縣事御役所より御取調も御座候趣右村名主共不取敢爰許役場へ申出候付此程奉歎願御座候通衞門先祖汗馬之勞を以て家祖幷紀伊賴宣以來可爲永續旨にて累代所領仕來り候儀に御座候間此度改て舊領安堵仕度左候はゝ衞門安堵仕候而已ならす領地人民共に至迄聖恩を以其土に安據仕候儀に御座候若御一新に付右之通御裁斷難被及御座候は何れの地にても替地拜領被　仰付被成下候て祖先之勳功御立被成下候樣只管奉歎願候先比奉歎願候上容易に再願仕候儀深恐入奉存候へ共草野之士民頪に懇願仕候情實無據儀にも御座候間御聽許を奉

蒙度猶又奉願上候以上

上け紙　替地之儀者追て可被爲及　御沙汰先當年の處者藏米を以被下置候事

右差圖之通辰年分は御藏米を以被下置候處明治二巳年分も同樣御藏米を以被下置候哉替地可被仰出儀に候哉　御沙汰奉伺度旨願出候旨にて同年九月公用人を以民部省へ願書提出之處同廿五日上け紙を以左之通答有之

書面當巳年收納之儀者追て可及沙汰候事

其後收納時節に及ひたるを以同年十一月廿四日公用人より伺書を民部省神戸省亟へ提出之處十二月十三日内藤四郎より附札にて左之通答有之

巳年分收納米八十八石九斗九合之内米四拾四石下け渡候間受取手形可差出事

一水野太郎作領知之由緒可申出との事

明治二巳年六月廿八日於租稅局司小林周助を以近江之國爲取調候處左之通申出紀州藩より差出候村方帳に無之候へ共領分に候哉取調可申出旨申聞候付右者水野太郎作領知之趣及答候處其儀に候はゝ何故舊幕府より受領致居哉由緒可申出旨申聞

紀伊中納言領分

近江國坂田郡　志賀谷村

一高九百九拾四石八斗八升三合

本庄村高

一同五石壹斗壹升七合

合高千石

右近江國高帳に有之

紀州より差出候領地村高帳に無之

一水野太郎作初御加恩知取之知行祿高姓名取調書差出す

明治二巳年十二月廿日民部省より呼出に付岡田清右衛門出頭之處舊幕府より御加恩知有之輩知行場所祿高姓名等取調早々可差出旨石賀新五郎申聞に依り左之調書同廿三日持參之處丹羽金十郎渥美源五郎福岡太郎八之三人は駿地御用地に相成候間受取候旨其外水野太郎(一)[作カ]竹内清一郎儀管轄縣へ差出候はゝ可然旨右新五郎申聞太郎作清一郎書類は差戻し候事

江州坂田郡志賀谷村幷本庄村之内にて

高千石　　　水野太郎作

上總國望陀郡横田村にて

高三百石　　　曾根衛門

下け紙に　御藏前にて當巳年分頂戴相濟候事

駿河國駿東郡本宿村同國同郡的場村

同國安倍郡坂本村同國同郡日向村

同國同郡栃澤村同國同郡諸子澤村之内にて

高三百石つゝ　　　丹羽金十郎

渥美源五郎

駿州駿東郡長澤村同國同郡(鎌)[一本德]倉村之内にて

高三百石　　福岡太郎八
山城國愛宕郡田中村同國同郡幡枝村
同國葛野郡下津林村之內にて
高三百石　　竹田清一郎
右之通
一水野太郎作初知行所上地改て祿制之通り稟米を以下賜
明治三年四月三日左之御書付於辨官傳達所林少弁被相渡
　　　　和歌山藩
先般各藩封土奉還之儀被　聞食更に被任知藩事家祿之制被爲定隨て士族卒祿制御定に相成候付ては其藩水野太郎作曾根衞門丹羽金十郎渥美源五郎福岡太郎八竹田清一郎別紙之通知所上地被　仰付改て祿制之通稟米を以て下賜候事
但地所之儀は各地管轄府縣へ可引渡事
四月　　太政官
別紙
近江國高千石　上地　　水野太郎作
現米七十五石
右稟米賜之

上總國高三百石　上地　　曾根衞門
現米三十五石
右同前
駿河國高三百石　上地　　丹羽金十郎
現米三十五石
右同前
同　國高三百石　上地　　遲美源五郎
現米三十五石
右同前
同　國高三百石　上地　　福岡太郎八
現米三十五石
右同前
山城國高三百石　上地　　竹田清一郎
現米三十五石
右同前
右に付同年十二月十八日右廩米當午年分御下附之儀弁官へ請願之處同廿七日當午年より於堺縣御渡相成候間同縣へ可申出旨附札を以指令依て堺縣へ追々照會當人共へも達す

一明治三午年四月十八日民部省內藤大丞より左之書付被相渡

和歌山藩

其藩士族福岡太郎八舊地物成去々辰年分米百拾壹石三斗八升七合去巳年分米同丹羽金十郎遲美源五郎去々年辰年分米六拾八石壹斗七升七合宛去巳年分米同宛可相渡間受取手形可差出事

午四月　　　民部省

御家中總祿高　總人員共

按るに御家中總人數總祿高は其主務局たる御勘定奉行之帳簿に據らされば正確を得かたく、該帳簿は既に散逸に歸し今に至て調査の便なし、元和御切米終身錄あれ共駿河より御供、且龍祖御一代に賜りたる祿之成行に止り、以來歷世次第に增加に至りしは疑なく、文化度御家中姓名錄、維新後御家中姓名いろは寄帳、又安政度御手帳之類ありと雖も、體裁斑々にて祿高調查の材としかたく、且缺記の分有て到底完備となすに足らす、左に揭くるものは維新後明治二巳年六月藩政被　仰出之際、藩士兵卒員數及ひ從前之祿高取調可差出旨天朝命により同年十月提出したる調書也、則元御勘定奉行にて調查年代も最近に係るを以て漸完備のものと云て可なるへし、歷世の程度如何は知りかたしと雖も、恐らく大同小異にして近世さしたる超過はあらさりしと推考す

御附家老安藤飛驒守水野大炊頭の兩家は、戊辰之春藩屛之列被　仰出御家を離れたるを以て左の調書には除きありと雖も、該被　仰出迄は安藤家は三万八千八百石、水野家は三万五千石、合

和歌山藩

七万三千八百石を御領知高五十五万五千石之内より切り渡したるなり

従前藩士員數幷知行切米扶持米等調

知行取　人員六百五人

一高貳拾五万八千三百五拾三石四斗三升

一金貳百五拾兩　前條人員の内金渡拾九人

一銀八拾枚　右同斷之内銀渡　八人

内

壹万五千七拾貳石五斗壹升九合取　壹人

八千五百九拾七石三斗七升取　壹人

六千石取　壹人

四千五百石取　壹人

三千五百石取　壹人

三千三百石取　壹人

壹万貳千石　三千石取　四人

貳千八百石取　壹人

七千五百石　貳千五百石取　三人

貳千百石取　壹　人
四千石　貳千石取　貳　人
千八百石取　壹　人
千七百石取　壹　人
九千石　千五百石取　六　人
貳千八百石　千四百石取　貳　人
千三百石取　壹　人
七千二百石　千貳百石取　六　人
六千六百石　千百石取　六　人
八千石　千石取　八　人
千八百石　九百石取　貳　人
七千貳百石　八百石取　九　人
七千石　七百石取　十　人
千九百五十石　六百五十石取　三　人
七千八百石　六百石取　十三　人
四十兩　右之内金渡　貳　人
千百石　五百五十石取　貳　人

壹万三千石　五百石取　二十六人
四千五百石　四百五十石取　十人
壹万七千六百石　四百石取　四十四人
三拾兩　右之内金渡　貳人
三百七拾五石取　壹人
九千百石　三百五十石取　二十六人
拾　枚　右之内銀渡　壹人
千三百石　三百貳拾五石取　四人
拾　兩　右之内金渡　壹人
三百拾石取　壹人
貳万貳千五百石　三百石取　七十五人
七拾兩　右之内金渡　四人
三千三百石　貳百七十五石取　十二人
貳拾兩　右之内金渡　二人
壹万貳千貳百五十石　貳百五十石取　四十九人
貳拾兩　右之内金渡　貳人
拾　枚　右之内銀渡　壹人

三千六百石	貳百貳拾五石取	十六人
壹万貳千貳百石	貳百石取	六拾壹人
貳拾兩	右之內金渡	貳人
貳拾枚	右之內銀渡	貳人
百八拾石取		壹人
四千貳拾五石	百七十五石取	二十三人
拾　兩	右之內金渡	壹人
九千三百石	百五十石取	六十二人
貳拾兩	右之內金渡	貳人
貳拾枚	右之內銀渡	二人
百三十五石取		壹人
三千百貳十五石	百貳拾五石取	二十五人
百拾七石取		壹人
五千八百石	百石取	五十八人
拾　兩	右之內金渡	壹人
貳拾枚	右之內銀渡	貳人
七拾五石取		壹人

七拾石取　壹人
七百五十石　五十石取　十五人
七拾五石　廿五石取　三人
三拾壹石五斗四升壹合　鄉士地方渡　壹人
十五石　右同　壹人
小以如高
切米取　人員二千五百十一人
一米五万三千七百拾壹石
一米五千四百拾貳石六斗　右人員之内扶持方取　九百八十三人
此三千七人扶持
一金九百七拾壹兩　右人員之内金渡　二百廿二人
一米三千石六斗　切米無之扶持方取　人員四百四十六人
此千六百六十七人扶持
一金三十五兩　右人員之内金渡　二十二人
合米六万貳千百貳拾四石貳斗
金千百六兩
内

三百貳拾石	四百石高 米百六拾石取	二人
貳拾兩	右之内金渡	壹人
三百六十石	三百石高 米百貳拾石取	三人
貳拾兩	右之内金渡	壹人
貳百四拾石此六百俵	三百俵取	二人
三百石	貳百五十石高 米百石取	三人
三拾兩	右之内金渡	貳人
九拾石取		壹人
七百貳拾石	貳百石高 米八十石取	九人
四百八十石	八十石取	六人
百五十石	七十五石取	貳人
千四百石	七十石取	貳拾人
拾八石此十人扶持	右之内扶持方取	壹人
貳拾兩	右之内金渡	壹人
貳百六拾石	六十五石取	四人
千九百貳拾石	六十石取	三十二人
十五兩	右之内金渡	二人

六十石此百五十俵　百五十俵取　壹人
六百六十石　五十五石取　十二人
拾四石四斗此八人扶持　右之内扶持方取　壹人
五　兩　右之内金渡　壹人
貳千石　五十石取　四十人
三十五兩　右之内金渡　五人
五十貳石取　壹人
千七百拾石　四十五石取　三十八人
拾　兩　右之内金渡　壹人
三千八百八十石　四十石取　九十七人
五拾兩　右之内金渡　七人
四十石　此百俵取　壹人
三十七石取　壹人
貳千五百五十五石　三十五石取　七十三人
百三十六石八斗此七十六人扶持　右之内扶持方取　十一人
拾三兩　右之内金渡　三人
三百三十石　三十三石取　十人

貳拾壹石六斗此十二人扶持　右之内扶持方取　四人
貳百五十六石　三十二石取　八人
拾石八斗此六人扶持　右之内扶持方取　二人
四千八百石　三十石取　百六十人
貳百四十八石四斗此百三十八人扶持　右之内扶持方取　四十六人
八十八兩　右之内金渡　十三人
貳百貳拾四石　貳十八石取　八人
三十七石八斗此二十一人扶持　右之内扶持方取　七人
五　兩　右之内金渡　壹人
八十四石此貳百十俵　七十俵取　三人
千貳百拾五石　貳拾七石取　四十五人
百八石此六十人扶持　右之内扶持方取　二十人
八　兩　右之内金渡　二人
貳拾六石取　壹人
八千貳百七十五石　貳十五石取　三百三十一人
五百七十七石八斗此三百二十一人扶持　右之内扶持方取　百七人
百八兩　右之内金渡　二十一人

九十六石　貳拾四石取　四人
五石四斗此三人扶持　右之内扶持方取　壹人
百六十壹石　貳拾參石取　七人
貳拾壹石六斗此十二人扶持　右之内扶持方取　四人
貳百貳拾石　貳十貳石取　十人
十六石貳斗此九人扶持　右之内扶持方取　三人
四十貳石　貳拾壹石取　二人
五石四斗此三人扶持　右之内扶持方取　壹人
五千五百石　貳拾石取　二百七十五人
六百八十七石六斗此三百八十二人扶持　右之内扶持方取　百二十六人
四十九兩　右之内金渡　十五人
三十八石　十九石取　貳人
五石四斗此三人扶持　右之内扶持方取　壹人
五百貳拾貳石　十八石取　貳拾九人
六十四石八斗此三十六人扶持　右之内扶持方取　拾貳人
拾八兩　右之内金渡　三人
七百九十九石　十七石取　四十七人

百貳拾四石貳斗此六十九人扶持	右之内扶持方取	二十三人
貳拾貳兩	右之内金渡	六人
八拾石	十六石取	五人
五石四斗此三人扶持	右之内扶持方取	壹人
三千八百八十五石	十五石取	貳百五十九人
八百四十二石四斗此四百六十八人扶持	右之内扶持方取	百五十四人
百拾五兩	右之内金渡	三十人
貳百五十貳石	十四石取	十八人
四十三石貳斗此二十四人扶持	右之内扶持方取	八人
八　兩	右之内金渡	二人
千七百九十四石	十三石取	百三十八人
貳百七十石此百五十人扶持	右之内扶持方取	五十人
八十五兩	右之内金渡	二十二人
貳千五百八石	十二石取	貳百九人
五百四十石此三百人扶持	右之内扶持方取	百人
八拾五兩	右之内金渡	三十人
百七十六石	十一石取	十六人

貳拾壹石六斗此十二人扶持	右之内扶持方取	四人
拾壹兩	右之内金渡	三人
貳千五百七十石	拾石取	二百五十七人
七百六拾六石八斗此四百二十六人扶持	右之内扶持方取	百四十二人
八十九兩	右之内金渡	三十一人
七百十一石	九石取	七十九人
百四十石四斗此七十八人扶持	右之内扶持方取	二十六人
貳拾貳兩	右之内金渡	八人
千六百四十石	八石取	貳百五人
四百八十石六斗此二百六十七人扶持	右之内扶持方取	九十一人
三十八兩	右之内金渡	十人
百四十石	七石取	二十人
百石八斗此五十六人扶持	右之内扶持方取	十九人
貳兩	右之内金渡	壹人
百八石	六石取	十八人
八十六石四斗此四十八人扶持	右之内扶持方取	十六人
拾石	五石取	二人

五石四斗此三人扶持　右之内扶持方取　壹人

四石取　壹人

九石　三石取　三人

五石四斗此三人扶持　右之内扶持方取　壹人

貳石取　壹人

三千石六斗此千六百六十七人扶持　切米無之扶持方取四百六十七人

百三十五兩　右之内金渡　二十二人

小以如高

右

總人員三千五百七十二人

此

總合

高貳拾五万千三百五十三石四斗三升　知行

米六万貳千百貳拾四石貳斗　切米並扶持方

金千三百五十六兩　金渡

銀八十枚　銀渡

外に

禁錮之者

高六百五十五石　　知行取三人
米三百七十三石　　切米取拾二人

右之通御座候也

巳十月

按するに右調書は藩士兵卒員數及ひ從前之祿高扶持米を可調出との命令に答へしものなれば、伊賀以下同心諸手代株付所謂兵卒に至る迄を籠めたるものにや難計と雖も、人員總計三千五百七十二人とあるによれば、恐らく御目見以上以下士分と稱する分、乃至伊賀以下にても別段格祿ある分際迄の調査ならんか、如何んとなれば諸士三千と云は普通に唱へ來れる所、又伊賀以下の人員は現に六千の余に達すれば、之を合せて總計三千五百云々とは記しかたき理なり、然れども書中明文を見されば或は憶側免れかたしと雖も、信嘗て政事府在職中同府帳簿によりて試に調査したる舊記を古紙中より發見したり、是其當時爲にする所ありての調査なるか故、本高のみにて御足高御扶持方を省き又御切米三十九石以上且御目見以下伊賀以下の祿高とも漏記せり、頗る不完備とはいへとも亦參照の一つに足らんか

安政六年

本高千石以上　　五十三人

此高合拾八万九千四百石

內

拾万九千九百石　　御家老五家之分

七万九千五百石　　四十八人分

本高五百石以上　　六十七人

此高合四万貳千五拾石

同高貳百石以上 御切米八十石以上　　三百三十六人

此高合九万千七百貳拾石

同高百石以上 御切米四拾石以上　　三百六十九人

此高合四万七千三百七十八石五斗余

同御切米三十九石以下　　千七百八人

右御目見以上

御目見以下　　七百三十六人

伊賀以下　　六千八百六十四人

合人員壹万百三十三人　内　御目見以上以下 三千二百六十九人　伊賀以下 六千八百六十四人

外に

諸御出入町人等紀勢御領分者之外諸國江戸共御扶持方被下候者

合千四百四十五人扶持

此高にして 六千五百貳石五斗

銀百七十四枚
此現米百貳拾貳石六斗六升六合高にして
三百六石三斗程
米四百俵
此現米百六十石高にして
四百石
合高七千貳百八石八斗
外に御細工人之內他所ものへ被下
貳百俵　本阿彌
三　枚　花屋友七

右調書提出同時に、當春改革前切米貳拾四石以下三人扶持以上祿高等調帳と云一冊を提出せらる、是同年二月十五日御國政大改革之際、御切米廿五石以上は平均五十俵に減し廿四石以下は從前之通と被　仰出たるを以て、該改革前貳拾四石以下之有樣を示さん爲なるべきか、其內譯は本記中に揭くる貳拾四石取四人九十六石より以下百三拾五兩右之內金渡二十二人と云に至る迄全く同一にして、重復に涉るを以て爰に省く、唯廿四石以下祿高人員の總計を原書記載面を左に抄出して參考となす

當春改革前切米廿四石以下三人扶持以上祿高等調帳

一米貳万千貳百六十七石　　人員千六百七人

右人員之内扶持方取

一米四千貳百三十九石

此貳千三百五十五人扶持　　七百八十四人

右人員之内金渡

一金五百四十四兩　　百六十一人

切米無之扶持方幷金渡

一米三千石六斗　　人員四百四十六人

此千六百六十七人扶持

一金百三十五兩

合米貳万八千五百六石六斗
金六百七十五兩

内譯略く

小以如高

一米七十八石　　人員五人

内

四拾石　　貳拾石取　貳人

十五石　十五石取　壹　人
拾三石　十三石取　壹　人
十　石　拾　石取　壹　人
小　以
右之通御座候以上
巳十月
右之如くありて米七十八石云々を特記したるは、或は禁錮人等の事か　原書何等之説明なく事由分りかたし暫く原書之儘を記す

禄制大改革

明治二巳年二月十五日
一御國政大改革津田又太郎へ御委任に付粗平均禄の法に準し禄制改革せられ職制改正も連帯發布と雖も職制の部に分記し爰に省く

御意書

天下之大勢一變し門閥に不拘人才を登庸致府藩縣一治之制度相立候樣従
天朝被　仰出候に付ては御趣意謹て奉體認一新更始自今後領地高二十分の一を我等暮し方宛と相定め
朝廷之職務并治民に付ての用度之外は一切右二十分の一を以費用に供すへし就ては家中之者共も

別帳割之通無役高相定文武之職に居る者は別段定之通役高を遣すへし抑領地五十万石は勤
王治民の爲め所賜にして敢て一人の私すへきにあらされは其方共に於ても受米の知行高は即ち我等か勤
王治民を佐くる爲めにて敢て私すへき者にあらさるの理を辨へ各其職分を盡し我等と共に
天朝の御趣意を遵奉可仕事

二月十五日

無役高左之通　但御足高共

知行	壹万六千三百石	千六百三十俵
同	八千石	八百俵
同	六千六百石	六百六十俵
同	四千五百石	四百五十俵
同	四千石	四百俵
同	三千五百石	三百五十俵
同	三千三百石	三百三十俵
同	三千石	三百俵
同	二千八百石	二百八十俵
同	二千五百石	二百五十俵

知行二千百石　二百十俵
同　二千石　二百俵
同　千九百石　百九十俵
同　千八百石　百八十俵
同　千七百石　百七十俵
同　千六百石　百六十俵
同　千五百石　百五十俵
同　千四百石　百四十俵
同　千三百石　百三十俵
同　千二百石　百二十俵
同　千百石　百十俵
同　千　石　百　俵
同　九百石　九十俵
同　八百石　八十俵
同　七百石　七十俵
同　六百五十石　六十五俵
同　六百石　六十俵

同　五百五十石　　五十五俵
右以下御切米廿五石以上五十俵被下御切米二十四石以下是迄之通
○文武官人役料左之通　同年二月廿八日朱書之通改正「」内は朱書
「文武官人役料定」
但副は三步減し試補は六步減之事
「但副職者八步通兼職者三分通相渡候等」
米八百俵　執政
同三百俵　參政公用軍務會計刑法民政知局事學習館知事家知事
同二百廿俵　衞士大隊長
同二百俵　大隊長
同八拾俵　衞士副長敎頭「公用軍務會計刑法民政判局事學習館判事家判事」
同七十俵　公用軍務會計刑法民政判局事學習館判事家判事監察副長敎頭侍醫
同三十五俵　衞士小隊長砲隊長文武敎授「諸局判事試補」
同三十俵　小隊長砲隊長史官
同二十五俵　衞士半隊長砲隊分隊長近習
同二十俵　衞士分隊長旗手長裨官長半隊長砲隊分隊長
同十八俵　衞士嚮導裨官礮車長樂手長文武助敎分隊長旗手長裨官長「諸局書記」

同十五俵　　衞士當主幷子弟に至迄嚮導稗官樂手長
同十二俵　　捕亡手銃口番三兵隊付兵士當主幷子弟に至迄「授讀諸局書記試補」
同八　俵　　下等捕亡手
右之通被下等候事
一藩治職制之儀府縣之御制度に基き別紙職表之通御改正之儀　朝廷へ被爲　伺濟候付是迄之御役は總て相止め向後右職表之通御定被遊候旨被　仰出候事
二月十五日
別紙職表は職制の部に揭く
一明治二巳年二月十五日執政より布達
此度祿制御改革に付無役高に相成勤無之向も文武研究致し候者は才能に寄御抜擢可被遊候へ共差當格段所務相減勝手暮し方難澁可致に付在町住居勝手次第醫業幷農工商之業致し候儀不苦候間夫々望之職業相營家計相立可申事
本文職業に付て農工商之身分を以爭致間敷事
右に付住居幷職業之品民政局へ可届出事
一職業幷住居之儀申出候はゝ行届世話可致尤職業に付爭論等有之候はゝ元捌之儀は庶人之律を以取調候等相心得候樣民政刑法知局事へ申聞之
明治二巳年二月十五日

普代陪臣
無役高

一今般御改正被　仰出候付　御率先　御入費格段御省減御拜領高廿部之一を以御凌被遊御家中祿制
御改革被　仰出候事に付て者普代陪臣共俄に暇出に相成難澁可致哉深く　御苦慮被遊別紙之通御
取扱被成下筈候間何れも難有奉存家々にて宛行振等委細に取調姓名公用局へ差出候樣可致事
本文之通候へ共才能有之候者は猶委敷御取調之上御役可被　仰付事

普代陪臣無役高

御對面所席以上
千石以上之家來
所務四十石以上は　五十俵に
同　二十石以上は　三十俵に
同　三人扶持以上は　三人扶持に
右は以下役被　仰付候筈
但御對面所席以上
千石以上之家來にても三人扶持以下幷大廣間席初九百石以下之家來者二人扶持に召抱候事
一當季召仕之男女暇出之者は夫々職業に取付候迄五箇月之間壹人扶持つゝ御扶持方被下候事
但限月迄職業に有付候共本文五箇月之被下物下け渡候事
右之通
明治二巳二月廿八日

一　陸軍職制及御役料

軍務局知局事へ

陸軍職制並御役料別表且別帳之通御定可被遊旨被　仰出候事

二月廿八日

職制別表は職制の部に掲く

陸軍將卒役料定

米二百四十俵	寮長
同二百俵	副寮長
同百八十俵	隊長
同百五十俵	第一等副隊長
同百三十俵	第二等副隊長
同七十俵	上軍監指揮長官
同六十俵	副指揮長官火工長器械長
同五十俵	中軍監指揮官馬政官
同四十俵	副指揮官旗手
同三十俵	下軍監下長官副旗手
同二十八俵	副下長官

同廿六俵　吹角長第一等雜務官第一等馬醫
同廿四俵　第二等雜務官第二等馬醫
同二十二俵　吹角伍長
同二十俵　兵卒伍長
同十八俵　吹角手
同十六俵　上等兵卒
同十四俵　下等兵卒
同十二俵　雜卒

總て役料は當主幷子弟厄介に至迄無差別衣服食料履等自費之事
松坂より相詰候兵卒は元給扶持其儘御役料等被下衣服食料履等自費之事
右之外諸兵卒は御役料無之入寮中御賄振左之通
「御切米四石貳人扶持以上戎服幷履は自費にて相凌き食料は被下候事
右以下戎服幷履食料共總て御賄被下格合は下等兵と相心得可申候藝術出精昇進致し上等兵の格被　仰付候はゝ米貳俵相增猶又後々被　仰付候節者陸軍御役料附次第之通一格に米貳俵つゝ相增候事」
　但砲騎兩兵長沓並諸兵冠り物之儀は相渡候等

隱居の者へ年金

一家督無相違被下候隱居之面々へ年金被下

明治二巳年三月七日執政より達

此度祿制御改革に付家督無相違被下候筋と隱居分知被下候筋と所務過不及有之候儀は何れも其節之制度に依り候事に付被遊方も無之儀には候へ共老年之者深く　御憐恕之　思召を以左之面々へ年々金十五兩つゝ盆暮兩度に被下筈候間夫々へ相達被下之儀宜被取計事

久田久初三十人

御役扶持上りたる小祿之者へ年々金米被下

一御役扶持上り候小祿之向へ年金被下

明治二巳年三月八日執政より達

此度御役廢止に相成御役扶持之分は上り候付極小祿之向者差當り難澁可致と　御憐察被遊格段之譯を以御切米拾石以下之面々へ年々金拾貳兩被下候間夫々へ達宜被取計事

同年同月十二日再達

一此度御役廢止に相成御役持之分は上り候付極小祿之向は差當り難澁可致と　御憐察被遊格段之譯を以御切米拾石以下之面々へ年々金拾貳兩被下候へ共何分諸物高價之折柄夫々產業に有付候迄之處暮し方難相立筋も可有之哉と猶又深く　思召を以御切米貳拾四石以下末々迄御役扶持上り候向當年より二箇年之間米六俵つゝ被下候間如何躰にも勘弁致し往々生產見留相立候樣可致事

但本文厚　思召に付ては御切米拾石以下之面々へ被下候年々金拾貳兩も此程被　仰出候通其儘被下候事

米券渡方

一米券渡し方盆暮日段之事

元女中御合力金米停止

明治二巳年六月十九日會計知局事より達

無役高米劵毎月十日より相渡候事候へ共七月十二月は何れも家事繰合之都合も可有之付右兩月に限り五日より相渡候筈候事

御役料之儀も本文兩月は八日より相渡候筈

一元女中へ被下來候御合力金米停止

明治二巳年七月十日於東京家知事より同所御留守居へ左之通り申達す 大奥女官役々廢止老女民野初六十余人御暇の品職制之部同年四月七日の條に記載す

此度知藩事

御拜命被爲在候付て者是迄之御高十分之一と被　仰出此末御暮し方御見留も附兼候御儀に付別帳之面々へ被下御金等向後都て上り候筈候へ共格別之　思召を以當年分此節一時に被下候旨以來被下候儀無之趣篤と夫々へ御通達有之樣致度存候以上

七月十日

元女中被下物有之筋姓名帳

御宗家より御附

御合力

一金拾兩貳人扶持　元若年寄　純光院

同　幾島院

同　島村院

一銀百目つゝ

御合力　金貳拾兩　銀三十三匁
補筋　金七兩二分　銀二十七匁

御合力　金十三兩　銀四十二匁
補筋　金五兩　銀十八匁

御合力　金貳拾兩

御合力　金六兩貳歩　銀二十一匁
　左京太夫樣方

被下
一金七兩　銀十匁

他所
御合力　金九兩　銀三十五匁
補筋　金三兩貳分　銀十二匁六分

同　妙重院

元御錠口　妙學院

同　島月院

元表使　喜光院

清水より御供　輕明院

三保山

清水より御供　龜島

槇井

元使番　行山

御合力
金五両
銀二十八匁八分　竹川

一同金三　両　ひわ

一同金三　両　ます

一同銀百二十九匁　加茂

昨年御暇に相成候筋

一金貳拾両　元若年寄　槇野

但三箇年之内

一金拾五両つゝ　元表使　瀧尾
同　森田

但三箇年之内

一金拾五両　元御簾中様中年寄　松浦

但三箇年之内

一金拾三両　元御簾中様表使　澤井

但三箇年之内

一金五　両　元御三之間詰御末頭　美と

一金四　両　元使番頭格　くま

元伊賀株付之者給扶持半減

諸局子供陸尺役料

一金四　兩　　元御中居格使番　小　糸

〆金貳百三兩貳歩ゝ
銀八百五十六匁四分

此金十四兩壹歩ゝ壹匁四分

右金貳百拾七兩三歩ゝ壹匁四分

一元伊賀以下株付之者給扶持半減被下

明治二巳年八月廿四日執政より達

兵卒役料御改正に相成是迄之給扶持半減被下之儀此度被　仰出候付ては都て株付之者文官武官無役之無差別右同樣是迄之給扶持半減被下候事

右一通

一元伊賀以下株付之者都て給扶持元高半減被下に相成切米兩度渡にて日々之暮方に差支可申に付右給扶持諸士無役高同樣月々相渡筈候事

八月廿四日

一諸局子供陸尺役料之事

明治二巳年八月廿四日執政より達

諸局子供陸尺役料左之通被下筈候事

米拾貳俵　　諸局子供

同　六俵　　陸　尺

八月廿四日
同斷口達覺書を以
一諸局子供陸尺役料被下候付ては向後晝食扶持並湯漬は不相渡筈候事

家令所勤人役料

一家令初御役料之事
明治二巳年九月執政より
家令初御役料左の通候事

三　百　俵	家　　令
貳百五十俵	家　　扶
八　拾　俵	家　　従
八　拾　俵	近　侍　長

一錠口番御役料向後拾五俵相渡筈候事
此時家令扶従を被置家知事家判事は廢止に成る職制之部に詳也
一家令扶從等御役料猶又改正之事明治三午年四月にあり
一御切米貳拾四石以下以下役以上及祿扶持被下之面々無役高之制
明治二巳年十一月十一日執政より達
御切米貳拾四石以下以下役以上及祿扶持被下之面々無役高向後別帳之通被　仰出月賦米券を以相渡候筈候間此段諸向へ通達之儀可取計事

御金被下者上り候事件之通に付以後御貸扶持不貸渡事

十一月十一日

無役高極

一御切米貳拾四石　五十俵

三人扶持取

一同　貳拾四石取　四十一俵

一同　貳拾三石　四十八俵

三人扶持取

一同　貳拾三石取　三十九俵

一同　貳拾貳石　四十七俵

三人扶持取

一同　貳拾貳石取　三十八俵

一同　二拾一石　四十五俵

三人扶持取

一同　貳拾壹石取　三十六俵

一同　貳拾石　四十三俵

三人扶持取

一御切米貳拾石取　三十四俵

一同　拾九石　四十貳俵
　三人扶持取

一同　拾九石取　三十三俵

一同　拾八石　四十俵
　三人扶持取

一同　拾八石取　三十一俵

一同　拾七石　三十八俵
　三人扶持取

一同　拾七石取　二十九俵

一同　拾六石　三十七俵
　三人扶持取

一同　拾六石取　二十七俵

一同　拾五石　四十一俵
　五人扶持取

一同　拾五石　三十五俵
　三人扶持取

一同　拾五石　三十貳俵
　二人扶持取
一同　拾五石取　二十六俵
一同　拾四石　三十三俵
　三人扶持取
一同　拾四石取　二十四俵
一同　拾三石　三十一俵
　三人扶持取
一同　拾三石取　二十貳俵
一同　拾貳石　三十俵
　三人扶持取
一同　拾貳石取　二十一俵
一同　拾壹石　二十八俵
　三人扶持取
一同　拾壹石取　十九俵
一同　拾　石　二十六俵
　三人扶持取

一御切米拾石取　　十八俵

一同　九石　　二十五俵

三人扶持取

一同　九石　　二十貳俵

二人扶持取

一同　九石取　　十七俵

一同　八石　　二十三俵

三人扶持取

一同　八石　　二十俵

二人扶持取

一同　八石取　　十六俵

一同　七石　　二十一俵

三人扶持取

一同　七石　　十八俵

二人扶持取

一同　七石取　　十五俵

一同　六石　　十九俵

三人持扶取
一同　六　石　　　　　　十六俵
　二人扶持取
一同　六石取　　　　　　十四俵
一同　五石取　　　　　　九俵
一同　四石取　　　　　　七俵
一同　三石取　　　　　　六俵
一同　二石取　　　　　　四俵
一拾三人扶持取　　　　　四十俵
一拾人扶持取　　　　　　三十一俵
一八人扶持取　　　　　　二十五俵
一七人扶持取　　　　　　二十二俵
一六人扶持取　　　　　　二十俵
一五人扶持取　　　　　　十八俵
一四人扶持取　　　　　　十六俵
一三人扶持取　　　　　　十四俵
一貳人扶持取　　　　　　九俵

右之通

一右無役高米券渡振之事

明治二巳年十一月十三日會計副知局事より達

以下役以上元御切米貳拾四石以下及祿扶持之面々無役高米券之儀來午正月よりは此度相極候俵數割合を以て月々渡可取計候へ共當年之儀は右俵數之內夏貸幷御貸扶持等諸押引取殘米者米券に取計此節相渡候事

一貳拾一石以下之內有扶持之面々者當正月より十一月分迄御扶持方相渡有之儀に付右米高當年分無役高にて押取候筈候へ共低祿之面々難澁可有之付右十一箇月分御扶持方米高之內左之通御用捨に取計差引殘高丈け無役高にて引取候筈候事

一米貳石六斗壹升九合　五人扶持取十一箇月分御扶持方高之內返納御用捨分

一同壹石五斗七升貳合　三人扶持右同斷

一同壹石四升八合　貳人扶持右同斷

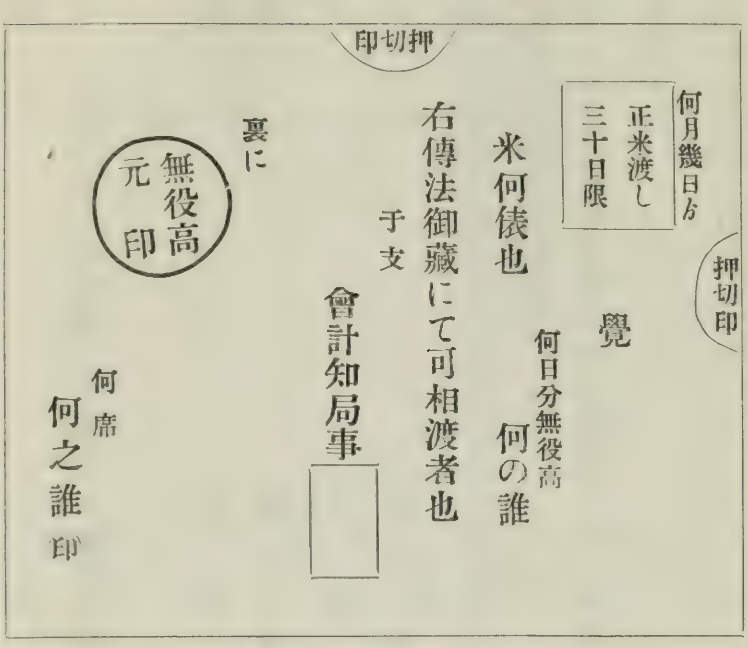
一元祿扶持之面々は總て無役高十二箇月割に取計十二月分は米券此節相渡候事

但當正月より十一月迄之御扶持方被下切候事

下け紙　本文之通候へ共當正月より十一月迄相渡有之候御扶持方へ十二割一箇月分相加へ米高貳拾石余相成候はゝ右余米相減渡方取計筈候事

一當年分被下振之儀疑惑之面々は割合等委細之儀會計局へ可承合事

一米券渡方之儀文官人は其局々へ相渡銃隊は軍務局無役之面々は名草民政局にて相渡候事
尤渡日段之儀は尚取極跡より觸達可取計等之事
一米券裏判姓名認振之儀は別紙雛形之通に可取計若當人他所勤等にて差支候へは親類又者同
席之内代判之筈候事
但本文に付判鑑壹枚宛早々會計局へ相廻し當人他行等之砌は代判人判鑑差出可申事


押切印
何月幾日ゟ
正米渡し
三十日限
覺
何日分無役高
何の誰
米何俵也
右傳法御藏にて可相渡者也
干支
會計知局事
押切印
裏に
無役高
元印
何席
何之誰
印

諸參事役料

一諸參事御役料

明治二巳十一月十六日大少參事宣下是迄の執政參政知局事の職名被廢に付諸參事御役料左之通定る

米八百俵　大參事

米六百俵　權大參事

米三百俵　少參事

米二百俵　權少參事

米券裏書改正

一米券裏書改正

明治二巳年十一月廿二日會計參事より達

一米券裏書之儀左之通相成候筈政事廳より被　仰聞候事

十一月廿二日

御役料

右權少參事以上

何姓何參事內

何之誰印

御役料

右判事以下

何局何役

何之誰印

無役高

右權少參事以上

何の誰内

何之誰　印

同　士族

何之誰　印

同　同並

何之誰　印

同　扶持人

何之誰　印

一家令所官員幷御役料改正之事

家令所官員幷御役料向後左之通り御改相成候事

家令　御役料　三百俵

同並　御役料　貳百五十俵

家扶　同　百俵

同並　同　八十俵

家從　同　三十五俵

同並　同　貳十俵

書記　同　十八俵　金十二兩

従　事　同　十五俵
一等卒　同　十二俵
二等卒　同　九俵
三等卒　同　六俵

右之通

明治三午四月

一旅行渡り金之定

明治四未年三月廿八日他邦行渡り金左之通相極候旨會計掛より達

渡り金定

一十五人立　大参事
外に十二人繼人足　戍兵總督
三百九兩三歩　東京
五十六兩壹歩　西京
三十七兩貳歩　大坂
外に三兩三歩　滯留一日分一人壹歩積
一拾人立　權大參事
外に十二人前　同　戍兵副總督

貳百五十壹兩　　東京
四拾七兩貳歩　　西京
三拾貳兩貳歩　　大坂
　外に貳兩貳歩　　前同
一七人立　　少參事
外に拾人　前同　　權少參事
百九十三兩貳歩　　東京
三十七兩貳歩　　西京
貳拾五兩三歩　　大坂
　外に壹兩三歩　　前同
一五人立　　監軍
外に七人　前同
百三十六兩　　東京
貳拾六兩壹歩　　西京
拾八兩壹歩　　大坂
　外に壹兩壹歩　　前同
一四人立　　大區聯隊長

外に七人　前同	院長寮長
百貳拾五兩	東京
貳拾四兩貳步	西京
拾七兩壹步	大坂
外に壹兩	前同
一三人立	權大屬　都督傳令使　隊長　一等教授　一等大醫生
外に五人　前同	
九十一兩	東京
十七兩三步	西京
十二兩二步	大坂
外に三步	前同
一二人立	少屬　一等分隊長　聯隊傳令使　二等教授
外に五人　前同	司長　計長　權少屬　二等分隊長　三等教授　二三等大醫生
七十九兩壹步	東京
十六兩	西京

十一兩二歩　大坂
外に二歩　前同
一貳人立　都督史生 一等少醫生　下司長
外に三人　前同
五十七兩　東京
十一兩　西京
七兩三歩　大坂
外に二歩　前同
一貳人立　史生下司
外に二人　前同　一等助教
四十五兩三歩　東京
八兩二歩　西京
五兩三歩　大坂
外に二歩　前同
一壹人立　伍長 二三等助教 二三等少醫生　聯隊史生
外に二人　前同

三十四兩	東京
六兩三歩	西京
四兩三歩	大坂
外に壹歩	前同
一壹人立	右以下
外に壹人　前同	使部に至迄
二十三兩	東京
四兩一歩	西京
三　兩	大坂
外に壹歩　前同	

出勤差止之者職俸不渡

一出勤差止之者は職俸不相渡定

明治（一本三午）（四未）年四月十二日政事廳より達

一大少參事初故障有之出勤差止（一本之）（候）者は勿論勤被免候者其節より職俸不相渡等候事

四月十二日

（以下原本なし一本による）

明治三午年正月四日

一加俸下賜候面々は同宮之上席に相成候等候事

同年正月廿八日會計局より達

一文武官人之内私費願濟にて他所へ罷越候等罷皈候迄御役料不相渡等候事

南紀徳川史巻之八十七

臣　堀内信　編

祿制第七

緒言

一永世御法は、嘉永七寅年五月諸士本高世祿發令の當時、江戸御在府にして、諸政皆江戸より出つ、依て在府之國老水野土佐守安藤飛驒守奉命、奥右筆組頭和田金之進古田直三郎等主任となり、御家中家督相續跡目名跡に係る古法舊制を審査、以て一定の法則を制定、親裁を經て永世遵奉すへき法則に定む、元來諸士病死隱居乃至歸參被　召出等之時は、奥御右筆に於て其祖先之家柄父祖之勤功と御目付より言上相續人の品行書とを調査、御家法に照し類例先格を引証し、家督跡目被　召出之辭令案を調成呈出す、之を跡目調といふ、今後本高世襲に改革と雖も駿河越と國初の時被　召出と已後新進の家柄或は無縁養子等により世襲の區別あれは、是等の細則内規なかるへからす、故に此法を制定家督跡目調の準繩を立られたる也、以後新定の法則亦此簿に追錄せり

一御内則亦永世御法と同時に制定せらる、按に從來諸職任免黜陟昇級加祿の事は、特命乃至執政の撰擇司務長官の推薦建議により、奥御右筆に於て其者之事歷（成立と稱す）勤惰年功品行才能職務適否の如何等を內調、又先例舊格を照査し審密周到の調書を呈出、執政親裁を得て施行するの例なり、然れとも昇平無事有爲才能の用薄く過失不正なくして無爲平々勤務しある以上は、祿之高下と年功の多

少により先格舊例に準し相應之昇級加俸を行はる、亦おのつから範圍あつて假令は二三百石の士は千石内外之番頭たるを得す、二三十石の少祿は二三百石の物頭に進む能はす、知行取にてもし才能あれは司農參政監察其他の要職に撰はれ、少祿にて方正謹直なれは侍臣に擧られ、武術あれは武官となり、事に經驗鍛錬なれは事務官に就く、其他は一生閑職散官に終るは十に七八也、時に或は權官要職の徒乃至寵臣樞府の屬官等非例之累進增祿の特遇なきに非すと雖も、概しては祿高の釣合と年功の多少と先蹤類例とを標準に立たるものにて、確乎たる原則なかりし也、既に年功に關せす、賢愚を不問、一般本高を世襲せらる、若し一定の法則なけれは、或は標準を誤り、限りあるを以て限りなきに應する濫出の弊を來さんを懼る、依て上下一切の職々に就き從來の昇級轉職增祿加俸の先例實跡を逐一調査し、以て比格權衡を商量講究して、更に停年格豫定の法則を制定裁可を得て、將來昇級增祿調査之標準としたる也、原より政事府の機密に屬するを以て御內則と題す、奉命及ひ調査之主任者は永世御法に同し

一兩法則原簿は、江戶政府に保管之處、維新後和歌山藩廳へ引渡し、廢藩置縣之際同縣廳へ引續たるに、同廳火災の時德義社へ移し烏有を免る、即ち原簿に依て抄錄す

一御內則は職祿兩制に關聯すと雖も、之を區分別記しかたし、且元來世祿發令に付て之制定に係るを以て祿制に編纂せる也

永世御法　跡目家督

同　附録

享和三癸亥六月

一無縁養子之事

一世祿之事

一家督跡目調之事

一御咎被　仰付候者も家柄之者は歸參等早被　仰付之事

一御取立之者知行御切米本高之事

一部屋住にて被　召出候者御切米本高之事

一下役人より昇進之事

一帯刀以上より伊賀迄株付出之者手代其他二人扶持之徒共に肩衣御免には被　仰付候事

一御勘定奉行支配小普請以上　御目見以下之者御禮式獨禮には被　仰付候事

一御目見以下之者老衰或は病死跡被　召出之事

一諸役所下役之事

一二三男等にて被　召出相勤居候者他家名跡之事

文化六巳十月

一坊主より株を離候轉役取斗申間敷右に付御品附取斗振之事

嘉永七寅二月

一御目見以下之向輕く被　仰付之品之事

慶應二寅二月

一小普請御醫師格之面々輕く跡目被　仰付之事

同年八月

一戰死之筋跡目等品宜被　仰付候品之事

同年十月

一戰死手負相果候者討死同様之事

同年十一月

一十七歳以下にて致病死候共名跡被　仰付候品之事

附錄

一本家駿河越にて斷絶分家

南龍院様御代被　召出候家世祿之事

享和三亥十月

一南龍院様御代より之家にても御咎等にて一旦致中絶候向世祿之事

無緣養子之事

一無緣養子之事

有德院樣御代寶永年中御定以來は、三四代も相勤候家は平士にても無緣養子被　仰付、其他一代二代之勤にては不被　仰付、奥向幷家業有之者は格別に被　仰付候、右は三代も御奉行仕候得は御譜代と申所にて御定之趣候得共、　公儀にては近來より一代之勤にても他人養子被　仰付候儀に付、　御家にても右御振合に被准此度左之通御用人迄相通候事

都て平士養子之儀は、御定續幷聟養子之外は、一代二代之勤にては他人養子は不被　仰付等、先年より之御定候得共、格別之　御仁惠を以向後右躰之筋も御吟味之上、他人養子可被　仰付旨被　仰出候事

件之趣組支配へも可申聞事

世祿之事

一世祿之事

駿河越之家筋は、初代之者終身之祿高迄は、子孫之勤功次第にて御加增被下世祿に被成下、舊知より上之御加增は容易には不被下事

縦は駿河越筋は

初代之者終身之祿千石之家當時五百石にて候得は、勤功次第にて千石迄は御加增被下世祿被成下舊知迄之內は勤年數に不拘跡目無相違被下置、名跡被　仰付候節も有緣無緣之無差別同樣無相違被下置、且初代之者終身之祿千石之家當時貳千石にて候得は、千石迄は極之通減祿被　仰付、舊知迄之內名跡被　仰付候得は、依有緣無緣極之通可有差等事

世祿家にても舊知より過候御加增は、一通りにては不被下、御定に付ては世祿にて無之家は勿論、容易に御加增は不被下事、然共御役に寄勤功を以て被下候御加增は、世祿にて無之家共無差別被下候事

一右之通には候得共、當時知行御切米等目盛より出過に相成有之付、御年限中は御加增御足米等一圓不被下候得共、御年限後出上り差別之上目盛より出知行等內場に相成候節は、勿論勤功次第にて御加增幷並高之御足米等被下候事、しかし後年に至り候ても目盛高を越候儀は、不取斗との品去々酉年被　仰出候御趣意覺帳幷御勝手筋覺帳に有之通可相心得事

按に　目盛(メモリ)と云は、御勘定所にて調査の歲入出豫算目安盛り分書を云ふ、財制之部に詳也、御加增とは、總して本祿加增の事也、覺帳は政府の簿册にて、幕府に係る事項及ひ法規等を記錄のもの也、同簿は天保十四年より明治二年迄の分遺存と雖も、酉年被　仰出の事脫記なり

一御入國以來　南龍院樣御代被　召出被　召抱候家筋は、初代之者終身之祿三ケ二を世祿被成下次第前に同し

三ケ二の割大概

千石は「現米四百石」　七百石「現米二百八拾石」
九百石は「現米三百六拾石」　六百石「同　二百四拾石」
八百石は「同　三百二拾石」　五百五拾石「同　二百二拾石」
七百石は「同　二百八拾石」　五百石「同　二百石」

「同 二百四拾石」 六百石は 「同 百六拾石」 四 百 石
「同 二百石」 五百石は 「同 百四拾石」 三百五拾石
「同 百六拾石」 四百石は 「同 百拾石」 貳百七拾五石
「同 百貳拾石」 三百石は 「同 八拾石」 貳 百 石
「同 八拾石」 貳百石は 「同 六拾石」 百五拾石
「同 四拾石」 百 石 は 「同 三拾石」 七拾五石

餘は右に准す

一二男三男家も同斷之事

一駿河越之家筋にても、御咎等にて一旦致中絶候向は、先祖初代之者終身之祿三ヶ一を世祿に被成下候事

次第前に同し

三ヶ一の割大概

「現米四百石」 千 石 は 「現米百四拾石」 三百五拾石
「現米三百六拾石」 九百石は 「同 百二拾石」 三 百 石
「同 三百二拾石」 八百石は 「同 百拾石」 貳百七拾五石
「同 二百八拾石」 七百石は 「同 百石」 貳百五拾石
「同 二百四拾石」 六百石は 「同 八拾石」 貳 百 石

家督跡目調

五百石は「同　二百石」　百七拾五石「同　七拾石」
四百石は「同　百六拾石」　百五拾石「同　六拾石」
三百石は「同　百二拾石」　百　石「同　四拾石」
貳百石は「同　八拾石」　七拾五石「同　三拾石」
百　石　は「同　四拾石」
江戸にて跡目大御番格小普請被　仰付候向は　御切米二拾石
跡目大御番被　仰付候向は　御切米二拾五石
右以下は　御切米拾五石
餘は右に准す

一先規より家督之節不相減家或先祖舊功を以御加增被下候家筋は近來之御加增にても不減事

一家督跡目調之事

家督跡目調に是迄帶刀以上之勤より年數に入候得共、當亥六月朔日より〔以下〕「目見以下大概順に出候筋より」〔小普請より〕年數に入候事

當時〔御徒格〕「御目見以下大概順に出候」以上相勤居候者は是迄之通帶刀以上の勤より年數に入候事

「本文以下小普請より年數に入且當時御徒格以上相勤候者は是迄之通り帶刀以上之勤より年數に入候さ相極有之候得共右は少々不當之事に付兩樣共御目見以下大概順に出候筋より年數に入候害伺直し相極候事尤此節より之儀には無之本文亥年より之極を直し置候事

文化十二亥十二月」

一御小姓御伽無足勤大御番之無足御番は年數に入候事
御方々樣御小姓御伽無足勤も同斷
一御鷹方御鳥見山方勤御役者右は業役にて先は轉役無之役に付其業にて終候者は無足勤幷御徒格以下之勤も年數に入御用部屋書役無足助其外無足勤は年數に不入候事
當時相勤居候ものは是迄之通無足助も年數に入候事
一是迄も年數に不入筋は勿論不入候事
無足勤にても御用部屋寫物勤は地方とは違候故勤に不入事寛政八辰年河口作兵衞跡目調之横ばへにあり
本文之外無足勤被　仰付候向勤年數に入候極文政四巳三月覺帳にあり
一右四役にても譬は御鷹方無足勤或同心より御徒格之御鷹方御鷹匠同組頭格に致轉役候輩は同し業にて終候儀に付年數に入候得共御鷹方を離他役に轉候て終候者は無足勤以下小普請格以下之勤は年數に不入事
一指南役御馬役
年數に不入候事

御咎の者歸參之事

一御咎被　仰付候者も家柄之者は歸參等早被　仰付候事
駿河越筋目之者改易追放被　仰付候共歸參被　仰付不苦罪に候はゝ家柄之故を以年數早く歸參可被　仰付其者病死實子幷兄弟等も無之歸參可被　仰付者無之候はゝ有縁之者之子弟被　召出家名相續可被　仰付緣者も無之候はゝ二男三男にて稽古料被下置候輩或は二男にて被　召出罷

在候ものなとへ家名御立可被下事

御取立之者知行切米本高之事

一御取立之者知行御切米本高之事
公儀にて御取立にても布衣以上被　仰付候得は本高百俵に被成下三千石高以上被　仰付候得は
本高五百石に被成下候御趣意に被准此御方にても

並高五百石之御役に被　仰付候得は　本高地方貳百五拾石

並高四百石は　本高地方貳百石

並高三百石は　本高御切米六拾石

御用人は三百石にても本高地方貳百石被　仰付候事

並高貳百石は　本高御切米四拾石

素袍以上に被　仰付候得は　本高御切米貳拾五石

大御番格以上に被　仰付候得は　本高御切米　拾二三石より拾五石迄

獨禮以上に被仰付候得は　本高御切米　拾石より拾二三石迄

御目見以上に被仰付候得は　本高御切米　八石より拾石迄

並高より上に御足米被下候儀は無之勤功に寄御増被下候節にても前條の趣を以て本高を御増可被下餘は年々御加年時功御加年可被下事
右之通に付ては祿迄御直被下候御役替は通例之勤功にては別て被　仰付間敷事

部屋住之者本高之事

一部屋住にて被　召出候者御切米本高之事

総領にて被　召出候者御切米本高之儀親跡目可被　仰付程を本高に被下其餘は並之通御足米被下跡目より輕き並高に候得は勿論並之通本高被下候事

前々部屋住之者被　召出段格祿相進親より本高多く被下置候向も有之候公儀にては親之祿より多くは不被下譬は並高三百俵之御役に被　召出候節親本高貳百俵或百五拾俵に候得は被　召出候者も親之通貳百俵百五拾俵被下勤之內並之通御足米被下候右は家督無相違被下候事ゆへ親本高之通被下候得は

御家にては家督之節減祿被　仰付候に付本文之通候事

下役人より昇進之事

一下役人より昇進之事

陸尺御中間より昇進之者は肩衣御免以下之役儀「以下小普請」迄には被　仰付候事

元陸尺御中間出之者にても當時御小人其外株付に進居候者又は拔群之勤功有之ものは肩衣御免迄には被　仰付候事

一帶刀以上より伊賀迄株附出之者手代其外二人扶持之徒共に肩衣　御免には被　仰付候事

株相對不相成向にても都て御勘定奉行支配小普請以下之者は同斷

一拔群之勤功有之者又は當時御勘定奉行支配小普請以上に進居候者は　御目見以上「御城代支配小普請迄」には被　仰付候事

一御勘定奉行支配小普請以上　御目見以下之者御禮式獨禮「御腰物奉行迄」には被　仰付候事

拔群之勤功有之者又は當時　御目見以上に進居候者は素袍以上　には被　仰付候事

但御目見以下にても家督跡目にて以下小普請并同格被　仰付候者且先祖之内一旦　御目見以上に御取立之子孫は當代輕き勤より昇進之者にても素袍以上には被　仰付候事

輕輩跡目之事

一御目見以下之者老衰或病死跡被　召出之事
御目見以下之役病死跡等被　召出之儀は是迄之通然れ共年數は是迄より一兩年つゝ延し可被　召出事
件之通にては候得共格別難儀之向抔は時宜に寄可申見事
本文之通には候得共御勝手御繰合之儀大事之御場合に付當分は勘辨之上成丈人數少く取計可申事

諸役所下役之事

一諸役所下役之事
諸役所下役に伊賀坊主手代等より昇進之輩　御目見以上之御役へ難調に付ては明役有之節　御目見以上へは大御番以下之小普請より申立候樣右に付ては從來　御世話被爲在候通學校にて人才敎育之儀專用に致し且役儀に寄兼て見習　不申候ては勤り兼可申に付兼々助勤等致させ試申立候樣夫々頭支配へ心得させ且　御目見以下之明跡へは以下小普請等より相應之者相撰申立尤大御番以下之輩持格にて　御目見以下之輕勤之者は去る巳年被　仰出有之通り事理相當之役儀可被　仰付に付猶又此度左之通相通候事

御勘定奉行
御用人
御廣敷御用人

諸役所向之面々外より被　仰付候ては勤馴不申自然其役所内より繰上候樣相成候に付大御番以下之輩持格にて下役之勤内存之向は申出候樣品去る巳年被　仰出有之事候近來大御番初小普請等御人數次第に多相成おのつから御役附も遲一同勵も無之事候各役所內へ外より被　仰付候ては勤方不案内にては難御用立事候間大御番初小普請之内より兼て助勤致させ勤馴させ置往々本役明へ申立候樣可致事

都て下役有之向へは御用人より可相達事

右一通

御用人

諸役所向之儀は御用も多候に付外より被　仰付候ては急には勤馴不申取扱等も難行屆候に付自然其役所内より繰上候樣相成候に付大御番初小普請等御人數次第に相增自ら御役附も遲れ一同勵も無之事に付大御番以下之輩は内存次第持格にて勤方は　御目見以下之輕勤をも可被仰付旨去る巳年相達有之事に付内存之向は申出候樣猶又相通可申事

件之趣組支配へも相通内存申出候はゝ頭支配勘弁致し其才器に應し兼て申立置候樣大御番以下支配有之向々へ可相達事

二三男にて他家名跡之事

一二男三男等にて被　召出相勤居候もの他家名跡被　仰付儀も可有之段此度左之通相通候事

二男三男或弟等にて被　召出當代にて罷立候者は他家名跡思召を以て被　仰付儀も可有之自己相望候ものは双方熟談の上内存申立候樣向々へ可相通事

坊主轉役
不取計

享和三癸亥六月

一坊主より株を離候轉役取計申間敷右に付品附取計振之事

都て坊主より株を離し候轉役は向後取計申間敷候右に付ては左之四役所附坊主二拾ヶ年以上無故障相勤候者は一局に二人充（若山にて一人 江戸にて一人）は格式被　仰付御切米拾石三人扶持に可被成下事

但坊主株は不離事

本文二十箇年以上は總勤之所にて其役所勤は十年も相勤候者は申見可申取扱事

本文格以前より格式等被　仰付坊主株をはなれ候筋は極之人數外に候事

文化七年六月伺濟

一御小納戸坊主は御納戸格に可被　仰付事

一奥御用部屋坊主は同所書役格に可被　仰付事

一御用部屋坊主は同所書役格に可被　仰付事

一御目付方坊主は御徒格に可被　仰付事

右は一役所若山江戸にて一人充に限り如何樣に申立無據筋にても兩人とは不被　仰付一人明き候はゝ其跡へ筆頭之者より右之格に可被　仰付候若其節之筆頭之者勤年數二十年に不滿候はゝ明置可申候たとへは江戸にて一人明其節江戸に二十年に及候勤之者無之若山には右年數に至り格式無之者有之江戸を明置若山にて兩人被　仰付候儀不相成いつれ江戸若山にて一人充に限り可申事

一右之外總坊主之內三十年以上無故障勤功有之格別に申立候者は悴を坊主見習に差出三人扶持充

可被下候尤過人にて差置其父之株を相續可爲致事

但勤筋所にての被下物は並之通に被下其外他所勤渡り物も同樣可相渡事

一前條四役所にて格式被　仰付候者にても三十年以上之勤にて品附より年數にも相成何卒品附不申候ては一躰之勵にも可相障程に至り候はゝ悴見習に差出候儀同樣に取斗可申事

文化六巳十月

假令三十年相勤候共勿論勤振にも依り右年數之者多人數一時に悴を見習に可差出筋には無之其内之筆頭にて格別に申立候者に限り可申事

御目見以下之跡目

一御目見以下之向跡目輕く被　仰付候品之事

是迄　御目見以下之向病氣に付御切米等差上且病死之筋跡目は不被　仰付一旦家名及斷絶追て悴を被　召出候處右被　召出候迄之內家內及渇命候向多歎敷事に付此度格別之　御仁惠を以て已下役之跡目三人扶持被下御勘定奉行支配小普請被　仰付且又御勘定奉行支配小普請にて致病死候はゝ跡目三人扶持被下御勘定奉行支配小普請可被　仰付事

嘉永七寅二月

小普請御醫師之跡目

一小普請御醫師之面々輕く跡目被　仰付候品之事

是迄小普請御醫師格之向跡式は不被　仰付極に候得共此度格別之　御仁惠を以跡相續之者醫業出精いたし候はゝ爲跡目三人扶持可被下置事

慶應二寅二月

一戰死之筋跡式等品宜被　仰付候品之事

討死之者

勤人は

大御番以上は拾石程御加增被下大御番以下は格合一等品宜被　仰付五石程御加增をも被　仰付

無足之筋は

父兄へ格祿之內御賞

厄介人等は

養育を受居候者有之候はゝ其者身片付候迄三人扶持被下人數多少に不拘事

輕末に

跡式被　仰付者に候はゝ一等品宜被　仰付一代切之者に候はゝ跡式被　仰付

人夫

養育を受居候者有之候はゝ其身片付候迄一人扶持被下人數多少に不拘事

一陪臣は御手當金銀被下

討死之者跡式品宜被　仰付さ之品且忠勇さの品諸向へ通し候品此節附込帳にあり

手負之者

身分之輕重に寄相應御手當金銀被下

但不具に相成候筋へは討死同樣之割を以當人へ御扶持被下

一陪臣へは御手當金銀被下
慶應二寅八月
一戰爭之節手負相果候者討死同樣之事
戰爭之節手負右疵にて相果候者は討死同樣之御取扱相成候筈候事
慶應二寅十月
若年者之跡目
一十七歲以下にて致病死候へ共名跡被　仰付候品之事
十七歲以下にて致病死候得は家名御立不被成下御議定に付容易に名跡難被　仰付筋には候得共思召之御旨も被爲在候間向後十七歲以下にて病死いたし候得共先代勤功等有之向は別議を以名跡可被　仰付旨被　仰出候事
件之通被　仰出候就ては向後跡目之者幷養子願等之節年齡有躰に申出名實相違之儀無之樣可致候若心得違不束之次第も有之候はゝ屹度御糺も可有之條頭支配一類共にも篤と相心得可申候尤是迄之儀は格別之　御仁惠を以御用捨被遊候事
一右に付名跡被　仰付候筋は父祖或は先祖以來勤功も有之候に付別議を以名跡可被　仰付候間內存之旨申出候樣一類へ御尋之上跡目可被　仰付事
一右之筋跡目割之儀は新舊に不拘都て無緣名跡跡目之割より一等輕く被　仰付大御番以上は大御番格小普請に可被　仰付事
慶應二寅十一月

永世御法附錄

一本家駿河越にて斷絶分家　南龍院樣御代被　召出候家は本家初代之祿三ヶ一と分家初代之祿三ヶ二之內多き方へ附世祿御定可被下事

縱は　本家三百石にて致斷絶候得は中絶同例を以

「三百石之三ヶ一は」　百　石

分家も三百石にて　南龍院樣御代被　召出候得は

「三百石之三ヶ二は」　二百石

右之通三ヶ二之方多候得は二百石を世祿に被成下三ヶ二之方少く候得は三ヶ一之分を世祿に可被成下事

一分家

清溪院樣御代以來之家に候得は分家之方高祿に候共世祿家に不入新家故本家之祿之割を以て世祿に被成下候事

享和三亥十月六日

一南龍院樣御代より之家にても御咎等にて一旦致中絶候向は先祖初代之者終身之祿四ヶ一を世祿に被成下候事

次第前に同じ

四ヶ一之割大概

千石は　二百五拾石　九百石は　二百廿五石
八百石は　二百石　七百石は　百七拾五石
六百石は　百五拾石　五百石は　百廿五石
四百石は　百石　三百石は　七拾五石
二百石は　跡目大御番に被　仰付候向は　御切米　二拾五石
江戸にて跡目大御番格小普請被　仰付候向は　御切米　二拾石
右以下は　御切米　拾五石

右之通

一御初代以來之家にて以下役病死跡被　召出文

文　格

何役にて致病死候
某　悴　何　某

親誰儀

南龍院様御代より之家に付其方儀被　召出四人扶持被下小普請入被　仰付候

御勘定奉行支配之事

一左之數條は此帳簿に記載なき分と雖も政府覺帳其他發見により爰に附記す

嘉永四亥年九月　山中筑後守奉

一儒者跡目之儀天保十二丑年御内則之趣も有之候得共猶　一位様思召の品被爲在候に付向後儒者

幷學校勤二代も相勤候向之跡目は格合減祿振共素人同樣被　仰付跡目の人柄次第直に相應學校勤に可被　仰付事

本文の向にても家業相續難相成筋は天保の度御內則通り是迄の振より猶又一等下け可被　仰付事

一本文の通に付ては向後格式は容易に不被　仰付都て素人同樣の運ひに可被　仰付事

嘉永三戌年五月　伺濟

一御廣敷廻り等の醫師小普請御醫師格被　仰付候筋病死等の節跡式は不被　仰付事候得共當時壹岐立啓（小普請御醫師格醫學館講釋助醫學館會主より五十年講釋助より三十六年）如き醫學館勤久々の勤功にて格式被　仰付候筋は一と通り御廣敷廻り等にて年數も無之格式被　仰付候筋とは差別も有之事に付以來右躰醫學館勤久々の勤功にて小普請御醫師格被　仰付候筋は相應跡目被　仰付筈に候事

跡式は御扶持方の多少に不寄　三人扶持被下　御用人支配に

猶其節の人物等に寄

四十年以上五十年以上差別の儀は猶其節々可申見事

西條家へ御附之者跡目

一西條家へ御附屬之者跡目之事

源性公御分家の際其后は本藩より御附屬之諸士尠からす皆本藩より宛行わるゝ祿高の上へ豫州知を加へられて役儀を命せられ江戸西條へ移住又は若山に在勤す此輩病死の時は本藩へ戻るへき成規と雖も從來の例子孫之者從前の如く御召遣ひ被成度よし御請求ありて其儘御附屬たる事

殆と世襲となれり而して本藩より之祿は本藩と違ひ世祿也此類常に尠からす唯其一例を示す

天保十四卯年九月　政府覺書帳之内

淺井彌六右衞門儀當六月廿一日於紀州致病死候に付總領武助儀は其儘御貰被成度候彌六右衞門儀久々出精相勤候に付　御本家樣より被下置候知行百石無相違武助へ被下置候樣被成度思召候此段宜申達候樣　左京大夫樣被　仰候

紀州知百石
豫州知二十五石
御持筒頭格時計之間詰
老年に付勝手次第勤
淺井彌六右衞門　勤六十八年

奥之番格
式部大夫樣御小納戸
彌六右衞門總領
同　武助

右書付御家老差出候に付孫十郎直に及取斗候處武助儀其儘被成御貰度との儀　思召之通被成候樣　御本家より被下候知行百石無相違可被下置との御事に付其段　左京大夫樣御家老へ申聞之

申聞振表帳之通　跡目之品は此節之跡目調に留有之候事

に御附屬にて紀州知ある分は跡目家督に限らす御家老澁谷菅沼兩家を初賞罰黜陟共都て本記の振合に准し被　仰込且つ御相談等あるの例なり

一撿校勾當跡式之事

撿校勾當之儀は其身一代限にて跡式は不被　仰付御定に候得共格別之思召を以向後相應に跡式可被　仰付旨被　仰出候條右之趣撿校勾當へ心得させ可被申事

天保二卯年十月廿三日

御内則一　安政三辰年

凡　例

一御家中之面々世祿に被　仰出候付ては御役之御品附振之儀も是迄之通には難被　仰付筋に付此度新舊御振合吟味照對之上夫々場所勤方寛急之次第等至當之所を以此帳之通取調候事

一右御役々之内にも最初より格祿持居候者被　仰付候筋も有之又は低祿等之内より被　仰付候筋も有之右等は其場相當之柄を以被　仰付候儀に付悉一様には無之處銘々其身分へ引當て御内則取調候儀は多人數之儀に付必的いたし候様には難取調殊に繁雜却て体を失ひ候に付御役高等内場之者を見當てに取調有之勿論格祿高き筋は並高より上之御足高は不被下極に付都て右之法則を越へ不申樣取調可申事

一右之通に付此帳には夫々當役被　仰付候後之御品附振を調出し有之候得共人々に寄先役之勤功又は御人撰之模樣にて早く轉役之筋抔其場之所務高甲乙も無之先役勤功持込有之筋は見斗御内々御かね被下候儀も可有之勿論別帳㊀印之法則を越不申樣可致事

一御加增之儀は以來容易に不被　仰付筈付此帳には其調は省き有之乍併　公邊にても繁勤之場は勤功に寄て御加增被　仰付候儀も有之又は輕き筋より昇進にても御役高に寄自然本高相增（三千石の場は本高五百石に成也　五千石の場は云々）候付ては　御手前にても御役人向幷諸役所勤之内格別繁勤心配多之場所は夫等之御賞賜も無之候半ては御爲め筋を心掛け精勤いたし候勵も無之儀に付別帳㊀印之内第五ヶ條第六ヶ條之元極を以取調可申事

一藝術に付て之　御賞は銘々之業柄に寄臨時取調候事に付強て此帳之年數には不拘事

一諸手代幷株附且下役人等品附之儀は㊁印極之趣且舊例等行屆取調之上其場相當之廉を以取調可申事

一坊主品附振之儀も㊂印極之趣且局々相當之廉等引合之上超過に不相成樣取調可申事

以　上

記中御品附とは總して格祿昇進の事を謂ふ當時の通言也

御品附年數畢竟

但御役々早く見出し候ため類役且局々いろは附を以部分けいたし有之候事

い之部

「五年	御城代		御旗奉行	「五年	御使番
同	大寄合	「差定御品附無之	御鑓奉行	十年	砂丸番之頭
六年十年又は七年	松坂御城代		根來頭	五年	御召御具足奉行
五年	大組		御持弓筒頭	同	御腰物奉行
六年	西條御家老	右同」	本町御門番頭	七年	御具足奉行
差定御品附無之」	大御番頭部屋詰		山家同心頭	九年十年」	御道具支配

「十四年 御手弓筒頭
四年八年又は七年 御城附
十年 京御屋敷奉行
大坂御屋敷奉行
伏見御屋敷奉行
七年 澁谷御屋敷奉行
六年」 芝御屋敷奉行

ろ之部

「四年五年 大御番頭
八年 組頭
大御番は小普請に准す
「是迄並高以下之筋なし 御供番頭
八年江戸五年 組頭
八年江戸六年 御供番
十二年 御書院番頭
八年江戸七年」 組頭

「五年 御先手物頭
十一年江戸七年 五十人組頭
七年八年 千駄ヶ谷御屋敷奉行
巽家八年九年尾池家十一年位 港御殿奉行
十年 北嶋御殿奉行
十一年 濱御殿奉行
二十年又は十年等」 御花畑奉行
「十二年江戸は十年 新御番
六年 小普請支配
八年 小普請組頭
八年 以下小普請組頭
差定御品附無之 寄合組頭
寄合
居附之筋廿二三年」 大御番
小普請

「十年七年 御小人頭
右同 御駕頭
十五年 花作り
廿一年 長保寺見廻役
御品附無之 五友之間御廊下詰
差定御品附無之 麹町御殿勤番
十年」 奥表火之番
「十一年 御本丸番之頭
差定御品附無之 友ヶ嶋奉行
御目付
御番組頭共
是迄並高以下之筋なし 小十人頭
右同 組頭
江戸は九年又は五年紀州十二年」 進物御番
小十人

「紀州並高以下は不被仰付江戸九年　御書院番
十二年　御小姓組番頭
八年江戸七年　與頭
十一二年江戸七年　御小姓組
是迄並高以下之筋無之　新御番頭
八年」　組頭

「三十一二年　以下小普請
並高以下の筋未なし　御留守居番頭
八年　御留守居物頭
御品附なし總勤五十年は十年目　御留守居番
十一年　御天守番之頭
十二年」　御天守常番

「六年又は八年　御徒頭
八年又は十三四年　組頭
十二年　御徒
十年又は五年　常御供
差定御品附無之　格役表頭役
十年又は九年」　格役遠侍

は之部

「四年　御小姓頭取
四年又は六年　御膳番
　　　　　　　奥之番
五年又は八年　御小納戸
二年目御增金　御伽
御小姓同樣勤御小納戸之內へ其後六年程にて被召出五十俵に
五年又は十年　奥御供方
差定御品附無之」　奥詰頭役

「五年　、御小姓
五年　中奥御小姓
七年　同御番
六年　御膳奉行
加役勤は十年位　中奥詰頭役
江戸八年　無足にて頭役打込
廿年位　中奥詰平士
七年」　御書物方

「四年又は五年　御小納戸頭取
十二年　學校御用勤
六年　御同朋頭
同　御同朋
千家十四年又は十二年其外は十六年又は廿六年位　御數寄屋頭
九年十年」　御繪師
御醫師

「廿年位」　同平士

に之部

「四年吟味役より昇候は丶一旦六年　御勘定奉行
五年七年　勢州奉行
四年又は五年　御勘定吟味役
五年　御代官
四年　御勘定組頭
五年又は四年も一　御勘定御勝手方
六年　口座
在方
公事方
賄方
諸渡物方
六年　元方御金奉行
差定御品附無之　拂方御金奉行
「六年七年」　江戸御金奉行

「六年又は八年」　御庭奉行
「七年　大納戸
六年　二分口奉行
同　傳法御藏奉行
六年又は七年　同御目付
六年　支配勘定組頭
七年　支配勘定
田丸白子
八年　五十人組之頭 御目付
差定御品附無之　勢州五ヶ所番
同　熊野御目附
五年又は六年　三山御仕入頭取
六年、　御仕入方勤
六年　砂糖方勤
六年」　江戸御貸方勤

「江戸七年紀州八年　御金方見廻役
五年　御普請奉行
御材木奉行
八年又は十年　穴太役
五年又は六年　御作事奉行
八年十五年　御大工頭
六年又は七年　御作事見廻役
六年　道奉行
十年　屋敷奉行
年　御臺所頭
同　御臺所目付
同　御臺所人組頭
御臺所人
同」　御賄人組頭

ほ之部

「初より六年夫より四年平は五年　御用人
四年五年　表御右筆御書方
四年三年　日記方
四年又は八年　書役認物勤
十一年夫より五年　無足認物勤
五年後七年も　吟味役
五年八年十一年十五年」　御書物方書役
奥御右筆組頭
奥御右筆

へ之部

「八年　寺社奉行
六年　吟味役
四年又は八年」　町奉行

書役
「六年　御廣敷御用人
四五年又は六年　御用達
江戸七年紀州八年　書役
九年御普請掛りは七年　御廣敷番
七年　同添番
九年　同進上番
六年七年　御納戸頭
六年五年又は七年」　御納戸同見習
「七年　乗前稽古
御城代は十年町司は七年　與力所々さも手代より出役
並高以下末なし」　御鷹匠頭

御賄人
「四年並高以上は筆頭十一年已下十二年　御目付
「御金被下」
六年　御小姓目付組頭
五年六年又は八年　御小姓目付
六年又は十年七年　御徒目付組頭
御徒目付
十二年　御徒押
六年無足は初十一年」　御目付方認物勤
「九年　御弓役
六年又は十五年　堂形奉行
五年十年又は九年」　御鐵炮奉行

「並高以下之筋末なし」御船奉行
八年又は七年 御船手肝煎
十二年繰上は年數に不抱 御船手與頭
十二年 無足見習
十二年 大船頭
八年 元〆
御厩方
八年九年 御馬預
五年 御馬乘
十二年 馬醫
六年七年」御厩目付

「六年又は九年」組頭
十五六年身柄にて多少あり 御鷹匠
七年又は十五年 御鳥見組頭
五年又は十四年十八年 御鳥見
三十二年又二十一年 勢州御鳥見
十五年 山方勤御犬牽頭
十年水藝は十二年 武藝師家
十二年 稽古場打廻り
十七八年馬は十五六年水は廿二三年 稽古料被下候面々
十五六年又は十二年」稽古場肝煎

「十五年又は二十年 墭硝奉行
十年 御鐵炮方役人
七年 儒者
八年又は七年 授讀
九年 同助並認物勤
同 學校御目付
御役者
十五六年 家元
二十年 連地謡等
廿四五年」作り物師

以上

い之部

御城代　　並高　千貳百石
千石之筋と見て
一御城代被　仰付千百石之高に御足

一「五年目に」並之通に御足
一家柄且祿高之筋又は久々之勤功等に寄り　思召次第菊之間席可被　仰付事
一老年等之筋は御役　御免持格にて被差置又は御城代之上被　仰付地廻り　御名代御使等大寄合
申合勤に可被　仰付事

大寄合　　並高　千三百石

千石之筋と見て
一「五年目」千百石高に御足　　一「五年目」千貳百石高に御足
一「五年目」並高之通り御足
一人柄次第御城代可被　仰付事
一家柄且祿高之筋又は久々之勤功等に寄　思召次第菊之間席可被　仰付事
一老年等之筋は御城代格又大寄合之上被　仰付地廻　御名代御使等大寄合申合勤に可被　仰付事

松坂御城代　　並高　七百石

五百石之筋と見て
一松坂御城代被　仰付六百高に御足　　一「六年目」並之通に御足
一「十年目」大御番頭格に
最初より並高以上之筋は
當役七年目　大御番頭格に

一人柄次第大御番頭等被　仰付持高之模樣に寄り御足高可被下事

一祿高有之筋は年數に不拘人柄次第御城代大寄合大御番頭等可被　仰付事

並高　五百石

大組

四百石之筋と見て

一「十二年目」並之通に御足

御役人向抔より御休め形ちに當役被　仰付候筋は祿之模樣に寄り勤功次第直に並高被下候

儀も可有之事

一「十五年目」大御番頭格地廻り　御名代御使勤に被　仰付

最初より並高有之筋は

一「廿年目」大御番頭格地廻り　御名代御使勤に被　仰付年々金貳拾兩被下

一御奏者番之儀は其節之樣子次第にて被　仰付

一人柄次第相應之御役へ被　仰付候事

一祿高有之筋は年數に不拘大御番頭等に被　仰付候事

一江戸大組は「五年目」並之高に御足

此後

大御番頭格之筋は御人少相成候節は見斗

大御番頭格被　仰付持祿少き筋は御高被下

一久々之勤功有之筋は　大御番頭格被　仰付御足高被下候儀も可有之事

一千石以上之筋に候はゝ様子次第大寄合へ繰上り候事

西條御家老　　並　高　無　極

三百石之筋と見て

一當役被　仰付四百石高に御足

一「六年目」五百石高に御足　五百石以上之筋に候はゝ此節　大組格に

一「六年目」大組格に　大組格持居候はゝ此節　大御番頭格に

一「六年目」大御番頭格に

此以后轉役又は御休め

大御番頭部屋詰

格役之輩

差定御品附無之

一人柄次第相應之御役へ被　仰付場所に寄御足高をも可被下事

御手弓筒頭　　並高　三百石

貳百五拾石之筋と見て

一「十四年目」並之通に御足

一差定御品附無之

一諸頭役之内明次第相應之御役へ轉場所に寄御足高をも可被下事

御城附　　並高　三百石

貳百石之筋と見て

一當役被　仰付候節貳百五拾石高に御足

一「四年目」並之通に御足　　一「八年目」新御番格に

一「七年目」御書院番頭格に

一御役柄失墜も多可有之付品に寄並高外御足高被下儀も可有之事

御旗奉行　　並高　四百石

差定御品附無之

一諸頭役之内明次第相應之御役へ轉役之事

御鑓奉行　　並高　四百石

右同斷

根來頭　　並高　三百石

右同斷

老年之筋は格役に可被　仰付事

御持弓筒頭　　並高　四百石

右同斷

千石以上之筋は直に重役にも可被　仰付事

本町御門番之頭　　並高　三百石

右同斷

場所に寄御足高をも可被下事

山家同心頭　　並高　貳百石

右同斷

場所に寄御足高をも可被下事

老年之筋は格役に可被　仰付事

御先手物頭　　並高　三百石

貳百五拾石之筋と見て

一「五年目」並高之通に御足

一諸頭役之內明次第相應之御役へ轉役場に寄り御足高をも可被下事

五十人組之頭　　並高　三百石

貳百五拾石之筋と見て

一「十一年目」　並之通に御足

一諸頭役之內明次第相應之御役へ轉役場所に寄御足高をも可被下事

江戸五十人組之頭は「七年目に」　並之通に御足高被下

此後御人撰之御場所へ轉役

御使番　並高　三百石

貳百五拾石
貳百七拾石位之筋と見て

一「五年目」並之通に御足

常府之筋は譬貳百石にても最初より並高被下當役被　仰付

一此後諸頭役之內明跡且御人撰之場所へ轉役

砂丸番之頭　並高　五十石

四拾石之筋と見て

一「十年目」並高之通に御足

此後「八九年目」にて相應之場所へ轉役場所に寄御足高をも可被下事

一並高以上之祿にて被　仰付候筋「八九年」以上相勤候はゝ轉役被　仰付候とも可然事

御召御具足奉行　並高　貳拾五石

貳拾五石之筋と見て

一「五年目」御留守居物頭格に

此後相應之場所へ轉役場所に寄御足高をも被下

御腰物奉行　並高　四拾石

貳拾五石之筋

一「五年目」三拾石高に御足
一「五年目」三拾五石高に御足
一「五年目」並之通に御足
此後相應之場所へ轉役

御具足奉行　並高　四拾石

三拾石三人扶持位之筋
一「七年目」並之通に御足　三人扶持は上る此石五石四斗也
此後五友之間杯へ轉役

御道具支配　並高　貳拾石

拾五石位之筋
一「九年目」並之通に御足
一「十年目」新御番格に又は新御番に轉
此後相應之場所へ轉役
一並高以上之筋は十年目に新御番格に

御小人頭　並高　貳拾石

拾三石之筋
一「十年目」拾八石高に
一「七年目」並之通に御足
一「十年目」獨禮に
此後相應之場所へ轉役

一並高以上之筋は十年目獨禮に

御駕頭　　並高　拾五石

拾石位之筋

一「十年目」拾三石高に　　一「七年目」並之通に御足

此後相應之場所へ轉役

京御屋敷奉行　　並高　貳百石

七拾石 大御番以上 位之筋

一「十年目」並之通に御足

小祿之筋に候はゝ此節拾石御足被下

一「十年目」御小姓組格に

獨禮之筋は此節　大御番格に

一「十年目」御供番格に

獨禮出之筋は此節　新御番格に

一「十年目」御留守居物頭格に

新御番格之筋は此節　御書院番格に

此後相應之場所へ轉役

大坂御屋敷奉行　　並高　貳百石

右同斷

伏見御屋敷奉行　　並高　四拾石

三拾石大御番以上之筋

一「十年目」並之通に御足

一「十年目」御書院番格に

獨禮之筋は此節大御番格に

一「十年目」御供番格に

大御番格之筋は　新御番格に

此後相應之場所へ轉役

澁谷御屋敷奉行　　並高　貳拾石

拾五石位之筋

一「七年目」並之通に御足

當役之儀は多分人々內存にて被　仰付候儀に付先轉役は不申立筋に可有之事

並高後猶年數相勤候はゝ見斗格式被下儀も可有之事

芝御屋敷奉行　　並高　貳拾石

小十人格奉行助十二石高位之筋

一「六年目」本役に拾五石高に御足　　一「六年目」並之通に御足

此後相應之場所へ轉役

千駄ヶ谷御屋敷奉行　並高　拾三石

肩衣御免
奉行助
十石高　位之筋

一「七年目」小十人格に　一「八年目」本役並之通に御足

當役之儀は多分人々内存にて被　仰付候儀に付先つ轉役は不申立筋に可有之事

湊御殿奉行　並高　貳拾石

巽　齋右衞門之家

獨禮
奉行助
十五石　位之筋

一「八年目」本役に　一「九年目」並之通に御足

一「九年目」大御番格に

同人家
無足にて御庭御用相勤候筋

一「九年目」年々銀五枚に　一「十一年目」三人扶持

尾池文右衞門家

小十人格
御庭御用勤
十八石　位之筋

一「十一年目」　貳拾石高に御足　一「十一年目」　獨禮に

右同人家
無足にて御庭御用相勤候筋

一「十年目」年々銀五枚に　一「十二年目」三人扶持に

北嶋御殿奉行　並高　貳拾石

小十人格奉行助十二石位之筋

一「十年目」本役に　一「十一年目」拾七石高に御足

一「十年目」並之通に御足

無足にて御庭御用相勤候筋

一「十年目」年々銀五枚に　一「十二年目」三人扶持に

濱御殿奉行　並高　貳拾石

小十人格奉行助十五石位之筋

一「十年目」本役に　一「十一年目」並之通に御足

無足にて御庭御用相勤候筋

一「十年目」年々銀五枚に　一「十二年目」三人扶持に

御花畑奉行　並高　八　石

小十人十五石位之筋

一「廿年目」獨禮に

無足にて御庭御用相勤候筋

一「十年目」年々銀五枚　一「十二年目」三人扶持に

花作　　並高　無　極
已下小普請格八石 位之筋
一「十五年目」拾石高に　一「十五年目」年々銀貳枚に
無足にて年比に相成候得は父に差添勤申付年々銀三枚可被下事
長保寺見廻役　並高　無　極
百石位之筋
一加役「廿一年目」年々銀五枚に　一「廿一年目」年々金拾兩に　銀五枚は上る
五友之間御廊下詰
御休め之場所にて一圓勤も無之儀に付御品附は無之事
一御咎等にて當役に被　仰付候筋は追て樣子次第相應之場所へ御番入被　仰付儀も可有之事
麴町御殿勤番　並高　拾五石
差定御品附無之御振合之事
一八拾歲幷に五拾年以上相勤候者は其樣子に寄り御賞め被成下候儀も可有之事
奥表火之番　並高　拾貳石
三人扶持取支配小普請 位之筋
一當役被　仰付候節八石に被成下　一「十年目」拾石高に御足
常府は此節並之通に

一「十年目」並之通に御足

並高有之筋は「十年目」小十人格に

此後七八年目位にて相應之御役へ轉役

常府は御人數も少々に付御人數繰之都合にて右年數に不滿とも轉役被　仰付儀も可有之事

ろ　之　部

大御番頭　　並高　千　石

八百石位之筋と見て

一「四年目」九百石高に御足　　一「五年目」並之通に御足

一大御番頭筆頭之筋へ御役者支配被　仰付之儀は是迄之通に候事

但右支配いたし候とも御品時々差別無之

一人柄次第御城代大寄合松坂御城代等可被　仰付事

一老年等之筋は大寄合格被　仰付地廻り　御名代御使等大寄合打込勤に被　仰付

又は　大御番頭之上被　仰付地廻り　御名代御使等大御番頭申合勤に被　仰付事

大御番組頭　　並高　貳百石

百五拾石之筋と見て

一「八年目」百七拾五石高に御足　　一「八年目」並之通に御足

此後相應之御役へ轉役

御供番頭　並高　四百石

並高以下之筋被　仰付候例無之

一明跡之模樣且人柄次第大組等へ繰上り候事

一祿高有之筋は直に大御番頭へ可被　仰付事

御供番組頭　並高　三百石

百五拾石 百七拾五石 位之筋と見て

一組頭被　仰付候節貳百石高に御足被下

一「八年目」貳百五拾石高に御足

一「八年目」並之通に御足

此後相應之頭役へ轉役

並高以上之祿にて被　仰付候筋は年數に不拘相應之頭役明き之節被　仰付

江戸御供番組頭

一貳百石以下之筋は當役被　仰付候節貳百石に御足被下

一貳百石以上之筋は持高之儘被　仰付

一御使番へ繰上り候節は年數に不拘並高に御足被下

一若繰り遲く當役其儘相勤居候はゝ　五年目並之通に御足

此後轉役振前同斷

御供番　　並高　貳百石

百五拾石之筋と見て

一「十二年目」百七拾五石高に御足　　一「十二年目」並之通に御足

一江戸之筋は「六年目」並高之通に御足

此後組頭へ繰上り又は相應之場へ轉役直に御使番へ繰上り之儀も可有之事

御書院番頭　　並高　四百石

三百石之筋と見て

一「十二年目」二百五拾石高に御足　　一「十二年目」並之通に御足

一祿高有之筋は大御番頭被　仰付儀も可有之事

一大組御供番頭抔へ繰上り又は御人撰之場所へ轉役

一老年等之筋は重役之格式被下又は持格にて奥詰被　仰付候事

御書院番組頭　　並高　六拾石

四拾石以下之筋は

一常役被　仰付候節四拾石高に御足被下

一「八年目」五拾石高に御足　　一「八年目」並之通に御足

常府之筋は「七年目〱」右之通被　仰付

此後相應之御役へ轉役

御書院番　並高　貳拾五石

一並高未滿之筋は當役不被　仰付振合之事

此後組頭へ繰上り又は相應之御役に轉役

江戸御書院番

貳拾石位之筋一旦御書院番同樣勤に被　仰付　以后本役明き次第繰り上之事

格祿有之筋は直に本役被　仰付儀も可有之事

右同樣勤より

一「九年目」並之通に御足

此後轉役振前同斷

御小姓組番頭　並高　四百石

三百石之筋と見て

一「十二年目」三百五拾石高に御足　一「十二年目」並之通に御足

一祿高有之筋は大御番頭被　仰付儀も可有之事

一大組御供番頭御書院番頭抔へ繰上り又は御人撰之場所へ轉役

一老年等之筋は重役之格式被下又は持格にて奥詰に被　仰付

御小姓組與頭　並高　貳百石

百石位之筋に候はゝ

一當役被　仰付候節百貳拾五石高に御足被下

一「八年目」百五拾石高に御足　　一「八年目」百七拾五石高に御足

一「八年目」並之通に御足

常府之節は「七年目〳〵」右之通被　仰付

此後相應之御役へ轉役

御小姓組　　並高　若山四拾石　江戸八拾石

若山三拾石位之筋　　一「十二年目」並之通に御足

常府之節は並高に相成候迄　　一「七年目〳〵」拾石つゝ御足被下

但常府四拾五石以下之筋は當役被　仰付候節四拾五石に御足高被下候場格に候事

此後組頭へ繰上り又は相應之場所へ轉役

新御番頭　　並高　三百石

並高未滿之筋被　仰付候例無之

一差定御品附無之御振合に候事

一諸頭役之内明次第相應之御役へ轉役場所に寄り御足高をも可被下事

新御番組頭　　並高　五拾石

貳拾五石位之筋に候はゝ

一當役被　仰付候節三拾石高に御足

一「八年目」四拾石高に御足　　一「八年目」並之通に御足

此後相應之御役へ轉役

新御番　　並高　貳拾五石

廿石以下之筋は

一當役被　仰付候節貳拾石高に御足　　一「十二年目」並之通に御足

常府之筋は十年目

此後組頭へ繰上り　又は相應之御役へ轉役

小普請支配　　並高　三百石

貳百五拾石位之筋

一「六年目」並之通に御足

諸頭役之内相應之明き有之候はゝ轉役場所に寄り御足高をも可被下事

小普請組頭　　並高　四拾石

貳拾石位之筋

一大御番格小普請組頭同樣勤に

同格持居候筋は新御番格に被　仰付

一相應格祿有之筋は最初より本役にも被　仰付

一「八年目」貳拾五石高に御足　　一「八年目」三拾石高に御足

一「八年目」新御番格三拾五石高に御足　　一「八年目」本役に並之通に御足
常府之筋は「六年目〳〵」右之通被　仰付　慶應元子四月極
此後　相應之場へ轉役

以下小普請組頭　　並高　無　極
拾貳石位之筋
一「八年目」拾五石高に御足　　一「八年目」獨禮に　但獨禮持居候はゝ此節大御番格に
一「八年目」貳拾石高に御足　　人柄に寄り小普請組頭抔へも轉し候事

寄合組頭　　並高　四百石
差定御品附無之
諸頭役之内相應之明き有之候はゝ轉役場所に寄り御足高をも可被下事

寄　合　　大　御　番
大御番格小普請　　獨禮小普請
小十人小普請　　以下小普請
右は人柄且藝術等之品にて御人撰御番入被　仰付候儀に付右等之筋は家督跡目間も無き筋にて
も年數に不拘是迄之通可被　仰付事
一御人撰にも不相成居附にて年數御番等相勤候者は
寄　合

一「年數不同」相應之御役へ御番入
大御番
一「廿二三年目」表諸御番之内相應の場へ御番入
獨禮小普請
小十人小普請
一「廿二三年目」右同斷小祿之筋は見計二三石程も場所に寄り御足高被下
又は乍居
一年々銀三枚被下儀も可有之
以下小普請
一「卅一二年目」小十人小普請へ
人柄に寄り御番入又は諸役所勤に成候後は年數に不拘事
御留守居番頭　並高　四百石
差定御品附無之
諸頭役之内相應之明き有之候はゝ轉役
御留守居物頭　並高貳百石
四五拾石之筋
並高に相成候迄
一「八年目〳〵に」拾石つゝ御足高被下

此後相應之頭役へ轉役尤並高以上之祿にて被仰付八九年以上相勤轉役之節は御足高又は年々銀拾枚被下儀も可有之

御留守番　並高　無　極

一差定御品附無之
一壯年之勤は人物之模樣次第相應之場へ轉役場所に寄御足高被下
一總勤五十年も相勤當役も十年余にも及候はヽ格式又は御足御銀之内被下五友之間御廊下詰可被　仰付事
一御道具藏御馬具御鑓藏預相勤候とも御品付差別無之
　但判改は平日世話敷相勤候に付一兩年早く取扱可申事

御天守番之頭　並高　貳百石

百五拾石位之筋
一「十一年目」拾石御足　一「十一年目」並之通に御足
　諸頭役之内相應之明き跡へ轉役場所に寄御足高をも被下

御天守常番　並高　五拾石

四拾石位之筋
一「十二年目」四拾五石高に　一「十二年目」並之通に御足
　此後相應之場所へ轉役場所に寄御足高をも被下

一並高以上之祿にて被　仰付候筋十年余にも及候はヽ同樣轉役

御本丸番之頭　並高　八拾石

六拾石位之筋

一「十一年目」拾石御足被下　一「十一年目」並之通に御足

諸頭役之内相應之明跡へ轉役場所に寄り御足高をも可被下候

友ヶ嶋奉行

一御目付

一御番組頭　高　無　極

一差定御品附無之

小十人頭　並高　三百石

一差定御品無之付

諸頭役之内相應之明き跡へ轉役場所に寄御足高をも可被下事

小十人組頭　並高　貳拾石

拾五石位之筋

一小十人組頭被　仰付並之通に御足

此後及十年程にも候はヽ相應之場所へ轉役場所に寄御足高をも可被下候

小十人　並高　貳拾石

拾二三石位之筋

一小十八被　仰付拾五石之高に御足

一「十二年目」並之通に御足

此後組頭へ繰上り又は相應之場所へ轉役場所に寄り御足高をも可被下候

一進物御番相勤候とも品附振差別無之

常府小十八は　十石以下之筋

一小十八被　仰付拾三石高に御足

一「九年目」拾八石高に御足

一「五年目」並之通に御足

拾三石迄之筋は

一小十八被　仰付拾五石高に御足

一「九年目」並之通に御足

此後轉役振等前文に准す

御徒頭

並高　三百石

二百石
二百五拾石之筋

一「六年目」貳百五拾石高に御足

一「八年目」並之通に御足

二百五拾石之筋に候はゝ

一當役「八年目」並之通に御足

此後諸頭役明き又は御人撰之御場所へ轉役

御徒組頭　並高　拾貳石

拾石位之筋

一「八年目」並之通に御足

一「十三年目」格式被下轉役

最初より並高有之筋は

一當役「十二年目」格式被下轉役

常府は御人數も少く候に付御人繰之都合にて右年數に不滿共轉役被　仰付儀も可有之事

御徒　並高　拾貳石

八石十石位之筋

一「十二年目」並之通に御足

此後相應之場所へ轉役又は組頭へ繰上之事

其儘相勤居候得は

總勤四拾年以上は

一當役「廿五年目」小十人小普請に　御足御扶持其儘

總勤四拾年以下は

一當役「廿九年目」右同斷

常府之筋は

總勤に不拘大樣當役「十六年以上」樣子次第御目以上之格式被下轉役被　仰付儀も可有之候

常御供

廿五石
三十石位御書院番之筋

一「十年目」御小姓組格五石御足被下　一「十年目」御供番格五石御足被下

一「五年目」御徒頭格に

常御供頭役御人少にて差支候節は此格式早く被　仰付儀も可有之事

一「十年目」御足十石
又は金拾兩被下

人柄次第奥御供方へ繰上り候事

表頭役

格役之面々

一差定御品附無之

一人柄に寄相應之御役又は助役等に可被　仰付事

格役遠侍御番

四拾石兩御番格位之筋

一「十年目」五拾石高に御足

一「九年目」御留守居物頭格に

同　格以上之筋は此節御徒頭に同格之筋は御先手物頭格に可被　仰付事

一「十年目」六拾石高に
貳百石以上之筋は此節年銀十枚可被下事
一「九年目」御徒頭格に
同格之筋は此節御先手物頭格に同格之筋は七拾石高に御足可被下事
一總勤五十年以上之筋は九年目〳〵に本行之通可被　仰付事

は　之　部

並高　六拾石

御小姓頭取

三拾石之筋被　仰付と見て

一當役「四年目」四拾石高に御足
一「四年目」五拾石高に御足

一「四年目」並高に御足
一「四年目」御手筒頭格に

並高以上之筋は

一當役「四年目」御手筒頭格に
一「四年目」新御番頭格に

但貳百石以上之筋

當役三十年來無滯相勤候筋は並高之上拾石程御足高可被下事

御小姓

並高　三拾石

貳拾石之筋と見て

一當役「五年目」貳拾五石に御足
　下地より廿五石取之筋は此節並高に
一「五年目」並高に御足
　下地より廿五石取之筋は此節頭取格に
一「五年目」御小姓頭取格に
並高以上之筋は
一當役「五年目」御小姓頭取格に　　一「五年目」御手筒頭格に
御小納戸頭取　　並高　六拾石
三拾石之筋と見て
一當役「四年目」四拾石高に御足　　一「四年目」五拾石高に御足
一「四年目」並高に御足　　一「五年目」御手筒頭格に
並高以上之筋は
一當役「五年目」御手筒頭格に　　一「五年目」新御番頭格に
　但貳百石以上之筋は
　當役三十年來無滯相勤候筋は並高之上拾石程御足高可被下事
御膳番奥之番　　並高　三拾石
廿石之筋と見て

一加役「四年目」貳拾五石高に御足
下地より廿五石取之筋は此節並高に
一「四年目」並之通に御足
下地より廿五石取之筋は此節頭取格に
一「六年目」御小納戸頭取格に
並高以上之筋
一當役「六年目」御小納戸頭取格に
當役三十年來無滯相勤候得は並高之上拾石程御足高可被下事
御小納戸 御次請　　並高　三拾石
二十石之筋と見て
一當役「五年目」廿五石高に御足　　一「五年目」並高に御足
一「八年目」御小納戸頭取格に
並高以上之筋は
一當役「八年目」御小納戸頭取格に
御伽
年金七兩之筋
一「二年目」被下金御增拾五兩に　　一「二年目」失墜多に付年々銀五枚被下

十四歳之暮
大奥入御差留相成候事

十五歳之春
一御小納戸同樣勤に　諸渡物都て本役之通

右より

一「六七年目位」御小納戸に被　召出御切米五拾俵被下置

是迄御伽勤之筋

思召又は其人之樣子に寄御小姓同樣勤に被　仰付其後御小姓に被　召出候儀も有之候得共一体御伽は御小納戸之次席にて勤方は御小納戸頭取差圖致候處若輩之身分にて直に御小納戸を越し御小姓勤に相成候は不釣合に相見且は幼年より萬事結構をのみ見習經濟等之艱難薄く候に付兎角御質素之御風には難染候て以來は御小納戸勤に被　仰付追て成長の上當人樣子見屆候て段々御小姓へ繰上け候樣可取計事

件之通に付當時御伽より直に御小姓同樣勤に相成居候筋は此後被　召出御切米被下候節先つ御小納戸に被　仰付可然事

高　不　同　三百石之場也

奥御供方

布衣以上　頭役 三百石場

御留守居物頭 寄合 格之筋被　仰付と見て

一當役「五年目」御徒頭格に

高百五拾石位之筋に候はゝ

一「十年目」拾石御足被下

高貳百石貳百五拾石位之筋に候はゝ御徒頭格より

一「十年目」小十人頭格に　又は高五拾石御足歟　金貳拾兩歟

高二百石も有之筋は御徒頭格より

一「十年目」小十人頭格に

人柄次第相應之御役被　仰付

奥詰頭役

一差定御品付無之事

一いまた老衰も不仕隨分御用立候筋に候はゝ樣子次第相應之御役へ轉役被　仰付

奥詰平士　　高不同

地廻り御供勤之筋

寄合格六十石之筋と見て

一「加役より五年目」御徒頭格に

出役加役無之筋

御膳奉行格二拾石之筋と見て

一「當役廿年目」中奥御番格に

獨禮出之筋は此節貳拾五石高に

一「廿年目」御留守居物頭格に　貳拾五石高に

獨禮出之筋は此節中奥御番格斗

五十年以上相勤候者は少々差別可有之事

中奥御小姓　　並高　貳拾五石

貳拾石之筋被　仰付と見て

一 當役「五年目」並高に御足

此後相之場所へ轉役場所に寄り御足高をも可被下事

中奥御番　　並高　貳拾五石

貳拾石之筋被　仰付と見て

一 當役「七目年」並高に御足

此後相應之場所へ轉役場所に寄見斗御足高をも可被下事

御勝奉行　　並高　貳拾五石

貳拾石之筋と見て

一 當役「六年目」並高に御足

此後相應之場所へ轉役

中奥頭役格之面々

一 差定御品付無之事

一 人柄次第相應之御役へ轉役可被　仰付事

右格役之内

御取次勤　小十人頭代り御供勤
鐵炮肝煎　頭役打込
御名代御使勤　中奥御小姓勤
右等之筋十年程も相勤候はゝ見斗
小祿之筋は御足高又は年々御銀被下
無足
中奥頭役打込勤之面々
中奥勤
一「八年目」頭役同樣宿勤に
右に付五人扶持相渡り候筈　但江戸斗
中奥詰平士　高不同
御書物方勤之筋
大御番出 御膳奉行格 貳拾石 位と見て
一出役より「七年目」貳拾五石高に御足　一「七年目」中奥御番格に
一「七年目」三拾石高に御足　一「七年目」寄合格に
小十人出 獨禮 拾五石 之筋は

一 出役より「七年目」貳拾石高に御足　　一「七年目」御膳奉行格に

一「七年目」貳拾五石高に御足　　一「七年目」中奥御番格に

御書物方勤は人に寄被　仰付之儀に付格祿之高下も有之爾と見留難付候得共先右等之振合
に准見斗可取扱事

但平頭打込之場所に付人柄に寄追々頭役之格式も可被下事

御庭御用勤之筋

大御番出御膳奉行格二拾石位と見て

一 出役より「八年目」中奥御番に　御庭御用是迄之通　　一「六年目」貳拾五石高に御足

小十人獨禮十五石之筋は

一 出役より「六年目」御膳奉行格に　　一「六年目」貳拾石高に御足

一「六年目」中奥御番に　御庭御用是迄之通り

學校御用勤之筋

大御番出御膳奉行格二十イ四十石位之筋と見て

一 出役より「十二年目」五石御足高被下　　一「十二年目」中奥御番格に

中奥御番格之筋は　此節御徒頭格に

大御番等より學校御用相勤之筋も右に准し可取扱事

獨禮出 御膳奉行格 二十五石 三十石 位之筋

一出役より「十二年目」五石御足高被下　一「十二年目」中奥御番格に

出役加役無之筋

獨禮十五石之筋と見て

一當役「廿年目」御膳奉行格に

下地御膳奉行格之筋は此節貳拾石高に御足

一「廿年目」中奥御番格貳拾石高に御足

下地御膳奉行格之筋は此節中奥御番格貳拾五石高に御足

五十年以上相勤候者は少々差別も可有之事

御同朋頭　並高　四拾石

並高之筋は先つ御品附無之

並高未滿に候はゝ　一「六年目」御足高被下

此後相應之場所へ轉役

御同朋　並高　三拾石

貳拾石高之筋と見て

一當役「六年目」貳拾五石高に御足　一「六年目」並高に御足

一「六年目」御同朋頭格に

若山にては此節御同朋(頭カ〇)明き候はゝ同役被　仰付並高可被下候事

一江戸にては此後相應之場所へ轉役可被　仰付事

一並高以上之祿にて被　仰付候筋は當役八年目　御同朋頭格被　仰付

並高　無　極

御數寄屋頭

四十石五十石位之筋

一當役「十六年目」御足高拾石被下　一「廿六年目」御同朋頭格年々銀五枚被下

(本のまゝ百)五拾石以上之筋

一當役「廿六年目」御同朋頭格年々銀五枚被下　一「十六年目」年々銀拾枚に被成下

千宗左之家

一跡目當役「十四年目」御匙醫格に　一「十二年目」年々銀貳拾枚

右之通に候得共元來業役之儀に付猶其人により見斗可取扱事

並高　無　極

御繪師

三人扶持之筋と見て

一當役「九年目」五人扶持に　　一「十年目」小十人格に

一「九年目」御番醫師格七人扶持に　　一「十年目」拾人扶持に

小拾人格十二石十五石位之筋

一當役「九年目」御番醫師格に　　一「十年目」五石御足被下

一「九年目」奥御醫師格に　　一「十年目」五石御足被下

御番醫師格三拾石三拾五石位之筋

一當役「九年目」奥御醫師格に　　一「十年目」年々銀拾枚に

一「十年目」拾石御足被下

右之通には候得共業役之儀に付業之厚薄に寄差別可有之事

人柄に寄御匙醫格にも可被　仰付事

無足にて三人扶持被下候筋

一「九年目」五人扶持に

御匙醫　　並高　三百石

御醫師之儀は業之功拙にも寄候事にて是迄迚も年數運ひ振り等不同にて爾とも難取極候得共御匙醫を初先つ通例之筋左之通極置猶此目當を以業柄之功拙に寄年數延縮之取捨は其節に得と申見取

斗可申事

但御醫師は世祿に被　仰付無之追々勤込候筋は是迄之通五石又は拾石程つゝ祿高且其節之模樣に寄御加增被　仰付儀も可有之三百石より上へ之御加增は容易に不被　仰付事

奧御醫師も同樣之事

御匙醫格
御匙醫同樣勤之筋と見て廿五石

一「七年目」三拾石高に　一「七年目」四拾石高に
一「七年目」本役五拾石高に　一「七年目」六拾石高に
一「七年目」七拾石高に　一「七年目」八拾石高に
一「七年目」貳百五拾石高に　一「七年目」並高に

本文之通り少高より追々運ひ候筋は貳百五拾石高より上へ之御品附も七年目にて被下筈候得共最初より八拾石高之筋は八九年目程に五拾石つゝ御足

一五拾石以上之筋は最初より本役被　仰付又は其節之模樣にて同樣勤に被　仰付儀も可有之事通例之年數前件之通に候得共業柄格別宜又は御執匙をも被　仰付候筋は至て低祿之筋五六ヶ年目程にて御足被下

一御匙醫は御匙醫師極官之處素人とは違ひ外へ轉役も難取斗法橋法眼成りより格式之被下方も無之左候迚本祿並高以上之筋抔一圓御品附無之候得は勤功も不相顯自然勵も無之道理に付同

役は並高以上にても左之趣に取調可申事
並高以上は
十年目程にて年々銀拾枚つゝ追々に御増

奥御醫師　　並高　無　之

五人扶持之筋と見て
一「九年目」七人扶持に　　一「九年目」拾人扶持に
一「九年目」御扶持方を御切米に御直貳拾石に
此節若山之筋は御扶持方三人扶持相渡る筈
一「九年目」三拾石高に　　一「九年目」御匙醫格に
一「九年目」四拾石高に
此後右年數にて拾石程つゝ御足被下
一格別業柄能出來候筋は五六年にて御品附之筋可有之
一御匙醫等にて相進み候儀は業柄にて被　仰付候事に付年數には不拘

御番醫師　　並高　無　之

但三人扶持四人扶持之筋は當役被　仰付候節五人扶持に御加扶持
五人扶持之筋と見て
一「十三四年目」七人扶持に　若山にては十八九年　　一「十三四年目」拾人扶持　若山にては十八九年

一「十三四年目」御扶持方を御切米に御直貳拾石に　前同斷
此節若山之筋は三人扶持相渡る
最初より御切米之筋は右年數にて御加扶持等之割を以御足高被下
世上手廣く療治等いたし業格別宜江紀共十年程にて御加扶持又は御足等被下尤業能出來奥御醫師被　仰付儀は年數に不拘

寄合小普請御醫師
一差定候御品附は無之
業柄次第奥御醫師御番醫師等へ被　仰付明き跡目等之模樣に寄候に付年數不同

御廣敷廻り
一「五六年目」三人扶持御用支配に　一「十八九年目」年々銀五枚に
町醫師御廣敷廻り
一「十八九年目」五人扶持に　御廣敷廻り五十七八年目程　一「十八九年目」小普請御醫師格に
業柄格別宜御用立候者御番醫師又は奥御醫師にも被　仰付儀も可有之候得共新規御取立之儀最初より人柄且業合等行屆勘合考致し取斗可申事
醫學館勤之醫師は年數運ひ振り等大体是迄之振合を以て相應御品附可有之被　召出等之儀は容易に不被　仰付事

南紀德川史卷之八十八

臣 堀內信 編

祿制第八

御內則二

に之部

御勘定奉行　並高　四百石

二百五十石三百石高之筋被　仰付と見て

一御勘定奉行同樣勤　御小姓組番頭格に　月番相勤同心をも支配御役料も被下

一格式宜き筋は最初より本役に被　仰付

一御勘定吟味役より被　仰付候はゝ一旦御手筒頭格御勘定奉行申談勤に被　仰付尤御役料不相渡候付御內々金廿兩被下其後六(十)[一本なし]年目右之通同樣勤に相運ひ候事　此節廿兩は上ろ

一(四年目)御勘定奉行　三百五十石高に　一(四年目)四百石高に

一(四年目)大御番頭格に

當役三十年余にも及ひ候はゝ並高之上御足被下儀も可有之事

一格段出精御勝手向も行屆候はゝ臨時に御賞も可有之事

勢州奉行　並高　四百石

二百五十石之筋被　仰付と見て

一勢州奉行被　仰付三百石高に御足

一（五年目）並高に御足

一（七年目）御小姓組番頭格に

此後相應之御役へ轉役

御勘定吟味役　　並高　三百石

六十石位之筋と見て

一（四年目）七十石高に御足

一（四年目）八十石高に御足

一（四年目）二百二十五石高に御足（十石増）

一（四年目）二百五十石高に御足（十石増）

一（四年目）並高に御足（二十石増）

一（四年目）御納戸頭格に

一（四年目）小十人頭格に

此後相應之御役へ轉役

御代官　　並高

口六郡は　四十石　　兩熊野は　五十石　　勢州三領は　八十石

大御番以上之筋被　仰付と見て

一（五年目）御書院番頭格に

獨禮出之筋に候はゝ此節大御番格に

一（五年目）年々銀拾枚被下

一（五年目）拾石つゝ御足高被下

並高に満候上は勿論御足は不被下

一（五年目）御供番格

獨禮出之筋にて大御番格之者は此節御書院番格に

此後人柄次第御勘定吟味役抔へ被　仰付御足高をも可被下事

御勘定組頭　　並高　三十石

二十石御勘定より

一御勘定組頭二十五石高に御足

此節御品附より年數四年に不滿筋は組頭計

一（四年目）大御番格並高に御足　　一（四年目）御書院番格に

一（四年目）御供番格御勘定吟味役助に　　乍居に候はゝ格式計

但人物により難被　仰付筋は御人撰之場所へ轉役

一早く吟味役へ運ひ可然筋は四年に不滿候ても可被　仰付事

一中奥抔へ被　仰付候はゝ二十石御足被下

御　勘　定　　並高拾五石

御勝手方

左の通五箇年御品附之振合に取調有之候得共四箇年目に御品附の振合も有之付其節に猶

評議可致事

見習十石之筋と見て

一（五年目）肩衣　御免　年々銀三枚に

一（五年目）並高に御銀共儘

一（五年目）大御番格に

此後相應之場所へ轉役

一（五年目）御勘定に御足御銀共儘

一（五年目）獨禮に

一（五年目）新御番格五石御足被下

一乍居に候はゝ先つ御品附無之候得共組頭之儀は篤實功者に無之候はては難御用立候付柄に寄組頭へ被　仰付儀も可有之事

大御番出並高以上之筋

一（五年目）新御番格に

相應之場所へ轉役

一（五年目）御書院番格五石御足被下

一組頭へ繰上り之儀は前文に准候事

口　座　　在　方　　公事方　　賄　方　　諸渡り物方

右者六年目之御品附に候事

元方御金奉行　　並高三十石

二十五石之筋と見て

一（六年目）並高に御足

大御番出之筋は

一(六年目)御書院番格に

但並高以上大御番出之筋は當役十年目に格式被下

此後相應之御場所へ轉役

拂方御金奉行　並高二十石

差定御品附無之御振合に候事

一當役年數少く候共相應之場所明次第轉役之事

江戸御金奉行　並高二十石

十三石之筋と見て

一(六年目)拾五石高に御足　一(六年目)並高に御足

一(六年目)獨禮に

此後轉役

其儘相勤候はゝ　一(七年目)大御番格に

並高以上之筋　一(六年目)獨禮に

此後相應之場所へ轉役

其儘相勤候はゝ　一大御番格に

大納戸　並高三十石

二十五石之筋と見て

一（七年目）並高に御足
大御番出之筋は　　一（七年目）御書院番格に
但並高以上にて大御番出之筋は當役十二年目に格式被下
此後相應之場所へ轉役

二分口奉行　　並高二十石
十五石位之筋と見て
一（六年目）並高に御足　　一（六年目）獨禮に
一（六年目）大御番格に　　一（六年目）新御番格に
相應之御役へ轉役

傳法御藏奉行　　並高二十石
拾五石之筋と見て
一（六年目）肩衣　御免　　肩衣　御免以上之者は此節並高に
一（六年目）並高に御足被下　　一（六年目）小十人格に
小十人格之筋は此節獨禮に
一（六年目）獨禮に
此後相應之場所へ轉役

傳法御藏目付　　並高十二石

拾石之筋と見て
一(六年目)肩衣　御免並高に　一(七年目)小十人格に
此後相應之御役へ轉役場所に寄御足高をも可被下事
並高三拾石無扶持

一支配勘定組頭
二十石之筋と見て
一(六年目)肩衣　御免二十五石高に御足　一(六年目)小十人格に
一(六年目)並高に御足　一(六年目)獨禮に
此後相應之御役へ轉役

支配勘定　並高二十石無扶持
八石銀二枚三人扶持又は八石三人扶持之筋被　仰付と見て
一(七年目)十石高に御足御銀御扶持方其儘　一(七年目)十七石高に御足
此節七石相增候得共五石四斗三人扶持銀二枚上る筈
一(七年目)並高に御足　一(七年目)肩衣　御免に
此後組頭明き候はゝ繰上る
一老衰等にて難相勤筋は見計相應之役儀可被　仰付事

田丸白子五十人組之頭　並高二百石
百五十石之筋被　仰付と見て

一（八年目）十石御足　　　　一（八年目）並高に御足

此後相應之御役へ轉役　　　　並高二百石

田丸白子御目付

百五十石之筋被　仰付と見て

一（八年目）十石御足被下　　　　一（八年目）並高に御足

此後相應之御役へ轉役

勢州五箇所番　　　　高不同

差定御品附無之

一相應之場所へ轉役場所に寄御足高をも可被　下事

口奥熊野御目付　　　　高不同

乍居に御品附は先は無之

一人柄次第年數に不拘相應之御役へ轉役

三山方頭取
御仕入方頭取　　　　並高無極

獨禮二十石高三人扶持之筋と見て

一（五年目）二十五石高に御足　　　　一（六年目）大御番格

一（五年目）三十石高に御足　　　　一（六年目）新御番格に

一（五年目）四十石高に御足　三人扶持は上る
格式有之筋は右之年數毎に模樣次第格式被　仰付儀も可有之事
一大御番（出）（一本ナシ）は勿論其外共御書院番格に相進候上は御勘定吟味役格又は御徒頭格迄には
可被　仰付事　但格式に替り無之

一（七年目）御書院番格に

御仕入方勤

以下小普請格八石之筋と見て
一（六年目）肩衣　御免に
一（六年目）十三石高に御足
一（六年目）十五石高に
一（六年目）新御番格五石御足被下
相應之御役へ轉役
一頭取へ繰上り之儀は明次第人柄之模樣にて可被　仰付事

並高無極
一（六年目）小十人格十石高に御足
一（六年目）獨禮に
一（六年目）大御番格に

砂糖方勤

頭取も無差別
八石三人扶持之筋と見て
一（六年目）肩衣　御免十石高に
一（六年目）小十人格に

並高無極
一（六年目）十二石高に御足
一（六年目）十五石高に御足

一(六年目)獨禮に

此後相應之場所へ轉役　　並高無極

江戸御貸方勤

御勘定見習格十二石高之筋と見て

一(六年目)肩衣　御免年々銀三枚に　　一(六年目)小十人格に

一(六年目)十五石高に御足御銀其儘

此後江戸御金奉行等へ轉役

茶屋御金方見廻役　　並高無極

十石之筋と見て

一(若山八年目 常府七年目)肩衣　御免十二石高に

此後相應之場所へ轉役

御普請奉行　　並高五十石

新御番格同樣勤三十五石之筋と見て

一(五年目)御書院番格に　　一(五年目)本役四十石高に御足

並高以上之筋は此節御足高無之

一(五年目)並高に御足　　一(六年目)御勘定吟味役格に

此後相應之場所へ轉役

穴太役　　並高十石
八石と見て
一（八年目）並高に御足　　一（八年目）肩衣　御免
一（十年目）小十人格に
業役之儀に付品付振不一様儀も可有之事

御作事奉行　　並高五十石
四十石之筋と見て
一（五年目）並高に御足　　一（六年目）御勘定吟味役格に
此後相應之場所へ轉役

御大工頭　　並高十五石
以下小普請格御大工頭之勤十二石之筋と見て
一（八年目）御大工頭　　一（十五年目）並高に御足
右之通候得共大業之御用向等相勤候節は年数少く候共其節に寄御賞被成下儀も可有之事

御作事見廻役　　並高十石
八石之筋と見て
一（六年目）肩衣　御免並高に御足　　一（七年目）小十人格に
小十人格之筋は此節獨禮に

此後相應の場所へ轉役

道奉行　並高十石

八石之筋と見て

一（六年目）並高に御足　一（六年目）肩衣　御免

並高以上の筋は六年目に肩衣　御免

此後相應の場所へ轉役

屋敷奉行　並高十五石

十二石之筋と見て

一（十年目）並高に御足

並高以上の筋は此節肩衣　御免に　肩衣　御免の筋は此節小十人格に

一（十年目）肩衣　御免に

此後相應の場所へ轉役

御臺所頭　並高廿五石

拾五石之筋と見て

一（六年目）二十石高に御足　一（六年目）並高に御足

一（六年目）大御番格に　大御番出の筋は此節御書院番格に

此後相應の場所へ轉役

御臺所目付
同見廻役兼勤

十　石之筋と見て　　並高十二石

一(六年目)並高に御足　　一(六年目)肩衣　御免に

一(六年目)小十人格に　小十人格以上之筋は此節獨禮に

此後相應之場所へ轉役

御臺所人組頭
御賄人組頭

十二石之筋と見て　　並高十五石

一(六年目)肩衣　御免並高に御足

組頭被　仰付候節御足被下有之筋は此節御足被下無之肩衣　御免計

一(六年目)小十人格に

此後相應の御役へ轉役

御臺所人
御賄人

三人扶持元御臺所人御賄人見習の筋と見て　　並高十二石

一見習より(六年目)御扶持方を銀五枚に御直し被下　三人扶持被下

一(六年目)本役被下銀御増年々銀十枚に　一(六年目)御銀を御切米八石に御直し年々銀二枚に

一(六年目)拾石高に御足御銀其儘　一(六年目)組頭格二石御足被下銀其儘

組頭明有之候はゝ此節組頭被　仰付二石御足被下

此後組頭へ繰上り候事

一組頭へ繰上り不申久々相勤候筋は相應之御役へ轉役可被　仰付事

ほ之部

並高五百石

御用人

三百石之筋被　仰付と見て

一(六年目)御書院番頭格に　此節御内々年々金二十兩被下

一(四年目)四百石高に御足　御内々被下金其儘

一(四年目)御供番頭格に　一(四年目)並高に御足　御内々被下金其儘

一(四年目)大御番頭格に

最初より奥掛之筋は右之通平之筋は運ひ振は右同様にて年數(四年の所は五年)差別可有之事

但最初より格祿有之筋は右に進見計取計可申事

一當役三十年余に及候はゝ並高之上御足被下候も可有之事

表御右筆御書方　並高 組頭六十石 平三十石

高不同輕御用の認物又は當分認物勤

一表御右筆御書方詰所認物勤年々銀三枚に

但十五石高有之筋は御銀不被下

一(四年目)見習十五石高に御足御銀其儘

但明跡無之節は御足高計被下

一十五石高有之筋は其節年々銀三枚被下

一（五年目）獨禮に　一（五年目）本役二十石高に御足御銀は上る

一（四年目）二十五石高に御足　一（四年目）並高に御足

一（五年目）大御番格に　一（五年目）新御番格に

一（五年目）組頭四十石高に御足

但年數不滿に明き候ても同樣

一年數に至り候ても組頭明き不申候はゝ御小姓組格に

一（四年目）五十石高に御足　一（四年目）並高に御足

一（五年目）御留守居物頭格に　一（六年目）御徒頭格に

此節御人撰の場所へ轉役被　仰付候はゝ七十石高に御足被下

日記方

十三石高小十人格表御用部屋書役より繰上ると見て

一表御右筆詰所認物勤年々銀三枚に

但獨禮の筋にても同樣

一十五石高有之筋は御銀不被下

一（四年目）見習十五石高に御足御銀其儘

但明き有無に不拘

一十五石高有之筋は此節年々銀三枚被下

一（四年目）獨禮に　　一（四年目）本役二十石高に御足御銀上る

一（四年目）廿五石高に御足　　一（四年目）並高に御足

一（四年目）大御番格に　　一（四年目）新御番格に

一（四年目）組頭四十石高に御足

但年數未滿に明き候ても同樣

一年數に至り組頭明き不申候はゝ御小姓組格に

一（三年目）五十石高に御足　　一（三年目）並高に御足

一（四年目）御留守居物頭格に　　一（四年目）御徒頭格に

此後御人撰の場所へ轉役被　仰付候はゝ八十石高へ二百石高に御足高可被下事

一乍居の御品に候はゝ御納戸頭格に可被　仰付事

表御用部屋書役　　並高十三石

御徒格認物勤八石三人扶持之筋を見て

一（四年目）當役十石高に御足

但明跡無之候はゝ御足高計被下

一（四年目）並高に御足　　一（四年目）小十人格に

一（八年目）獨禮に　　一（八年目）獨禮に
以下にて並高以上の筋
一（七年目）小十人格に
獨禮以上並高以上の筋
一（八九年）も相勤候はゝ年々銀三枚被下儀も可有之事
無足當分認物勤の筋
一（十一年目）年々銀七枚に　　一（五年目）被下銀御増十枚に
一（五年目）被下銀御増十五枚に
書役同樣勤三人扶持御用人支配の儀は年數に不拘本役明次第繰上り候事
一十一年目銀七枚被下之年數に不及以前本役明候はゝ年數に不拘最初より書役同樣勤銀七
枚三人扶持御用人支配に可被　仰付事
表御用部屋吟味役　　並高八石
八石の筋と見て
一（五年目）肩衣　御免年々銀二枚に　　一（五年目）小十人格に
一（五年目）拾貳石高に　　一（七年目）獨禮に
此後相應之御役へ轉役
一當役之儀日勤御用多く役儀に候處並高至て低祿に付並高へ十二石迄には御足高可被下事

御書物方書役

認物勤八石之筋と見て

一（五年目）當役十石高に御足

一（十一年目）小十人格に

此後相應の場所へ轉役

並高以上認物勤よりの筋

一（五年目）當役に

一（十五年目）獨禮に

並高十三石

一（八年目）肩衣　御免並高に御足

一（十五年目）獨禮に

一（十三年目）小十人格に

御廣敷御用人

百五十石の筋被　仰付と見て

一御納戸頭格御廣敷　御用人同樣勤

格祿有之筋は最初より本役被　仰付

一（六年目）小十人頭格高二十五石（此十石也）御足被下

小十人頭格の筋に有之候はゝ拾石御足計

祿高有之筋に候得は小十人頭格計

一（六年目）二百石高に御足被下

一（六年目）並高に御足

並高二百石

一（六年目）本役二百五拾石高に御足

此後六年目格式被下
最初より並高に有之筋は
一(六年目)御小姓組番頭格に　　一(六年目)御供番頭格に
並高廿石 三人扶持

御廣敷御用達

十石高以下役

一御用達見習之助肩衣　御免に
但十石以下の筋は十石に御足
一(四年目)見習小十人格十三石高に御足
但十三石以上に候はゝ御足は不被下
一小十人格已上の筋被　仰付候ても矢張一旦は見習に被　仰付
一獨禮以上の筋に候はゝ最初より本役被　仰付
一(四年目)本役十五石高に御足
但十五石以上に候はゝ直に並高被下
一(四年目)並高に御足
但廿石以上に候はゝ此株無之
一(五年目)大御番格に　　一(五年目)新御番格に
一(六年目)御書院番格に

此後相應の場所へ轉役場所に寄十石程御足高可被下事

御廣敷書役　　並高八石

八石の筋と見て

一江戸（七年目）若山（八年目）肩衣　御免に

一同上　小十人格に

小十人格の筋は此節御廣敷番格に

一同　御廣敷番格に

此後御廣敷番等へ繰上り候事

御廣敷番　　並高二十石

十石之筋と見て

一（九年目）十五石高に御足

十三石の筋は十八石に十五石已上の筋は此節並高に

一（九年目）並高に御足

下地より十五石の筋は此節獨禮に

一（九年目）獨禮に

此後相應の場所へ轉役

並高以上の筋

一（九年目）獨禮に
下地より獨禮の筋は此節大御番格に大御番出の筋は此節新御番格に
一（九年目）大御番格に
下地より大御番格の筋は此節新御番格に大御番出の筋は此株無之
一此後轉役の品前記同斷
一御廣敷番之内大奥御普請掛り相勤候筋は七年目々々の御品附にて運ひ振差別無之事

御廣敷添番　並高十三石
八石九石十石之筋と見て
一（七年目）小十人格に
小人格の筋は此節並高に
一（七年目）並高に御足
此後御廣敷番等へ繰上り候事

御廣敷進上番　並高十石
八石の筋と見て
一（九年目）並高に御足
此後添番へ繰上り又は外へ轉役の儀も可有之事

御納戸頭　並高六十石

四十石五十石位の筋被　仰付と見て

一（六年目）並高に御足　　一（七年目）小十人頭格に

御人撰の場所へ轉役被　仰付儀も可有之事

御納戸　　並高十三石

見習十石高之筋と見て

一（六年目）本役に　　一（五年目）並高に御足

一（六年目）獨禮に

此後七年以上相勤候は丶

一大御番格廿石高に御足にて相應の場所へ轉役

一大御番格新御番格並高以上にて被　仰付候筋は十年目程にて御書院番格に可被　仰付事

御目付　　並高四百石

二百石の筋被　仰付と見て

一當役被　仰付二百五十石に御足

但二百五十石之筋に候は丶其儘被　仰付併先役にて勤功も有之候は丶三百石高に被　仰付候儀も可有之事

一（四年目）三百石高に御足

下地より三百石高の筋は三百五十石高に

一（四年目）三百五十石高に御足

下地より三百五十石の筋は此節並高に

一（四年目）並高に御足

下地より四百石以上の筋は此節御品附無之

（筆頭十一年目
已下十二年目）にて御内々金廿兩年々被下

（五年目　當役
六年目　十六年目也）

一（七年目）布衣に

此後御用人等相應の御役人へ轉役

最初より並高有之筋は

一（十一年目春）時限御内々金十兩被下

此後運ひ振前段之通候事

御小姓目付組頭　　並高十八石

十五石の筋と見て

一（六年目）並高に御足

此後相應の場所へ轉役

御小姓目付　　並高十五石

（御小姓目付助
十石高）之筋と見て

一（五年目）當役十二石高に御足　　一（六年目）並高に御足

一（八年目）御小姓目付組頭格に

此節より以後組頭明き候はゝ被　仰付

一江戸表にては組頭無之付此後相應之場所へ轉役

並高以上の筋は

一(五年目)本役に

一(八年目)御小姓目付組頭格に

此節より組頭明き候はゝ被　仰付

御徒目付組頭　　並高十五石　役料金二兩

御徒目付　　並高十二石　役料金二兩

一(六年目御徒目付)並高に御足

一(七年目)十五石高に御足(特に)

(八石十石)位の筋被　仰付と見て

一(五年目)組頭格に

此節組頭明き有之候はゝ組頭に被　仰付

一(七年目)年々銀三枚(特に)

一(九年目)二十石高に御足(特に)

一(五年目以上)相應の場所へ轉役五石御足可被下事

特にさあるは繁勤の爲に後に追加ありし也

(以下一本なし)御徒目付之内格式並高迄相運年數相立候者御品附之儀御目付申立候所御内則本文之通にて取扱方も無之付置有之候所猶又追々申立候付申見候處同役之儀は他所勤多之事に付勤馴不申者にては御差支へ相成候儀も可有之一体余程烈敷勤方に候處被下物も少く難澁之趣に相聞並高以上御品附無之候ては自然勵薄く追々古番之者轉役願出候樣行可申哉に付同役之儀は格別に取扱本文朱書(　)之通御內則御改相成候方に可有之哉と及評議猶若山表へ及掛合候處　無之同意之旨申越候付及取計候上朱書(　)之通に治定いたし候事

文久二戌六月

御徒押　並高十二石

御勘定奉行支配小普請三人扶持取之筋と見て

一御徒押被　仰付御扶持方を御切米八石に御直し被下

一（十二年目）並高に御足

此後七八年も相勤候はヽ格式被下相應の御役へ轉役

一常府は御人數も少く候付御人繰の都合にて右年數に不滿共轉役被　仰付儀も可有之事

御目付方認物勤　高無極

御勘定奉行支配小普請三人扶持取之筋と見て

一（六年目）年々銀五枚に

一（六年目）御徒格御扶持方を御切米八石に御直し三人扶持被下

一（六年目）肩衣　御免二石御足　一（六年目）小十人格

一（二十一年目）麴町御殿勤番に　當分御目付方認物勤に　若山にては小十人小普請に

一（六年目）三石御足　一（七年目）獨禮に

此後相應の御役へ轉役

無足にて御目付方認物勤之筋

一（十一年目）年々銀五枚に　一（六年目）三人扶持に

一（六年目）被下銀三枚御増被下

此後其儘相勤居候はゝ六年目銀三枚御增被下

奥御右筆

組頭並高八十石
平　同　五十石

詰所認物勤廿石小十人格位之筆

一(三年目)奥御右筆助に獨禮年々銀五枚被下

一(三年目)新御番格に五石御足高被下

一(三年目)本役に五石御足高被下

一(三年目)(江紀にて四人也)組頭に五十石高に御足高被下

但組頭明き無之候はゝ足高計被下

五十石也

へ之部

寺社奉行

並高四百石

三百石の筋被　仰付と見て

一寺社奉行被　仰付並高に

一(八年目)大組格に

最初より並高有之筋に候はゝ

一(八年目)大御番頭格に

五百石以下の筋に候はゝ大組格に被　仰付

寺社吟味役

並高十五石三人扶持
役料銀五枚

一人柄次第相應之御役に被　仰付

肩衣十二石御免之筋と見て

一(六年目)小十人格に

下地より小十人格の筋は此節並高に

一(六年目)並高に

一(六年目)獨禮に

下地より獨禮の筋は此節大御番格に

一此後相應之場所へ轉役其儘相勤候はゝ新御番格に

大御番出並高以上之筋

一(六年目)新御番格に

一(六年目)御書院番格に

此後轉役之品前記に准し可取計事

町奉行

並高四百石

三百石之筋被　仰付と見て

一(四年目)並高に御足

一(八年目)御書院番(頭)格に（一本ナシ）

一(八年目)御供番頭格に

一人柄次第相應の御役へ轉役可被　仰付事

御船奉行

並高　四百石五百石高に御役料被下

三百石之筋被　仰付と見て

一御船奉行被　仰付並高に御役料も被下

一人柄次第相應の御役へ可被　仰付事

御船手方御船肝煎　　並高廿五石

廿石御船手與力より繰上ると見て

一御船肝煎見習肩衣　御免に　　一(八年目)御船肝煎に

但人數不足に相成候節は本文の年數に不滿共猶申見可取計事

一(七年目)並高に　　一(八年目)獨禮に

渡邊専八家は四十五石大御番以上　格祿共昇有之候處代々御船手勤の家に付御品附振是迄の振を以左の

通取調候事

跡目後明跡の模樣次第

一御船肝煎に　　一(十二年目)御小姓組格に

勢州御船手勤の面々も本文之振に准し候事

御船手與力　　並高二十石

十五石取御船頭より繰上ると見て

一(十二年目)並高に　　一(十二年目)小十人小普請共儘御船手方勤に

此格式不被　仰付已前にても明跡の模樣次第　御船肝煎へ繰上り

又は御船手元〆に轉役

但御品附より五年內に轉役に候はヽ肩衣　御免　御船肝煎見習に

又は肩衣　御免御船手元〆に
御品後十年にも相成轉役に候はゝ御船肝煎本役に
又は小十人格御船手元〆に

小普請より

御船手見習之面々

差定候御品附は無之御船肝煎御船手與力大船頭等明次第相應の御役へ被　仰付場所に寄
御足高をも可被下事

無足にて

見習之面々

見習（十二年目）年々銀五枚被下

大船頭　並高十五石

銀五枚三人扶持　御船乗前稽古之筋より繰上ると見て
一大船頭被　仰付御銀を御切米拾石に御直被下
一（十二年目）並高に
明跡の模様次第御船手與力御船手元〆へ轉役

御船手元〆　並高十石

八石之筋被　仰付と見て

一（八年目）肩衣　御宛並高に　　　一（八年目）小十人格に

明跡の模樣次第御船肝煎等へ轉役場所に寄御足被下

一老年の筋は見計五友の間御廊下詰𠀋へ被　仰付候事

御船乘前稽古之輩

三人扶持之筋と見て

一（七年目）年々銀五枚被下　此後大船頭へ繰上る

御城代與力十八　　並高是迄二十石無扶持　向後十五石三人扶持

松坂御城代與力二八　　並高是迄二十石三人扶持　向後十五石三人扶持

町與力六八　　並高是迄右同斷　向後右同斷

松坂町與力二八　　並高是迄右同斷　向後右同斷

〆二十八

右役者以來諸手代等株付之者又は御勘定奉行支配小普請の內より出役に被　仰付

拾石高三人扶持被下

但十石已上の筋に候はゝ御足高は不被下三人扶持計被下筈

出役可被　仰付柄は其局にて御用弁都合も可有之付有司々々にて相撰せ可申事

御城代與力は　本役十年目に並高被下

町與力は　本役七年目に並高被下

此後何年相勤候ても格祿等品付一圓不取扱筈
一病死或は病氣にて難相勤節は元の手代等株付へ戻り御切米御扶持方も元の高に戻り候事
一件の通に付當時與力勤之面々は不殘轉役被　仰付筈に候へ共一時に遣ひ道も無之且又時々入替候はゝ御用弁の都合も宜かる間敷に付相應の明き役出來次第右明き跡へ追々に轉役被仰付右跡與力勤は本行之通手代等より出役に被　仰付筈
右に付當時與方勤之面々乍居之品附は一圓不取扱事
一御船手與力五人の儀は業役に付是迄迚も御船手勤之面々繰廻し被　仰付候事に付其儘居置候事

御鷹匠頭　並高三百石

並高未滿之筋被　仰付の儀無之
一諸役々之內明次第相應の御役へ轉役場所に寄御足高をも可被下事

御鷹匠組頭　並高三拾石五人扶持

廿石之筋と見て
一(六年目)廿五石高に御足
下地より廿五石高の筋は此節並高に
一(六年目)並高に御足
下地より廿五石高の筋は九箇年目新御番格に

一（九年目）新御番格に

並高以上之筋は

一（九年目）新御番格に

御鷹方勤之面々は業役に付業の模樣又は　思召にて御品付等被　仰付儀も有之候間右等

之筋は一概に難取極候事

御鷹匠　　並高無極

大御番
廿五石位之筋と見て
御鷹方

一（十五六年目）御鷹匠に

持　格

此後組頭明き候はゝ人物之模樣次第被　仰付

一（十五年目位）五石御足被下

獨禮小普請
十五石二十石位之筋
御鷹方勤

一（十七八年目に）御鷹匠に

持　格

一（十三四年目）御鷹匠組頭格に五石御足被下

此後組頭明き候はゝ人物の模樣次第被　仰付

一(十五年目位)五石御足被下

小十人小普請
九石より二十石迄位之筋
御鷹方勤

一(十三四年目) 御鷹匠見習に

持格

一(十二三年目) 御鷹匠に

持格

九石之筋は此節拾貳石高に

一(十三四年目) 獨禮に三石御足被下

本役成の節御足高被下候筋は此節御足無之

此後組頭明き候はゝ人物の模樣次第被 仰付

以下小普請格
九石より十五石迄位の筋
御鷹方勤

一(十七八年目)御鷹匠格見習に

一(十三四年目)御鷹匠に三四石御足被下

一(十五年目位)獨禮に

御徒格
三人扶持之筋
御鷹方勤

一(十八九年目)年々銀五枚に

一(八九年目)御鷹匠格見習八石に

一(十三四年目)御鷹匠拾石高に

無足御鷹野鷹稽古 御供見習之筋
一（廿一二年目）三人扶持に
此後十七八年目見習又は本役被　仰付年々銀拾枚被下儀も可有之事
御鳥見組頭　　　　　　　　並高　三拾石三人扶持
十五石の筋と見て
一（七年目）廿石高に御足　　一（七年目）廿五石高に御足
一（七年目）並高に御足　　一（十五年目）獨禮に
下地より廿石の筋は右之振合にて一順繰上けに相成候事
御鳥見　　　　　　　　　　　並高八石三人扶持
同様勤三人扶持之筋と見て
一（五年目）年々銀五枚に　　一（十四年目）本役並之通御切米御扶持方被下
一（十八年目）組頭格に
此後組頭明き候はゝ人物の模様次第可被　仰付事
無足　御鳥見見習之筋
一（三十一年目）三人扶持に
勢州御鳥見
八石二人扶持之筋と見て

一(三十二年目) 肩衣　御免に

山方勤

肝煎も無差別

大御番廿石廿五石之筋と見て

一(十五年目)加役御足五石被下

獨禮十五石廿五石位之筋

一(十五年目)加役御足五石被下

小十人小普請十二石十五石位之筋

一(十五年目)加役獨禮に

以下小普請八石十石位之筋

一(十五年目)加役小十人格に

御勘定奉行支配小普請三人扶持之筋

一(十年目)加役御徒格八石三人扶持に

一(十五年目) 肩衣　御免に

一(廿一年目) 組頭格三人扶持に
並高無極

一(十五年目) 新御番格に

一(十五年目) 大御番格に

一(十五年目) 御足三石被下

一(十五年目) 御足二石被下

一(十五年目) 十石高に御足

御犬牽頭　並高十三石
　小十人格十三石之筋と見て
一（十五年目）獨禮に　一（十五年目）大御番格に
御弓役　並高八十石
　三十石四十石高之筋被　仰付と見て
一（九年目）五十石高に　一（九年目）六十石高に
一（九年目）七十石高に　一（九年目）並高に
一（九年目）御徒頭格に
　並高以上之祿にて被　仰付候筋は當役十六七年目にて御徒頭格に被　仰付
　右より猶又十六七年目にて御先手物頭格に被　仰付候事
堂形奉行　並高十二石
十石之筋
一（六年目）並高に
一（十五年目）小十人小普請へ轉役
一御鐵炮奉行　並高二十石
十五石之筋と見て
一（五年目）並高に　一（十年目）大御番格に

一（九年目）新御番格御足五石被下相應之場所へ轉役

鹽硝奉行　並高二十石

十五石之筋と見て

一（十五年目）並高に　一（廿年目）獨禮に

並高以上の筋は二十年目獨禮に

御鐵砲方役人　並高無極

御鉄砲方御用見習三人扶持之筋と見て

一（十年目）御徒格八石三人扶持に

勤方是迄之通

一（十年目）御鐵砲方役人十石高に御足　一（十年目）肩衣　御免に

儒　者　並高無極

十人扶持位の筋と見て

一（七年目）獨禮御扶持方を御切米廿石に御直し被下

一（七年目）五石御足　一（七年目）大御番格に

一（七年目）五石御足　一（七年目）御書院番格に　當役 三十一年目

大樣右体の年數に候へ共業柄格段の筋は樣子次第年數相縮め二三等も品宜く取扱候儀も可有之祿も業柄格段の筋は追々御足高被下候樣可取扱事

一奥詰被　仰付候儀は人々の様子にも寄候儀に付其節の見計にて被　仰付事

授　讀　並高無極

五人扶持位の筋と見て

一（八年目）肩衣　御免七人扶持に

一（八年目）小十人格十人扶持に

下地より小十人格の筋は見計にて御足高等被下

一（七年目）獨禮に

下地より獨禮之筋は見計にて御足高等被下

一（八年目）御扶持方を御切米二十石に御直し被下

大様右体の年數に候へ共業柄格段の筋は様子次第年數も相縮め二三等も品宜敷取扱候儀も可有之事

業柄餘り發達にも無之筋は本行年數より延し取扱可申事

一儒者勤に繰上り之儀は人々の様子にも寄候儀に付其節之見計にて可被　仰付事

授讀助

認物勤

一（九年目）年々銀五枚に　已下役に候はゝ此節肩衣　御免年々銀三枚に

一（九年目）三四石程御足被下　一（九年目）格式被下

此後相應の御役へ轉役

江戸無足
授讀助
一（九年目）年々銀五枚被下　一（八年目）被下銀御増十枚に

若山無足
授讀助
一（九年目）三人扶持被下　一（九年目）年々銀二枚被下

學校御目付　並高無極
十五石小十人格之筋と見て
一（九年目）獨禮に　一（九年目）年々銀五枚被下
一（九年目）大御番格に　一（九年目）五石御足被下
一（九年目）新御番格に
此後相應の御役へ轉役

御厩方
御厩勤の面々は夫々業役の儀に付厚薄に寄差別可有之候へ共先つ左の通取調置候事

御馬預　並高十三石
御厩支配も籠る
十三石の筋と見て
一（八年目）獨禮に

御厩支配の筋は此節十八石高をも被下

一（九年目）大御番格に　　　　　　　一（八年目）新御番格に

御厩支配之筋は此節御足五石をも被下

御馬預之儀は武役の業柄に付抜群宜仕候筋は並高外御足高被下儀も可有之事

常府御馬預御人少に付左の振合に被　仰付稽古料被下より

一（十六年目）三人扶持被下

右三人扶持不被下内にても御馬預御用多差支候節は年數に不拘

御馬預差支候節は御供可仕旨　又は御馬預同様打込可相勤勤の内三人扶持被下

右之通被　仰付候筈

此後業柄に寄被　召出御馬預被　仰付御切米十三石被下

御馬方　　　　　　　　　　　　　　　並高十三石

御馬預へ繰上之場所にて御品付之振合無之事

御馬乘　　　　　　　　　　　　　　　並高十二石

九石
銀五枚位の筋と見て

一（五年目）肩衣　御免に

此後御馬方へ轉役

馬醫　　　　　　　　　　　　　　　並高十石

拾貳石之筋と見て

一(十二年目)小十人格に

小十人格之筋は此節獨禮に

一(十二年目)獨禮に

此後も業柄格別の筋は格祿御進め被下候儀も可有之尤御加增は容易に不相成事

御厩目付　並高十石

八石之筋と見て

一(六年目)肩衣　御免並高に

一(七年目)小十人格に

此後相應の御役へ轉役場所に寄御足高をも可被下事

弓術　砲術　鎗術　釼術　柔術

組打　軍學　軍貝　水藝

師家之面々

銘々格祿高下有之且業役之儀に付業之厚薄にも寄御品附振一樣に不相成候へ共大体の見詰は左の通猶其節に業柄等を以て見計可取計事

一弟子扱被　仰付三人扶持被下業も能出來年齡も相應に候はゝ家督相續後の年數に不拘弟子扱被　仰付候事

一持祿四十石以上の筋は御扶持方不被下事
一（十年目）格式被下拾五石以下の筋は二三石御足高被下
大御番出に候はゝ中奥御番格に　又は御小姓組頭に
獨禮小普請出に候はゝ　大御番格に
小十人小普請出に候はゝ　獨禮に
已下小普請出に候はゝ　小十人小普請に
右の振に一格つゝ被下
一（十年目）年々銀五枚被下　知行取にて高も多筋に候はゝ年々銀十枚又は高廿五石御足可被下事
一（十年目）御足高被下　持祿の模樣に寄十石又は五石四石三石程被下見積に候事
一（十年目）格式被下
昇進振前同斷之振を以一格つゝ昇候事
但虎之間席へは容易に不昇事
一水藝指南の筋は是迄外師家よりは御品附年數少々つゝ延ひ有之に付以來迚も右に准し十二年目毎に御取扱之筈
一藝術格段御引立の折柄に付勵みの爲是迄の年數よりは少々つゝ縮め本文の通に候事
一弓術指南の向より御弓役被　仰付砲術指南の向より御鐵砲奉行被　仰付の儀は人柄次第被仰付候事に付年數等極は無之事

表平士より出役

武藝稽古場打廻り役

一出役より（十二年目）年々銀五枚被下

此後相應之御役へ轉役

諸藝術

稽古料被下有之筋　師範の子弟も籠る

馬術砲術は稽古料被下より（十五六年目）三人扶持被下

其余藝術は稽古料被下より（十七八年目）右　同　斷

水藝は稽古料被下より（二十年目）右　同　斷

此後藝術格段宜出來抜群の筋は其節々見計にて被召出御切米御扶持方被下候事

一大様件の年數に候へ共藝術格別宜筋は見計右年數より早く被　仰付儀も可有之事

表平士より出役

諸稽古場肝煎之面々

肝煎役

十五六年目格祿の模様に寄　格式又は御足高五石或は三石　年々銀五枚

右三段之内被下　但格式被下候共獨禮出の筋へは虎之間席以上之格式は容易に不被下事

十二年目右同様の振に見計取計之

大様件の年數に候へ共藝術久々出精抜群之筋は見計早く被　仰付儀も可有事

一人柄次第相應之御役へ轉役

御役者

（十五六年目位）仕手　脇　／　囃子方　狂言方

（廿年目位）仕手連　脇連　／　地謡　物着

（廿四五年目位）作り物師

但御切米御扶持方等多く被下有之筋は仕手初何業にても廿年餘にも相成不申ては品附無之事

一業之善悪にも寄且は御慰物之儀に付其節の　思召にて御賞も有之候哉是迄品附の年數不同に有之候へ共押平し大体件之年數に候事

品附振は持（一本高 祿）の模様に寄御足高又は御扶持方御増御金銀被下候事

一右之通には候へ共當時爲差御用も無之事に付右年數に不拘御品附は延し可然事

御内則

㈠世祿幷御加增之事

㈡下役人より昇進振之事

㈢坊主品附之事

附人株過　諸手代等進退筋伺

世祿幷御加增之事

安政二年卯五月

㈠一世祿幷御加增之事

知行御切米之面々家督跡目之節、舊家世祿幷五十年勤之外は、年數に寄三等に減祿被　仰付候處、享保度

有德院樣御代御旗本御家人都て世祿に被　仰付候付、假令祿高低く候共御增高被下、夫々御役被　仰付候付、自然御役人向も御備り相成　尾州樣にても世祿之御取扱に付

御手前にても向後都て當時之本高を世祿に被　仰付、是迄御足高等被下候向、代替にて上り候高を低祿之向へ被下、夫々御役被　仰付候はゝ自然御人撰も取扱易く候て、右等之趣及熟評右之通世祿に被　仰付可然と申見及取計候事

但右之通世祿に相極候付ては、當時並高未滿之筋へ一時に並高被下候ては、余程之御出箇

に相成候付、右は是迄追々並高被下之年數を以取扱、追ては一時に並高被下候筈之事、

當時並高未滿之總高　壹万二千三百八十五石余也

「第一條」一名跡等之品にて是迄格祿等下け之筋も、祿は其儘被下末席に被　仰付追て御赦可有之候事

「第二條」一家督跡目之節、父子之內平日不行狀か、又は文武之心掛等も無之、兼て柔弱にて御用立兼之筋は是迄之振又は其者之樣子次第二三等にも減祿可被　仰付事

第三條　一御醫師之儀は藝道研究の爲にも候間世祿には不被　仰付、是迄之通等下けに被　仰付追て執行之模樣に寄祿或は御加扶持可被下事

五十年勤之筋は是迄之通候事

但五十年にても御匙醫幷奧御醫師にも不被　仰付、病用も無之自然長壽之筋にて五十年之向は矢張減祿之事

一御匙醫奧御醫師にても其子幼年又は格別藝道未熟之者は樣子次第半減余にも可被　仰付事

一御役者も御匙師同樣之事

「第四條」一右之通に付向後御加增は容易に被　仰付間敷候、尤御役人向諸役所勤之面々は、平日格別御用多相勤候付、享和之度御內則之趣を以勤功に寄相應御加增被　仰付儀も可有之事

江戶表之儀は他所引受總体勤も張候付御品附振且年數等差別之事

一藝術に付御恩賞之儀も、同樣差別之事

一舊家世祿未滿之筋幷五十年以上精勤之筋、又は拔群勤功有之筋は、其節々猶可申見事

「第五條」一御加增被　仰付候年數

御用部屋	二十五年	表御用部屋	三十五年	御勘定所	四十年
御廣敷	三十五年	御納戸	四十年	御目付方	三十五年
御側向	三十五年	寺社方	四十年	町奉行所	四十年
御船手方	四十年	御鷹方	四十年		

「第六條」一御加增被下候高

知行三百石以上は　五十石 現米二十石

右以下は　廿五石 現米十石　　御切米所は　十石

其餘は右に准し取扱可申事

一十石内外之筋は五石或は四石可被下事

「第七條」一御品附之運ひ振

並高に相成候迄は、跡々御品附の年數に取扱可申事

一並高之上は御足高不被下事、

但並高に相成候後も出精相勤、又は最初より並高有之筋等、年數相勤候ても一圓御賞無之樣相成候ては勵も有之間敷に付、右等の筋は廉立候御用取扱候節に見計、御褒美御金被下候樣取扱可申事

慶應元丑八月二日極

一舊家世祿之儀は　舜恭院樣厚　思召を以享和三亥年御極以來六十年余にも相成候儀に付、其儘御居置之事
右之趣は元より御內則にて、御家中へ被　仰出無之事に付、此度何等被　仰付に不及事
一御品付御內則は當時之通御用ひに相成、御加增之儀は勤功次第其節に厚薄取調被　仰付筈、尤容易に被　仰付は無之筈之事
一並高之上へ御足高は、勤功次第可被下置事
一伊賀以下之者、以下役以上に昇進は、容易に取扱不申儀、當時極之通候事、
慶應元丑八月
一此度伊賀以下之者、寅年以前に復し株を離し候處、以下役へ昇進之儀は、容易に取扱不申儀、是迄極之通に付ては、當時以下役へ出役いたし居候筋も其儘にて、以來無株にても矢張出役と取扱候筋に候哉と、若山へ掛合申遣候處右は左之通申極候旨九月十日出に申來候事
以來無株にても矢張是迄之通出役と取計、跡式は是迄出役いたし有之筋幷此後之筋とも、總て平手代同樣無役に申付候筈
但出役被　仰付候筋、元株は不離との小書きは不認筈

下役人より昇進振之事

㈢一下役人より昇進振之事
安政二年卯五月
下役人より昇進之儀享和之度御內則之趣も有之候處いつとなく相弛み昇進等之向多く、右之

通にては御人殖御收納御減に相成候間、向後諸同心御小人等都て株附の者を昇進の儀は、堅取扱申間敷、御中間躰格式有之筋より諸向助勤等の引上け之儀も不取扱樣、追々被　仰出之趣も有之候處、猶又此度格別に及評議當卯年より左之通御極置被遊候事

「第一條」一陸尺御中間より昇進之者は伊賀格迄には被　仰付候事
　拔群勤功有之者は、御金又は增高或は時功御金可被下事

「第二條」一諸手代向後株者に申付、代番等爲相濟可申事

「第三條」一諸手代之内並高に不滿筋代番の節は、並高以下の筋は持切米の處にて代番申付べき事
　但代番の節並高に不滿筋にても代番後跡々年數に及候はヽ並高可被下事

「第四條」一御路次之者も向後株付に申付候事
　但追々年數相勤候はヽ八石御徒格迄に可申付事
　代替り之節は元之御路次の者へ可申付事

「第五條」一伊賀其外都て株附の者は轉役は不被　仰付事、
　但株同士入替之儀は不苦事

一出役等にて拔群の勤功有之者は株を不離十五石高三人扶持御徒格迄は被　仰付、猶模樣次第御金被下、代番の節は元株へ戻り候事

一當時株を離御勘定奉行支配小普請以上に進居候者は御城代支配小普請迄には被　仰付候事
　本文御城代支配小普請は中之間席に候事
　中之間席被　仰付候者の跡目は以下小普請被　仰付候趣の事

「第六條」一帶刀以上二人扶持之者も伊賀格迄には被　仰付候事

抜群勤功有之者は御徒格迄には被　仰付候事

本文御徒格其外都て以下役に被　仰付候者の跡目は三人扶持被下御勘定奉行支配小普請被　仰付候事

安政二年卯五月

㊂一坊主品附之事

都て坊主より株を放し候轉役は取計申間敷、右に付品附振等の儀文化の度御内則の趣も有之候處、其後いつとなく相弛み、相應年數相勤候へは轉役をも被　仰付候樣相成、左候ては追々御取立の者多く御人殖に相成、自然御收納御減にも相成候付、向後右文化度且　公邊御振合に被准株を離候、轉役は不取計品附振の儀は左之通候事

「第一條」一江紀打込

○奥坊主組頭	二人	○表坊主組頭	二人	御召方	二人
○奥御小道具役	一人	○表御小道具役	一人	御納戸	二人
○御書物方	一人	御廣敷	二人	御用部屋	二人
菊之間	一人	表御用部屋	二人	御目付方	二人

一局十年總勤廿年以上

御徒格　拾石　三人扶持　但丸印之筋は十五年三十年以上

「第二條」一右以後局々跡方品附之年數に及ひ候筋に
御足高被下　但十五石迄

「第三條」一大躰御徒格より十一年目位
御同朋見習格　壚硝奉行之次席御召方は、柄に寄十年内にても被　仰付

一但御紋服着用は不相成候事

「第四條」一其後　御增銀　七枚迄は被下候事
右之通被　仰付株を放し候儀は無之事

「第五條」一御同朋見習格以上に相運ひ候者代番之節は跡式八石に被　仰付候事
但八石之向代番之節は表坊主は六石 御廣敷は七石可被下事

本文之通に候處右は勤功も有之御同朋見習格迄も進み年數有之筋跡八石に申付候儀歎ヶ敷品も有之候付　躰之
節　四十年以下は八石　四十年以上は九石　五十年以上は十石
右之通勤年數にて階級付候はゝ可然さ申見其段及取計件之通相極候事

文久二戌二月
天野文艮跡式之節極る

一總坊主之內三十年以上無故障勤功有之格別に申立候者は忰を坊主見習に差出候儀等諸事文化之度御內則之通取計可申事

元治二丑年三月追加

一總て株付にて諸士並迄相進候者之代番も前段同樣取計可申事

坊主は大樣十石に相成有之付、右之通見通しも付候へ共、外株付の者は一樣には無之祿の高

下は可有之候へ共先つ右を見當に取計可申事

本文は森良右衛門代番の節極る

株附過人諸手代等進退筋伺

此伺書は、嘉永七寅年五月廿日御家中世祿被　仰出により、御内則㈡印下役人より昇進振の第二條に諸手代向後株者に申付代番等相濟せ可申旨、安政二卯年五月相極りたるを以て、該諸手代等進退取扱方を御勘定奉行より政府へ伺出、同府より指令ありたる筆記を、御勘定奉行より謄寫し政府へ提出したるもの也

一右之外江戸株御中間方勤、諸役所陸尺進退の儀及ひ慶應元丑年世祿廢止諸手代等株付相止み、已前に復したるに付て之取扱振等、時々御勘定奉行より伺出の筆記も合綴す、今其目を掲け符號を記して捜索に便にす、

「甲」株附過人諸手代等進退筋伺　安政四巳年十一月十八日指令

「乙」江戸株御中間方勤諸役所陸尺等進退の儀伺　安政五午年正月廿八日進達二月十日指令

「丙」江戸御中間株之者格段出精御用立候者以前之通諸手代等に成込度旨伺　万延元申年十一月十日進達同廿四日指令

「丁」諸手代等株を離し寅年以前に復古に付ては、以下役に出役の者入代り跡召抱振等三條伺
慶應元丑年十月晦日出を以若山政府より江戸同府へ申來

「戊」御勘定奉行配下書役諸手代銀給の者丈け品付年數を縮め遣度旨伺　慶應元丑年十二月進達同廿六日指令

「己」御勘定奉行配下書役諸手代等銀給取より御切米へ品付石直し方伺　原書月日并年號なし

「甲」株附過人諸手代等進退筋伺寫

諸手代等株附被　仰出候品に付進退且病死跡召抱振等、貳印別紙之通にも御聞濟置被成下候樣仕度御談申上候右は壹印別紙之通、先達て相伺候處、御脊張之通被　仰聞候付其通相畏居候處、元〆と平手代極官之族一樣にては何と哉覽差別も付兼自然取締等行屆兼可申と奉存、何分下地之伺極通にては品附振取調にも落付兼候廉も有之、尤右株人數之處申極振之儀は御黑印と文化八未と去る寅年三箇度を照し合せ、局々にて人數少に有之節を極人數に取調御座候、付ては先年とは違何歟と御用も相增有之、局々も不少義に御座候處、件之通に御座候ては株附人數丈にては御用多の節には迚ても御間詰難相成役所勝に可有御座、御用向御差支可相成段計り兼候付、過人之取計振別段に被　仰聞御座候、御廉之内新規に同心御申付させの儀先頃相濟候殘り御金之被下等にて御暇出にも取計候ては實に業合差支可申付、旁身後之儀は、兎も角差當り人才を見立、局々にて繰廻し爲相勤候儀は、株附過人之差別無之、一樣に相用候樣仕度、就ては株附過人之境は當人共へは爲相辨無之儀に御座候付一樣に出勤仕り居候內、株附之者は追々に品も御付被成遣候處、過人の分は其儘にては依怙有之樣心得混し可申も難計、治り兼可申次第にも御座候付、一樣精勤仕候者にて跡之立方差別有之候も是以似寄之儀には可有御座候へ共、先は一旦入替り等に相成候者ならでは、自身は過人と心付申間敷、就ては當時一旦之處は自然宜儀にも可有之歟と奉存候付、一旦御了簡被　仰聞御座候處猶又最初の伺と似寄の趣意にて相伺候儀何共恐入候得共何分にも多人數之治り方にも相拘り可申品にも御座候付、今一應御了簡相伺候儀に御座候間厚御評議被成下候樣仕度、譯て御談申上

候事

壹　印

一諸手代並御作事下奉行同心御路次之者、向後株附被　仰出候品に付進退且病死跡代番召抱之儀、左の振合に取扱可仕哉相伺候

諸役所書役

元〆手代

極官 御切米八石 二人扶持

以下役勤被　仰付候筋は出役と相認候等

諸手代

極官 御切米八石 二人扶持

評定所下役人同坊主元方拂方御金同心御作事下奉行并江戸御勘定所下役人同坊主壚硝同心は手代に籠る

右之通取極め置株付之者明候節は、過人之内にて御用立候者を本株に割入可申尤出精之者は、極官迄相進せ候上、猶出精致し候筋へは、年々銀一枚又は二枚と申樣に被下、銀相増候積、取調以來入替り且病死跡召抱之儀は左之通取極申度奉存候

株附

八石 二人扶持之者跡　手代に召抱 給銀貳百目 二人扶持　但五十年以上相勤候者は 二百五十目に召抱候等

同
切米七石
給銀三百目以上之者跡　手代に召抱給銀百五十目
二人扶持　但五十年以上相勤候者は
二百目に召抱候筈
右以下之者跡　手代に召抱給銀百十匁
二人扶持　但五十年以上相勤候者は百五十目に召抱

（原本掛紙あり）
諸役所過人之者にても致出精候者は、下役に至迄追々手代迄に相進せ、給扶持相増遣候はゝ一統相勤御手行可相成、右之者共病死入替り跡は、二人扶持一人半扶持之御中間頭支配無役に召抱、右之内御用立候者は手代助に取扱年數相成候者は本役に申付過人にて差置可申候
一是迄諸役所之内、手代初病死入替り之節給扶持引下け、一格下にて其役所々々へ召抱御座候へ共、株附と過人の差別能相立候趣意貫候樣に株附の者之外は何役にても病死入代り之節は、二人扶持又は一人半扶持一人扶持と申樣に御中間頭支配無役に召抱、御用立候者は手代助に取扱年數相成候者は本役に申付、過人に差置可申候
右之通取極置成丈株附の者にて繰廻し候へ共何れも御用多極人數にては差支候付、當分過人の者共其儘差置連々に相減候樣可仕候事
右へ左之通御脊張
書面懸紙之通可被取計事過人之者取計方は別段可申聞事
安政二卯九月
貳印
株附過人共

諸役所書役

元〆

極官 御切米十石 三人扶持　支配勘定格等にて已下役勤被仰付候節は出役と相認候筈

同

諸手代

極官 御切米八石 二人扶持　評定所下役人同坊主元方拂方御金同心御作事下奉行并江戸御勘定所下役人同坊主塩硝同心は手代に籠る

右之通取極置、極官迄相進せ候上は出精相勤候年功等を以年々銀一枚又は二枚と申様被下銀相増可申事

右之者等病死又は入替りにて跡召抱之筋は

株附

八石以上 三人扶持之者跡　手代に召抱　給銀三百目 二人扶持　但五十年以上相勤候者跡六石に召抱候筈

同

七石以上 二人扶持之者跡　手代に召抱　給銀二百目 二人扶持　但五十年以上相勤候者跡二百五十目に召抱

同

六石 三百目之者跡　手代に召抱　給銀百五十目 二人扶持　但五十年以上相勤候者跡二百目に召抱候筈

同

右以下之者跡は　手代に召抱　給銀百十匁　但扶持方は親之通にて五十年以上相勤候者跡は百五十目に召抱候筈

過人にて

八石以上三人扶持之者跡　御中間頭支配無役召抱　二人扶持

同

六石三百目以上之者跡　一人半扶持

同

右以下之者跡　一人扶持

右之通相極置株附之者は能不能を取調相當之役所へ當分助申付、勤功に寄本役に申付候樣仕度奉存候事

右へ左之通御脊張にて巳十一月十八日御下け

書面談之趣容易に難及挨拶筋候へ共多人數之治り方にも拘り候との儀は無餘儀品に候間向後貳印別紙之趣に相極取扱候樣可被致事

「乙」一江戸株御中間方勤諸役所陸尺等進退左之通安政五午正月廿八日進退取計候處二月十日御了簡無之旨御脊張を以被　仰聞候事

江戸株

御　中　間

極　官

書役格　八石限り貳人扶持　但極官迄相進後は年功を以年々銀一枚、二枚、又は金壹兩、

二兩と申樣に被下金銀相增可申事

右病死入替り之節は　觸番格に召抱二石八斗　二人扶持

右以下手代格之跡　觸番格二石八斗　一人半扶持

御中間組頭同格五石以上之跡　部屋頭格二石二斗　一人半扶持

右同五石以下之跡　部屋頭格二石二斗　一人扶持

觸番格之跡　假部屋頭二石二斗　一人扶持

但部屋頭以下之者は　其身限り

右之通取調候樣仕度事

右壹通

御中間方勤人昇進振

書役格
手代格

江戸

御中間方勤

極官

八石　二人扶持迄　其上は銀一枚二枚又は金一兩二兩と申樣被下金銀相增候筈

跡々振合九石三人扶持銀二枚にて支配勘定格に迄爲相進御座候得共格別精勤御用立候者は其節別段相伺候筈普通之處は本文之通爲取調候樣仕度事

組頭格

同御中間方勤
諸役所陸尺共

同

五石　二人扶持迄　諸役所陸尺は極官に至り候上は銀二三十目又は四五十目宛下地之米等に應し被下銀相增候筈

跡々振合役所に寄六石二人扶持迄爲相進御座候へ共向後之儀本文之通爲取調候樣仕度事

觸番格
同
同

同

二石八斗　二人扶持迄　役所に寄被下之御銀相增候を一と品付と取調來候分は追て格式爲進候節共被下銀其儘に取調候筈

跡々振合役所に寄二人扶持一人半扶持一人扶持班々に有之候へ共向後之儀二人扶持を鍔にて一人扶持之者は一人半扶持二人扶持と扶持方增を一と品付に取調何れ之役所にても一人半扶持より直樣に組頭格には不爲進樣爲取調候樣仕度事

部屋頭格
同
同

同

二石二斗　一人半扶持　右同斷

跡々振合役所に寄一人半扶持一人扶持班々に相成御座候付向後之儀一人扶持を鍔にて一人扶持之者は半扶持增を一と品付に取調何れの役所にても一人扶持より直樣に觸番格には不爲進樣爲取調候樣仕度事

右之振にて御中間方勤相應之者は、追々に書役格極官之處迄、諸役所陸尺相應之者は組頭格極官之處迄、爲相進候樣仕度事

本文之通相極候に付ては、昇進振自然小刻に相成候事に付、品付年數之處は其局々之跡方よりは不相後樣、爲取調申度奉存候事

「丙」一萬延元申年十一月十日

進達

江戶御中間株之者、年數相勤格別出精之者、成立調振之儀別紙壹印之通一昨午年御談申上候儘にて、御了簡被　仰聞も無御座候得共、諸役所人繰にも差支候付、當分助にて遣試御賞振之儀は御中間方勤之處にて取調候積貳印之通昨年奥御右筆組頭迄申談候處、脊張之通挨拶有之候付、當時其局々相當之者助役に申付させ候付人繰には差支無之候得共、一印にも御談申上候通り諸役所之內には、格別出精御用立候者手代等に成込之儀譯けて申立候分も有之、何れも往々乍勤故鄕へ歸り度所存にて精勤致し候處、江戶御中間株相離れ候儀難相成と相成候ては、何れも勵も無之、第一御用辨にも難相成且は歎ヶ敷儀にも有之、發達之者は中々數人は出來不申稀成儀に付、一印に御談申上候通筆算等宜、格段出精御用立候者は、以前之通諸手代等に成込せ候樣仕度、尙又此段御談申上候御了簡被　仰聞候樣仕度奉存候事

十一月廿四日左之通御脊張

書面談之趣無餘儀相聞候付格別出精御用立候者に限り諸手代等へ成込せ過人にて差置相對代番

は不相濟樣可被取計事

壹　印　　　御定勘奉行へ

江戸御中間之儀若山とは譯も違ひ

御城下者に御座候共一樣之在株にて相對料等は入不申筋に付此表にて精勤之上にも御休等の年限に不相及候ては、若山又は居在等へ罷歸申度者共彼地の勤場所無御座、何れ御暇相願候外仕方無之者共に御座候付、此表へ罷下候ては所持田畑も爾々無之難澁者にも無御座外は畢竟の處立身を當に御座候付、諸役所陸尺に渡り込候者共は跡の振合、御用部屋陸尺は年數相成候上は諸手代又は手代見習小間使等に爲申付、外役所之儀も役所柄に寄御中間部屋頭格に相進候上又は追々觸番格組頭格にも相進候上にて筆算等も相應の者は、手代助又は手代助見習にも申付候付追々發達御取立に相成候者共は稀々之儀に御座候へ共、先は追て之昇進を目當御中間株を相離候上は乍勤に故郷へも罷歸候儀相調候事に御座候付自然出精相勤候儀にも有之且新番の者共も筆頭の者他へ相轉し候へは、追々繰上相成候儀に付辛抱等も仕り易御座候處、近來は手代等への轉役は不取調儀に御座候付、年久敷精勤之者も乍勤に故郷へも可罷歸期は相見不申、就ては自然筆頭にも相進罷在候一人は兎も角時日も相送り可申候へ共、二番以下之者共は殊更勵みも薄く相成、白地樣なる中上樣には御座候へ共、筆頭に罷在候者死失又は御暇等相成候品無御座候ては昇進之期も無之道理に付上に相立候者は自然疑懼下に相立候者は始終に僥倖何と哉覽風儀にも相拘り候樣に可成行も可難計儀に相聞え且は諸役所手代等之儀常

府の分は少人數にて引足不申勤番勝に御座候付、交代役に無御座外は此表へ相詰候儀、於若山内意等爲申聞候節、小給之廉を以て無餘儀難澁申立候者勝に有之、折々は頻に內存等仕候者も御座候得共都會之勤爲仕候儀不安心にて容易にも及取扱兼候折々は御人配りに當惑仕候儀も御座候趣旁以勤年數も有之、筆算等も相應之者は以前之振合手代等にも爲申付役所に寄候ては當分助にも遣ひ試彌御用に可相立者共は精勤次第、追々に元〆手代に迄は爲相進候樣御聞濟置被成下候はゝ、僥倖をさへ相押候へは、何れ多年の勤勞を相積不申候ては難相遂儀に御座候付、左迄に昇進仕候者は稀之儀にて、外多人數を爲相勵自然風儀も相崩れ申間敷且は諸役所手代等人配りにも辨利に相成候付、譯て此後御談申上試候事。

貳印

別紙書拔之通、去年二月御談申上置候事に御座候、右書面にも有之通、其役々之業合に隨ひ人物を相撰候に付ては、江戶表は御人少之儀何分勤人に差支夫是よりは御樣子を不辨事に付可御用立人物を相撰頻に申立多くは御中間方勤之者而已に御座候、畢竟助勤申付置候迄にて、本役にさへ不取調候へは御中間株は不相離當時の御間をも詰置候事に付別紙御談申上置候趣急に難被及御沙汰御樣子にも御座候はゝ、夫迄之處其局に相當之者助勤丈之儀は其通取扱自然御賞の年功にも相成候はゝ御中間方勤の品附振を以昇進取調候樣に致し候はゝ强て御了簡も有御座間敷哉、此段厚御評議に相成候樣致度各方迄御談申試候事

九　月

別紙書抜は前に記候壹印之書抜也

「奥御右筆より」

十二月朔日左の通脊張を以挨拶有之候事

御別紙之趣猶御年寄衆へも相伺候處、御談之趣無餘儀相聞候、付ては御中間株を不相離相當之助勤致させ御中間方品附振合を以昇進取調候樣との御事に付宜く御取計之事

右之通

「丁」慶應元丑年書面之通、若山司農申談候付、夫々脊張之通申聞候旨十月晦日出御飛脚に申來候事

進達

一諸手代等株附に相極り有之候得共、右は去る寅年以前に復古株を離し入代り之節は、都て御扶持方計之御中間頭支配無役に召抱候樣可取計旨此度被　仰聞之儀に御座候、然處以下役へ出役致し有之候者共入代り之節是迄諸手代同樣之跡召抱有之候へ共、向後被　仰聞之通御扶持方計の無役に召抱候ては、數年出精相勤何れも勤功有之者共に付寅年以前に候へば以下役に可被　仰付者共之儀に有之候へ共、御改革後御趣意にて無餘儀出役と被　仰付候者共之儀に付右は去る寅年以前御勘定見習支配勘定格之者跡召抱候、左之振合を以召抱候樣仕度御談申上候事

御勘定見習

同　格

右跡給銀二百五十目二人扶持手代に召抱有之

支配勘定

同　格

但二十石高以上幷勤年數五十年以上之者跡は給銀五十目增に召抱有之候

御作事見廻役

御賄人等

右跡給銀二百目二人扶持手代に召抱有之

右跡前段に准し召抱有之

右夫々同様之振合を以出役跡之儀も召抱候樣仕度奉存候事

下け紙　出役之者跡只今迄は八石以上之手代本株に候へは給銀三百目二人扶持之手代に召抱年數五十年以上之者跡は六石に召抱候事

脊張

書面以下役へ出役致し候者之跡も、御中間頭支配無役に申付、給扶持は談之通被下候樣可被取計事

一諸手代等株附に取極有之候へ共、右は去る寅年以前之復古株を離し、入代り之節は都て御扶持方計之御中間頭支配無役に召抱候樣可仕旨、此度被　仰聞候儀に御座候然處去る寅年已前にても御作事御臺所御厩御中間方御仕入貳分口等之儀は業役且株付同樣之者共に付前々より入代之節無役には不召抱、相應給扶持被下其役所々々へ一株下け位に召抱來り有之、其餘諸手代之儀は都て御扶持方計之無役に召抱有之候付、向後都て寅年已前之振合に取扱可仕と奉存候、仍て一應申上置候事

右一通

進達

一書役諸手代等病死又は病氣等にて入代り之節、跡召抱之儀親之勤年數に應し月數多分經相濟せ候筈、嘉永二酉年相極、去る寅年迄は右極之通取扱候儀に御座候然處此度寅年以前へ復古被仰付候就ては前段酉年相極り通取扱候筈に御座候處、當節柄之儀小給之者共一且給扶持に離れ候ては礑と難澁可仕且以下役之者跡式御立被下候御趣意に相應致し候樣仕度、旁跡召抱之儀は是迄之通り都て鼻繼に相濟せ候樣仕度、召抱振之儀寅年以前は御作事御厩御臺所等之者實子且實養子に候へは一格下け、相對に候へは二段引下け候儀に御座候へ共緣類之申立市在入交り內聞等甚繁雜にて自然惡弊も生し不平等之扱等出來候ては不都合に付、是又都て一格下けに召抱候樣取扱せ候樣可仕と奉存候、依て此段御達申上候事

右一通

脊張

兩通共了簡無之事

○印寫

「戊」一配下書役諸手代御品附之儀、去る寅年以前は四年目五年目位之運ひに有之處、同年株附に相成候後は、都て一二箇年つゝ相延し有之、然處此度寅年以前へ復古被　仰出候へ共、以下役へ進み候者矢張出役之廉御据置に相成候、付ては寅年已前よりは一段割合惡しく有之處、當節柄諸物高

價に付ては小給之者別て困窮致し候段、追々歎願之品も有之、無餘儀相聞候付種々申見させ候處給米被下候筋は兎も角凌付可申哉に付、銀給之者丈け先つ御品付年數を縮め遣候へは御引立之御處置難有奉感戴如何樣にも取續相勵精勤可致と存候付、別紙之通及進達候處御料簡無之旨、御脊張之通被　仰聞舊臘廿八日御下けに相成候事候、就ては當年より右伺濟之處を以精勤之者御品附取調させ可申と存候、依之右寫一通差進此段及御申合候、以上

正月十日

南出平左衛門
坂部惣太夫
垣屋十郎兵衛

岡田忠左衛門殿「十郎兵衛初は若山御勘定奉行 忠左衛門は江戸御勘定奉行濤右衛門事也」

進達

一配下書役諸手代等御品附之儀、去る寅年以前は元〆幷差添大躰四年目、平手代とも五年目位之運ひに御座候處、同年より株附に相成候付、入代り跡式之節は都て相應給扶持被下、直に手代等夫々役所勤申付候儀に付、御品附は元〆五年目平手代共六年目と申樣役所柄に應し、一二箇年つゝ相延し有之儀に御座候處、此度寅年以前へ復古被　仰出候へ共、已下役へ進み候者共矢張出役の廉御据置相成、跡式は都て無役に御召抱相成候、付ては寅年以前よりは一段割合あしく御座候、然處當節諸物高價に付ては、小給の者共凌も付兼、尤給米被下候者共は米直段能候付、兎も角も

凌振も出來可申哉に候へ共、銀給之者共は別て困窮仕候段、追々歎願之品も有之無餘儀相聞、此後御扶持方計の無役に御召抱相成候付ては、跡式銀給丈けは御出方減し相成候儀に付、右等の廉を以銀給の者加給振之儀申見候へ共、御品附の儀舊來の規則も有之一と運ひ二百目三百目宛の加給とも難取扱、左候迚銀給の者一躰に補被下等取計候ては余程の御出方にも有之付種々申詰見候處、御品附年數を縮め遣し候得は、年數を經自然少々之御出方には相成可申候へ共、御引立の御處置一同難有奉感戴、兎も角も取續相勵精勤可仕と奉存候付、向後銀給之者運振大樣寅年以前之振合を以、角印之通取扱候樣仕度、依之相伺候事

下げ紙に　本文寅年御改革後去子年迄跡式給扶持被下候分給銀高大樣左之通に御座候事

銀拾一貫百五十目　　十箇年分

但一箇年一貫百目余

右向後相減し候事

□銀給之書役手代共向後御品附運振、年數大樣左之通

寅年以前三四年目
同年以後四五年目

向後　一二箇年目程　　江紀　御勝手書役　奥座

但一運大樣五十目宛

一四年目程　　同　　口座

但右同斷

寅前四五年目
同後五六年目
一五年目程
但元〆并差添四年目程

寅前五六年
同後六七年
向後　一六年目程

公事方書役
御金同心
御勘定所下手代
表小買物方
諸手代
地方賄方
御普請方　傳法
砂糖方　銀札方
貳分口元役所勤
大納戸手代
御召御具足手代
御腰物手代
御臺所小間使
御作事手代
御厩方
貳分口浦方勤
御中間方

但御作事御廐元〆并差添御臺所小間使組頭御中間組頭五年目程貳分口御中間方御廐小役人等に至候ては、七八箇年又は九年十年の分も有之、右等は先是迄の振合を以取調候儀に御座候事

下け紙に　大納戸御召御具足御腰物手代は御用薄御臺所初五箇所は先年より株附同様にて跡式直に其局々勤に事付相應給扶持被下候筋に付年數延し候儀に御座候事

右は其局々御用之厚薄人物之甲乙、且精不精に寄候儀にて一概年數へ引付候ては差支候儀に付、右之通乾度取極置候儀には無御座大様見當を付置候へは自然不當之取調も出來間敷存候付右之通見當置候儀に御座候事

右丑十二月五日進達同廿八日左之通御脊張にて御下けに相成候事

書面料簡無之猶行届可被取計事

御勘定奉行へ

追　加

「己」一此度御取締に付配下書役諸手代等給銀取より御切米へ品附振の儀、別紙之通及進達候處、御料簡無之旨御脊張之通被　仰聞候付、右一通差進及御申合候、追て別紙御戻越候様致度存候以上

四月廿日　　一　次　郎

清右衛門殿

進　達

一配下書役諸手代等之内銀給三百目之者は御切米六石之割を以浮置引取來候付、三百目之者御品

附之節は御切米七石に御直し被成下候儀に御座候處近年之御取締にて六石に御直し被下候儀に御座候、然處當時米價格外之高直に付ては、銀給を御切米に直し候へは、格段之所務増に相成甚不釣合に御座候付、向後百目を一石に見當給銀三百目を四石に直し候樣可仕と奉存候、尤追て米價下落の節は、前段日當に準し改革可仕候へは、後々不都合之儀は有御座間敷と奉存候、依之相伺候事

右へ御脊張

料簡無之事

御勘定奉行へ

右へ江戸にて猶脊張

進達

書面之通若山仲間共より申參候付此表之儀も右之振を以取計候樣可仕と奉存候依て一應御達申上候事

一文中一次郎は茂田一次郎、若山御勘定奉行也、清右衛門は岡田清右衛門、江戸同役也、一

No 358

第九回配本

昭和七年四月三十日印刷
昭和七年五月十日發行

南紀徳川史 自第七十八巻 至第八十八巻

編輯者 堀内信

發行者 山崎順平
和歌山市宇須町三百七十八番地

印刷者 福本芳太郎
和歌山市新堀四丁目三番地

印刷所 福本印刷所
和歌山市新堀四丁目三番地

發行所 南紀徳川史刊行會
和歌山市宇須町三百七十八番地
振替口座大阪四五八五二番